

津幡町

加茂遺跡Ⅱ

2021

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

か も
加 茂 遺 跡 Ⅱ

2021

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



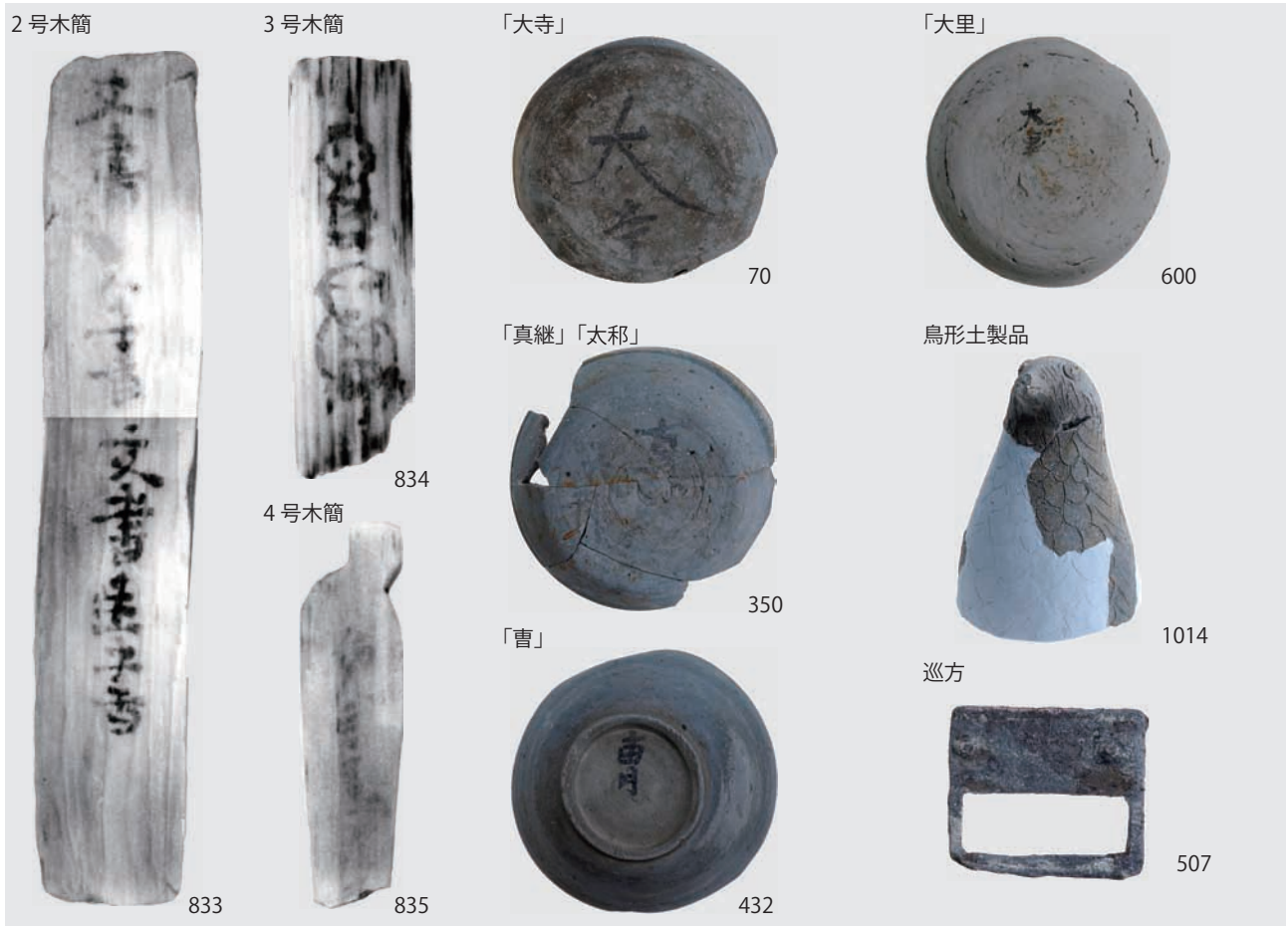
遺跡全景(西から)



B・C区上層完掘状況(西から)



B・C区上層道路遺構完掘状況(北西から)



B・C区上層出土遺物

例 言

- 1 本書は加茂遺跡第5次調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は河北郡津幡町舟橋、加茂地内である。
- 3 調査原因は一般国道8号津幡北バイパスであり、同工事を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省金沢工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は、石川県教育委員会からの委託を受けて、平成11(1999)年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した。また、平成12(2000)年度に出土遺物の洗浄、同14～17(2002～05)年度に出土品整理、平成20(2008)年度に出土木製品の樹種同定、平成30～令和2(2018～20)年度に報告書原稿作成、令和2年度に報告書編集・刊行を、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成24年度まで財団法人石川県埋蔵文化財センター)が、石川県教育委員会からそれぞれ委託を受けて実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当課・担当者は次のとおりである。

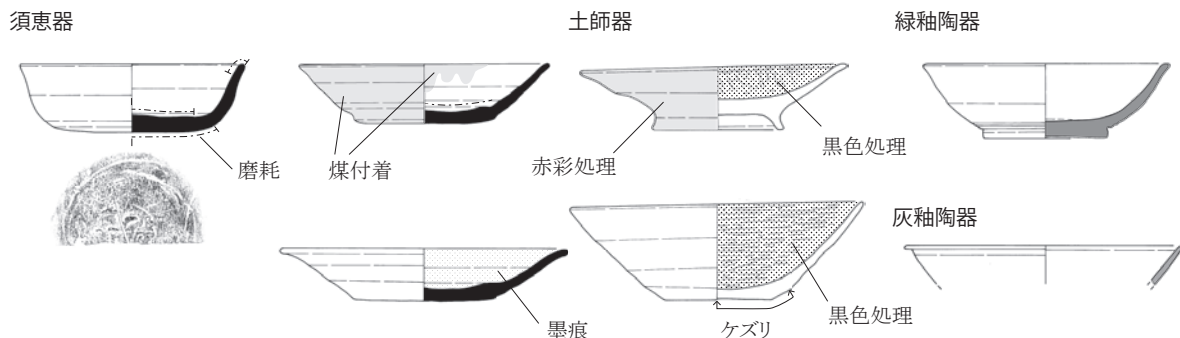
期 間	平成11年4月21日～平成12年1月19日	面 積	5,500㎡
担 当	調査部調査第1課	担当者	川畑 誠(主任主事)、兼田康彦(主事)
- 7 出土品整理は、平成12・14～17年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 自然科学的分析として、平成20年度に株式会社パリノ・サーヴェイに木製品の樹種同定を委託して実施した。本書では、成果の一部を遺物観察表に引用するにとどめ、第6次調査報告書に掲載する予定である。
- 9 報告書の作成は平成30～令和2年度に、編集・刊行は令和2年度に実施し、調査部国関係調査グループが担当した。執筆分担は次のとおりで、遺物の写真撮影は池田拓が行った。

第1・3～9章	川畑 誠(調査部部长)
第2章	和田龍介(調査部県関係調査グループ主幹)
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、羽咋市教育委員会、望月精司、出越茂和、久田正弘、林 大智
--
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記および次頁のとおりである。
 - (1) 遺構実測図等の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平水準はT.P(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 遺構の名称は第3章第2節の略記号で表記し、遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。
 - (4) 写真図版の遺構、遺物は、任意の縮尺である。

【挿図等凡例】

- 1 遺構図版は縮尺 1/60、1/100 を基本とし、規模や図版の性格により縮尺 1/30、1/40 等を適宜用いた。
- 2 土器等遺物図版は縮尺 1/4 を基本とし、縮尺が異なる個体は都度縮尺を付した。断面の塗りわけ・トーン等による表現は、須恵器が断面黒塗り、その他は白抜きとし、トーン等の表現は次のとおりである。



- 3 木製品実測図の木取り等を示すために木目を描き込んでいるが、木目の間隔は目の詰まり具合を表現する程度で、実際の木目間隔を記したものではない。
- 4 遺物観察表のうち、須恵器、土師器の胎土については、次の表のとおり分類を行った。

須恵器

胎土分類	特徴	推定産地
A類	素地に0.5mm以下の角～亜角の砂粒を並～多含む。砂粒の混和はない。	南加賀窯跡群 (小松市) 能美窯跡群 (北群) (能美市)
	堅く焼き締まるものは一般に器表面に砂粒が現れ、ザラついた印象を与える。砂粒の粒径・組成・黒色粒の吹き出し具合にバラエティーがあり、確実に細別が可能である。	
B類	素地は密で、しっとりとした質感がある。胎土に含まれる0.5mm未満の砂粒の量は非常に少ない。断面縞状になるものが多い。	A類産地ないし能美窯跡群
C類	素地は非常に緻密で、スリガラス状の質感がある。濃い青灰色を呈する精良品。	金沢末窯跡群 (金沢市)
D類	素地は密で、0.5～2.0mmの角～亜角の石英・長石を含むことが多い。	高松・押水窯跡群 (かほく市・宝達志水町)
	まれに海綿骨針を含むことがある。0.5～2.0mmの砂粒を多く含むものもある。	
E類	素地はシルト質な質感。胎土に海綿骨針を含むものが多い。	羽咋窯跡群 (羽咋市)
F類	素地は密で、0.5～2.0mmの角～亜角の石英・長石を多く含むことが多い。	鳥屋窯跡群 (中能登町)
	まれに海綿骨針を含むことがある。石英・長石は丸くなっていることが多い。	
G類		非在地産
H類	素地は緻密、0.5～2.0mmの石英・長石を非常に多く含む。	
I類	素地は極めて硬質な質感。	観法寺窯跡群か
	胎土中の砂粒は極めて少ない。細かい花崗岩・赤色鉱物粒も混ざる。	
X類	その他の特徴をもつもの。	不明

土師器

海綿骨針	種別	特徴
あり	a-1	砂粒をほとんど含まない。
	a-2	砂粒をほとんど含まない。赤色酸化粒含む。
	a-3	石英・長石の砂粒含む。
	a-4	石英・長石の砂粒含む。赤色酸化粒含む。
	a-5	石英・長石以外の大粒の砂粒を含む。
なし	b-1	砂粒をほとんど含まない。
	b-2	砂粒をほとんど含まない。赤色酸化粒含む。
	b-3	石英・長石の砂粒含む。
	b-4	石英・長石の砂粒含む。赤色酸化粒含む。
	b-5	石英・長石以外の大粒の砂粒を含む。

砂粒の大きさ

L	2.0mm～
M	0.5～2.0mm
S	～0.5mm

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と基本層序	9
第1節 埋蔵文化財分布調査の結果	9
第2節 調査の方法	9
第3節 基本層序	12
第4章 B・C区上層の遺構と遺物	14
第1節 調査の概要	14
第2節 建物、柱列	14
第3節 土坑、井戸、ピット	41
第4節 道路遺構	54
第5節 大溝	74
第6節 溝	89
第7節 その他の遺構	117
第8節 包含層出土遺物	122
第5章 D-1・2区、A区上層の遺構と遺物	167
第1節 D-1・2区	167
第2節 A区上層	172
第6章 A～C区下層の遺構と遺物	178
第1節 調査の概要	178
第2節 A区下層	178
第3節 B・C区下層	201
第7章 A区最下層の遺構と遺物	269
第1節 調査の概要	269
第2節 遺構と遺物	269
第8章 総括	274
第1節 最下層・下層の変遷について	274
第2節 第5次調査上層遺物について	276
第3節 第5次調査上層遺構の変遷について	307
第4節 古代加茂遺跡の評価に向けて	312

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の範囲と第 5 次調査区の位置(S=1/4,000) …… 2	第 38 図 B 区上層 SK5016 出土遺物実測図 1(S=1/4・1/6) …… 48
第 2 図 調査の範囲と地区割り(S=1/2,000) …… 3	第 39 図 B 区上層 SK5016 出土遺物実測図 2(S=1/4・1/8) …… 49
第 3 図 遺跡の位置 …… 5	第 40 図 B・C 区上層ピット平面図・土層断面図(S=1/30・1/60) …… 50
第 4 図 加茂遺跡と周辺の遺跡(S=1/25,000) …… 6	第 41 図 C 区上層ピット出土遺物実測図(S=1/4・1/8) …… 51
第 5 図 試掘調査の結果(S=1/1,500・1/80) …… 10	第 42 図 B 区上層ピット出土遺物実測図 1(S=1/4) …… 52
第 6 図 加茂遺跡グリッド配置及び調査区割り図(S=1/2,000) …… 11	第 43 図 B 区上層ピット出土遺物実測図 2(S=1/4・1/6) …… 53
第 7 図 A・B・D 区の土層層序(S=1/60) …… 13	第 44 図 B・C 区上層道路遺構平面図(S=1/150) …… 56
第 8 図 B・C 区上層平面図(S=1/300) …… 15	第 45 図 C 区上層道路遺構土層断面図(S=1/60) …… 57
第 9 図 B 区上層主要遺構配置図(S=1/200) …… 16	第 46 図 B・C 区上層道路遺構土層断面図(S=1/60) …… 58
第 10 図 C 区上層主要遺構配置図(S=1/200) …… 17	第 47 図 C 区上層南端鞍部土層断面図(S=1/60) …… 59
第 11 図 B・C 区上層平面図 1(S=1/100) …… 18	第 48 図 C 区上層道路遺構(路面整地土)出土遺物実測図 1(S=1/4) …… 61
第 12 図 B・C 区上層平面図 2(S=1/100) …… 19	第 49 図 C 区上層道路遺構(路面整地土)出土遺物実測図 2(S=1/4) …… 62
第 13 図 B・C 区上層平面図 3(S=1/100) …… 20	第 50 図 C 区上層道路遺構(路面整地土)出土遺物実測図 3(S=1/4) …… 63
第 14 図 B・C 区上層平面図 4(S=1/100) …… 21	第 51 図 C 区上層道路遺構(路面整地土、SD5016)出土遺物実測図(S=1/4・1/12) …… 64
第 15 図 B・C 区上層平面図 5(S=1/100) …… 22	第 52 図 C 区上層道路遺構(SD5016)出土遺物実測図(S=1/4) …… 65
第 16 図 B・C 区上層平面図 6(S=1/100) …… 23	第 53 図 C 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 1(S=1/4) …… 67
第 17 図 B・C 区上層平面図 7(S=1/100) …… 24	第 54 図 C 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 2(S=1/4) …… 68
第 18 図 B・C 区上層平面図 8(S=1/100) …… 25	第 55 図 C 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 3(S=1/4) …… 69
第 19 図 B 区上層 SB501・502 平面図・断面図(S=1/60) …… 27	第 56 図 B 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 1(S=1/4・1/6) …… 70
第 20 図 B 区上層 SB503 平面図・土層断面図(S=1/30・1/60) …… 28	第 57 図 B 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 2(S=1/4) …… 71
第 21 図 B 区上層 SB504・505・SA501 平面図・土層断面図(S=1/60) …… 29	第 58 図 B 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 3(S=1/4・1/6) …… 72
第 22 図 B 区上層 SB504 土層断面図(S=1/60) …… 30	第 59 図 B 区上層道路遺構(SD5017)出土遺物実測図 4(S=1/4) …… 73
第 23 図 B 区上層 SB 出土遺物実測図(S=1/4) …… 30	第 60 図 B 区上層大溝平面図・土層断面図(S=1/60・1/200) …… 75
第 24 図 B 区上層 SB506・507・SA502 平面図・土層断面図(S=1/60) …… 32	第 61 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 1(S=1/4) …… 77
第 25 図 B 区上層 SB508・509 平面図・土層断面図(S=1/60) …… 33	第 62 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 2(S=1/4) …… 78
第 26 図 C 区上層 SB510・SA503 平面図(S=1/60) …… 35	第 63 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 3(S=1/4) …… 80
第 27 図 C 区上層 SB510 土層断面図(S=1/60) …… 36	第 64 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 4(S=1/3・1/4) …… 81
第 28 図 C 区上層 SB510 出土遺物実測図(S=1/8) …… 37	第 65 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 5(S=1/4) …… 83
第 29 図 B 区上層 SB511、C 区上層 SA503 平面図・土層断面図(S=1/60) …… 38	第 66 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 6(S=1/4) …… 84
第 30 図 C 区上層 SI5001 平面図・土層断面図 1(S=1/40) …… 39	第 67 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 7(S=1/6) …… 85
第 31 図 C 区上層 SI5001 平面図・土層断面図 2(S=1/20・1/40) …… 40	第 68 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 8(S=1/2・1/4) …… 86
第 32 図 C 区上層 SI5001 出土遺物実測図(S=1/4) …… 40	
第 33 図 C 区上層 SK 平面図・土層断面図(S=1/40・1/60) …… 43	
第 34 図 B 区上層 SK 平面図・土層断面図 1(S=1/40・1/60) …… 44	
第 35 図 B・C 区上層 SK 出土遺物実測図(S=1/4) …… 45	
第 36 図 B 区上層 SK 出土遺物実測図(S=1/4) …… 46	
第 37 図 B 区上層 SK 平面図・土層断面図 2(S=1/40・1/60) 47	

第 69 図	B 区上層大溝出土遺物実測図 9(S=1/4) ……………	87	第111図	D-1 区上層平面図(S=1/100) ……………	168
第 70 図	B 区上層大溝出土遺物実測図 10(S=1/4) ……………	88	第112図	D-1 区上層土層断面図(S=1/60) ……………	169
第 71 図	B 区上層 SD5061 平面図・土層断面図(S=1/60・1/200) ……………	93	第113図	D-1 区上層出土遺物実測図(S=1/4) ……………	170
第 72 図	B 区上層 SD5061 遺物出土状況・杭列平面図・断面図 (S=1/40) ……………	93	第114図	D-2 区上層全体図(S=1/100) ……………	171
第 73 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 1(S=1/4) ……………	95	第115図	A 区上層平面図 1(S=1/100) ……………	173
第 74 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 2(S=1/4) ……………	96	第116図	A 区上層平面図 2(S=1/100) ……………	174
第 75 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 3(S=1/4) ……………	97	第117図	A 区上層遺構土層断面図(S=1/60) ……………	175
第 76 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 4(S=1/4) ……………	98	第118図	A 区上層等出土遺物実測図(S=1/4) ……………	176
第 77 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 5(S=1/4) ……………	99	第119図	第 3 次調査区、第 5 次 A 区上層合成図(S=1/200) ……………	177
第 78 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 6(S=1/4) ……………	101	第120図	A 区下層全体図(S=1/160) ……………	179
第 79 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 7(S=1/4・1/6) ……………	102	第121図	A 区下層平面図 1(S=1/100) ……………	180
第 80 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 8(S=1/6) ……………	103	第122図	A 区下層平面図 2(S=1/100) ……………	181
第 81 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 9(S=1/4・1/6) ……………	105	第123図	A 区下層平地建物配置案模式図(S=1/300) ……………	182
第 82 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 10(S=1/4・1/6) ……………	106	第124図	A 区下層 SI551・552、SB551 平面図(S=1/80) ……………	185
第 83 図	B 区上層 SD5061 出土遺物実測図 11(S=1/6) ……………	107	第125図	A 区下層 SI553・554 平面図(S=1/80) ……………	186
第 84 図	C 区上層 SD5001(新)平面図・土層断面図(S=1/60・ 1/200) ……………	109	第126図	A 区下層土層断面図 1(S=1/60) ……………	187
第 85 図	C 区上層 SD5001(旧)平面図・土層断面図(S=1/60) ……………	110	第127図	A 区下層平地建物礎板出土状況平面図(S=1/50) ……………	188
第 86 図	C 区上層 SD5001 出土遺物実測図 1(S=1/4) ……………	111	第128図	A 区下層平地建物礎板、SB511 断面図(S=1/30・1/60) ……………	189
第 87 図	C 区上層 SD5001 出土遺物実測図 2(S=1/4・1/8・1/12) ……………	112	第129図	A 区下層土層断面図 2(S=1/60) ……………	191
第 88 図	C 区上層 SD5001 出土遺物実測図 3(S=1/3・1/4) ……………	113	第130図	A 区下層出土遺物実測図 1(S=1/4・1/6・1/8) ……………	193
第 89 図	C 区上層 SD5001 出土遺物実測図 4(S=1/4・1/8) ……………	114	第131図	A 区下層出土遺物実測図 2(S=1/2・1/4・1/6・1/8) ……………	194
第 90 図	C 区上層 SD 土層断面図(S=1/60) ……………	116	第132図	A 区下層出土遺物実測図 3(S=1/4・1/6・1/8) ……………	195
第 91 図	C 区上層 SD 出土遺物実測図(S=1/4) ……………	117	第133図	A 区下層出土遺物実測図 4(S=1/6・1/8) ……………	196
第 92 図	B 区上層 SD 土層断面図 1(S=1/60) ……………	118	第134図	A 区下層出土遺物実測図 5(S=1/6・1/8) ……………	197
第 93 図	B 区上層 SD 土層断面図 2(S=1/60) ……………	119	第135図	A 区下層出土遺物実測図 6(S=1/4・1/6・1/8) ……………	198
第 94 図	B 区上層 SD 等土層断面図(S=1/60) ……………	120	第136図	B・C 区下層全体図(S=1/300) ……………	202
第 95 図	B 区上層 SD・SX 出土遺物実測図(S=1/4) ……………	121	第137図	B 区下層主要遺構配置図(S=1/200) ……………	203
第 96 図	C 区上層南端鞍部出土遺物実測図 1(S=1/4) ……………	123	第138図	C 区下層主要遺構配置図(S=1/200) ……………	204
第 97 図	C 区上層南端鞍部出土遺物実測図 2(S=1/4) ……………	124	第139図	B・C 区下層平面図 1(S=1/100) ……………	205
第 98 図	C 区上層包含層出土遺物実測図 1(S=1/4) ……………	125	第140図	B・C 区下層平面図 2(S=1/100) ……………	206
第 99 図	C 区上層包含層出土遺物実測図 2(S=1/4) ……………	126	第141図	B・C 区下層平面図 3(S=1/100) ……………	207
第100図	C 区上層包含層出土遺物実測図 3(S=1/4) ……………	127	第142図	B・C 区下層平面図 4(S=1/100) ……………	208
第101図	C 区上層包含層出土遺物実測図 4(S=1/2・1/4) ……………	128	第143図	B・C 区下層平面図 5(S=1/100) ……………	209
第102図	C 区上層排水溝等出土遺物実測図(S=1/4) ……………	130	第144図	B・C 区下層平面図 6(S=1/100) ……………	210
第103図	B 区上層包含層出土遺物実測図 1(S=1/2・1/4) ……………	131	第145図	B・C 区下層平面図 7(S=1/100) ……………	211
第104図	B 区上層包含層出土遺物実測図 2(S=1/4) ……………	132	第146図	B・C 区下層平面図 8(S=1/100) ……………	212
第105図	B 区上層包含層出土遺物実測図 3(S=1/4) ……………	134	第147図	C 区下層 SB552 平面図・土層断面図(S=1/60) ……………	213
第106図	B 区上層包含層出土遺物実測図 4(S=1/4) ……………	135	第148図	C 区下層 SB552 出土遺物実測図(S=1/8) ……………	213
第107図	B 区上層包含層出土遺物実測図 5(S=1/4) ……………	136	第149図	B・C 区下層 SK 平面図・土層断面図(S=1/60) ……………	215
第108図	B 区上層包含層出土遺物実測図 6(S=1/4) ……………	137	第150図	B・C 区下層 SK、ピット平面図・土層断面図(S=1/60) ……………	216
第109図	B 区上層包含層出土遺物実測図 7(S=1/4) ……………	138	第151図	B・C 区下層 SK、ピット出土遺物実測図(S=1/4・1/6・ 1/8) ……………	217
第110図	B 区上層包含層等出土遺物実測図(S=1/4) ……………	139	第152図	C 区下層 SD5501 土層断面図(S=1/60) ……………	218

第153図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 1(S=1/4) ……	220	第183図	A区最下層出土遺物実測図(S=1/4・1/6) ……	273
第154図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 2(S=1/4) ……	221	第184図	古墳時代以前の建物域の分布概略図(S=1/2,500) ……………	275
第155図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 3(S=1/4) ……	222	第185図	第5次調査最下層・下層主要遺構配置図(S=1/600) ……………	277
第156図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 4(S=1/4) ……	224	第186図	旧河北潟東岸の窯跡分布図 ……	278
第157図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 5(S=1/4) ……	225	第187図	胎土分類からみた第5次調査出土須恵器の様相 1 (S=1/5・1/8) ……	279
第158図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 6(S=1/4) ……	226	第188図	胎土分類からみた第5次調査出土須恵器の様相 2 (S=1/5・1/8) ……	280
第159図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 7(S=1/4) ……	228	第189図	南加賀窯跡群須恵器坏・埴類の変遷図(S=1/6) ……	284
第160図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 8(S=1/4) ……	229	第190図	高松・押水窯跡群須恵器坏・埴類の変遷図(S=1/6) ……………	286
第161図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 9(S=1/4) ……	231	第191図	中能登地域のVI ₃ 期坏・埴類集成図(S=1/6) ……	288
第162図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 10(S=1/4) ……	232	第192図	加茂遺跡他出土有台埴集成図(S=1/5) ……	289
第163図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 11(S=1/4) ……	233	第193図	加茂遺跡周辺の消費遺跡出土坏・埴類実測図 1 (S=1/6) ……	290
第164図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 12(S=1/4) ……	234	第194図	加茂遺跡周辺の消費遺跡出土坏・埴類実測図 2 (S=1/6) ……	292
第165図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 13(S=1/4) ……	236	第195図	中能登地域のVI ₃ 期土師器等埴・皿類実測図(S=1/6) ……………	292
第166図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 14(S=1/4) ……	237	第196図	第5次調査出土土師器埴・皿類集成図 1(S=1/5) ……	294
第167図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 15(S=1/4) ……	239	第197図	第5次調査出土土師器埴・皿類集成図 2(S=1/5) ……	295
第168図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 16(S=1/4・1/6) ……………	241	第198図	第5次調査出土の主な墨書土器集成図 1 (S=1/5) ……	300
第169図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 17(S=1/4・1/6) ……………	242	第199図	第5次調査出土の主な墨書土器集成図 2 (S=1/5) ……	301
第170図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 18(S=1/4・1/6・1/8) ……………	243	第200図	第5次調査出土の主な墨書土器集成図 3 (S=1/5) ……	302
第171図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 19(S=1/4・1/6) ……………	244	第201図	第5次調査出土の主な墨書土器集成図 4 (S=1/5) ……	304
第172図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 20(S=1/4) ……	245	第202図	第5次調査出土の特徴的な遺物集成図(S=1/2・1/3・ 1/5) ……	304
第173図	C区下層 SD5501 出土遺物実測図 21(S=1/6・1/8) ……………	246	第203図	第5次調査B・C区上層の変遷案 1(S=1/800) ……	310
第174図	B・C区下層 SD 土層断面図 1(S=1/60) ……	248	第204図	第5次調査B・C区上層の変遷案 2(S=1/800) ……	311
第175図	B・C区下層 SD 土層断面図 2(S=1/60) ……	249			
第176図	B・C区下層出土遺物実測図(S=1/4・1/8) ……	251			
第177図	B・C区下層 SX 等土層断面図 1(S=1/60) ……	253			
第178図	B区下層ベース下試掘坑土層断面図(S=1/60) ……	254			
第179図	A区最下層平面図(S=1/300) ……	270			
第180図	A区最下層遺構平面図・断面図(S=1/60) ……	271			
第181図	A区西壁土層断面模式図 ……	271			
第182図	A区最下層鞍部土層断面図(S=1/60) ……	272			

表 目 次

第 1 表	第1～11次調査一覧表 ……	1	第 9 表	B・C区上層 SD 規模等一覧表 2 ……	91
第 2 表	調査・整理体制一覧表 ……	4	第10表	B・C区上層 SD 規模等一覧表 3 ……	92
第 3 表	周辺の遺跡一覧表 ……	8	第11表	B・C区上層出土土器観察表 1 ……	141
第 4 表	第5次調査の遺構番号一覧表 ……	12	第12表	B・C区上層出土土器観察表 2 ……	142
第 5 表	加賀・能登の土器編年と暦年代対比表 ……	26	第13表	B・C区上層出土土器観察表 3 ……	143
第 6 表	B・C区上層 SB・SA 規模等一覧表 ……	26	第14表	B・C区上層出土土器観察表 4 ……	144
第 7 表	B・C区上層 SK 規模等一覧表 ……	42	第15表	B・C区上層出土土器観察表 5 ……	145
第 8 表	B・C区上層 SD 規模等一覧表 1 ……	90	第16表	B・C区上層出土土器観察表 6 ……	146

第 17 表	B・C 区上層出土土器観察表 7	147	第 56 表	B・C 区下層出土土器観察表 6	260
第 18 表	B・C 区上層出土土器観察表 8	148	第 57 表	B・C 区下層出土土器観察表 7	261
第 19 表	B・C 区上層出土土器観察表 9	149	第 58 表	B・C 区下層出土土器観察表 8	262
第 20 表	B・C 区上層出土土器観察表 10	150	第 59 表	B・C 区下層出土土器観察表 9	263
第 21 表	B・C 区上層出土土器観察表 11	151	第 60 表	B・C 区下層出土土器観察表 10	264
第 22 表	B・C 区上層出土土器観察表 12	152	第 61 表	B・C 区下層出土土器観察表 11	265
第 23 表	B・C 区上層出土土器観察表 13	153	第 62 表	B・C 区下層出土石器・石製品観察表	266
第 24 表	B・C 区上層出土土器観察表 14	154	第 63 表	B・C 区下層出土木製品観察表 1	267
第 25 表	B・C 区上層出土土器観察表 15	155	第 64 表	B・C 区下層出土木製品観察表 2	268
第 26 表	B・C 区上層出土土器観察表 16	156	第 65 表	A 区最下層出土土器観察表	273
第 27 表	B・C 区上層出土土器観察表 17	157	第 66 表	A 区最下層出土木製品観察表	274
第 28 表	B・C 区上層出土土器観察表 18	158	第 67 表	A～C 区最下層・下層変遷概略表	276
第 29 表	B・C 区上層出土土器観察表 19	159	第 68 表	第 5 次調査上層出土須恵器の胎土・時期別一覧表 1	281
第 30 表	B・C 区上層出土土器観察表 20	160	第 69 表	第 5 次調査上層出土須恵器の胎土・時期別一覧表 2	282
第 31 表	B・C 区上層出土土器観察表 21	161	第 70 表	第 5 次調査上層出土墨書土器、転用硯一覧表 1	297
第 32 表	B・C 区上層出土土器観察表 22	162	第 71 表	第 5 次調査上層出土墨書土器、転用硯一覧表 2	298
第 33 表	B・C 区上層出土土器観察表 23	163	第 72 表	第 5 次調査上層出土墨書土器文字内容別一覧表	298
第 34 表	B・C 区上層出土土器観察表 24	164	第 73 表	第 5 次調査上層出土墨書土器、転用硯出土状況一覧表	299
第 35 表	B・C 区上層出土石器製品観察表	164	第 74 表	第 5 次調査上層出土施釉陶器等一覧表	305
第 36 表	B・C 区上層出土金属製品観察表	164	第 75 表	第 5 次調査上層出土遺物の主な接合関係一覧表	306
第 37 表	B・C 区上層出土木製品観察表 1	165	第 76 表	第 5 次調査上層主要遺構推移表	308
第 38 表	B・C 区上層出土木製品観察表 2	166	第 77 表	加茂遺跡墨書土器地域別出土傾向一覧表	314
第 39 表	D-1 区上層 SD 規模等一覧表	167	第 78 表	加茂遺跡墨書土器集計表 1	315
第 40 表	D-1 区上層出土土器観察表	170	第 79 表	加茂遺跡墨書土器集計表 2	316
第 41 表	A 区上層遺構規模等一覧表	175	第 80 表	加茂遺跡漆書土器、転用硯等一覧表	317
第 42 表	A 区上層等出土土器観察表	176	第 81 表	加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 1	318
第 43 表	A 区上層出土木製品観察表	176	第 82 表	加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 2	319
第 44 表	A 区下層建物規模等一覧表	183	第 83 表	加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 3	320
第 45 表	A 区下層平地建物礎板一覧表	184	第 84 表	加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 4	321
第 46 表	A 区下層 SK・SD 規模等一覧表	192	第 85 表	加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 5	322
第 47 表	A 区下層出土土器観察表	199	第 86 表	加茂遺跡出土墨書土器、転用硯等一覧表	323
第 48 表	A 区下層出土石器製品観察表	199	第 87 表	加茂遺跡出土転用硯等一覧表	324
第 49 表	A 区下層出土木製品観察表	200	第 88 表	加茂遺跡出土仏教関連遺物一覧表 1	325
第 50 表	B・C 区下層 SK・SD・SX 規模等一覧表	214	第 89 表	加茂遺跡出土仏教関連遺物一覧表 2	326
第 51 表	B・C 区下層出土土器観察表 1	255	第 90 表	加茂遺跡出土漆関連遺物、木製食器等一覧表	327
第 52 表	B・C 区下層出土土器観察表 2	256	第 91 表	加茂遺跡出土木簡、祭祀遺物等一覧表	328
第 53 表	B・C 区下層出土土器観察表 3	257			
第 54 表	B・C 区下層出土土器観察表 4	258			
第 55 表	B・C 区下層出土土器観察表 5	259			

卷頭図版目次

卷頭図版1 上 遺跡全景(西から)	下 B・C区上層完掘状況(西から)
卷頭図版2 上 B・C区上層道路遺構完掘状況(北西から)	下 B・C区上層出土遺物

図版目次

図版 1 B・C区上層遺構 1	図版 51 D-1・2区、A区上層遺構、出土遺物
図版 2 B・C区上層遺構 2	図版 52 A区上・下層遺構 1
図版 3 B・C区上層遺構 3(SB-1)	図版 53 A区上・下層遺構 2
図版 4 B・C区上層遺構 4(SB-2)	図版 54 A区下層遺構 1
図版 5 B・C区上層遺構 5(SB-3)	図版 55 A区下層遺構 2
図版 6 B・C区上層遺構 6(SI)	図版 56 A区下層遺構 3
図版 7 B・C区上層遺構 7(SK・SE-1)	図版 57 A区下層遺構 4
図版 8 B・C区上層遺構 8(SK・SE-2)	図版 58 A区下層遺構 5
図版 9 B・C区上層遺構 9(SK・SE-3)	図版 59 A区下層遺構 6
図版 10 B・C区上層遺構 10(道路遺構-1)	図版 60 A区下層遺構 7
図版 11 B・C区上層遺構 11(道路遺構-2)	図版 61 A区下層出土遺物 1
図版 12 B・C区上層遺構 12(道路遺構-3)	図版 62 A区下層出土遺物 2
図版 13 B・C区上層遺構 13(道路遺構-4)	図版 63 B・C区下層遺構 1
図版 14 B・C区上層遺構 14(道路遺構-5)	図版 64 B・C区下層遺構 2
図版 15 B・C区上層遺構 15(大溝-1)	図版 65 B・C区下層遺構 3
図版 16 B・C区上層遺構 16(大溝-2)	図版 66 B・C区下層遺構 4
図版 17 B・C区上層遺構 17(SD5061)	図版 67 B・C区下層遺構 5
図版 18 B・C区上層遺構 18(SD5001-1)	図版 68 B・C区下層遺構 6
図版 19 B・C区上層遺構 19(SD5001-2)	図版 69 B・C区下層遺構 7
図版 20 B・C区上層遺構 20(B区SD-1)	図版 70 B・C区下層遺構 8
図版 21 B・C区上層遺構 21(B区SD-2)	図版 71～84 B・C区下層出土遺物 1～14
図版 22 B・C区上層遺構 22(C区SD)	図版 85 A区最下層遺構 1
図版 23 B・C区上層遺構 23(C区SD他)	図版 86 A区最下層遺構 2
図版 24～42 B・C区上層出土遺物 1～19	図版 87 A区最下層遺構 3
図版 43～49 B・C区上層出土墨書土器 1～7	図版 88 A区最下層遺構 4、出土遺物
図版 50 D-1区上層遺構	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

国道8号津幡北バイパスは、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が所管する事業である。国道8号線は、新潟県新潟市を起点とし、富山・石川・福井・滋賀各県を経て、京都府京都市に至る延長約582kmの幹線国道で、日本海に沿った北陸地方を結ぶ大動脈の役割を担っている。そのうち津幡北バイパスは、昭和59(1984)年度に河北郡津幡町舟橋から同町刈安まで(延長約5.8km)の慢性的な交通渋滞の解消を目指して事業化されたものであり、刈安地内で俱利伽羅バイパスに連結、富山県小矢部市の小矢部バイパスへと続く。

本遺跡の発掘調査は、昭和62(1987)年度の建設省北陸地方建設局金沢工事事務所(当時。以下、建設省)から石川県立埋蔵文化財センター(当時。以下、県埋文センター)への埋蔵文化財包蔵地の所在についての照会に始まる。このような開発事業に際して周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する場合、事業者は文化財保護法第94条の規定にもとづき、その保護措置を執ることが求められる。県教委では、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るため、各年度に国・県等の関係機関・部局の協力を得て、次年度以降の開発事業計画の早期把握と、必要に応じて分布調査等により埋蔵文化財の有無を確認することで、工事着手前段階での埋蔵文化財の正確な把握と、埋蔵文化財の保護措置に関する事業者との調整を行っている。

本遺跡については、昭和62(1987)年10月26日付けで、建設省から県埋文センターに分布調査の依頼があり、同年11月27日に重機を用いた試掘調査を実施、舟橋地内において奈良・平安時代の良好な遺物包含層を確認した。その後、平成元(1989)年4月17日付けで2回目の分布調査の依頼を受け、同年9月25・27日、10月26日と12月4日に現地踏査と重機・人力による試掘調査を実施、東西方向で約500mを測る本遺跡(県遺跡番号No.1303000)と、丘陵地で加茂ツチグラ遺跡(同No.1302000)を確認した。

その後、県埋文センターは建設省と協議を行い、埋蔵文化財への影響を軽減する道路線形の変更が困難であることから、事業地内の埋蔵文化財について記録保存措置(発掘調査)を実施することとなった。現地調査は、路線予定地西側から順次実施することとなり、平成3～6(1991～1994)年度の第1～4次調査を社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が担当した。また、平成11～17(1999～2005)年度の第5～11次調査を財団法人石川県埋蔵文化財センター(当時。以下、(財)県埋文センター)が実施し、保護措置後の平成20(2008)年3月15日に津幡北バイパスは全面開通している。本書は、第1～4次調査および第6次調査の一部を報告した『津幡町 加茂遺跡I』(2009県教委・(財)県埋文センター)に引き続き、第5次調査を報告するものである。

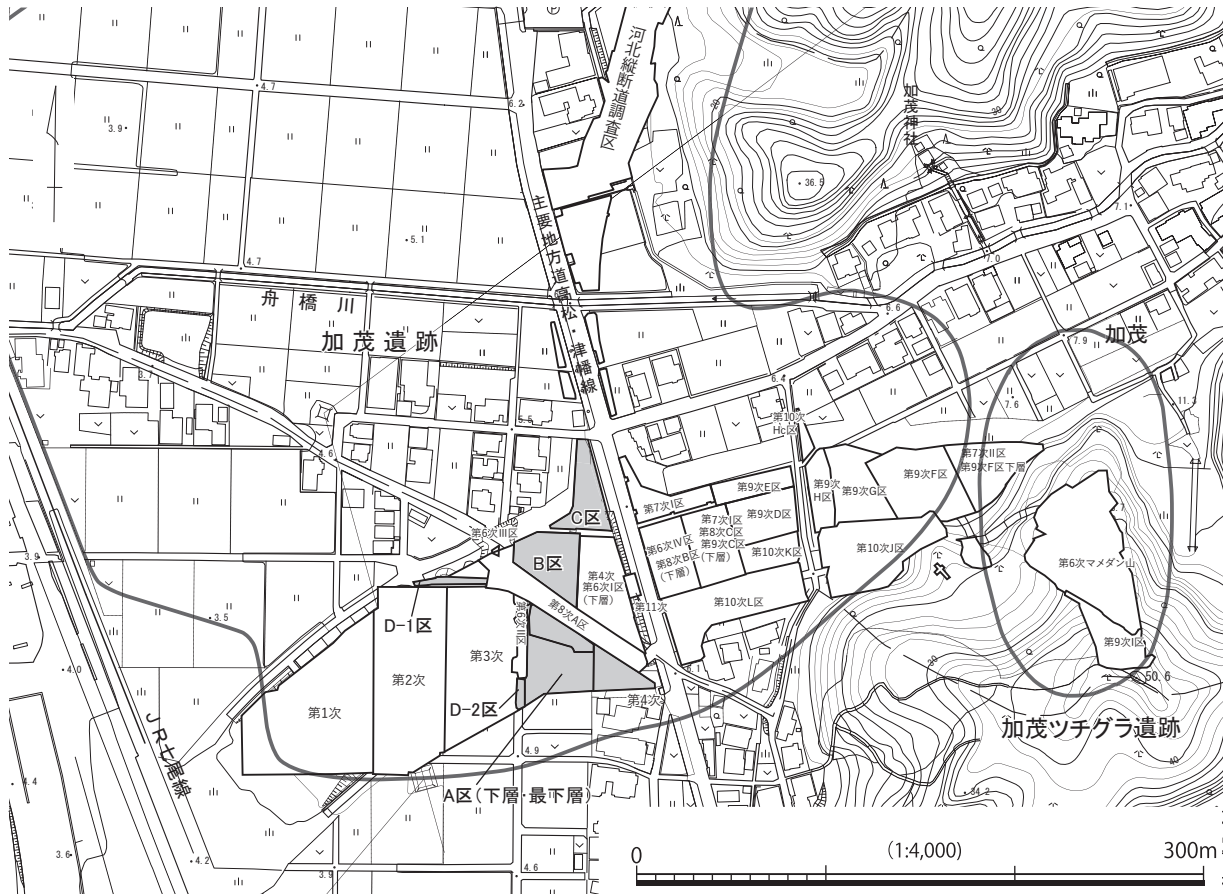
また、本書に報告する調査区の出土品については、遺失物法の規定にもとづき、(財)県埋文センターが津幡警察署に埋蔵物の発見届を提出し、同警察署から発掘届の通知を受けた県教委により文化財認定が行われ、現在、出土品は石川県埋蔵文化財センターで収蔵・保管のうえ公開・活用を図っている。

なお、第6次調査で出土した平安時代前期の古

第1表 第1～11次調査一覧表

調査次	調査年度	調査主体	調査面積(m ²)
第1次	平成3(1991)	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会	4,700
第2次	平成4(1992)		4,000
第3次	平成5(1993)		5,100
第4次	平成6(1994)		2,080
第5次	平成11(1999)	財団法人石川県埋蔵文化財センター	5,500
第6次	平成12(2000)		7,700
第7次	平成13(2001)		8,000
第8次	平成14(2002)		7,000
第9次	平成15(2003)		23,750
第10次	平成16(2004)		24,550
第11次	平成17(2005)		300
調査面積計			92,680

第1節 調査の経緯



第1図 遺跡の範囲と第5次調査区の位置 (S = 1/4,000)

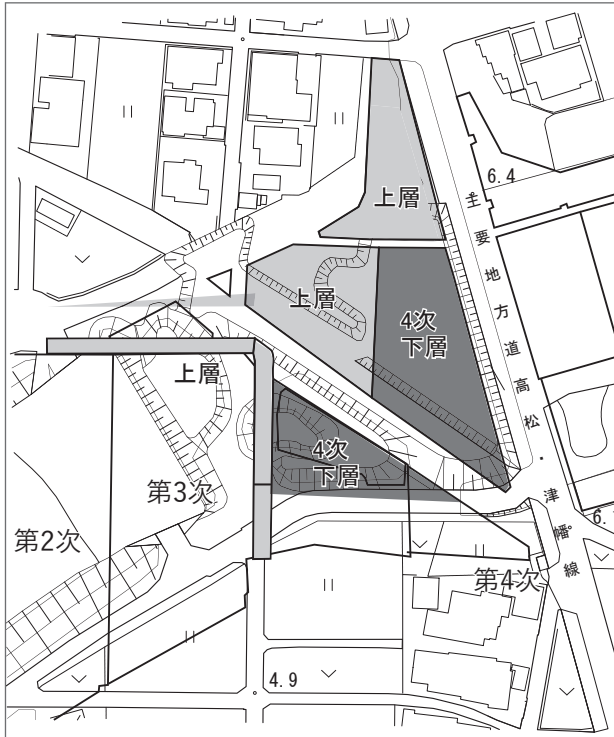
代国家の農業奨励政策や命令伝達方法を具体的に知ることができる「加賀郡勝示札」は平成22(2010)年6月29日に国の重要文化財に、また平成13(2001)年度から津幡町教育委員会が津幡北バイパス北側の水田部を主な対象に実施した範囲確認調査の成果をもとに、津幡北バイパス事業地の一部を含む約4.6haが平成27(2015)年3月10日に国の史跡に、それぞれ指定された他、津幡北バイパス事業地内の「加賀郡勝示札」出土地・古代北陸道能登支路周辺地は、バイパスの高架位置・構造の変更により現状保存され、「加茂遺跡広場」に整備のうえ、現在、公開・活用が図られている。

第2節 発掘作業の経過

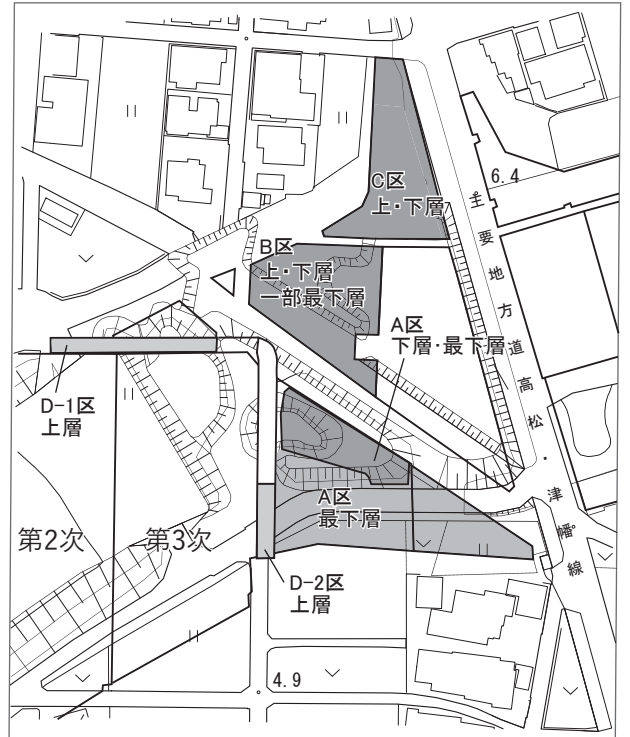
現地調査は、建設省から委託を受けた石川県との委託契約に基づき、(財)県埋文センターが平成11年4月21日～平成12年1月19日に実施した。調査面積は、当初5,000㎡を計画したが、弥生時代後期の生活面(下層、最下層)が広がりや、農道う回路の関係から、協議の結果、第2図で示した5,500㎡(A区最下層1,500㎡、A～C区下層2,200㎡、B～D区上層1,800㎡)となった。調査担当は、調査部調査第1課の川畑 誠、兼田康彦である。以下、調査日誌抄を記す。

- 4月1日 県教育委員会(以下、県教委)から5,000㎡(上層、下層面積合計)の調査依頼及び委託契約を受け、県教委へ文化財保護法に基づく発掘調査届出書を提出。調査準備に着手。
- 4月21日～5月9日 21日に現地で国交省、県教委文化財課と調査工程等の協議を行う。A区下層、B・C区上・下層、第4次調査区下層、農道・水路(D-1・2区)の順に進めることで合意。26日に発掘調査届出書に対する通知あり。

当初計画 5,000㎡



実績 5,500㎡



0 (1:2,000) 100m

第2図 調査の範囲と地区割り (S = 1/2,000)

- 5月10日～ 5月23日 町水道付け替え工事の立ち合い、プレハブ設営作業等を進める。第4次上層調査後、埋め戻されたA区について、下層(本書の最下層)約1,500㎡を対象に東側から重機による盛土・間層土除去作業を進める中で、北西側で上層と同一面で新たに弥生時代後期の遺構面(本書の下層)を確認する。以降、A区は島状の下層残存部分の調査を優先して進めることとする。
- 5月24日～ 6月28日 A区下層・最下層について、現場作業員による包含層掘削、遺構検出、遺構掘り下げ作業、調査員による図面作成等の記録作業を進め、6月28日にラジオコントロールヘリコプター(以下、ラジコン)による空中写真測量を実施する。
- 6月29日～ 7月23日 A地区下層部分の最下層調査に着手。間層土中に下層平地建物に伴う柱穴を確認。人力で間層土の掘下げ作業、礎板の図化作業を進める。7月23日に第2回ラジコンによる空中写真測量を実施し、A区の調査完了。併せて、7月からB・C区上層約1,600㎡の重機による表土除去を始める。
- 7月24日～10月26日 B・C区上層の現場作業員による包含層掘削、遺構検出作業に着手する。第4次調査で検出した道路遺構、大溝の延長等を確認、遺構掘り下げ作業、調査員による図面作成等の作業を進める。農閑期に入ったことから農道の一部調査(D-2区)を実施する。10月26日にB・C・D-2区について第3回ラジコンによる空中写真測量を実施する。10月2日にまいぶん友の会を対象とした現地説明会を開催、あいにくの雨天ではあったが好評を得る。
- 10月27日～12月24日 10月27日よりB・C区下層の調査に着手する。重機による間層土除去作業と並行して、調査区周辺の環境整備作業、調査区排水溝掘削作業を実施後、作業員による包含層掘削、遺構検出、遺構掘り下げ作業、調査員による図面作成等の記録作業を順次進める。C区SD5501から多量の土器・木製品、上層に属するSD5001(旧)から3点の木簡が出土する。12月から水路部分(D-1区)の調査に着手する他、B区最下層の状況把握のためトレンチ調査を行う。初雪の翌日、12月24日に第4回ラジコンによる空中写真測量を実施する。また、県教委と調査範囲について協議をおこない、農道の一部(D-2区北側)、第4次調査区下層は、次年度以降の調査とすることで合意。
- 12月25日～ 1月19日 補測作業、遺物取り上げ作業と並行して、調査区の埋め戻し作業、プレハブ等撤収作業を経て、1月19日に現地作業を完了する。

第3節 整理等作業の経過

遺物は、弥生土器、土師器、須恵器等の土器、陶磁器、石器・石製品がコンテナ(60×38×14cm)で154箱、木製品はコンテナで約70箱が出土した。出土品の整理作業は、平成12(2000)、同14～17(2002～5)、同20(2008)、同30～令和2(2018～2020)の各年度に(公財)石川県埋蔵文化財センター(平成24年度以前は(財)県埋文センター)が県教委の委託として実施した。各年度の調査・整理体制は第2表のとおりである。

整理の内容については、平成12(2000)年度が大量に出土した遺物の洗浄作業、平成14～17年度が土器等の記名・分類・接合、実測・トレース、土器の復元、遺構図のトレースの諸作業を、他次調査を含めて継続実施している。また、平成20年度に出土木製品207点の樹種同定をパリオ・サーヴェイ(株)に委託して実施した。平成30年度～令和2年度に報告書作成作業を行い、令和2年度に本書を編集・刊行した。なお、C区SD5001(古)から出土した木簡について、平成12年2月に平川 南氏(当時、国立歴史民俗博物館教授)の指導を得ている。

第2表 調査・整理体制一覧表

平成11年度(1999)〔第5次調査〕		平成12年度(2000)		平成14年度(2002)		平成15年度(2003)	
調査期間	平成11年5月10日～同年9月10日	調査期間	平成12年4月1日～13年3月31日	平成14年4月1日～15年3月31日	平成15年4月1日～16年3月31日		
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:西 貞夫)	調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:山岸 勇)	同左 (同左)	同左 (同左)		
総括	村角道善(専務理事)	総括	武田寿夫(専務理事)	武田寿夫(専務理事)	林 正信(専務理事)		
事務	油屋好樹(事務局長) 藤瀬貞男(総務課長) 辻口明広(経理課長)	事務	油屋好樹(事務局長) 和泉邦夫(総務課長) 辻口明広(経理課長)	松柳 拓(事務局長) 井田徳久(総務課長) 繁田吉彦(経理課長)	同左 同左 同左		
調査	谷内尾晋司(所長兼企画部長) 小嶋芳孝(調査部長) 中島俊一(調査第1課長)	整理	谷内尾晋司(所長) 湯尻修平(企画部長) 小嶋芳孝(調査部長) 澤田まさ子(整理課長) 中島俊一(調査第1課長)	谷内尾晋司(所長) 湯尻修平(企画部長) 小嶋芳孝(調査部長) 澤田まさ子(整理課長)	同左 同左 同左 藤田邦雄(整理課長)		
担当	川畑 誠(調査第1課主任主事) 兼田康彦(調査第1課主事)	担当	川畑 誠(企画課主査)	川畑 誠(企画課調査専門員)	川畑 誠(調査第3課調査専門員)		
作業内容	現地調査 5,500㎡	作業内容	遺物洗浄	土器の記名・分類・接合	土器等の記名・分類・接合 遺構図のトレース		
平成16年度(2004)		平成17年度(2005)		平成20年度(2008)		平成30年度(2018)	
調査期間	平成16年4月1日～17年3月31日	調査期間	平成17年4月1日～18年3月31日	平成20年4月1日～21年3月31日	平成30年4月2日～31年3月31日		
調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:山岸 勇)	調査主体	財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:山岸 勇)	同左 (理事長:中西吉明)	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:田中慎太郎)		
総括	林 正信(専務理事)	堀 日出夫(専務理事)	堀 日出夫(専務理事)	黒崎幸作(専務理事)	紺野 欽一(専務理事)		
事務	山下淳映(事務局長) 井田徳久(総務課長) 繁田吉彦(経理課長)	山下淳映(事務局長) 宅崎仁芳(総務課長) 熊谷省吾(経理課長)	山下淳映(事務局長) 宅崎仁芳(総務課長) 熊谷省吾(経理課長)	栗山正文(事務局長) 釜親利雄(総務グループGL)	釜親利雄(事務局長) 山口 昇(総務グループGL)		
整理	谷内尾晋司(所長) 湯尻修平(企画部長) 小嶋芳孝(調査部長) 藤田邦雄(整理課長) 中島俊一(調査第1課長)	谷内尾晋司(所長) 中島俊一(企画部長) 湯尻修平(調査部長) 垣内光次郎(整理課長) 三浦純夫(調査第1課長)	谷内尾晋司(所長) 中島俊一(企画部長) 湯尻修平(調査部長) 垣内光次郎(整理課長) 三浦純夫(調査第1課長)	湯尻修平(所長) 栃木英道(企画部長) 三浦純夫(調査部長) 藤田邦雄(国関係調査グループGL)	藤田邦雄(所長) 垣内光次郎(調査部長) 川畑 誠(国関係調査グループGL)		
担当	柿田祐司(調査第1課主査)	柿田祐司(調査第1課主査)	柿田祐司(調査第1課主査)	浜崎悟司(国関係調査G主幹)	川畑 誠 和田龍介(国関係調査G主幹)		
作業	土器・木製品等の実測・トレース 遺構図のトレース	土器・木製品等の実測・トレース	土器・木製品等の実測・トレース	木製品の樹種同定委託	原稿作成		
令和元年度(2019)		令和2年度(2020)					
調査期間	平成31年4月1日～令和2年3月31日	調査期間	令和2年4月1日～3年3月31日				
調査主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター (理事長:田中慎太郎)	調査主体	同左 (理事長:徳田 博)				
総括	紺野 欽一(専務理事)	田村彰英(専務理事)	田村彰英(専務理事)				
事務	釜親利雄(事務局長) 伊藤 直(総務グループGL)	北谷俊彦(事務局長) 伊藤 直(総務グループGL)	北谷俊彦(事務局長) 伊藤 直(総務グループGL)				
整理	垣内光次郎(所長) 伊藤雅文(調査部長) 川畑 誠(国関係調査グループGL)	伊藤雅文(所長) 川畑 誠(調査部長) 松山和彦(国関係調査グループGL)	伊藤雅文(所長) 川畑 誠(調査部長) 松山和彦(国関係調査グループGL)				
担当	川畑 誠(国関係調査G主幹)	川畑 誠(国関係調査G主幹)	川畑 誠(国関係調査G主幹)				
作業	原稿作成	原稿作成	編集・刊行				

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境



第3図 遺跡の位置

加茂遺跡は、石川県河北郡津幡町_字加茂・舟橋地内に所在する。遺跡の位置する津幡町は、北～西はかほく市、東は富山県境、南は金沢市に隣接し、西南部には河北潟が広がる。

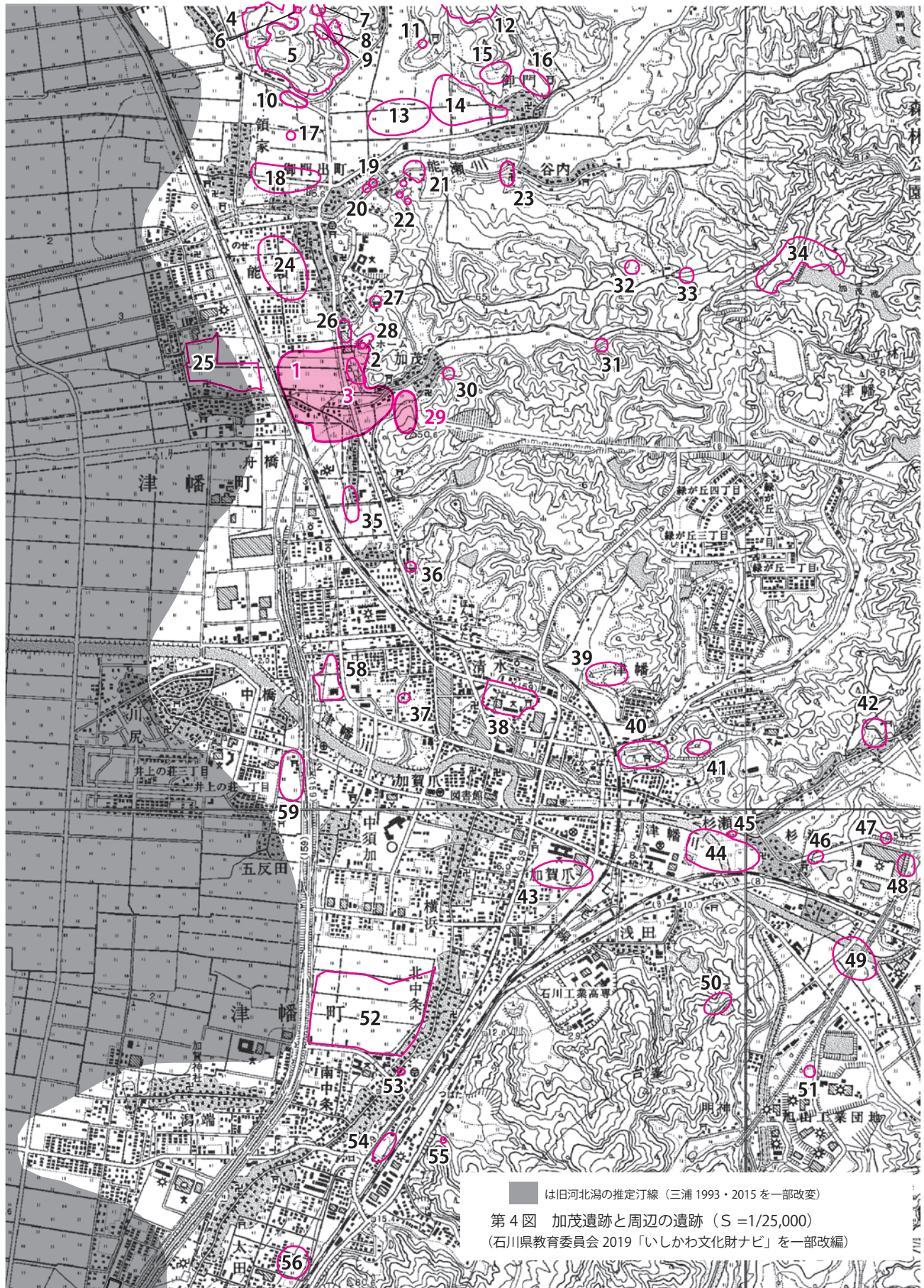
津幡町の地形は、東側に宝達丘陵に連なる津幡・森本丘陵、西は海岸部に発達した内灘砂丘と砂丘によって形成された河北潟、その両者に挟まれた河北平野からなる。津幡・森本丘陵は標高100～200m前後の低山帯と、その西側の標高50～100m程の丘陵地からなり、西側は河川の浸食などで低い独立丘陵や舌状丘陵が形成され、丘陵地の裾まで谷平野が樹枝状に入り込んだ地形となっている。町の西部には、金沢市栗崎からかほく市の大海川河口の海岸部に発達した内灘砂丘と、内灘砂丘の発達過程で形成された潟湖である河北潟が広がっている。内灘砂丘は最高標高約61m、延長約20kmの砂丘列である。手取川河口(現白山市)から供給された土砂が沿岸漂砂となって海浜を形成し、その海浜からの飛砂によって形成されたとされている。縄文時代中期前後に完成した「古砂丘」と、弥生時代以降にその内陸部に形成された「新砂丘」からなり、古砂丘上の黒色砂質土(旧地

表面)上には該期の遺跡が分布している。河北潟は日本海側有数の潟湖で、内灘砂丘の発達過程で外湾から隔たれ始め、古墳時代にはほぼ潟湖となったようである。藩政期の絵図面を見ると湖岸線の出入りが著しく、河北潟の海退現象によって葡萄の房状に形成された「フゴ(不湖)」と呼ばれた小潟が発達していたことがわかる。古代遺跡はこのようなフゴに面して立地する傾向がうかがえ、加茂遺跡も「舟橋フゴ」と呼ばれた小潟に面している。河北潟と遺跡の立地については、津幡町教委報告書⁽¹⁾にまとめられており、そちらを参照されたい。河北潟は既に江戸時代から干拓が始められており、銭屋五兵衛によるもの(1851年)が有名である。1960年代から始まった大規模な国営干拓工事により2/3が陸地化、往事の景観は失われてしまっている。

調査地である加茂遺跡は、津幡町南部の、旧河北潟北東岸部の標高約5～7m前後の低地上に位置する。本遺跡は、現在の河北潟からはかなり離れた場所に立地するが、旧河北潟の湖岸に近い場所に立地していたものと考えられる。遺跡名にもなっている「加茂」の地名は、遺跡から出土する墨書土器「鴨」「賀茂」の存在から、少なくとも8世紀後半以降から実在していたことがわかる。そのルーツを京都賀茂神社の勧請に求める見解もあり、賀茂神社(現在、かほく市横山)の社史には、天平勝宝5年(753)に加茂の地に賀茂大明神が垂迹し、大同2年(807)に神託により現在の横山の地へ遷座するとある。また本遺跡の近くにも加茂神社が村社として残る。

第2節 歴史的環境

加茂遺跡周辺の遺跡の立地を語るには、三浦純夫氏による旧河北潟の推定範囲の復元なしには語ることができない⁽²⁾⁽³⁾。氏による藩政期の絵図や近代の古地図、米軍撮影の航空写真(1945年前後)を駆使した微地



形の復元は、干拓により消失した河北潟の汀線を鮮やかに描き出した。これにより漠然ととらえられていた「遺跡から約2km西側にある河北潟」のイメージは覆され、加茂遺跡の大溝～河北潟および北陸道を用いた「内水面交通と陸上交通の結節点」という重要な性格を導く根拠にもなった。第4図は遺跡地図に氏の復元汀線を重ねたもので、これによれば遺跡の西端から実に50～100mで河北潟に到達する。

河北潟周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代に入り集落が営まれた痕跡が数多く見つかっている。津幡丘陵上には、中期中葉の上山田式土器で知られる上山田貝塚、丘陵裾部には中世まで集落が営まれた指江B遺跡(4)、能瀬イシヤマ遺跡(19)、落とし穴と想定されるピットや中期中葉の遺物が見つかった谷内石山遺跡(21)などが確認されている。このように、河北潟周辺地域の縄文中期頃までの遺跡の多くは丘陵上や丘陵裾部などに立地しているが、縄文時代後期以降は、北中条遺跡(52)、南中条遺跡(54)のように丘陵地を降りて低地に立地する遺跡が現れる。

弥生時代中期までは低調であるが、後期～古墳時代前半になると低地および丘陵裾地で遺跡が増加する。また、かほく市～津幡町の独立低丘陵上には弥生時代後期のいわゆる「高地性集落」が点在することも特徴的である。調査地周辺では、加茂A遺跡(3)、加茂ヒャクハチジュウワリ遺跡(25)、指江B遺跡(4)、能瀬南B遺跡(28)、北中条遺跡(52)などが確認され、北中条遺跡では竪穴建物や方形周溝墓群などが検出されるなど、拠点的な集落であったことをうかがわせる。一方、高地性集落としては、拠点的なものとしてかほく市鉢伏茶臼山遺跡があり、竪穴建物1～2基単位の衛星的な小集落と目される鉢伏カクチ遺跡、指江ジュウサンザカ遺跡(7)などがある。

古墳時代になると、この地域でも数多くの墳墓が造られるようになる。能瀬川流域では4世紀代の円墳からなる御門A古墳群(15)・方墳からなる御門B古墳群(16)、5世紀代の能瀬石山古墳(20)、谷内石山古墳群(22)、時期は明確でないが径12mの方形で単独墳である指江古墳(6)などの小規模な古墳群が低丘陵上に確認されている。さらに、谷内2号横穴(23)や多田西ヶ峰横穴(11)などの横穴墓群が谷平野に面した丘陵斜面に確認されている。集落では指江B遺跡(4)が古墳時代中～後期の拠点的な集落と目され、能瀬南B遺跡(28)などが調査されている。また近年では、古墳時代後期～終末期の須恵器窯跡が確認される。加茂窯跡群(2)や多田ツルガタン窯跡(9)、金沢市観法寺窯跡(～8世紀前半、瓦陶兼業窯に姿を変えるか)など、津幡～小坂丘陵の低丘陵斜面地にこれまで不明瞭であった7世紀代の須恵器窯が見つかっており、短期操業のワンダリング的な窯場の移動現象を見て取ることができる。

奈良・平安時代には、7世紀末～8世紀前半代(田嶋編年Ⅲ期前後)に河北潟周辺の丘陵裾部へ進出する動きを見ることができる。古墳時代の拠点的な集落が古代遺跡へと移行するというよりは、律令政府とその地方支配の進展に伴い、古代北陸道沿いに官衙的性格の強い遺跡が点在する状況と理解できよう。このような動態は、金沢市の犀川以東に広がる金沢西部遺跡群にも見ることができ、金沢平野および河北潟周縁地域は古代律令制度の開発に伴い形成されてきた地域と言えよう。さて古代北陸道はかねてより津幡・森本丘陵の西裾を直線的に走ると想定されてきたが、金沢市観法寺遺跡で検出された直線道路によりほぼ駅路として確かなものとなった。さらに北陸道は、深見駅付近で本道(→坂本駅)と能登国支路(→横山駅)へ分岐し、加茂遺跡で検出された直線道路は能登国支路と考えられる。深見駅推定地は、現津幡側の南岸にある加賀爪地内(43付近)と、その南側の北中条・浅田地内(52北東付近)の2説あるが、北中条遺跡から「深見駅」墨書土器が出ていることや、北中条・浅田付近が標高5m以上の安定的な微高地にあることから、現時点では後者の方が蓋然性が高いように思える。8世紀前半代の端初期は加茂遺跡(1)南半部や、太田シタンダ遺跡、金沢市今町A遺跡などが上げられる。太田シタンダ遺跡は狭小な調査であったが、廂付掘立柱建物や総柱建物を含む13棟の建物が検出され、溝や柵によって区画される様相を呈している。墨書土器や鈎帯金具、円面硯などが出土し、官衙の様相を備える遺跡で、比較的短期間に廃絶するようである。8世紀中葉以降になると、か

ほく市森ガッコウ遺跡や多量の墨書土器や木簡が出土した指江B遺跡(4)、「深見駅」墨書土器を出土した北中条遺跡(52)などの遺跡が確認できる。中でも指江B遺跡は祭祀的色彩の強い遺構・遺物も確認されるなど多様な性格を持っている。これらの遺跡は9世紀代をピークに発展するが、10世紀以降に継続ないし新しく発生する遺跡はごくわずかである。これは加茂遺跡に見られる古代北陸道の廃絶(田嶋VI₂～VI₃期、9世紀末～10世紀初頭)と無関係ではあるまい。加茂遺跡でも南半部は畠地化(畝溝状遺構の展開)し、北半部は掘立柱建物域が変化する。

中世になると、英田弘済寺跡(5)等の寺院や津幡城跡(38)などの中世城郭が調査地周辺の地域で新たに造られる。しかし、集落の立地は、地形の変化や自然災害などにより多少の動きはあるものの、奈良・平安時代と大きくは変わっておらず、指江遺跡や領家指江ハシバ遺跡(17)、御門ジャモチ遺跡(13)、御門遺跡(14)などが営まれていたことが、これまでの発掘で確認されている。

第3表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	1303000	加茂遺跡	集落,寺院跡	弥生,古墳,古代,中世	30	1303400	加茂明神遺跡	散布地	古墳
2	1310200	加茂窯跡群	窯跡	古墳	31	1303500	加茂奥宮遺跡	散布地	古墳
3	1303300	加茂A遺跡	集落	弥生	32	1303600	能瀬クサヤマB遺跡	散布地	縄文,古代,中世
4	809500	指江B遺跡	集落	縄文,弥生,古墳,古代,中世	33	1303600	能瀬クサヤマA遺跡	散布地	縄文
5	809000	英田広済寺跡	寺	中世	34	1306300	加茂池遺跡	散布地	古代
6	809100	指江古墳	古墳	古墳	35	1302900	五月田遺跡	散布地	古代,中世
7	809600	指江ジュウサンザカ遺跡	集落	弥生	36	1302800	庄住吉神社遺跡	散布地	弥生
8	814900	多田ツルガタン遺跡	散布地,集落	古墳,中世	37	1311300	清水遺跡	集落	弥生,中世
9	815000	多田ツルガタン窯跡	窯跡	古墳	38	1302700	津幡城跡	城跡	中世,近世
10 17	1304100	領家指江ハシバ遺跡	散布地	古代,中世	39	1302600	津幡スワヤマ遺跡	散布地	古墳
11	809300	多田西ヶ峰横穴	横穴墓	古墳	40	1302500	津幡遺跡	散布地	古墳
12	809400	多田城跡	城跡	安土桃山	41	1302400	太白台古墳群	古墳	古墳
13	1304800	御門ジャモチ遺跡	散布地	古代,中世	42	1305300	倉見ドウノワキ遺跡	散布地	縄文,古墳,中世
14	1304900	御門遺跡	散布地	古代,中世	43	1300600	加賀爪遺跡	散布地	古墳
15	1305000	御門A古墳群	古墳	古墳	44	1311200	杉瀬ニシウラ遺跡	集落	古代,中世
16	1305100	御門B古墳群	古墳	古墳	45	1311900	加賀爪B遺跡	集落	弥生,古代,中世
18	1304000	領家遺跡	散布地	古代,中世	46	1311100	杉瀬八幡神社遺跡	散布地	弥生
19	1304300	能瀬イシヤマ遺跡	散布地	縄文	47	1302300	猪塚	その他	近世
20	1304400	能瀬石山古墳	古墳	古墳	48	1311600	杉瀬五月天窪の山遺跡	集落	弥生,古墳
21	1304600	谷内石山遺跡	集落	縄文,弥生,古代	49	1302200	東荒屋カンジャワラ遺跡	散布地	古代
22	1304500	谷内石山古墳群	古墳	古墳	50	1300500	浅田古墳群	古墳	古墳
23	1304702	谷内2号横穴	横穴墓	古墳	51	1302100	旭山ポッコリ塚	その他	その他
24	1303900	能瀬遺跡	散布地	弥生,古墳,古代	52	1304200	北中条遺跡	集落・その他	縄文,弥生,古墳,古代
25	1310300	加茂ヒヤクハチジュウワリ遺跡	集落	弥生	53	1310500	北中条タカテラ遺跡	散布地	中世
26	1303100	能瀬南遺跡	集落	古代,中世	54	1300300	南中条遺跡	散布地	縄文,古墳
27	1303800	能瀬神社遺跡	散布地	中世	55	1300400	南中条横穴	横穴墓	古墳
28	1310400	能瀬南B遺跡	その他の墓	弥生	56	1300200	太田遺跡	散布地	古墳
29	1303200	加茂ツチグラ遺跡	集落	古墳					

[引用・参考文献]

- (1)津幡町教育委員会2012『加茂遺跡 詳細分布調査(第1～21次調査区)発掘調査報告書』
- (2)三浦純夫1993「IV 河北潟と周辺の古代遺跡」『加茂遺跡—第1次・第2次調査の概要—』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
- (3)三浦純夫2015「北陸道深見駅について—河北潟東縁の調査成果から—」『同志社大学考古学シリーズXI 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』松藤和人編

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 埋蔵文化財分布調査の結果

津幡北バイパス事業地については、昭和62年(1987)年、平成元年(1989)に建設省北陸地方局金沢工事事務所(当時)の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センター(当時)が埋蔵文化財の有無・範囲把握を目的とした分布調査を実施、回答を行っている。事業地幅約80mを対象とした分布調査の方法は、水田等に利用される低地が重機による試掘(壺掘り)、丘陵地が現地踏査および人力による試掘である。その結果、JR七尾線(当時)以東の舟橋・加茂地内にある水田部のほぼ全域(東西方向約500m)に奈良・平安時代の良好な遺物包含層が存在し、一部では間層を挟んで古墳時代の遺物包含層を確認している。また、丘陵部で弥生時代の良好な遺物包含層を確認、高地性集落の存在が推定された(加茂ツチグラ遺跡)。第5図に第4～8次調査区を中心とした分布調査結果を示すが、事業地の全域で地表(水田)下10～40cmの深さに奈良・平安時代の遺物包含層(土層c・f～i:黄褐色・暗茶褐～黒色粘質土)が、また試掘坑No.11・21を結ぶライン以西で地表下70～150cmの深さに古墳時代の遺物包含層(土層d:淡黒褐色土)が分布する状況であった。

この調査結果に基づき、第4次調査以降、上下2層を前提とした発掘調査が計画された。しかしながら、調査が進捗するにつれ、舟橋川によって小谷(幅約150m)に形成された沖積地は複雑な土壌堆積を示すとともに、縄文時代中期後半以降の生活面(第10次調査で最大6層)が存在することが次第に明らかとなった。第5次調査についても、当初は間層を挟んだ上下2層を想定して着手したが、上層とほぼ同標高で下層(弥生～古墳時代)を検出、間層を挟んで新たな生活面(最下層)を確認している(第2図)。

第2節 調査の方法

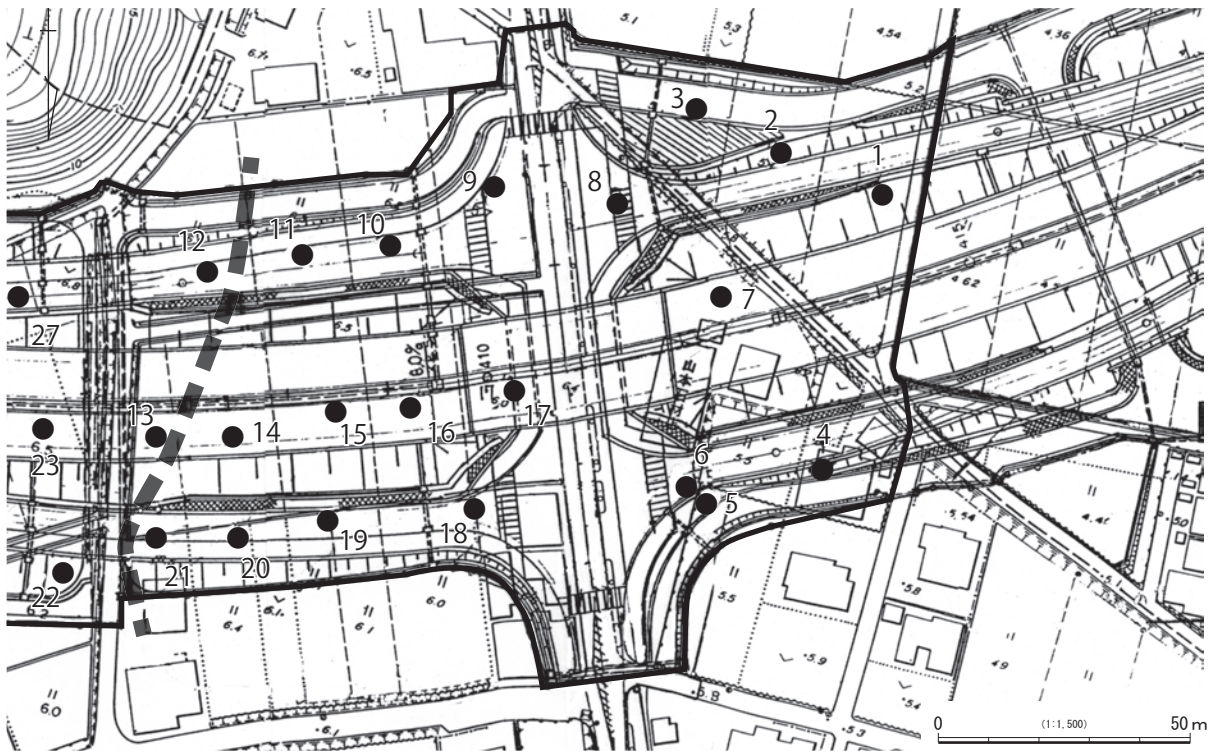
調査区区割り・調査面 発掘調査は、遺跡が損壊を受ける幅約80m、延長約480mにわたる区間で工事工程を協議しながら、西側から順次実施した。広大な調査区が道路や農道、用水路で分断されること等から、調査グリッドと各年度での調査区を併用した区割りとし、調査グリッドは第11次調査まで統一している。

まず、調査グリッドは、平成3年度(第1次調査)着手段階に調査対象範囲南西端を起点として、平面直角座標第Ⅶ系(日本測地系)を用いて全域を網羅する10m方眼単位の正方形グリッドを設定した(第6図)。そしてグリッドを画する基準杭(交点)に、南方向から北方向に向けてA～Uまでのアルファベット番号を、また西方向から東方向に向けてアラビア数字1～52を付した。その交差杭および杭南東側の10m方眼グリッドの関係は、例えば「M-19杭」「M-19区」で第4図に示した。国家座標上の位置は、A-6杭がX座標+77.750・Y座標-39.420、M-23杭がX座標+75.870・Y座標-39.070となる。調査区は、調査時も機能を維持する必要があった既存の道路や農道、農業用排水路により区切られる範囲を単位に付与しており、第5次調査では新たにA～D区を順次設定した。

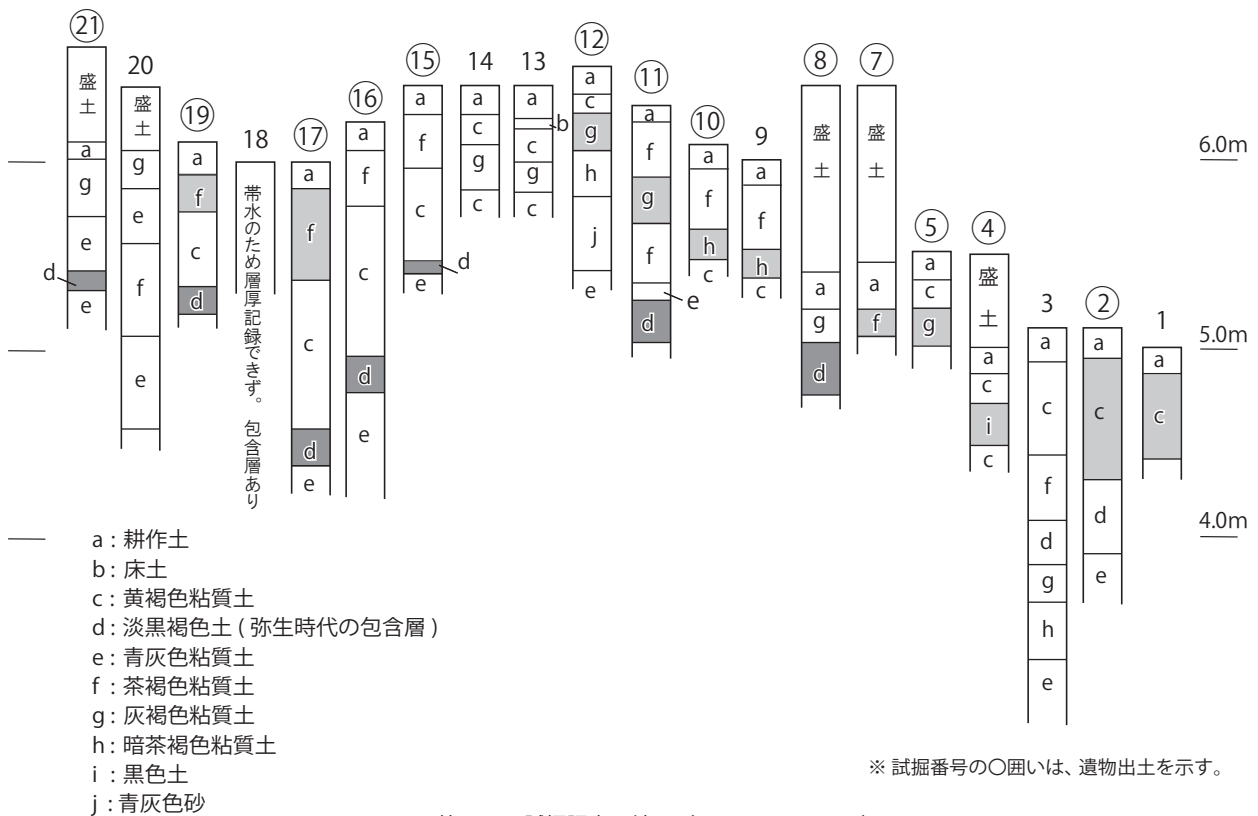
調査面については、奈良・平安時代以降の生活面を上層、A・B区で第4次調査上層とほぼ同一面で検出した新たな生活面を下層、分布調査で確認した古墳時代の遺物包含層(地表下70～150cm)の生活面を最下層とした。結果として、各調査面における遺構の記録及び出土遺物の取上げについては、例えば「5次B区上層M-19区SD5023」、「5次A区最下層G-20区包含層」のとおり、調査次・区名・層名・グリッド区名・遺構番号を組み合わせた呼称を基本としている。

調査の方法 表土、盛土及び上・下層間に流入・堆積している無遺物層については、作業の効率化を測るため

第2節 調査の方法

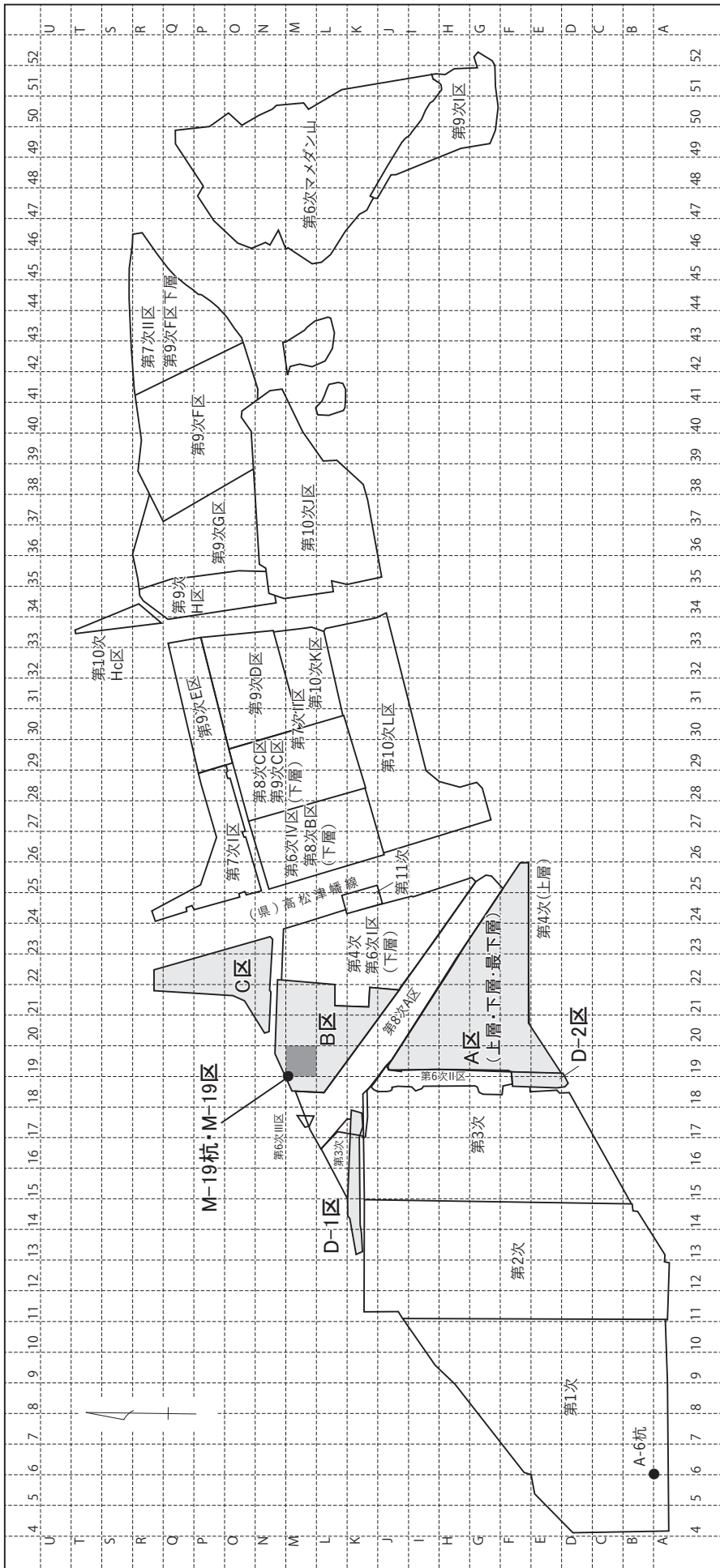


- ・ 全域に奈良・平安時代の遺物包含層が分布
- ・ 破線以西に弥生時代の遺物包含層が分布



第5図 試掘調査の結果 (S=1/1,500・1/80)

重機を用いて除去作業を実施した。その後、人力により遺物包含層の掘削作業と、遺構検出面の精査および遺構面の精査・遺構検出作業を行った。遺構番号は、各調査区で現地調査時に推定した遺構の性格を反映した略記号SK(土坑)、SD(溝)、P(ピット)等を、主に遺物が出土した遺構を対象に、各層で検出順に1番から連続する通し番号を付与している(第4表)。



0 100m
(1:2,000)

A6 グリッド
 X= 75,750 (日本測地系) 76,096.76 (世界測地系)
 Y= 39,420 (日本測地系) -39,508.51 (世界測地系)
 (測地系の変換は、国土地理院 web.TKY2.JGD ver.1.3.80 による。小数点3桁以下四捨五入)

第6図 加茂遺跡グリッド配置及び調査区割り図 (S=1/2,000)

この遺構番号は、各遺構の固有番号として、出土遺物の取り上げ、土層等の記録、遺物整理作業、出土遺物の管理に使用している。なお、B～D区は、遺構密度が高いことが予想されたため4桁の遺構番号に変更した他、報告書作成に際して調査時及び整理時の所見を踏まえ、掘立柱建物(SB)、柵列(SA)に復元した遺構群については新たに3桁の番号を付した(各柱穴番号は現地調査時の遺構番号のまま記載)。検出した各遺構は、各区・各層で遺構概略図(縮尺1/100)を作成し、位置や遺構番号、遺構覆土などに関する所見を記録しながら、その主軸を基準に半裁または土層観察用の畔を残して作業員による人力での掘り下げ作業を行った。その後、各遺構について土層を観察のうえ、必要に応じて断面・立面図の作成と写真撮影(主に35mmカラーネガ、カラーリバーサル、白黒の各フィルム)で記録作業を実施した。遺構図面は縮尺1/20を基本とし、遺物の出土状況等の微細な表現が必要な場合は縮尺1/10の図化作業で行った。また、各調査層の遺構完掘後、遺構平面図(縮尺1/20)を効率的に作成するため、ラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量図化作業をセントラル航業(株)に委託し実施している。

本書の記載は、建物跡(SB・SI)、柵列(SA)、土坑(SK)については、基本的に平面図および断面図を組み合わせるものとし、単独の小穴(P)、溝(SD)等の平面図は遺構全体の分割図(縮尺1/100)および必要に応じて断面図を用いて説明を加える。また、遺物が多出した遺構については出土状況図を示した。

第3節 基本層序

本遺跡は、小さな谷部(幅約150m)に舟橋川によって形成された沖積地に立地する。第5次調査区の標高は、調査着手前の水田面が4.5～5.5m、上層検出面が4.2～5.0m、下層検出面が4.3～4.5mをそれぞれ測り、東から西方向および北から南方向に向けて緩やかに標高を減ずる。調査区の基本層序は、上位層から耕作土、上層遺物包含層、上層ベース土(無遺物層)、下層遺物包含層、下層ベース土となり、A区では最下層ベース土が加わる(第7図)。なお、より複雑な堆積状況を示すA・C区については、各章で詳述している。

耕作土・床土 調査着手前までの耕作土・床土で、B区南壁土層3、D-1区北壁土層2が該当する。

上層遺物包含層 A区は欠落(第3・4次調査済)、B区南壁土層4・18、D-1区北壁土層3が該当し、炭粒やベース土粒が混ざる濁褐灰～暗灰褐色粘質土・粘質シルトを基調とする。耕作等で上面は攪拌・削平を受けており、比較的良好に残るB区で厚さ10～25cmを測る。B・C区で奈良時代以降の遺物が多数出土した。

上層ベース土 A区南壁土層2～4、B区南壁土層14、D-1区北壁土層7が該当し、埋没谷奥部から流出・堆積した淡灰黄～にぶい黄褐・黄橙色を呈する粘質土を基調とする。層厚は、A区南壁が15～40cm、B区南壁が10～30cmを測り、第7章で述べるとおり、A区北壁では下層検出面ともなる。

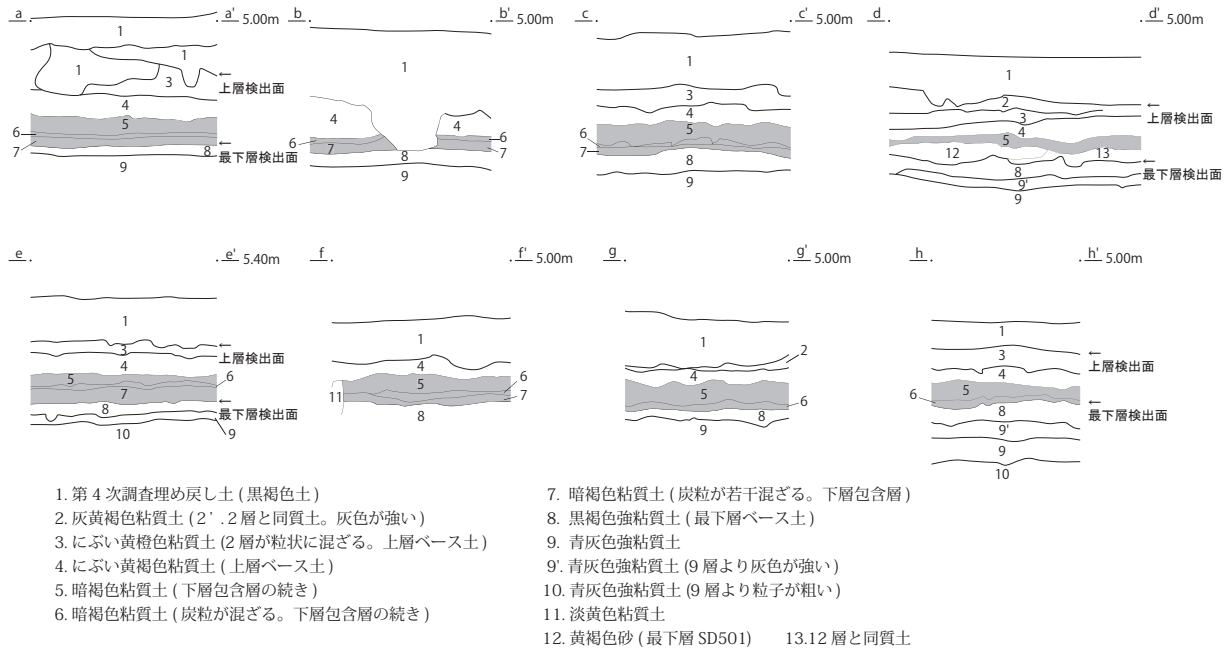
下層・最下層遺物包含層 A区南壁土層5～7(暗褐色粘質土)、B区南壁土層29(濁明黄褐色粘質土と灰褐色粘質土の混合土)が該当する。標高の低いA区南壁は、層厚20～45cmと安定的な堆積をみせるものの、遺物の出土は極めて少ない。一方、B区南壁では削平を受けた箇所も存在する。また、A区南壁土層12・13(黄褐色砂)は、短期間に流れ込んだ土層であり、うち土層12が最下層SD501の被覆土となる。

下層・最下層ベース土 A区南壁土層8～10、B区南壁土層15～17・30が該当する。上位層から淡灰黄色粘質土、黒灰～黒褐色強粘質土、淡青灰～灰黄色強粘質土が、ほぼ水平に堆積する。B区南壁土層16(黒灰色強粘質土)、A区南壁土層9(青灰色強粘質土)には、流れ込みと考えられる縄文時代後期末の土器片が混ざる。

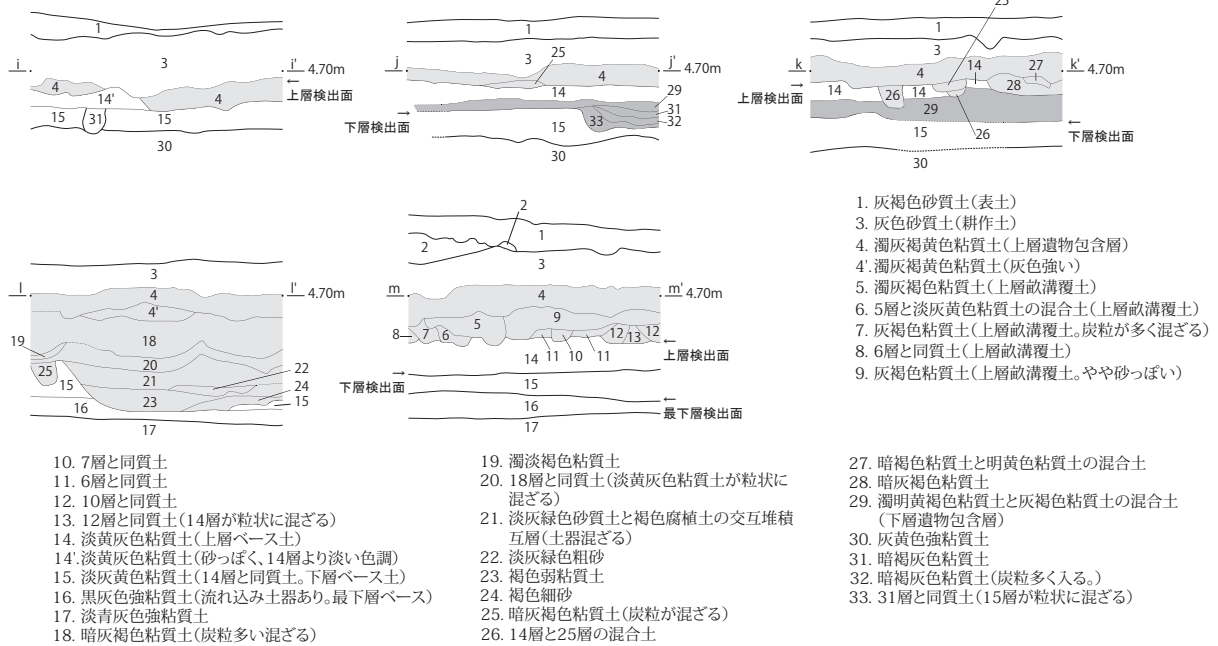
第4表 5次調査の遺構番号一覧表

区	層	遺構番号1 (現地調査付与)	遺構番号2 (整理段階付与)
A区	上層	501～	SI501～
	下層		SI551～、SB551
	最下層	501～	—
B・C区	上層	5001～	SB501～
	下層・最下層	5501～	SB552
D区	上層	5401～	—

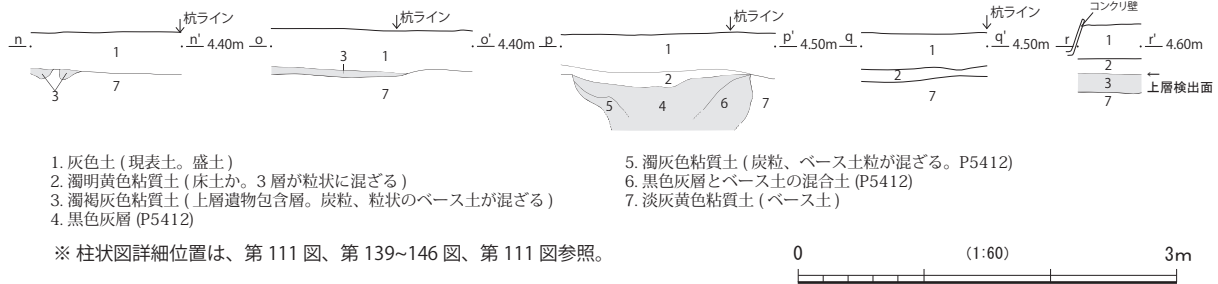
A 区南壁 (北から)



B 区南壁 (北から)



D-1 区北壁 (南から)



第7図 A・B・D 区の土層層序 (S = 1/60)

第4章 B・C区上層の遺構と遺物

第1節 調査の概要

B・C区は、西側で第3次調査区、東側で第4・6次調査区に接し、東西方向に流れる農業用水(未掘)を挟んで、南側をB区、北側をC区と呼称した。上層の調査対象面積は、約1,600㎡を測り、調査杭グリッドでいえば、B区がJ-21区、K-19～21区、L・M-18～22区に、C区がN-20～23区、O・P-21～23区、Q・R-21・22区にあたる(第6図)。遺構検出面の標高は、C区北端(O-22杭脇)が4.9m弱、B区北西端(M-21区)及び南西端(M-18区)が4.4m強、南東端(J-21区)が4.7m強をそれぞれ測り、東から西方向、北から南方向に向けて緩やかに標高を減ずる。耕作土直下で検出した遺物包含層は炭粒が混ざる濁褐灰～濁褐灰黄色や暗灰褐色を呈する粘質土を、ベース土は淡灰黄～にぶい黄褐色を呈する粘質土を、それぞれ基調とする。

調査の結果、第1～4次調査と連続する奈良時代～平安時代前期(8世紀末～10世紀前葉主体)の集落跡、道路遺構を確認した。検出した遺構は、第1～4次調査区につながる大溝、第4次調査区と連続する道路遺構に加え、掘立柱建物11棟(SB201～511)、柱列3列(SA501～503)、竪穴建物1棟(C区SI5001)、井戸1基(B区SK5016)、土坑21基、基幹的な溝1条(B区SD5061)、河跡(C区SD5001)、耕作に伴う小溝群約150条、柱穴を含むピット多数の他、下層遺構に属する溝(C区SD5004、SD5006等)がある(第8～10図)。遺構の分布状況からは、B区南側を北東方向から南西方向に流下する大溝を軸に展開する耕作に伴う小溝群と小規模な掘立柱建物群3単位、B・C区を南東～北東方向に延びる道路遺構、また、C区道路遺構北西側に分布する小型竪穴建物(SI5001)、総柱構造の大型掘立柱建物(SB510)各1棟、そしてC区北端で検出した平安時代前期以降の河跡(SD5001)に分けられる。このうち、大型掘立柱建物(SB510)、竪穴建物(SI5001)は本遺跡で初めて検出した遺構となり、古代北陸道能登支路と考えられる道路遺構は比較的良好に路盤構造を残していた。また、C区北端の河跡SD5001とSB510、B区SD5061と耕作に伴う小溝群が重複する以外、建物と大溝、道路遺構等に明確な重複関係は認められず、一定の土地規制が長期間継続した可能性が高いことを示唆する。なお、21～23ラインは、下層(弥生時代中期～古墳時代前期)との間層がほとんどなく、同時に検出した下層遺構C区SD5006は本章で報告を行う。

遺物は、「大寺」「真継」「千」「正月」「茂」等の墨書土器を含む多量の須恵器、土師器、ロクロ土師器や、木簡3点、斎串3点、刀形、横櫛、挽物埴・皿、曲物、部材、柱根等の木製品、銅製腰帯1点、鉄滓の他、下層の属する遺物や少量の中世陶磁器が出土した。このうち、斎串、横櫛は須恵器大甕とともにB区井戸(SK5016)から出土し、埋め戻し時の祭祀行為に用いられたと考えられる。また、木簡はB区大溝から1点、河跡(C区SD5001(古))から2点が出土した。平川 南氏⁽¹⁾によれば、大溝出土の付札835(4号木簡)は「≤免口黒□□×」、河跡出土の習書木簡833(2号木簡)は「文書文書文書生書」と判読でき、守り札834(3号木簡)は人物画2体を描き、柱や壁等に打ち付けたとされる。

第2節 建物、柱列

1 掘立柱建物、柱列 (遺構：第19～22・24～27・29図、第6表、遺物：第23・28・42図、第11・37表)

調査区壁際の側柱建物については第8次調査成果を加味して、掘立柱建物11棟(SB501～11、B区10棟・C区1棟)、柱列3基(SA501～503)を復元した。分布状況からみれば、M-18区SD5061西側の建物群(SB501・502)、M-19・20区の建物群(SB503～507・511、SA501・502)、大溝南側の建物群(SB508・509)、C区O-22区道路遺構東側



第8図 B・C区上層平面図 (S = 1/300)

の建物(SB510)の4グループに分かれ、うちSB501とSB502、SB504とSB505、SB506とSB507、SB508とSB509は同一箇所それぞれ重複する。建物構造は、大型の総柱構造をもつSB510以外は側柱構造である。SB511以外の9棟の側柱建物の平面プランは、3または3～×2間が3棟(SB501・504・506)、3～×1間が1棟(SB502)、2×2間が1棟(SB508)、2×1間が1棟(SB509)、1×1間が3棟(SB503・505・507)に分類できる。また、床



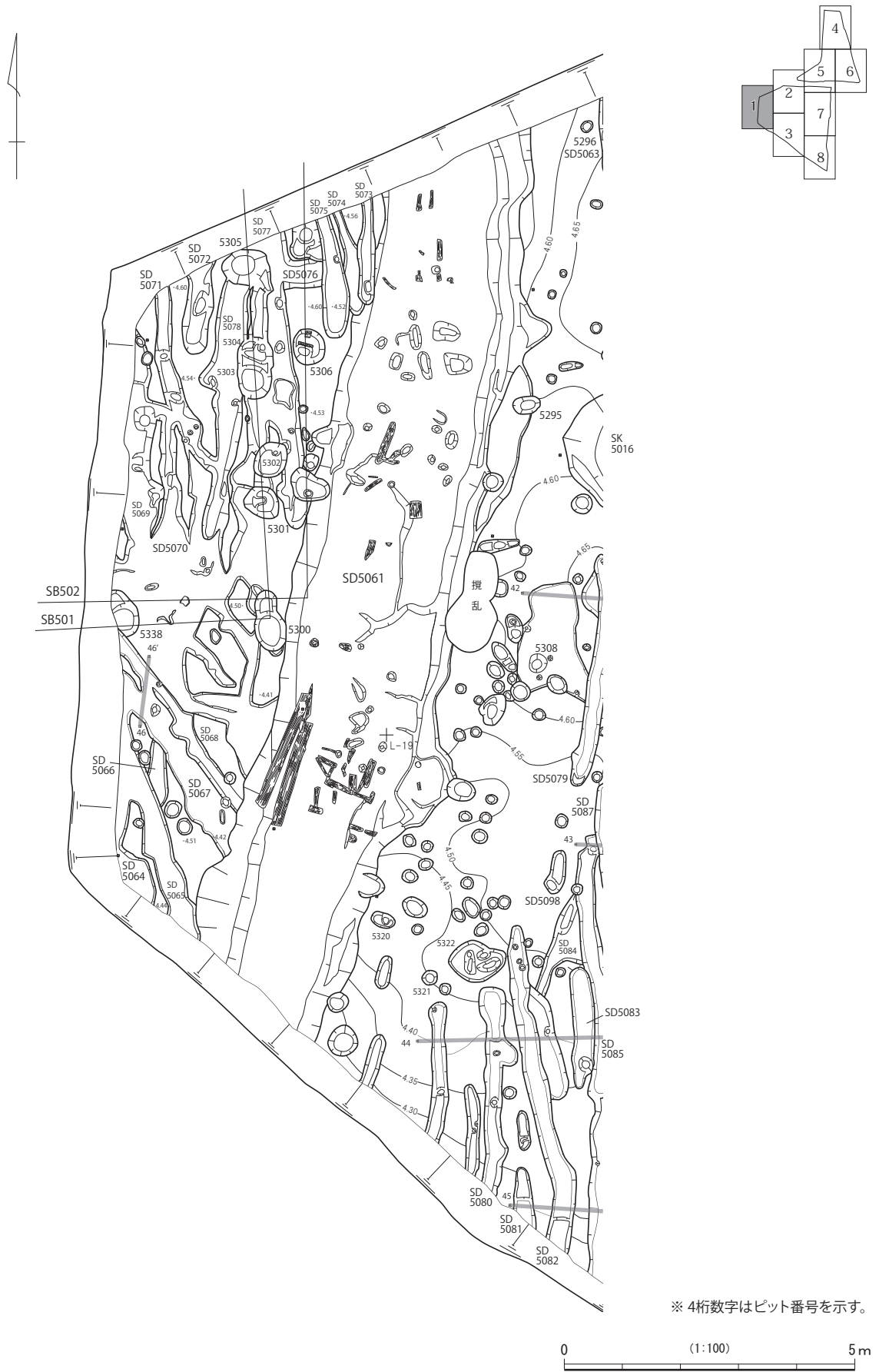
第9図 B区上層主要遺構配置図 (S=1/200)

面積からは、8～14㎡前後が4棟(SB503・505・507・509)、18㎡前後が3棟(SB504・506・508)、30㎡以上が2棟(SB501・502)となる。このような柱筋が安定しない比較的小規模な建物が点在する特徴は、第1～3次調査大溝北側の状況と近似する。総柱構造のSB510は、3×2～間(3×3間か)の柱配置をもち、柱穴、柱根の法量からも、大型倉庫の可能性が高い。

なお、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、柱穴と考えられるピットが一定数存在することから、存在した掘立柱建物数はさらに多くなる可能性をもつ。



第10図 C区上層主要遺構配置図 (S=1/200)



第 11 図 B・C 区上層平面図 1 (S = 1/100)

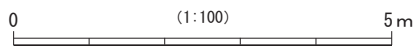


第12図 B・C区上層平面図2 (S=1/100)

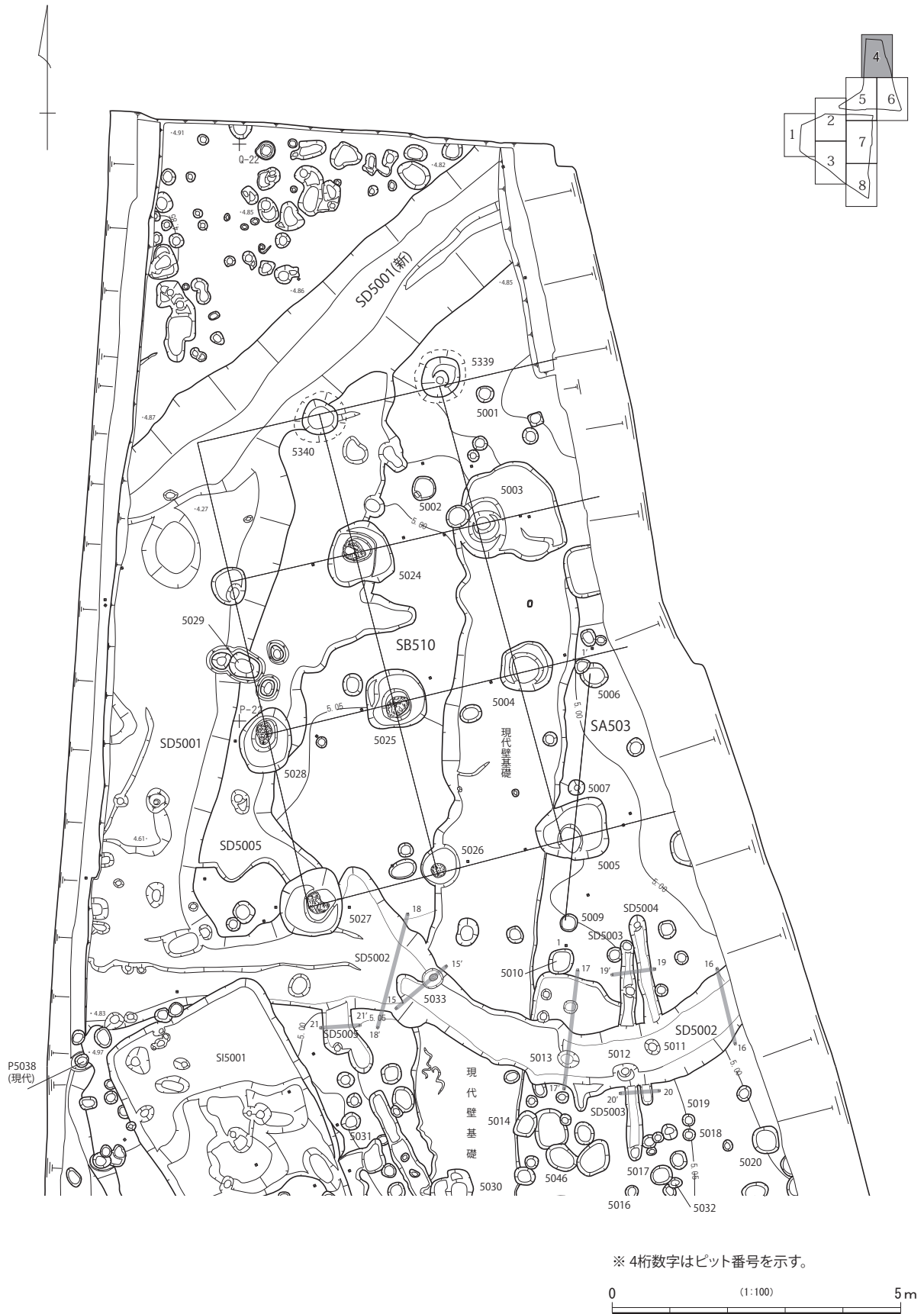
第2節 建物、柱列



※ 4桁数字はピット番号を示す。



第13図 B・C区上層平面図3 (S =1/100)



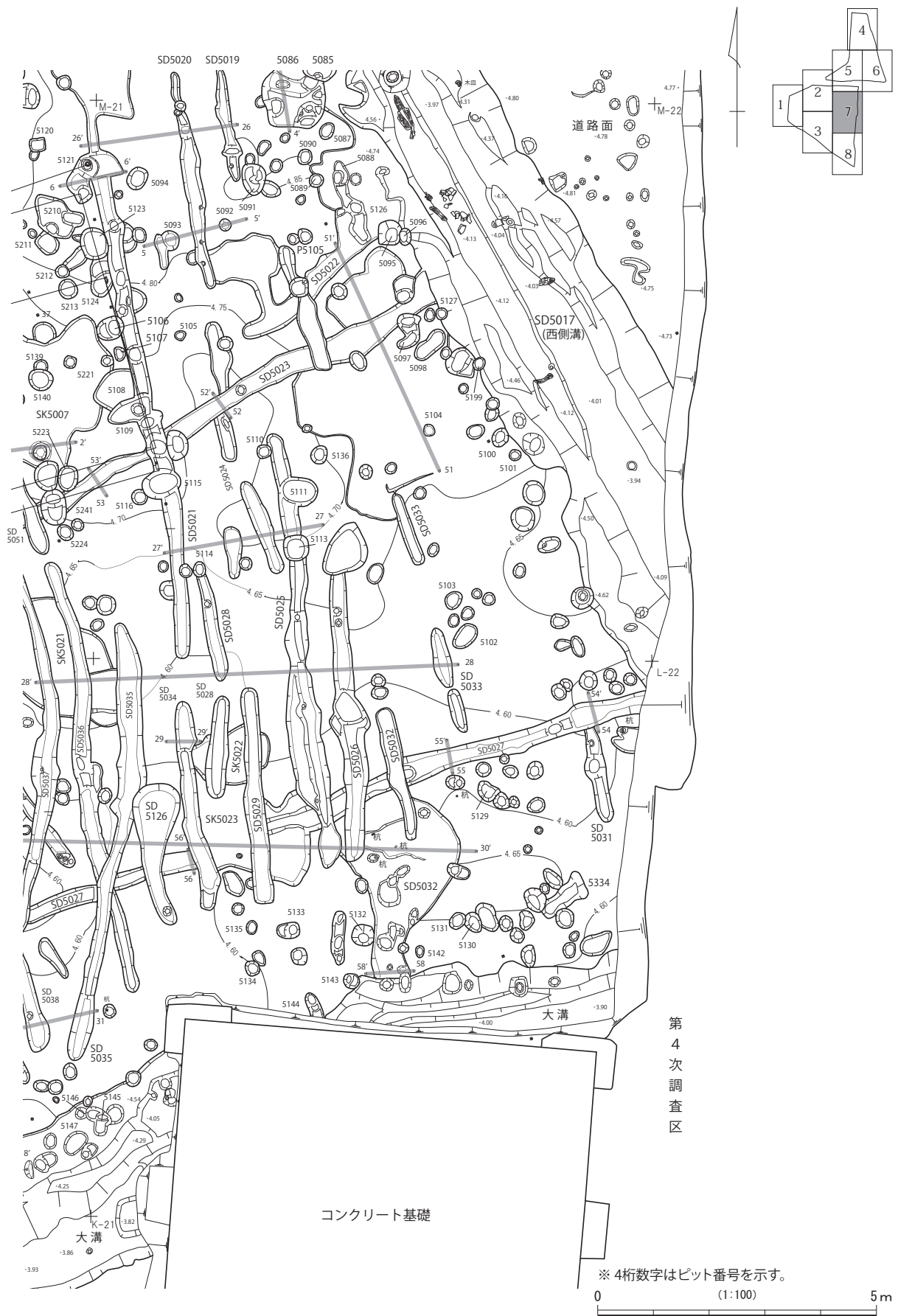
第14図 B・C区上層平面図4 (S =1/100)



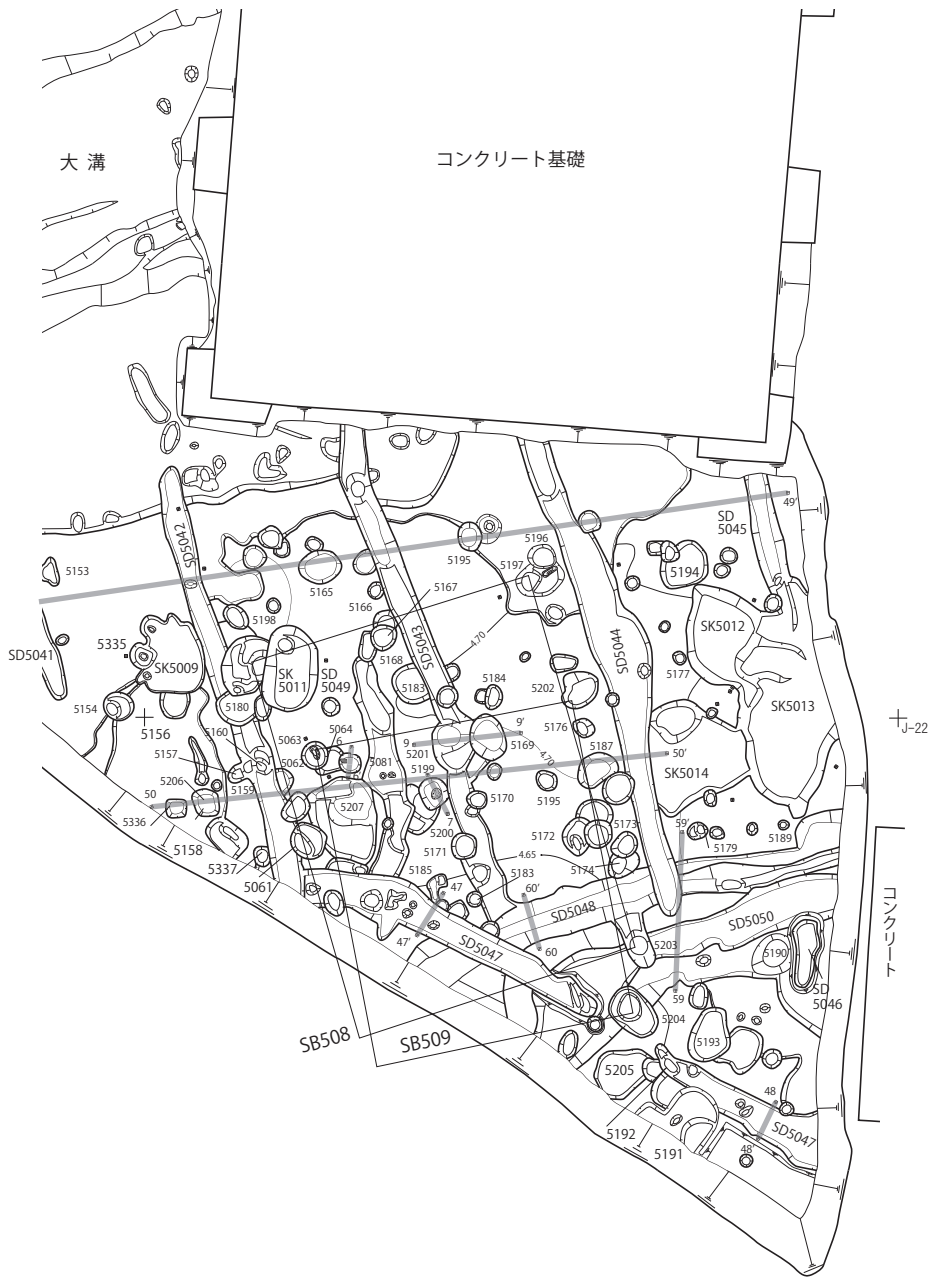
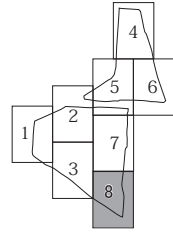
第15図 B・C区上層平面図5 (S=1/100)



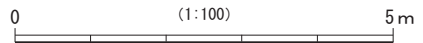
第16図 B・C区上層平面図6 (S = 1/100)



第17図 B・C区上層平面図7 (S =1/100)



※ 4桁数字はピット番号を示す。



第18図 B・C区上層平面図8 (S =1/100)

第5表 加賀・能登の土器編年と暦年代対比表

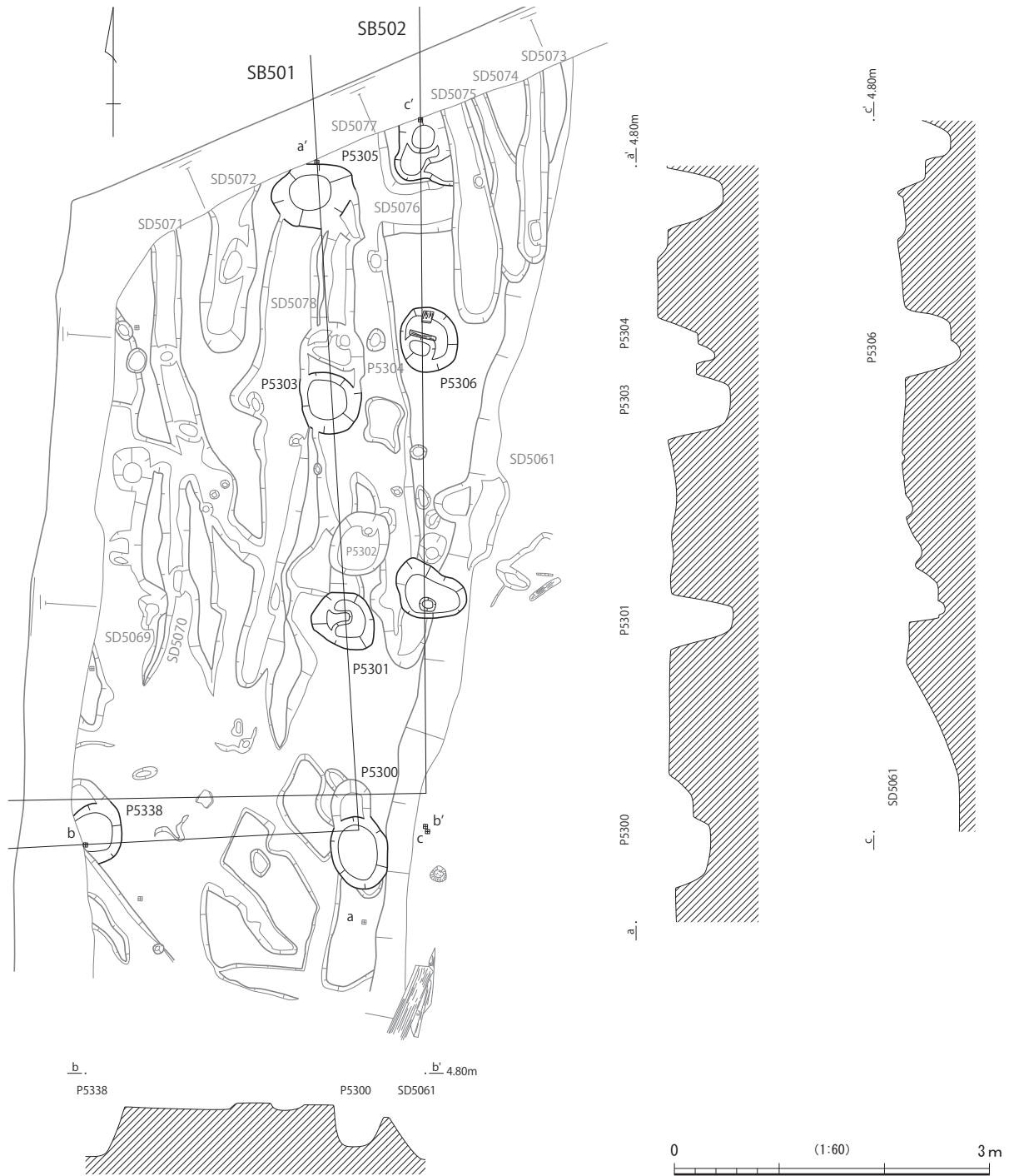
(白山市教委 2013 より作成)

時期区分	想定年代	備考	暦年代	田嶋 明人 (2012)	出越 茂和 (1997a・b)	望月 精司 (2008・10)
I 期	6世紀末～7世紀中頃	飛鳥Ⅰ・Ⅱ	750	Ⅲ期 (新)	上荒屋1期 (Ⅳ ₁ 古期)	4A期 (Ⅲ期新～Ⅳ ₁ 期(古))
Ⅱ ₁ 期	7世紀中葉後半	飛鳥Ⅲ		Ⅳ ₁ 期		4B期 (Ⅳ ₂ 期(古))
Ⅱ ₂ 期	7世紀末	飛鳥Ⅳ	800	Ⅳ ₂ 期(古)	上荒屋2期 (Ⅳ ₂ 期(古))	5A期 (Ⅳ ₂ 期(新))
Ⅱ ₃ 期	8世紀初頭	平城Ⅰ		Ⅳ ₂ 期(新)	上荒屋3期 (Ⅳ ₂ 期(新))	5B期 (Ⅴ ₁ 期)
Ⅲ期	8世紀前葉	平城Ⅱ	850	Ⅴ ₁ 期	Ⅰ-1期 (Ⅴ ₁ 期)	5C期 (Ⅴ ₂ 期)
Ⅳ ₁ 期	8世紀中頃			Ⅴ ₂ 期	Ⅰ-2・3期 (Ⅴ ₂ 期)	6A期 (Ⅵ ₁ 期)
Ⅳ ₂ (古)期	8世紀後葉	長岡京	900	Ⅵ ₁ 期	Ⅰ-3・4期 (Ⅵ ₁ 期)	6B期 (Ⅵ ₂ 期)
Ⅳ ₂ (新)期	8世紀末～9世紀初頭			Ⅵ ₂ 期	Ⅱ-1期 (Ⅵ ₂ 期)	6C期 (Ⅵ ₃ 期)
Ⅴ ₁ 期	9世紀前葉		950	Ⅵ ₃ 期	Ⅱ-2古期 (Ⅶ ₁ 期)	
Ⅴ ₂ 期	9世紀中頃			Ⅶ ₁ 期	Ⅱ-2新・3期 (Ⅶ ₂ 期(古))	7A期 (Ⅶ ₁ 期)
Ⅵ ₁ 期	9世紀後葉	K-90	1000	Ⅶ ₂ 期(古)	Ⅲ-1・2期 (Ⅶ ₂ 期(新))	7B期 (Ⅶ ₂ 期(古))
Ⅵ ₂ 期	9世紀末～10世紀初頭			Ⅶ ₂ 期(新)		7C期 (Ⅶ ₂ 期(新))
Ⅵ ₃ 期	10世紀前葉	O-53	1050	中世Ⅰ-1期	Ⅳ-1期 (中世Ⅰ-1期)	8A期 (中世Ⅰ-1期)
Ⅶ ₁ 期	10世紀中葉					8B
Ⅶ ₂ (古)期	10世紀後葉					
Ⅶ ₂ (新)期	11世紀前葉					

第6表 B・C区上層SB・SA規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱穴、または東端から西端柱穴の順に計測。

遺構名	図No.	グリッド名	建物構造	柱配置(間)	床面積(m ²)	桁行長(m)	桁行柱間寸法(m)	梁行長(m)	梁間柱間寸法(m)	主軸方位	柱穴の平面形態	柱穴の規模(cm)	柱根の有無	備考
B区 SB501	19図	M-18	側柱	3×2間	32~	6.15~	[東桁] +2.05+2.05+2.05	5.20	[南梁] 2.60+2.60	N-3°W	不整形円形	55~80	なし	8次A区に延びる。SD5068・77・78より古。Ⅳ ₂ 期の遺物出土。
B区 SB502	19図	M-18	側柱	3×1間	30.5~	6.35~	[東桁] +2.05+2.40+1.90	4.80	[南梁] 2.40+2.40	N-1°W	略円形 不整形円形	45~70	あり	P5306に柱根残欠。8次A区に延びる。SD5061・75・77より古。
B区 SB503	20図	M-19	側柱	1×1間	9.4	3.25	3.25	2.80 3.00	2.80 3.00	N-15°W	略円形 不整形円形	25~80	なし	Ⅴ ₂ 期の遺物出土。
B区 SB504	21・22図	M-20	側柱	3×2間	17.9	4.70	[西桁] 1.50+1.75+1.45	3.80	1.90+1.90	N-15°W	不整形 略円形	36~90	あり(1本)	P5241に柱根残存。SD5059・60より古。Ⅳ ₂ 期の遺物出土。
B区 SB505	21図	M-20	側柱	1×1間	8.3	3.65 3.70	3.65 3.70	2.25	2.25	N-78°E	不整形円形	20~60	あり(1本)	P5253に柱根残存。SK5008より古。Ⅴ ₁ 期の遺物出土。
B区 SB506	24図	M-20・21	側柱	3×2間	17.6	4.90	[西桁] 1.45+1.45+2.20	3.60	1.80+1.80	N-14°W	不整形円形	40~68	あり(1本)	P5124、P5228に柱根残存。SA502より新。SD5021・52より古。Ⅵ ₂ 期の遺物出土。
B区 SB507	24図	M-20・21	側柱	1×1間	11.1	3.30	3.30	3.30 3.45	3.30 3.45	N-15°W	不整形円形	30~46	なし	2×1間の可能性あり。SD5021より古。Ⅴ ₁ 期の遺物出土。
B区 SB508	25図	J-K-21	側柱	2×2間	19.0	5.00	2.60+2.40	3.80	1.90+1.90	N-17°W	不整形円形	30~80	あり(2本)	SD5050より新。SD5043より古。8次A区に延びる。Ⅵ ₂ 期の遺物出土。
B区 SB509	25図	J-K-21	側柱	2×1間	14.0	4.00	1.90+2.10	3.50	3.50	N-12°W	略円形 不整形円形	25~56	なし	SD5050より新。8次A区に延びる。Ⅴ ₁ 期の遺物出土。
C区 SB510	26・27図	P-Q-21・22	総柱	3×2~間	37.3~	8.30	2.60+2.60+3.10	4.50~	2.25+2.25+	N-12°W	略円形	60~120	あり(6本)	SD5001より古。Ⅵ ₁ 期の遺物出土。
B区 SB511	29図	L-M-19・20	側柱か	?×2間	-	-	-	3.90	1.95+1.95	N-12°W	不整形 不整形円形	25~35	なし	
B区 SA501	21図	M-20	-	2間	-	4.10	2.05+2.05	-	-	N-73°E	略円形 不整形円形	30~45	なし	SB504、SD5059より新。Ⅴ期以降の遺物出土。
B区 SA502	24図	M-20・21	-	2間	-	4.20	2.40+1.80	-	-	N-70°E	不整形円形	40~60	なし	P5216がSB506柱穴5217より古。
C区 SA903	26・29図	P-Q-22	-	2間	-	4.40	2.00+2.40	-	-	N-5°E	不整形円形	30~55	なし	



第19図 B区上層SB501・502平面図・断面図 (S=1/60)

SB501 (遺構：第19図、遺物：第23図)

M-18区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、北西側に延びる。主軸方位はN-3°Wを示し、桁行3間以上(6.15m)×梁間2間(5.20m)、床面積32㎡以上を測る。柱間寸法は、桁行が2.05m等間、梁間が2.60m等間であり、柱筋の通りはよい。柱穴の平面形態は、不整円形を主体とし、P5305が長径80cm、短径60cm、深さ54cmを、P5301が長径60cm、短径55cm、深さ49cmを測るとおり、比較的大型の柱穴をもつ。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土(淡灰黄色粘質土)、炭粒が混ざる濁灰褐色粘質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB502と重複、遺構の切り合い関係からSD5068・77・78より古く位置付けられる。遺物は、P5301出

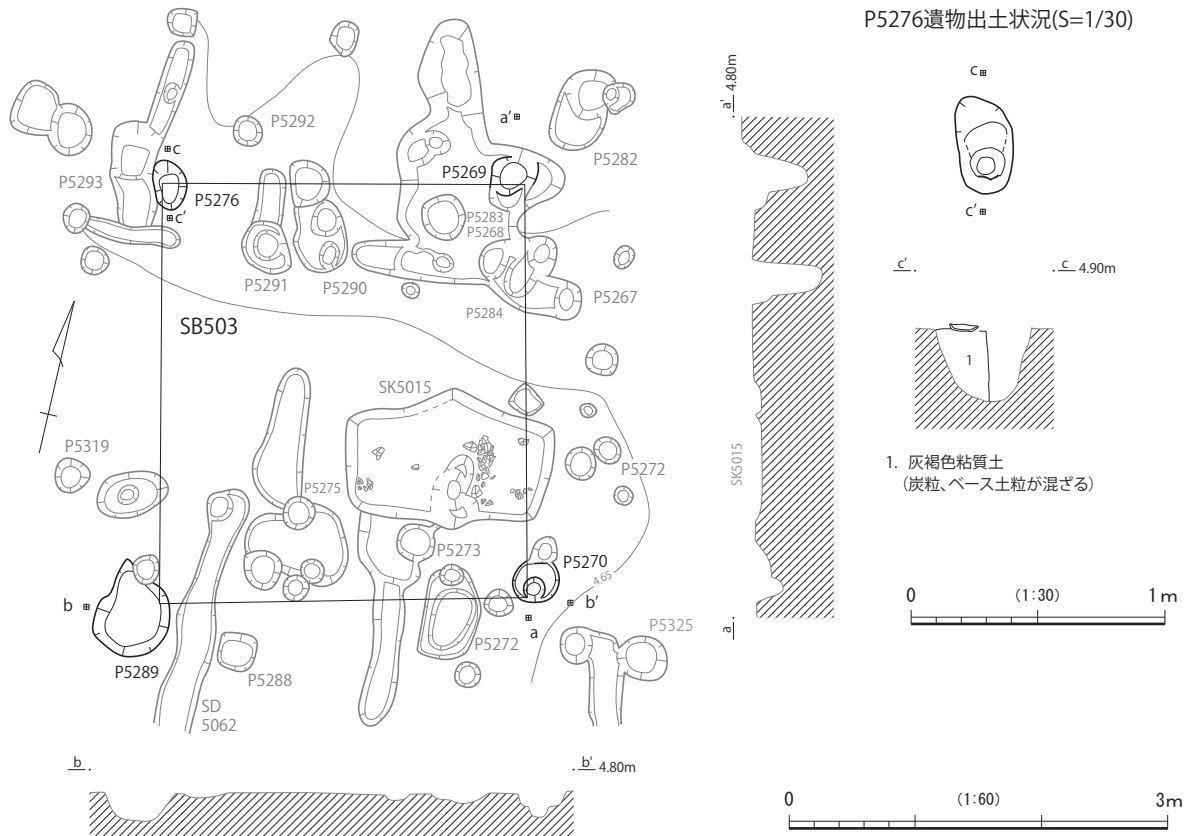
土の第23図1を図示した。器肉の厚い須恵器有台坏1は口径12.5cmを測り、北陸地方の古代土器編年IV₂期⁽²⁾に位置付けられる。また、P5300・03から須恵器、土師器、ロクロ土師器小片が、P5301・38から摩滅した土師器、ロクロ土師器小片が、それぞれ出土した。

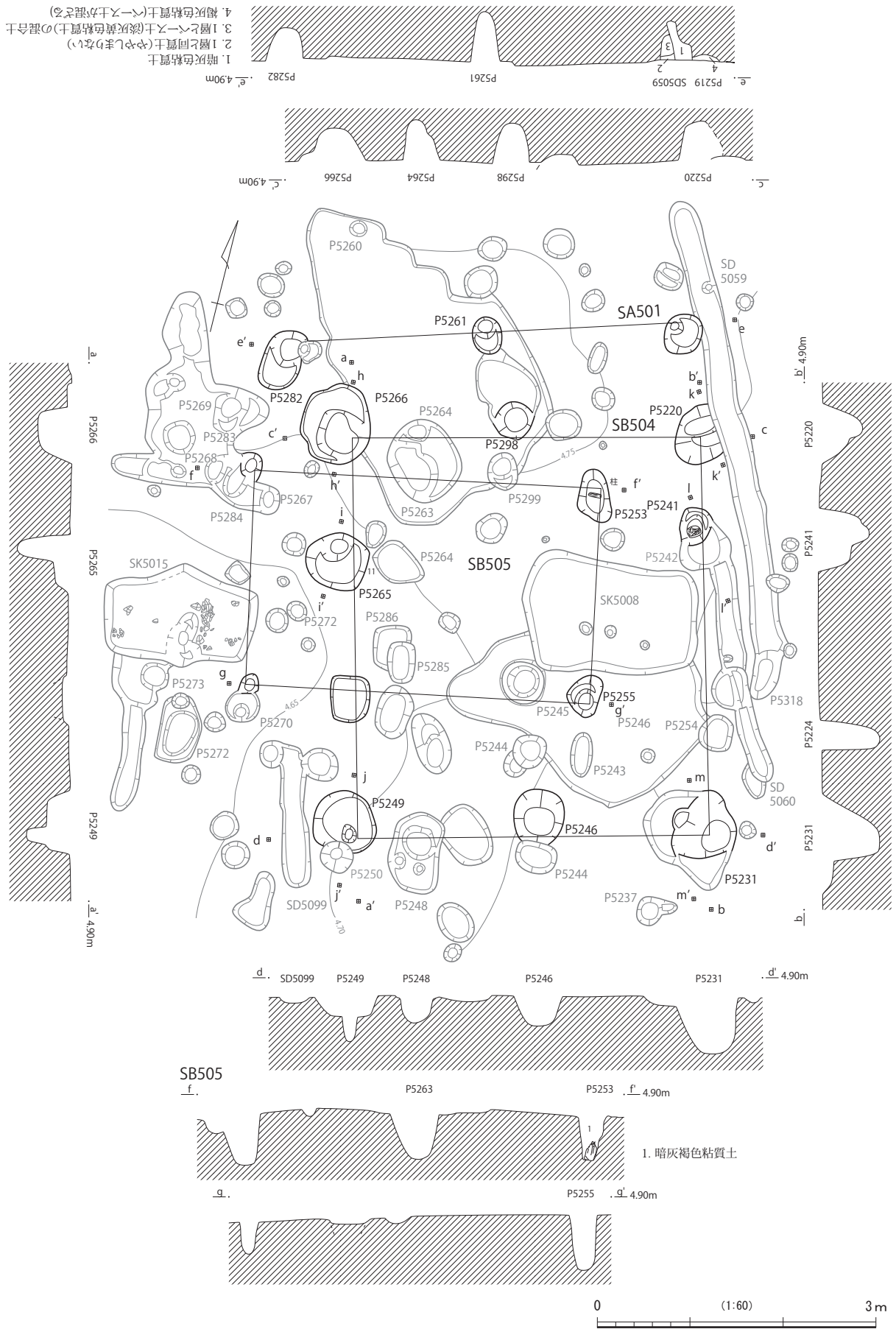
SB502 (遺構：第19図)

M-18区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、北西側に延びる。建物敷地はSB501と重複するが、新旧関係は判然としない。主軸方位はN-1°Wを示し、桁行3間以上(6.35m~)×梁間2間(4.80m)、床面積30.5㎡以上を測る。桁行柱間寸法は1.90m~2.40mと不均等で、梁間には検出できなかった中間柱が存在したと考えられる。桁行の柱筋の通りはよい。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、P5306が径約60cm、深さ55cmを、P5306南側柱穴が長径70cm、短径54cm、深さ36cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土(淡灰黄色粘質土)、炭粒が混ざる濁灰褐色粘質土を基本とする。P5306南側柱穴に径約16cmの柱根痕跡が残り、遺構の切り合い関係からSD5061・75より古く位置付けられる。P5306から須恵器、土師器小片の他、柱根の一部と考えられる木片が出土した。

SB503 (遺構：第20図、遺物：第23図)

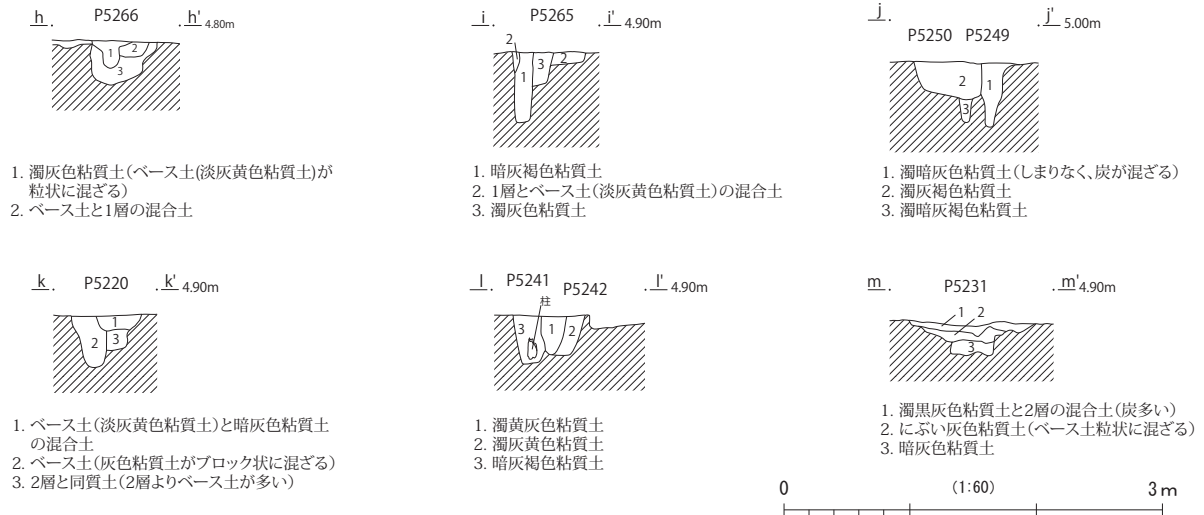
M-19区で復元した1×1間(9.4㎡)の小規模建物で、建物主軸方位はSB504と同じN-15°Wを示す。柱間寸法は、桁行が3.25m、梁間は南辺が3.00m、北辺が2.80mであり、平面プランは若干乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、P5270が径約35cm、深さ22cmを、P5289が径約60cm、深さ23cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土(淡灰黄色粘質土)、炭粒が混ざる灰褐色粘質土を基本とする。柱根は遺存せず、P5270に径約16cmの柱根痕跡が残る。建物敷地はSB504と一部重複する。遺物は、P5276柱抜き取りに正位で埋納された第23図2の須恵器無台坏を図示した。還元の弱い2は、体部が大きく外傾し、V₂期に位置付けられる。また、番号を付した各柱穴から土師器小片が出土している。



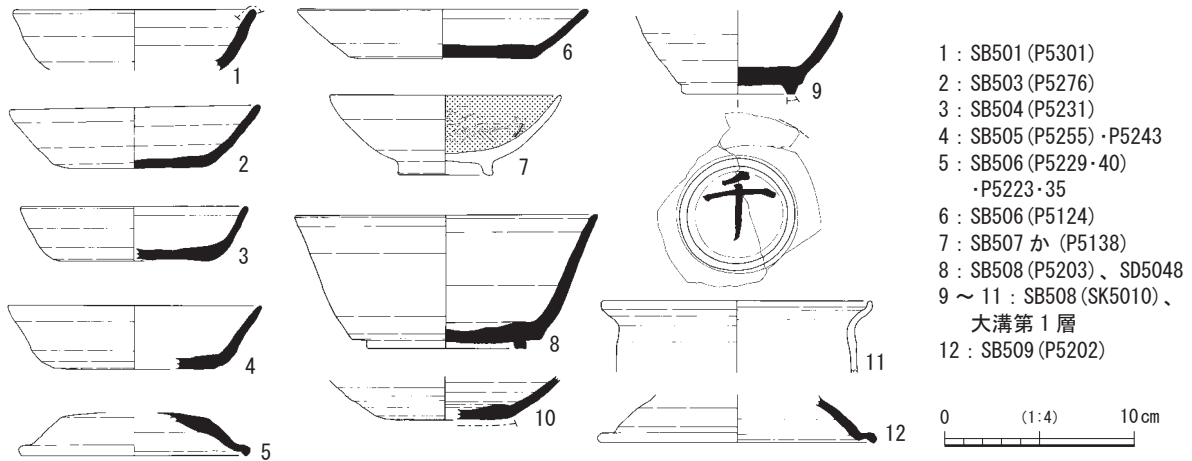


第21図 B区上層 SB504・505・SA501 平面図・土層断面図 (S=1/60)

第2節 建物、柱列



第22図 B区上層SB504土層断面図 (S=1/60)



第23図 B区上層SB出土遺物実測図 (S=1/4)

SB504 (遺構：第21・22図、遺物：第23図)

M-20区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、北側にSA501が位置する。主軸方位はN-15°Wを示し、桁行3間(4.70m)×梁間2間(3.80m)、床面積17.9m²を測る。柱間寸法は、西側桁行が1.45～1.75m、梁間が1.90m等間であり、柱筋の通りはよくない。また、桁行南側から2つ目の柱穴はうまく検出できなかった。柱穴の平面形態は不整形または略円形を呈し、P5241が長径40cm、短径36cm、深さ38cmを、P5249が径約70cm、深さ48cmを測るとおり、比較的大型の柱穴となる。柱穴覆土はベース土(淡灰黄色粘質土)が混ざる濁暗灰～灰褐色粘質土を基本とする。P5241で径約8cmの柱根が、P5249・5265で径約10cmの柱根痕跡がそれぞれ残る。建物敷地はSB503・505と重複、遺構の切り合い関係からSD5059・60より古く位置付けられる。遺物は、P5231出土の第23図3を図示した。扁平な須恵器無台坏3は口径11.8cm、器高2.9cmを測り、IV₁(古)期に位置付けられる。また、P5220・31・46・49から須恵器、土師器、ロクロ土師器小片が、P5265・66から土師器、ロクロ土師器小片が出土、P5231・46出土の須恵器無台坏片はIV₂期に位置付けられる。

SB505 (遺構：第21図、遺物：第23図)

M-20区で復元した1×1間(床面積8.3m²)の小型建物である。主軸方位はN-78°E(N-12°W)を示し、柱間寸法は、桁行が3.65m・3.70m、梁間が2.25mとなる。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P5255が長径44cm、短径36cm、深さ54cmを、南西隅柱穴が径約20cm、深さ36cmを測る。柱穴覆土は、柱根の残るP5253が暗灰褐色粘質土、他の柱穴はベース土(淡灰黄色粘質土)が混ざる濁褐色粘質土を基本とする。P5283に残る柱根は、

幅約10cm、厚さ3cmを測る。建物敷地はSB503・504と重複、遺構の切り合い関係からSK5008より古く位置付けられる。柱穴出土遺物は比較的多く、P5255出土の第23図4の須恵器無台坏を図示した。4は口径13.3cm、器高3.0cmを測り、体部が大きく外傾する。二次的な被熱により生焼けに近い軟質となり、VI₁期に位置付けられる。また、P5253・55から須恵器、土師器の小片が出土した。

SB506（遺構：第24図、遺物：第23図）

M-20・21区で検出した側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-14°Wを示し、桁行3間(4.90m)×梁間2間(3.60m)、床面積17.6㎡を測る。柱間寸法は、西側桁行が1.45m、2.20m、梁間が1.80m等間で、柱筋の通りはよくない。柱穴の平面形態は不整円形を基本とし、P5115が長径68cm、短径52cm、深さ36cmを、P5217が径50cm弱、深さ50cmをそれぞれ測る。柱穴覆土はベース土、炭粒が混ざる濁黒灰～暗褐色粘質土を基調とする。柱根はP5124、P5228で遺存し、P5228で径16cmを測る。建物敷地はSB507と重複、遺構の切り合い関係からSA502より新しく、SD5021・52より古く位置付けられる。柱穴出土遺物のうち、P5229出土の第23図5、P5124出土の6の須恵器を図示し、5の破片はP5223・35・40からも出土する。坏蓋5は口縁端部を丸く仕上げ、VI₁期に位置付けられる。生焼けの無台盤6は口径15.2cm、器高2.6cmを測り、VI₂期に位置付けられる。また、番号を付した各柱穴から須恵器、土師器片が出土、うちP5215出土の須恵器無台坏片がVI₁期、P5228出土の須恵器坏蓋・無台坏片、P5234出土の須恵器無台坏片がVI₂期となる。

SB507（遺構：第24図、遺物：第23図）

M-20・21区に位置する側柱構造の掘立柱建物で、主軸方位はN-15°Wを示す。桁行1間(3.30m)×梁間1間(3.30m、3.45m)、床面積11.1㎡の建物に復元したが、P5138、P5221北接柱穴が桁行中間柱となる可能性を残す。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、北西隅柱穴が長径46cm、短径30cm、深さ53cmを、南東隅柱穴が径約40cm、深さ41cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、濁黒灰色粘質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB506と重複、遺構の切り合い関係からSD5021より古い。

遺物は、桁行中間柱の可能性をもつP5138出土のロクロ土師器内黒有台塊7を図示した。7は、口径12.0cm、器高4.2cmを測り、体部は内湾気味にたちあがる。胎土に海绵骨針が混ざり、VI₂期に位置付けられる。また、P5138・P5229から須恵器、土師器、ロクロ土師器小片が出土、須恵器坏類はVI₁期に位置付けられる。

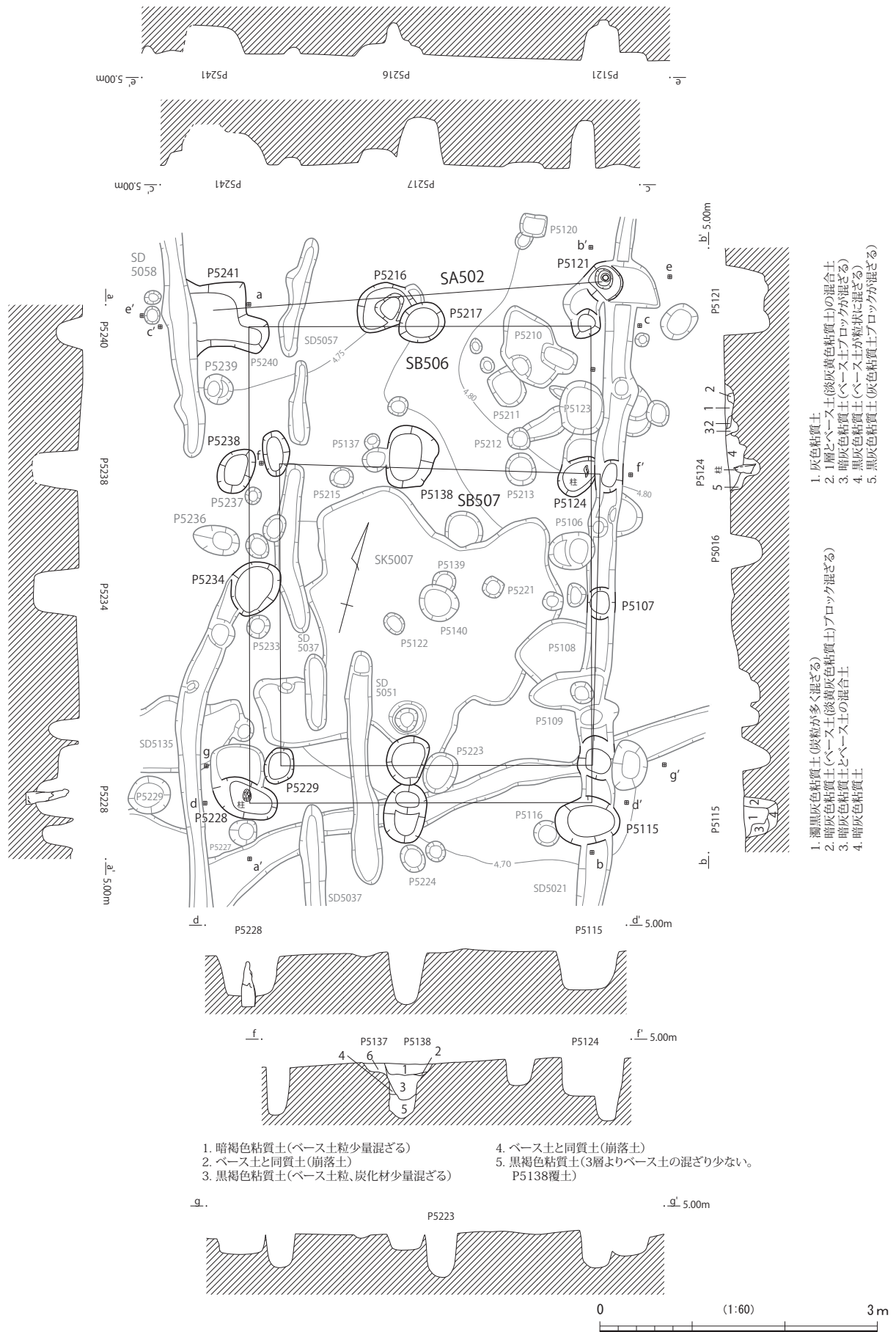
SB508（遺構：第25図、遺物：第23図）

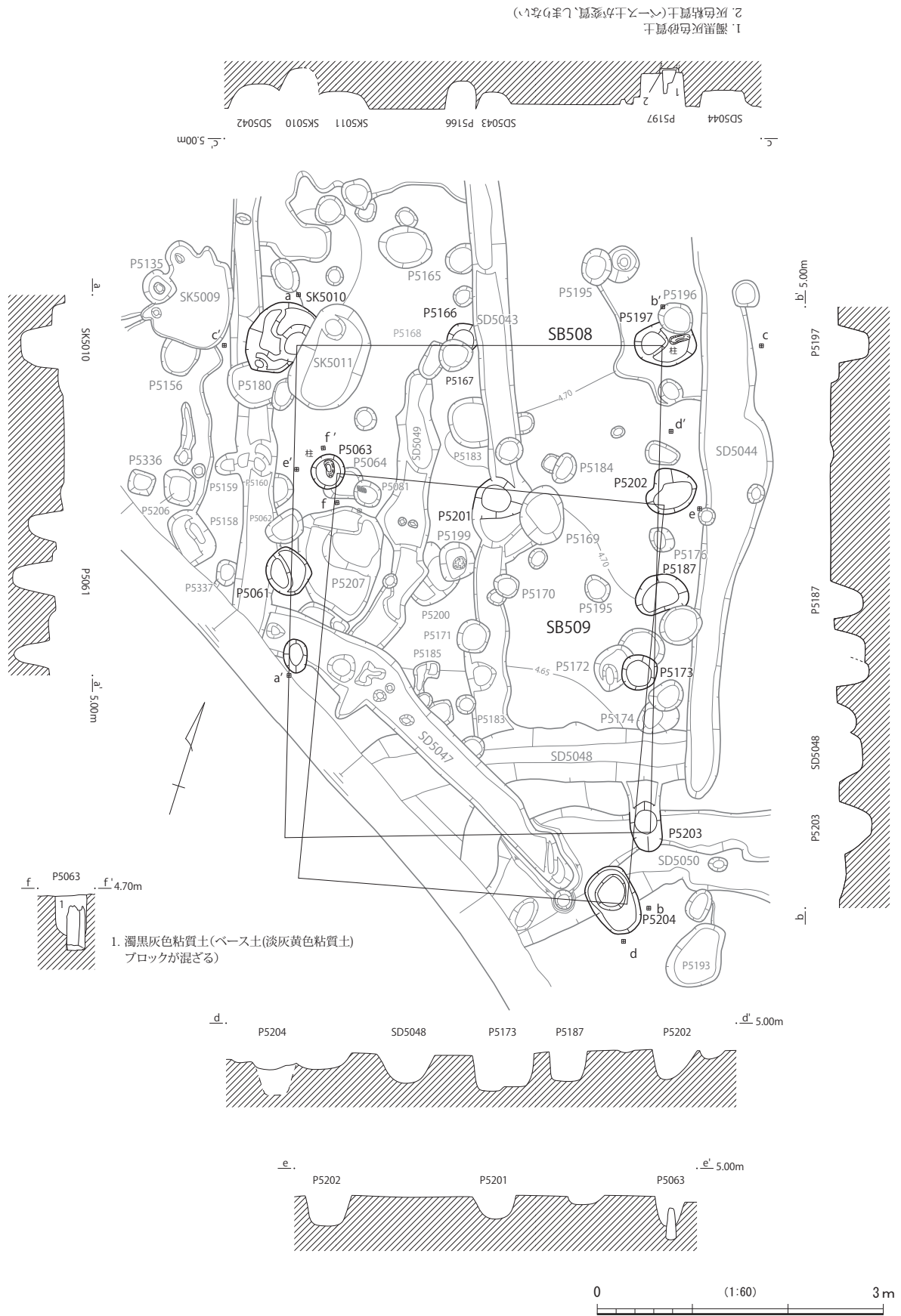
J・K-21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、第8次調査区に延びる。主軸方位はN-17°Wを示し、桁行2間以上(5.00m)×梁間2間(3.80m)、床面積19.0㎡に復元できる。柱間寸法は、桁行が2.60m、2.40m、梁間が1.90m等間であり、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、P5061が径約45cm、深さ45cmを、P5187が長径54cm、短径40cm、深さ35cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土(淡灰黄色粘質土)や炭粒が混ざる濁暗灰～灰褐色粘質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB509と重複、遺構の切り合い関係からSD5050より新しく、SD5043より古い。

遺物は、第23図8～11を図示し、うちSK5010出土の9～11の破片は大溝第1層出土片と接合する。P5203出土の須恵器有台坏8は口径15.8cm、器高7.0cmを測り、小振りな台部を内寄りに付す。有台坏9は底部外面に「千」と墨書する。無台坏10は生焼けに近い。ロクロ土師器小甕11は、煮炊痕を良好に残す。8・10はVI₁期に、9はVI₂期にそれぞれ位置付けられる。また、番号を付した各柱穴出土の須恵器等小片のうち、P5197出土の須恵器無台坏片はVI₂期に位置付けられる。

SB509（遺構：第25図、遺物：第23図）

J・K-21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、第8次調査区に延びる。主軸方位はN-12°Wを示し、桁行2間(4.00m)×梁間1間(3.50m)、床面積14.0㎡に復元できる。桁行の柱間寸法は1.90m、2.10mと、等間隔でなく、柱筋は乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、P5173が径約35cm、深さ35cm、P5202が長





第25図 B区上層SB508・509平面図・土層断面図(S=1/60)

径56cm、短径46cm、深さ32cmを測る。柱穴覆土はベース土(淡灰黄色粘質土)が混ざる濁黒灰色粘質土を基本とする。P5063に幅17cm、厚さ8cmを測る板状の柱根が遺存した。建物敷地はSB508と重複、遺構の切り合い関係からSD5050より新しく位置付けられる。遺物は、P5202出土の第23図12を図示した。須恵器坏蓋12は口径14.4cmを測り、倒位で坏身と重ね焼きしたため天井が高くなる。内外面に被熱痕を残し、VI₁期に位置付けられる。また、P5063・5173・5204から磨耗した土師器、ロクロ土師器小片が、P5202から須恵器有台坏・無台坏片が出土した。

SB510 (遺構：第26・27図、遺物：第28図)

C区のP・Q-21・22区で検出した総柱構造の大型建物で、調査区外東側に延びる。主軸方位はN-12°Wを示し、桁行3間(8.30m)×梁間2間以上(4.50m以上)、床面積37.3m²以上を測る。柱間寸法は、桁行が北側から2.60m、2.60m、3.10m、梁間が2.25m等間であり、柱筋の通りはよい。柱穴の平面形態は略円形を呈し、径60～120cmの大型掘方をもつ。P5005等の6つの柱穴に柱根が遺存し、P5028以外の柱根はベース土に深く沈み込む。覆土はベース土が混ざる濁灰褐～暗灰褐色粘質土を基調とし、P5339・40がSD5001(旧)を掘り下げた後に検出したことから、SD5001(旧)より古い。図示した第28図13～18の柱根のうち、17・18は同一個体となる。いずれの柱根も底面を平坦に加工し、最も残りのよい16で長径43.6cm、短径37.4cmを測る。樹種は13・15がスタジイ、14がクリ、16～18がケヤキと、3種類の材を用いる。また、P5003・5028・5340から下層遺物を含む摩滅した土師器小片が、P5004・05・24・25～27から須恵器、下層遺物を含む摩滅した土師器小片が出土した。うち、P5027出土の須恵器無台坏片はVI₁期に位置付けられる。

SB511 (遺構：第29図)

L・M-19・20区で検出した側柱構造と考えられる建物で、調査区外北側に延びる。主軸方位はN-12°Wを示し、南側梁間2間の柱間寸法は1.95m等間である。柱穴の平面形態は不整形を呈し、径(辺)25～35cm、深さはP5258・79が60cm前後、P5281が22cmを測る。また、P5258・79の南側1.75mに位置する2穴は同建物を構成する可能性をもつ。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土(淡灰黄色粘質土)が混ざる濁暗褐色粘質土を基調とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、各柱穴から土師器小片が出土したにとどまる。

SA501 (遺構：第21図)

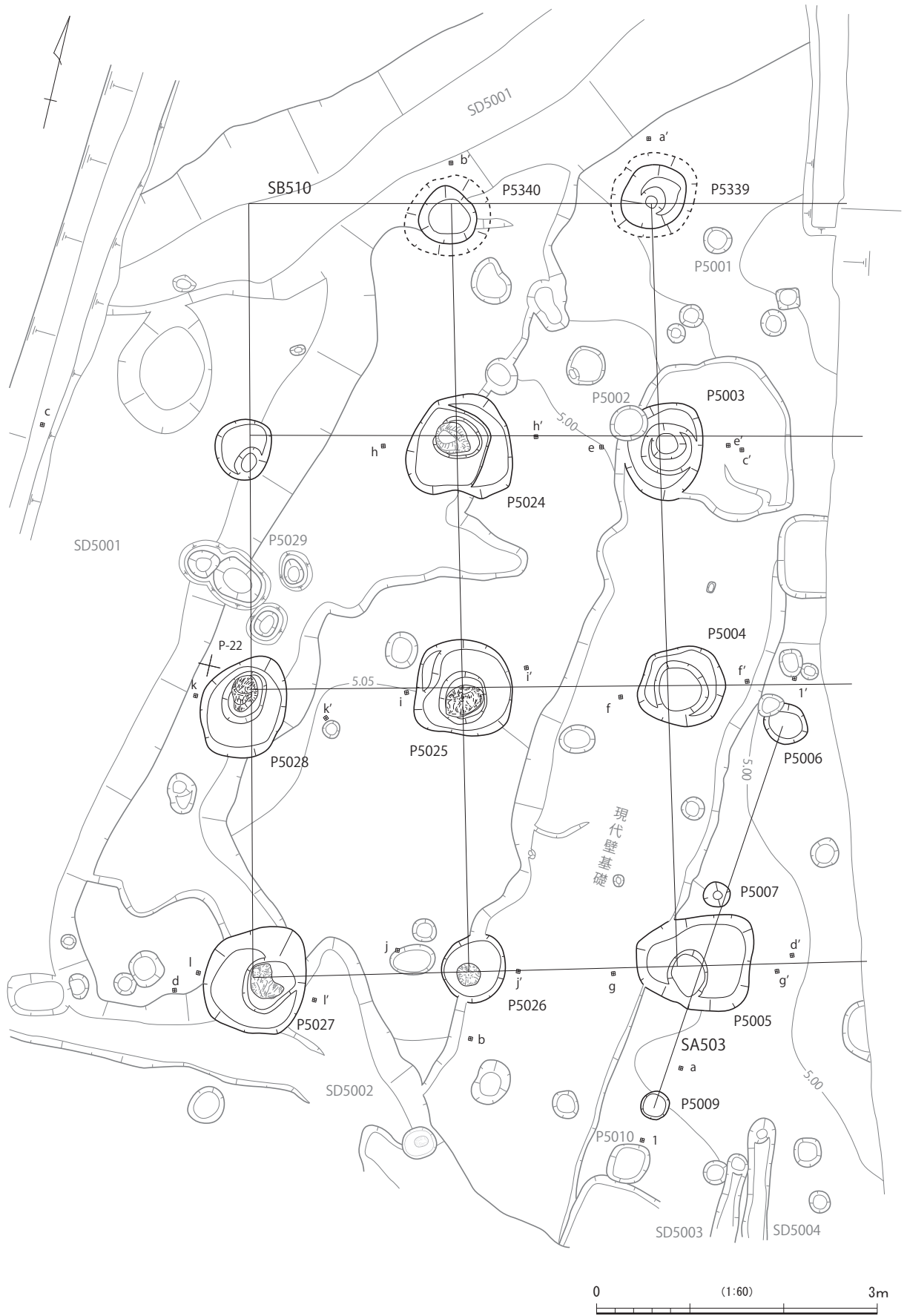
M-20区のSB504北側に位置する2間の柱列(柱間寸法2.05m等間)で、主軸方位はN-73°E(N-17°W)を示す。柱穴の平面形態は略円形または不整形を呈し、径30～45cm、深さ30～50cmを測る。覆土は濁灰～暗灰色粘質土であり、SD5059およびSB504より新しく位置付けられる。P5261から須恵器、土師器、ロクロ土師器片が出土、ロクロ土師器甕小片はV期以降の器形を呈する。

SA502 (遺構：第24図、遺物：第42図)

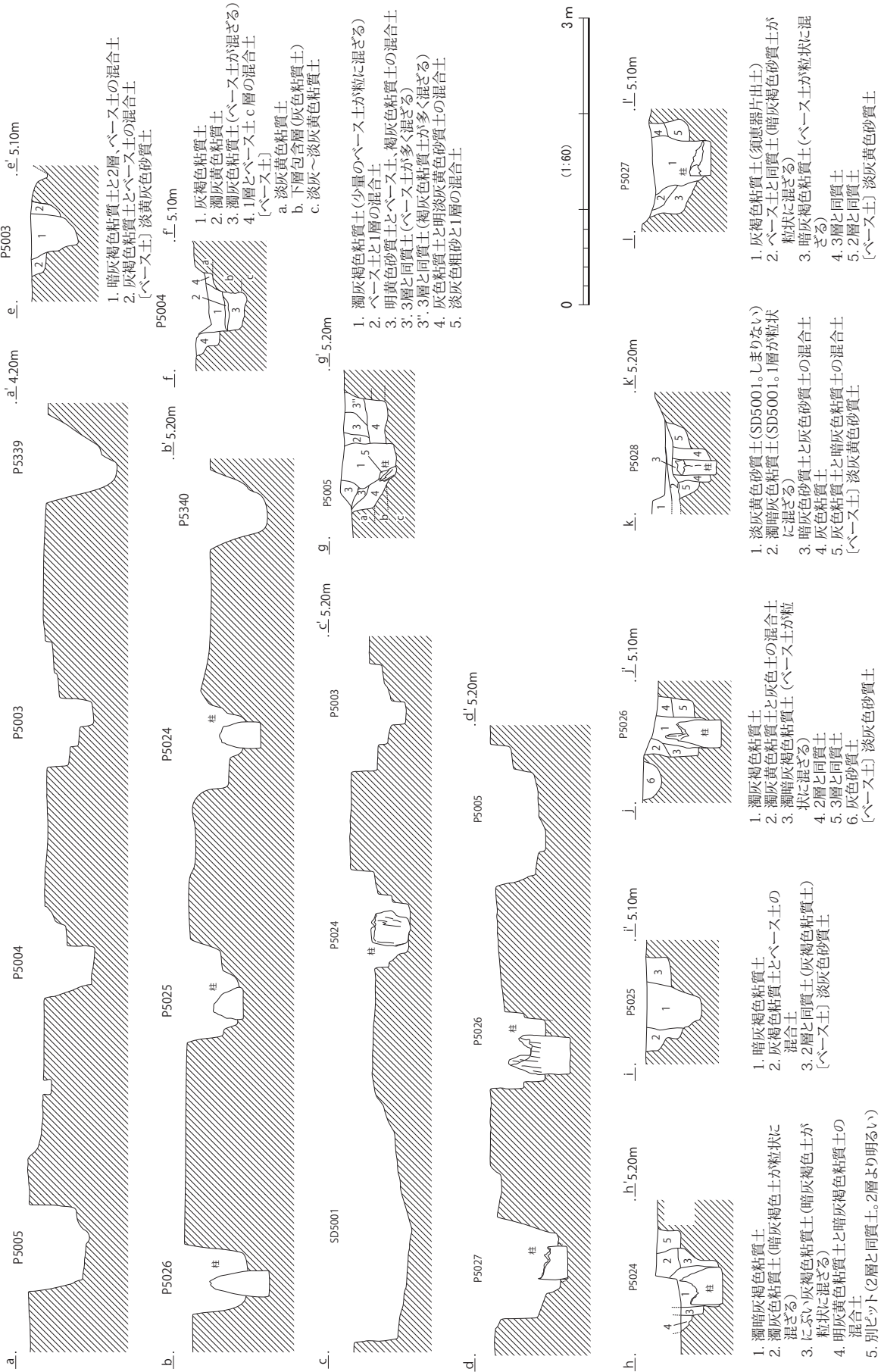
M-20・21区のSB506北側に位置する2間の柱列(柱間寸法2.40m、1.80m)で、主軸方位はN-70°E(N-20°W)を示す。柱穴の平面形態は略円形または不整形を呈し、径40～60cm、深さ30～45cmを測る。覆土はP5216が黄褐色粘質土、他が濁黒灰色粘質土であり、SB506、SD5021より古く位置付けられる。柱穴P5121から第42図118～120の須恵器壺等が出土、118・120の破片は道路遺構SD5017の破片と接合する。無蓋焼成の短頸壺118は、外面を板状工具で成形する。ロクロ土師器埴119は、口縁端部を平坦に仕上げる。無蓋焼成の短頸壺120は口径11.5cm、器高22.2cmを測り、肩部を沈線で加飾する。柱抜き取り時に埋納された可能性が高い。P5121・26から須恵器、土師器片、P5216から土師器片が出土した。

SA503 (遺構：第26・29図)

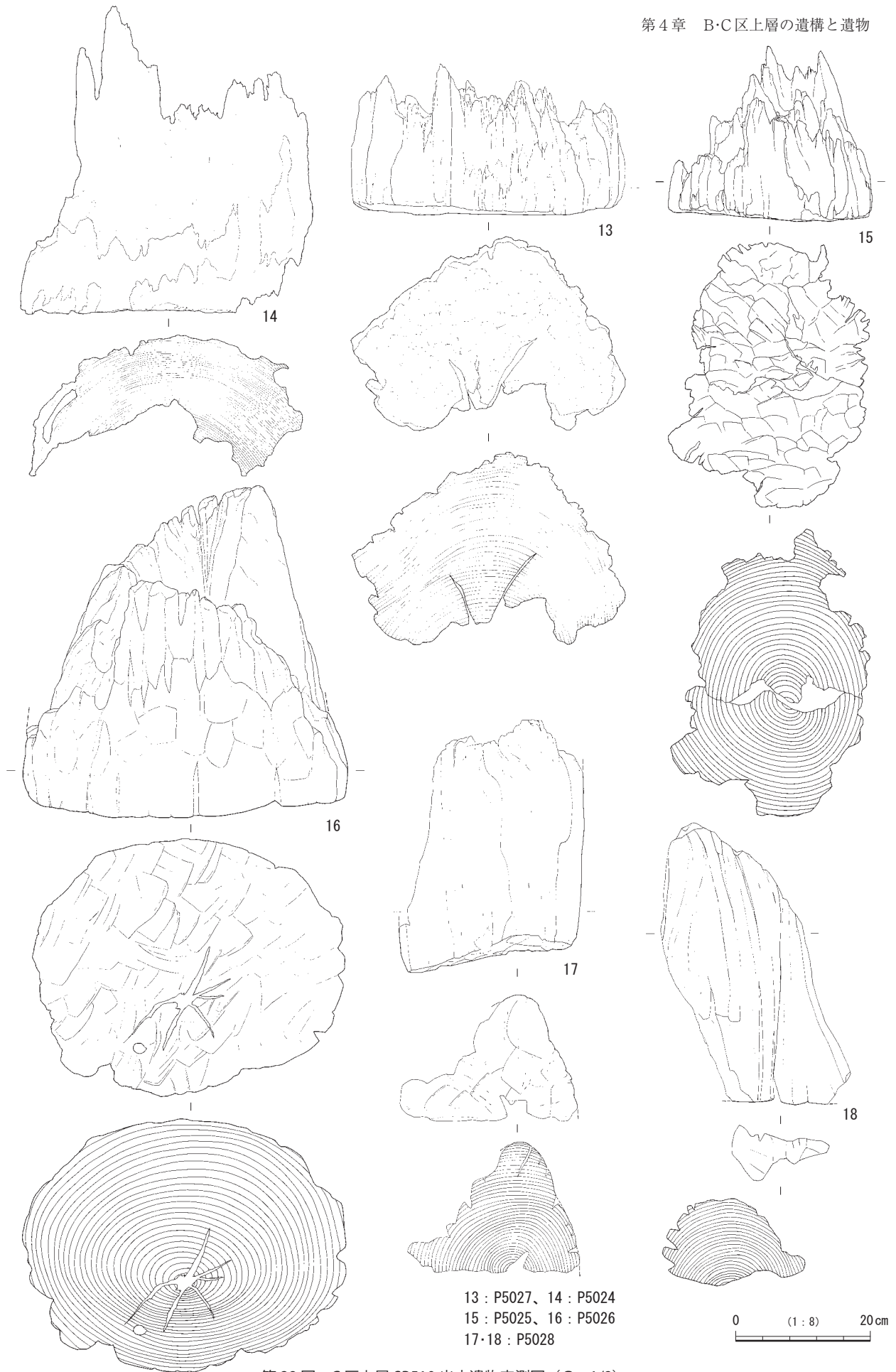
P・Q-22区のSB510と重複する2間の柱列(柱間寸法2.00m、2.40m)で、主軸方位はN-5°Eを示す。柱穴の平面形態は不整形、径30～55cm、深さ16～34cmを測る。柱穴覆土は、ベース土(淡灰黄色砂質土)が混ざる濁暗灰褐色砂質土を基調とする。各柱穴から磨耗した土師器小片が出土した。



第26図 C区上層 SB510・SA503 平面図 (S = 1/60)

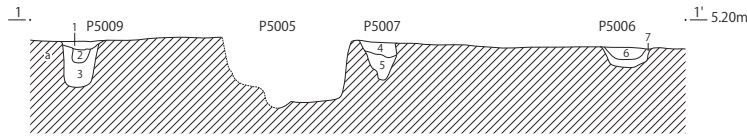


第27図 C区上層 SB510土層断面図 (S=1/60)



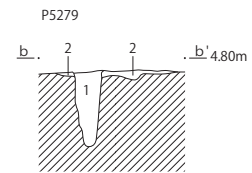
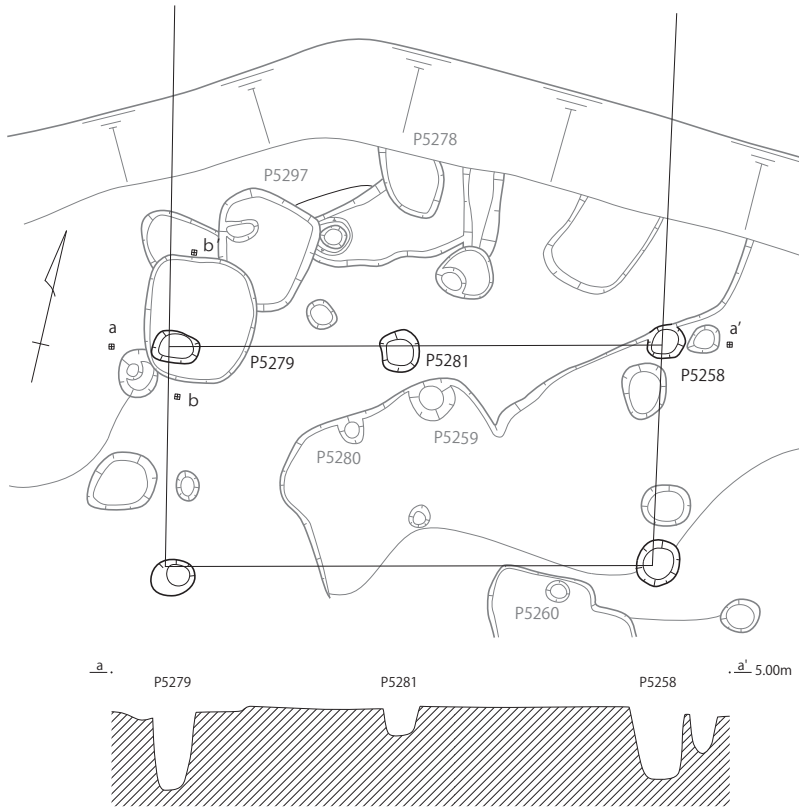
第28図 C区上層SB510出土遺物実測図 (S=1/8)

C区SA503



1. 濁暗灰褐色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
2. ベース土と暗灰褐色砂質土の混合土
3. ベース土と灰褐色砂質土の混合土
4. 濁灰褐色砂質土
5. 4層と同質土(ベース土が粒状に混ざる)
6. 濁暗灰褐色砂質土(炭粒が混ざる)
7. 灰褐色砂質土とベース土の混合土
[ベース土] 淡灰黄色砂質土

B区SB511



1. 濁暗褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土とベース土(淡灰黄色砂質土)の混合土

第29図 B区上層SB511、C区上層SA503平面図・土層断面図 (S=1/60)

2 竪穴建物 (SI5001) (遺構：第30・31図、遺物：第32図、第11表)

C区P-21・22区に位置する竪穴建物で、本遺跡で最初の検出例となる。周辺の標高は4.9～5.0mを測り、西側および南側に緩やかに傾斜する。建物は平面隅丸方形を呈し、直立気味の側壁南東隅にカマドが付く一方、竪穴部では支柱穴、中央炉、壁溝を検出できなかった。竪穴部の規模等は北西-南東方向3.35m、北東-南西方向3.20m、壁高6～23cm、床面の標高4.80～4.90m、建物主軸方位N-25°Wを測り、若干の起伏をもつ床面は南側および東側に向けて少し高くつくる。竪穴部は、平面プランに沿ってベース土を深さ20～40cm程度掘りくぼめた後、ベース土を混ぜた暗褐色粘質土(第30図7～18層)で埋め戻し、暗褐色粘質土粒混ざりの黄褐色シルト(同図6層)で床面を造成する。ベース土の掘削は竪穴部南半が深く、より丁寧な印象を受ける。床面の硬化度合は比較的弱く、カマド正面には広範な黒色灰層が認められる。また、建物廃絶後は、褐～黒色粘質土(同図1～5層)がほぼ水平に自然堆積する。

南東隅のカマドは、竪穴部床面造成後にベース土を、煙道(約110cm、幅20～60cm)を含めて掘りくぼめ、除湿のため一度焼成したようだ(第31図16層)。その後、床面とほぼ同じ高さまで濁淡灰黄色土を基調とする土(同図11～13層)、焼土粒混ざりの濁黒褐色土等(同図7'～10層)を充填し、カマド底面をつくる。黒色灰層の分布、焼土層(第31図6・7層)から、機能時のカマドの長さを180cm程度と推定するが、袖は西側の基底部(幅

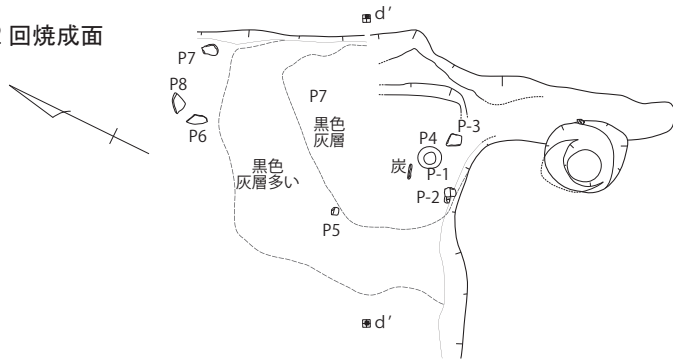


- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 褐色粘質土 2. 黒色粘質土 3. 1層と同質土(暗褐色粘質土、黄褐色粘質土が粒状に混ざる) 4. 1層と同質土(炭化材片が残る) 5. 1層と同質土(3層より暗褐色粘質土多く、少量の灰混ざる) 6. 黄褐色シルト(暗褐色粘質土が粒状に少量混ざる) 7. ベース土と同質土(汚れる) 8. 3層と同質土(ベース土が粒状に混ざる) 9. ベース土と同質土(しまりない) 10. 暗褐色粘質土(ベース土の混ざりが14層より多い) 11. 10層と同質土(10層よりベース土の混ざりが多い) | <ul style="list-style-type: none"> 12. 10層と同質土(10層より暗い。ベース土の混ざりが少ない) 13. 11層と同質土(11層よりベース土の混ざりが多い) 14. 10層と同質土(5層とベース土が粒状に混ざる) 15. 黄褐色粘質土(黒色灰層と少量の灰暗褐色粘質土が混ざる) 16. 黒色灰層(厚さ1cm弱) 17. 9層と同質土 18. 10層と同質土(黒色灰層が混ざる) <p>[ベース土] 灰黄褐色粘質土</p> |
|---|---|

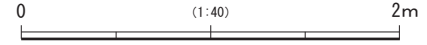
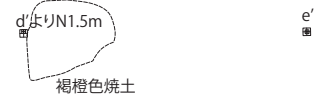
第30図 C区上層 SI5001 平面図・土層断面図1 (S=1/40)

第2節 建物、柱列

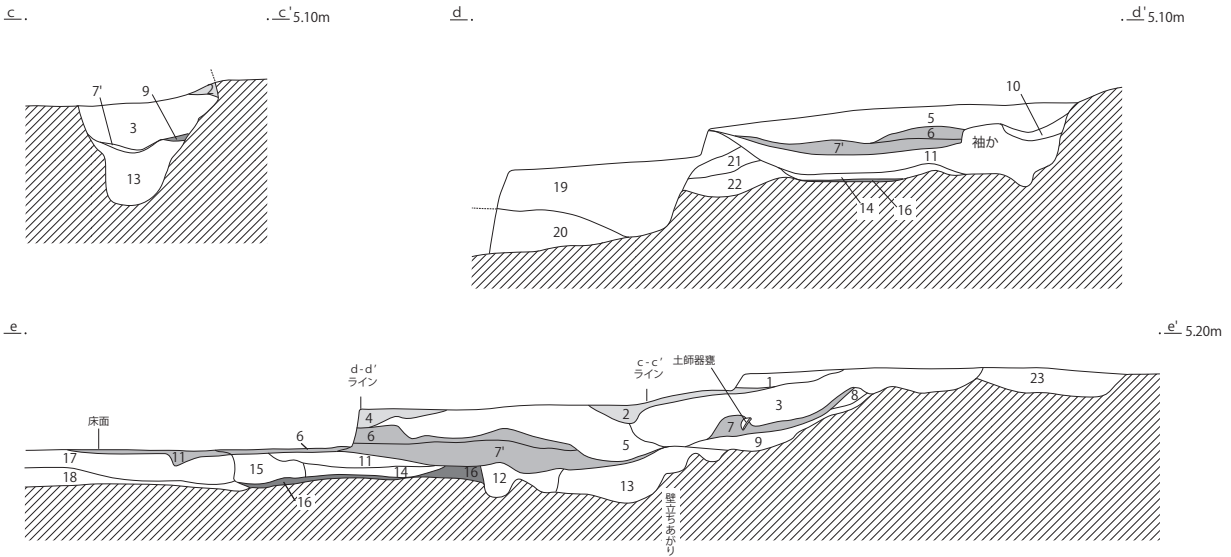
第2回焼成面



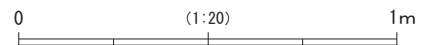
第3回焼成面



カマド断面図



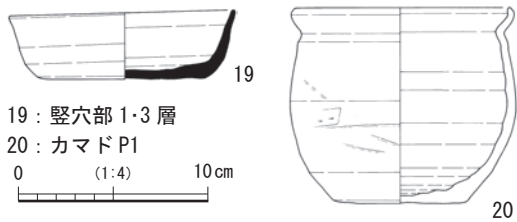
1. 灰黄色砂質土(ベース土粒・炭粒が混ざる)
2. 褐橙色焼土(第3回焼成層)
3. 濁褐色砂質土(ベース土粒・焼土粒・炭粒が混ざる。埋土か)
4. 濁灰黄色砂質土と褐色砂質土の混合土
5. 濁淡灰黄色砂質土(3層と同質土。焼土粒・炭粒が混ざる)
6. 暗褐色焼土(第2回焼成面。ベース土が粒状に混ざる)
7. 黒褐色焼土粒(1~3cm大)とベース土の混合土(第2回焼成面。焼成具合は若干弱い)
- 7'. 濁黒灰色土(第2回焼成面。黒色灰層と明黄色~橙色土粒が複雑に多く混ざる)
8. 濁淡灰黄色砂質土
9. 褐色粘質土(ベース土粒と1cm大焼土粒が混ざる。被熱なし)
10. 焼土と7'層の混合土
11. 濁淡灰黄色土(褐色砂質土ブロックと炭粒が混ざる)
12. 11層と同質土(褐色砂質土が主体)
13. 12層と同質土(ベース土粒が多く混ざる)
14. 濁黒灰色灰層(焼土粒が混ざる)
15. ベース土と褐灰色土の混合土(埋土。炭粒が多く混ざる)
16. 暗褐色焼土(第1回焼成面。ベース土が粒状に混ざる)
17. 淡灰黄色砂質土(褐色粘質土がブロック状に混じる。床面整地土)
18. にぶい褐色粘質土(ベース土と炭粒が混ざる)
19. 褐色粘質土とベース土の混合土
20. 19層と同質土(ベース土主体)
21. ベース土と同質土(褐色粘質土ブロックが混ざる)
22. 濁褐色粘質土(炭粒が混ざる)
23. 暗褐色砂質土(ベース土) 淡灰黄色砂質土



第31図 C区上層 SI5001 平面図・土層断面図2 (S=1/20・1/40)

約20cm、高さ約6cm)が一部残存する程度であった。また、第3回焼成面とした焼土は、カマド天井崩落土の可能性が高い。

遺物は、廃絶後に堆積した褐~黒色粘質土から須恵器、ロクロ土師器等が出土した他、カマド焚口の取上げ番号P2以外(P1・3~8)および床面北側(同P9~12)から、それぞれ下層遺物を含む磨耗した土師器甕片等が少量出土した。廃絶後の堆積層から出土した須恵器無台坏19は、口径11.8cm、器高3.6cmを測り、IV₂(古)期に位置



第32図 C区上層 SI5001 出土遺物実測図 (S=1/4)

付けられる。ロクロ土師器小甕20は、カマド正面で正位に置かれたように出土した口径11.2cm、器高10.3cmを測る。口縁端部が内傾し、底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。また、廃絶後に堆積した褐～黒色粘質土から須恵器、土師器、ロクロ土師器小片が出土、うち須恵器坏蓋小片はVI期に位置付けられる。

第3節 土坑、井戸、ピット

1 土坑、井戸（遺構：第33・34・37図、第7表、遺物：第35・36・38・39図、第11・12・37表）

土坑は、B区で17基、C区で6基を検出し、主にV～VI₂期の遺物が伴う。平面形態や規模等から、不整円形を基本とする深い土坑(SK5001・06・13)、不整形を基本とする浅い土坑(SK5002～05・09～11・12・14)、不整形で包含層の浅い落ち込み(SK5007・17～23)、略長方形を呈する土坑(SK5008・15)、井戸(SK5016)に大別できる。第7表に規模、他遺構との切り合い関係等を示しており、以下では主な土坑について記す。

SK5001（遺構：第33図、遺物：第35図）

0-22区で検出した平面不整三角形を呈する大型土坑である。一辺205～210cm、深さ10～24cmを測り、覆土は炭化物が混ざる黒褐色粘質土の単層となる。比較的多くの須恵器、下層遺物を含む土師器、ロクロ土師器が出土、うち第35図21～25・27～29の須恵器、26のロクロ土師器内黒有台碗を図示した。有台坏21は口径12.6cm、器高5.7cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。無台坏22～24の底部は円盤状を呈する。また、22、23は生焼けに近い。有台碗25は、厚い底部から細身の台部が外展する。底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。注口瓶27は、底部外面に丁寧なナデ調整を施す。小型の瓶28は、低い台部が外展する。短頸壺29は南加賀窯跡群産と考えられ、肩部を深い沈線で加飾する。22・23がVI₁期、21・24・26がVI₂期、25がVI₃期にそれぞれ位置付けられる。

SK5002～5（遺構：第33図、遺物：第35図）

0-22区で検出した浅い土坑群で、覆土は暗灰褐～濁暗褐色粘質土を基本とする。SK5005出土の須恵器30～32を図示した。有台坏30は口径11.1cm、器高3.9cmを測り、V₁期に位置付けられる。正位無蓋焼成の短頸壺31は、肩部を2条の沈線で加飾する。甕32は、頸部外面に叩き原体の接触痕が残る。また、無遺物のSK5002以外、VI₁期の須恵器、下層遺物を含む磨耗した土師器の小片がそれぞれ出土した。

SK5006（遺構：第33図、遺物：第35図）

N-20区で検出し、2基の土坑が重複する。長径116cm以上、短径102cm、深さ27cmを測り、覆土はベース土や炭化物が混ざる暗褐～黒褐色粘質土を基調とする。北側の新しい土坑各層から出土した遺物のうち、須恵器第35図33～39、土師器小甕40、ロクロ土師器甕41を図示した。有台坏33底部外面の墨書は「継」と判読できる。無台坏34～39のうち、小片39は傾きに不安を残す。34・35・37は生焼けに近く、36・38は使用に伴い底部が磨耗する。甕41は口径約23cmを測り、内面下部に同心円あて具痕がわずかに残る。33～39はIV₂(新)期～V₁期に属する。また、未図化の須恵器無台坏片はVI期に位置付けられる。

SK5008（遺構：第34図、遺物：第35図）

M-20区で検出した平面略長方形を呈する土坑である。長辺190cm、短辺133cm、深さ28～41cmを測り、底面は緩やかな起伏をもつ。覆土は炭化物や灰、焼土粒が混ざる黒灰色土を基調とする。第35図42～48の須恵器を図示したが、底面出土の遺物はない。坏蓋42・43は口縁端部を小さく折り曲げる。43は、天井部内面の磨耗・墨痕から硯に転用したと考えられる。ロクロひだが目立つ有台坏44は、内外面に煤が付着する。無台坏45～48は体部が大きく外傾する。45は底部内面の墨痕から、硯に転用したと考えられる。42・45がV₂期、43・44がVI₁期、その他がVI₂期にそれぞれ位置付けられる。他に、須恵器、土師器片が出土した。

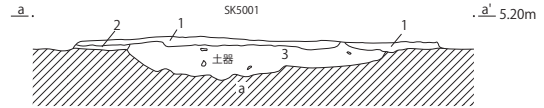
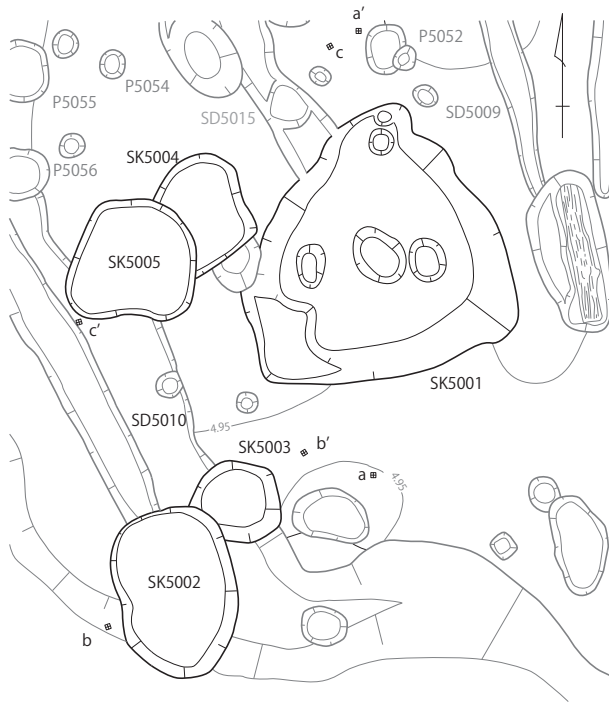
第7表 B・C区上層SK規模等一覧表

遺構名	図No.	グリッド名	平面形	規模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
C区 SK5001	第33図	O-22	不整三角形	210	205	10~24	底面に起伏あり。SK5004、SD5015より古。VI期の遺物出土。
C区 SK5002	第33図	O-22	略楕円形	136	96	10~14	SK5003、SD5010、南端鞍部より新。出土遺物なし。
C区 SK5003	第33図	O-22	略方形	72	64	4~10	SD5010より新、SK5002より古。VI ₁ 期の遺物出土。
C区 SK5004	第33図	O-22	不整形	84	60~	8~16	SK5001より新、SK5005より古。VI ₁ 期の遺物出土。
C区 SK5005	第33図	O-22	"	102	90	6~9	SK5004より新。VI ₁ 期の遺物出土。
C区 SK5006	第33図	N-20	略楕円形	116~	102	27	2基が重複。調査区外に延びる。VI ₃ 期の遺物出土。
B区 SK5007	第12・17・ 34図	M-20	不整形	354	290~	3~5	浅い落ち込み。P5108、SD5037・51より古。須恵器甕、土師器甕、ロクロ土師器甕の小片少量出土。
B区 SK5008	第34図	M-20	略長方形	190	133	28~41	P5246より新。土層1~3'からVI ₂ 期の遺物出土。
B区 SK5009	第34図	K-21	不整形	104	84	5~8	浅い落ち込み。P5135より新。V期の遺物出土。
B区 SK5010	第34図	K-21	略円形	84	56	8~36	SB508柱穴。SK5011、SD5042より古。
B区 SK5011	第34図	K-21	略楕円形	112	72	12~14	底面平坦。SK5010より新。土師器、ロクロ土師器小片が出土。VI ₃ 期。
B区 SK5012	第34図	K-21	不整形	118	100~	11~14	底面平坦。遺物にV期の須恵器、珠洲焼甕片含む。
B区 SK5013	第34図	J・K-21	"	210~	120~	20~28	底面平坦。VI ₁ 期の遺物出土。
B区 SK5014	第34図	J-21	"	156	130~	8	VI ₁ 期の遺物出土。
B区 SK5015	第36図	M-19	略長方形	164	106	7~9	土師器、ロクロ土師器甕が出土。
B区 SK5016	第36図	M-19	略円形	229	226	120	板組を抜き取った井戸。斎串、串、墨書「大寺」等出土。V ₁ 期に廃絶か。
B区 SK5017	第13・93図	L-20	不整形	154	136	6~17	SK5018より新、SD5114・15より古。須恵器甕片、土師器・ロクロ土師器片出土。
B区 SK5018	第13図	L-20	不整長方形か	120~	90	3~5	浅い落ち込み。SK5017、SD5121より古。出土遺物なし。
B区 SK5019	第13・93図	L-20	略円形	98	86	8	浅い落ち込み。SD5122より古。磨耗した土師器・ロクロ土師器片出土。
B区 SK5020	第13・40図	L-20	不整楕円形	148	100	6	浅い落ち込み。SD5055・56より古。V ₂ 期の遺物出土。
B区 SK5021	第12・13・ 17図	L・M-20・21	不整形	260~	214	3~9	濁暗灰褐色粘質土とベース土がローリング状に堆積、浅い落ち込み。SD5036~28・52より古。須恵器甕片、ロクロ土師器片が出土。
B区 SK5022	第17図	L-21	"	140~	92	4~9	濁暗灰褐色粘質土、浅い落ち込み。SD5028・29より古。SK5023より新。磨耗した土師器片が出土。
B区 SK5023	第17・92図	L-21	"	約210	150~	3~10	濁暗灰褐色粘質土、浅い落ち込み。SD5034・29より古。SK5022より古。須恵器甕片、ロクロ土師器片が出土。

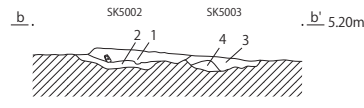
SK5009～11（遺構：第34図、遺物：第35図）

K-21区で検出した土坑群で、SK5011は平面略楕円形を呈する。いずれの覆土も黒灰～暗灰色粘質土を基調とし、多くの炭粒、灰、焼土粒が混ざる。遺物のうち、SK5009・10出土の第35図49、SK5011出土の50・51を図示した。V期と考えられる須恵器無台坏49の底部外面に記された墨書は「真継」と判読できる。須恵器皿50は口径14.2cm、器高2.2cmを測り、底部内面は使用に伴い摩耗する。VI₂期に位置付けられる。ロクロ土師器甕51の口縁端部はゆるやかに内屈する。また、SK5009からV期の須恵器有台坏片が出土した。

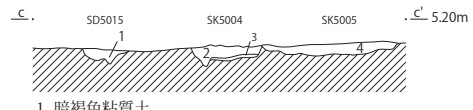
O-22区 SK5001～5005



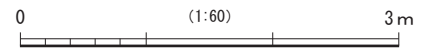
1. 暗黄褐色粘質土 (炭化物が少量混ざる)
 2. 1層と同質土 (1層より暗い)
 3. 黒褐色粘質土 (土師器、須恵器、炭化物が混ざる)
- [ベース土] a. 黄褐色粘質土



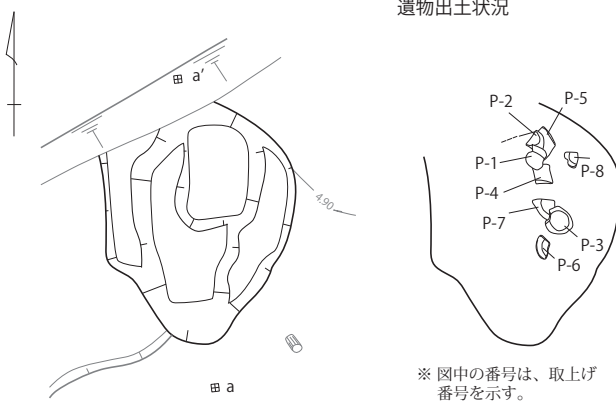
1. 暗灰褐色粘質土 (炭化物、土器が混ざる)
 2. 1層と同質土 (ベース土がブロック状に混ざる)
 3. 1層と同質土 (1層より暗い、無遺物)
 4. 明褐色粘質土
- [ベース土] 黄褐色粘質土



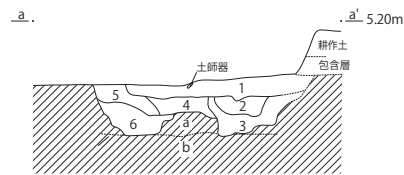
1. 暗褐色粘質土
 2. 濁暗褐色粘質土 (炭化物、土器が混ざる)
 3. 黒褐色粘質土
 4. 2層と同質土 (2層より明るい)
- [ベース土] 黄褐色粘質土



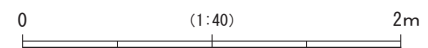
N-20区 SK5006



遺物出土状況



1. 黒褐色粘質土 (土器、炭化物が混ざる)
 2. 1層と同質土 (大きなベース土ブロックが多く混ざる)
 3. 暗褐色粘質土 (ベース土ブロックが混ざる)
 4. 濁暗褐色粘質土 (3層と似る。ベース土ブロック少ない)
 5. ベース土と同質土 (少量の黒褐色粘質土が粒状に混ざる)
 6. 3層と同質土 (3層より若干暗い)
- [ベース土] a. 黄褐色粘質土
b. a層に黒褐色粘質土が粒状に混ざる



第33図 C区上層 SK平面図・土層断面図 (S=1/40・1/60)

SK5012～14 (遺構：第34図、遺物：第35・42図)

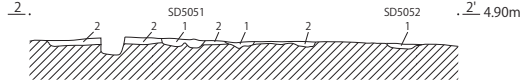
J・K-21区で検出した土坑群で、最も深いSK5013で深さ20～28cmを測る。いずれの覆土も炭粒、灰が混ざる濁黒灰～暗灰色粘質土を基調とし、SK5013・14の底面には薄い黒色灰層が確認できる。遺物のうち、SK5012出土の須恵器第35図52・53、SK5013出土の同図54～57、SK5014出土の58、第42図134を図示した。須恵器坏蓋52は、破損した後に被熱する。無台坏53底部外面の墨書は判読できない。無台坏54は底部円盤状を呈する。無台盤55は、体部が内湾気味である。ロクロ土師器甕56・57は、口縁端部を内傾気味にひきあげる。器肉が薄い須恵器有台坏58は、口径13.0cm、器高6.0cmを測る。第42図134は須恵器無台坏で、口径11.6cm、器高3.4cmを測る。134がIV₁期、52がIV₂期、53がV₂期、54・55・58がVI₁期にそれぞれ位置付けられる。また、SK5012から混ざり込みの珠洲焼甕片が出土した。

SK5015 (遺構：第37図、遺物：第35・36図)

M-19区で検出した平面略長方形を呈する土坑である。長辺164cm、短辺106cm、深さ7～9cmを測り、底面は平坦である。覆土はベース土粒が混ざる濁暗灰褐色粘質土を基調とする。比較的多くの土師器、ロクロ

第3節 土坑、井戸、ピット

M-20区 SK5007(第12・17図)

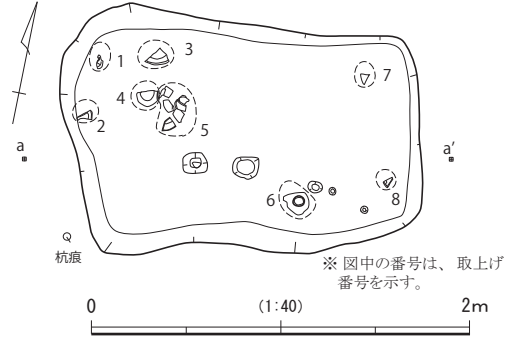


1. 暗灰色粘質土(炭粒、ベース土が粒状に混ざる)
2. 暗灰色粘質土とベース土(淡灰黄色粘質土)の混合土(ローリングを受ける)

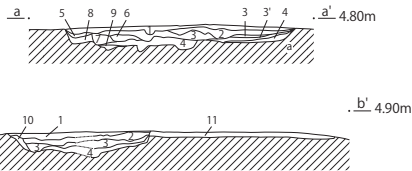
M-20区 SK5008



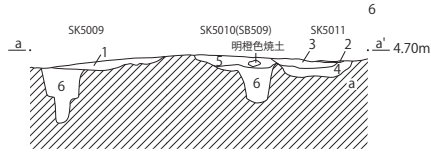
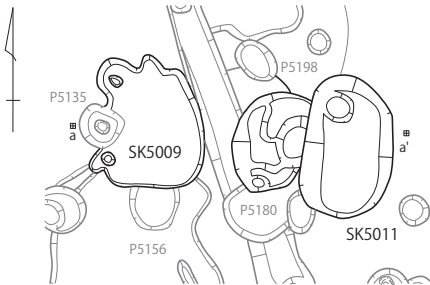
SK5008遺物出土状況(S=1/40)



1. 暗灰色粘質土(炭化物が多く混ざる)
2. 黒灰色粘質土(炭粒、焼土粒が多く混ざる)
3. 黒灰色土(黒色灰、焼土粒が多く混ざる)
- 3'. 黒灰色土(3層と黄色粘質土粒が混ざる)
4. 3'層とベース土の混合土(やや褐色帯びる)
5. 濁黒灰色粘質土(ベース土が混ざる)
6. 淡黄灰色粘質土と3層の混合土
7. 灰色粘質土と3層の混合土
8. 灰褐色粘質土(黄色粘質土がブロック状に混ざる。炭粒多く混ざる)
9. 灰褐色粘質土(炭粒が混ざる)
10. 灰色粘質土
11. 濁灰褐色粘質土(ベース土が混じる。包含層の凹みか)
[ベース土] a. 淡灰黄色粘質土

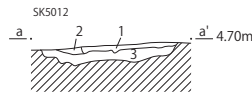
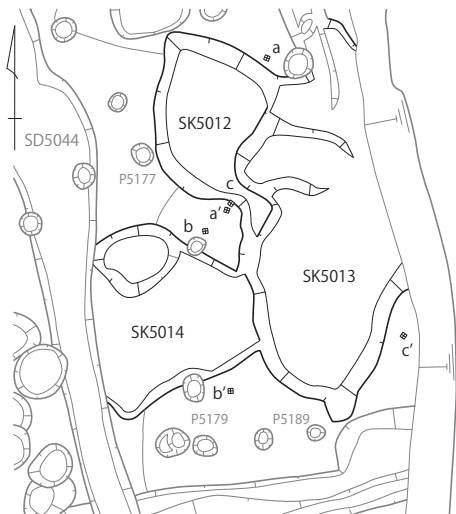


K-21区 SK5009~11

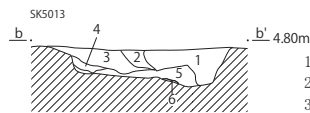


1. 黒灰色粘質土(焼土粒、炭粒混ざる)
2. にぶい橙褐色焼土
3. にぶい橙褐色焼土
4. 黒色粘質土(黒色灰が多量に混ざる)
5. 暗灰色粘質土(明褐色焼土、焼土粒、炭粒が多く混ざる)
6. 灰褐色粘質土とベース土の混合土
[ベース土] a. 淡灰黄色粘質土

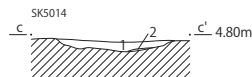
J・K-21区SK5012~14



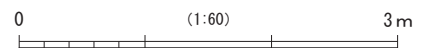
1. 濁黒灰色粘質土(炭粒が多く混ざる)
2. 褐灰色粘質土(炭粒が混ざる。1層が粒状に混ざる)
3. 褐灰色粘質土(炭粒が若干混ざる)



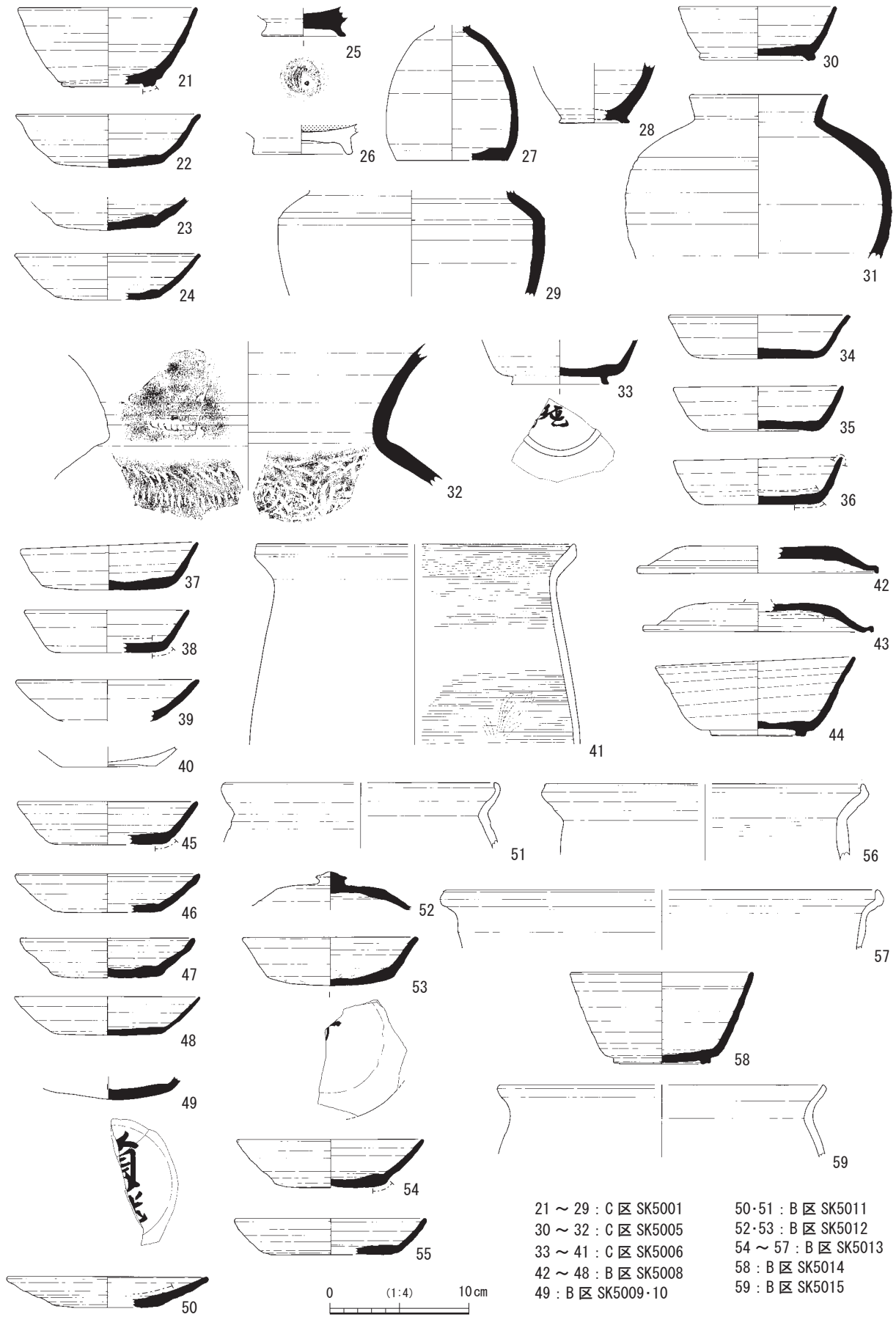
1. 4次調査攪乱土
2. 濁黒灰色土(黒色灰が多量に混ざる)
3. 2層と暗灰色粘質土の混合土
4. ベース土と同質土(淡灰黄色粘質土)
5. 黒色灰層(しまりない)
6. にぶい褐色粘質土(しまりない)



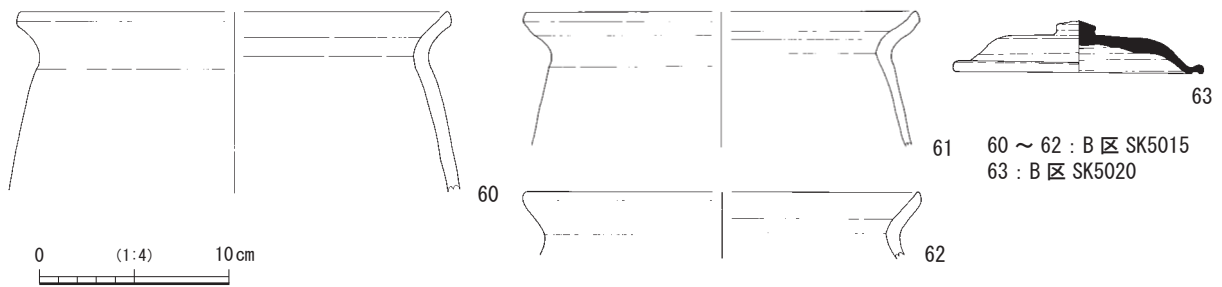
1. 濁黒灰色粘質土(ベース土粒、炭粒が多く混ざる)
2. 黒色灰層
[ベース土] 淡灰黄色粘質土



第34図 B区上層SK平面図・土層断面図1 (S=1/40・1/60)



第35図 B・C区上層SK出土遺物実測図 (S=1/4)



第36図 B区上層SK出土遺物実測図(S=1/4)

土師器甕片が出土、遺物番号を付して取り上げをおこなった。うち第35図59～第36図62のロクロ土師器甕を図示した。口縁端部が断面三角形を呈する甕は口径20～23cmを測り、磨滅が著しい。

SK5016 (遺構：第37図、遺物：第38・39図)

M-19区で検出した大型土坑で、板組が抜き取られた井戸と考えた。平面形は、検出面が略円形、底面付近が隅丸方形を呈し、規模は検出面で径226～229cm、底面付近で辺40～70cm、深さ約120cmを測る。覆土は、上位層から暗灰褐色粘質土(「第1層遺物」で遺物取り上げ。以下、同じ)、黄色細砂(埋土)、暗灰褐色粘質土(「第2層遺物」)、暗灰褐色腐植土(「第3層遺物」)、しまりのない褐色腐植土(「第4層遺物」となり、覆土側面には井戸枠裏込め土(第37図土層7)が一部に残存する。V₁期頃と考えられる井戸の廃絶(井戸枠抜き取り)後は、比較的長い期間開口状態にあり、土器片の廃棄、自然木・枝・葉等(上記の腐植土層)の堆積が進むとともに、齋串(第39図88・89)を用いた祭祀が執り行われる。

第37図5・6層(「第3層遺物」「第4層遺物」)を中心とした比較的多くの遺物のうち、第38図64～第39図92を図示した。第1・2層遺物として取り上げた土師器土錘64は、残存重量約45gを量る。

須恵器65～76、土師器77～80、木製品87～91は第3層遺物で、Ⅲ期以降、V期を主体とし、V₂期を下限とする。V₂期の須恵器有台坏65は「真継」「口(有カ)」と墨書される。有台坏66は、台部接地面に深い板状圧痕が残る。無台坏67は口径約14cmを測り、底部外面に丁寧なナデ調整を加える。V₁期の無台坏70は、底部外面に「大寺」と墨書する他、口縁部内面に薄い油痕が残る。無台坏71は灯明容器に転用したと考えられる。無台坏72～75は体部が外傾し、72・75には使用に伴う磨耗が、73・74には煤の付着が、それぞれ認められる。瓶76は、肩部で水平な割り揃えを行う。ロクロ土師器甕77、埴80は、煮沸痕を明瞭に残す。須恵器無台坏81は、底部内面が使用に伴い磨耗する。倒位焼成の低脚高坏82は、脚中位を粗い沈線を加飾する。木製品は、ケヤキ材の挽物白木皿87・91、スギ材の齋串88・89、スギ材の角材90の他、籠と考えられる編物片(図版9)が出土した。平高台の皿87は底径12.0cmを測る。齋串88・89は圭頭状を呈し、89で長さ21.6cm、幅2.0cm、厚さ0.5cmを測る。台部を削り出す皿91は、口径14.8cm、器高2.3cmを測る。

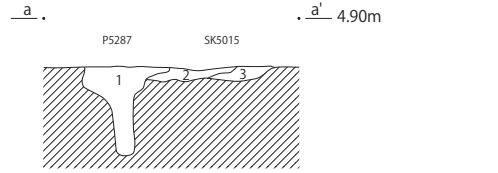
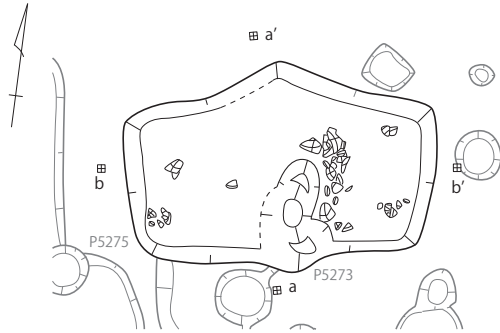
第38図83、84、86、92は、第4層遺物である。生焼けの須恵器無台坏83は底部外面が使用に伴い平滑となる。V₁期と考えられる。ロクロ土師器小甕84は、底部を含めて外面をケズリ調整で仕上げる。甕86は、内面に黒褐色のヨゴレが付着する。底面出土した加工材92は長さ67.3cmを測り、材はスギである。

産地不明の須恵器甕85は、第1～3層遺物として取り上げた他、SD5061第1層、包含層出土の破片が接合する。胴部叩き成形は、内外面とも胴部最大径付近を境に異なる原体を用いており、うち内面上半は扇形文に分類できる。また、精良な胎土は粘質で、混和材をほとんど含まない。

SK5020 (遺構：第13図、遺物：第36図)

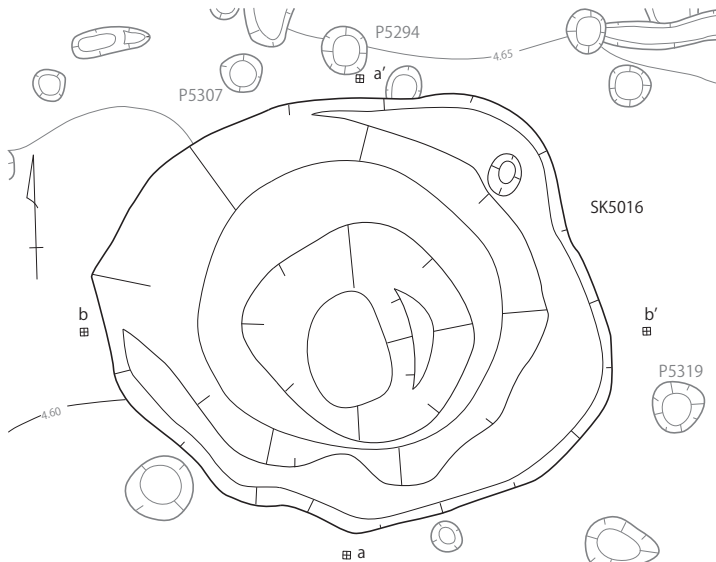
L-20区で検出した浅い落ち込みで、濁暗灰褐色粘質土を覆土とする。V₂期の須恵器坏蓋63は口径12.9cm、器高2.8cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。また、須恵器甕片等が出土した。

M-19区 SK5015



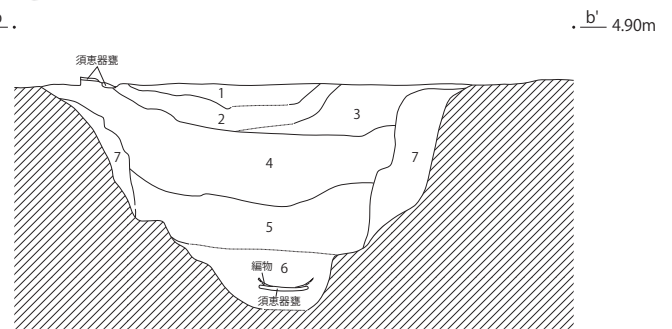
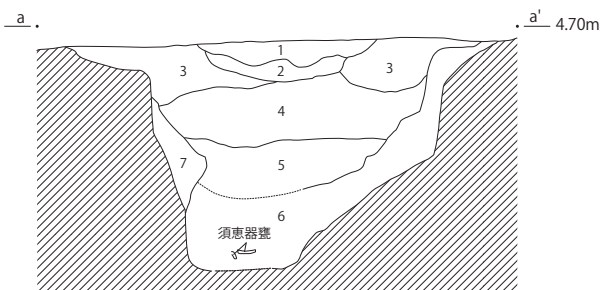
1. 濁暗灰褐色粘質土(ベース土粒、炭粒が混ざる)
2. 1層と同質土(ベース土粒が多く混ざる)
3. 灰色粘質土とベース土の混合土(ベース土) 淡灰黄色粘質土

M-19区 SK5016



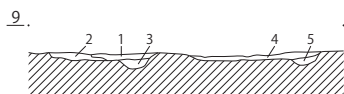
1. 暗灰褐色粘質土
2. 黄色細砂(埋土)
3. 暗灰褐色粘質土(炭粒が混ざる。鉄分沈着)
4. 3層と同質土(3層より暗い)
5. 暗灰褐色腐植土
6. 褐色腐植土(しまりなく、自然木・枝が多く混ざる)
7. 3層、5層、ベース土の混合土(埋土、井戸裏込め土) [ベース土] 淡黄灰色粘質土

※ 遺物取り上げ
土層1: 第1層遺物、土層3・4: 第2層遺物、
土層5: 第3層遺物、土層6: 第4層遺物



0 (1:40) 2m

L-20区 SK5020 (第13図)

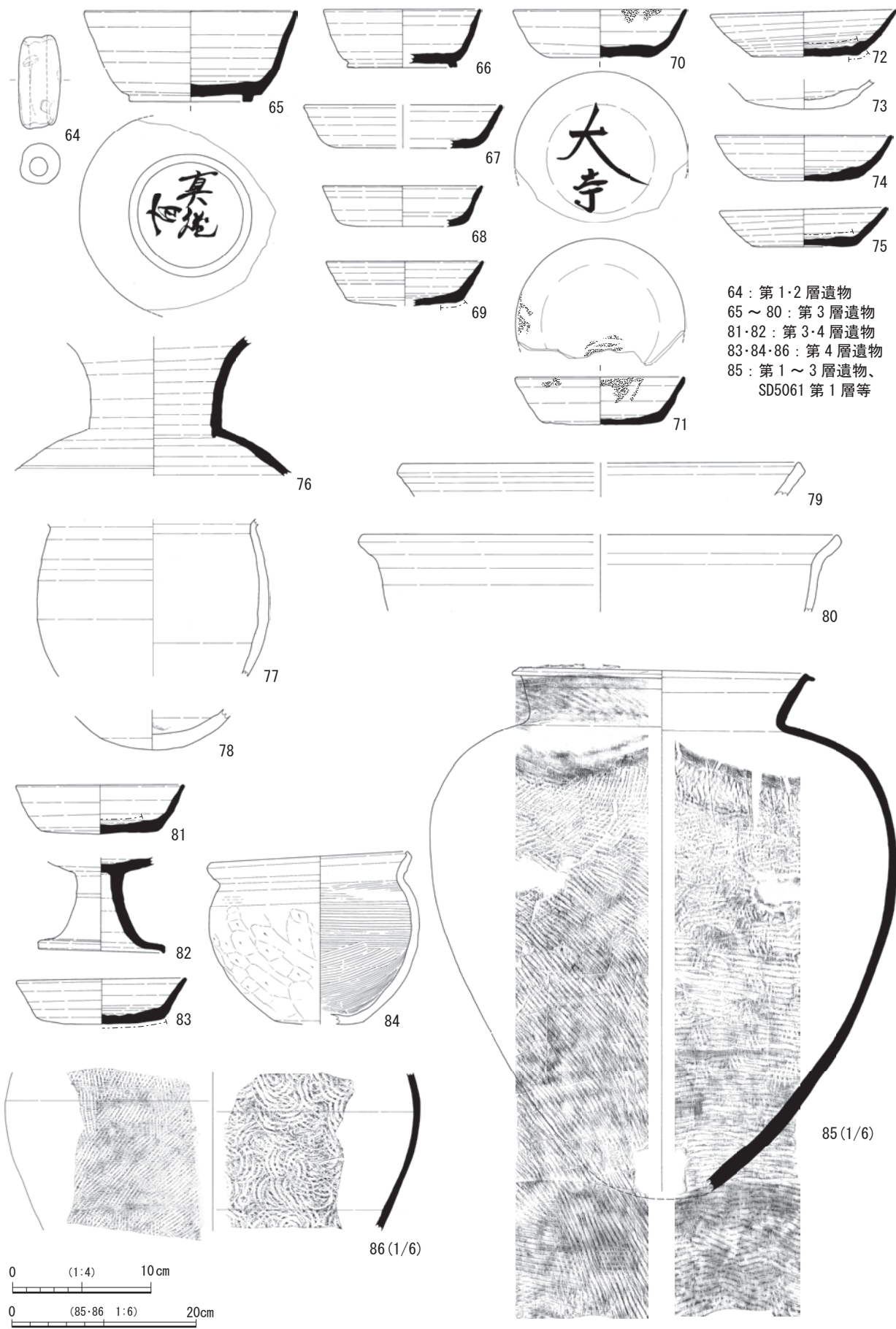


1. 暗灰褐色粘質土
2. 1層とベース土の混合土
3. ベース土と同質土(SD5056。1層が粒状に混ざる)
4. 濁暗灰褐色粘質土(炭粒、ベース土粒が混ざる)
5. 灰色粘質土(SD5055。ベース土粒が混ざる)

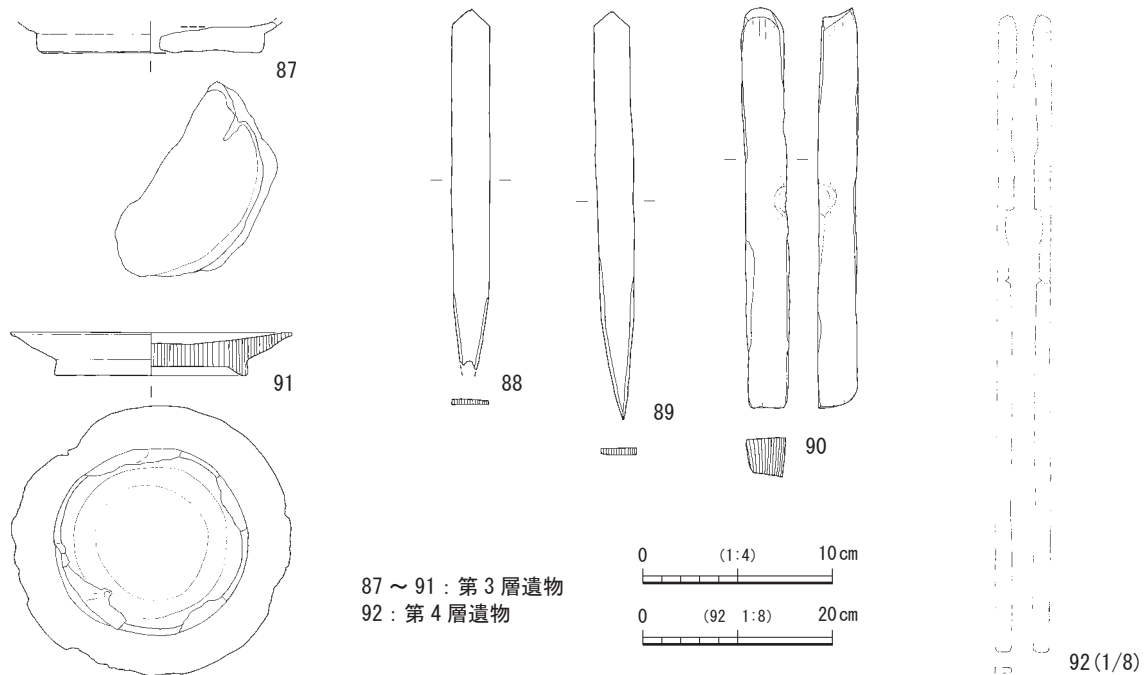
0 (1:60) 3m

第37図 B区上層SK平面図・土層断面図2 (S = 1/40・1/60)

第3節 土坑、井戸、ピット



第38図 B区上層 SK5016 出土遺物実測図1 (S =1/4・1/6)



87～91：第3層遺物
92：第4層遺物

第39図 B区上層SK5016出土遺物実測図2 (S=1/4・1/8)

2 ピット (遺構：第40図、遺物：第41～43図、第12・13・36・37表)

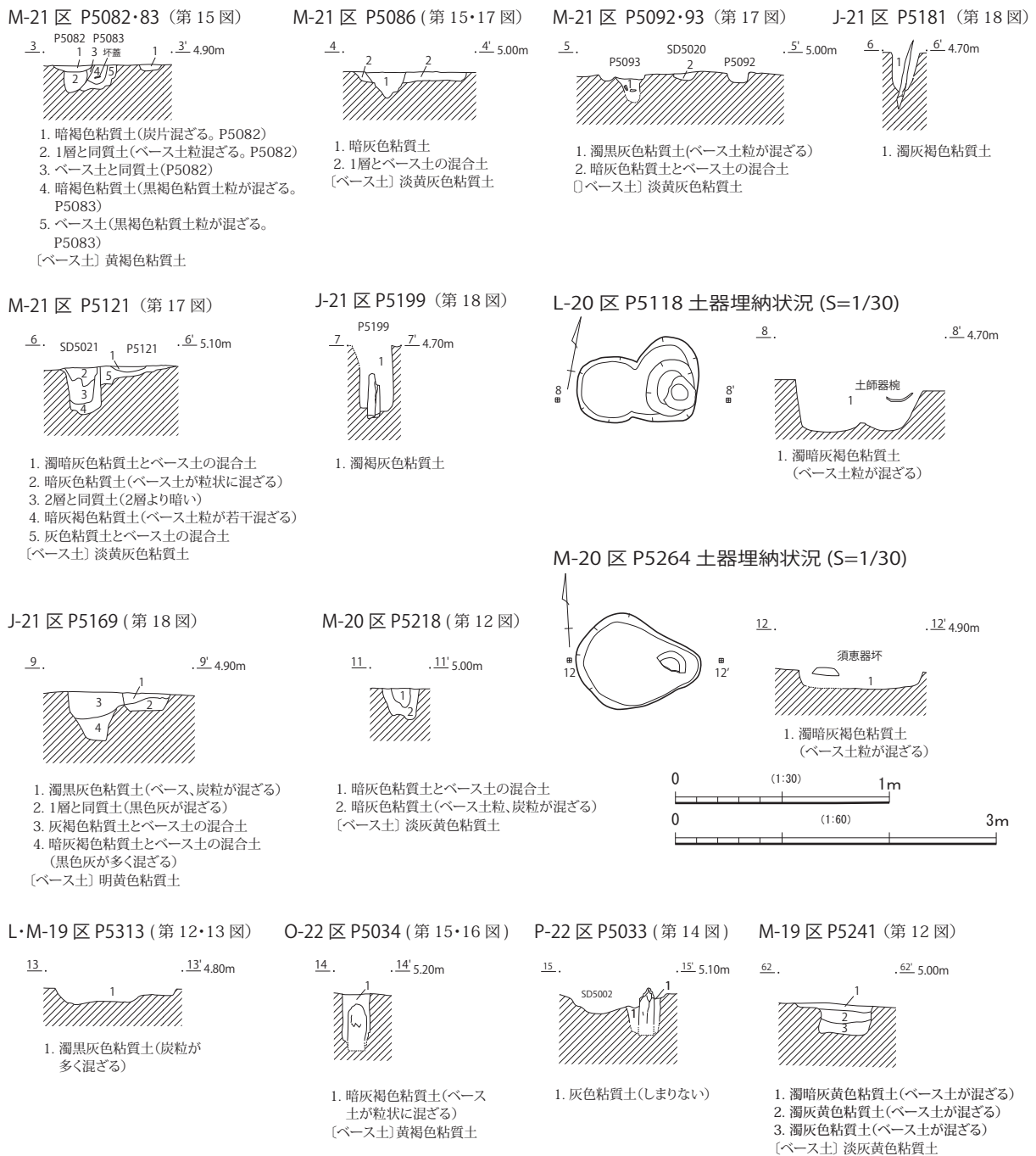
現地調査では、調査区全体で多数のピットを検出している。遺物が出土したピットに対して遺構番号を付しており、掘立柱建物を構成する柱穴以外で実測した土層断面図を第40図に示した。C区P5033・62・68、B区P5163・97・99、P5228等で柱根が遺存しており、復元しえなかった建物等構造物の柱穴を含むと考えられる。また、柱抜き取り時の土器埋納について、B区P5106で須恵器長頸瓶(第42図116)、B区P5118は正位でロクロ土師器壙(同図117)、B区P5264で伏せた須恵器無台坏(同図141)、B区P5328でロクロ土師器皿・壙(第43図149・150)をそれぞれ確認している。以下、主に出土遺物について記す。

C区出土遺物は、第41図93～107を図示した。P5023出土の須恵器無台盤93は体部が大きく外傾する。須恵器長頸瓶94は、P5035、P5122出土の破片が接合したものであり、肩部でしっかりと屈曲する。P5044出土の95、P5059出土の98は、内湾気味に立ちあがる無台坏である。P5046・47・66出土の96・97・101は、内黒のロクロ土師器壙類で、有台坏96はVI₃期に位置付けられる。須恵器甕99は、P5061～64・66出土の破片が接合した。胴部外面が格子状の同一原体を用いるのに対して、内面は上半に同心円あて具、丸底に仕上げる下半に平行あて具を用いる。P5056出土の壙形滓102は、重さ120.5gを測る。P5033からは、横溝と方形孔を穿つ柱根103(スギ)、柱根104(サクラ属)が出土した。P5068出土の柱根105はスダジイ材で、たね木106は先端部が炭化する。P5062出土の柱根107はクリ材を用いる。

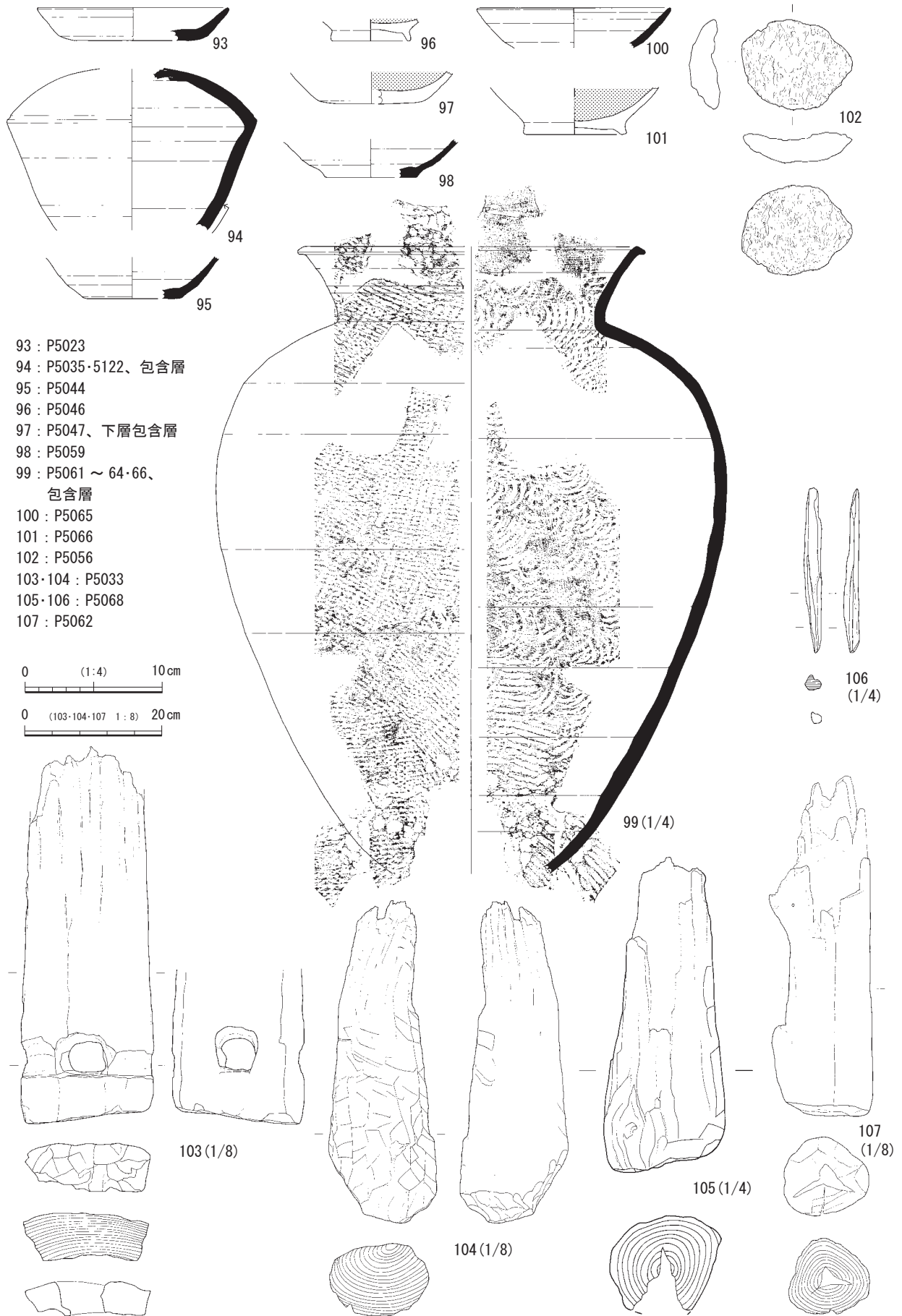
B区出土遺物は、第42図108～117、121～141、第43図142～158を図示した。P5083出土の須恵器坏蓋108は、口径12.7cm、器高2.8cmを測る。無蓋焼成の須恵器短頸壺109は、P5085・5210、包含層出土の破片が接合した。111・112は、P5093から出土した。ロクロ土師器甕111は短い口縁端部を屈曲させ、胎土中に海綿骨針が混ざる。無鈕の須恵器坏蓋112は口縁端部を丸く仕上げ、VI₂期に位置付けられる。P5098出土の須恵器有台坏114は、口縁部1ヶ所にタール状付着物が認められ、灯明容器に転用する。P5099出土の須恵器瓶115は、底部中央を打ち欠いて穿孔した可能性が高い。P5106出土の須恵器長頸瓶116は外面を粗い沈線で加飾する。P5118出土の内黒ロクロ土師器無台坏117はVI₂期末に位置付けられ、柱抜き取り時に正位に埋納したものと考えられる(第40図)。P5133出土の須恵器有台坏121は口径15.8cmを測る。P5138出土の須恵器無台坏122は生焼で、口縁端部が肥厚する。須恵器坏蓋123はP5140、SK5007出土の破片が接合した。器肉は薄く、硯に転

第3節 土坑、井戸、ピット

用する。P5160からは須恵器124～126が出土、うち須恵器双耳瓶124はP5157、大溝第1層出土の破片と接合した。VI₂期の無台坏126に記された墨書は判読できない。P5169出土の須恵器無台坏127は全面が被熱する。P5190からは、摩滅したロクロ土師器甕128、須恵器無台坏129が出土した。P5194出土の須恵器坏蓋130外面に記された墨書は、1文字目が「真」と判読できる。P5198出土の須恵器無台坏131、P5200出土の須恵器有台坏132は、VI₂期に位置付けられる。P5203からは須恵器133・134が出土、うち134はSK5014出土の破片と接合する。坏蓋133の口縁端部はほとんど目立たない。P5205からは須恵器135・136が出土した。扁平な坏蓋135は口径15.0cmを測り、内面が摩耗することから転用碗の可能性をもつ。生焼けに近い無台坏136は廃棄後に被熱し、

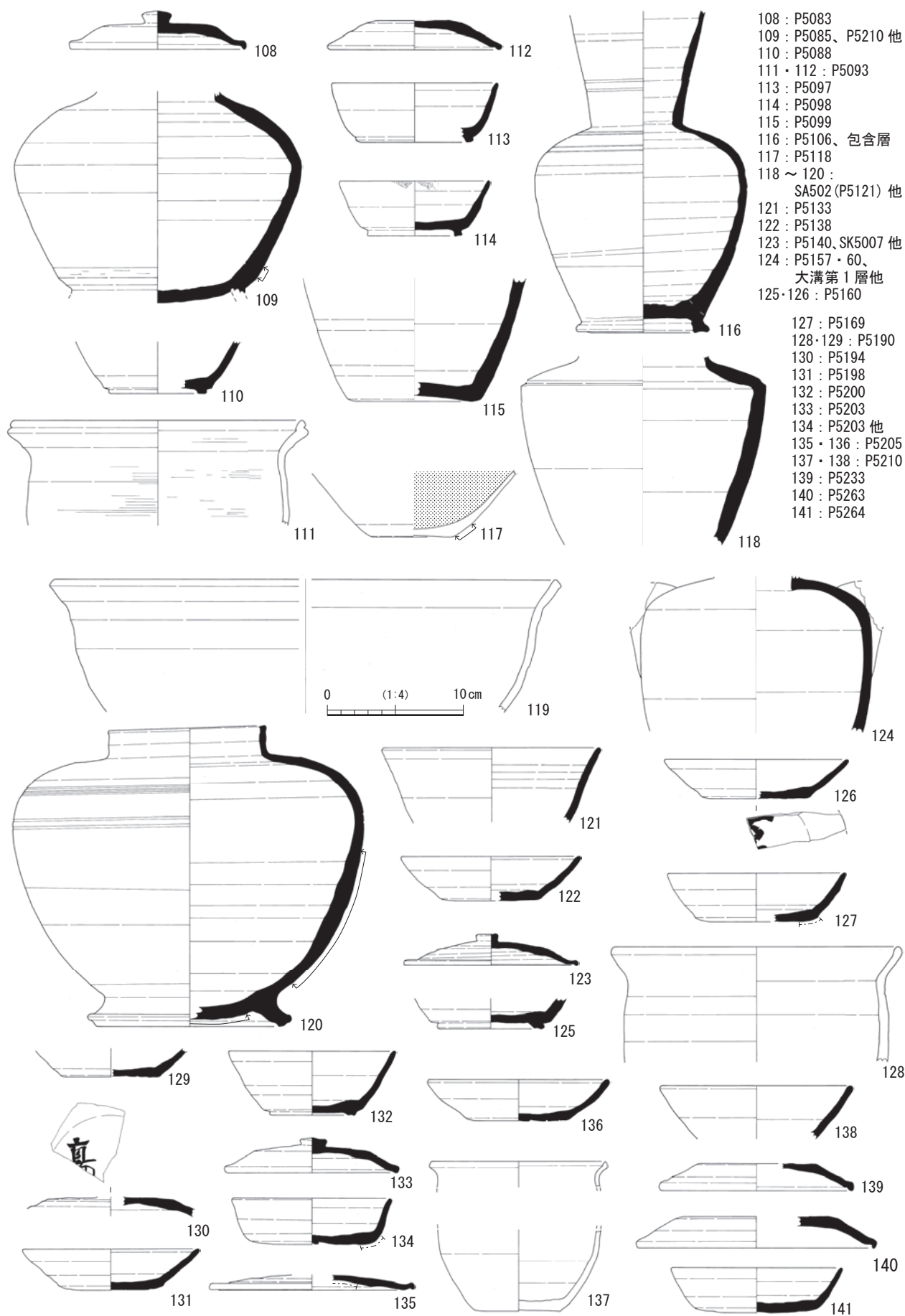


第 40 図 B・C 区上層ピット平面図・土層断面図 (S =1/30・1/60)

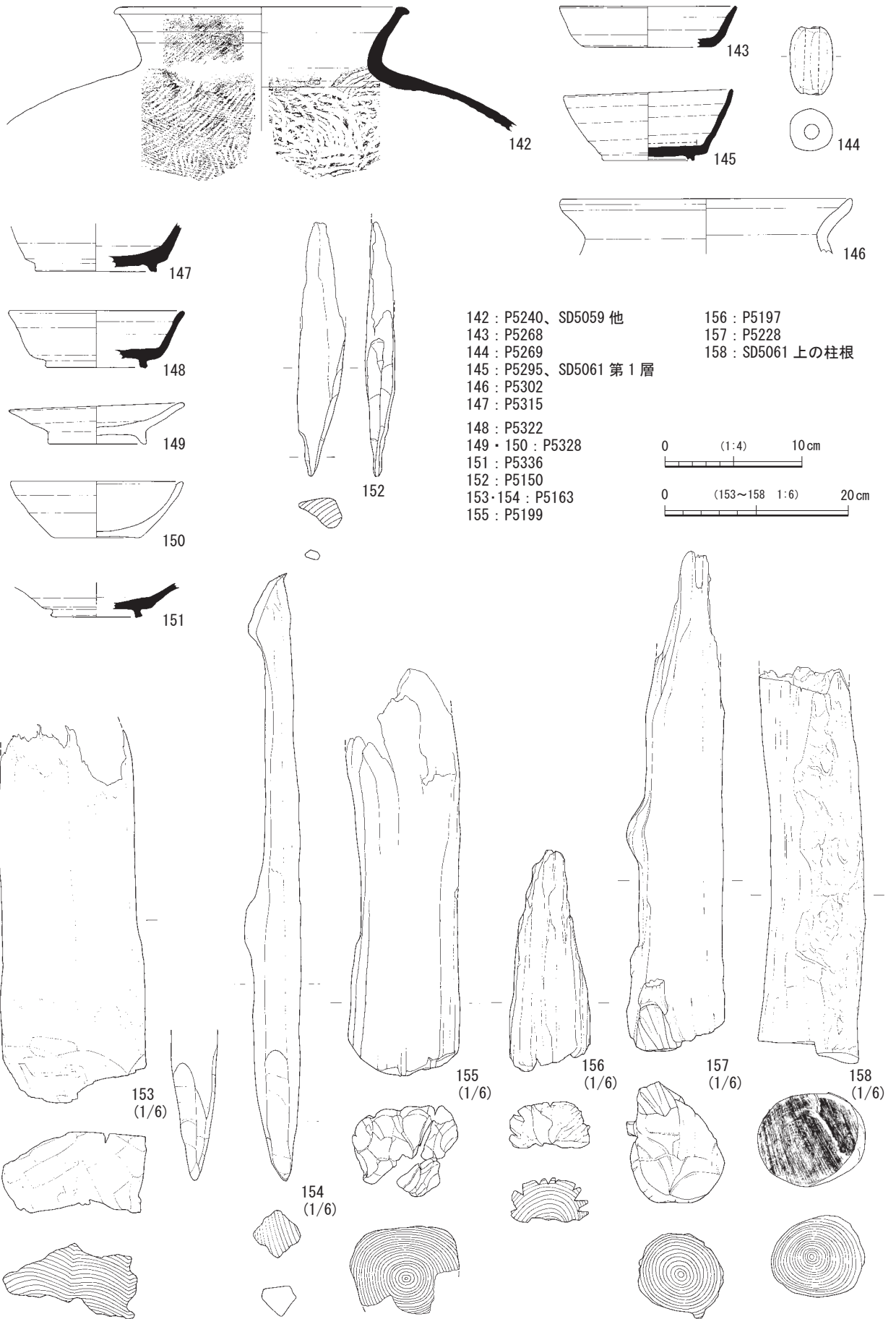


第41図 C区上層ピット出土遺物実測図 (S = 1/4・1/8)

第3節 土坑、井戸、ピット



第42図 B区上層ピット出土遺物実測図1 (S=1/4)



第43図 B区上層ピット出土遺物実測図2 (S=1/4・1/6)

煤が付着する。P5210からはロクロ土師器小甕137、須恵器有台坏138が出土、小片の138は傾きに不安を残す。P5233出土の須恵器坏蓋139は無鈕で、口縁端部を丸く仕上げる。P5263出土の須恵器坏蓋140は口径17.3cmを測り、内外面に煤が付着する。P5264出土の須恵器無台坏141は、柱抜き取り時に埋納された可能性が高い(第40図)。口径12.4cm、器高3.3cmを測り、V₁期に位置付けられる。第42図142の甕は、P5240、SD5059、包含層出土の破片が接合した。口径19.8cmを測り、口縁外面に平行叩き痕を残す。P5268出土の143は須恵器無台坏、P5269出土の144は土師器土錘である。須恵器有台坏145は、P5295、SD5061第1層出土の破片が接合した。口径12.2cm、器高5.2cmを測り、小振りな台部を内寄りに貼り付ける。P5302出土の146はロクロ土師器甕、P5315出土の147、P5322出土の148は須恵器有台坏である。P5328からは、柱抜き取り時に埋納されたロクロ土師器149・150が出土、前者がVI₃期、後者がVI₂期に位置付けられる。有台皿149は先細りの台部が外展、無台碗150は口縁端部が若干肥厚する。P5336出土の須恵器有台皿151は、底部回転糸切りの可能性が高い。152～158は柱根・杭である。樹種は、153がスギ、154・157がスダジイ、155がムクノキ、156がサクラ属、158がマツ属複雑管束亜属と同定されており、比較的多様な材がみられる。

第4節 道路遺構 (遺構：第44～47図、遺物：第48～59図、第13～16・37表)

1 遺構

概要 B・C区L～P-21～22区で検出した道路遺構は、県第4次調査区⁽³⁾と南側で、津幡町教育委員会第1次調査区⁽⁴⁾と北側でそれぞれ接続する。また、C区の北々西約200mに位置する津幡町教育委員会第7次調査区の成果を加味すれば、一連の調査で古代北陸道能登支路を直線延長約330m確認したこととなる。

まず、県第4次調査の概要を記して、本次調査理解の一助としたい。第4次調査では、延長約70mにわたり、主軸方位N-約27°Wを示す道路遺構を検出している。道路遺構は、東西両側に側溝を伴い、両側溝間が路面となる。道路遺構の敷設時期は判然とせず、大溝との関係から遅くともV期初頭には機能する。両側溝とも道路幅を縮小する作り替えが認められ(旧側溝(東旧側溝SD4026、西旧側溝SD4028)、新側溝(東新側溝SD4027、西新側溝SD4029・4030)、その作り替えはVI₁期末頃を下限とし、道路幅を縮小した道路遺構の廃絶時期は、両側溝上面を覆う新たな「盛土層」の関係からVI₂期末頃とされる。

県第4次調査で検出した新旧道路の検出面における路面幅は、両側溝の路面側立ち上がり間距離で旧道路が8.5～9.3m、新道路で6.0m前後を、また両側溝の心々距離で旧道路が9.0～9.8m、新道路が約6.5mを、それぞれ測る。また、路面は後世の削平を受けるものの、L-23区付近で最大厚45cm程度の整地層(砂・砂質土)が存在し、整地土中に最長1.7mを超える材を含む多量の板材、棒材、土器片を道路主軸方向に埋め込み、路盤を補強している。側溝の規模は、東旧側溝が上幅140cm以上、深さ30～60cmを、西旧側溝が上幅210cm以上、深さ約35cmをそれぞれ測り、両側溝底の標高差は顕著でない。新側溝は、東新側溝が上幅140～180cm、深さ20～40cmを、西新側溝が上幅110～200cm、深さ50～60cmをそれぞれ測り、東新側溝を浅く掘る一方、西新側溝を20cm前後深く掘り下げる。

さて、本次調査B・C区では、近世以降の耕作土直下で、農業用水による未掘削部分を含めて延長約22mにわたり両側溝を伴う道路遺構(路面、西側溝(SD5017)、東側溝(SD5016))を検出した。道路の基本構造・路面の造成方法は、第4次調査区と同様で、両側に側溝を伴い、路面に整地(盛土)を行う。ただし、第4次調査とは異なり、東側溝(SD5016)は、C区南壁の土層断面(第44・45図断面c-c')以外は不明瞭で、西側溝(SD5017)は新旧側溝が重複する状況であった。また、道路遺構の路面の整地(盛土)の維持・管理はVI₂期末頃に放棄されており、両側溝に路面盛土が流入している。その後、西側溝(SD5017)のみVI₃期に属する少量の遺物(第54図245、第57図302・305等)の出土から、C区南端鞍部から続く濁黒灰色粘質土で埋没するまでの短期間、C区

西側溝(SD5017)の一部が水路機能を維持した可能性が高い。なお、耕作に伴う小溝、掘立柱建物との重複がない点、道路遺構の成立期を知れる遺物が出土していない点は、第4次調査と同様である。

規模等 道路主軸方位はN-約27°Wを示し、第4次調査から引き続き直線路を維持する。路面は、盛土で整地され、西側溝(SD5017)は新旧側溝が重複する。東側溝(SD5016)は、路面際に新側溝を確認した他、北半で大きく溝幅をひろげる部分が旧側溝の痕跡の可能性をもつ。旧道路の路面幅は、旧道路東側溝の残存と推定した落ち込み(第45図c-c'土層44右側)と西側溝の間(同図ア-ア')で側溝心々距離8.10mを測る。また、新道路の路面幅は、同図ア-ア'で両側溝の路面側立ち上がり間距離が5.15m、側溝心々距離が6.80mを、イ-イ'で路面側立ち上がり間距離が5.25m、側溝心々距離が7.40mを、それぞれ測る。西側溝(SD5017)が若干東側に流れを変えることから、第4次調査に比して、路面幅は北方向に向けて若干縮小している。ベース面標高(遺構掘削後の標高)は、路面基盤面が4.72～4.80mであるのに対して、道路遺構外西側が4.85m前後、道路遺構外東側(南端鞍部底面)が4.60～4.77m、同(南端鞍部外東側)が4.90m前後と、路面基盤土をまず10～20cm掘り下げた後に盛土を行ったことがわかる。

路面 路面は、掘り下げられた基盤土(明黄～黄褐・灰色粘質土)上に、木材片や土器片を混ぜ込んだ砂質土・砂等を盛り、突き固めることで造成を行う。ただし、近世以降の耕作地で路面上部が削平を受けており、路面検出面での高さは、C区が4.88～4.95mを、B区が4.78m前後を、それぞれ測る。

B区は、盛土をおこなうベース面が4.72～4.80mを測り、北西側に向けて若干標高が下がる。盛土(第46図断面f-f'土層24:にぶい灰色砂質土)は、部分的に残存する程度(厚さ2～5cm)であった。基盤面には、盛土を突き固めた際に生じた不規則な窪みが多数残り、その深さは4～18cmを測る。

C区は、後世の削平具合が少ないため、整地作業痕跡が比較的良好に残る。盛土をおこなう基盤面は4.73～4.80mを測り、砂質土・細砂・粗砂・粘質土(第45図断面a-a'の土層8、同図断面b-b'・c-c'土層19～23・26、第46図断面d-d'土層4～8、同図断面e-e'土層1～8)が、ほぼ水平に盛土しており、廃絶後に路面から流出した盛土が西側溝(SD5017)に堆積する。盛土の残存厚は4～28cmを測り、西側溝(SD5017)に向けて厚くなる傾向を示す。盛土には、意図的に破碎した須恵器貯蔵具を主体に多くの土器片(第48図159～第50図184)を混ぜる他、道路主軸方向に長軸をもって枝・部材片(第44図、第51図185・186)を敷き置くことで、道路地盤の強化を図る。路面基盤面に盛土を突き固めた際の不規則な窪みが多数認められる点は、B区と同様である。また、西側溝(SD5017)側の基盤土が道路主軸方向での延長2.6m以上、幅約1.2m、深さ約50cmにわたり崩落したため、粘質土、細砂を補填・復旧した痕跡も確認できる(第45図断面c-c'土層41～43)他、東側溝側の基盤土の一部にも崩落が認められる。出土した多くの須恵器がVI期(VI₂期を下限)とし、この時期に路面を維持するための大規模な盛土作業が行われた可能性が高い。路面盛土の流出後は、C区南端鞍部(VI₃期下限)より続く濁黒灰色粘質土(第45図断面a-a'土層7、断面b-b'・c-c'土層6・9・49)が、ほぼ水平に堆積する状況である。

東側溝(C区SD5016) C区で延長約12mを検出した。側溝の平面形態は、路面側(西側)肩部が若干の屈曲をみせながらも直線的に延びるのに対して、東側肩部は調査区南端および北半で大きく張り出す。この東側張り出し部分については、旧側溝の痕跡と考えた。旧側溝の痕跡は、第45図ア-ア'で上幅約100cm、下幅約75cm、深さ35cm(底面標高4.44m)を、北半張り出し部分で上幅約200～265cm、下幅(推定)85～100cm、深さ35～68cm(底面標高4.20～4.53m)をそれぞれ測り、底面は起伏する。覆土(第45図断面c-c'土層44)は、新旧側溝で明確な切り合い関係が判然とせず、しまりのない灰色粘質土が堆積する。

新側溝は上幅100～160cm、下幅75～115cm、深さ30～68cm(底面標高4.16～4.44m)と、旧側溝より幅が狭く、比較的平坦な底面は北西側に向けて緩やかに深さを増す。覆土は、粘性の高い濁灰色粘質土(第45図断面a-a'土層9・9'、同b-b'土層14・18、同c-c'土層44)が堆積した後、一部に路面から流出した乳灰黄色



延長(西側溝SD5017):約22m

道路主軸方位:N-27° W

路面幅(推定旧道路)

断面イ-イ'	側溝心々推定距離 810cm
--------	----------------

路面幅(新道路)

断面ア-ア'	両側溝の路面側立ち上がり間距離 515cm
	側溝心々距離 680cm

断面イ-イ'	両側溝の路面側立ち上がり間距離 525cm
	側溝心々距離 740cm

路面整地土(新道路)

C区	残存盛土上面の標高 4.88~4.95m
	盛土基盤面の標高 4.73~4.80m
	(残存盛土厚 4~28cm)

B区	残存盛土上面の標高 4.78m前後
	盛土基盤面の標高 4.71~4.80m
	(残存盛土厚 2~5cm)

C区東側溝(SD5016)

[推定旧溝]	上幅 100~265cm・下幅 75~100cm
	深さ 35~68cm(標高 4.20~4.53m)

[新溝]	上幅 100~160cm・下幅 75~115cm
	深さ 30~68cm(標高 4.16~4.44m)

B・C区西側溝(SD5017) ※旧溝重複か

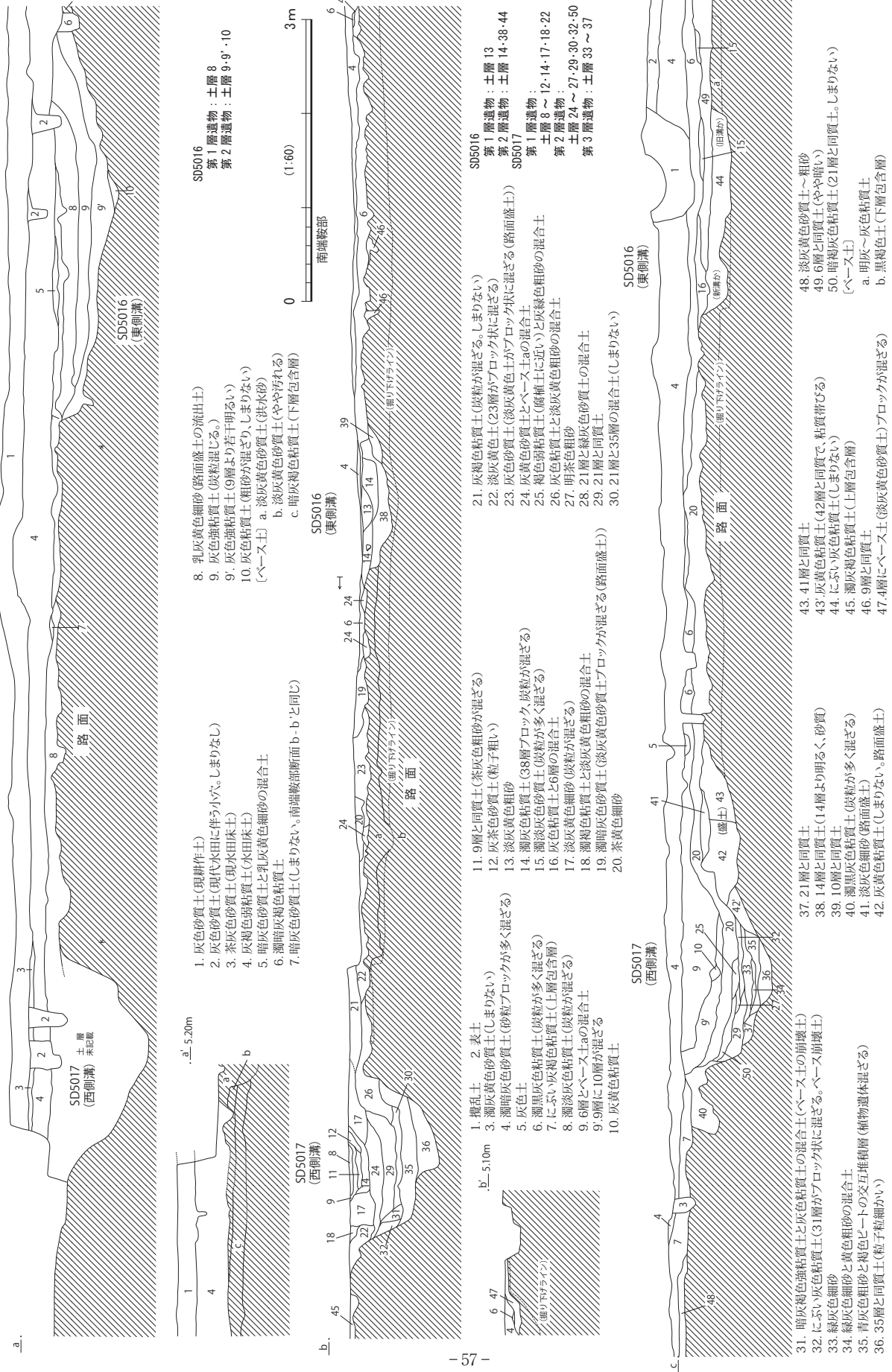
[新溝]	上幅 222~256cm・下幅 80~118cm
	深さ 76~96cm(標高 3.90~4.03m)

第4次調査区

※ 標高()は、路面盛土の検出上面の高さを示す。

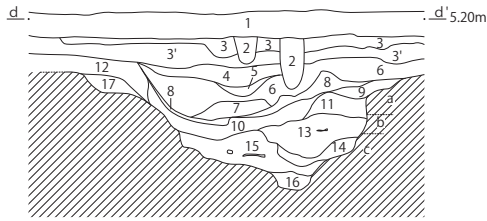
0 (1:150) 10m

第44図 B・C区上層道路遺構平面図 (S =1/150)



第45図 C区上層道路遺構土層断面図 (S=1/60)

C区土層断面

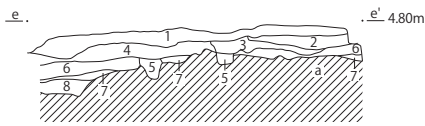


1. 灰色砂質土(現耕作土)
2. 灰色砂質土(現代水田に伴う小穴。しまりなし)
3. 茶灰色砂質土(現水田床土)
- 3'. にぶい灰褐色弱粘質土(水田床土)
4. 淡灰色細砂(路面盛土の流出か)
5. 淡灰色細砂(やや褐色がかる。路面盛土の流出)
6. 淡灰色細砂と淡褐色粘質土の混合土(路面盛土の流出)
7. 明茶灰色粗砂(路面盛土の流出)
8. 褐色弱粘質土と7層の混合土(路面盛土の流出)
9. 灰色粘質土(ベース土がブロック状に混ざる。しまりない。道路廃絶後の路肩部流出土)
10. 褐色粘質土(淡灰黄色砂質土ブロックが混ざる。しまりない。道路廃絶後の流入土)
11. 灰色粘質土(ベース土がブロック状に混ざる。しまりない。道路廃絶後の流入土)
12. 濁暗灰色粘質土(炭粒が多く混ざり、しまりない。道路廃絶後の流入土)
13. 灰褐色粘質土(炭粒が混ざり、しまりない。道路廃絶後の流入土)
14. 13層と15層の混合土(しまりない。道路廃絶後の流入土)
15. 青灰色粗砂と褐色ピートの交互堆積層(植物遺体が混ざる。機能時の水流で堆積)
16. 15層と同質土(粒子が細かい。機能時の水流で堆積)
17. 淡灰色砂質土と12層の混合土

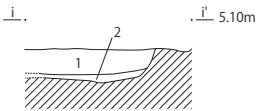
- [ベース土]
- a. 明黄色粘質土
 - b. 灰色粘質土
 - c. 青灰色粘質砂

SD5017

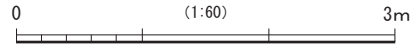
- 第1層遺物：土層 4～8
 第2層遺物：土層 9～14
 第3層遺物：土層 15・16



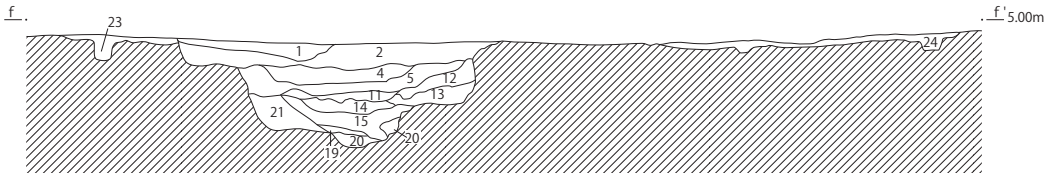
1. 濁黄灰色砂質土(炭粒、淡灰色砂ブロックが混ざる。しまりない)
 2. 1層と同質土(1より暗い。しまりない)
 3. 暗灰色砂質土(淡灰黄色砂ブロックが混ざる)
 4. 2層と同質土
 5. 3層と6層の混合土
 6. 淡灰黄色砂と褐色土の混合土
 7. 6層と同質土(やや暗い)
 8. 6層と同質土(褐色土が主体)
- [ベース土] a. 明黄色粘質土



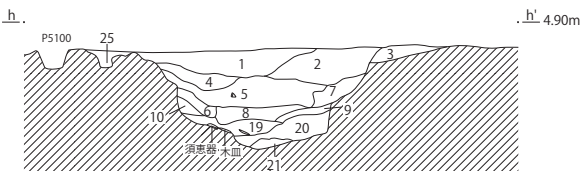
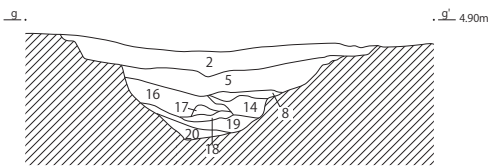
1. 暗褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)
 2. 1層と同質土(1層より若干暗く、軟質)
- [ベース土] 灰黄褐～黄褐色粘質土



B区土層断面



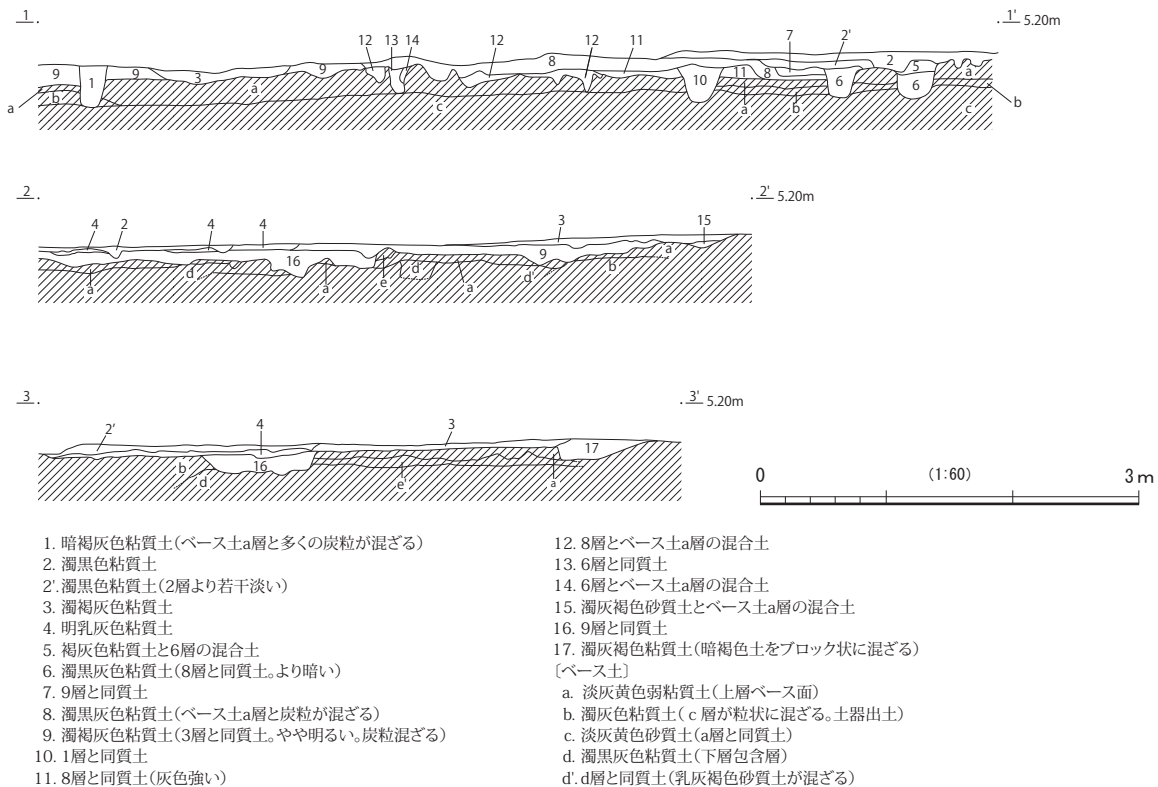
1. 淡灰黄色細砂と褐色ピートの交互堆積層(水流で堆積)
2. 灰黄色細砂(固くしまる)
3. 淡黄灰色細砂(道路盛土の流出土)
4. 褐色弱粘質土(淡灰黄色細砂ブロック状に混ざる)
5. 4層と同質土(植物遺体・淡灰黄色細砂ブロック状に複雑に混じる。やや暗い)
6. 褐色弱粘質土(植物遺体混ざる)
7. 2層と同質土(灰緑色弱粘質土)
8. 灰緑色粗砂とにぶい灰褐色粘質土の交互堆積層(植物遺体が混ざり、しまりない。水流で堆積)
9. 灰緑色シルトと褐色腐植土の交互堆積層(植物遺体が混ざる)
10. 青灰色粗砂
11. 淡灰黄色粗砂
12. 8層と同質土(淡灰黄色粗砂ににぶい灰褐色粘質土混ざる)
13. 5層と同質土
14. 灰緑色砂(植物遺体混じる)
15. にぶい灰色粗砂
16. 黄灰～灰緑色粗砂(植物遺体が混ざる)
17. にぶい褐色弱粘質土(しまりない)
18. 17層と19層の混合土
19. 灰緑色シルト～粗砂と褐色腐植土の交互堆積層(植物遺体が混ざる)
20. 灰緑色シルトと褐色腐植土の交互堆積層(植物遺体が混ざり、固くしまる)
21. 青灰色粗砂
22. 灰緑色砂
23. 暗灰褐色粘質土
24. にぶい灰色砂質土
25. 濁灰黄色粘質土(炭粒が混ざる)



SD5017

- 第1層遺物：土層 1～3
 第2層遺物：土層 4～6・11～13
 第3層遺物：土層 7～10・14～23

第46図 B・C区上層道路遺構土層断面図 (S=1/60)



第47図 C区上層南端鞍部土層断面図 (S=1/60)

細砂(同a-a'土層8)、淡灰黄色粗砂(同b-b'土層13)が堆積する。その後、路面と同様にC区南端鞍部(VI₃期下限)より続く濁黒灰色粘質土が、ほぼ水平に堆積する。

遺物は、上位層から、第1層遺物：路面から流出した細砂・粗砂、第2層遺物：粘性の高い濁灰色粘質土に分けて取り上げている。その多くは第2層遺物に属し、底面付近からの出土が目立った。後述のとおり、出土遺物は路面整地土と同じくVI₂期を下限とし、西側溝(SD5016)より早く機能を失うようだ。

西側溝(B・C区SD5017) B・C区で延長約12mにわたり新側溝を検出、旧側溝は重複する。平面形態は、両肩部とも緩やかな屈曲をみせ、B区北寄り(第44図断面g-g'付近)以北で、若干東側に主軸が振れる。規模は上幅222～256cm、下幅80～118cm、深さ79～96cm(底面標高3.90～4.03m)を測り、底面は水流に浸食され起伏しながらも顕著な勾配差を示さない。底面が東新側溝より20～40cm深い点で注目できる。

また、側溝の断面形状は、B区で後述する基本土層層序に符号するように、顕著な段掘り状を呈する。例えば、第46図断面f-f'で見れば、上部から順に、上段(上幅256cm、下幅228cm、深さ約15cm：基本層序第1層に対応)、中段(上幅180cm、下幅172cm、深さ25～30cm：同第2層に対応)、下段(上幅128cm、下幅100cm、深さ25～38cm：同第3層に対応)となり、次第に底面をかさ上げしながら幅広の溝を掘削した変遷がわかる。一方、C区は、西側肩部で若干の段差を示すものの、基本的になだらかな断面形状を呈する。基本土層層序は3層からなり、上位層から順に、第1層(路面から流出した砂質土・粗砂・細砂層(第45図断面b-b'・c-c'土層17・18・20・22、第46図断面d-d'土層4～8、断面f-f'～h-h'土層1～3))、第2層(ゆるやかな流れで堆積した、しまりのない褐灰色粘質土(第45図断面b-b'・c-c'土層24～27・29・31・32・50、第46図断面d-d'土層10・11・13・14、断面f-f'～h-h'土層4～6・11～13))、第3層(豊富な水流で堆積した細砂・粗砂・腐植土(第45図断面b-b'・c-c'土層33～36、第46図断面d-d'土層15・16、断面f-f'～h-h'土層7～10・14～23))となる。東新側溝(SD5017)との比較でいえば、①両新側溝第2層の土質の大きく相違すること、②西新側溝のみに基

本土層第3層が存在すること、さらに③西新側溝底面が20～40cm深いこと、④西新側溝第3層遺物にVI₂期の遺物が混ざることが指摘可能である。これらから、西新側溝(SD5017)は、掘削からC区南端鞍部から続く濁黒灰色粘質土で東新側溝と同時に埋没するまでの間、道路側溝の機能に加えて水路としての機能を兼ね備え、路面盛土の流入・堆積を経ながらも、機能し続けたものと理解できる。その最終の痕跡は第45図断面b-b'土層8・9・11・12・14で構成される断面や、同図断面c-c'土層9・9'の落ち込みで確認できる。なお、B区の西新側溝は、路面盛土からの流入土(基本土層第1層)で完全に埋まっており、C区より早く水路としての役割を終えたようだ。このように両新側溝は、道路側溝として掘削されたものの、付加された機能が異なる可能性が高い。

多量に出土した遺物は、上記の3層の基本土層層序を元に取り上げをおこなっており、取上げ区分は第45・46図に記載した。

2 出土遺物

両側溝を中心に多くの土器類が出土、以下、C区路面整地土、東側溝(C区SD5016)、西側溝(B・C区SD5017)に分けて記述する(第48～59図)。遺物は、道路の維持管理停止後の路面盛土(整地土)流出に伴い、須恵器貯蔵具を主体として、路面整地土とSD5016・17両側溝、さらに隣接するC区南端鞍部や、B区大溝等出土の破片と接合する場合が少なくなく、その接合具合は第13～16表を参照されたい。

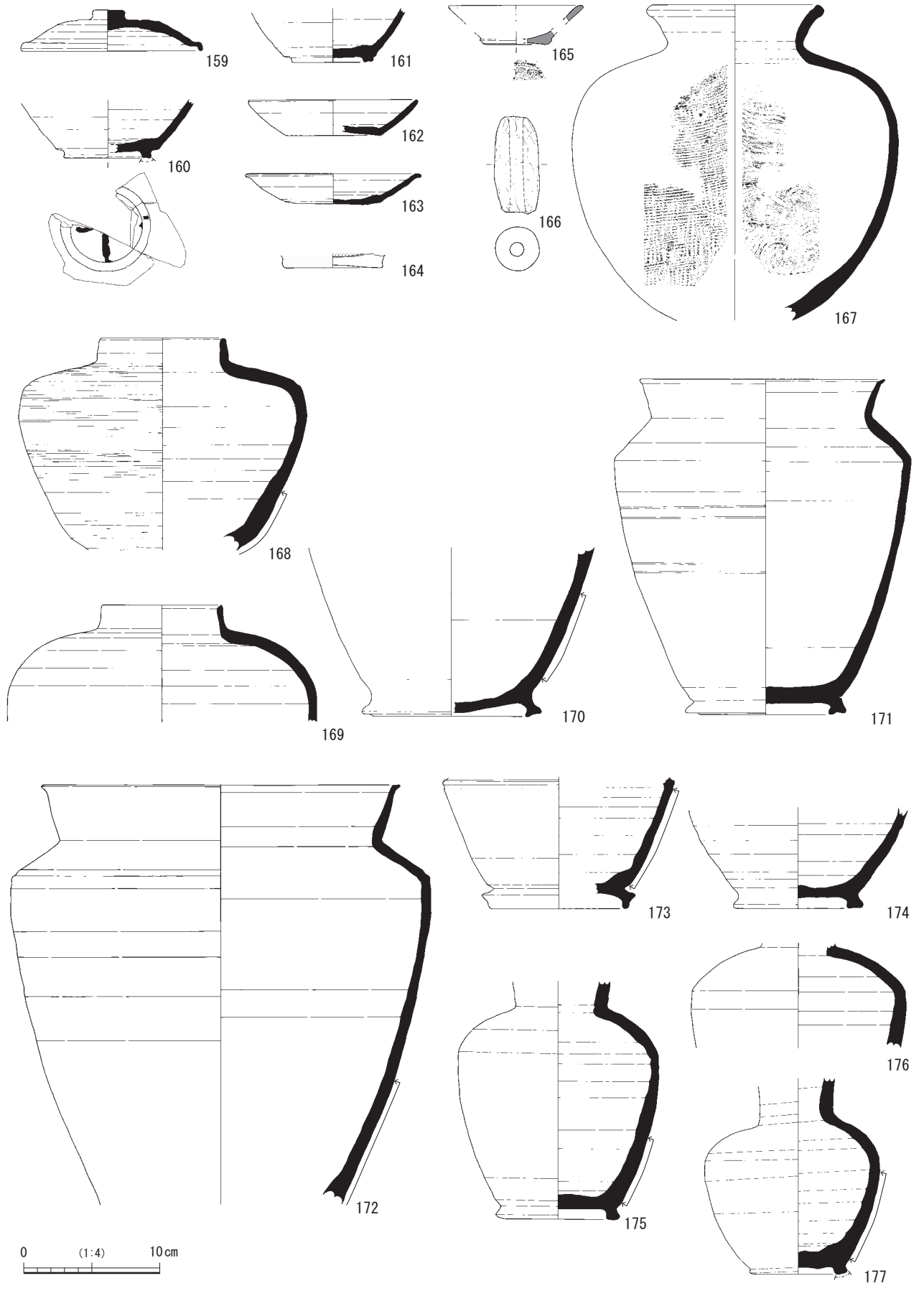
C区路面整地土 B区からの出土はほとんどなく、C区路面盛土出土の第48図159～第51図186を図示した。大部分の須恵器がVI期に属し、VI₂期を下限とする。ロクロ土師器無台椀164、緑釉陶器165、土師器土錘166、木製品185・186以外は須恵器であり、その大半を比較的残りが良い貯蔵具(壺・瓶・甕)が占める。道路地盤強化のため、不要となった個体を意図的に割り、その破片群を盛土に混ぜたものと推される。

ボタン状の鈕を貼り付けた坏蓋159は口径13.1cm、器高3.0cmを測り、V₁期に位置付けられる。160・161は底部が縮小したVI₂期の有台坏である。160は混和材をほとんど含まない粗い胎土で、産地は不明である。底部外面を硯面に使用する。161は、底部回転ヘラ切り離し後にナゲ調整を加えない。無台坏162の破片は、両側溝で接合した。器肉が薄い無台皿163は底部外面に回転ヘラ切り離し痕が残る。161～163はVI₂期に位置付けられる。外赤内黒の無台椀164は、底部外面に回転糸切り痕を残す。摩滅した緑釉椀類165は、軟陶の胎土から京都産と考えられる。土師器土錘166は、長さ約7cmを測る大形品で、残存重量73.2gを量る。167～172は壺である。叩き成形の167は口径12.0cmを測り、焼成段階で胴部が焼き割れた失敗品である。胎土の特徴から隣接するI期操業の加茂窯跡群産と考えられる。肩の張る短頸壺168は口径8.9cmを測り、頸部外面に径約11cmの蓋痕跡が残る。球胴形の短頸壺169は口径8.7cmを測り、無蓋で焼成される。170～172は無蓋の広口壺で、胴部下半を板状工具で成形するため、器面にケズリ様の痕跡が残る。

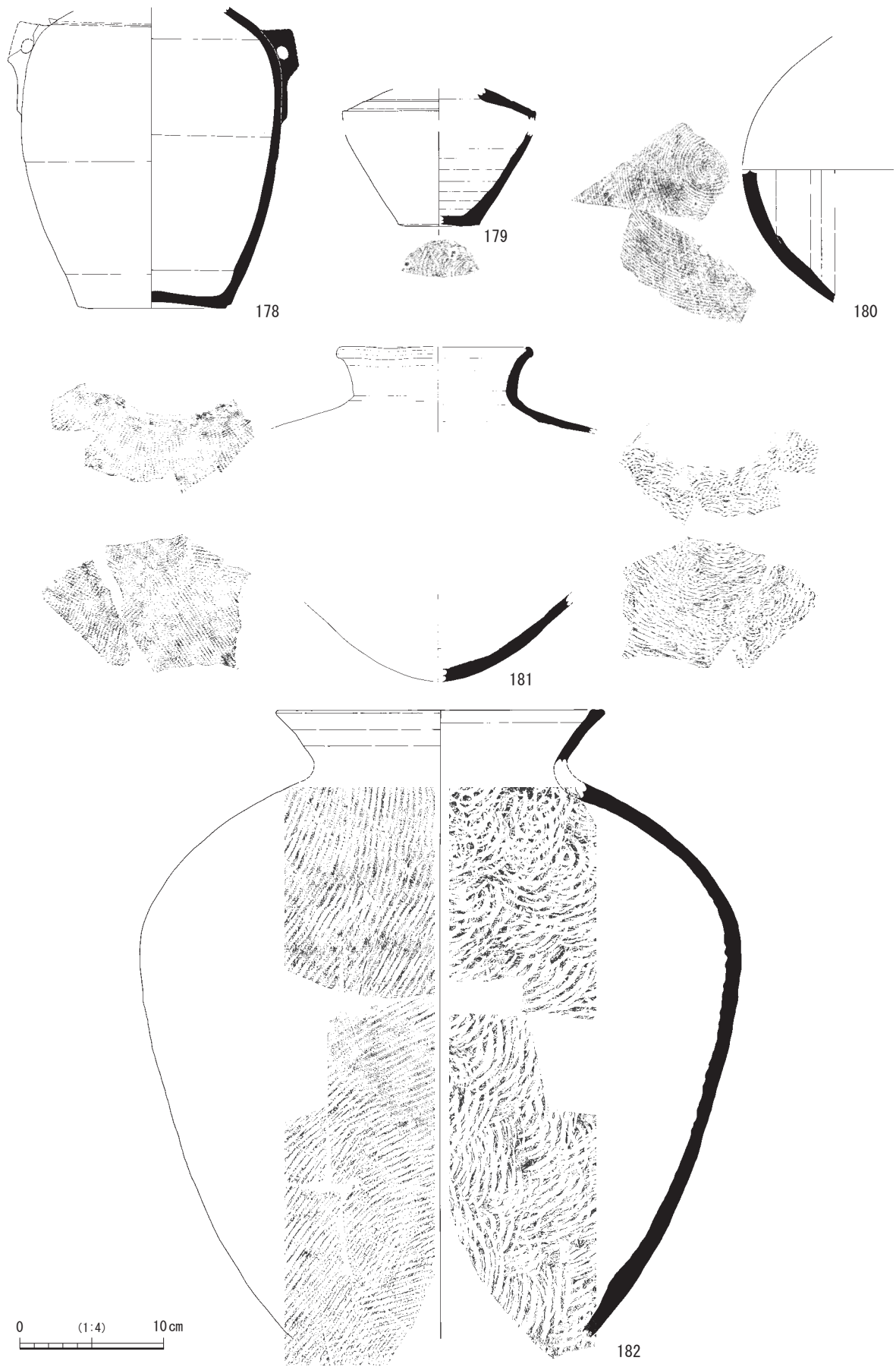
170・171はしっかりと台部が外展し、171で口径17.9cm、器高24.6cm、172で口径26.3cmを測る。173～177は長頸瓶である。173は古相の台部を付すのに対して、174の台部は断面方形に近い。175～177は肩部を丸く仕上げた器形を呈する。177は煮沸容器に転用され、胴部中位外面に水平な煤付着と器面の変色が認められる。第49図178は双耳瓶である。小形瓶179は底部回転糸切り痕を残し、胎土に白色粒が混ざる(産地不明)。横瓶180は側面を大きめの粘土板で閉塞する。第49図181～第50図184は中型甕である。古相を呈する181は口径約19cmを測り、口縁部と底部は別個体の可能性を残す。182・183は、口縁部が大きく外傾する。184は口縁端部が肥厚気味である。

第51図185・186は整地土中に道路主軸に沿うように据え置かれた木材の一部である(写真図版12)。185は長さ約275cmを測る枝を折っただけの材、186は長さ103cm以上、幅36cm、厚さ7cmのスギ材である。

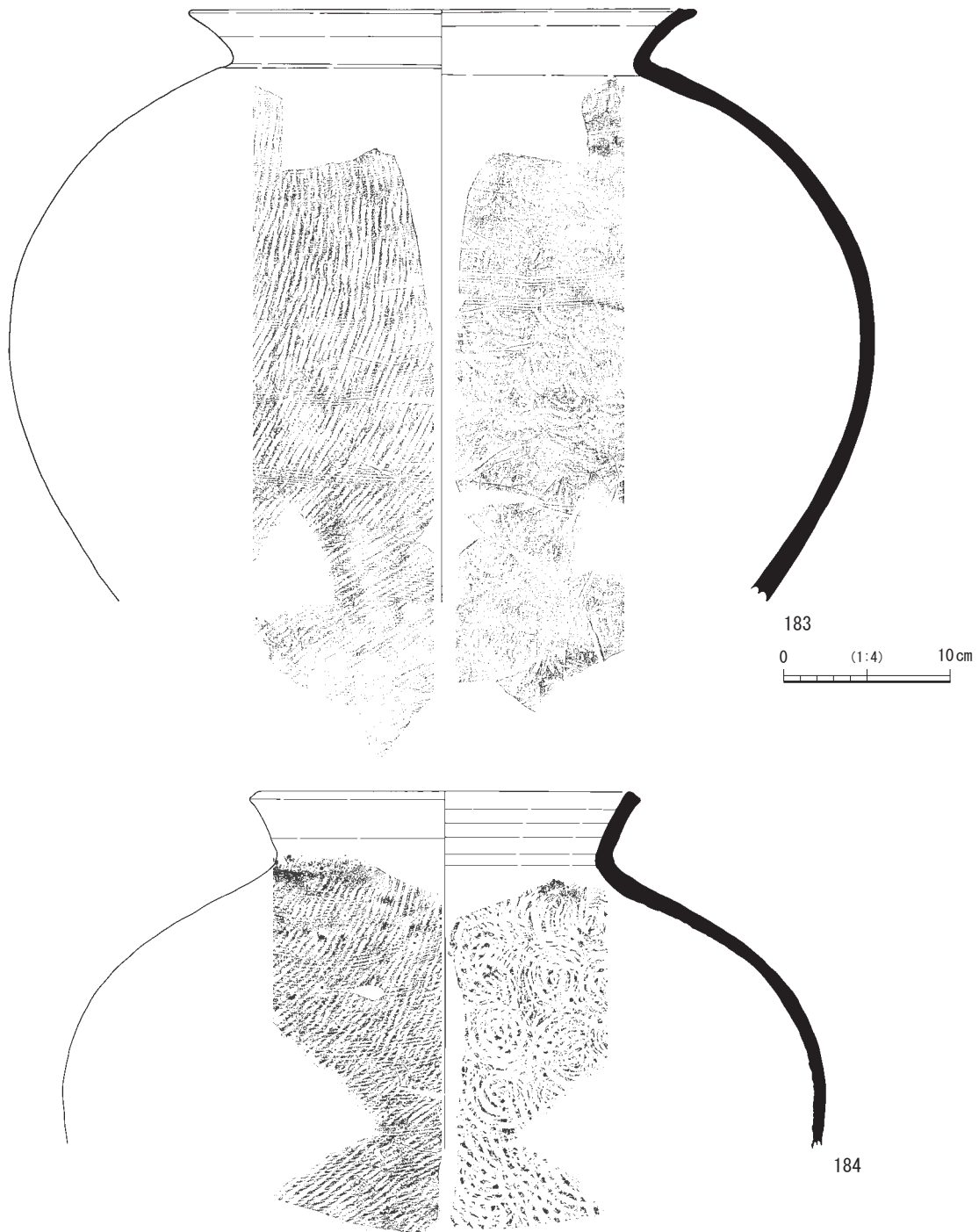
東側溝(C区SD5016) 出土遺物のうち第51図187～第52図213を図示した。190・191・193・198以外は第2層遺物となり、187～209が須恵器、210～213がロクロ土師器、214が木製品である。須恵器食膳具はVI₂期を下限とするものの、西側溝(SD5017)とは異なり、IV・V期に属する個体が比較的多い。187～194は有台坏で、187



第48図 C区上層道路遺構（路面整地土）出土遺物実測図1（S=1/4）

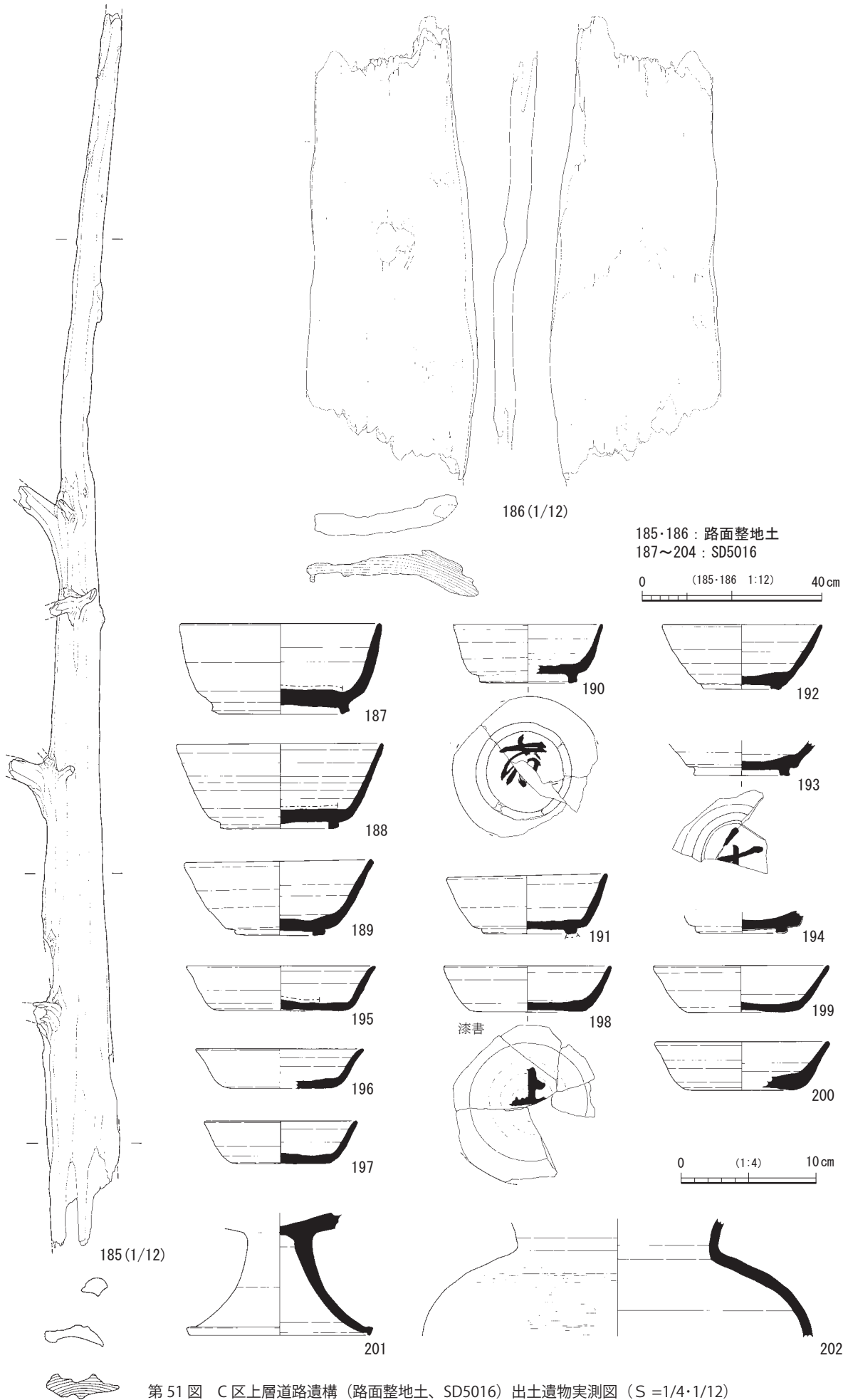


第49図 C区上層道路遺構(路面整地土)出土遺物実測図2 (S=1/4)

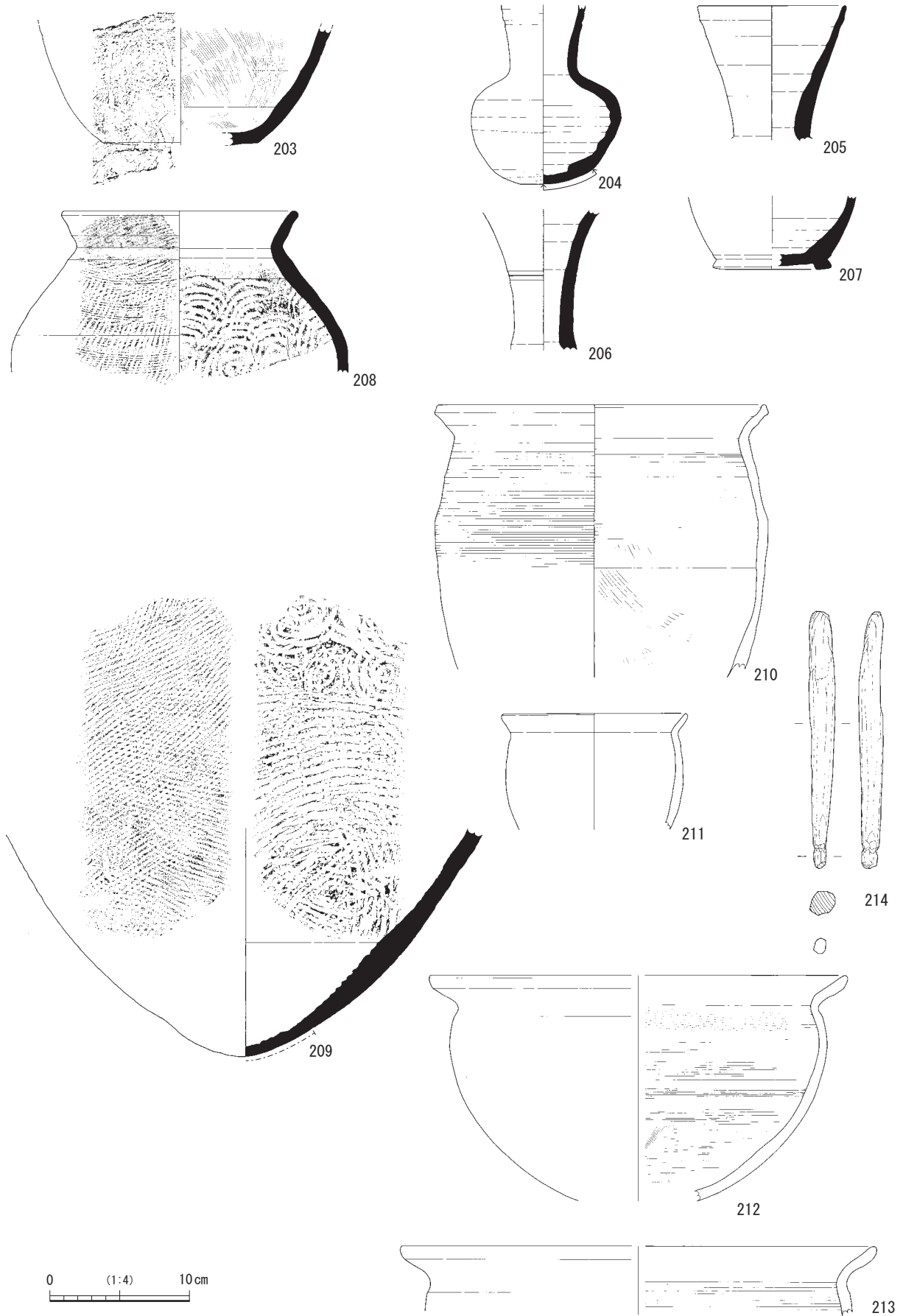


第50図 C区上層道路遺構（路面整地土）出土遺物実測図3（S=1/4）

～189は底部内面が使用に伴い磨耗する。胎土の特徴から187が鳥屋窯跡群産、188が金沢末窯跡群産、189が高松・押水窯跡群産と考えられる。190はV₁期に位置付けられ、底部外面に記された墨書は「茂」の可能性が高い。191は口径11.7cm、器高4.5cmを測る。192は、扁平な台部を外寄りに貼り付け、口縁部内面にタール状付着物が残る。VI₂期の193は、底部外面に「千」と墨書する。194は生焼けのため摩滅が著しい。195～200は無台坏で、195がⅢ期、199・200がV期に位置付けられる。195は胎土の特徴から能美窯跡群産と考えられる。196は口縁部でゆるやかに外反する。197は底部内面の一部に煤が付着する。IV₂(新)期の198は生焼け近く、



第 51 図 C 区上層道路遺構 (路面整地土、SD5016) 出土遺物実測図 (S = 1/4・1/12)



第52図 C区上層道路遺構 (SD5016) 出土遺物実測図 (S=1/4)

底部外面中央に茶褐色の漆で「上」と記す。199は器肉が薄いのに対して、200は底部肉厚である。胎土の特徴から、高坏201は鳥屋窯跡群産、広口壺202羽咋窯跡群産の可能性をもつ。第52図203は平底の壺と考えられ、内面にハケ調整を施す。204は、底部外面に粗いケズリ調整を加える。長頸瓶205は近接する加茂窯跡群産となる。長頸瓶206は口縁部を水平に打ち欠く。小型・無蓋の207は、断面方形の台部が外展する。I期と考えられる甕208は口径16.2cmを測り、産地不明である。甕209は、第41図99、第53図220、第63図408等と同様に、底部を丸底に叩き出す際に内面平行文あて具を用いる。210～213はロクロ土師器である。甕210下半には、かすかに叩き成形痕が認められる。小甕211は煮沸に伴う器面の剥離が目立つ。埴212は口径約30cm、213は口径約34cmを測る。214は、先端を有頭状に削り出す。スギ材を用い、長さ18.4cm、径1.9cmを測る。

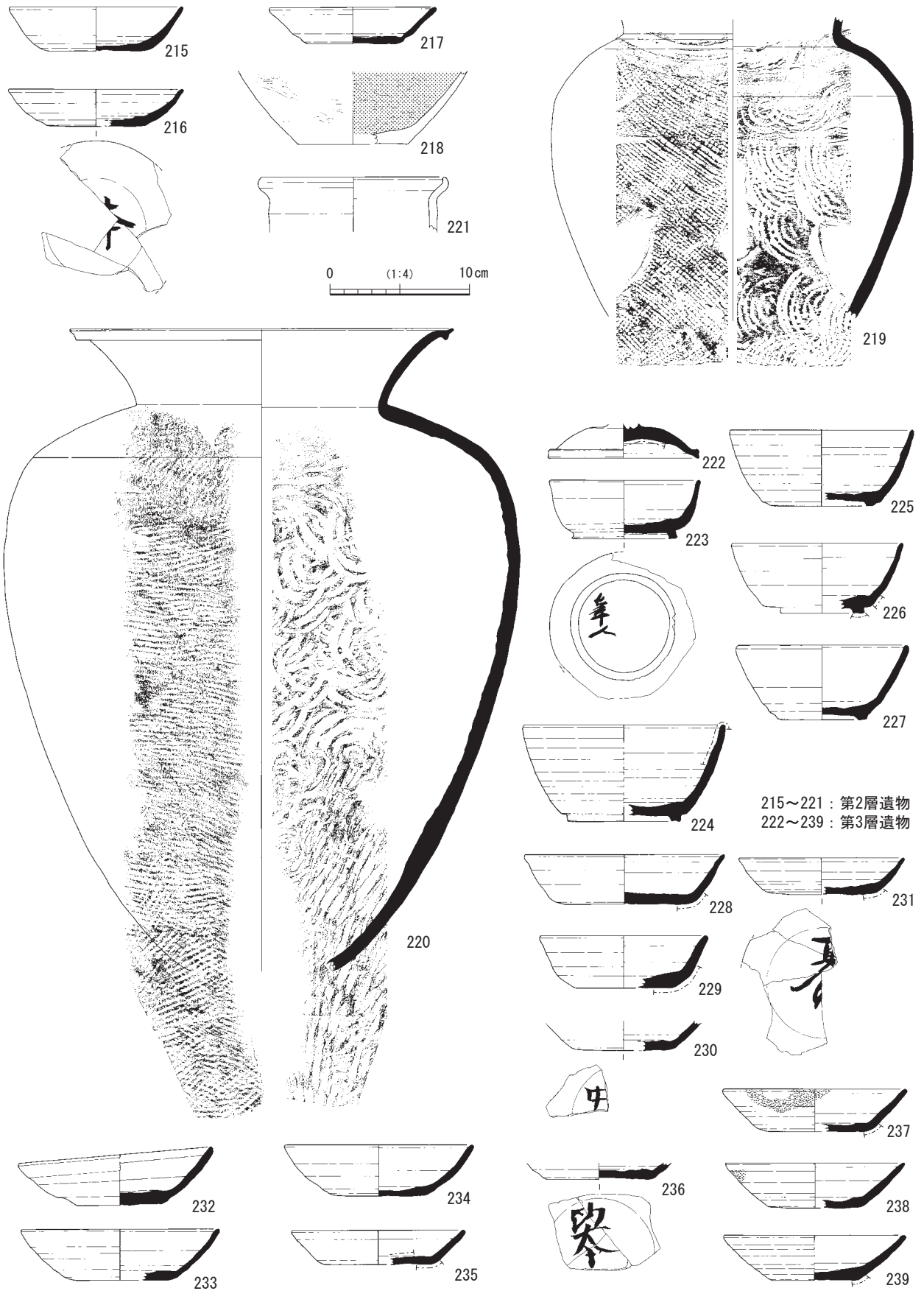
西側溝(B・C区SD5017) C区は、第2層遺物として第53図215～221、第3層遺物として同図222～第55図262を図示し、遺物量は後者が大部分を占める。また、素材別では、215～217、219・220、222～244、247～250が須恵器、218・221、245・246、251～257がロクロ土師器、258～262が木製品となる。第3層出土の食膳具はVI₃期を下限とし、東側溝(SD5016)に比してVI期に属する個体が多い特徴を示す。

第2層遺物では、無台坏215～217は器肉が薄く、216・217がVI₂期に位置付けられる。皿形に近い216は、底部外面に「本」と墨書する。内黒のロクロ土師器無台坏218は、底部付近に手持ちケズリを施す。219・220は甕である。219の外面叩き具は、一見格子状を呈する。220は口径27.5cmを測り、底部丸底とするため、第52図209等と同様、内面に平行文あて具を用いる。小甕221は口径13.0cmを測り、煮炊痕が明瞭に残る。

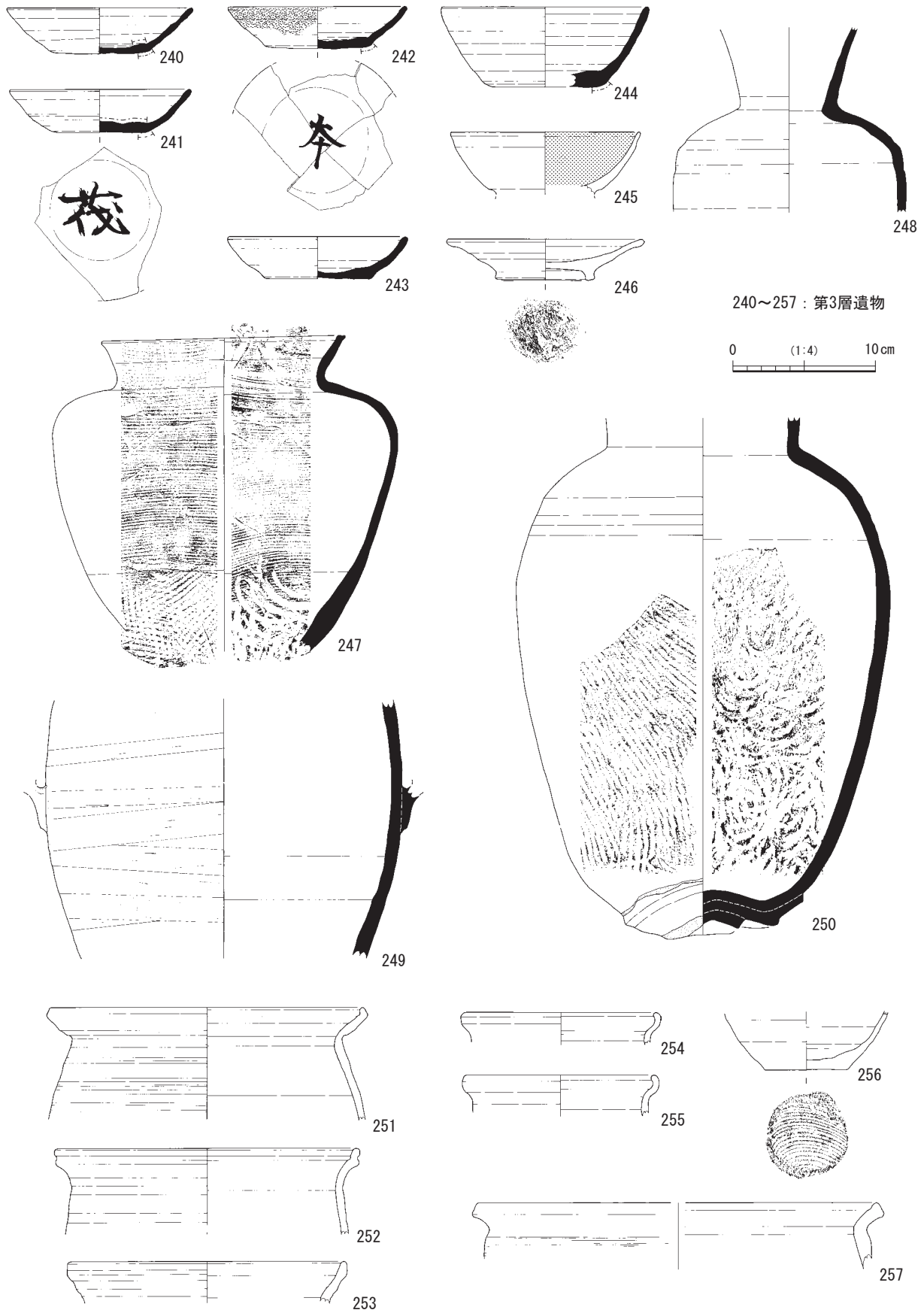
第3層遺物では、坏蓋222の内面が使用に伴い平滑となる。223～227は有蓋焼成の有台坏で、223がIV_{2(中)}期、体部が内湾する224～227がVI₂期に位置付けられる。223は底部外面に「口人」と墨書し、1文字目は「真」に近い筆体となる。224は口径14.3cm、器高6.9cmを測り、使用に伴い磨耗する。226は偏った台部を貼り付ける。227は外面全体に煤が付着する。228～243は無台坏で、228がIII期、229がIV₁期、230～236がV₂～VI₁期、237～243がVI₂期に位置付けられる。228は口径14.2cm、器高3.5cmを測り、生焼けに近い。229とともに、使用に伴い磨耗する。230の底部外面に記された墨書は判読できない。231の墨書は「真継」の可能性が高い。232～234は口径14cm前後を測り、還元が弱い点で共通する。皿形に近い235は、使用に伴い磨耗する。236は、底部外面に「口本」と墨書する。237～240は体部が大きく外傾し、237・238口縁部に煤・油痕が付着する。241は底部外面に「茂」と墨書し、廃棄後に煤が付着する。242は底部外面に「本」と墨書し、灯明容器に転用される。243は生焼けに近く、口縁端部は内側に肥厚する。深身の坏244は口径14.4cm、器高5.6cmを測り、胎土の特徴から金沢末窯跡群産と考えられる。内黒のロクロ土師器有台坏245は口径13.1cmを測り、体部は内湾する。ロクロ土師器有台皿246は口径13.5cm、器高2.9cmを測り、しっかりと断面方形の台部を貼り付ける。245はVI₃期、246はVI₂期にそれぞれ位置付けられる。壺247は底部を叩き成形により丸底に仕上げる。248は長頸瓶、249は双耳瓶で、249は外面を板状工具により丁寧成形する。狭口甕248は、置き台に用いた坏類片2個体が溶着する。胎土の特徴から鳥屋窯跡群産の可能性が高い。251～257はロクロ土師器である。251はかすかに叩き成形痕が残る。252は硬質の焼成である。小甕254・255は口径約13cmを測り、口縁端部は内湾する。胎土は近似し、煮炊痕を明瞭に残す。小甕256内面には炭化物が付着する。第55図258～260は、ヒノキ材の挽物白木盤である。口径16～17cm、器高約1.5cmを測り、体部は大きく外傾する。角材261はスギ、杭262はマツ属複雑管束亜属に同定される。

B区は、第1層遺物として第56図263～266を、第2層遺物として同図267～269、第3層遺物として同図270～第59図320・2010・2011を図示した。素材別では、264～301・307～320が須恵器、263・302～306がロクロ土師器、321～327・2010・2011が木製品となり、第3層出土の食膳具はVI₃期を下限とする。

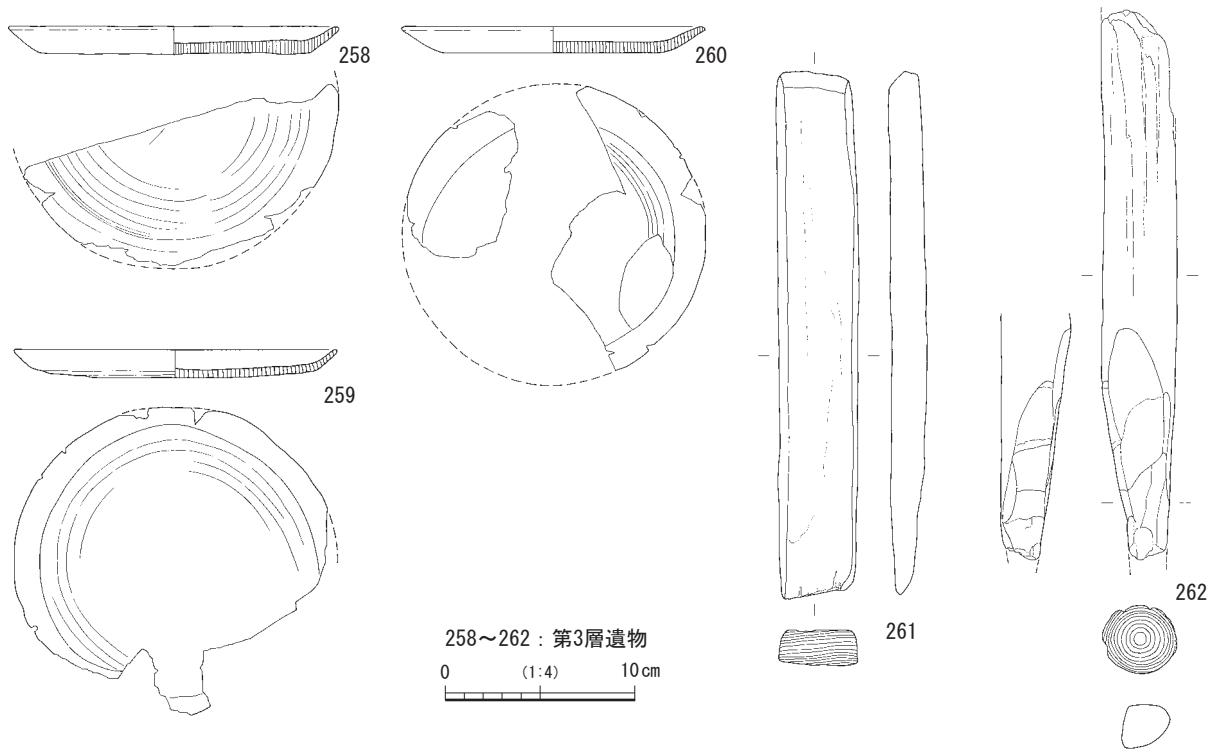
第1層遺物では、内黒のロクロ土師器有台皿263は口径13.8cmを測り、底部内面周縁部に圏線様の窪みを施す。264～266は須恵器で、264・265は瓶となる。双耳瓶265の底部外面には、径約7.5cmの置き台痕が残る。



第53図 C区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図1 (S=1/4)



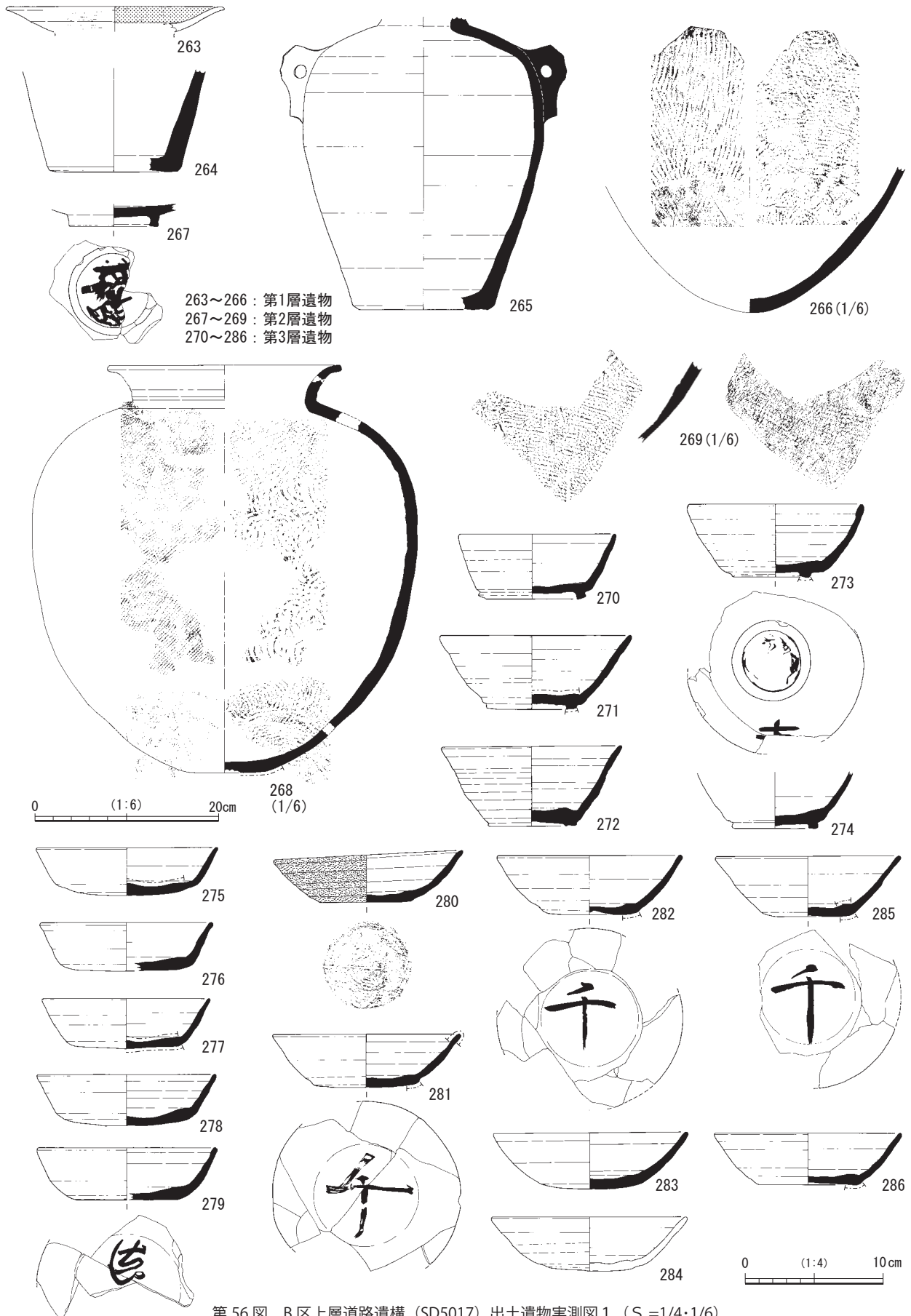
第54図 C区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図2 (S=1/4)



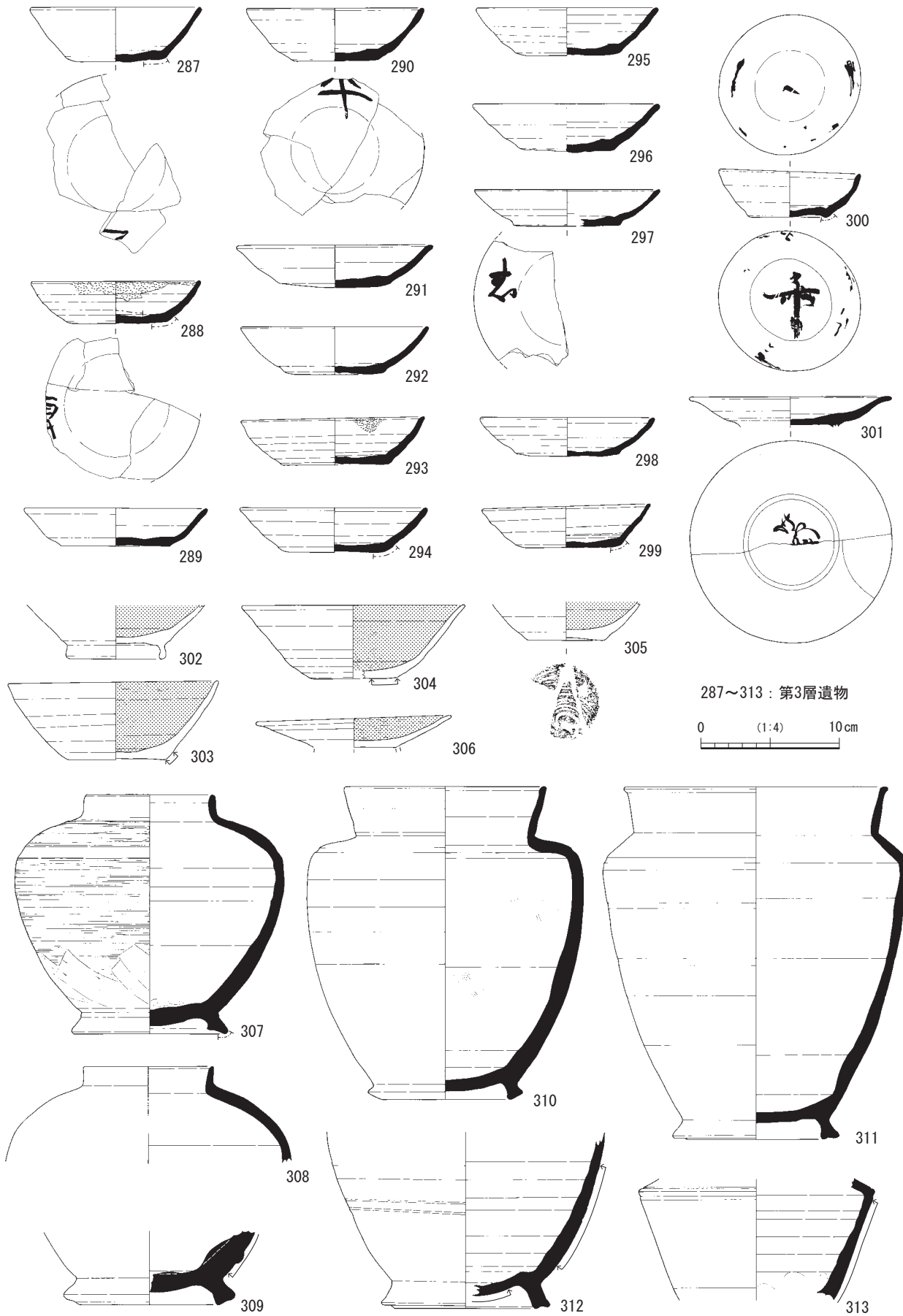
第55図 C区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図3 (S=1/4)

る。甕266は、第41図99等と同様に、底部を丸底に叩き出す際に内面平行文あて具を用いる。第2層遺物では、須恵器有台皿267はしっかりと断面方形の台部を付け、硯に転用される。須恵器甕268は球胴形を呈し、使用に伴い底部外面は平滑となる。須恵器甕胴部片269は、内外面とも格子状の叩き具を用いる。大粒の花崗岩が混ざる特徴から、富山県小矢部周辺の窯跡産と考えられる。

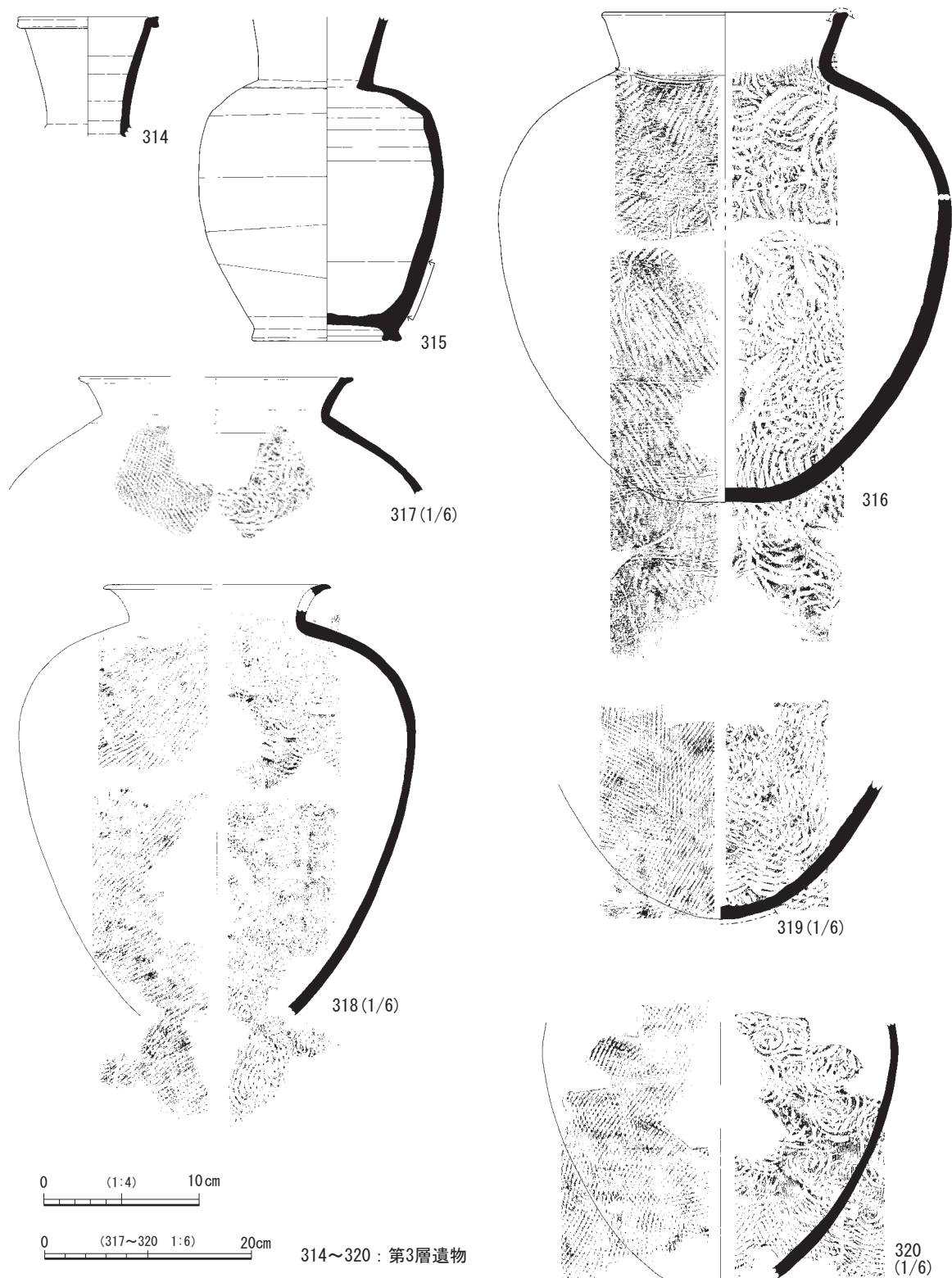
第3層遺物のうち、第56図270～274は底部回転ヘラ切り離しの有台坏で、270がV₂期、271～274がVI₂期に位置付けられる。生焼けの270は口径11.2cm、器高4.7cmを測る。縮小した底部をもつ271～274は、底部回転ヘラ切り離し後、比較的しっかりと台部を貼り付ける点、内面の底部と体部の境が圏線状に窪ませる点で共通する。271は底部内面が使用に伴い磨耗する。ロクロひだが目立つ272は無蓋で焼成される。273は体部内湾し、口縁部は内側で肥厚する。また、底部を硯面に転用する他、外側面に記された墨書は「主」の可能性が高い。274は異なる胎土を用いて台部をつくる。第56図275～第57図299は底部回転ヘラ切り離しの無台坏で、275～277がV₁期、278・279がV₂期、280・281・283・284・286～289がVI₁期、282・285・290～299がVI₂期に位置付けられ、282・285はVI₃期の可能性を残す。275は底部外面中央に黒褐色を呈する漆が付着する。277は底部内外面とも使用に伴い磨耗する。279は口縁端部が肥厚し、底部外面に墨書を記す(文字不読)。280～287は体部が内湾気味に外傾する。280は底部外面に丁寧なナデ調整を施す。また、煮沸容器に転用したため、器壁は脆くなり、外面に煤が付着する。生焼けに近い281・282は、底部外面に「千」と墨書する。丸底風の283・284は、廃棄後に被熱する。285は底部外面に「千」と墨書する。286は煮沸容器に転用したと考えられる。287・288の外側面に記された墨書は判読できない。288は口縁部に煤が付着する。盤形に近い289は、口径13.0cm、器高7.8cmを測る。290～299は底部が円盤状を呈し、口縁端部が肥厚する個体が多い。290～292は廃棄後に被熱し、煤が付着する。290は外側面に「本」と墨書する。293は、口縁部内面のタール状付着物から灯明容器に転用したと考えられる。294は一部生焼けである。296は器面の変色等から煮沸容器に転用したと考えられる。297の底部外面に記された墨書は「志」「去」に近い筆順にみえる。299は重ね焼きの際に体部が焼きゆがむ。無台の小坏と考えた300は、口径10.5cm、器高3.5cmを測る。体部内外面とも不規則な列点、



第56図 B区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図1 (S=1/4・1/6)



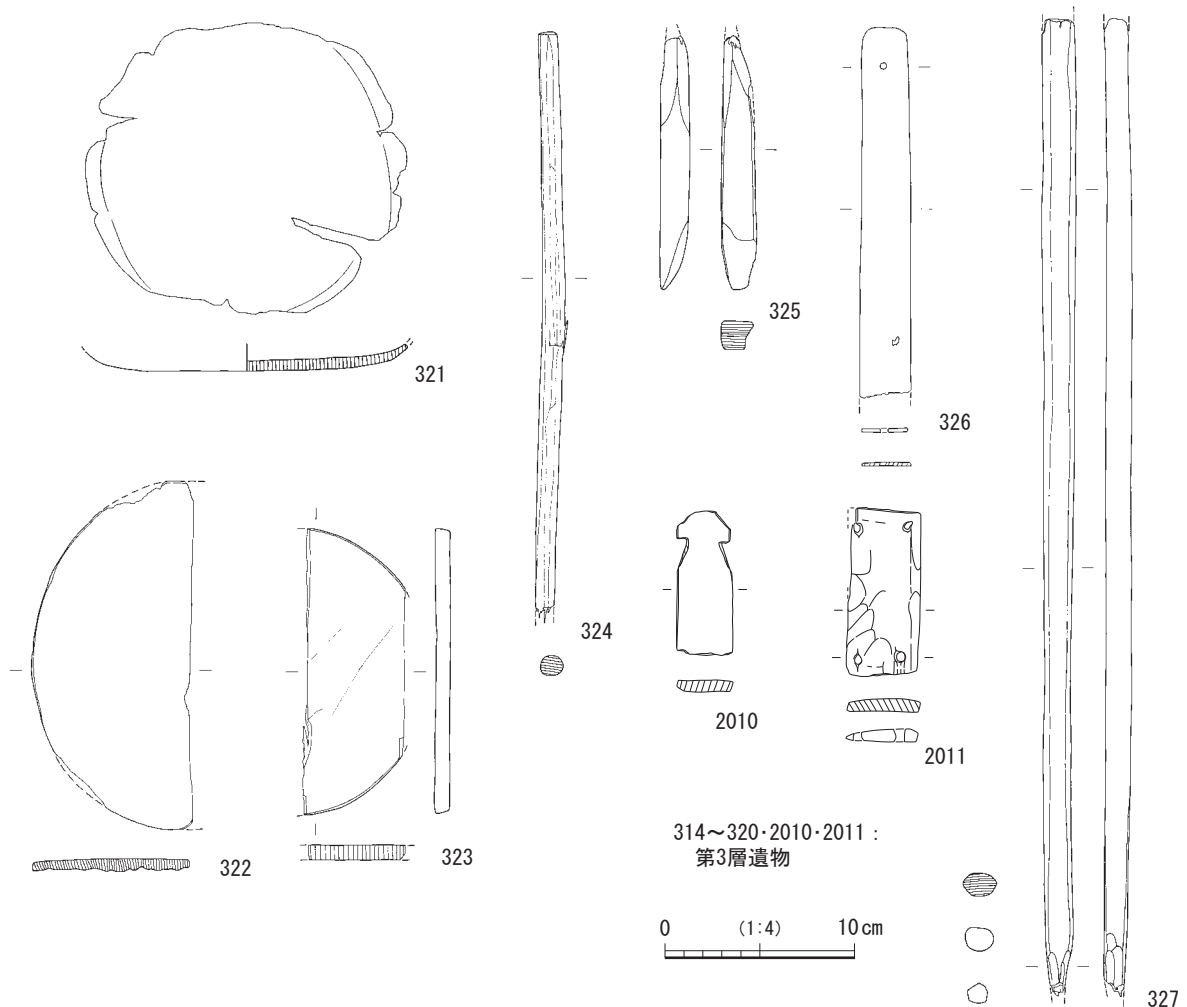
第57図 B区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図2 (S=1/4)



第58図 B区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図3 (S =1/4・1/6)

または短線で記された墨痕が残り、最後に底部外面に「千」と墨書する。類似例として第65図447があり、何らかの祭祀行為の可能性をもつ。VI₂期の有台皿301は、底部外面を硯面に転用する。

内黒のロクロ土師器302～305は底部回転糸切り痕を残し、302・305がVI₃期に位置付けられる。被熱痕を



第59図 B区上層道路遺構 (SD5017) 出土遺物実測図4 (S=1/4)

残す有台壺302は、体部が直線的に外傾し、ひしゃげた台部を付す。無台壺303は口径14.7cm、器高5.7cmを測る。無台壺304は口径16.0cm、器高5.3cmを測り、底部外面外縁に手持ちケズリを加える。無台壺305は、304と同様に胎土中に海綿骨針が混ざる。有台皿306は、体部が直線的にのびる。

第57図307～311は壺、同図313～第58図315は瓶、同図316～320は甕である。短頸壺307は口径9.1cm、器高17.2cmを測り、外面にカキメ調整を施す。同形を呈する308は口径9.4cmを測り、口縁部に欠けが連続する。309は焼きぶくれが顕著である。広口壺310は口径14.6cm、器高22.5cmを、311は口径18.8cm、器高25.5cmを測り、肩部を沈線で加飾する。312は外面に丁寧な回転ケズリ調整を加える。313～315は長頸瓶で、313は肩部で明瞭に屈曲する。314の口縁端部は、断面方形に近い形状を呈する。315は肩部上半に1条の沈線を加える。球胴形の甕316は口縁端部、内面頸部付近が使用に伴い平滑となる。また、破片の一部はSD5001から出土する。中甕317は口径23.0cmを測る。319は使用に伴い、底部外面が摩耗する。第59図321～327は木製品で、挽物白木盤321はヒノキ、円形板322・323、棒状木製品324・327、板状木製品326はスギを材とする。付札状木製品2010は側面を加工して、頭部を圭頭状に仕上げる。図下側で切断し、長さ7.8cm、幅3.0cm、厚さ0.3cmを測る。四隅に円孔(孔径0.3～0.5cm)を穿った方形の板材2011は両面を加工し、若干湾曲する。2010とともにスギと考えられる。

第5節 大 溝 (遺構：第60図、遺物：第61～70・88図、第16～20・38表)

1 遺構

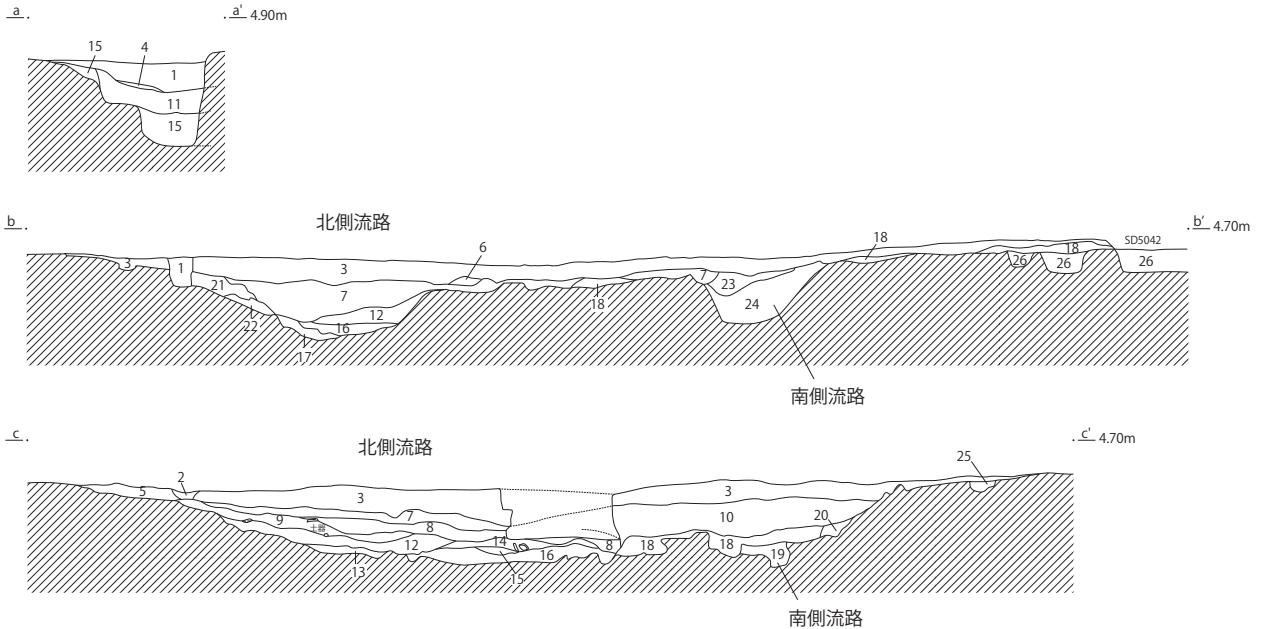
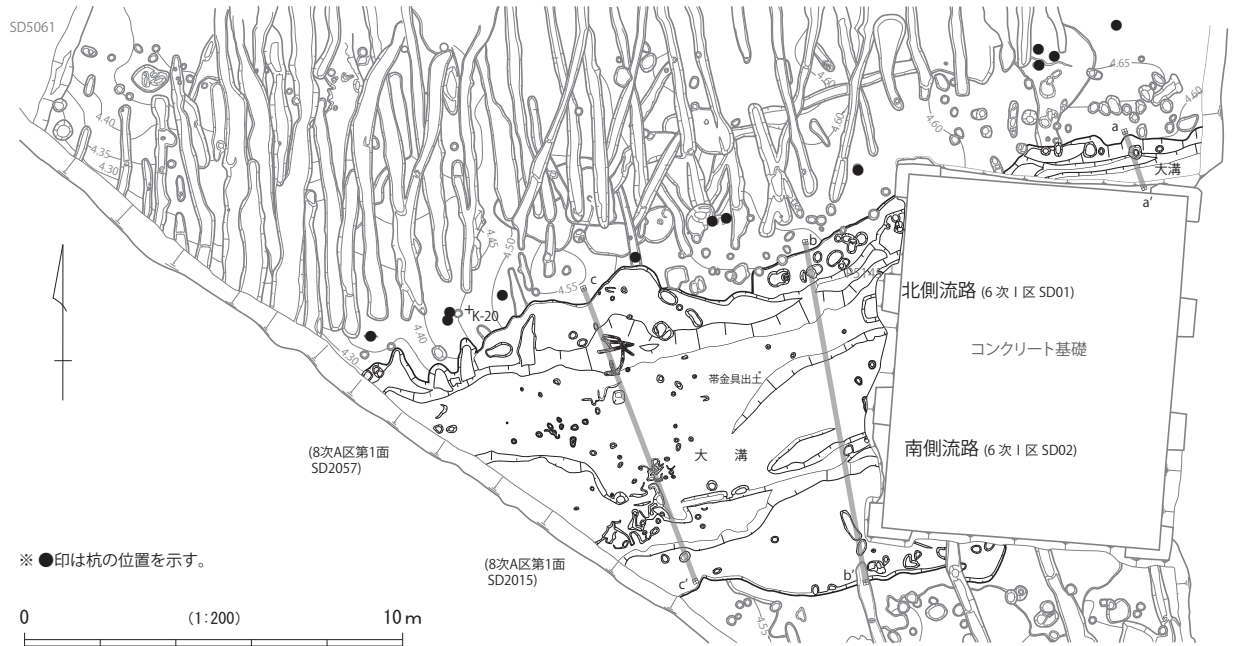
概要 B区K・L-20・21で検出した大溝は、西側が県第8次A区第I面SD2057・2015を経て県第1～3次調査区大溝に、また東側が県第6次I区上層SD01・02を経て、起点となる県第4次調査北区道路遺構西側溝・SX4003(大オチコミ、SX43)・SD4019に接続する。また、第60図コンクリート基礎下の県第6次I区上層SD01覆土からは重要文化財「加賀郡勝示札」が出土している。

旧河北潟・低湿地に注ぎ込む大溝全体については、これまでの調査成果⁽⁵⁾を概観すると、①古代Ⅱ₃期の遺物を最古とする旧流路(B区SD5061～第8次調査A区第I面SD2007～第1～3次調査区大溝)が、V期頃にB区SD5061以東を道路遺構西側溝・SX4003を起点とする新流路(延長約40m)に付け替えられること(第6・8次調査)、②新旧いずれの流路も掘立柱建物柱建物と重複する例がなく、大溝を基軸とした敷地割りのもと、両岸に掘立柱建物群が展開すること、③道路遺構西側溝・SX4003を起点とした新流路の時期は、東北東方向から西南西方向に向けて延長約180m、幅3～6mの規模で流下すること、④新流路のうち、新たに開削した流路は2条の流路よりなること(第4次調査北区SX4003・SD4019、本次調査、第6次I区上層SD01・02、第8次A区第I面SD2057・2015)、⑤Ⅱ₃期～Ⅵ期という長期にわたり、墨書土器を含む大量の遺物が出土する中で、Ⅲ・Ⅳ期を主体とした第1～3次調査区大溝最下層遺物群が旧流路の機能時期を示すこと、⑥道路遺構の維持管理の停滞と略同期に、大溝の維持管理が放棄され、次第に埋没すること、⑦中世以降の掘立柱建物と大溝は位置的に重複せず、大溝覆土から当該期の遺物出土をみないことから、大溝ラインが一定の土地割り機能を保持し続けたこと、等となる。これらの中で、本次調査で検出した大溝は、新流路2条、また両岸に展開する耕作に伴う小溝群との新旧関係等について言及できる部分をもつ。

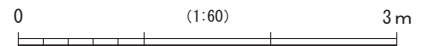
さて、B区の大溝は、1条の溝として検出し(図版16)、調査に着手した。以下では、第4・6・8次調査の成果を踏まえ、第6次I区SD02および第8次A区第I面SD2015につながる流路を「南側流路」、南側流路の2～3m北側に本流をもち、第6次I区SD01および第8次A区第I面SD2057につながる流路を「北側流路」と呼称して報告を行う。その変遷は、SD5061に代わる大溝東側の新流路として、まずV₁期に比較的小規模な北側流路を掘削、道路遺構西側溝(SD5017)と接続する。その後、道路遺構路面の改修がおこなわれるⅥ₂期に、新たに直線的な南側流路を掘削する。この南側流路は、顕著な多量の流水痕跡は認めがたく、その排水機能も限定的な印象を受け、Ⅵ₃期までに埋没する。北側流路は、一連の調査で頻繁な流水痕跡と、墨書土器を含む多量の出土遺物を確認しており、道路遺構西側溝(SD5017)の排水溝として、南側流路より長く機能するが、Ⅶ₁期までには維持・管理が放棄されたと考えられる。

規模等 延長約7mを検出した南側流路は、肩部がしっかりと残る断面逆台形を基調とし、主軸方位N-約27°Wを示しながら直線的にのびる。北側流路と大部分が重複するため、南西端で規模が判然としないものの、第60図土層断面b-b'で上幅約1m、下幅約0.45m、深さ約60cmを、同c-c'で下幅約1.8m、深さ約70cmを測る。延長約22mを検出した北側流路は、緩やかな肩部をもち、底面は比較的平坦である。第60図土層断面b-b'で上幅約6.4m、下幅約4.7m、深さ約60cmを、同c-c'で上幅約8.0m、下幅約0.9m、深さ約65cmを、それぞれ測る。

土層層序 基本土層層序は、大きく4層に分かれ、第1～3層が北側流路、第4層が南側流路に属する。上位層から順に、第1層：遺物包含層と同質のしまりのない濁暗灰褐色粘質土(第60図土層3)、第2層：よどんだ流れで堆積した淡灰黄色砂、褐色腐植土層(同図土層7～11)、第3層：豊富な水流に伴い堆積した細砂・粗砂層(同図12～17層)、第4層：南側流路堆積土である緑灰～灰褐色を基調とする粘質土層(同図18～20、23、24層)となる。先行して埋没する南側流路は、継続的な水の流れが形成する細砂・粗砂層の堆積を



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 濁黄灰色粘質土 2. 濁灰黄～淡灰青色砂質土 3. 濁暗灰褐色粘質土(黄色砂が混ざり、しまりない) 4. 淡灰青色砂(しまりない) 5. 灰色粘質土(ベース土の流れ込み) 6. 3層と7層の混合土 7. 淡灰黄色砂と褐色腐植土の交互堆積層
(植物遺体が多く混ざる) 8. にぶい褐色砂質土(植物遺体多い) 9. 灰色弱粘質土と淡灰青色砂の交互堆積層 10. 褐色腐植土(植物遺体、ベース土粒が混ざる) 11. 2層と褐色弱粘質土の混合土(しまりない) 12. 淡灰色細砂と褐色弱粘質土の交互堆積層 13. 緑灰色細砂 14. 淡青灰色粗砂 15. 14層と褐色土の交互堆積層 16. 淡青灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層 | <ol style="list-style-type: none"> 17. にぶい灰色粘質土 18. 緑灰色粘質土(黒灰色粘質土がブロック状に混ざる) 19. 灰色粘質土(黒灰色粘質土がブロック状に混ざる) 20. 褐色弱粘質土(植物遺体が混ざる) 21. 7層と同質土(粘質土主体) 22. ベース土と同質土(やや汚れる) 23. にぶい暗褐色粘質土 24. にぶい淡褐色粘質土(植物遺体が混ざり、しまりない) 25. 褐色粘質土 26. 濁褐色粘質土
(ベース土) 淡灰黄色粘質土 <p>遺物取り上げ</p> <p>1～6層: 第1層遺物</p> <p>7～11層: 第2層遺物</p> <p>12～17・21層: 第3層遺物</p> <p>18～20・23・24層: 第4層遺物</p> |
|--|---|



第60図 B区上層大溝平面図・土層断面図 (S = 1/60・1/200)

認めない点で、北側流路堆積土(第60図土層1～17)と異なる。

他遺構との関係 北側流路は、その北側に展開する耕作に伴う小溝群と重複しない。小溝群の南限付近に径2～5cmを測る小杭(第60図●印、第89図530・531等)が不規則に残り、幅1m程度の土手または通路を想定可能である。一方、北側流路南側は、第1層(濁暗灰褐色粘質土(第60図土層3))堆積後に、耕作に伴う小溝SD5042・45等が掘られ、埋没後に耕作地に転じたことを示す。また、SB508・509とも重複しない。

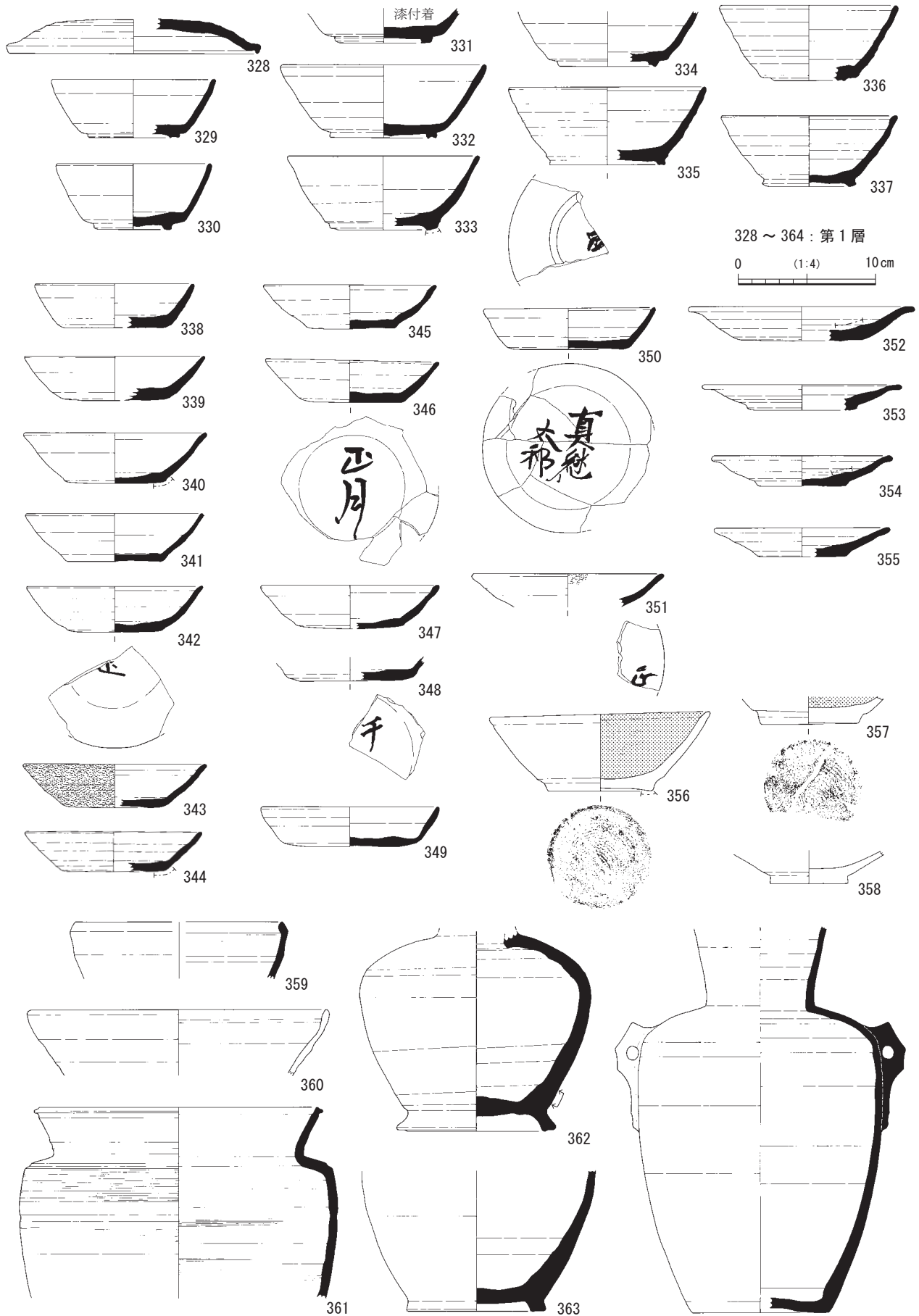
2 出土遺物

VI₁・VI₂期を主体とする須恵器坏類等の遺物が多量に出土、うち第61～70・88図に図示した。出土遺物は、第1項の基本土層層序をもとに、上位層から第1層～第4層遺物に分けて取り上げており、第1～3層遺物が北側流路、第4層遺物が南側流路にそれぞれ属する。大溝北側流路が機能した時期を示す第3層遺物にVI₃期のロクロ土師器埴・皿類が含まれ、北側流路の下限時期を示唆する。また、判読できる墨書土器は「正月」「千」「真継」「本」「茂」「丸」や、「西家」「宅」「室」「曹」「太和」等がある。さらに、鉄鉢や銅製巡方・横櫛・木簡各1点が出土した他、須恵器貯蔵具等の一部が道路遺構出土の破片と接合する。

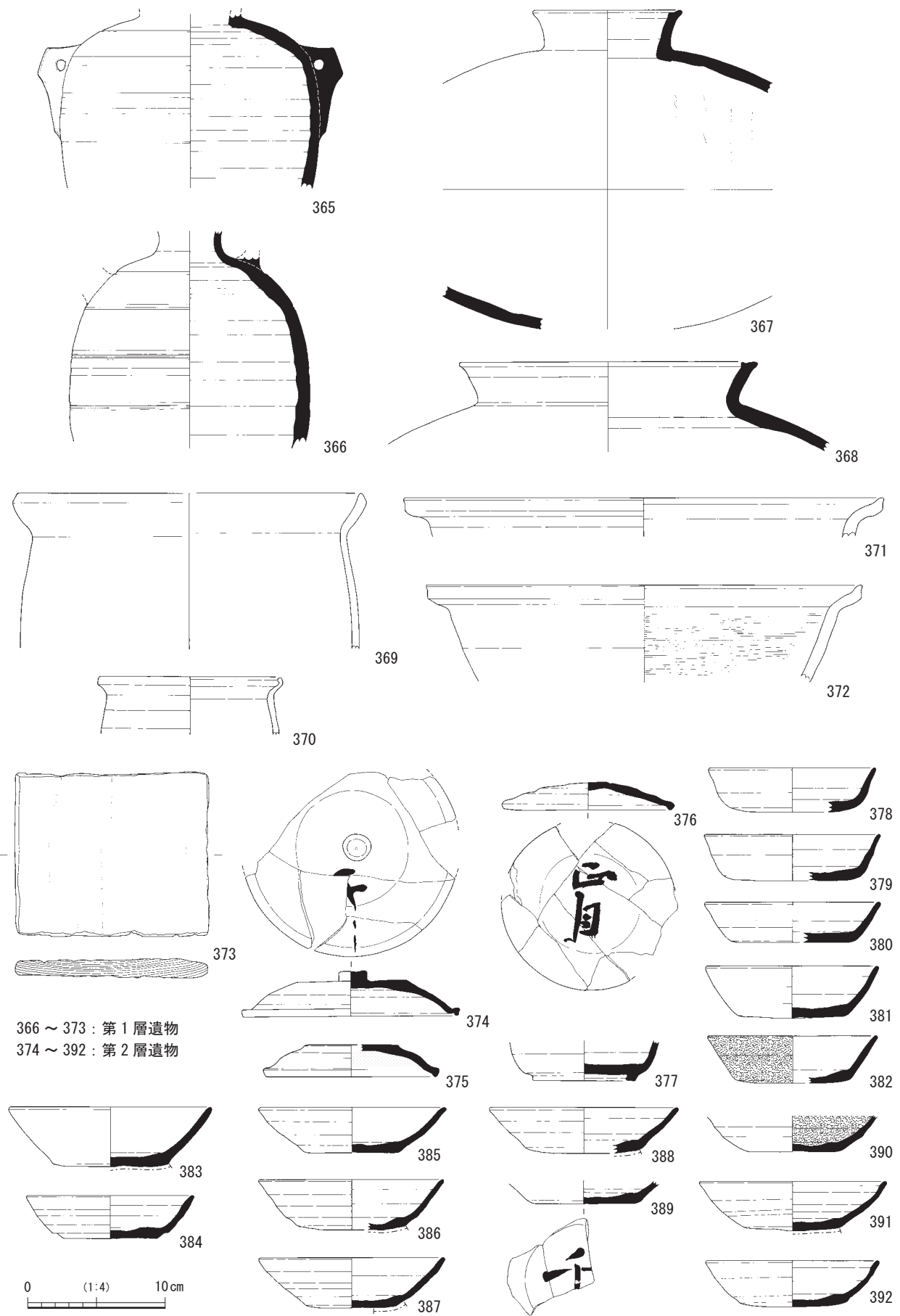
第1層遺物 第61図328～355、同図359・361～第62図368が須恵器、第61図356～358、360、第62図369～372がロクロ土師器無台埴、同図373が木製品となる。食膳具でみれば、IV₂期の須恵器坏蓋328、無台坏338を上限、VI₃期のロクロ土師器無台埴356・357を下限とする。

扁平な坏蓋328は口径18.0cmを測り、ロクロひだが目立つ。有台坏は、底部回転ヘラ切り離しを行い、329がV₂期、331・332がVI₁期、その他がVI₂期に位置付けられる。329は口径11.8cm、器高4.2cmを測る。330の底部は円盤状を呈する。331の底部内面には褐色漆が付着する。332は口径14.7cm、器高5.3cm、333は口径13.8cm、器高5.4cmを測る。335の底部外面に記された墨書は判読できない。336・337はロクロひだが目立ち、口縁端部は内側で肥厚する。また、337は廃棄後に被熱し、全面に煤が付着する。無台坏は、338がIV_{2(古)}期、339がV₂期、340～342がVI₁期、その他がVI₂期に位置付けられる。338は口径11.4cm、器高3.2cmを測り、器面に黒色の吹き出しが目立つ。体部が緩やかに外傾する339は、一部に煤が付着する。340～342は口径13cm前後、器高3.5cm前後を測る。342の底部外面に記された墨書は「継」の可能性をもつ。343～347は体部が外傾し、器高3cm前後を測るため、扁平な印象を受ける。343は外面全体に煤が付着する。345は一部生焼けに近い。346は底部外面に「正月」と墨書する。無台盤348～350はVI₁期に位置付けられる。底部外面の墨書は、348が「千」、350が「真継」「太和」と記され、「太和」は「丈部」を彷彿させる字形を呈する。有台皿351は外面に小さな文字で「正」と記される。無台皿352～355は口縁端部で小さく外反し、VI₂期に位置付けられる。352・354の底部内面が摩耗する他、353は煤や黒色ヨゴレが付着する。

第61図356・357は底部が台状を呈するロクロ土師器内黒無台埴で、胎土中に海綿骨針が混ざる。356が口径16.0cm、器高5.8cmを測り、第63図403、第86図817と同様に、底部外面外縁にナデ調整を加える。平高台の土師器無台皿358は、底部外面にナデ調整を加える。須恵器鉄鉢359は口径約15cmを測り、内面にタール状煤、外面に煤が付着する。ロクロ土師器鉄鉢360は口径21.5cmを測り、第66図497と同一個体の可能性をもつ。広口瓶361は胴部外面をカキメ調整と沈線で加飾する。また、破片の一部は363・366・368と同様に第6次調査SD1からも出土した。長頸瓶362は胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。瓶363は断面方形の台部が外展する。双耳瓶364の破片の一部は、道路遺構SD5016第2層、SK5021から出土した。双耳瓶365は胴部を沈線で加飾した後、耳部を丁寧に貼り付ける。把手付注口瓶366は胴部を沈線で加飾し、胎土の特徴から南加賀窯跡群産と考えられる。横瓶367内面には、粘土紐の積み上げ痕が残る。中甕368は口径21.6cmを測り、破損後に煤が付着する。369はロクロ土師器甕で、口縁端部は断面三角形状を呈する。小甕370は口径13.2cmを測り、口縁端部は内傾する。塙371は口径約35cm、372は口径31.6cmを測る。略方形の板材373は、スギ材を板目取りする。



第61図 B区上層大溝出土遺物実測図1 (S=1/4)



366 ~ 373 : 第1層遺物
 374 ~ 392 : 第2層遺物

第62図 B区上層大溝出土遺物実測図2 (S=1/4)

第2層遺物 第62図374～第63図398、404～407が須恵器、第63図399～403、第64図412・414～416がロクロ土師器、同図413が土師器、同図417～424・2012が木製品となる。食膳具でみれば、V₂期～VI₂期に属する遺物が確認でき、391～403はVI₂期に位置付けられる。

坏蓋は、374がV₂期、無鈕の375・376がVI₂期に属する。374は口径15.6cm、器高3.3cmを測り、外面の墨書は「千」の可能性が高い。375は口径12.3cm、器高2.3cmを測り、内面を硯に転用する。376は口径12.2cm、器高2.0cmを測り、外面中央に「正月」と墨書する。有台坏377は台部が内屈する。378～396は無台坏で、381・382がV₂期、383～390がVI₁期、391～396がVI₂期に位置付けられる。378は丸底風を呈するのに対して、379・380は平底となる。381・382は体部が大きく外傾し、内外面に被熱痕が残る。383は口径14.5cm、器高4.3cmを測る大型品で、生焼けに近い。384は底部台状を呈し、底部外面に墨痕が認められる。385～388は体部が大きく外傾し、口径13cm強、器高3.5cm前後を測る。また、386～388は底部外面が使用に伴い磨耗する。389の底部外面に記された墨書は「千」と判読できる。390は内外面とも被熱痕が明瞭に残る。391は底部外面が磨耗する。392は胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。393～396は扁平な器形を呈する。394は煮沸容器に転用され、内面に黒褐色付着物、外面全面に煤がそれぞれ残る。396は底部外面に「千」と墨書する。有台皿397は底部回転ヘラ切り後に断面方形の台部を貼り付ける。底部外面に「正月」と墨書する。底部回転ヘラ切りの無台皿398は底部が円盤状を呈し、内面を硯に転用する。

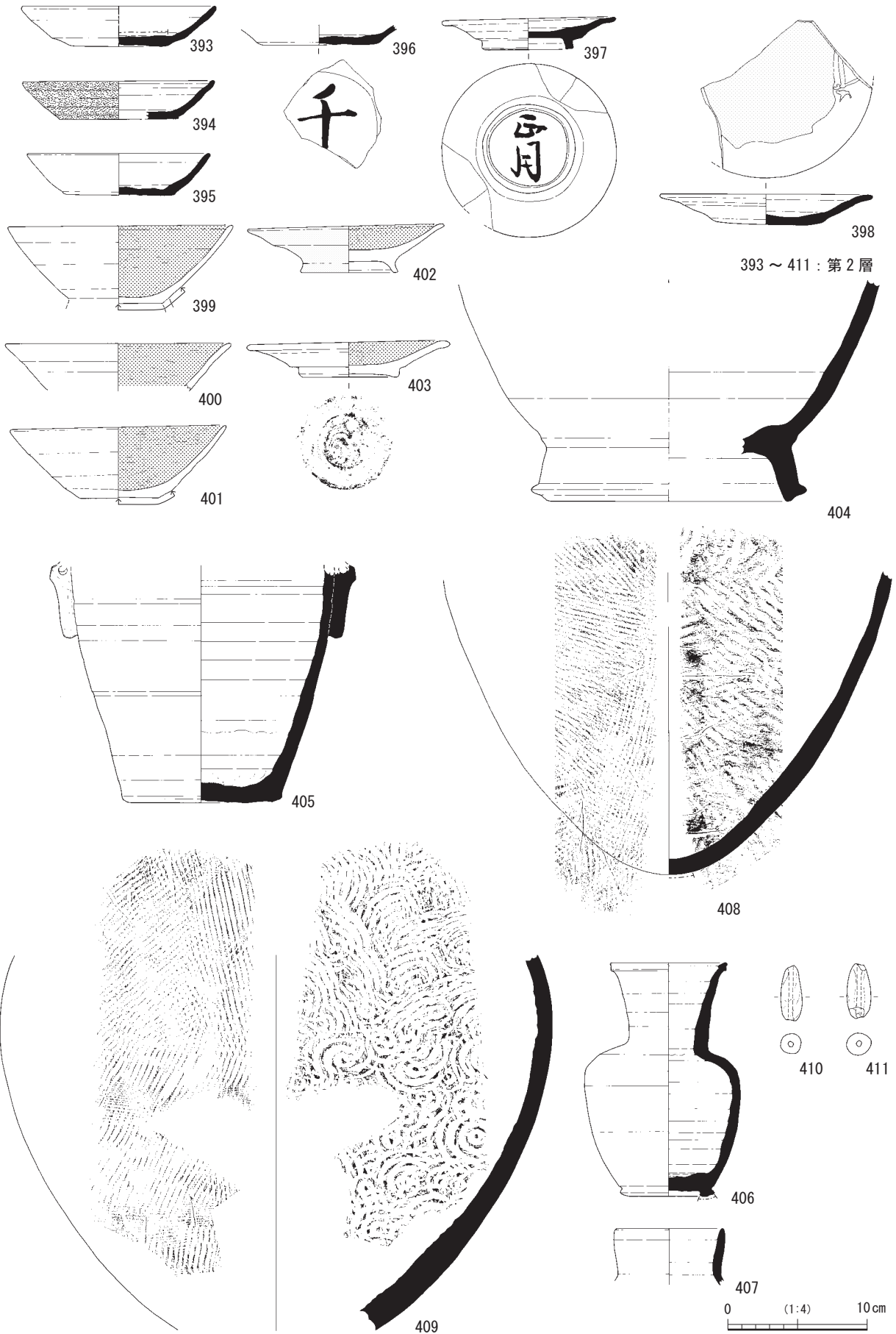
第63図399～403は内黒のロクロ土師器である。無台碗399～401は口径15～16cm、器高5cm強を測り、体部は直線的に外傾する。うち399・401は煮沸容器の転用痕跡が明瞭に残る。外面を赤彩する有台皿402は口径14.1cm、器高3.5cmを測る。底部台状を呈する無台皿403は、第61図356、第86図817と同様に、底部外面外縁にナゲ調整を加える。また、402・403は胎土中に海綿骨針が混ざる。404は短頸壺底部と考えられ、背の高い台部を貼り付ける。双耳瓶405は内面に粘土紐の積み上げ痕が残る。小型の長頸瓶406は下半部が生焼けに近い。小型の瓶407は胎土の特徴から隣接する加茂窯跡群産と考えられる。甕408は底部を叩き出す際、内面に平行文あて具を用いる。甕409は、SD5047、P5191出土片と接合する。内面に2種類の同心円あて具原体痕が残る。土師器土鍾410・411は、長さ約4cmを測る。ロクロ土師器甕412は口縁端部が内傾する。土師器甕413は口径15.6cmを測る。ロクロ土師器小甕414は口径10.3cm、415は口径12.4cmを測り、埴416とともに煮炊痕を明瞭に残す。

第64図417～424、2012は木製品である。挽物白木椀417は底部台状を呈する。器肉の薄い挽物白木皿418は口径13.6cm、器高2.6cmを、底部台状を呈する挽物白木皿419は口径16.3cm、器高2.6cmを測る。円形曲物底板420は側面2ヶ所に木釘痕が残る。箸状木製品421は長さ17.1cm、径0.6cmを測る。422は横櫛片、423は木鍾である。平面長方形を呈する424は両端に孔を穿つ。樹種は、417・419がケヤキ、420・421・424がスギ、422がイスノキ、423がケンポナン属に同定される。上下で切断した付札状木製品2012は、長さ7.9cm、幅3.0cm、厚さ0.6cmを測り、材はスギと考えられる。

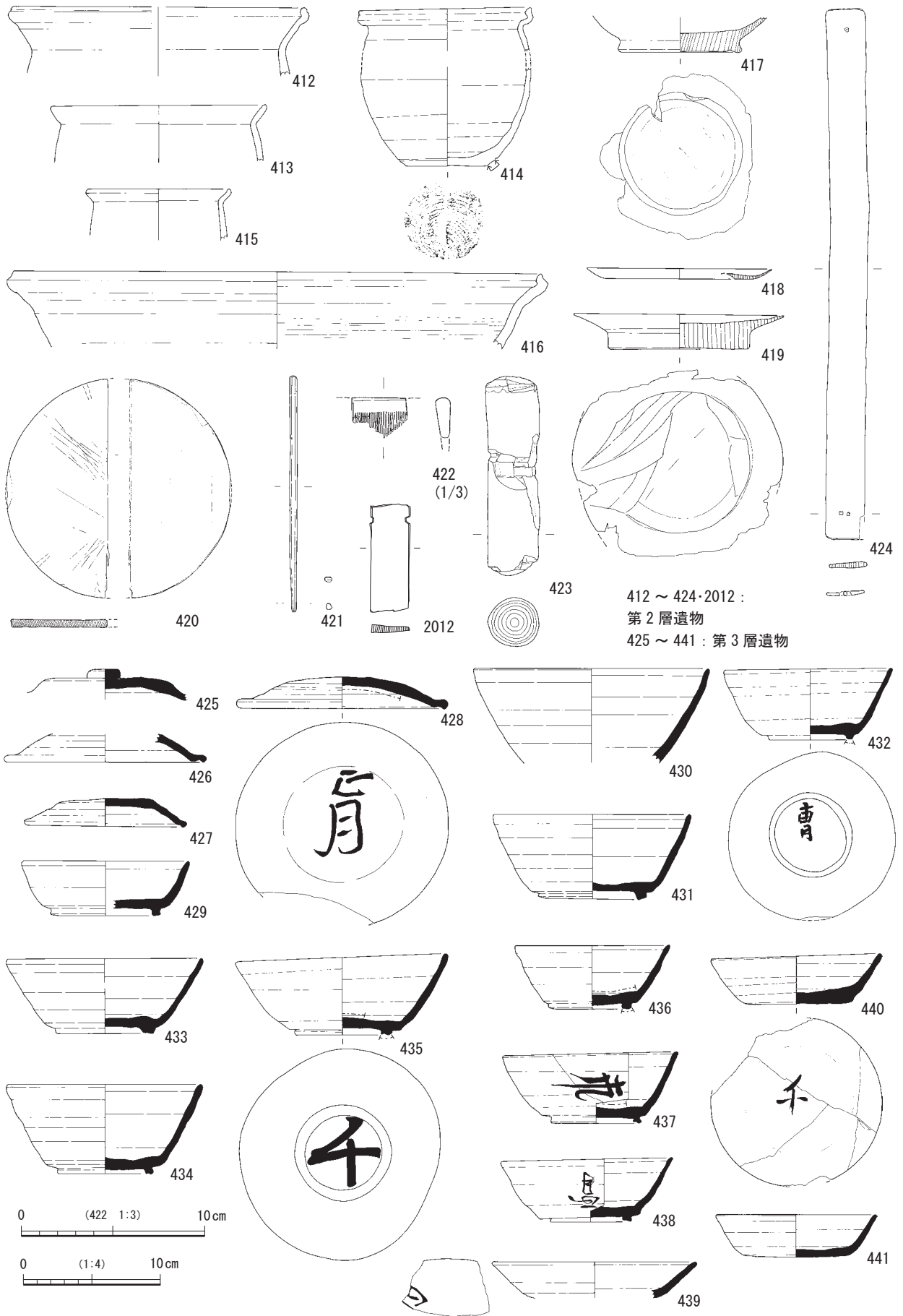
第3層遺物 大溝北側流路が機能した段階に堆積した土層であり、多くの遺物が出土した。第64図425～第65図471、同図498～505が須恵器、第65図472～第66図497、第68図506がロクロ土師器、同図507以降がその他の遺物となる。食膳具でみれば、IV₂期の須恵器坏蓋425、有台坏429、V₁期の無台坏440・441、V₂期の無台坏442・443、VI₃期のロクロ土師器碗・皿類479～482、495、496、VII期の可能性を残すロクロ土師器碗類483以外は、VI₁期～VI₂期に属する遺物となる。ロクロ土師器483は、大溝北側流路が機能していた下限時期を示すものといえる。

第64図425～428は坏蓋である。425の鈕はボタン状を呈し、破損後に煤が付着する。無鈕の427は口径11.5cm、器高2.1cm、428は口径15.0cm、器高2.3cmを測る。428は内面が磨耗し、外面に「正月」と墨書する。429～438は有台坏で、429がIV_{2(古)}期、430～433・436がVI₁期、その他がVI₂期に位置付けられる。429は口

第5節 大溝



第63図 B区上層大溝出土遺物実測図3 (S=1/4)

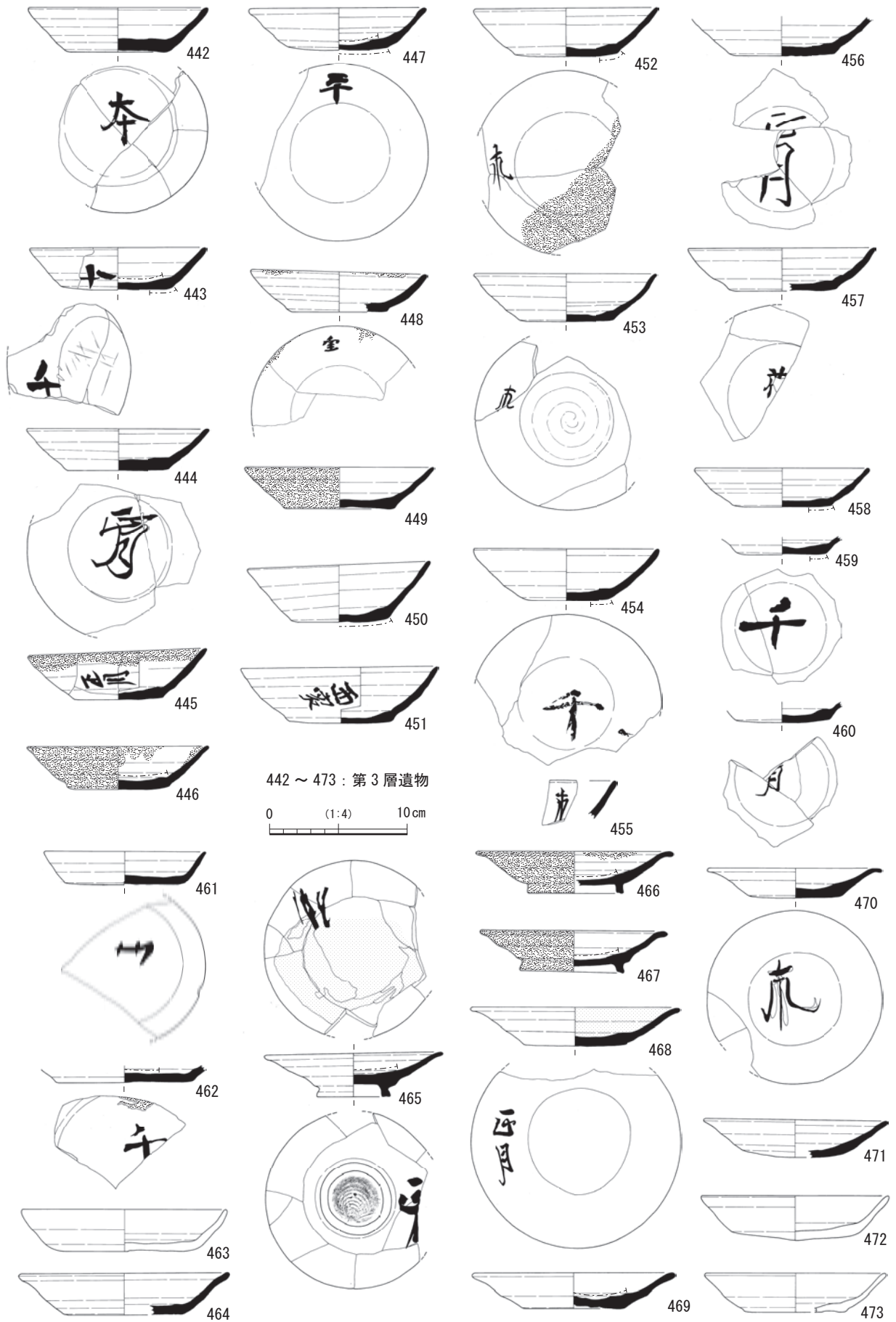


第64図 B区上層大溝出土遺物実測図4 (S = 1/3・1/4)

縁部内面が平滑となる。432は焼きゆがみが目立ち、底部外面に「曹」と墨書する。同文字は、町第9次調査、県調査でも出土している。433は底部回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。434は坏身の重ね焼き痕が残る。435は還元が弱く、底部外面に「千」と大きく墨書する。436は底部内面が平滑となり、内外面とも煤が付着する。437は則天文字「朮」、438は「正月」と、それぞれ外側面に墨書するが、筆方向は異なる。439に記された墨書は判読できない。無台坏440～460は被熱した個体が目立ち、444～455がVI₁期、456～460がVI₂期に位置付けられる。V₁期の440は「千」、V₂期の442は「本」、443は「千」、444は「正月」と墨書する。445は煮沸容器に転用され、外側面に「正月」と墨書する。446は口縁部2ヶ所にタール状の灯明痕、外面全体に煤が付着する。447は外側面2ヶ所に墨書し、うち1ヶ所は「本」と判読できる。448は煮沸容器に転用される他、外側面に小さく「室」と墨書する。449は外面に煤が付着し、450は生焼けに近い。451は「西家」、452・453・455は「朮」、454・459は「千」、456・460は「正月」、457は「茂」と、それぞれ墨書する。461～463は無台盤である。461は口径11.6cmを測る小盤で、底部外面に記した墨書は判読できない。462は底部外面に「千」と墨書し、破損後に被熱する。463は焼成不良で、土師器に近い質感を呈する。464～471はVI₂期の皿で、有台皿465～467は断面方形の台部が外展する。還元の弱い464は、口縁部は屈曲しながら長くのびる。465を硯に転用する他、465・467は外側面に「正月」と墨書する。468は転用硯で、外側面に「正月」と墨書する。469は重ね焼き痕が良好に残る。470は、最初の墨が薄かったためか、2度「朮」と墨書する。471は底部から体部になだらかに移行、口縁端部で肥厚する。472・473は須恵器技法でつくられたロクロ土師器無台坏で、胎土も須恵器に近似する。472は煮沸容器に転用され、口縁部に煤が付着する。

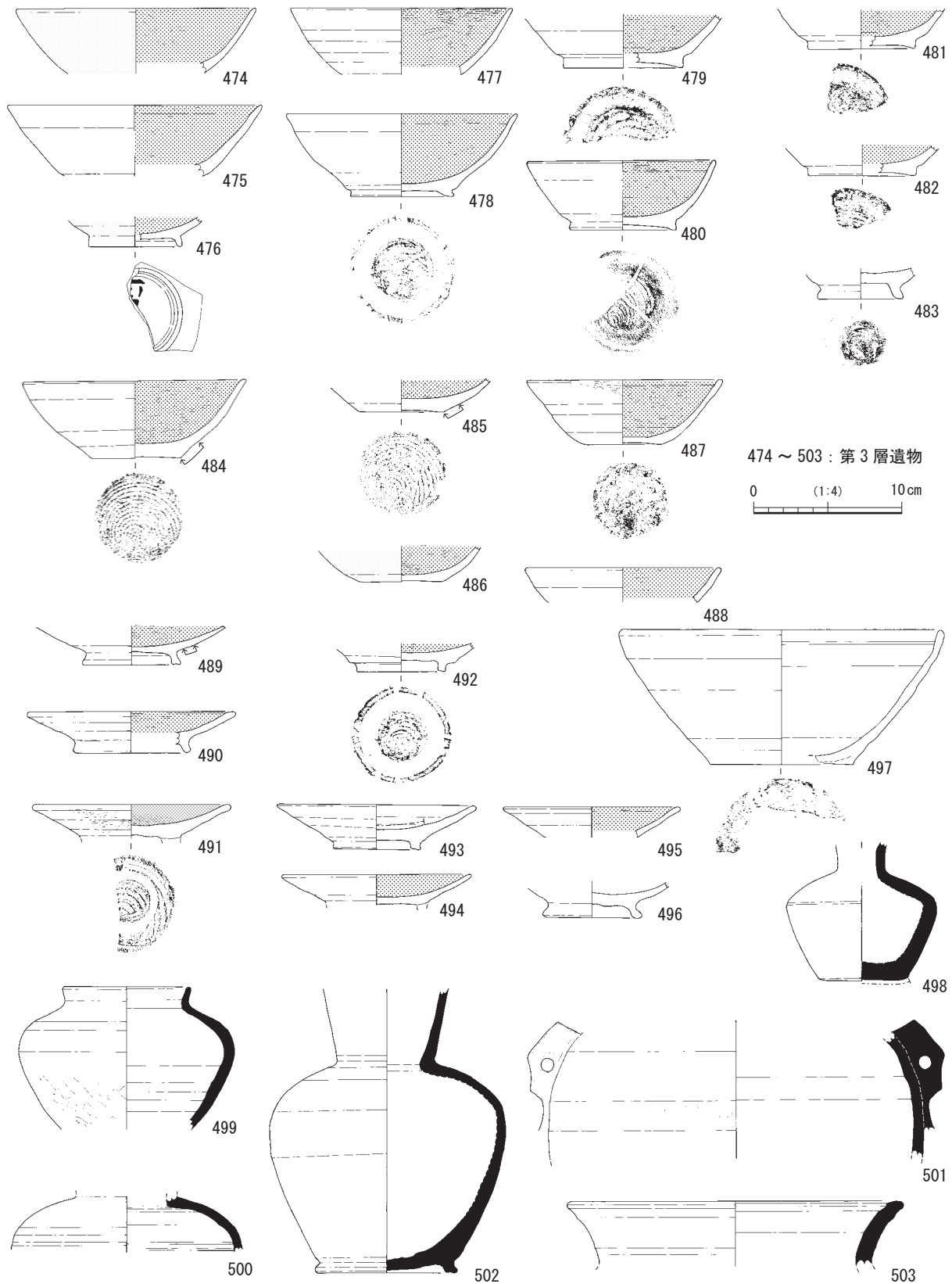
第66図474～496はロクロ土師器碗・皿類で、474～483が有台碗、484～488が無台碗、489～496が有台皿であり、483・493・496以外は内面黒色処理を施す。時期で見れば、475・476・484～486、489がVI₁期、474・487・488・490～494がVI₂期、477～482・495・496がVI₃期にそれぞれ位置付けられ、483がVII期に下る可能性をもつ。胎土は、479～483・493～495に海綿骨針が混ざる他、496に砂粒が多く混ざる。有台碗474・476は外面を赤彩し、476外面の墨書は判読できない。477・478は口径15cm強を測り、口縁部内面に沈線状のくぼみ1条を施す。478で口径15.6cm、器高5.6cmを測る。479～482は、低い断面三角形の特徴的な台部を貼り付ける。体部が内湾する480は口径12.5cm、器高4.6cmを測る。483は粗いつくりの台部が外展する。無台碗484は体部下端に手持ちケズリ調整を加える。486は外面を赤彩する。487は、体部が直線的に外傾する他、口縁部外面の一部にミガキ調整を施す。器肉が薄い有台皿489は、回転糸切り後に回転ナデ調整を加える。490と491は胎土の特徴が近似する。491は黒色化が及ぶ範囲は底部内面のみである。また、台部貼り付け後に、ヘラ状工具を用いて台部中途から切り落とし、無台として焼成する。493は口径13.1cm、器高3.1cmを測り、黒色処理を施さない。494は台部剥離後に被熱する。496は肥厚する台端部を丸く仕上げる。鉄鉢497は口径21.5cm、器高9.1cmを測り、口縁部内面に1条の沈線を加える。

第66図498は産地不明の小型瓶で、使用に伴い底部外面は平滑となる。小形短頸壺499は口縁端部に欠けが連続し、胎土の特徴から南加賀窯跡群産と考えられる。500・502は長頸瓶、501は双耳瓶である。甕503は外面に平行タタキ痕が残る、胎土の特徴から金沢末窯跡群産である。第67図504は大甕で、破片の一部は道路遺構SD5017第3層、第6次SD1からも出土している。口径38.4cmを測り、口縁端部は嘴状にのびる。また、胴部内面は上半を瓦の原体に近似した1～1.5cm角の格子文あて具、下半を扇形文あて具で成形し、平行文あて具を用いて丸底化する。一方、外面は上下で異なる平行文叩き具を用いる。胎土の特徴は高松・押水窯跡群産と似るが、他窯跡群産の可能性を残す。大甕505は、504とともに第3層から集中出土した甕で、道路遺構路面整地土出土の破片とも接合する。505は口径43.0cmを測り、胴部内面上半を同心円文あて具、下半を平行文あて具で、また外面は平行文叩き具を用いた後にナデを加えて成形する。第68図506はロクロ土師器小甕で、煮炊痕が良好に残る。



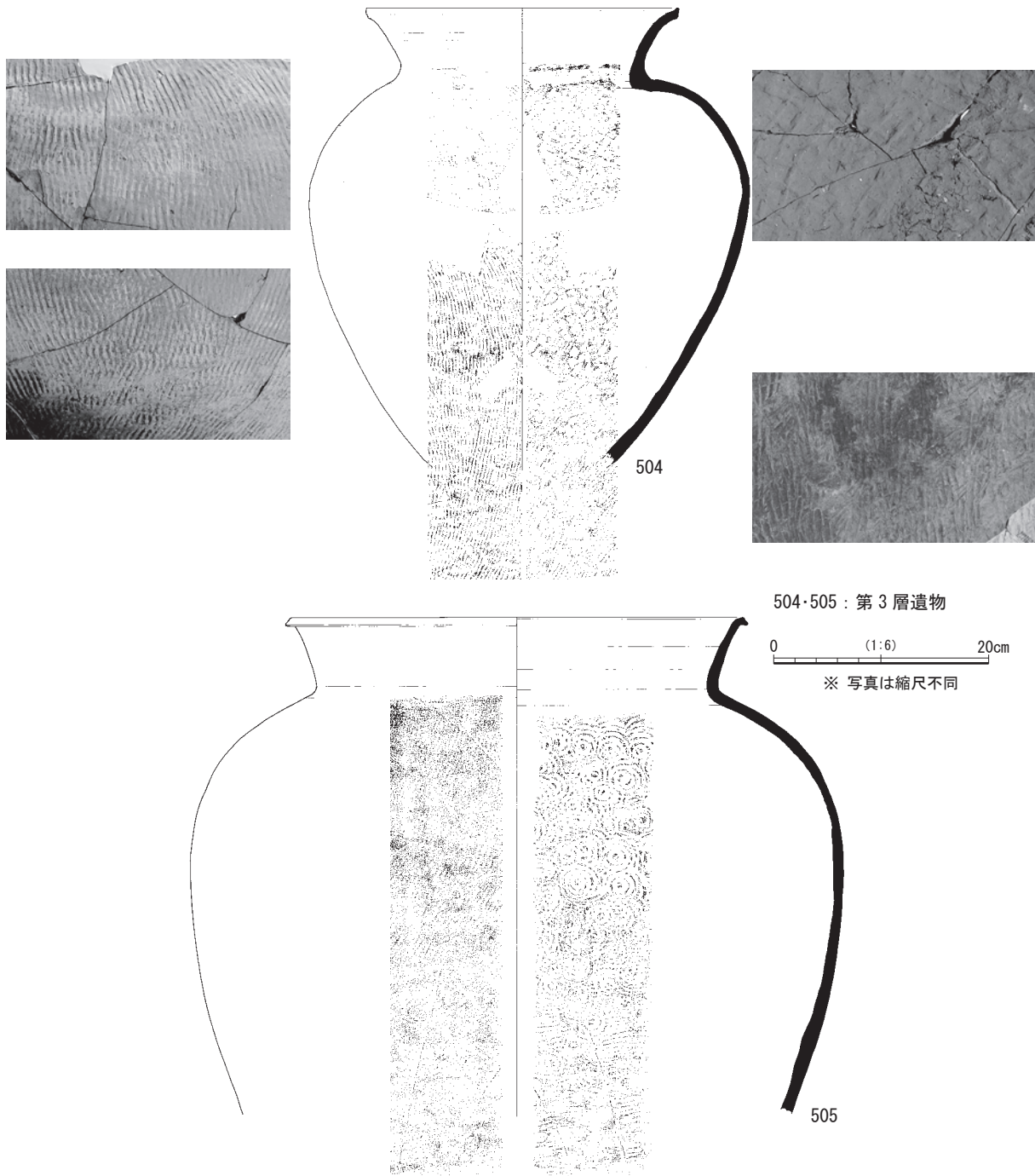
第65図 B区上層大溝出土遺物実測図5 (S=1/4)

第5節 大溝



第66図 B区上層大溝出土遺物実測図6 (S=1/4)

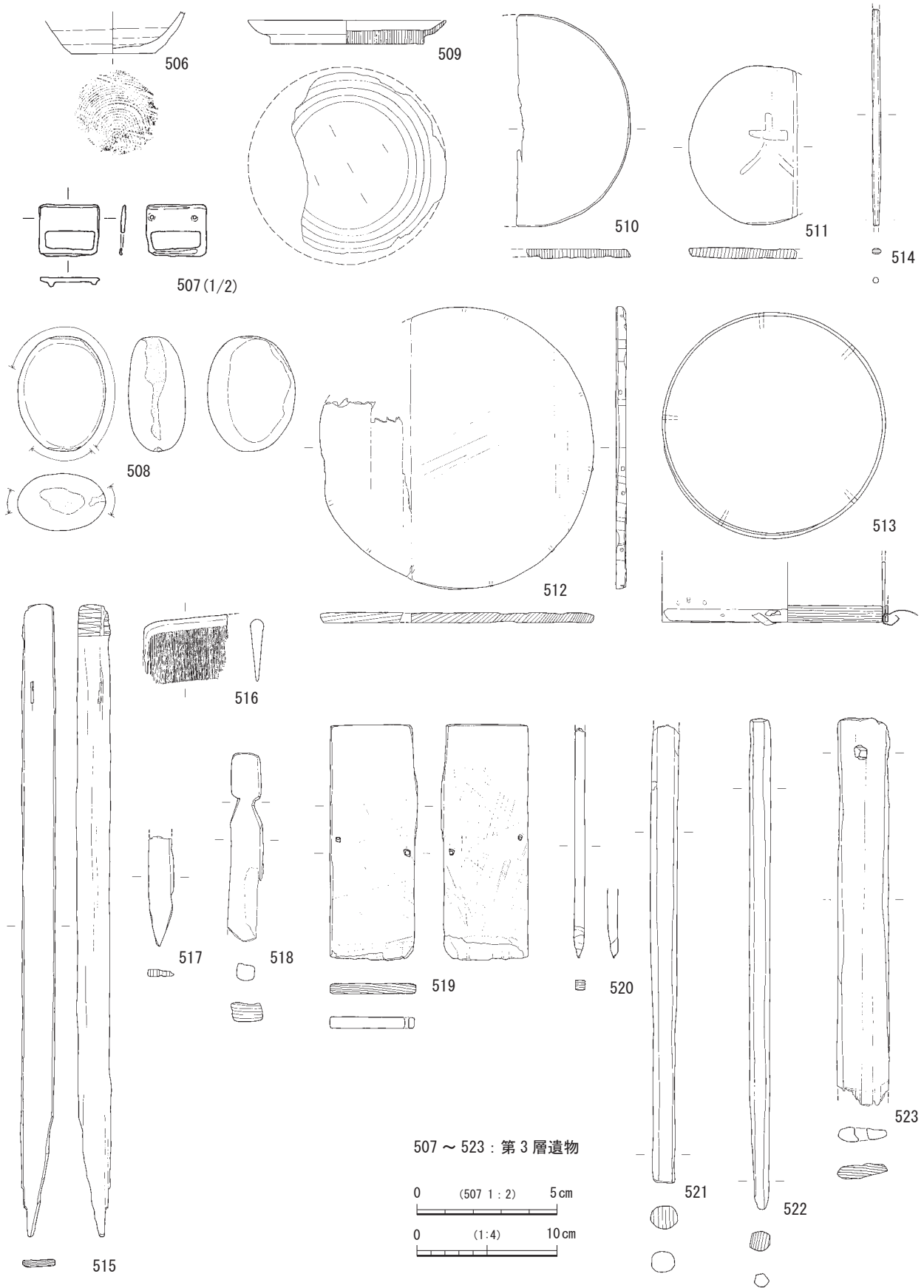
第68図507は銅製巡方表金具である。溝底面から2 cm上位で、ひしゃげた状態で出土した。高さ1.8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを測り、2ヶ所に鋸が残る。また、穿たれた方形孔は高さ0.6cm、幅1.8cmを測る。508は本来下層に属する敲石で、磨きにも使用したため器面は平滑となる。509 ~ 531は木製品である。挽物白木皿



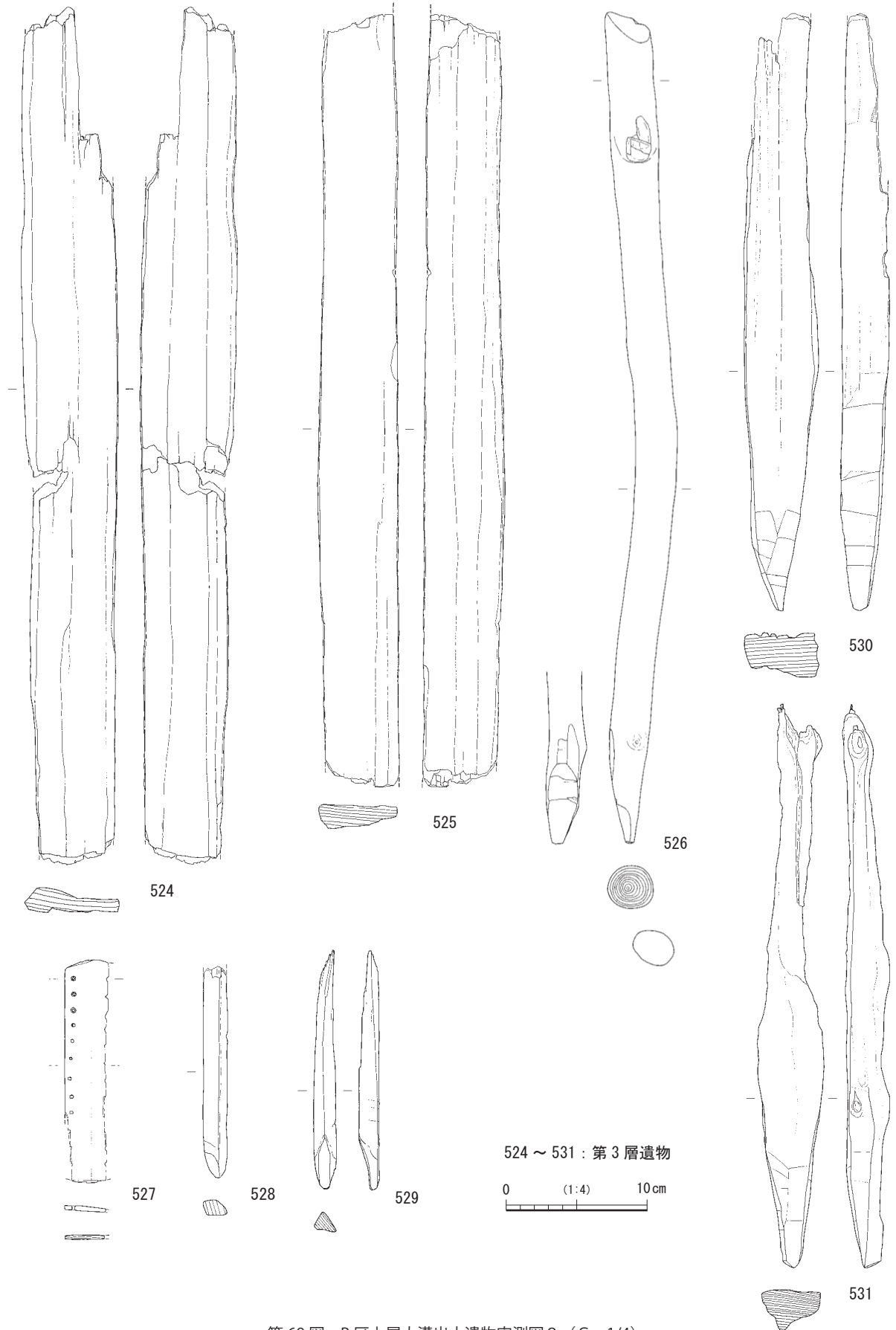
第 67 図 B 区上層大溝出土遺物実測図 7 (S =1/6)

509は口径16.2cm、器高1.7cmを測る。底部は台状を呈し、ヒノキを横木取りする。円形板510・511はスギでつくられ、511には「木」とも判読できる焼印が残る。円形曲物512はヒノキ科、同513・箸状木製品514はスギ、板材515はヒノキを、それぞれ材とする。横櫛516はイスノキ材を削り出したもので、高さ4.4cmを測る。517は斎串の可能性をもつ。スギの角材518は側面に挟りをいれる。平面長方形の板状木製品519は2ヶ所に円孔を穿つ他、刀子痕が顕著に残る。樹種は、ヒノキ科に同定される。520～525はスギ材を用いる。ツバキ材の杭526は、一端を加工する。スギの板材527は長軸15.8cmを測り、12ヶ所に小円孔を穿つ。棒状木製品528はスギ、つけ木529はヒノキ、杭530・531はスダジイを、それぞれ材とする。第88図835は付札木簡(4号木簡)である。上端部左側および下端部を欠損し、残存長9.1cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmを測る。墨は薄く、「<□(免カ)□黒□□×」と3文字目が「黒」と判読できる。スギ材を板目取りする。

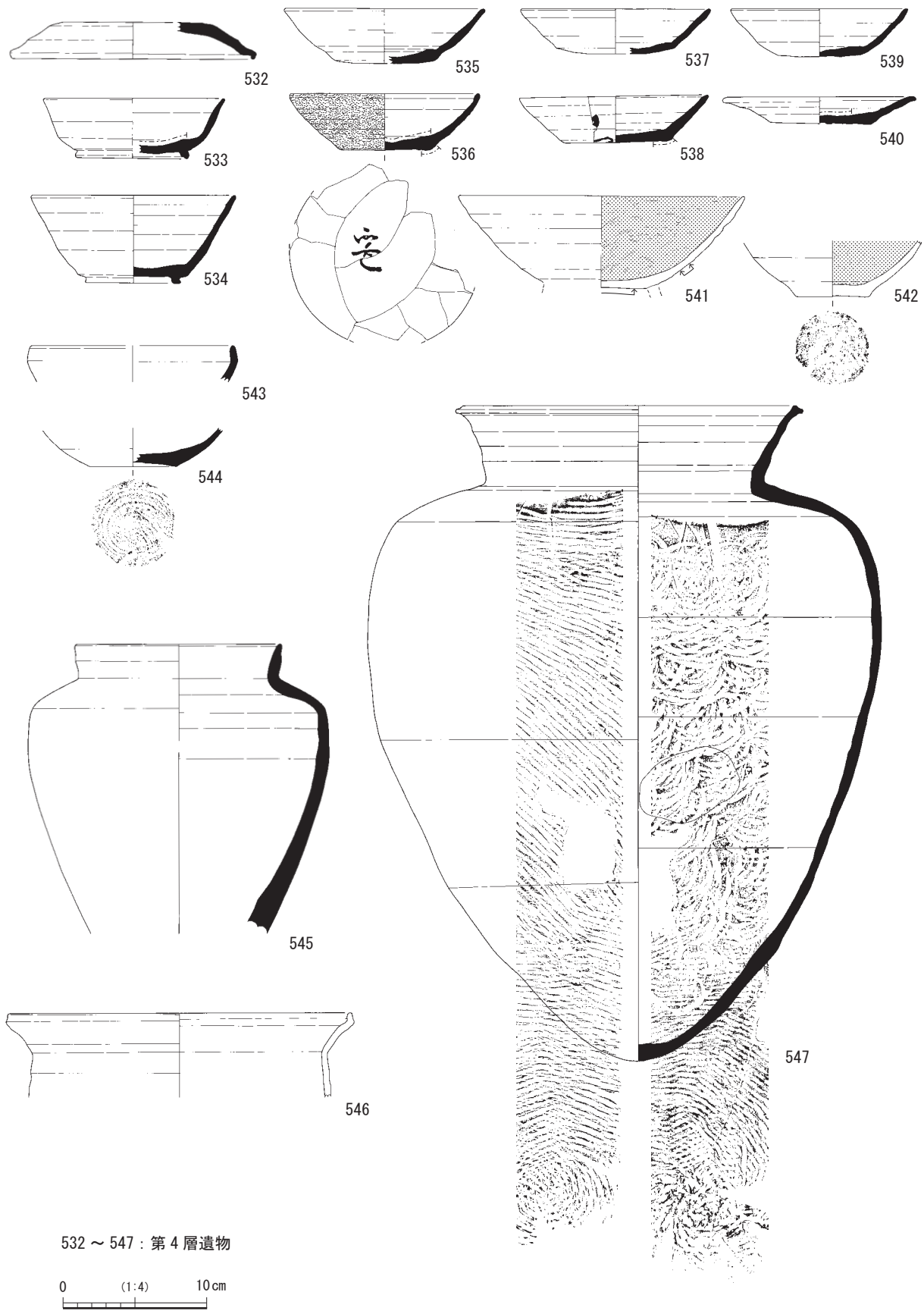
第5節 大溝



第68図 B区上層大溝出土遺物実測図8 (S=1/2・1/4)



第69図 B区上層大溝出土遺物実測図9 (S=1/4)



第70図 B区上層大溝出土遺物実測図10 (S=1/4)

第4層遺物 大溝南側流路から出土した遺物で、第70図532～540、543～545、547が須恵器、同図541・542・546がロクロ土師器となる。食膳具でみれば、IV期の須恵器坏蓋532・有台坏533、VI₃期のロクロ土師器無台碗542以外は、VI₁期～VI₂期に属する遺物であり、第3層遺物より若干古層を呈する遺物群といえる。坏蓋532は口径16.8cmを測り、口縁端部を小さく折り曲げる。IV_{1(古)}期の有台坏533は、使用に伴い内面が磨耗する。有台坏534は底部外面に墨痕が残る。無台坏535～539はVI₂期に位置付けられ、539以外は煤が付着する。536は使用に伴い底部等が平滑であり、底部外面に「宅」と墨書する。538の外側面に記された墨書は判読できない。無台皿540は口径13.0cm、器高2.0cmを測り、外面に煤が付着する。有台碗541は薄手の精良品で、胎土中に海綿骨針が混ざる。無台碗542は底部が台状を呈する。543・544は鉄鉢片で、544底部外面に回転糸切り痕が残る。広口壺545の破片は、P5155・71からも出土した。口径14.2cmを測り、口縁端部の欠けが目立つ。ロクロ土師器甕546は口径23.8cmを測り、胎土中に海綿骨針が混ざる。中甕547は口径24.2cm、器高45.5cmを測り、完形で廃棄された可能性をもつ。底部の叩き出しは第63図408等と同様に平行文あて具を用いる。

第6節 溝

B区を中心に約150条の溝を検出した。第8～10表のとおり、IV₂期末を下限に埋められる基幹的な溝1条(B区SD5061)、VI期以降の河跡(C区SD5001)や基幹的溝(B区SD5048・50)、耕作に伴う小溝約140条、小区画を示す可能性をもつ溝(B区SD5023・27)、自然流路(C区SD5002)の他、弥生時代後期の遺物包含層を溝と誤認したもの(C区SD5006)、その他不明に分けられる。大部分を占める耕作に伴う小溝は、その主軸方位等から8群に分類でき(第10表)、VI₂期を下限とする須恵器、土師器が出土している。また、B区大溝北岸に展開する耕作に伴う小溝群は、遺構の切り合い関係から掘立柱建物、SD5061に後出し、道路遺構・大溝と重複しない位置関係にある。一方、B区大溝南岸の耕作に伴う小溝は、大溝埋没後の耕作地(畠地)痕跡となる。

1 B区SD5061 (遺構：第71・72図、第8表、遺物：第73～83図、第20～25・38表)

遺構 B区L・M-18・19で延長約15mを検出した基幹的な水路であり、南側で第8次調査A区第I面SD2007を経て、第1～3次調査大溝につながる。第8次調査の結果、SD5061はB区以東の大溝に前出する基幹的な溝であることが明らかとなっている⁽⁶⁾。検出した溝は、北々東から南々西方向にほぼ直線的に流下し、両肩部とも強い勾配でしっかりと掘られる。規模は上幅が調査区北端で約2.3m、南端で約2.8m、下幅が調査区北端で約2.1m、南端で約1.7m、深さ64～68cm(溝底の標高は調査区北端4.00m、南端3.84m)をそれぞれ測る。

基本土層層序は、大きく第1～3層に分けられ、上位層から順に、第1層：ベース土・遺物包含層と同質の黒灰～暗灰褐色粘質土の混合土(第71図土層7・21～24)、第2層：しまりのない灰褐色粘質土や淡黄灰・淡灰緑色砂質土～細砂・粗砂(同図土層25・29・30・35・37・38・39)、第3層：暗褐灰色強粘質土(同図土層34)となる。第1層がSD5061埋土、第2層がSD5061機能時～埋没過程の堆積土、第3層がSD5061開削直後の自然堆積土となり、第3層は土層断面a・bの溝底にわずかに確認できる程度である。また、第2層は、西寄りで厚くなる流入・堆積土であり、水流に伴う腐植土・粗砂・細砂の交互堆積層(第71図31・36)を挟みながら、逐次、土壌堆積により溝底レベルを上昇する状況から、その維持・管理は必ずしも十分でない印象を受ける。なお、第1層埋土上面は、耕作に伴う小溝が確認できる(第71図土層14、図版17)。

また、L-19区西側の肩部裾で、護岸と考えられる施設を確認した(第72図)。この護岸は、残存長47～55cm、幅5～8cmの4本の杭を、50～55cm間隔で打ち込み、肩部と杭の間に2枚の横板をわたす簡易なものである。板材は、第72図W16(787)が長さ約190cm、幅約15cm、W17(788)が長さ約220cm、幅約20cmを測る。護岸周辺からは、比較的多くの木製品(部材等)が出土している。遺構の切りあい関係では、SB501・502、耕作に伴う小溝

第8表 B・C区上層SD規模等一覧表1

※SD5013は欠番。

C区	性格	グリッド名	平面図	平面形	長さ(cm)	上幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	土層	備考
SD5016 (東側溝)	道路側溝(旧か)	O-21、N-21・22	第44図	直線	(約1200)	100~265	35~68	N-27°W	第45・46図	旧溝か
	道路側溝(新)	"	"	"	"	100~160	30~68	"	"	新溝
SD5017 (西側溝)	"	N・O-21	"	"	(約650)	222~256	90~100	"	"	新・旧溝重複か。水路を兼ねる
SD5001(新)	河道	P・Q-21・22	第84・85図	直線	1200~	200	55~60	N-130°W	第84・85図	新旧あり。SD5001より古
SD5001(古)				屈曲	1200~	210~580	53~75	N-130°W		
SD5002	自然流路	P-21・22	第14図	屈曲	1120~	80~110	14~30	W-E	第40図15-15'・第90図16-16'~18-18'	SI5001、P5033、SD5001・03~05より古。
SD5003	耕作痕	P-22	第14図	直線	390	20~28	6~8	d群	第90図19-19'・20-20'	SD5002より新
SD5004	"	P-22	第14図	"	330	16~28	4~7	c-3群	第90図19-19'・20-20'	SD5002より新
SD5005	自然流路	P-22	第14図	屈曲	850~	50~180	7~20	E-W	第90図21-21'	SD5002より新
SD5006	下層包含層	O・P-21~23	第15・16図	-	-	280~	8~50	-	第90図22-22'	下層。下層SD5501より古
SD5007	耕作痕	O-23	第16図	直線	190	14~22	5~7	d群	第90図23-23'	
SD5008	"	O-22	第16図	やや屈曲	390	18~26	4~6	d群	第90図23-23'	
SD5009	"	O-22	第16図	直線	350~	14~40	4~5	c-3群	第90図23-23'	P5049より新
SD5010	"	O-22	第15図	やや屈曲	790~	24~100	3~14	b群・c-3群	第90図24-24'	南端鞍部、SK5003より古
SD5011	"	O-22	第15図	直線	250	14~30	3~13	c-3群	第90図24-24'	南端鞍部、SD5030より新
SD5012	"	O-22	第15図	"	620	18~26	5~9	c-3群	第90図24-24'	"
SD5014	自然流路か	N-23	第14図	"	360~	84~106	14~20	E-W	濁黒色粘質土	
SD5015	耕作痕	O-22	第16図	やや屈曲	300~	34~46	7~12	c-3群	第33図c-c'	SK5001より新
SD5018	不明	N-21	第15図	やや屈曲	220~	98~116	32	N-約60°E	第90図25-25'	SD5017より古
SD5030	耕作痕	O-22	第15図	直線	320	24~38	5~10	c-3群	濁暗褐色粘質土	南端鞍部より新。SD5011・12より古
B区	性格	グリッド名	平面図	平面形	長さ(cm)	上幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	土層	備考
大溝	基幹水路	K-19・20	第60図	-	(約2200)	640~800	60	N-約105°W	第60図	2条の流路重複
SD5017 (西側溝)	道路側溝	M・N-21、M-22	第44図	直線	(約1300)	190~256	76~80	N-27°W	第45・46図	新旧重複か
SD5061	基幹水路	L・M-18・19	第72図	直線	1500~	230~280	64~68	N-167°W	第71図	耕作に伴う小溝群、SB501・502より古
SD5019	耕作痕	M-21	第17図	直線	206	12~24	3~7	c群	第92図26-26'	
SD5020	"	M-21	第17図	直線	394	10~36	2~4	c群	第40図5-5'・90図26-26'	
SD5021	"	M-21	第17図	やや屈曲	990~	20~36	4~8	c群	第40図6-6'・第92図26-26'・27-27'	SA502(P5121)、SB506・507、SD5023より新
SD5022	不明	M-21	第17図	やや屈曲	350~	28~42	3~7	N-約125°W	第94図51-51'	
SD5023	小区画か	L・M-20、M-21	第12・17図	やや屈曲	約1110	16~72	4~8	N-約120°W	第94図51-51'~53-53'	SD5021・37・51・52より古
SD5024	耕作痕	M-21	第17図	やや屈曲	254	20~32	5~11	c群	第92図27-27'	SD5020に続く
SD5025	"	L・M-21	第17図	やや屈曲	786	22~64	3~20	c群	第92図27-27'・28-28'・30-30'	SD5027より新
SD5026	"	L・M-21	第17図	やや屈曲	520~	26~48	6~12	c群	第92図28-28'・30-30'	SD5027より新
SD5027	小区画か	L-20・21	第17図	やや屈曲	約1300	26~60	3~14	N-約110°W	第94図54-54'~57-57'	SD5025・26・29・32・34・35~39・55、SD5126より古
SD5028	耕作痕	L・M-21	第17図	やや屈曲	404	18~42	4~11	c・d群	第92図28-28'	2条。SK5022より新
SD5029	"	L-21	第17図	直線	388	28~36	6~8	c群	第92図30-30'	SK5022・23、SD5027より新
SD5031	"	L-21	第17図	直線	170~	16~26	5~8	c群	褐色粘質土	
SD5032	"	L-21	第17図	直線	244	24~34	2~5	c群	濁暗褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5027より新
SD5033	"	L・M-21	第17図	直線	448	20~34	5~7	c群	第92図28-28'	3条。
SD5034	"	L-21	第17図	やや屈曲	380	26~38	6	c群	第92図29-29'・30-30'	SD5027より新
SD5035	"	L-21	第17図	屈曲	792	24~50	7~18	c・e群	第92図28-28'・30-30'	SD5027・36より新。SD5126より古
SD5036	"	M・L-20、L-21	第17図	屈曲	790	22~34	5~7	c群	第92図28-28'・30-30'	SD5051に続く。SD5023・27・36より新。SD5035より古
SD5037	"	L・M-20	第12・13・17図	屈曲	182	20~24	3~6	c群	第34図2-2'・第92図28-28'・30-30'・31-31'・33-33'	SK5007・SD5040より新
SD5038	"	L-20	第13図	やや屈曲	620~	22~40	5~11	c群	第92図30-30'・31-31'	SD5027・37より新。SD5052より古
SD5039	"	L-20	第13図	直線	334	34~42	11~16	c群	第92図31-31'	SD5027・40より新。
SD5040	"	L-20	第13図	直線	約120	22~24	3~8	c群	第92図31-31'	SD5037・39より古
SD5041	"	J-20	第13・18図	直線	155	28~34	6	c-2群	第94図49-49'	
SD5042	"	J・K-21	第18図	直線	560~	24~44	9~16	c-2群	第94図49-49'・50-50'	SB508(SK5010、P5061)、P5160・80、大溝より新。SD5047より古
SD5043	"	J・K-21	第18図	やや屈曲	680~	32~46	11~25	c-2群	第94図49-49'・50-50'	SB509(P5201)、大溝、SD5048より新
SD5044	"	J・K-21	第18図	"	650~	32~76	9~19	c-2群	第94図49-49'・50-50'	大溝、SD5048より新

第9表 B・C区上層SD規模等一覧表2

B区	性格	グリッド名	平面図	平面形	長さ(cm)	上幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	土層	備考
SD5045	耕作痕	K-21	第18図	直線	210~	30~40	12~14	c-2群	第94図49-49'	SK5013より新
SD5046	"	J-21	第18図	"	90	24~32	5~8	d群	褐灰色粘質土	P5190、SD5050より新
SD5047	現代水路	J-21	第18図	"	770~	32~70	6~10	N-63°W	第93図47-47'・48-48'	
SD5048	自然流路か	J-21	第18図	屈曲	570~	44~110	28~48	N-約110°W	第94図59-59'・60-60'	SD5043・44より古
SD5049	不明	J-21	第18図	やや屈曲	280~	30~56	7~23	d群	第94図50-50'	P5200より新。P5207、SD5047より古
SD5050	自然流路か	J-21	第18図	やや屈曲	570~	80~120	8~34	N-約110°W	第94図59-59'	SB508・509、SD5044・47より古
SD5051	耕作痕	M-20	第12図	直線	254	18~32	2~7	c群	第34図2-2'	SD5036に続く。SD5023より新
SD5052	"	L・M-20	第12・13図	屈曲	754	24~42	4~7	c群	第34図2-2'・92図36-36'	SB506(P5234)、SD5023・38より新
SD5053	"	L・M-20	第12・13図	直線	610	20~36	2~6	c群	第92図30-30'・36-36'	2条。SD5023より新
SD5054	"	L-20	第12・13図	直線	244	16~26	4	d群	第92図36-36'	
SD5055	"	L・M-20	第12・1図	直線	1154	24~46	3~12	c群	第92・93図35-35'~38-38'	SK5020、SD5027より新
SD5056	"	L・M-20	第12・13図	直線	約1010	28~42	4~10	c群	第92・93図35-35'~38-38'	SK5020、SD5116・23・24より新
SD5057	"	M-20	第12図	やや屈曲	224	14~28	4~8	c群	第92図32-32'・33-33'	2条。SD5037に続く
SD5058	"	M-20	第12図	直線	308	24~36	5~14	c群	第92図32-32'・33-33'	SA502(P5241)より新
SD5059	"	M-20	第12図	直線	530	28~32	7~11	c群	第92図32-32'・33-33'	SB504(P5220)より新
SD5060	"	M-20	第12図	やや屈曲	230~	18~28	6~9	c群	第92図33-33'	SB504(P5241)より新
SD5062	"	M-19	第12図	直線	456	18~32	3~8	d群	第93図42-42'	
SD5063	"	M・N-19	第11・12図	直線	310~	20~24	7~19	d群	第92図34-34'	底面起伏目立つ
SD5064	"	L-18	第11図	直線か	200~	40~	3~20	d群	第71図c-c'	
SD5065	"	L-18	第11図	直線	360~	34~50	3~8	N-23°W	第71図c-c'	SD5066より新
SD5066	"	L-18	第11図	直線	90~	24~32	4~6	d群	濁黒灰色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5065・67より古
SD5067	"	L-18	第11図	直線	320~	40~70	12	a群	第93図46-46'	SD5068より古
SD5068	"	L-18	第11図	直線	320~	24~30	4~9	a群	第93図46-46'	SD5067より新
SD5069	"	M-18	第11図	やや屈曲	360~	50~	7~15	d群	第71図b-b'	
SD5070	"	M-18	第11図	やや屈曲	約230	24~54	6~12	d群	第71図b-b'	
SD5071	"	M-18	第11図	屈曲	320~	24~34	4~10	c群か	第71図a-a'	
SD5072	"	M-18	第11図	直線	150~	40~46	10~24	d群	第71図a-a'	
SD5073	"	M-18	第11図	直線	280~	18~32	6	d群	濁暗灰色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5061・74より新
SD5074	"	M-18	第11図	やや屈曲	180~	14~30	4	d群	濁暗灰色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5073・75より古。SD5061より新
SD5075	"	M-18	第11図	直線	210~	24~46	2~12	d群	第71図a-a'	SB502、SD5061・74・76より新
SD5076	"	M-18	第11図	直線	70~	46~48	6	d群	濁暗灰色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SB502より新
SD5077	"	M-18	第11図	直線	510~	54~92	7~17	d群	第71図a-a'・b-b'	2条重複。SB501・502、SD5078より古
SD5078	"	M-18	第11図	直線	500~	28~54	6~10	d群	第71図a-a'・b-b'	SD5077より新
SD5079	"	L・M-19	第11~13図	やや屈曲	404	22~38	3~15	d群	第93図42-42'	SD5098に続く
SD5080	"	L-19	第11図	直線	350~	28~46	5~15	d群	第93図44-44'	
SD5081	"	L-19	第11図	直線か	90~	24~36	3~12	d群	第93図44-44'・45-45'	
SD5082	"	L-19	第11図	屈曲	560~	20~44	6~14	c・d群	第93図44-44'・45-45'	
SD5083	"	L-19	第11・13図	直線	210	16~34	2~6	d群	第93図44-44'	
SD5084	耕作痕か	L-19	第11図	直線	180~	18~60	6~14	e群	暗灰褐色粘質土	SD5082・85より古
SD5085	耕作痕	L-19	第11・13図	やや屈曲	750~	26~64	5~30	d群	第93図43-43'~45-45'	SD5086・87より古
SD5086	"	L-19	第13図	直線	360	30~66	6~15	d群	第93図45-45'	SD5085・87より新
SD5087	"	L-19	第11・13図	やや屈曲	830~	20~66	10~20	c群	第93図44-44'	SD5085・86・89より古
SD5088	"	L-19	第12・13図	やや屈曲	450~	18~46	3~11	d群	第93図43-43'	SD5089より新。SD5087より古
SD5089	"	L-19	第13図	やや屈曲	770~	30~54	9~14	d群	第93図43-43'~45-45'	SD5087より新。SD5090より古
SD5090	"	L-19	第12・13図	やや屈曲	1020~	26~64	7~14	d群	第93図43-43'・44-44'	SD92より新。SD5091より古
SD5091	"	L-19	第13図	直線	370~	26~52	6~18	d群	第93図45-45'	SD5086より新
SD5092	"	L-19	第12・13図	直線	618	34~46	7~16	e群	第93図43-43'~45-45'	SD5090・93より古
SD5093	"	L-19	第13図	やや屈曲	444	38~42	5~18	d群	第93図45-45'	SD5092より新。SD5096より古
SD5094	"	L・M-19	第12・13図	やや屈曲	670	18~38	8~18	c・e群	第93図42-42'・43-43'	SD5092より古。SD5095より新
SD5095	耕作痕か	L-19	第13図	屈曲	660~	66~90	8~16	d群か	第93図43-43'・44-44'	SD5092~94より古
SD5096	耕作痕	L-19	第13図	屈曲	790	30~62	6~14	d・e群	第93図44-44'・45-45'	SD5100より新。SD5103より古
SD5097	"	L-19	第13図	やや屈曲	70~	24~32	6	f群	濁黒褐色粘質土	SD5096・5102より古

第10表 B・C区上層SD規模等一覧表3

※SD5125・27～31・33・34は欠番。

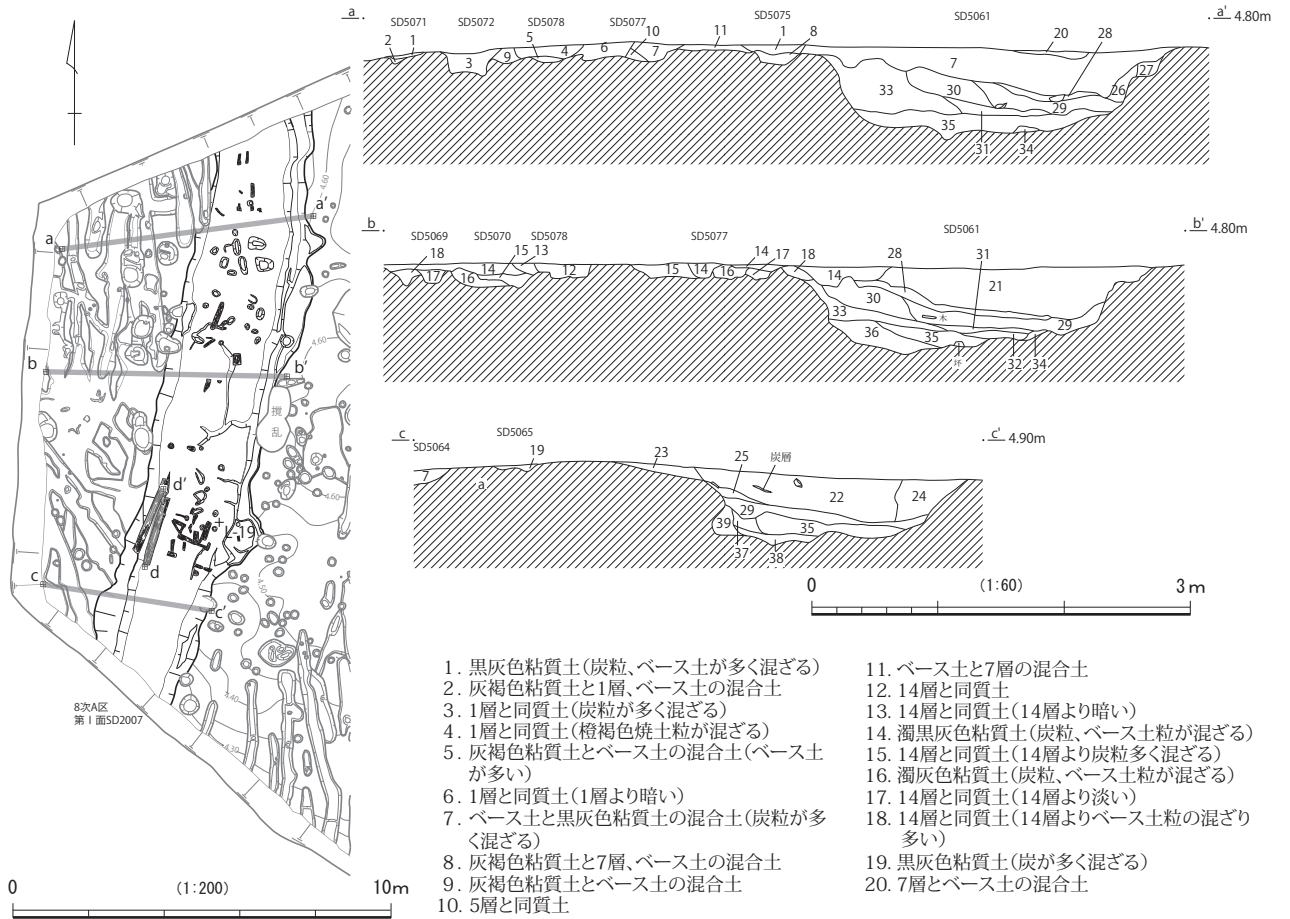
B区	性格	グリッド名	平面図	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	土層	備考
SD5098	耕作痕	L-19	第11図	やや屈曲	76	24～34	8～22	d群	暗褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5079に続く
SD5099	"	M-20	第12図	直線	154	26～32	8	c群	第93図41-41'	
SD5100	"	L-19	第13図	直線	724	34～62	4～20	c群	第93図43-43'・44-44'	底面起伏目立つ。SD5096・5096・5101・5102より古
SD5101	"	L-19	第13図	直線	232	約30	5～10	c群	第93図44-44'	SD5100より新
SD5102-04	"	L-19	第13図	やや屈曲	730	30～44	6～12	c-e群	第93図44-44'・45-45'	SD5100より新
SD5103	"	L-19	第13図	直線	796	26～54	5～14	c群	第93図43-43'～45-45'	SD5096・5102・04より新
SD5105	"	L-19	第13図	直線	418	28～42	3～19	c群	第93図38-38'	SD5104より古
SD5106	"	L-19	第13図	屈曲	200	28～36	2～7	c群	第93図43-43'	SD5106より分岐
SD5107	"	L-19・20	第13図	直線	190	24～32	3～5	c群	第93図43-43'	SD5110・SX5001より新
SD5108	"	L-19・20	第13図	やや屈曲	160	24～30	12～25	c群	第93図39-39'・45-45'	SD5109より古
SD5109	"	L-19・20	第13図	屈曲	790～	24～36	3～27	d-e群	第93図38-38'・43-43'・45-45'	SX5001より新。SD5107より古
SD5110	"	L-20	第13図	直線	450	22～66	4～13	c群	第93図38-38'・39-39'	SD5109・5113より古
SD5111	"	L-20	第13図	直線	742	24～38	2～14	c群	第93図38-38'・43-43'	SD5113より古
SD5112	"	L-20	第13図	屈曲	310	20～28	3～5	b-c群	暗褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SK5017より古。SD5113より新
SD5113	"	L-20	第13図	屈曲	776	24～58	5～20	e群	第93図38-38'・39-39'	SSD2112より古。D5110・11・13～15より新
SD5114	"	L-20	第13図	直線	706	14～38	6～14	c群	第93図38-38'・39-39'	SK5017より新。SD5113より古
SD5115	"	L-20	第13図	直線	538	34～44	22～28	c群	第93図38-38'・39-39'	SK5017・18、SD5116・20・21より新。SD5113より古
SD5116	"	L-20	第13図		480～	24～32	2～10	e群	第93図38-38'	SD5132より新。SD5056・5115より
SD5117	耕作痕か	L-20	第13図	直線	260～	18～50	6	c群	第93図40-40'	大溝より古
SD5118	耕作痕	L-20	第13図	直線	102	18～26	4～6	c群	第93図40-40'	SD5113に続く
SD5119	"	L-20	第13図	直線	194	20～28	4～6	c-d群	暗灰褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)	SD5112に続く
SD5120	区画溝か	L-20	第13図	屈曲	約210	26～86	3～10	f群か	第94図57-57'	SD5027に続くか。SD5021より新。SK5017・SD5122・32・56より古
SD5121	耕作痕か	L-20	第13図	直線	210～	20～26	2～4	c群	第93図39-39'	大溝、SD5120より古。SK5018・SD5122より新
SD5122	耕作痕	L-20	第13図	屈曲	200～	24～30	4～8	a群	濁暗褐色粘質土(ベース土粒が混ざる)	
SD5123	"	L-20	第13図	直線	270～	20～32	2～22	f群	第93図39-39'	SD5120・32より新。SD5056・5121より古
SD5124	"	L-20	第13図	直線	約140	26～30	6～10	f群	第93図38-38'	SD5056・5132より古
SD5126	耕作痕	L-21	第17図	やや屈曲	208	28～86	6～12	d群	第92図30-30'	SD5027・35より新
SD5132	耕作痕	L-20	第13図	直線	696	18～36	4～18	c群	濁暗褐色粘質土	SD5120・24より新。SD5116・22より古
SD5135	不明	M-20	第12図	略楕円形	約170	36～84	4～7	N-約120°W	灰褐色粘質土	浅い落ち込み。SD5052・53より古

○主軸方位凡例

区分	主軸方位	備考
a群	N-32～35°W	B区に分布
b群	N-約27°W	C区S15001主軸方位に近似
c群	N-5～25°W	N-5～10°Wに主体
c-2群	N-約15°W	SD5041～45。約2.5m等間
c-3群	N-約10°W	SD5009～12・15。約1.5m・2.0m等間
d群	N-約0°	B・C区に分布
e群	N-13°E	B区に分布
f群	N-22～24°E	"

SD5073・74・77より古く位置付けられる。なお、第43図158の柱根出土から、復元できなかったものの、SD5061埋め戻し後にSB501・502以外にも建物が存在した可能性が高い。

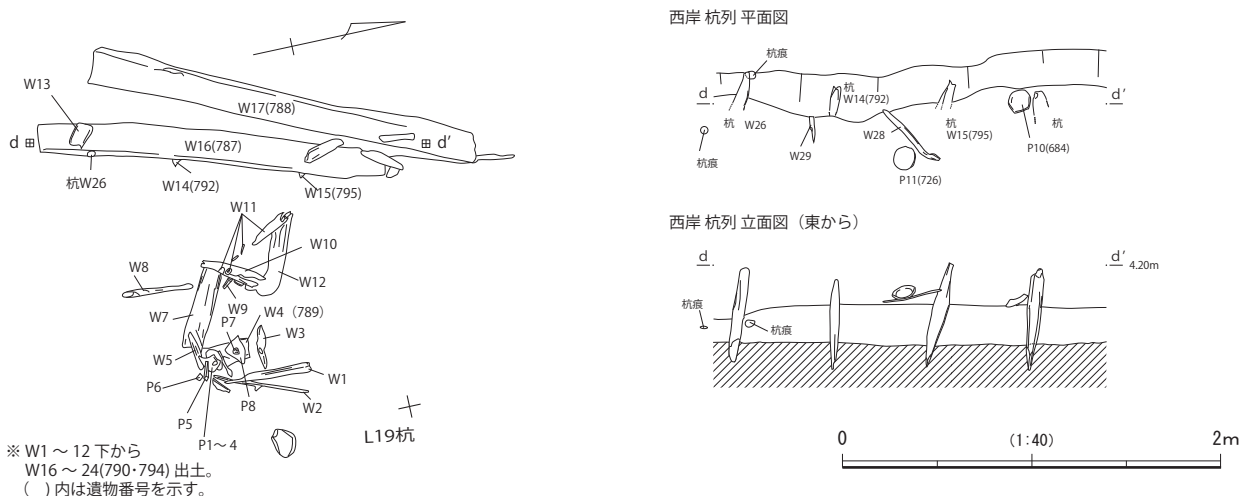
遺物 須恵器坏類を主体に多くの遺物が出土、第73図548～第83図796を図示した。現地調査では、前述の基本土層層序を元に、上位層から第1層～第3層遺物と区分して遺物を取り上げた。各層遺物の時期は、第1層遺物(SD5061埋土)の下限がVI₂期、第2層遺物(の下限がおおむねIV₂(新)期、第3層遺物の時期幅がIII期～IV₂(古)期を示す。なお、第72図で図示した西岸の護岸周辺の木製品は、SD5061機能時のものと考え、第2層遺物に含めた。墨書土器は、「真継」「人」「茂」「大里」「真人」「臣主」等が確認できる。



21. 7層と同質土
22. 暗灰褐色粘質土(炭、炭層が多く混ざる。遺物取り上げ第1層)
23. ベース土と暗灰褐色粘質土の混合土(遺物取り上げ第1層)
24. 22層と同質土(ベース土粒が多く混ざる。遺物取り上げ第1層)
25. 29層と同質土(暗灰褐色粘質土ブロックが混ざる。遺物取り上げ第2層)
26. ベース土と暗灰褐色粘質土の混合土
27. ベース土と同質土(暗灰褐色粘質土粒が混ざる)
28. 7層と29層の混合土
29. 灰褐色粘質土(しまりなく、やや砂っぽい。遺物取り上げ第2層)
30. 淡黄灰色砂質土(しまりない。遺物取り上げ第2層)
31. 褐色腐植土と黄灰色～緑灰色粗砂の交互堆積層

32. 36層と同質土(複雑な交互堆積)
33. 30層と同質土(やや暗い)
34. 暗緑灰色強粘質土(遺物取り上げ第3層)
35. 淡緑灰色細砂～粗砂(植木遺体、種子が混ざる。遺物取り上げ第2層)
36. 淡灰緑色細砂と褐色腐植土の交互堆積層
37. 淡緑灰色細砂(遺物取り上げ第2層)
38. 35層と同質土(粒子粗く、緑灰色細砂～粗砂主体。遺物取り上げ第2層)
39. ベース土と38層の混合土(遺物取り上げ第2層)

第71図 B区上層 SD5061 平面図・土層断面図 (S=1/60・1/200)

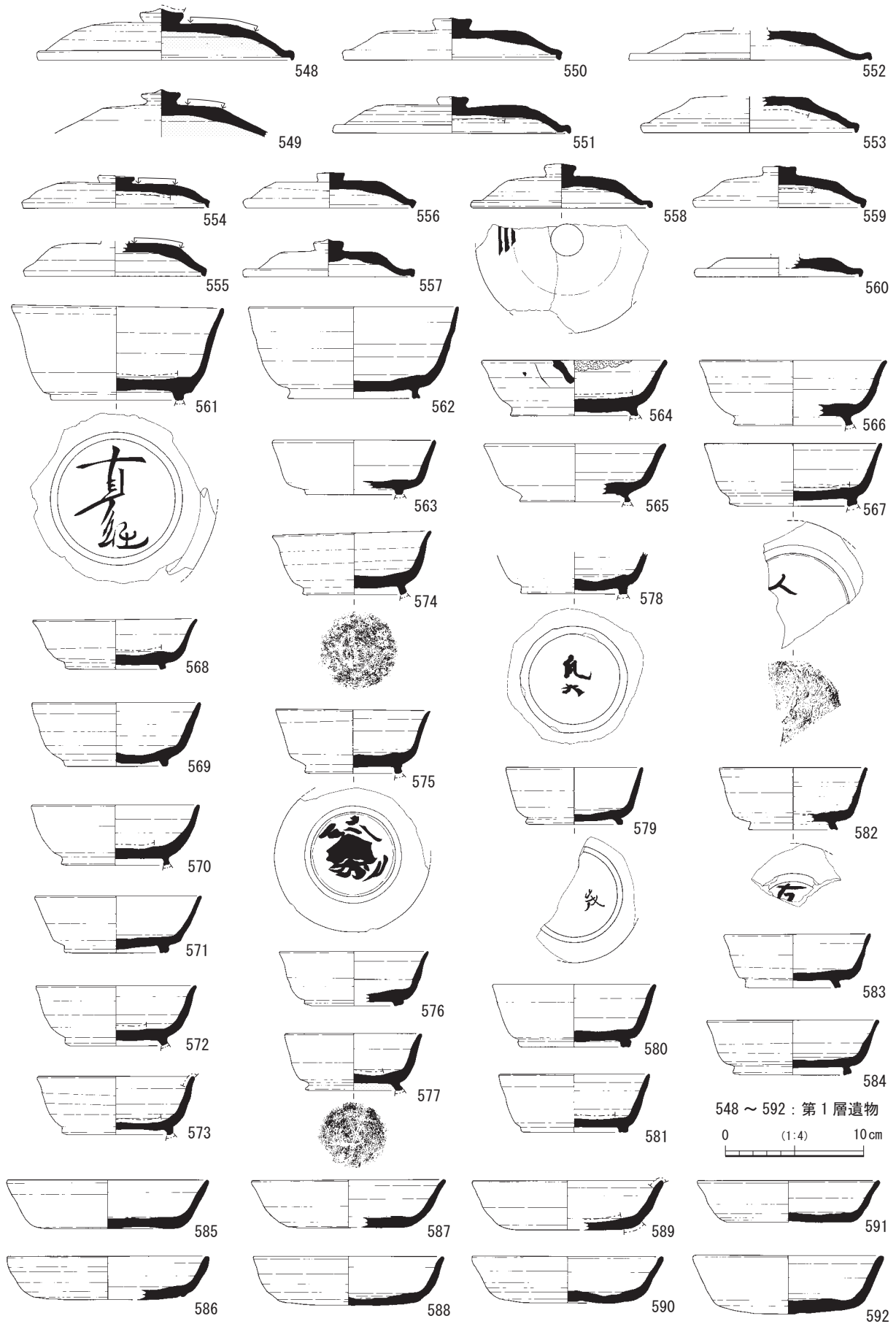


第72図 B区上層 SD5061 遺物出土状況・杭列平面図・断面図 (S=1/40)

第1層遺物は、須恵器548～649・651～662、土師器650・663・681・682、ロクロ土師器664～680、木製品785・786を図示した。大半の遺物は、第2・3層遺物と共通するⅢ～Ⅳ期に属し、550～553、558～560、640～645、648、659、662等のSD5061が埋められた以降の遺物が一部混ざる。548～560は坏蓋である。548・549は天井部外面に回転ケズリ調整を施し、内面を硯に転用する。548が口径18.4cm、器高3.7cmを測る。551は使用に伴い内面が平滑となる。552・553は肩部で明瞭に屈曲し、553は内面を硯に転用する。扁平な554は使用に伴い内面が摩耗し、廃棄後に煤が付着する。555は内面全体に降灰が溶着する。556・557は口径約12cm、器高3cm前後を測る。558は外面肩部に薄い墨で「三」と墨書する。548がⅣ₁期、554～557がⅣ₂期、550・558～560がⅤ₂期、551～553がⅥ₁期に位置付けられる。561～584はⅣ期の有台坏である。561は口径15.2cm、器高7.8cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。底部外面に「真継」と墨書する他、内面等が使用に伴い磨耗する。器肉の薄い562は、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産の可能性をもつ。身の浅い564～568は体下部にふくらみをもち、使用に伴い内面等が摩耗する。564の口縁部には墨痕が残り、567は底部外面に「人」と墨書する。568は口径11.9cm、器高3.5cmを測る。569は体部が直線的に外傾するのに対して、570は体部が内湾気味となる。572・573は使用に伴い内面等が摩耗する。574の底部外面に残るヘラ記号「𠂇」は、第77図695と共通する記号である。575・577は外面底部を硯面に転用する。578は底部外面中央に別筆で「凡」「口(大カ)」と記す。579～584は体部が直立する。無蓋焼成の579は、底部外面に小さく「茂」と墨書する。580は還元が弱く、581は底部内面が摩耗する。582の底部外面に記された墨書は「真」の可能性が高い。583は無蓋で焼成される。584は口径12.2cm、器高4.0cmを測り、生焼けである。

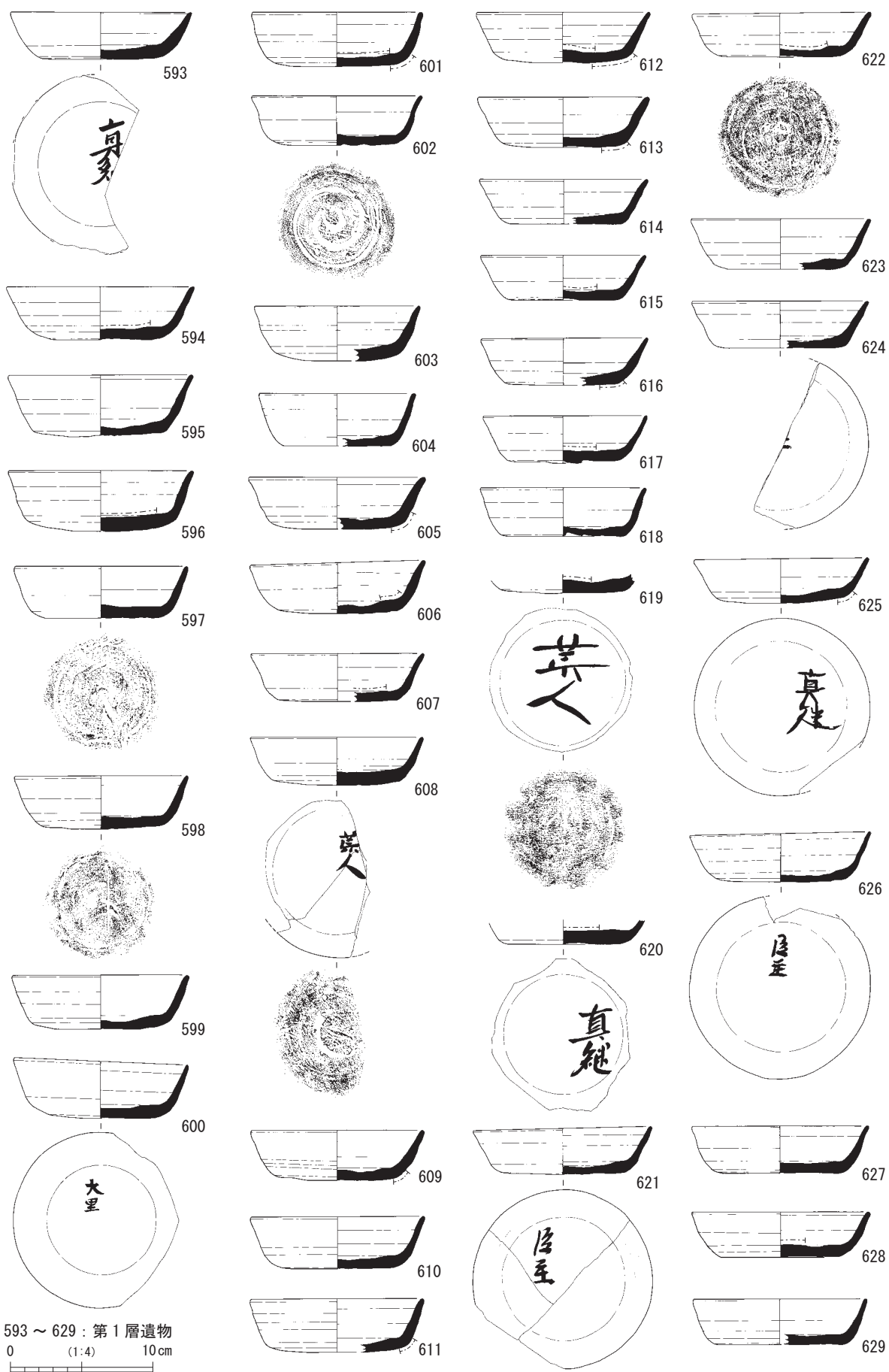
585～646は無台坏である。585～590は口径13.6～14.4cm、器高3.5cm前後を測り、Ⅲ期に位置付けられる。585は生焼けで、589は使用に伴う磨耗が残る。591は口径13.1cm、器高3.0cmを測り、底部外面に丁寧なナデ調整を加える。身の深い592は口径13.5cm、器高4.2cmを測る。593は体部が大きく外傾し、底部外面に「真継」と墨書する。また、割れた後に被熱し、煤が付着する。底部が厚い594～601は腰が張った器形を呈し、回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える個体が多い。594・596・601の底部内面は、使用に伴い磨耗する。597は「丁」、598は「/」、602は「//」のヘラ記号が底部外面にそれぞれ残る。600は口径12.0cm、器高4.2cmを測り、底部外面に小さく「大里」と墨書する。604～618は口径11～12cm前後を測り、磨耗痕を残す個体が目立つ。608は底部外面に「真人」と墨書し、611は底部外面に並行する2条の圧痕が認められる。612は使用に伴い、底部両面とも平滑となる。616は割れた後に被熱する。619底部外面の墨書は「真人」、620底部外面の墨書は「真継」と判読できる。621～637はやや扁平な器形を呈し、口径12cm前後、器高3cm前後を測る。621・626底部外面の墨書は「臣主」、625底部外面の墨書は「真継」と判読できる他、637底部外面に墨書が認められる。638は底部内面が使用に伴い平滑となり、外面に墨痕が残る。639は外面に黒～褐色を呈した漆が付着する。640～643はⅤ期、644はⅥ₁期、645はⅥ₂期に位置付けられる。640は煮沸容器に使用した後、底部外面に「臣主」と墨書する。641は還元が弱く、642は口縁部2ヶ所に灯明痕が残る。644底部外面の墨書は「継」の可能性が高い。生焼けの645は器肉が薄く、口径12.6cm、器高3.1cmを測る。646は「真」と判読できる。有台盤647は口径15.4cm、器高3.8cmを測り、底部内面が平滑となる。無台盤648は焼成不良で、摩滅が目立つ。赤彩土師器皿650は口径約20cmを測り、内面に暗文を施す。

651～653は小型壺である。651は口径10.4cm、器高7.3cmを測り、外面を粗い波状文で加飾する。産地は不明である。652・653は、外面をケズリ調整で仕上げる。壺蓋654は天井部を2条の沈線に加飾する。球胴形の短頸壺655は、頸部に径約12cmの蓋重ね焼き痕が残る。654・655とも胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。広口壺656は口径15.8cmを測り、胴部下半に沈線を施す。657・658は長頸瓶である。658は、焼成後に底部を外側から打撃により穿孔する。双耳瓶659は、小振りな耳を貼り付ける。横瓶660は自然釉の溶着状況から横位焼成となる。中甕661は口径29.2cmを測り、破片の一部が大溝第3・4層、P5088から出土した。

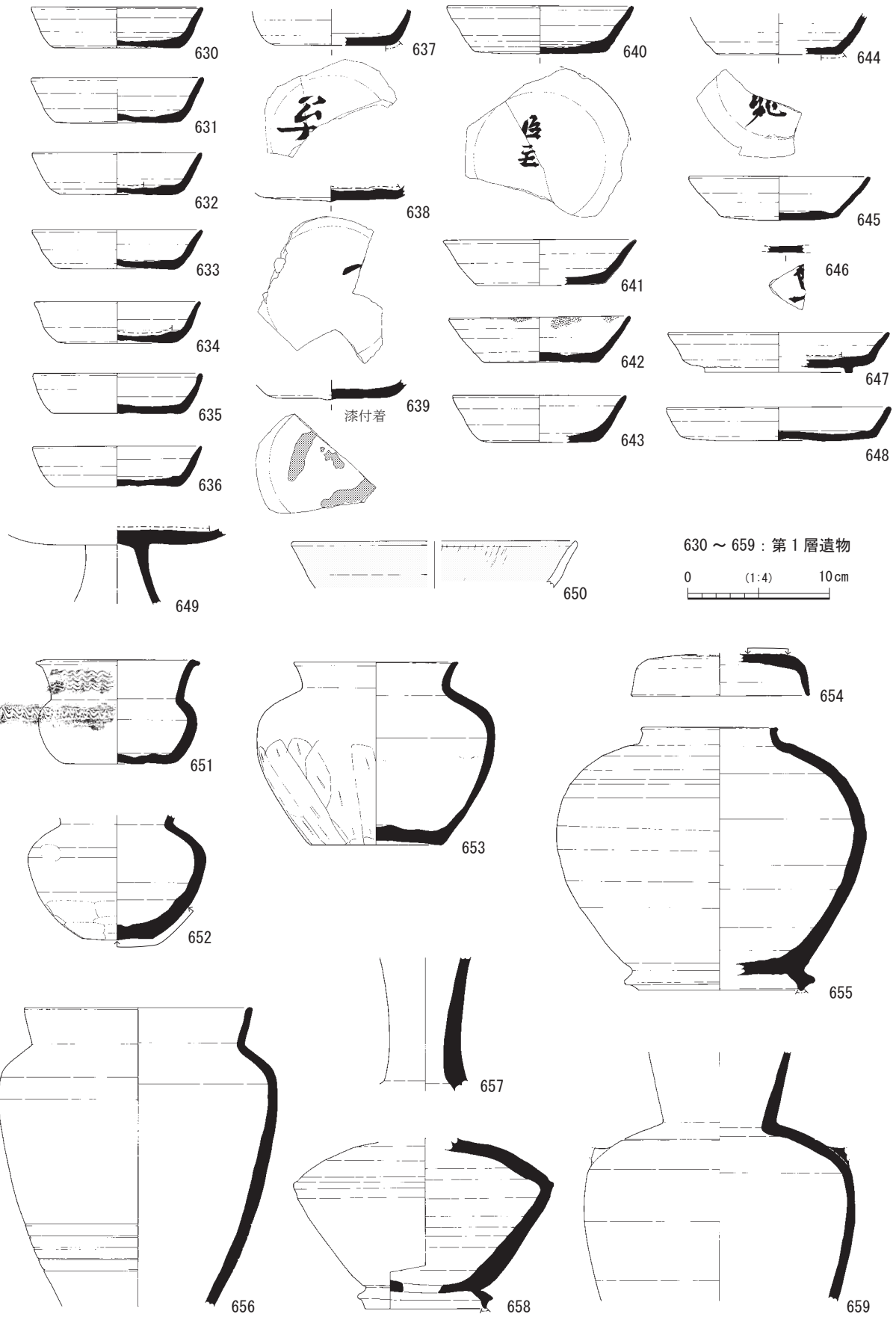


第73図 B区上層 SD5061 出土遺物実測図1 (S=1/4)

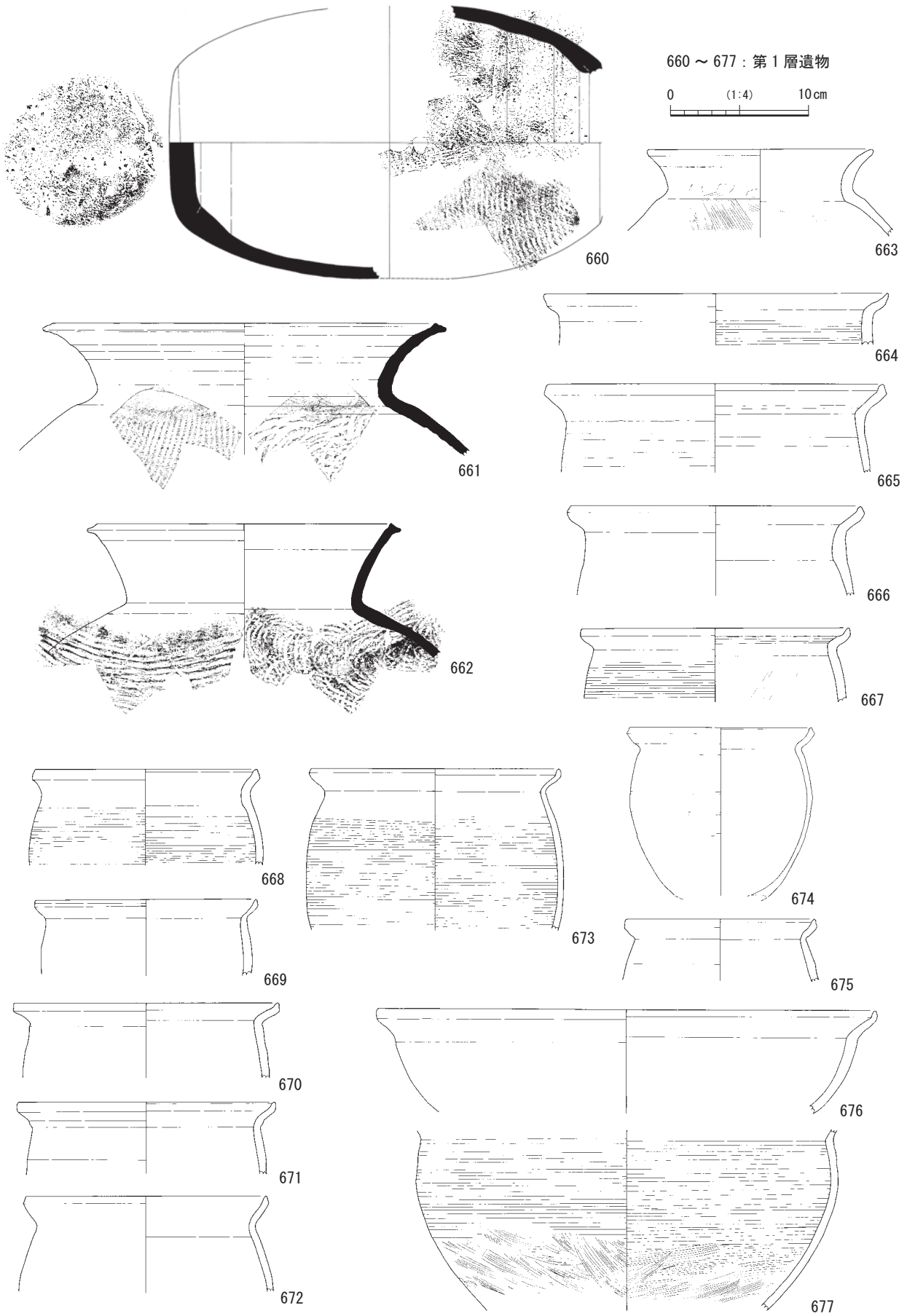
第6節 溝



第74図 B区上層SD5061出土遺物実測図2 (S=1/4)



第75図 B区上層 SD5061 出土遺物実測図3 (S = 1/4)



第76図 B区上層SD5061出土遺物実測図4 (S=1/4)



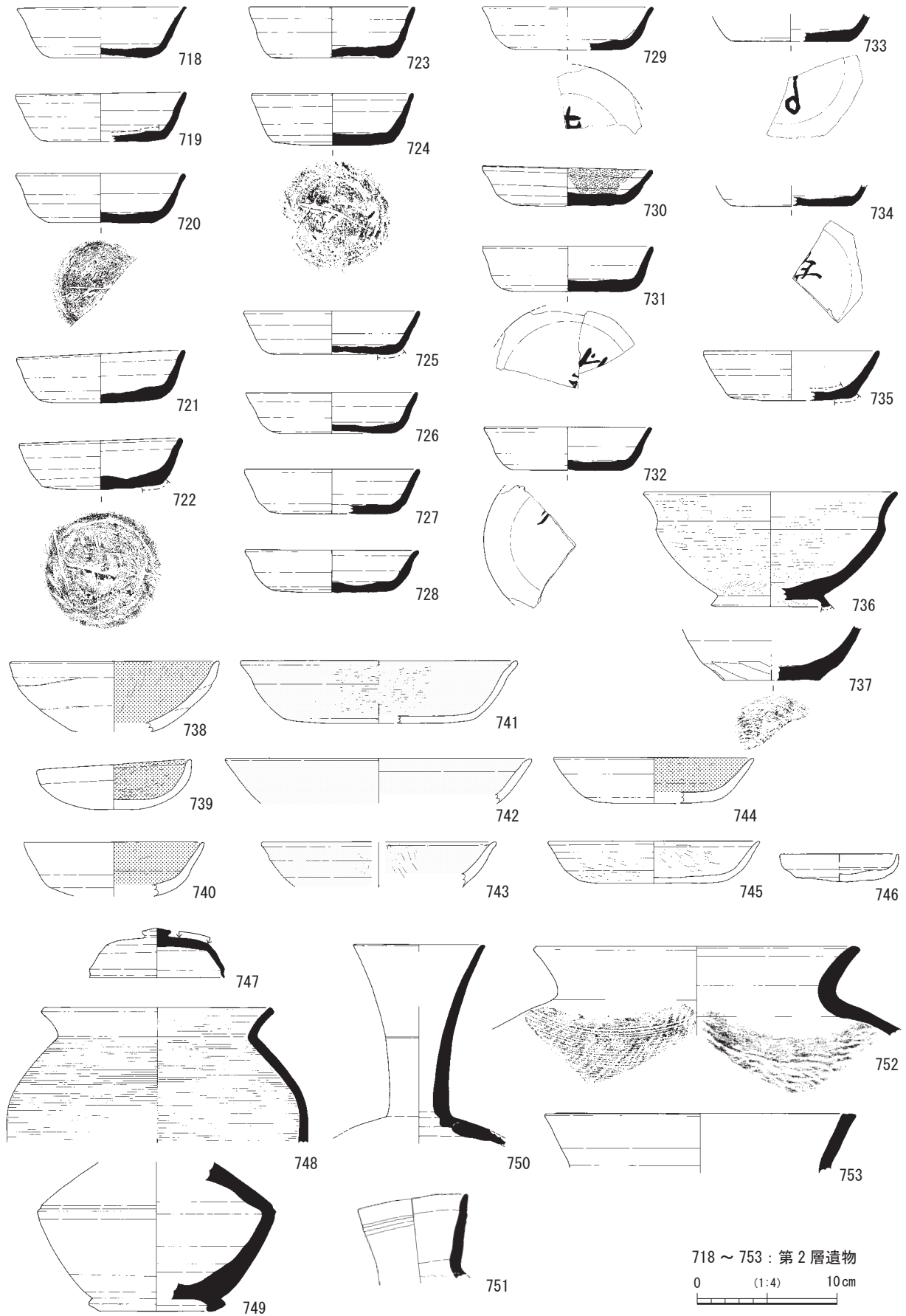
第77図 B区上層 SD5061 出土遺物実測図5 (S=1/4)

中甕662は口径22.7cmを測り、破片の一部が大溝第1層から出土した。胎土の特徴から661が隣接する加茂窯跡群産、662が鳥屋窯跡群産と考えられる。土師器甕663は下層に属する。ロクロ土師器煮炊具は、664～673が甕、674・675が小甕、676～680が埴となり、比較的良好に煮炊痕を残す。甕の口径は、24cm前後、18～21cm、16cm前後に分布し、673以外は口縁端部を嘴状にひきあげる。また、670のみ胎土に海綿骨針が混ざる。小甕674は口径12.5cmを測り、胴部をカキメ調整で仕上げる。675は口径13.5cmを測り、摩滅が目立つ。埴は、676が口径36.0cm、678～680が口径30cm前後を測り、口縁端部の特徴は甕と類似する。土師器土鍾681は円筒形を呈する。完形の682は重さ71.1gを測る。円形曲物底板第82図785は径約14cmを測り、保存状態はよくない。杭786は径約2.8cmを測り、先端は一端を加工する。

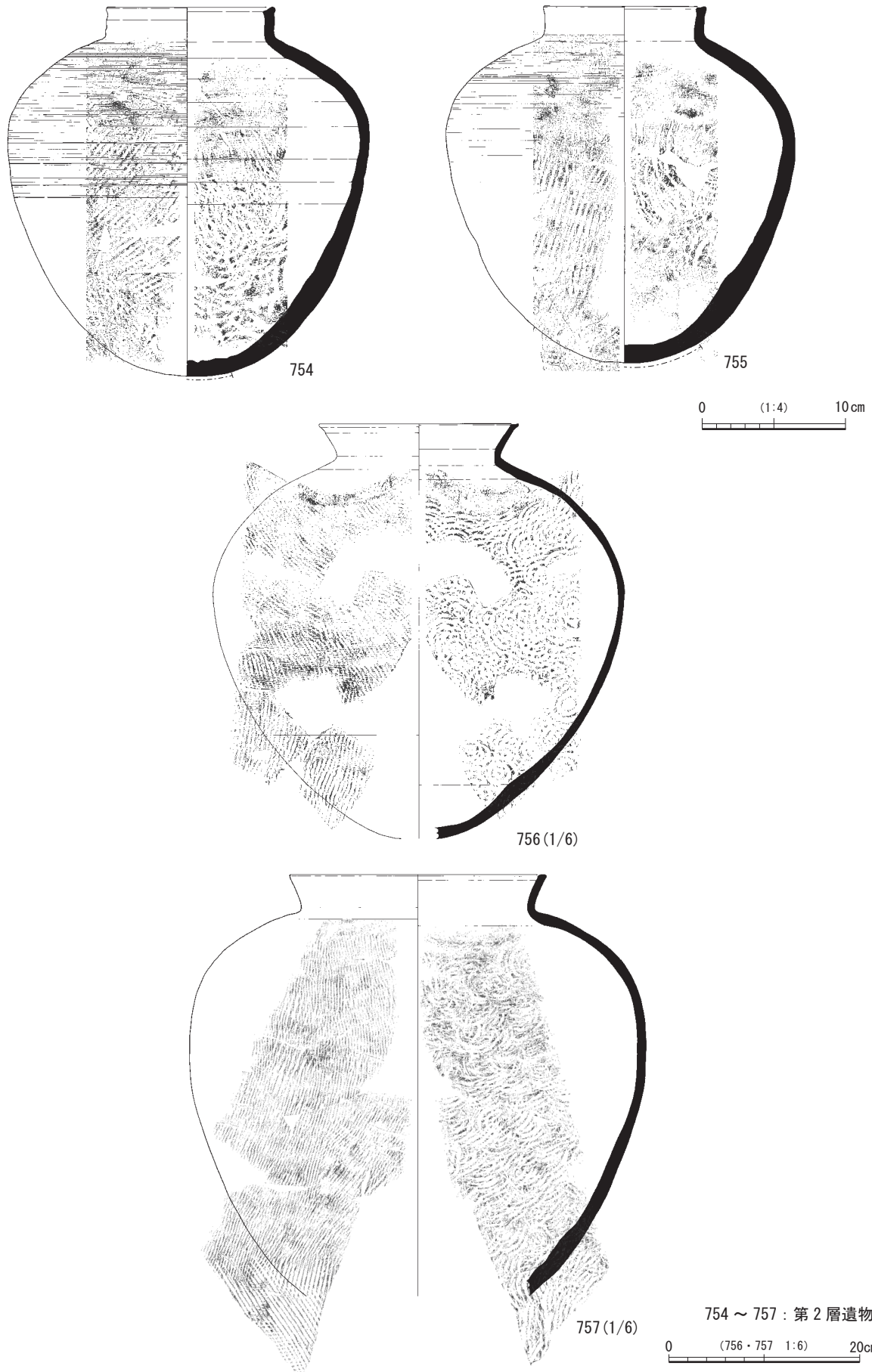
SD5061機能時に逐次堆積した土層である第2層遺物は、須恵器683～737・747～757、ロクロ土師器等738～746・758～774、木製品787～796を図示した。第2層遺物の上限の時期はⅢ期、下限の時期はおおむねⅣ₂(新)期を示し、金沢末窯跡群産と考えられる無台坏735のみⅤ₁期に位置付けられる。加茂窯跡群産の坏身683は口径9.2cm、器高2.5cmを測り、短い内面返しが内傾する。684・685は坏蓋である。684は焼成堅緻で、内面を硯面に転用する。685は口径12.6cm、器高2.4cmを測り、ボタン状の鈕を貼り付ける。686～698は有台坏である。686は口径16.8cm、器高4.5cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。煮沸容器に転用したため、土師質に変質する他、内外面とも煤が付着する。687は底部外面を硯面に転用する。688～690は、使用に伴い内底が摩耗する。689は底部外面の筆揃え痕から転用硯となる。690底部外面に記された墨書は「人」と判読できる。身の深い691底部外面の墨書は判読できない。胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。692底部外面に記された墨書は「人」「人」と判読できる。693は使用に伴う磨耗が目立ち、胎土中に海綿骨針、流紋岩粒が混ざる。694は無蓋で焼成される。695・696は口縁端部で小さく外反する。697は底部外面を硯面に転用する。698は台部剥離後も使用する他、口縁部内面に帯状の煤が付着する。無台坏699～735は、最も古相の699がⅡ₃期～Ⅲ期、最も新相を呈する735のみがⅤ₁期に位置付けられる。699は体部が内湾気味にたちあがる。700～704は口径約14cmを測る。700・701・704は使用に伴う磨耗痕が、701・702・704は煮沸に伴う煤痕が、それぞれ認められる。705～707は口径約13cmを測り、還元が弱い。708～712は口径12cm前半台を測り、磨耗痕を残す個体が目立つ。また、710・713は煮沸容器に転用する。714～721は口径約12cm、722～724は口径11.5cm前後を測る。724は胎土の特徴から鳥屋窯跡群産となる。725～731は口径12cm強、器高3cm前後を測り、扁平な印象を受ける。729・731・732の底部外面に記された墨書のうち、731の1文字目は「山」と判読できる。730は内面にタール状に煤が付着することから、灯明容器に転用したと考えられる。Ⅳ₂期と考えられる733・734底部外面の墨書は、判読できない。735は口径12.4cm、器高3.6cmを測り、体部は直線的に外傾する。内外面とも磨耗し、胎土の特徴から金沢末窯跡群産と考えられる。有蓋の稜埴736は口径17.8cm、器高8.2cmを測り、内外面とも丁寧なミガキ調整を施す。鉄鉢737は生焼けに近く、内面が平滑となる。

738～746は土師器である。内黒の無台埴は、738が口径14.7cm、739が口径10.9cmを測る。内黒の無台埴740は須恵器技法でつくられる。赤彩の無台埴741～743のうち、ロクロ成形の742はミガキ調整を加えない。皿形に近い741は口径19.6cm、器高4.4cmを測る精良品で、口縁端部で小さく屈曲する。742が口径21.8cm、743が口径約17cmを測る。内黒の744は須恵器器形に近い。ロクロ成形の小皿746は口径8.3cm、器高2.0cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。また、口縁部のタール状煤付着から、灯明皿に使用したことがわかる。胎土からみれば、739～741、744、745の胎土中に海綿骨針が混ざる。

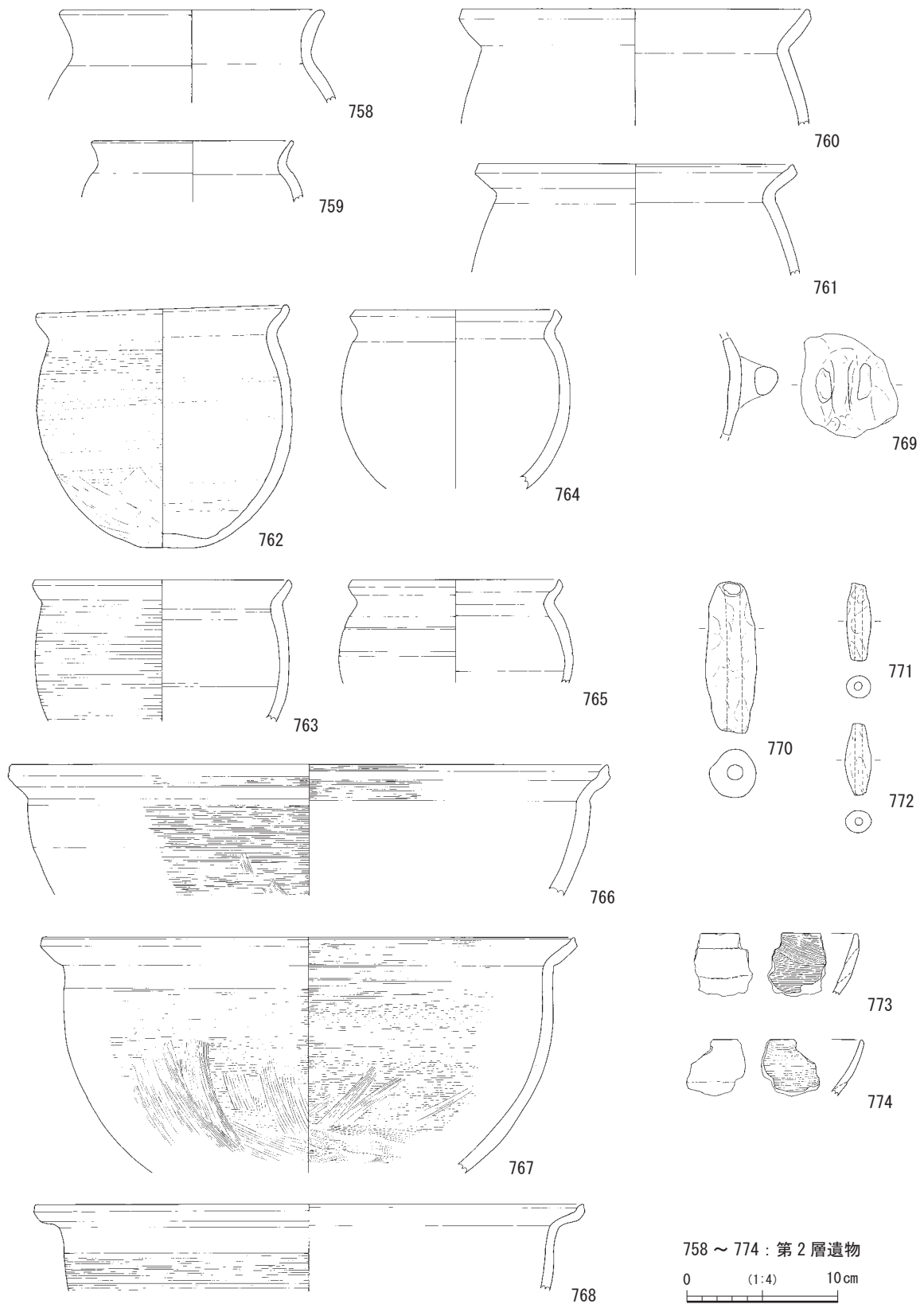
747～757は須恵器貯蔵具である。小型の壺蓋747は、口縁端部に細かい欠けが連続する。短頸壺748は口径16.2cmを測り、内外面ともカキメ調整を加える。長頸瓶749は、破片の一部がD-1区SD5418から出土した。長頸瓶750は、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。平瓶751は口径8.0cmを測り、外面を沈線2条で加飾する。甕752・753は口径21～22cmを測り、753の口縁部には使用に伴う欠けが連続する。754・755は器形・



第78図 B区上層 SD5061 出土遺物実測図6 (S=1/4)



第79図 B区上層SD5061出土遺物実測図7 (S=1/4・1/6)



第80図 B区上層 SD5061 出土遺物実測図8 (S=1/4)

法量・胎土とも近似した短頸壺で、754の破片の一部が第1層および大溝第3層から出土する。口径11cm強、器高約25cmを測り、底部外面には使用に伴う磨耗痕が残る。甕756は口径20.8cm、757は口径26.8cmを測る。胴部外面の成形に756は3つの叩き原体を、757は2つの叩き原体を、それぞれ用いる。土師器甕758・759は、本来は下層に属する遺物である。760～768はロクロ土師器で、煮炊痕を良好に残す。甕760・761のうち、761は胴部にカキメ様の強いナデを施す。球胴形の小甕762は口径16.3cm、器高16.1cmを測る。763は口径16.8cm、764・765は口径13cm台を測る。塙766は口径39.7cm、767は口径35.4cm、768は口径36.5cmを測り、胴部カキメ調整を基本とする。769は土師器甕類把手と考えられる。土師器土錘770は長さ約10cm、残存重量約63gを、完形の771・772は長さ約5cm、重さ10g前後を測る。尖底の製塩土器片773・774は、内面にハケ調整を施す。木製品第82図787～第83図796は、西岸の護岸および周辺から出土した。板材787、788、790、棒状木製品791の樹種はスギである。792～795は護岸のため打ち込まれた杭で、樹種は792がヒノキ科、794・795がスギとなる。板材796は2ヶ所に方形孔を穿ち、樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

第3層遺物は、須恵器775～779・781・782、ロクロ土師器780・783・784を図示した。有台坏775は口径14.6cm、器高4.3cmを測り、底部が突出する。底部外面に墨痕が残ることから硯に転用したと考えられる。有台坏776は使用に伴い摩耗する他、廃棄後に煤が付着する。777～779は無台坏である。777は、使用に伴い摩耗が蓄積した後、内面口縁部の帯状ヨゴレ、外面全体の煤付着から煮沸容器に転用したと考えられる。778・779は口径12.0cm、器高約3.5cmを測る。778に磨耗痕、779の口縁部内面に煤付着が認められる。ロクロ土師器無台坏780は須恵器と同様の底部回転ヘラ切りを行う。また、胎土中に海綿骨針が混ざる。球胴の中甕782の破片は道路遺構路面整地土・西側側溝SD5017からも出土した。口縁部は口径23.6cmと、かなり胴張りの印象を受ける。甕783は内外面ともカキメ調整で仕上げ、底部外面2ヶ所に底部穿孔時に用いた棒状圧痕が残る。775がⅡ₃期、776・777がⅢ期、780がⅣ₁期、778・779がⅣ_{2(古)}期に位置付けられる。

2 C区SD5001（遺構：第84・85図、遺物：第86～89図、第25・38表）

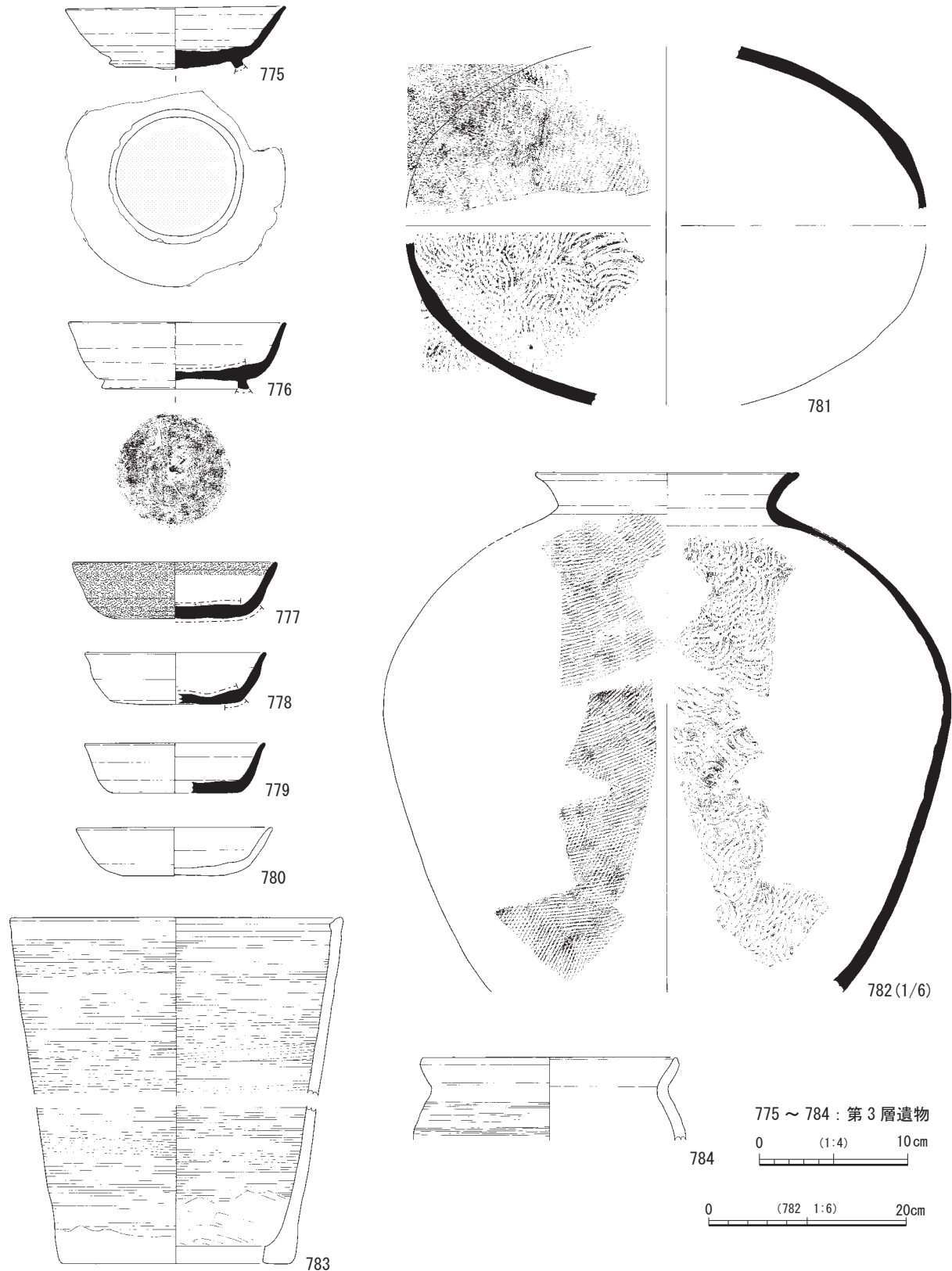
遺構 C区P・Q-21・22で延長約12mを検出した古代後半に属する溝であり、津幡町教育委員会の確認調査成果⁽⁷⁾を加味すれば、旧舟橋川の流路の一つと推定できる。SD5001は、上層調査で検出した流路をSD5001(新)、下層調査で検出した流路をSD5001(古)と呼称しており、SD5001(新)が最終の流路、SD5001(古)がそれ以前の流路となる。なお、調査直後に、SD5001(古)と北側の整地土(第85図土層1～3)の関係をもって、道路遺構との意見を示した⁽⁸⁾が、本報告で修正をおこないたい。

SD5001(新)は、本流が北東から南西方向に直線的に流下し、調査区西側で流路幅を大きく南方向にひろげる。肩部はレンズ状の緩やかな勾配を基本とし、規模は上幅が調査区東端で約2.0m、中央付近(第84図土層断面b-b')で約2.0m、調査区西端で約13.0mを、下幅が調査区東端で約0.5m、中央付近で約0.6mを、深さは本流が55～60cm(溝底の標高は調査区東端4.22m、同西端4.17m)、南側張り出しが10～110cmを、それぞれ測る。また、周辺の標高は、4.85～5.00mを測る。

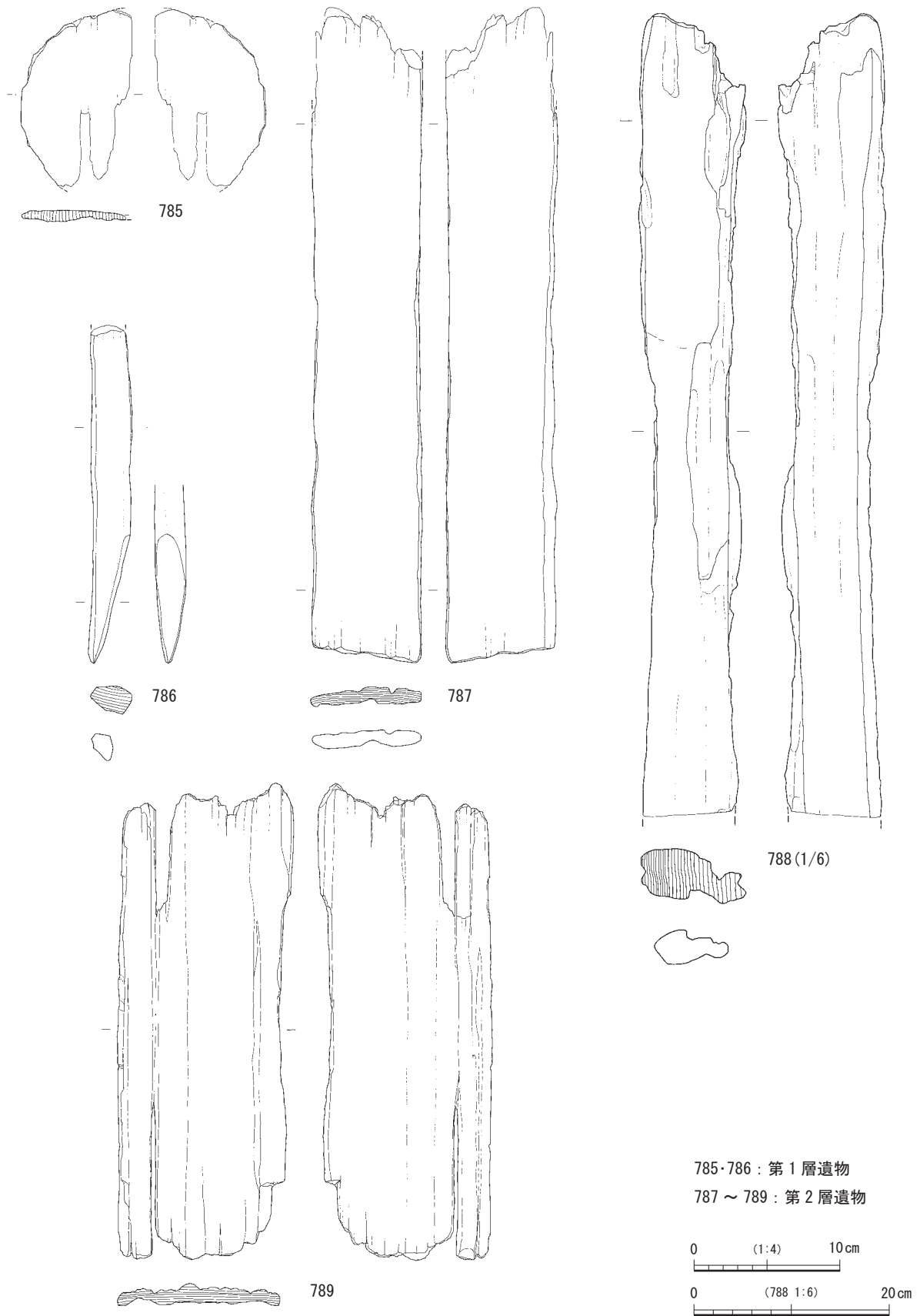
基本土層層序は、大きく7つの層序に分けられ、上位層から順に、①近世以降の水田整地土(第84図土層1・2・5～7)、②埋土の可能性をもつ灰色砂質土(同図土層4)、③濁黒灰色粘質土(同図土層13)を挟んだ淡灰オリーブ色細砂・腐植土の交互堆積層(同図土層11・15)、④しまりのない淡灰黄色砂質土(同図土層16)、⑤暗灰色砂質土(下層包含層)が混ざる濁灰～暗褐色粘質土(同図土層17・20・21)、⑥淡茶灰～淡灰オリーブ色を呈する粗砂・細砂と腐植土の交互堆積層(同図土層18・19・24～26)、⑦ベース土の崩落土(同図土層23・27)となり、③・④・⑥は流水作用に伴う堆積層である。また、遺物は、②を上層遺物、③を中層遺物、⑥・⑦を下層遺物として取り上げ、SD5001(新)が機能していた時期にⅦ₂期が含まれる。

SD5001(古)は、上層ベース土を30～60cm掘り下げて検出した溝で、下層包含層上面(標高4.35～4.53m)を

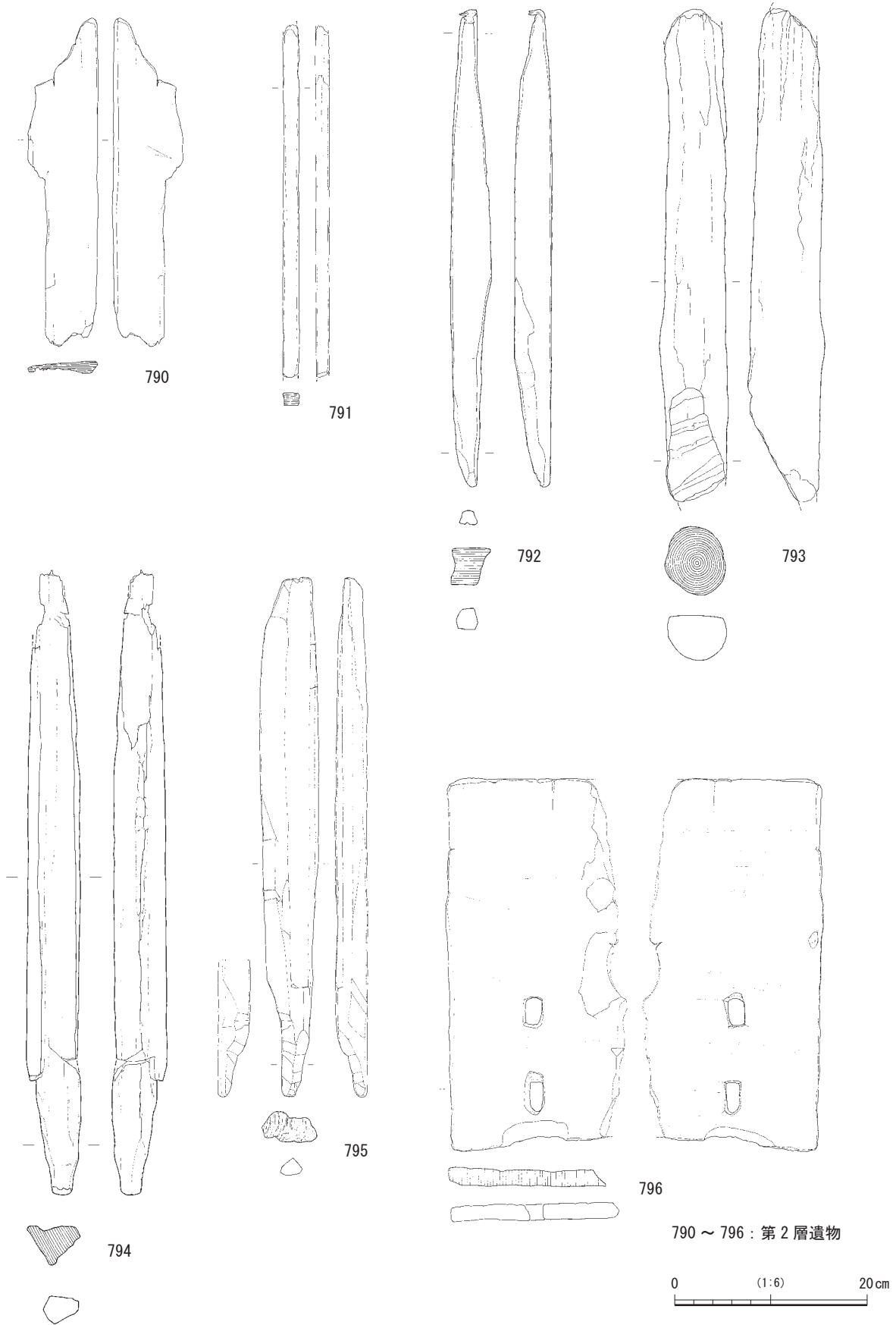
検出面とする。SD5001(新)と南側肩部ラインがほぼ重複しながら、北東から南西方向に流下し、調査区西端で流路幅を北方向にひろげる。底面は比較的平坦で、肩部は緩やかな勾配で立ちあがり、北側肩部は機能時に一部崩落する。溝の規模は、上幅が調査区東端で約2.2m、中央付近(第85図土層断面c-c')で約2.1m、



第81図 B区上層SD5061出土遺物実測図9 (S=1/4・1/6)



第82図 B区上層SD5061出土遺物実測図10 (S = 1/4・1/6)



第83図 B区上層SD5061出土遺物実測図11 (S=1/6)

調査区西端で約5.8mを、下幅が調査区東端で約0.6m、中央付近で約1.2m、調査区西端で約4.1mを、深さは53～75cm(溝底の標高3.78～3.85m)を、それぞれ測る。

基本土層層序は、大きく3つの層序に分けられ、上位層から順に、①SD5001(新)北側の盛土層(第85図土層断面c-c'土層1～3)、②埋土の可能性をもつ淡灰色弱粘質土～粘質土(同図土層4・5)、③青灰色細砂・粗砂と腐植土の交互堆積層(同図土層6・7)となり、うち③が流水作用に伴う堆積層である。

木簡を含む大部分の土器、木製品は、上記③(特に土層6)から出土し、部材を主体とする木製品は調査区西端に不規則に折り重なる。後述する出土遺物の様相から、SD5001(古)が機能していた時期はVI₁期を中心とした時期と考えられる。また、他遺構の切りあい関係は、SB510より新しい。なお、SD5001(新)北側の不定形な小ピットは、大部分が近世以降の水田耕作に伴うものである。

遺物 SD5001(新)から出土した第86図797～820、第87図825～第88図832を、またSD5001(旧)から出土した第86図821～824、第88図833～第89図839～841(835除く)、1350を、それぞれ図示した。後者には、木簡3点、刀形1点、斎串1点が含まれる。遺物量は多くないものの、大溝、SD5061とは異なり、道路遺構出土遺物と接合する破片は確認できない。なお、SD5001北側の小ピット群から近世以降の陶磁器片が出土した。

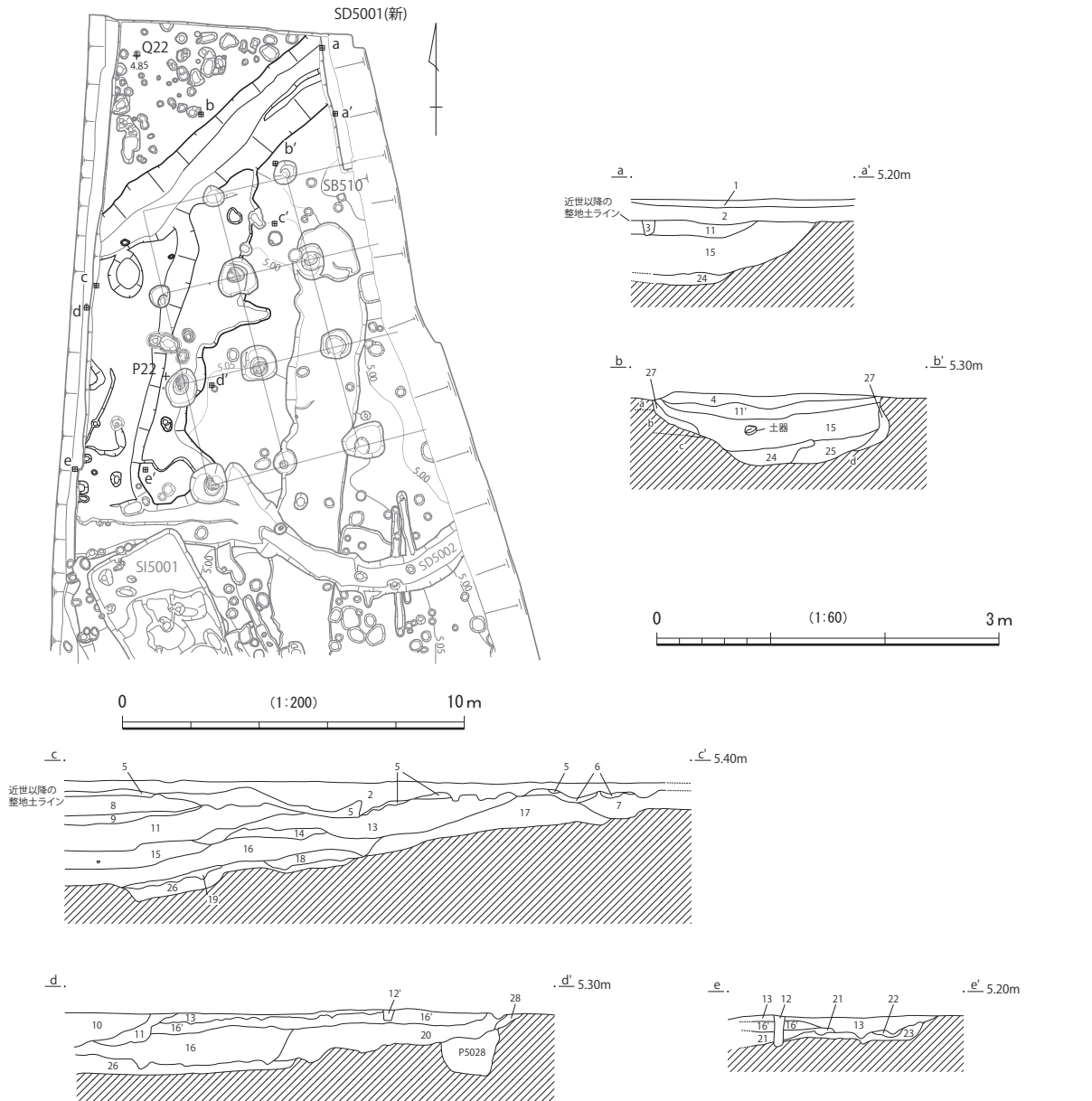
SD5001(新)は、前述のとおり、上位層から順に、最上層(検出面)、上層、中層、下層に分けて遺物を取り上げている。最上層(検出面)出土の須恵器無台坏797は、底部外面に薄く墨痕が残る。

上層出土の須恵器798～800・803・804、外赤内黒土師器801、ロクロ土師器802では、798～800がVI₂期、802がVI₃期～VII₁期に位置付けられる。有台坏798・799は口径約13cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。798の台部はかなり低く、799は胎土中に海綿骨針が混ざる。無台坏800は口縁端部が内側に肥厚し、底部外面に「茂」と墨書する。外赤内黒の土師器壺801は口径12.0cmを測り、III期頃に位置付けられる。ロクロ土師器有台坏802は口径16.3cm、器高5.4cmを測り、体部が直線的に外傾する。また、台部は断面逆三角形に近い形状を呈する。長頸瓶803は産地不明で、胎土中に白色粒が混ざる。長頸瓶804は、肩部2ヶ所を沈線で加飾する。他に灰釉陶器瓶細片2点が出土した。

中層出土の須恵器805・806・808～814、ロクロ土師器807では、807・813・814がVI₂期と最も新しい。有台坏805は体部が直線的にのび、還元が弱い。扁平な無台坏806は口径12.8cm、器高3.1cmを測る。ボタン状の鈕を付す坏蓋808は、強還元のため断面が褐灰色を呈する。有台坏809の台部は小振りである。810～814は無台坏である。810は底部外面に「真継」の墨書が残る。811は焼きゆがみ、生焼けに近い。812の外側面に記された墨書は「千」の可能性が高い。813は還元が弱く、814は煤が付着する。内黒のロクロ土師器807は口径12.0cm、器高4.5cmを測り、胎土中に海綿骨針が混ざる。第87図825～830は木製品である。たも状木製品825は長さ192.0cm、最大径4.6cmを測る。杭826とともに根元部を先細らせ、樹種はヒノキ科である。下部を欠落する編台目盛板片827は残存長30.4cmを測り、上面に約1.3cm間隔で深さ約2mmのV字状の刻みが23ヶ所残る。部材828・829とともに樹種はスギである。楕円形曲物底板830は、長軸約84cmを測る大型品で、4ヶ所に皮綴じ痕を残す。

下層出土のロクロ土師器内黒無台坏815～817は、胎土中に海綿骨針が混ざり、815がVI₂期、817がVI₃期、816がVII₁期頃に位置付けられる。815は内外面とも丁寧なミガキ調整を施す。816は器肉が薄く、外面に一部煤が付着する。底部台状を呈する817は口径17.0cm、器高5.4cmを測り、外面に煤が付着する。須恵器瓶818は、底部外面に離れ砂が付着する。819・820はロクロ土師器埴類である。820は、胎土中に海綿骨針が混ざる。第88図831は、スギ材を用いた円形曲物底板で、刀子痕が目立つ。台石832は両面とも平滑で、割れた後に全面に煤が付着する。下層遺物と考えられる。

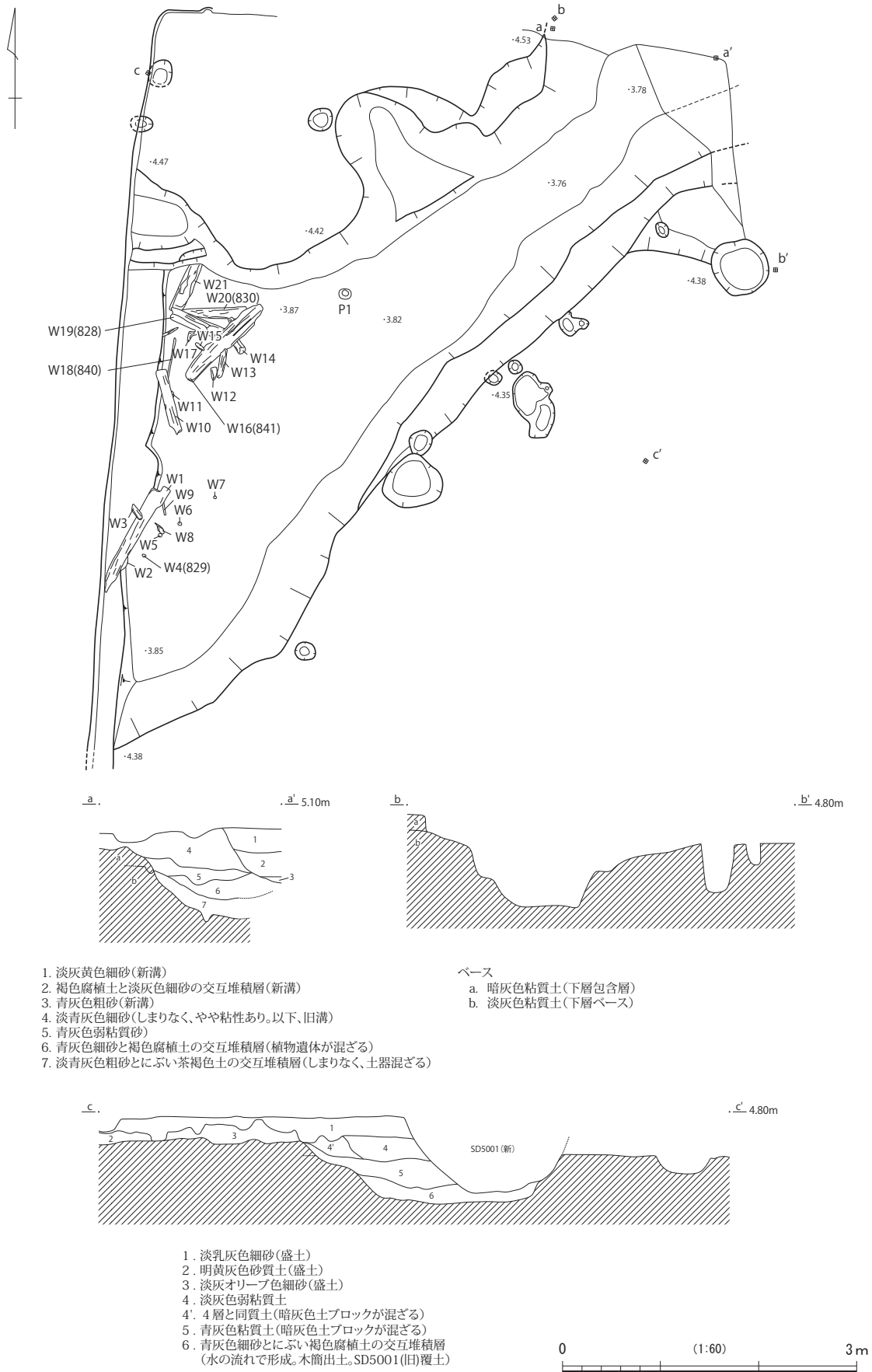
SD5001(旧)は、第85図土層6・7から出土した須恵器、土師器、木製品のうち、第86図821～824、第88図833～第89図839～840、1350(835除く)を図示した。須恵器有台坏821は口径15.1cmを測り、胎土の特徴から



1. 灰色砂利(現水田擁壁コンクリート基礎)
 2. 灰色弱粘質土と淡灰黄色砂質土の混合土(近世以降整地土)
 3. 灰色砂質土(SD5001北側ピット群覆土)
 4. 灰色砂質土(淡灰色砂ブロックが混ざる。埋土か。上層遺物)
 5. 茶灰色粗砂～砂利と11層の混合土
 6. 黒灰色粘質土(13層)と2層の混合土
 7. 茶灰色砂(整地土)
 8. 濁灰黄色砂質土(9層ブロックが混ざる)
 9. 暗灰色粘質土(炭化物、8層ブロックが混ざる)
 10. 11層と同質土(淡灰黄色砂主体)
 11. 淡灰オリーブ色細砂と灰褐色腐植土の交互堆積層(しまりなし。水流でラミナ状堆積)
 - 11'. 11と同質土(灰褐色腐植土主体)
 12. 暗灰色粘質土
 - 12'. 濁暗褐色粘質土(炭粒が多く混ざる)
 13. 濁黒灰色粘質土(炭粒、土器が多く混ざる。黒色土で土器取り上げ)
 14. 13層と15層の交互堆積層(水流で形成)
 15. 淡灰オリーブ色細砂と褐色腐植土の交互堆積層(しまりなし。水流でラミナ状堆積)
 16. 淡灰黄色砂質土(しまりなく、褐色腐植土層状に混ざる。水流形成)
 - 16'. 16層と同質土(若干淡い)
 17. 濁灰色砂質土(下層包含層、暗灰色粘質土がブロック状に混ざる)
 18. 淡灰黄色砂質土と褐色腐植土の交互堆積層(水流で形成)
 19. 淡茶灰色細砂
 20. 濁灰色粘質土(下層包含層(暗灰色粘質土)と淡灰黄色粘質土がブロック状に混ざる)
 21. 濁暗褐色粘質土(炭粒が混ざる)
 22. 明黄灰色砂質土
 23. ベース土(淡灰黄色砂質土。暗灰色土がブロック状に混ざる)
 24. 褐色腐植土と淡灰緑色粗砂の交互堆積層(水流でラミナ状堆積)
 25. 淡灰オリーブ色細砂と褐色腐植土の混合土(水流で形成。複雑に混じり合う)
 26. 褐色腐植土と淡灰オリーブ色細砂の交互堆積層(15層と同質土。水流で形成)
 27. 濁灰緑色砂質土(ベース山崩落土。暗灰褐色砂質土、淡灰オリーブ色細砂ブロックが少量混ざる)
 28. 明黄色粘質土
- [ベース土]
- a. 濁淡灰色砂質土
 - b. 暗灰色粘質土(下層包含層)
 - c. 淡灰緑色粘質土
 - d. 淡灰緑色細砂

第 84 図 C 区上層 SD5001(新) 平面図・土層断面図 (S = 1/60・1/200)

第6節 溝

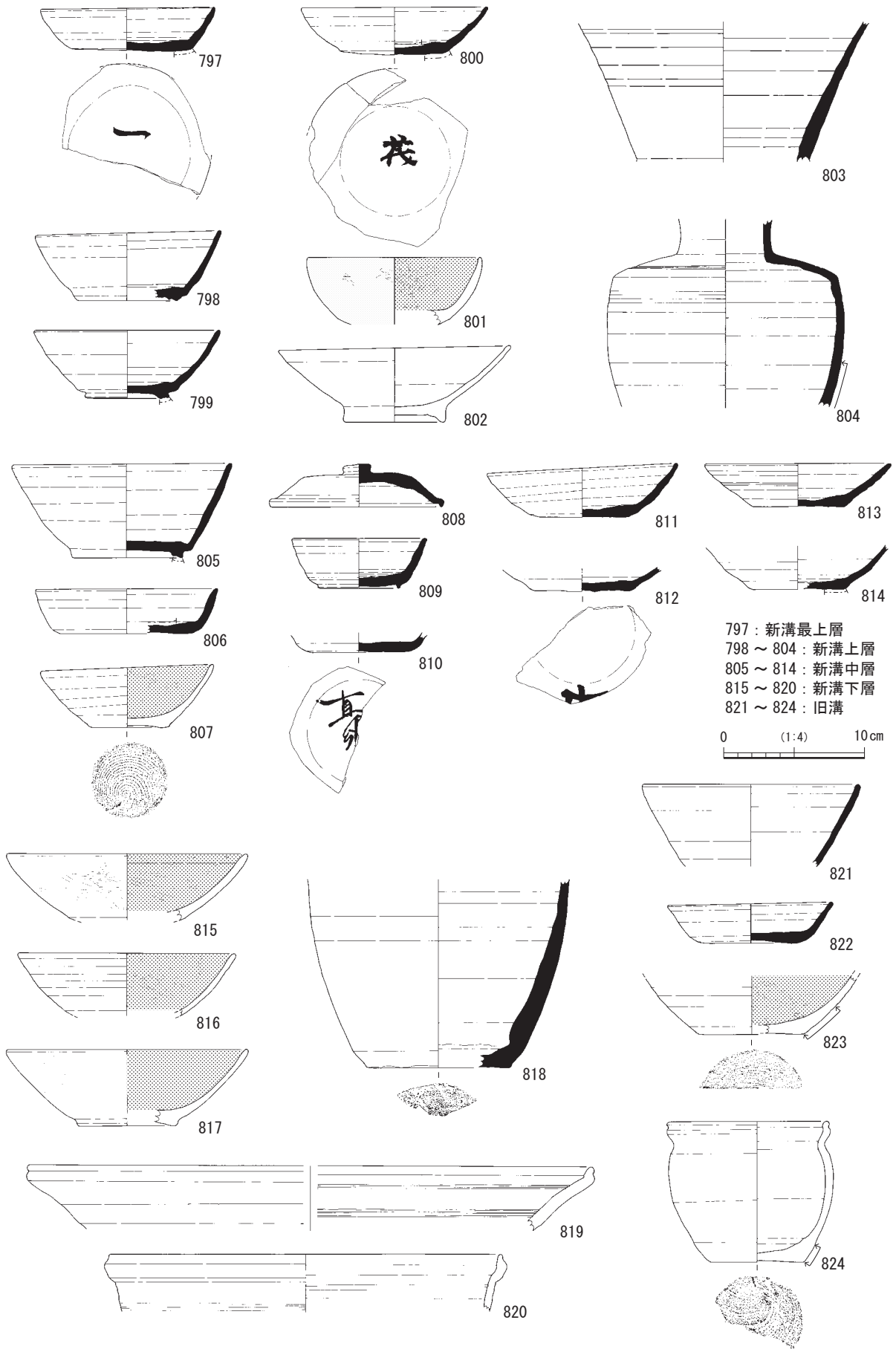


1. 淡灰黄色細砂(新溝)
2. 褐色腐植土と淡灰色細砂の交互堆積層(新溝)
3. 青灰色粗砂(新溝)
4. 淡青灰色細砂(しまりなく、やや粘性あり。以下、旧溝)
5. 青灰色弱粘質砂
6. 青灰色細砂と褐色腐植土の交互堆積層(植物遺体が混ざる)
7. 淡青灰色粗砂とにぶい茶褐色土の交互堆積層(しまりなく、土器混ざる)

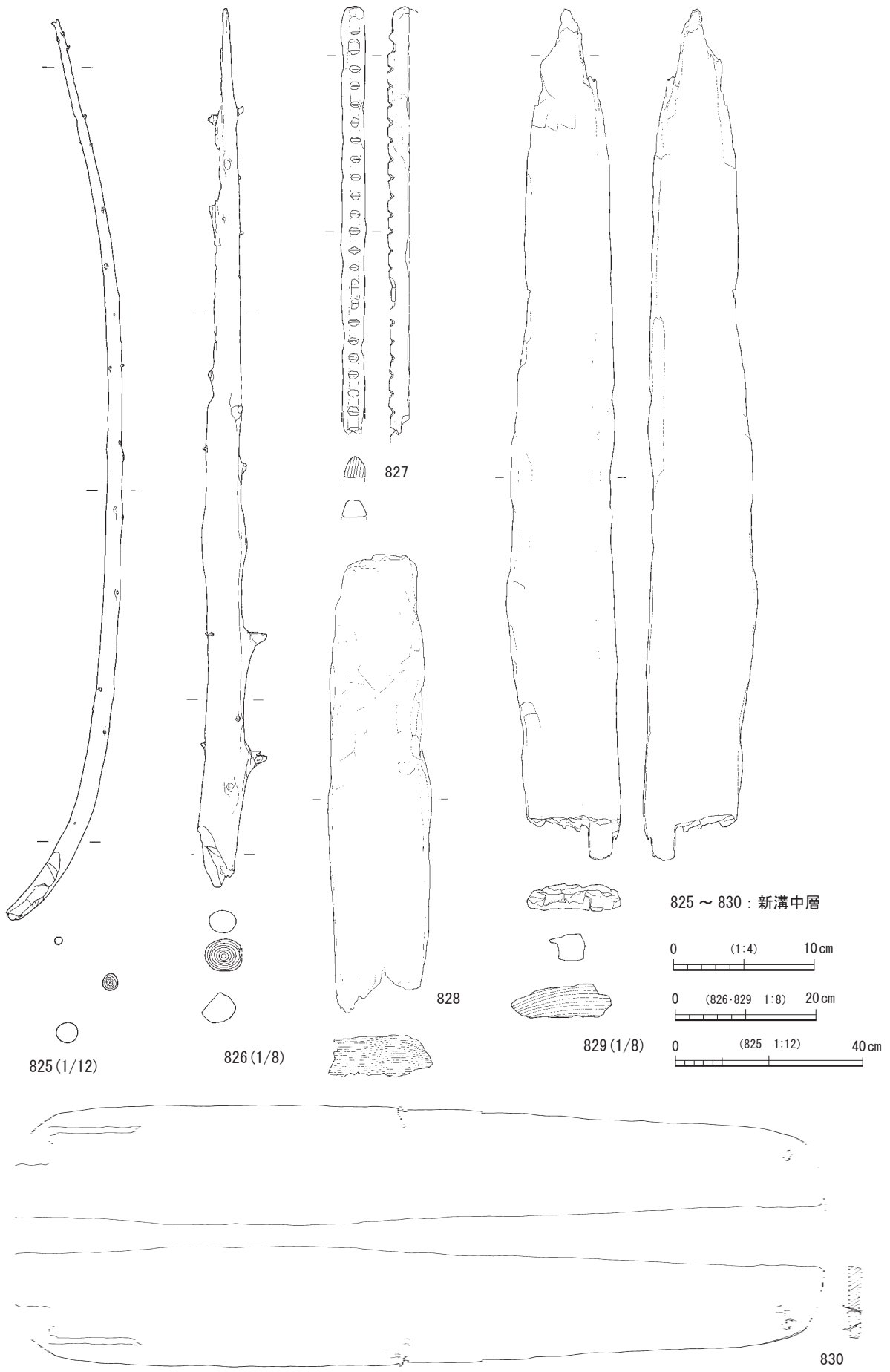
- ベース
- a. 暗灰色粘質土(下層包含層)
 - b. 淡灰色粘質土(下層ベース)

1. 淡乳灰色細砂(盛土)
2. 明黄灰色砂質土(盛土)
3. 淡灰オリーブ色細砂(盛土)
4. 淡灰色弱粘質土
- 4'. 4層と同質土(暗灰色土ブロックが混ざる)
5. 青灰色粘質土(暗灰色土ブロックが混ざる)
6. 青灰色細砂とにぶい褐色腐植土の交互堆積層(水の流れて形成。木簡出土。SD5001(旧)覆土)

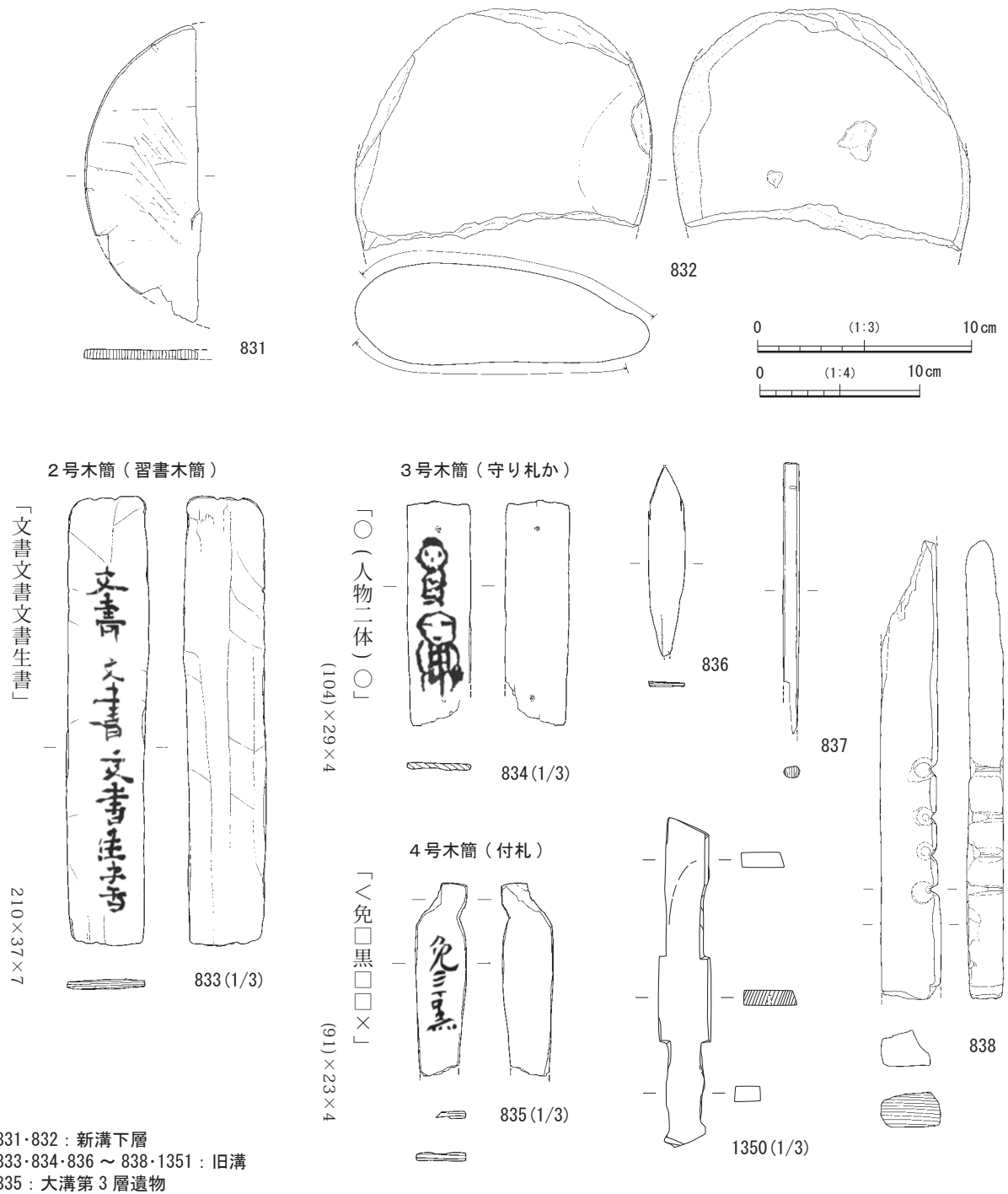
第 85 図 C 区上層 SD5001(旧) 平面図・土層断面図 (S =1/60)



第86図 C区上層 SD5001 出土遺物実測図1 (S=1/4)

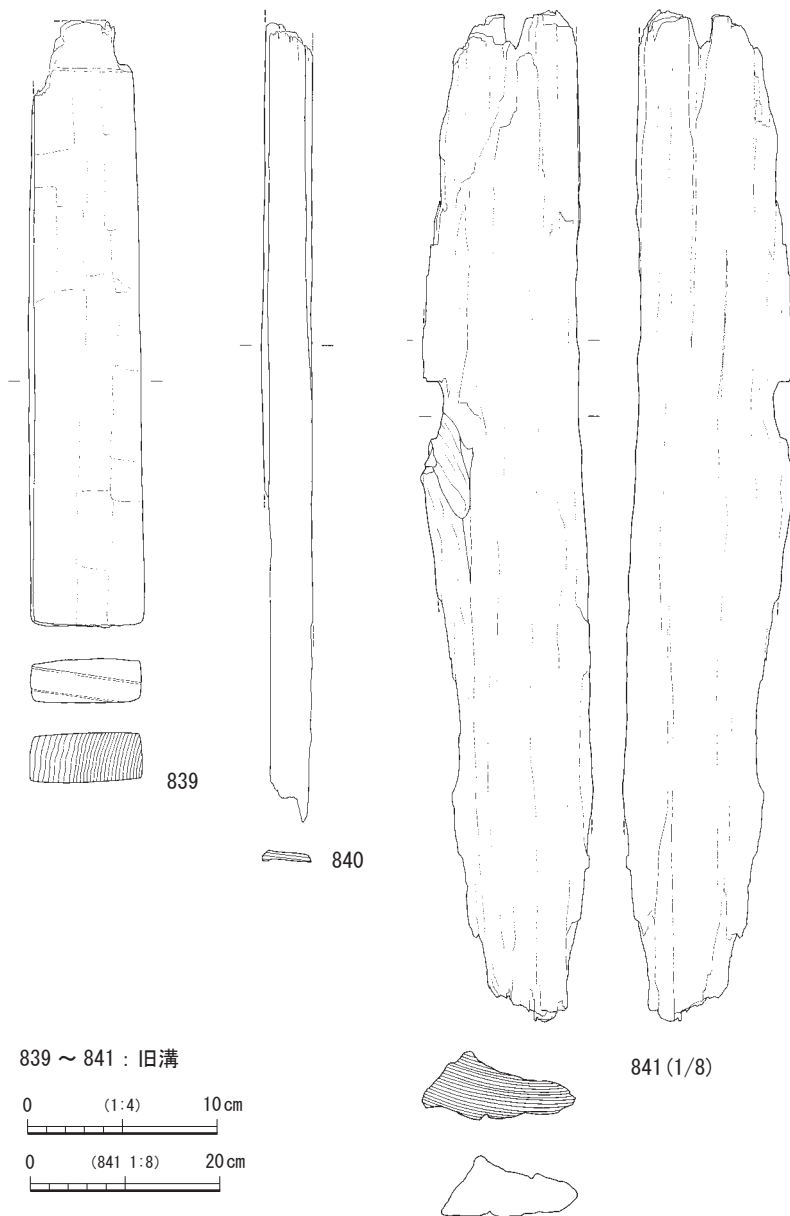


第 87 图 C 区上層 SD5001 出土遺物実測图 2 (S = 1/4·1/8·1/12)



第88図 C区上層SD5001出土遺物実測図3 (S=1/3・1/4)

鳥屋窯跡群産と考えられる。無台坏822は体部が緩やかに外傾する。823・824は胎土中に海綿骨針が混ざる。ロクロ土師器内黒無台碗823は内面に丁寧なミガキ調整を施し、煤が付着する。小甕824は口径11.0cm、器高10.0cmを測り、煮炊痕を良好に残す。822がV₁期、821・823がVI₁期に位置付けられる。第88図833・834は木簡で、樹種はスギである。短冊形の習書木簡833(2号木簡)は、長さ21.0cm、幅3.7cm、厚さ0.7cmを測り、「文書文書文書生書」と判読できる。短冊形の834は、残存長10.4cm、幅2.9cm、厚さ0.4cmを測り、上端の一部と下端部を欠損する。上下2体の人物画が描かれ、神像の可能性をもつ。上の人物は帽子を被っている可能性が高く、



第89図 C区上層SD5001出土遺物実測図4 (S=1/4・1/8)

雪だるま様に描かれた下の人物は正面に格子文様で装束を表現する。上下各1ヶ所に表側から小孔を穿ち、柱・壁等に釘等を打ち込んだ痕跡と考えられる。斎串836は一部を欠損し、残存長11.8cm、幅2.3cmを測り、樹種はスギである。棒状木製品837、火切り板838、部材839～841の樹種はスギである。838は4ヶ所に残る火切り臼が炭化する。形代1351は刀形と考えた。長さ15.6cm、幅2.5cmを測り、柄側面を丁寧に加工する。樹種はスギと考えられる。

3 その他の溝

(遺構：第90・92～94・101図・第8～10・35表、遺物：第91・95図、第25・26表)

C区SD5002 P-21・22区で延長約11mを検出した自然流路で、屈曲しながら東から西方向に流下する。肩部は緩やかに立ちあがり、上幅0.8～1.1m、深さ14～31cmを測る。覆土は炭粒やベース土粒が混ざる灰褐色～濁灰色粘質土を基調とする。他遺構との切りあい関

係はSI5001、P5033、SD5001・03～05より古く位置付けられる。第91図842は須恵器坏H蓋で、内面に湿台痕が残る。胎土はI期のかほく市多田ツルガダン窯跡⁽⁹⁾の特徴に類似する。他に8世紀以降の須恵器無台坏や、下層遺物を含む土師器の小片が出土した。

C区SD5006 O・P-21～23区で検出し、上層ベース土(第90図断面26-26'第3層)が厚さを減じて途切れたことに起因し、下層包含層を溝と誤認したものである。上位層から、にぶい灰茶色砂質土、淡乳灰色砂質土、暗灰褐色粘質土がほぼ水平に堆積し、下層SD5501より古く位置付けられる。多くの出土遺物のうち第91図843～848、第101図1039を図示した。843～845は弥生時代中期後半の甕である。843は口径23.6cmを測り、口縁端部に刻みを施す。845は摩滅し、口縁部下端にわずかに刻みが残る。846・847は古墳時代初頭～前期の土師器で、摩滅が著しい。球胴の壺846は器肉が薄く、胴部上半を波状文、沈線文で加飾する。高坏847は口径13.2cm、器高9.2cmを測り、脚部3ヶ所に円孔を穿つ。遺構上面から出土した須恵器有台坏848は、上層包含

層の掘り残しである。底部外面にかすかに墨痕が残り、VI₂期に位置付けられる。凝灰岩製の打製石斧1039は重さ約857gを測り、刃部に使用痕を残す。弥生時代後期と考えられる。

C区SD5009 ~ 12・15 0-22区で検出した耕作に伴う小溝群で、途中で屈曲する。SD5009・15・10間が約2m等間、SD5010 ~ 12間が約1.5m等間、各溝の深さ3 ~ 14cmを測り、覆土は濁暗褐色粘質土である。遺構の切り合い関係は、SK5001より新しい。少量の出土遺物のうち、SD5010出土の第91図849・850の須恵器を図示した。有台坏849は口径11.0cm、器高4.6cmを測り、還元が弱い。無台皿850は口径12.7cm、器高2.3cmを測り、内面は使用に伴い磨耗する。849がV₂期、850がVI₂期に位置付けられる。他にVI期の須恵器片が少量出土した。

C区SD5018 N-21区で検出した道路遺構西側溝SD5017より古く位置付けられる溝で、B区に伸びない。断面はレンズ状を呈し、上幅98 ~ 116cm、深さ32cmを測る。覆土は、水流により細砂・粗砂(第90図断面25-25'土層3 ~ 5)の後、炭粒、ベース土粒が混ざる黒灰~灰色砂質土が堆積する。出土した第95図851は須恵器坏蓋で、口縁端部をしっかりと仕上げる。IV₂(新)期と考えられる。他に須恵器坏類・甕等の小片が比較的多く出土し、底面付近から出土した無台坏はVI₂期に位置付けられる。

B区SD5023・27 L・M-20・21区で検出した直線的な小溝で、小区画を示す溝の可能性をもつ。SD5023は主軸方位N-約120°Wを示し、延長約11.1m、上幅16 ~ 72cm、深さ4 ~ 8cmを測る。また、SD5027は主軸方位N-約110°Wを示し、延長約13.0m、上幅26 ~ 60cm、深さ3 ~ 14cmを測る。2条の溝は、耕作に伴う小溝とは覆土が異なり、粘性の高い、にぶい灰褐色粘質土を基調とする点(第94図)、遺構の切り合い関係が耕作に伴う小溝群および道路遺構西側溝SD5017埋没段階より古い点で共通する。遺物は、SD5023から少量の須恵器坏類、ロクロ土師器甕の小片が、SD5027から須恵器無台坏小片(うち1点はV期)が出土した。

B区SD5041 ~ 45 J-20・21区で検出した耕作に伴う小溝群で、約2.5m等間隔に配される(第92・94図)。主軸方位はN-約15°Wを示し、上幅22 ~ 76cm、深さ3 ~ 25cmを測る。覆土は濁灰褐色粘質土を基調とし、SD5042・43と大溝北流路の切り合い関係から、大溝北側流路埋没後の耕作痕跡となる。遺物は、VI₂期を下限とする須恵器、土師器、ロクロ土師器の小片が少量出土した。

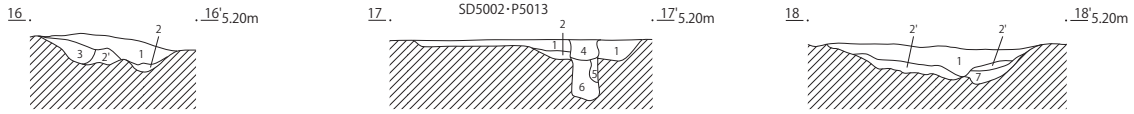
B区SD5048・50 J-21区で検出した2条の基幹的溝で、ほぼ並行しながら屈曲して流れる。本来は、1条の溝で、東側では道路遺構と交差し、また、西側ではA区上層SD506、第3・4次調査区とつながる。SD5048が上幅44 ~ 110cm、深さ28 ~ 48cmを、SD5050が上幅80 ~ 120cm、深さ7 ~ 34cmを測り、ともに断面逆台形を呈する(第94図)。覆土は、SD5048が灰褐~灰色粘質土を、SD5050が淡灰緑色粘質土を基調とし、最後に濁褐灰色粘質土が堆積する。遺構の切り合い関係は、SD5050がSB508・509より古い。未図化であるが、比較的多くの須恵器、土師器、ロクロ土師器の細片が出土、うち須恵器無台坏片にはVI期の特徴を示す個体を含む。

B・C区その他溝 大部分が、B区大溝両側に展開する耕作に伴う小溝である。各溝の土層断面図を第90・92 ~ 94図に、各溝の規模、他遺構との切り合い関係等を第8 ~ 10表に、それぞれ記した。このうち、B区大溝北側の耕作に伴う小溝は、道路遺構、大溝と重複しない位置関係にあり、掘立柱建物、SD5061より新しい。おおむね第10表のa群(N-32 ~ 35°W)→c群(N-5 ~ 25°W)→e群(N-13°E)→d群(N-約0°)の変遷を想定している。

耕作に伴う小溝から出土した遺物は、VI₂期に属する須恵器、土師器を下限とし、うち第93図の852 ~ 866を図示した。852・853はSD5028から出土した。須恵器無台坏852は体部が外傾し、生焼けに近い。土師器土錘853は孔径0.4cmと、他の土錘に比して細い印象を受ける。SD5049出土の須恵器無台皿854は、同じ器種との重ね焼き痕が良好に残る。SD5067 ~ 70からV期の須恵器坏蓋855が出土した。SD5067・68出土の須恵器無台坏856は底部が厚く、使用に伴い磨耗する。SD5068出土の土師器内黒無台碗855は口径15.0cmを測り、外面に粘土紐の積み上げ痕が残る。SD5075出土の須恵器有台坏858に記された墨書は「真継」の可能性が高い。V₁期に位置付けられる。須恵器中甕859の破片はSD5085・87・89を中心に出土した。口径24.0cmを測り、口縁端部は横方向に肥厚する。SD5087・88出土の須恵器坏蓋860は口径18.6cmを測り、天井部の器肉が厚い。

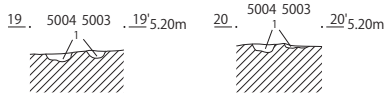
第6節 溝

P-22区SD5002(第14図)



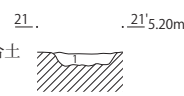
- 1. 灰褐色粘質土(炭粒、ベース土ブロックが混ざる)
- 2. 濁灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 2'. 2層と同質土(ベース土ブロックが混ざる)
- 3. 1層とベース土の混合土
- 4. 濁灰褐色粘質土(ベース土小ブロックが混ざる)
- 5. 6層とベース土の混合土
- 6. 暗灰褐色粘質土(ベース土小ブロックが混ざる)
- 7. ベース土と同質土(しまりなく、炭粒が混ざる)
- ベース土 淡灰黄色砂質土

P-22区SD5003・5004(第14図)



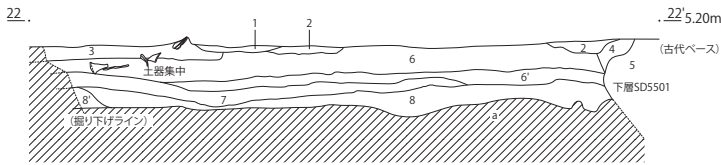
- 1. 暗褐灰色粘質土とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色砂質土

P-22区SD5005(第14図)



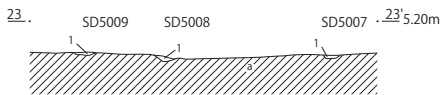
- 1. 灰色粘質土とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色砂質土

O-22区SD5006(第16図)



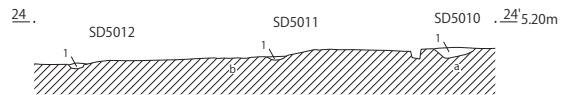
- 1. 濁黒灰色砂質土(炭粒多く混ざる。上層包含層)
- 2. 濁暗灰褐色粘質土(凹み。上層包含層)
- 3. 濁黄褐色粘質土(4層ブロックが混ざる。上層ベース土)
- 4. 濁茶褐色粘質土(下層SD5501覆土)
- 5. 淡灰黄色粘質土(下層SD5501覆土)
- 6. にぶい灰茶色砂質土(しまりない。土器集中)
- 6'. 6層と同質土(7層がブロック状に混ざる。土器集中)
- 7. 淡乳灰色砂質土(8層がブロック状に混ざる。)
- 8. 暗灰褐色粘質土(しまりない。下層包含層。打製石斧1039出土)
- 8'. 8層と同質土(固くしまる。下層包含層)
- 下層ベース土 a. 5層と同質土

O-22・23区SD5007～5009(第16図)



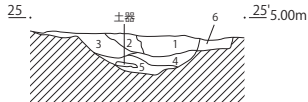
- 1. 濁暗褐色粘質土
- ベース 黄褐色粘質土

O-22区SD5010～5012(第15図)

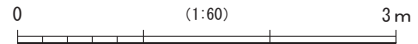


- 1. 濁暗褐色粘質土
- ベース 黄褐色粘質土 a. 灰黄褐色粘質土

O-22区SD5018(第15図)

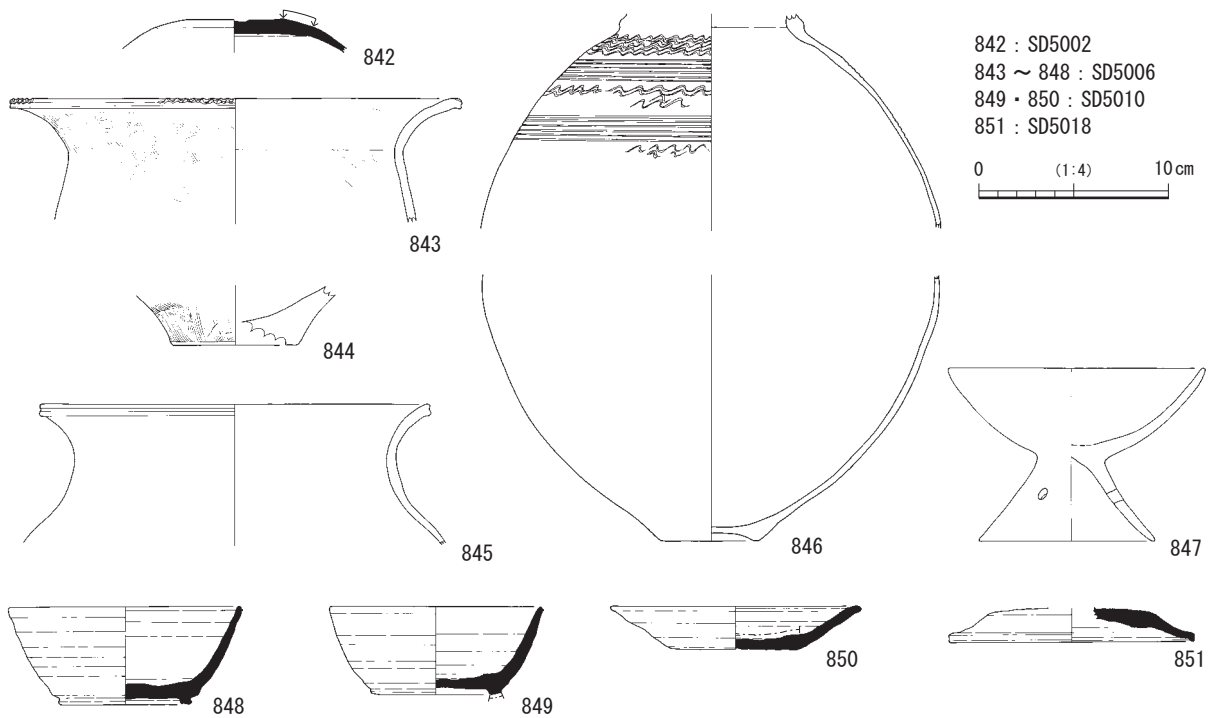


- 1. 黒灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 2. 灰色砂質土(1層と同質土)
- 3. 濁黄茶色粗砂(炭粒が混ざる)
- 4. 淡灰色細砂と褐色シルトの混合土
- 5. 褐色細砂(黄色粗砂がブロック状に混ざる)
- 6. 黄色粘質土と灰色粘質土の混合土



第90図 C区上層SD土層断面図(S=1/60)

SD5091出土の須恵器無台坏861は、体部が大きく外傾し、皿形に近い。SD5092出土のロクロ土師器甕862は口径20.0cmを測り、口縁端部は上方にのびる。SD5093出土の須恵器無台坏863は、底部外面に「千」と墨書する。SD5100北端から864～866が出土した。須恵器有台坏864はしっかりと断面方形の台部を貼り付け、使用



第91図 C区上層SD出土遺物実測図 (S=1/4)

に伴い磨耗する。ロクロ土師器甕865は口径22.5cmを測り、煮炊痕が良好に残る。須恵器無台坏866の底部外面に記された墨書は判読できない。

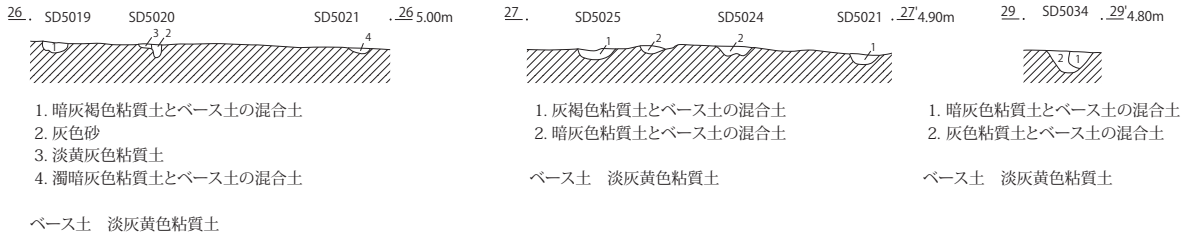
第7節 その他の遺構 (遺構：第45・47・94図、遺物：第95～97図、第26・27表)

C区南端鞍部 N・0-22・23区に位置し、道路遺構の東側に隣接する不定形な浅い落ち込みである。南北方向9.5m以上、東西方向約10m、深さ5～20cmを測り、底面は起伏をもつ。覆土は、炭粒が混ざる濁黒灰・暗灰～褐灰色粘質土を基調とし、ベース土が混ざる層位が目立つ(第45・47図)。また、遺構の切り合い関係から、道路遺構東側溝SD5016埋没後の堆積であり、道路遺構より新しい。(第45図断面b-b')。

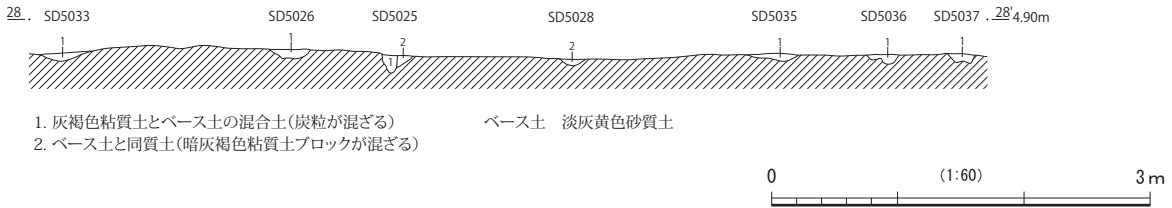
比較的多くの遺物が出土しており、第96図869～第97図912を図示した。869～902は須恵器で、IV₂期を主体とし、VI₃期に位置付けられる有台碗897が下限時期となる。869～877は坏蓋である。869は山笠形を呈し、口径18.0cm、器高4.2cmを測る。870は、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。無鈕の871は口径14.6cm、器高2.8cmを測り、口縁端部を小さく折り曲げる。872は、頂部をくぼませた大型の鈕を貼り付ける。また、胎土中に海綿骨針が混ざる。扁平な874はボタン状の鈕を貼り付ける。875～877は口径12.5cm前後を測り、876に被熱痕が残る。878～886は有台坏である。878の底部外面に記された墨書1文字目は「真」の可能性をもつ。879は、胎土の特徴から金沢末窯跡群産と考えられる。880・881は類似の器形を呈する。IV_{2(古)}期の882は口径11.2cm、器高3.9cmを測り、底部外面に「口(万カ)麻呂」と墨書する。883は一部生焼けに近い、底部外面にへラ記号が残る。884は焼きゆがみが目立つ。885は焼成堅緻であるのに対して、886は生焼けに近い。887～895は無台坏である。888～890は口径11.5cm前後、器高3cm強を測る。891は生焼けに近い、底部外面の墨書は判読できない。892は胎土中に混和材が多く混ざる。893は口径12.4cm、器高3.2cmを測り、体部は外傾する。894の底部外面に大きく記された墨書は判読できない。895は底部円盤状を呈し、VI₂期に位置付けられる。有台碗896は底部を回転糸切り後、断面方形の台部を外展して貼り付ける。有台碗897は口径15.1cm、器高5.4

第7節 その他の遺構

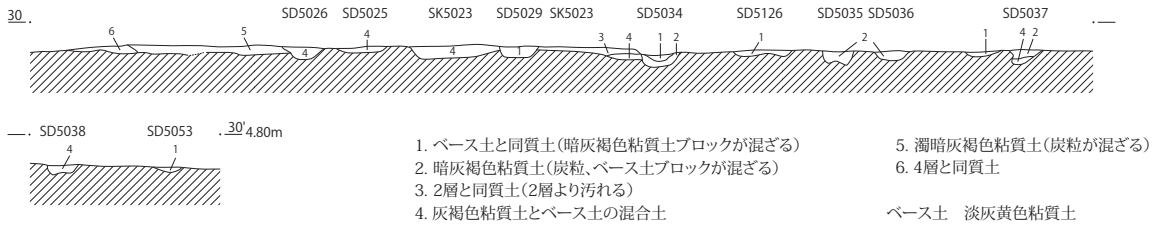
M-21区SD5019~5021・5024・5025(第17図)



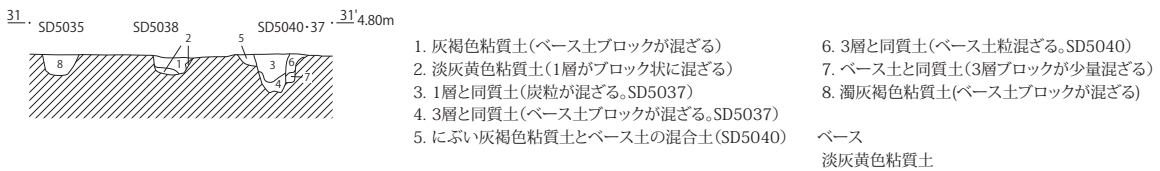
L-22区SD5025・5026・5028・5033・5035~5037(第17図)



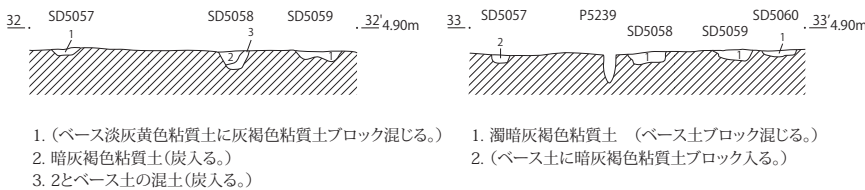
L-20区SD5025・5026・5029・5034~5038等(第13・17図)



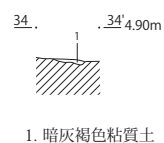
L-20区SD5035・5037・5038・5040(第13・18図)



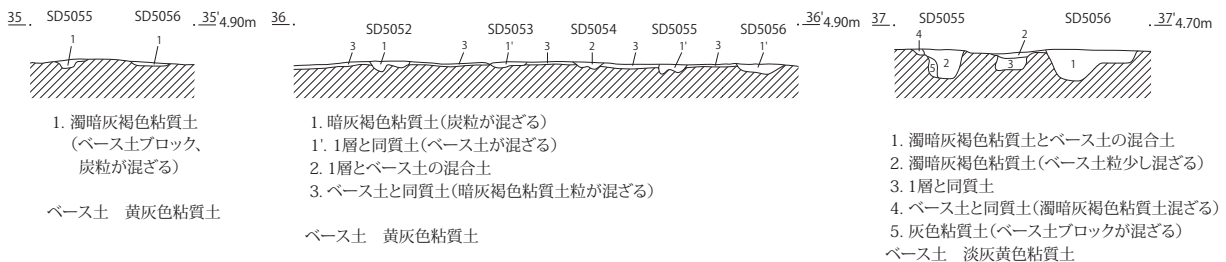
M-20区SD5057~5060等(第12図)



M-19区SD5063(第12図)

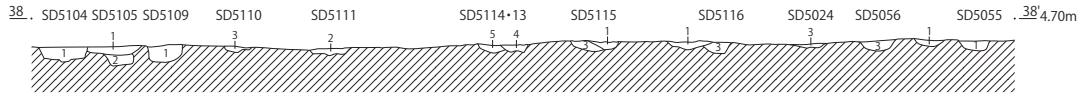


K・L-20区SD5055・5056等(第12・13図)

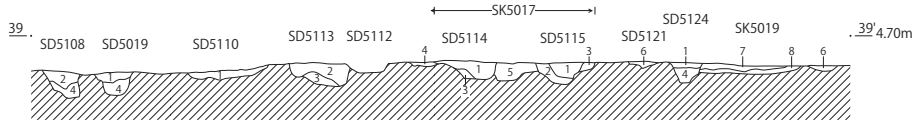


第92図 B区上層SD土層断面図1 (S=1/60)

L-20区SD5110・5111・5114～5116等(第13図)



- 1. 濁暗灰褐色粘質土(炭粒が混ざる)
- 2. 1層とベース土の混合土
- 3. 1層と同質土(ベース土ブロックが混ざる)
- 4. 1層とベース土の混合土
- 5. ベース土と同質土(1層がブロック状に混ざる)
- ベース土 淡黄灰色粘質土

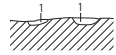


- 1. 濁暗灰褐色粘質土(炭粒混ざる)
- 3. 1層とベース土の混合土
- 2. 1層と同質土(ベース土ブロックが混ざる)
- 4. 1層とベース土の混合土
- 5. 濁黒灰色粘質土(炭粒、ベース土ブロックが混ざる)
- 6. ベース土(1層ブロック状に混ざる)
- 7. 濁灰色粘質土(炭粒が多く混ざる)
- 8. 7層とベース土の混合土

ベース土 淡黄灰色粘質土

L-20区SD5113・5117(第13図)

40. SD5117 SD5113 .40'4.70m



- 1. 暗灰褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
- ベース土 淡黄灰色粘質土

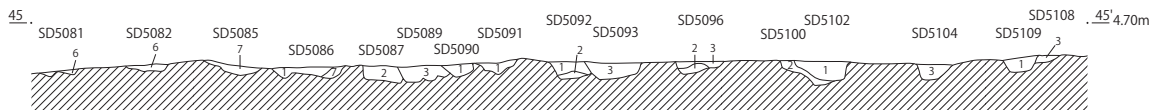
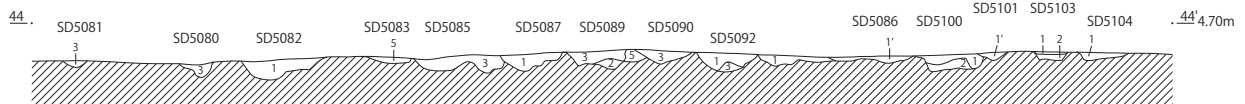
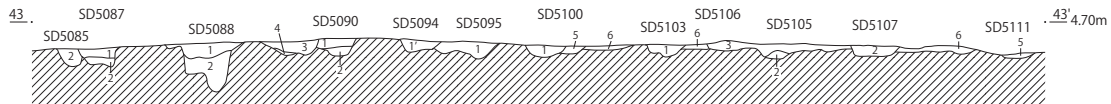
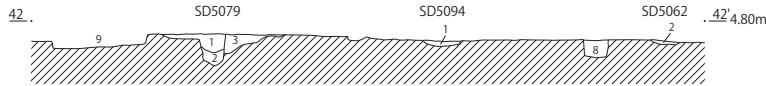
M-20区SD5099(第12図)

41. .41'4.80m



- 1. ベース土と同質土(暗灰褐色粘質土ブロックが混ざる)
- ベース土 明黄色粘質土

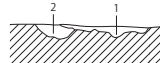
L・M-19区SD5080～5109(第11～13図)



- 1. 濁暗灰褐色粘質土(炭粒が混ざる)
- 1'. 1層と同質土(ベース土が多く混ざる)
- 2. 灰褐色粘質土とベース土の混合土
- 3. 1層とベース土の混土
- 4. 灰色粘質土と1層の混合土
- 5. ベース土と同質土(1層がブロック状に混ざる)
- 6. 灰色粘質土とベース土の混合土
- 7. 灰色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
- 8. 濁黒灰色粘質土(粗砂が混ざる)
- 9. ベース土と同質土(1層が粒状に混ざる)
- ベース土 淡灰黄色粘質土

M-18区SD5067・5068(第11図)

46. .46'4.70m



- 1. 濁黒灰色粘質土(炭粒多く混ざる)
- 2. 1層とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色粘質土

J-21区SD5047(第18図)

47. .47'4.70m

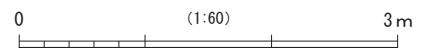


- 1. にぶい灰色砂質土

48. .48'4.70m



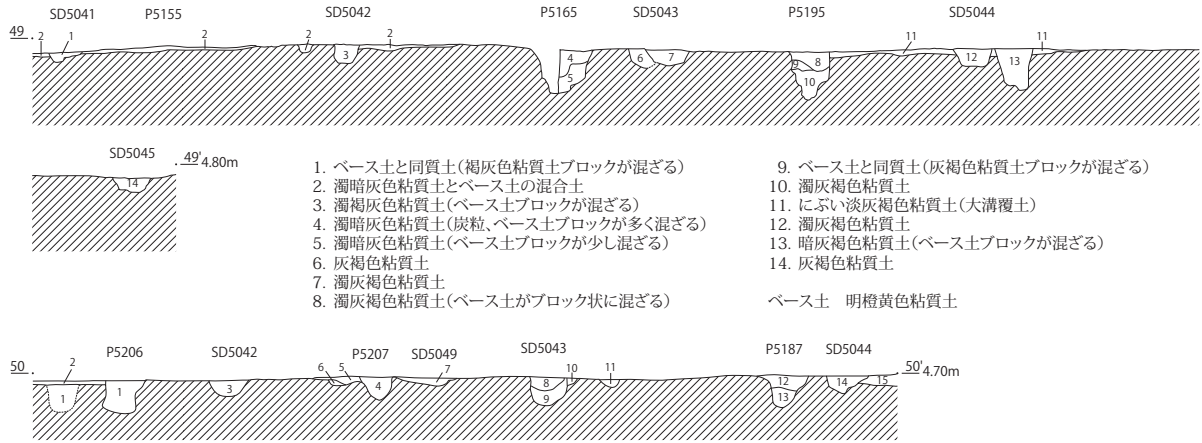
- 1. にぶい灰色砂質土
- 2. 1層とベース土の混合土
- ベース土 淡黄色砂質土



第93図 B区上層SD土層断面図2 (S=1/60)

第7節 その他の遺構

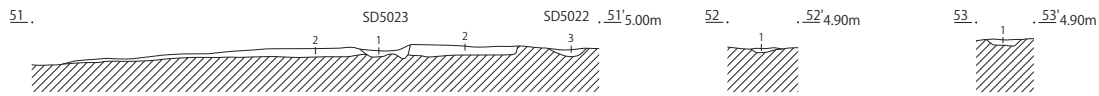
J-21区SD5042~5045(第18図)



- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. ベース土と同質土(褐灰色粘質土ブロックが混ざる) 2. 濁暗灰色粘質土とベース土の混合土 3. 濁褐灰色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 4. 濁暗灰色粘質土(炭粒、ベース土ブロックが多く混ざる) 5. 濁暗灰色粘質土(ベース土ブロックが少し混ざる) 6. 灰褐色粘質土 7. 濁灰褐色粘質土 8. 濁灰褐色粘質土(ベース土がブロック状に混ざる) | <ol style="list-style-type: none"> 9. ベース土と同質土(灰褐色粘質土ブロックが混ざる) 10. 濁灰褐色粘質土 11. にぶい淡灰褐色粘質土(大溝覆土) 12. 濁灰褐色粘質土 13. 暗灰褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 14. 灰褐色粘質土 |
|--|--|
- ベース土 明橙黄色粘質土

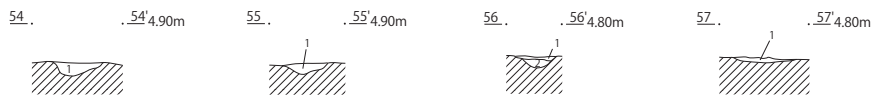
- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐灰色粘質土(炭粒が多く混ざる) 2. 灰褐色粘質土とベース土の混合土 3. 濁灰褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 4. 濁黒灰色粘質土(炭粒、ベース土ブロックが混ざる) 5. 灰色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 6. ベース土と5層の混合土 7. 灰褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 8. 濁灰褐色粘質土 9. ベース土と同質土(8層ブロックが混ざる) | <ol style="list-style-type: none"> 10. 濁黒灰色粘質土(炭粒が多く混ざる) 11. ベース土と同質土(暗灰褐色粘質土が混ざる) 12. 暗灰褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる) 13. 濁黒灰色粘質土(炭粒が多く混ざる) 14. 褐灰色粘質土(ベース土が混ざる) 15. 黒灰色土(SK5014) |
|---|--|
- ベース土 明橙黄色粘質土

M-21区SD5023(第17図)



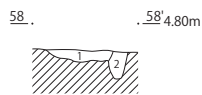
1. にぶい灰褐色粘質土(黒灰色粘質土、ベース土がブロック状に混ざる)
 2. 灰色強粘質土とベース土の混合土
 3. 灰黄色粘質土
- ベース土 淡灰黄色粘質土

L-21区SD5027(第13・17図)



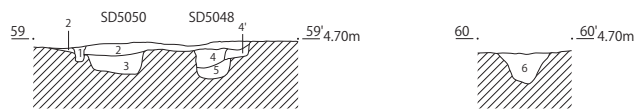
1. にぶい褐灰色粘質土
 2. ベース土と同質土(1層ブロックが混ざる)
- ベース土 淡灰黄色粘質土

L-21区SD5032(第17図)



1. ベース土と灰色粘質土の混合土
 2. 暗灰色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
- ベース土 淡灰黄色粘質土

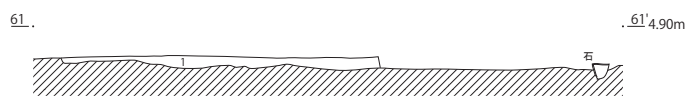
J-21区SD5048・5050(第18図)



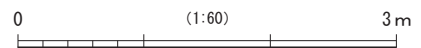
1. 灰色砂
2. 濁褐灰色粘質土
3. 淡灰緑色粘質土
4. 灰褐色粘質土
- 4'. 4層と同質土(黄褐色粘質土)

5. にぶい灰色粘質土
 6. にぶい褐灰色強粘質土
- ベース土 淡灰黄色粘質土

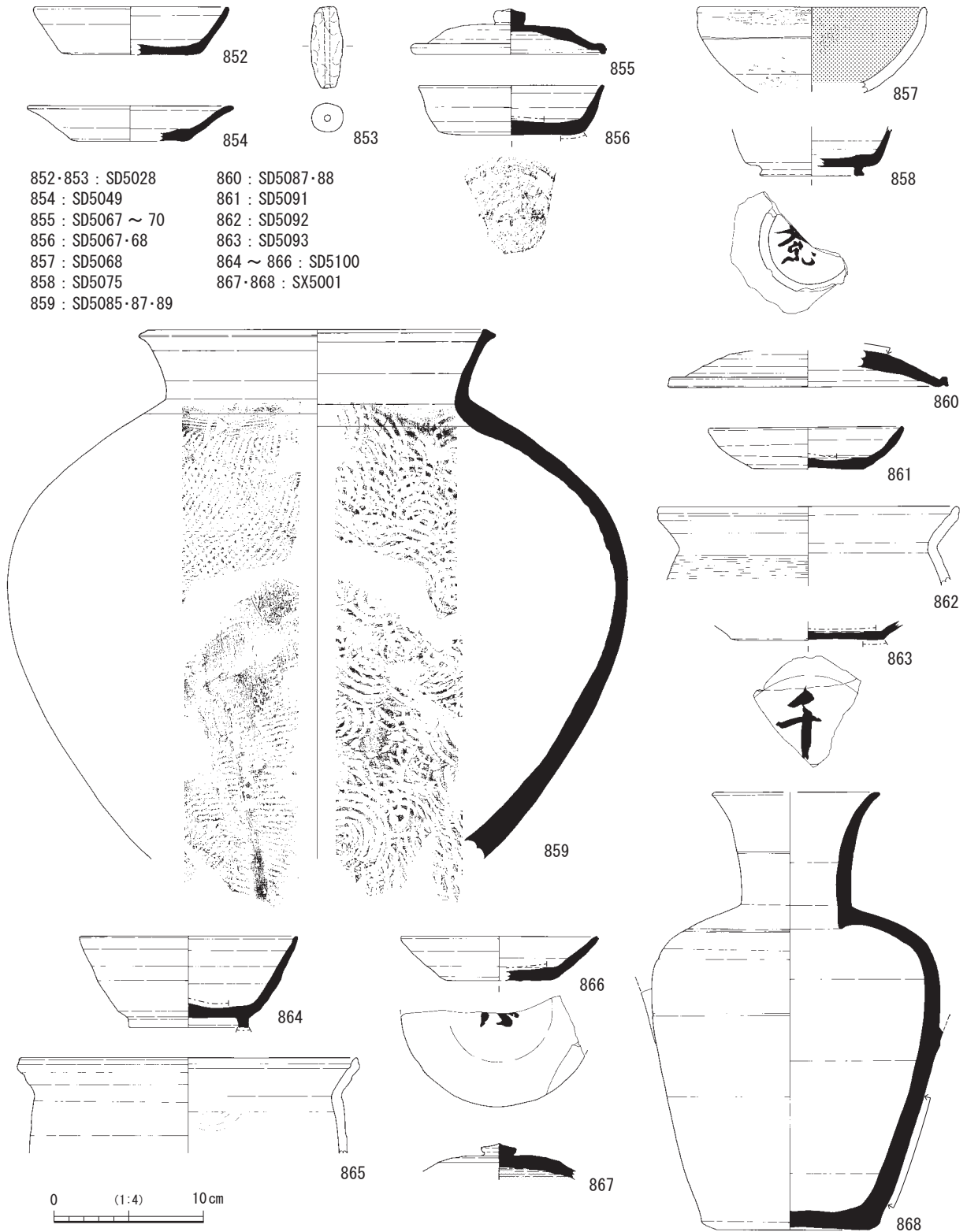
L・M-19区SX5001(第12・13図)



1. 暗灰褐色粘質土とベース土の攪拌
- ベース土 淡灰黄色粘質土



第94図 B区上層SD等土層断面図(S=1/60)



第95図 B区上層SD・SX出土遺物実測図(S=1/4)

cmを測り、底部回転ヘラ切り後に細いそうめん状の台部を貼り付ける。また、内面に圈線様の窪みが認められ、産地は不明。第99図988と同一個体で、胎土の特徴は高松・押水窯跡群に類似する。無台皿898は底部が厚く、口縁部で小さく外反する。低脚高坏899は内面が摩耗し、金沢観法寺周辺の窯跡胎土と類似する特徴を示す。900・901は小型瓶である。900は口径5.3cm、器高9.0cmを測り、口縁部に欠けが連続する。901は胎土の特徴

から鳥屋窯跡群産と考えられる。双耳瓶902は口径16.2cm、器高31.1cmを測り、沈線で加飾した後に大振りの耳を貼り付ける。中甕903は口径31.7cmを測り、胎土の特徴から南加賀窯跡群産と考えられる。第97図904は土師器甕で摩滅が著しい。ロクロ土師器甕905～907は、煮炊痕を良好に残す。また、907の胴部内面下端に、かすかに同心円あて具痕が残る。土師器小甕908は、内面全体にコゲが付着する。ロクロ土師器小甕909は口径12.8cmを測り、摩滅が著しい。土師器土錘911は焼成不良である。

B区SX5001 L・M-19・20区で検出した不定形な浅い落ち込みで、長軸約5.8m、短軸約4.7m、深さ10cm弱を測る(第9・94図)。覆土は、遺物包含層と同質の暗灰褐色粘質土とベース土が攪拌されたものであり、耕作に伴う小溝群より古く位置付けられる。出土遺物のうち、第95図の須恵器867・868を図示した。坏蓋867は内面を硯面に転用する。双耳瓶868は口径11.2cm、器高29.4cmを測り、外面3ヶ所を沈線で加飾する。胎土の特徴から鳥屋窯跡群産となる。他に須恵器甕、ロクロ土師器甕の小片が出土した。

第8節 包含層出土遺物 (第98～110図)

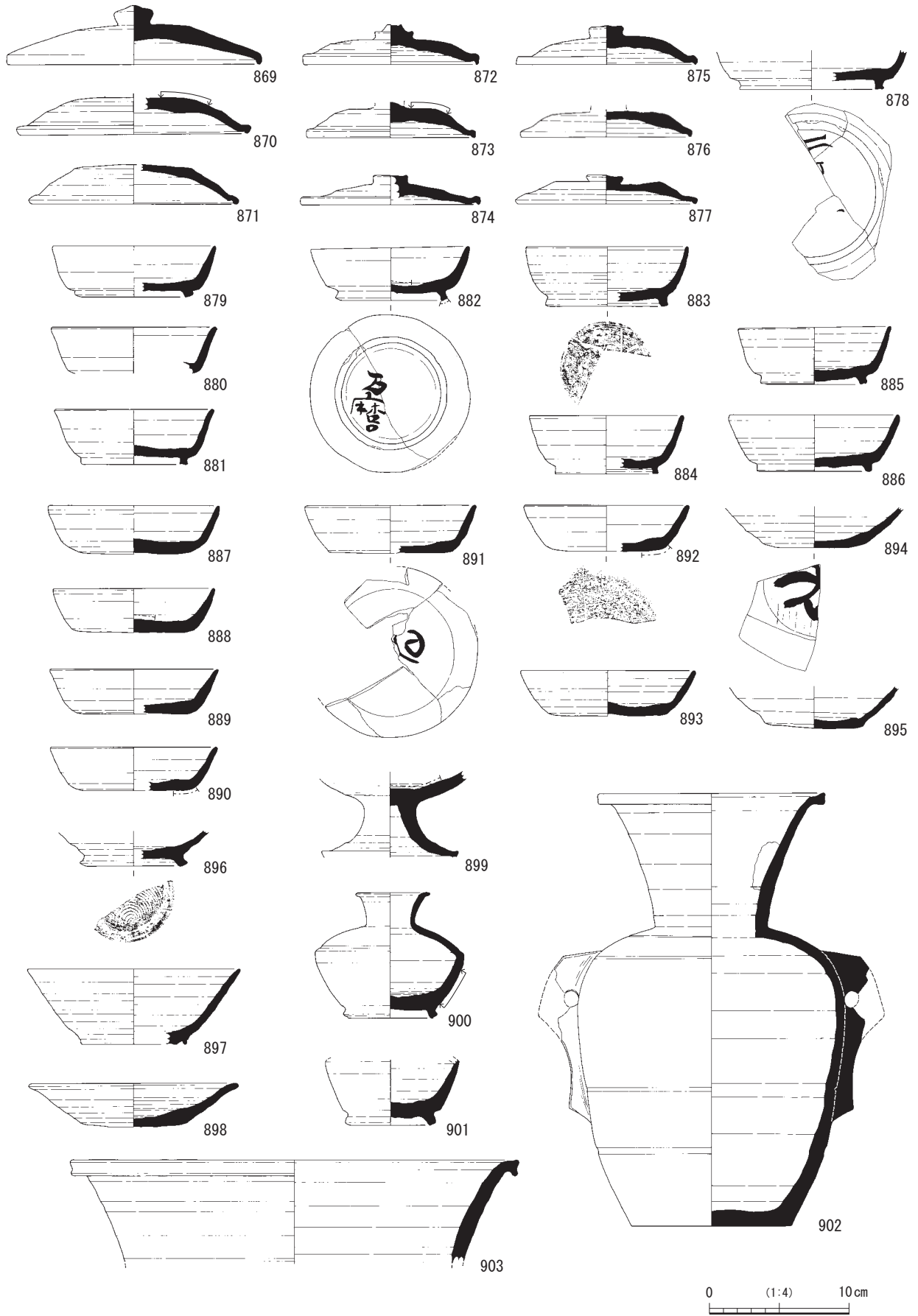
C区は、第98図913～第102図1050を図示した。多くはⅢ期～Ⅵ₂期の須恵器であり、ロクロ土師器、土錘、銅銭、砥石、木製品その他、下層に属する遺物や、珠洲焼、越中瀬戸等の中・近世の陶磁器が少量認められる。また、墨書土器は、「千」「茂」「吉」「酒□」「×」の文字が確認できる。

第98図913は古墳時代前期の土師器甕で、本来下層に属する遺物である。914～1014は須恵器である。7世紀代の914～920は、胎土の特徴から914・915が鳥屋窯跡群産、916・918が金沢観法寺窯跡産、917・919・920が南加賀窯跡群産に分類でき、8世紀以降の高松・押水窯跡群主体とした供給とは全く異なる様相を呈する。坏蓋914・915は、内面の返しが退化している。坏身916・917は口径11cm前後を測る。918は脚付壺と考えられ、倒位で焼成される。919・920は壺で、919は脚端部外面を2条の沈線で加飾する。920は口径約15cmを測り、肩部を粗い刺突文と彫りの深い沈線で加飾する。

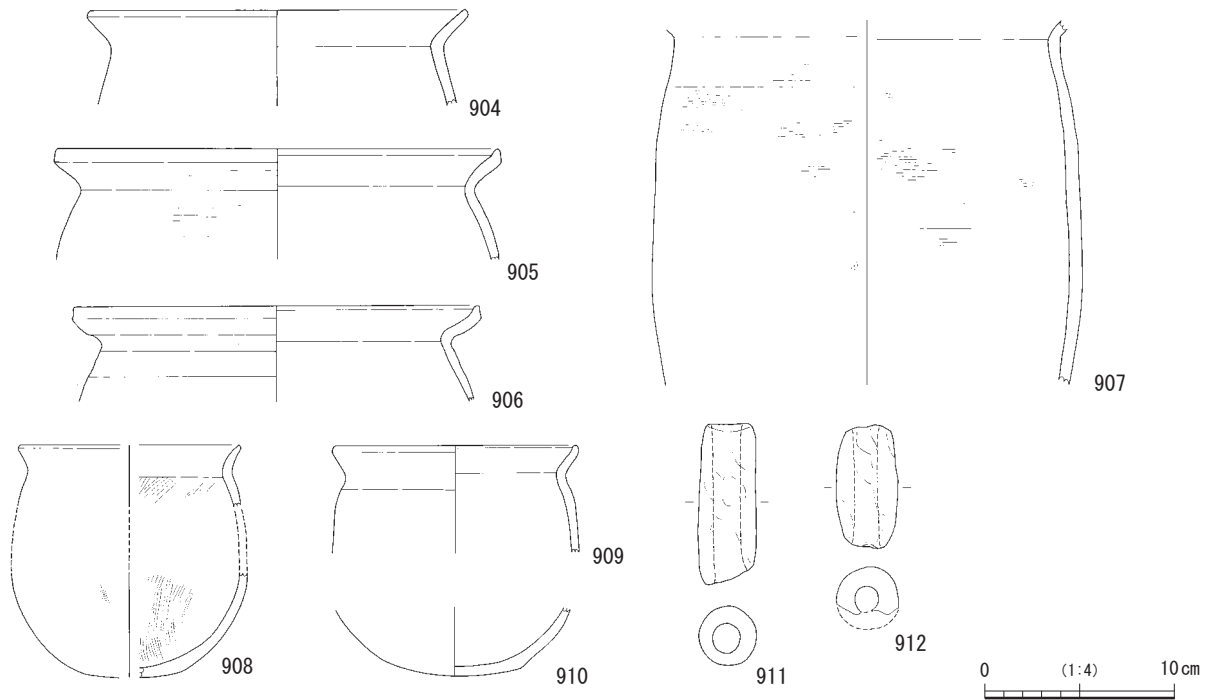
坏蓋921～934のうち931～934は無鈕である。921は口径19.8cmを測り、天井部外面に回転ケズリ調整を加える。肉厚の922は口径18.0cm、器高3.9cmを測り、一部は生焼けに近い。山笠形の923・924は口縁端部を小さく折り曲げる。925は口径12.4cm、器高3.3cmを測り、内面を硯面に転用する。扁平な926は比較的大きな鈕を貼り付ける。927～930は口径12cm台を測り、口縁端部を丸く仕上げる。931～933は口径15cm前後、934は口径13.0cmを測り、934は内面を硯面に転用する。921～926がⅢ～Ⅳ₁期、927～930がⅥ₁期、931～934がⅥ₂期に位置付けられる。

935～958は有台坏である。白色粒が多く混ざる935は産地不明である。身の深い936・937は口径16cm弱、器高約11cmを測る。937の底部内面は、使用に伴い摩耗する。938はロクロひだが目立ち、底部回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を施す。939～944は体部が大きく外傾し、うち943は底部が焼き割れる。945～948は大きく外傾する体部が内湾気味にたちあがる。949・950は底部外面に「千」と墨書する。扁平な951は口径12.8cm、器高3.7cmを測る。952は内屈する台部を貼り付ける。954は還元が弱く、淡黄灰～灰黄色を呈する。955の体部は大きく外傾する。956～958は底部外面に墨書を記し、956が「酒□」、958が「千」と判読できる。951がⅢ期、935～937がⅣ₁期、952・953がⅣ₂期、938・939・954・955がⅤ期、943・944・949・950・956・957がⅥ₁期、940～942・945～948・958がⅥ₂期に、それぞれ位置付けられる。

第99図959～981は無台坏である。959は口径12.8cm、器高3.5cm、960は口径11.8cm、器高3.6cmを測る。胎土の特徴から、961は鳥屋窯跡群産、964は能美窯跡群産となる。965～971の体部は大きく外傾し、内湾気味の個体が目立つ。また、使用に伴う摩耗痕が残る個体が多い。966は内面に墨痕が残る他、970は底部内面にヘラ記号「×」を焼成前に刻む。972～976は口径12.5～13cm強、器高3cm強を測り、口縁端部が肥厚



第96図 C区上層南端鞍部出土遺物実測図1 (S=1/4)

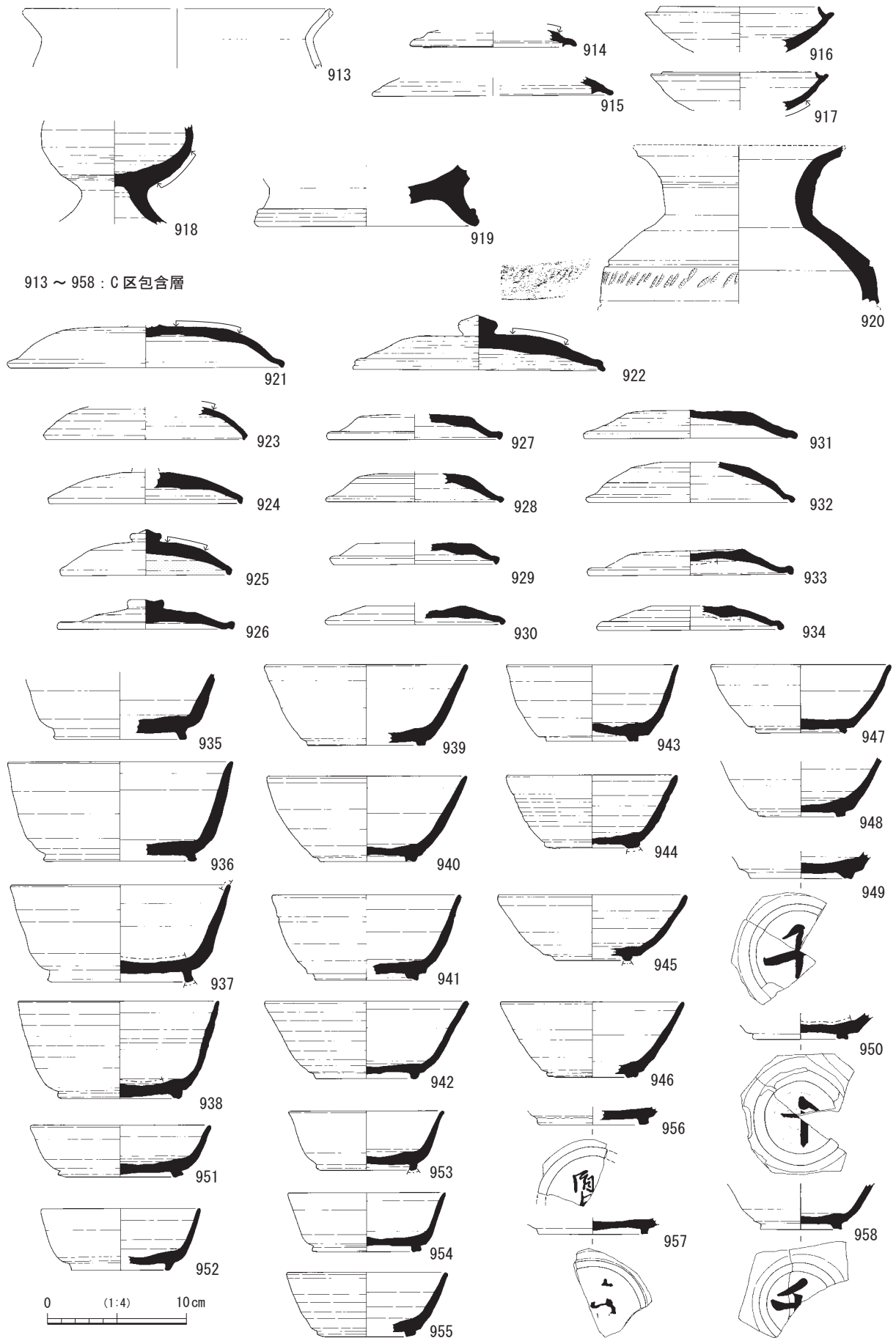


第97図 C区上層南端鞍部出土遺物実測図2 (S=1/4)

する。977は生焼けに近い。978の底部外面に記された墨書は「茂」である。皿形に近い979～981は口径11cm強、器高約2.7cmを測る。959・960がIV₁期、961～963がIV₂期、964がV期、965～971・981がVI₁期、972～980がVI₂期に位置付けられる。982～985は無台盤である。982は体部が直線的にのびる。983は生焼けに近く、984・985は底部内面が磨耗する。982がV₁期、983がV₂期、984がVI₁期、985がVI₂期に位置付けられる。有台碗987はVI₂期、986・988はVI₃期に位置付けられる。986は口径14.0cm、器高4.4cmを測り、ロクロ土師器有台碗(第66図479～482)に近似した底部を呈する。また、底部外面に「×」、外側面に「吉」と判読できる墨書を記す。987は断面方形のしっかりとした台部を貼り付ける。988は、第96図897と同一個体である。底部回転ヘラ切り後に細いそうめん状の台部を貼り付ける。胎土の特徴から、986が南加賀窯跡群産類似(能美窯跡群大口周辺か)、987が高松・押水窯跡群産、988は産地不明となる。生焼けの有台皿989は口径13.6cm、器高3.3cmを測り、底部外面に回転糸切り痕が残る。VI₂期に位置付けられる。無台皿990～993は、底部を回転ヘラ切りで切り離す。990・992は内面を硯面に転用する。底部が平高台を呈する993は、使用に伴い内面が平滑となる。994～997はロクロ土師器である。内黒の有台碗994は、細身の台部を貼り付ける。平高台の無台皿995は、底部器形が993に近似する。無台碗996は、内面に茶褐色の漆が付着する。内黒の有台皿997は口径13.2cmを測り、焼成後に底部を穿孔した可能性をもつ。955・997がVI₂期に位置付けられる。須恵器高坏998は鳥屋窯跡群産と考えられる。

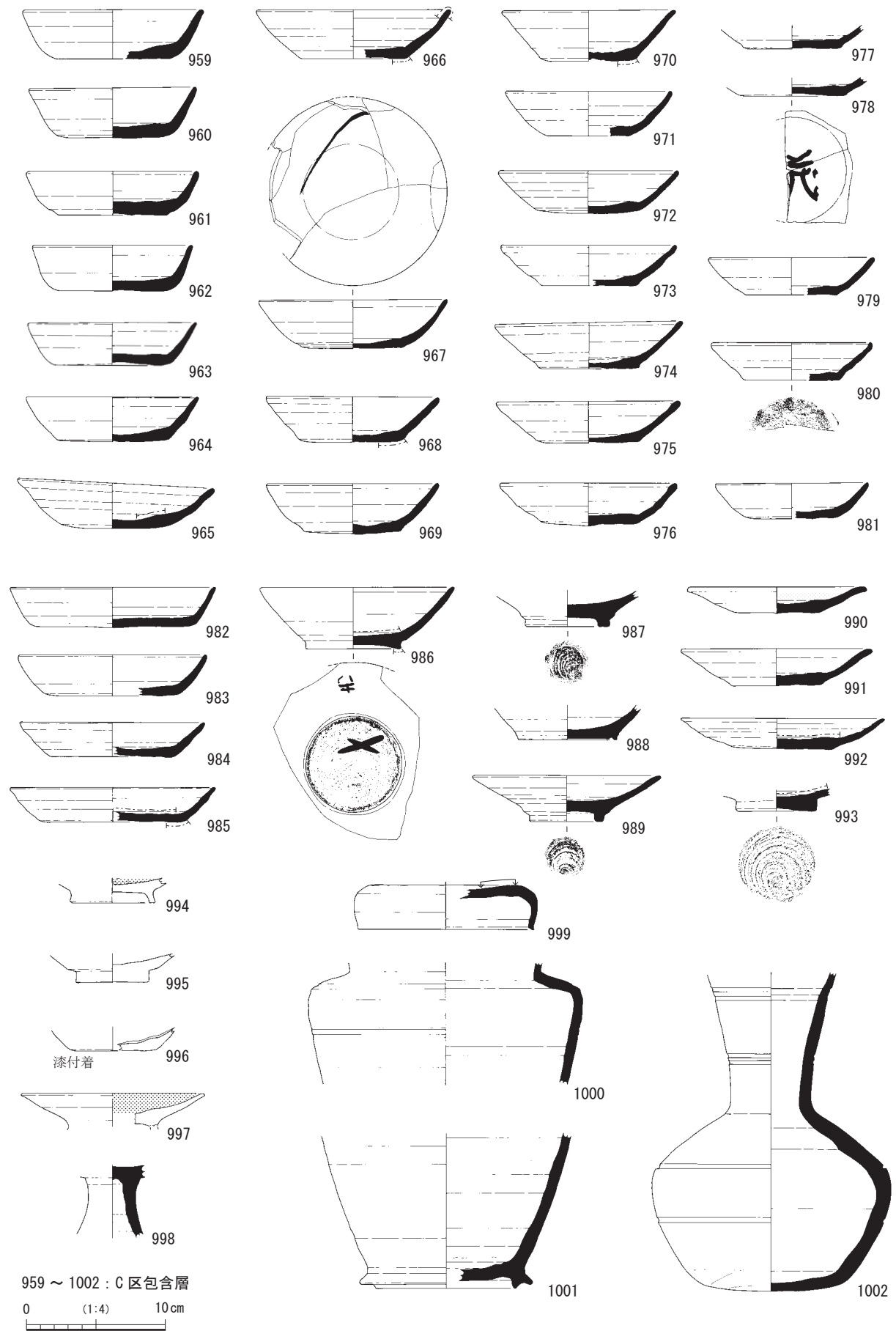
第99図999～1001は壺、同図1002～第100図1009は瓶である。蓋999は口径12.7cmを測り、倒位で焼成される。広口壺1000は、外面をカキメ調整と沈線で加飾する。7世紀代の長頸瓶1002は、外面に沈線を施し、胎土は南加賀地方の特徴を示す。1003・04は長頸瓶である。瓶1005は口径14.2cmを測る。双耳瓶1006は自然釉の熔着が著しい。注口瓶1007・08は、外面上半を沈線で加飾する。小型瓶1009は降灰が目立つ。鉢1010は外面に平行叩き痕が残る。つき鉢1011は口径18.0cmを測り、外面中位を沈線で加飾する。

甕1012は口径28.2cmを、南加賀窯跡群産と考えられる1013は口径約32cmを測る。中空の鳥形土器1014は、残存高12.4cmを測る。頭部を絞りながら嘴を含めて成形した後、羽毛を線刻し、最後にボタン状の粘土を目

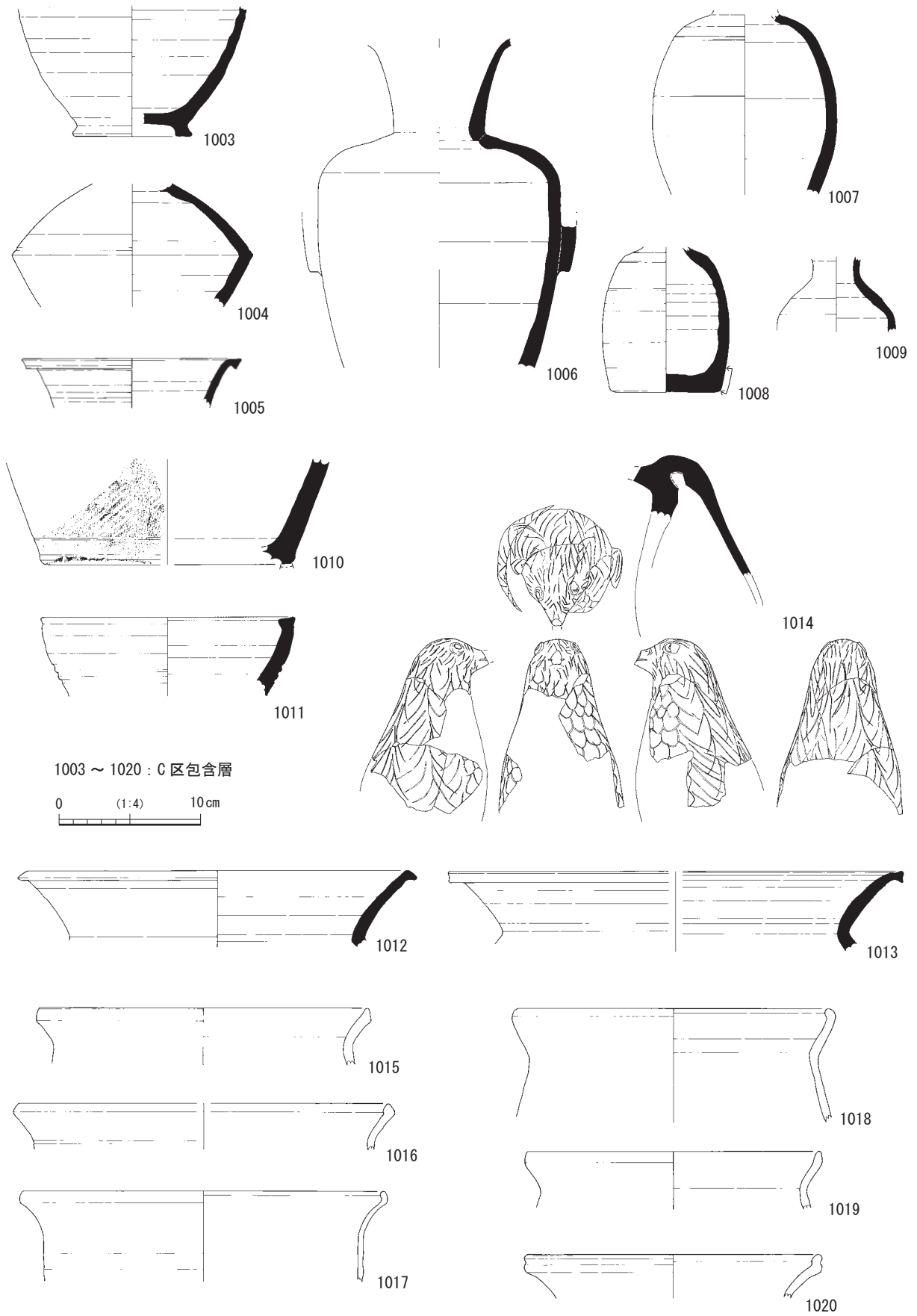


第98図 C区上層包含層出土遺物実測図1 (S=1/4)

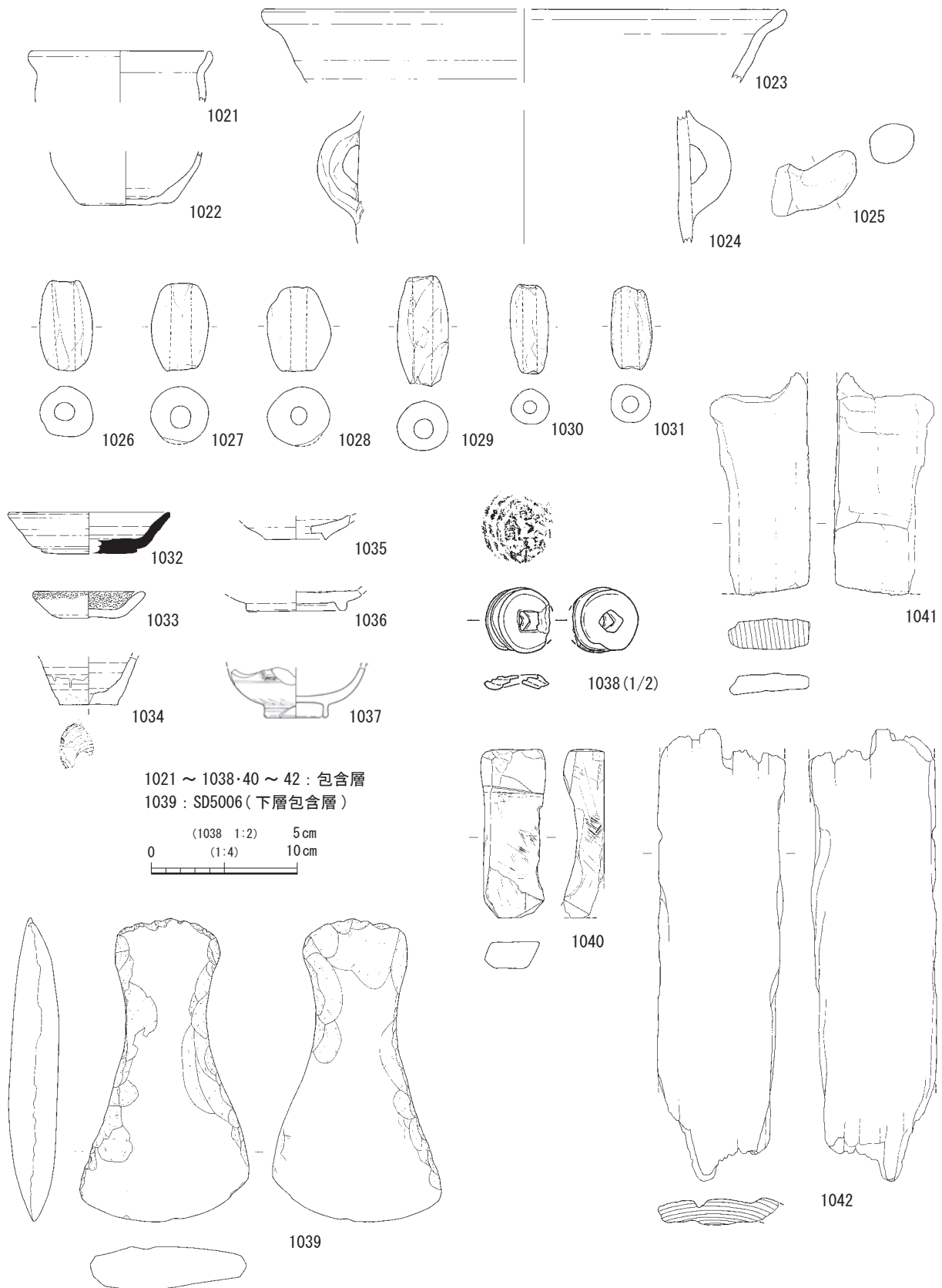
第8節 包含層出土遺物



第99図 C区上層包含層出土遺物実測図2 (S=1/4)



第100図 C区上層包含層出土遺物実測図3 (S=1/4)



第101図 C区上層包含層出土遺物実測図4 (S = 1/2·1/4)

として貼り付け、眼球を丸く線刻する。また、羽毛は、胸部を鱗状に線刻するのに対して、その他の部位は長さを変えながら1本線の線刻で表現する。類似破片が県バイパス第1次調査(報告書I包含層等実測図10-3189)、県河北縦断道路調査(報告書第138図504)で出土している。

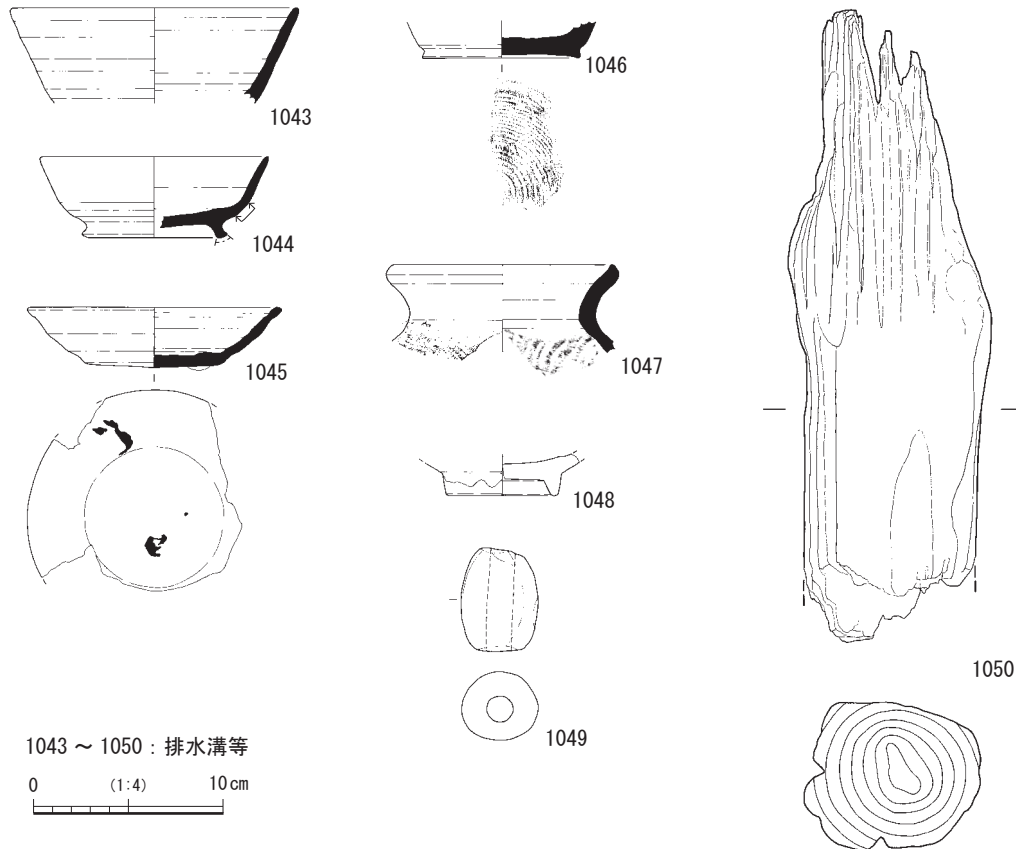
ロクロ土師器煮炊具は、1015～1020が甕、1021・22が小甕、1023が埴となる。甕の口縁端部は、上方にひきあげる1015、内屈する1016～19、屈曲する1020がみられる。小甕は磨滅が著しい。埴1023は口径約36cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。1024・25は土師器甕と考えられる。土師器土鍾は、1026～28が長さ約6cm、残存重量約72gを、1029が長さ約7.6cm、残存重量63g、1030・31が長さ約6cm、残存重量30g弱となる。

第101図1032～37は、中世以降の遺物である。珠洲焼小皿1032は口径10.9cm、器高2.8cmを測り、磨滅が目立つ。土師器小皿1033は灯明皿に利用する。瀬戸の鉄釉水注1034は、底部に回転糸切り痕を残す。1035は越中瀬戸鉄釉皿、1036は同灰釉皿である。近現代の染付碗1037は産地不明である。1032が12世紀代、1033・34が15世紀以降、1035・36が17世紀前半にそれぞれ位置付けられる。打製石斧1039は、本来下層に属する遺物である。淡緑灰色の凝灰岩を加工し、刃部は平滑となる。凝灰岩製の砥石1040は、欠損以外の全ての面に砥ぎ痕が残る。1038は、3枚の銅銭が固着したものである。径約2.2cmを量り、「寶」以外の文字は判読できない。1041・42は木製品である。第102図はC区排水溝等から出土した。1043～47は須恵器である。有台坏1043は口径14.9cm、1044は口径12.0cm、器高4.2cmを測る。無台坏1045外面2ヶ所に記された墨書は判読できない。有台坏1046は生焼けに近い焼成で、第99図988と近似した細い台部を貼り付ける。横瓶1047は口径11.6cmを測る。1048は白磁碗V類、1049は土師器土鍾、1050は径10.8cmを測る柱根である。

B区は、第103図1051～第110図1317を図示した。B区と同様に大部分がⅢ期～Ⅵ₂期の須恵器で、ロクロ土師器、土鍾の他、下層に属する遺物、珠洲焼等の中・近世の陶磁器を少量含む。また、墨書土器は「千」「茂」「正月」「真継」「臣主」「丸」「口(東カ)」「口(宅カ)」「口(主カ)」等が確認できる。

1051～1053は、本来下層に属する遺物である。弥生時代中期後半の甕1051は口径17.6cmを測り、磨滅が目立つ。石鏃1052は、黒色のガラス質安山岩製の凹基式で、残存重量10.6gを測る。滑石製の紡錘車は径4.1cm、孔径0.7cmを測り、上面は平滑である。古墳時代後期と考えられる。

1054～1204は須恵器である。坏蓋1054～1099は全て回転ヘラ切りで切り離しており、1054・55・75がⅢ期、1056がⅣ₁期、1057・58・76～81がⅣ₂期、1059～61・82～87がⅤ期、1062～66・88～97がⅥ₁期、1067～74・98・99がⅥ₂期に、それぞれ位置付けられる。1054は口径約12.5cmを測り、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産である。1055・56は器肉が厚い。1057は外面に自然釉が厚く溶着し、内面は使用に伴い平滑となる。還元弱い1059は、口径19.2cm、器高3.8cmを測る。天井部外面に記された墨書を「人」「人」と判読したが、「公」の可能性を残す。1060は胎土の特徴から鳥屋窯跡群産となる。1061は口縁基部が狭く、1062は焼成不良である。1063は天井部が円盤状を呈し、内面を硯面に転用する。1064は肩部に補助ケズリ痕が残る。扁平な1065は、内面が使用に伴い磨耗する。無鈕の1067～74は口径14～16cmを測り、口縁端部は丸く仕上げる個体が多い。1068は割れた後に被熱する。1070の外面中央に記された墨書は「千」の可能性が高い。1071は皿器形をそのまま蓋として焼成しており、天井部からなだらかに口縁端部に移行する。内面は使用に伴い平滑となる。1072・73は外面に「茂」と墨書する。1074は肩部外面3ヶ所に「口」「十」「千」と墨書する他、内面の墨痕から硯に転用したことがわかる。1075は口径10.9cm、器高2.7cmを測り、内面は使用に伴い非常に平滑となる。1076～81は口径12cm台を測り、厚い器肉の個体が多い。1078は胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられ、1079は内面の墨痕から転用硯となる。1082～87は口径12cm前後を測る。1083の内面は使用に伴い磨耗し、1087は内面の墨痕・磨耗から転用硯となる。1088は口径13.2cmを測り、天井部は円盤状を呈する。1089は、内面に「真口(継カ)」と墨書する。1090は焼成不調で、1091は焼きゆがみが目立つ。1093は胎土の特徴から南加賀窯跡群産であり、1094とともに内面が使用に伴い磨耗する。1095は屈曲が目立ち、内面に煤が付着する。1096は内面の墨痕・磨

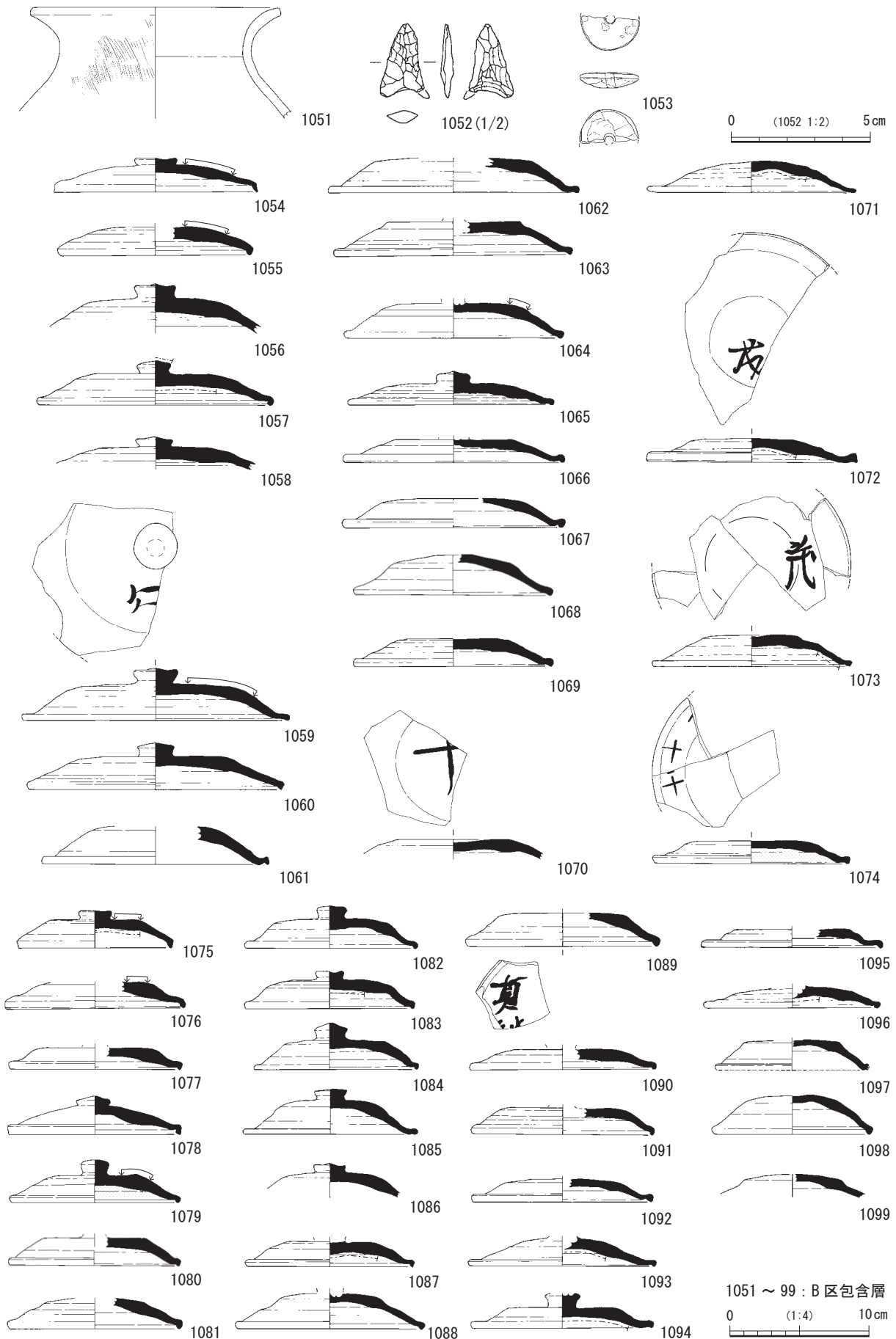


第102図 C区上層排水溝等出土遺物実測図 (S = 1/4)

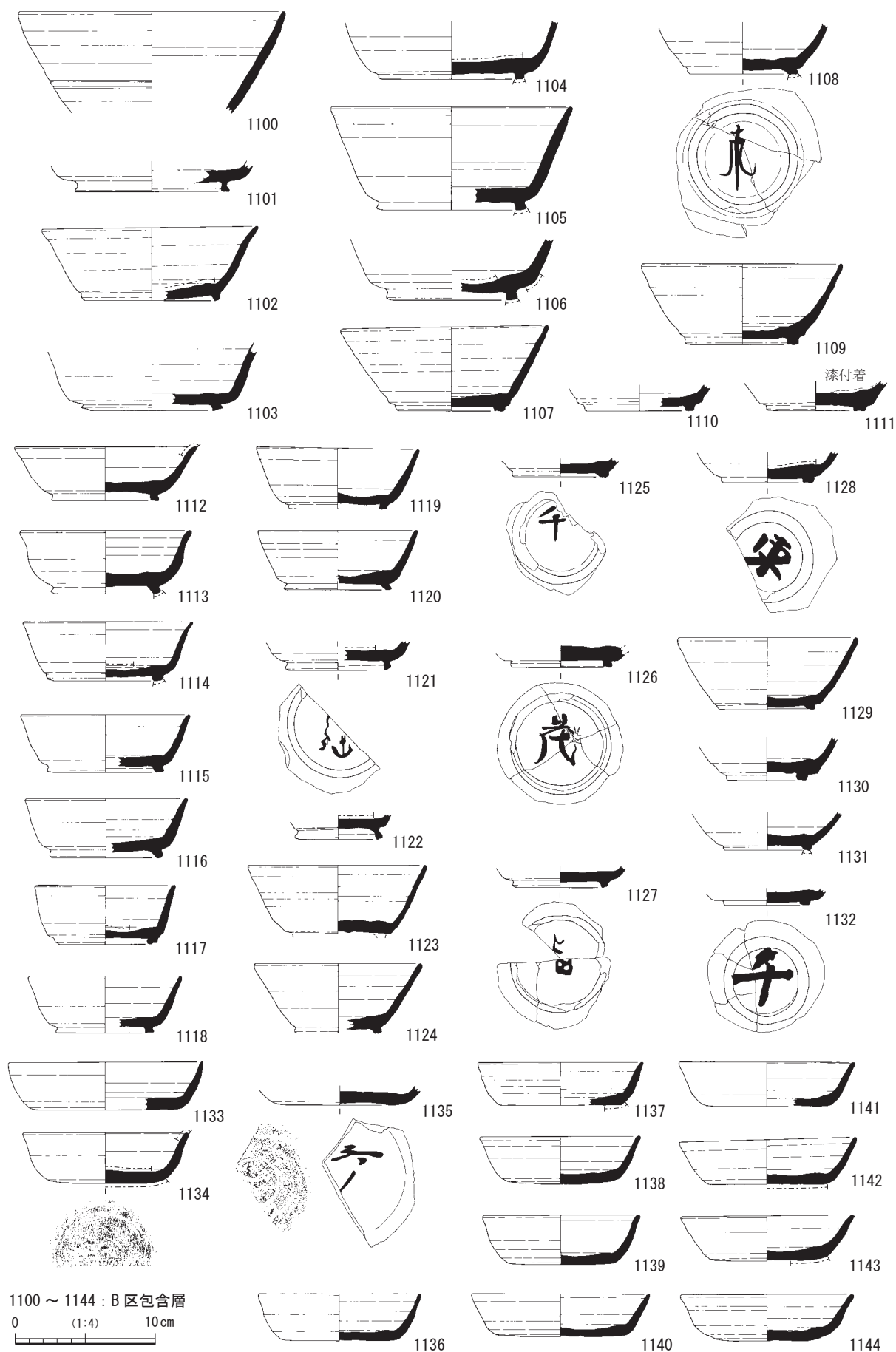
耗から転用硯と考えられる。1097は天井部が平坦で、無鈕の1098・99とともに産地は判然としない。

有台坏1100～1132は全て回転ヘラ切りで、1100がⅢ期、1103・12・13がⅣ₁期、1104・14～17がⅣ₂期、1102・05・06・18～23がⅤ期、1107～08・24～29がⅥ₁期、1109～11・1130～32がⅥ₂期に、それぞれ位置付けられる。1100は外面を2条の沈線で加飾し、傾きに不安を残す。1101は、内寄りに丁寧なつくりの台部を貼り付ける。1102は焼きゆがみが目立ち、胎土の特徴は金沢末窯跡群産を示す。1103・04は内寄りに小振りな台部を貼り付ける。1105は口径17.0cm、器高7.4cmを測り、体部は直線的に外傾する。1106は使用に伴う磨耗が目立つ。生焼けに近い1107は口径14.6cm、器高6.1cmを測り、底部がかなり縮小する。1108は底部外面に「朮」と墨書する。生焼けの1109は、体部が内湾気味に立ちあがる。1110は外面が被熱し、1111は内面に褐色の漆が付着する。1112は口径12.8cm、器高3.8cmを測り、口縁部が緩やかに外反する。1113は腰が張った器形を呈する。1119・20は口径約11.5cm、器高4.2cmを測り、うち1119は鳥屋窯跡群産の可能性が高い。1121は底部外面の墨痕から、転用硯と考えられる。小型の1122は台部径6.2cmを測り、内底が摩耗する。1123は台部が剥離し、1124は台部に異なる胎土を用いる。1125～28は底部外面に墨書を記し、1125が「千」、1126が「茂」、1128は「東」と判読できる。1129は口径12.6cm、器高5.1cmを測り、口縁端部が肥厚する。1131は体部が内湾し、1132は底部外面に「千」と墨書する。

無台坏1133～90は全て回転ヘラ切りで、1133がⅢ期、1134がⅣ₁期、1135～48がⅣ₂期、1149～59がⅤ期、1160～69がⅥ₁期、1170～85がⅥ₂期に、それぞれ位置付けられる。1133は口径13.8cm、器高3.4cmを測り、口縁部は直立気味である。1134の底部は内外面とも使用に伴い磨耗する。1135の底部外面に記された墨書は判読できない。1136～39は口径11～11.6cm、器高3.1～3.9cmを測る。1136・38は生焼けに近く、1136・39は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。1140～16は口径12.0～12.5cm、器高3.1～3.5cmを測る扁平な



第103図 B区上層包含層出土遺物実測図1 (S = 1/2・1/4)



第104図 B区上層包含層出土遺物実測図2 (S=1/4)

一群で、体部は外傾する。1142・43等のとおり使用に伴い磨耗した個体が目立つ。1148は底部外面に「真継」と墨書する。平底の1149～51は体部が直線的に外傾し、うち1149の底部外面に「□(巨カ)主」と墨書する。生焼けの1152は口径13.4cm、器高3.7cmを測る。1153の底部外面に記された墨書は「宅」の可能性が高い。1154～56の体部は内湾気味に立ちあがる。1157は口径11.3cm、器高2.9cmを測り、盤に近い器形を呈する。1158の底部外面に記された墨書は「正□(月カ)」と読めるが、1159の墨書は不明である。1160～64は口径13cm前後、器高2.9～3.7cmを測り、体部が大きく外傾する。1162以外は、使用に伴う磨耗を残す。1163～69の底部外面の墨書のうち、1165～67が「茂」、1168が「真□(継カ)」と判読できる。1170～85は口径12.5～13.2cm、器高2.5～3.2cmを測り、体部が外傾具合を増すことから皿形に近い器形を呈する。また、内面の底部と体部の境を圏線様に屈曲させる他、口縁端部を肥厚させた個体が多い。記された墨書のうち、1170・84が「□(主カ)」、1171・77が「茂」と判読できる。1186・89が「茂」、1188が「□(真カ)継」、1190が不読である他、1187は煤の付着と考えられる。

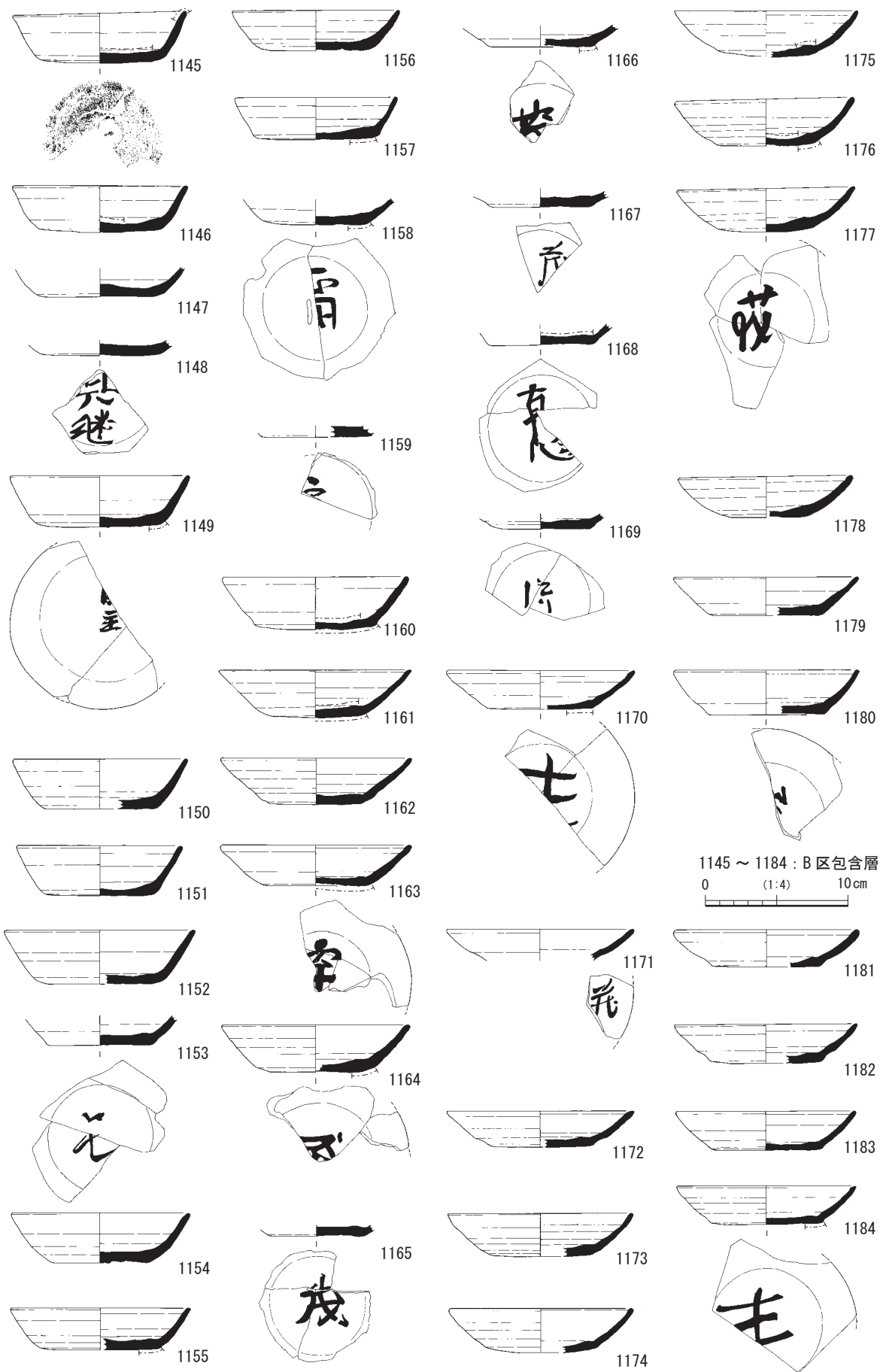
小坏1191は、底部外面に回転ケズリ調整を加える。無台盤1192～94は体部が大きく外傾し、V₂期～VI₁期に位置付けられる。1194の底部外面に記された墨書は、被熱のため判読できない。1195～97は、VI₂期の坑である。有台坑1195・96は底部外面に回転糸切り痕を残し、1195は口径13.8cm、器高4.9cmを測る。無台坑1197は底部を回転糸切り後、周縁部のみナデ調整を加えており、内黒のロクロ土師器無台坑(第61図356・357、第86図817等)と共通する調整といえる。有台皿1198～1202は台部がしっかりと外展し、底部切り離しは1198が回転ヘラ切り、1201・02が回転糸切りでおこなう。底部内面が平滑となった個体が目立つ。無台皿1203・04は底部回転糸切りで、1204は胎土の特徴から南加賀窯跡群産と考えられる。

第106図1205～09はロクロ土師器坑・皿で、1206は胎土中に海綿骨針が混ざる。内黒外赤の有台坑1205は、丁寧なミガキ調整を施す。有台坑1206は底部回転糸切りであるのに対して、1207は回転ヘラ切りと考えられる。内黒の無台坑1208は台状を呈した底部外面に回転糸切り痕が残る。内黒の有台皿1209は底部外面に「□(漆カ)」と墨書する。軟質の緑釉坑1210は口径13.0cm、器高3.9cmを測り、1211とともに摩滅が著しい。灰釉有台坑1212は口径15.0cmを測り、有台皿1213は断面方形の台部が外展する。

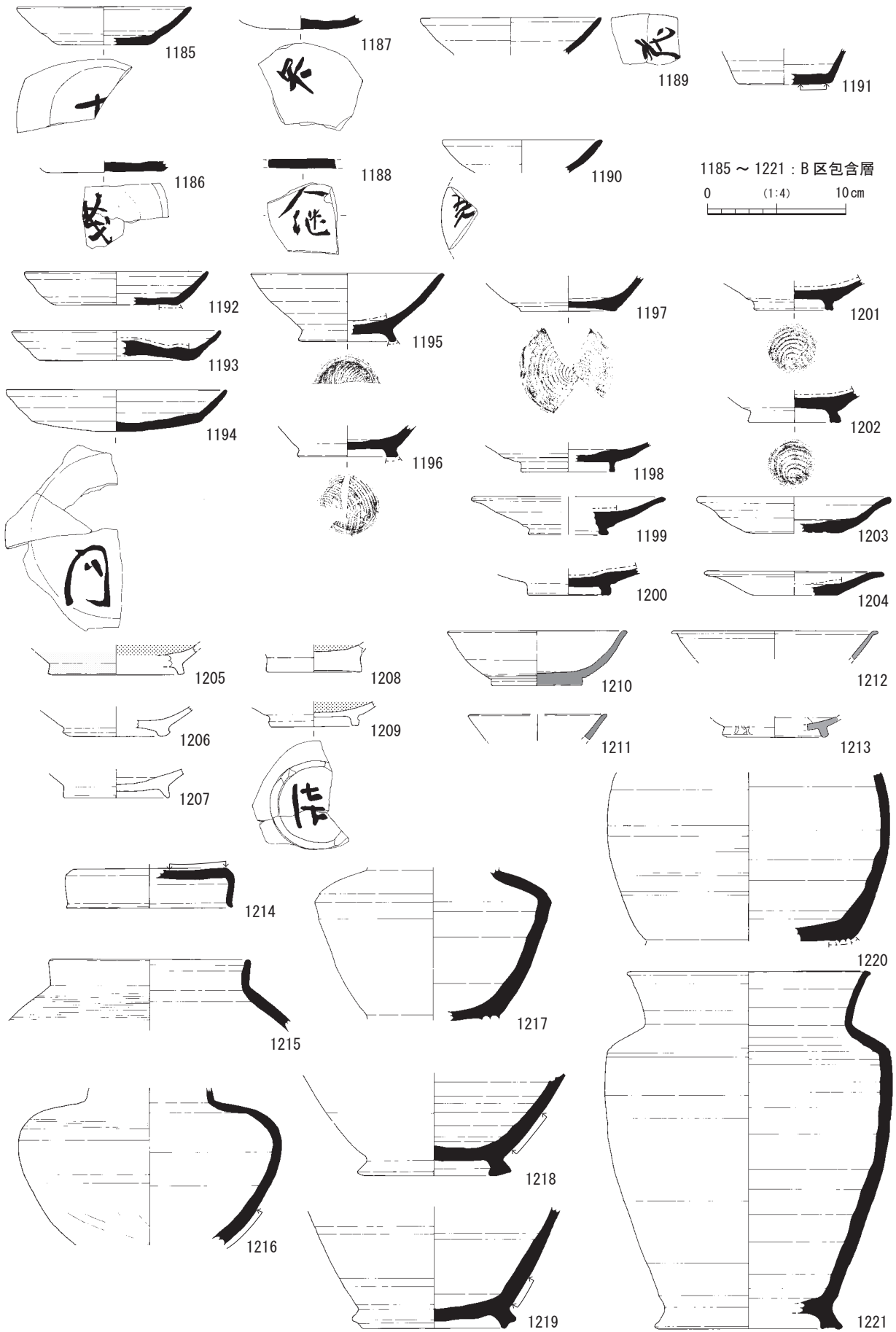
第106図1214～第107図1244は須恵器壺・瓶類で、1214～1221が壺となる。壺蓋1214は、胎土の特徴から羽咋周辺の窯跡群産と考えられる。広口壺1215は口径14.1cmを測る。短頸壺1216は肩部を丸く仕上げるのに対して、鳥屋窯跡群産の1217は明瞭に屈曲させる。1218・19は、しっかりと外展する台部である。有蓋の壺1220は、整形時に一度貼り付けた台部を削り取って焼成、その付近に磨耗痕が残る。広口壺1221は口径17.0cm、器高25.9cmを測り、肩部の屈曲を明確に表現する。1222～33は瓶である。口縁端部が嘴状を呈する1222が口径13.4cm、1223が口径12.3cmを測る。長頸瓶1224は胴部下半の成形に板状工具を用いる。1225～29は双耳瓶である。耳部は、1226は大型を呈するのに対して、丁寧な仕上げの1227は小振りである。瓶底部1230は台部が剥離し、1231は底部外面が磨耗する。1232・33は突帯付瓶で、1233が鳥屋窯跡群産となる。1234～1240は小型の壺・瓶類で、1234の産地は判然としない。1334は口径8.6cmを測り、1235は臙と考えられる。1236・37は、肩部を沈線で加飾する。1238は、内面および底部外面に黒褐色の付着物が残る。1240は、胎土の特徴から隣接する加茂窯跡群産と考えられる。平鉢1241は口径28.4cmを測る。鉢器形を呈する1242は口径10.4cm、高さ4.5cmを測り、外面にケズリ調整を加える。1241とともに倒位で焼成する。1243・44は横位焼成の横瓶である。1243は口径15.1cmを測り、1244は両面を閉塞する。

1245～53は須恵器甕である。1245・46は口径26cm弱を測る中甕である。1245は口縁下部に突帯が巡る等、古相を呈する。1247～49は口縁端部を先細らせながら斜め下方向にひきのばす。また、1248の口縁端部は使用に伴う欠けが連続する。1250は胴部から口縁部までを一体的につくる。大甕1252は、口縁部が外反しながら長くのびる。1253は、胎土の特徴から金沢末窯跡群産と考えられる。

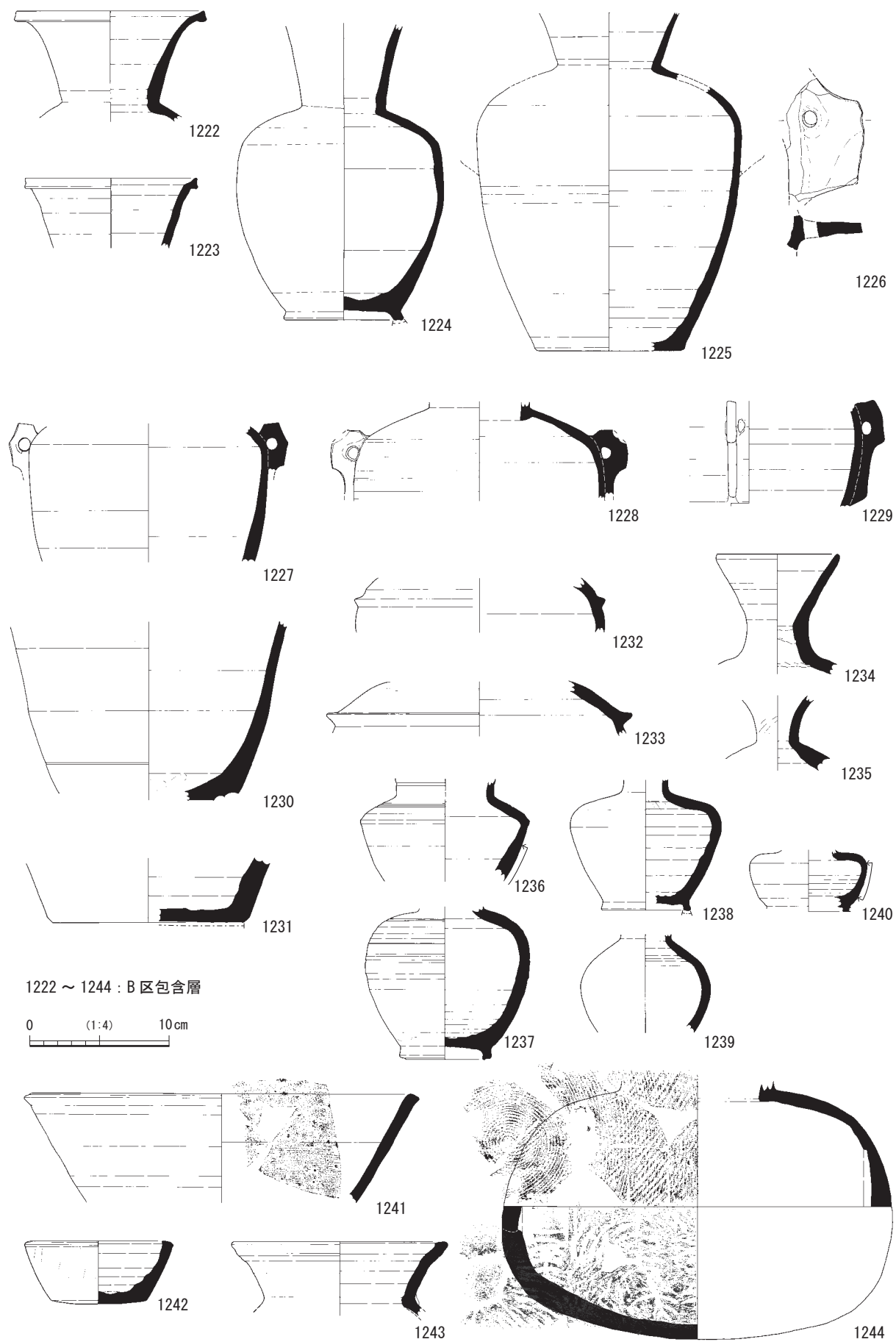
古墳時代後期の土師器甕1254は球胴形を呈し、南加賀地方から搬入された可能性をもつ。ロクロ土師器



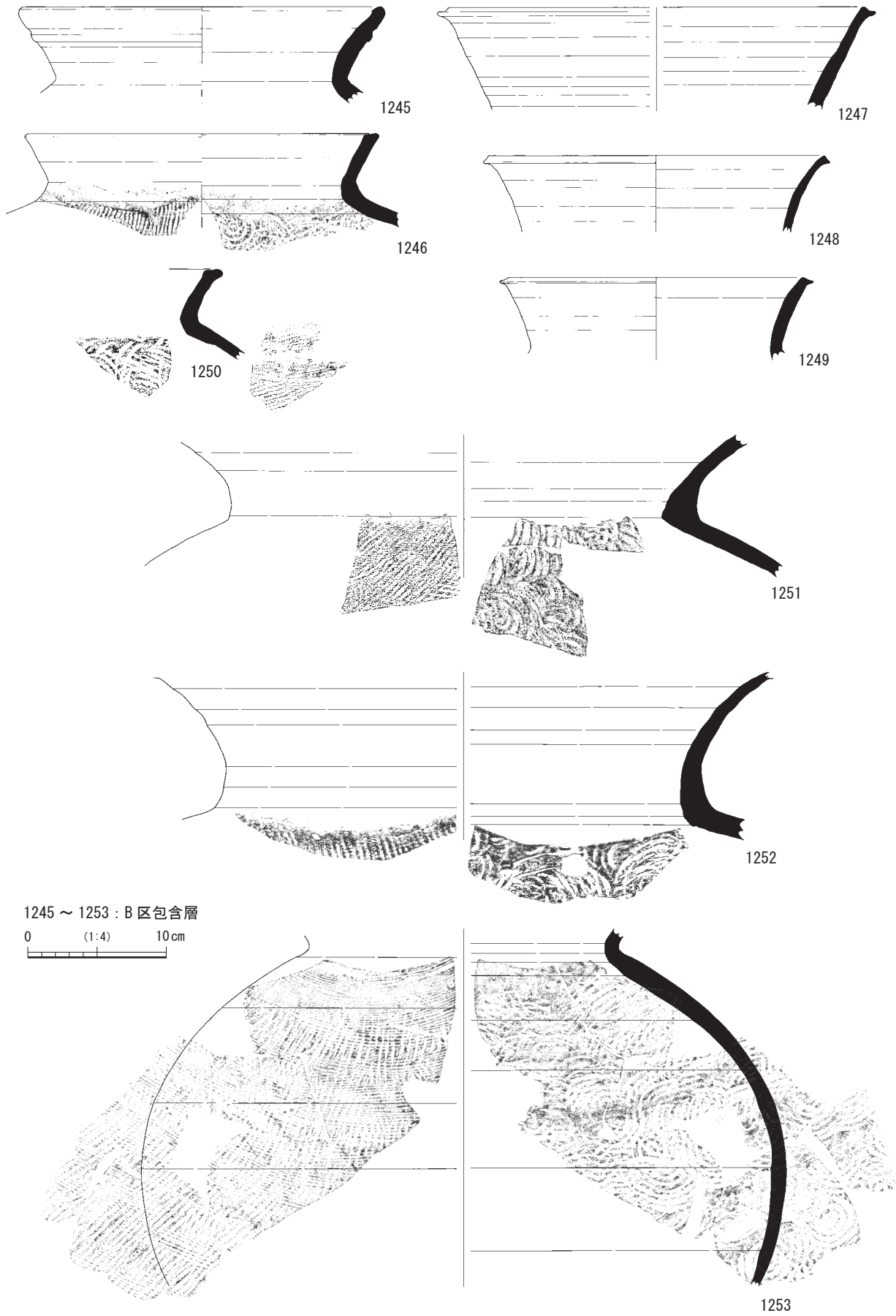
第105图 B区上層包含層出土遺物実測図3 (S=1/4)



第106図 B区上層包含層出土遺物実測図4 (S=1/4)



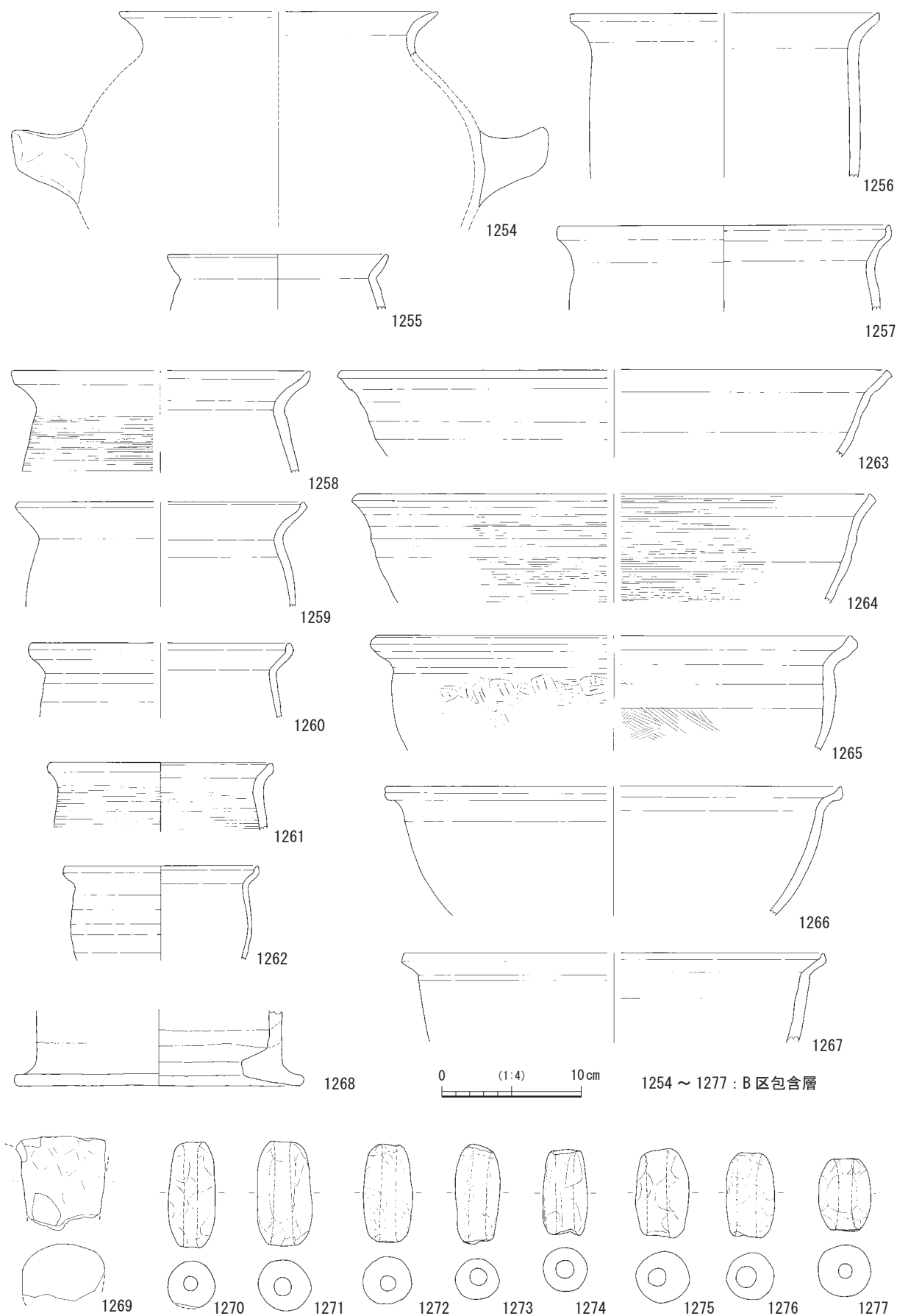
第107图 B区上層包含層出土遺物実測図5 (S=1/4)



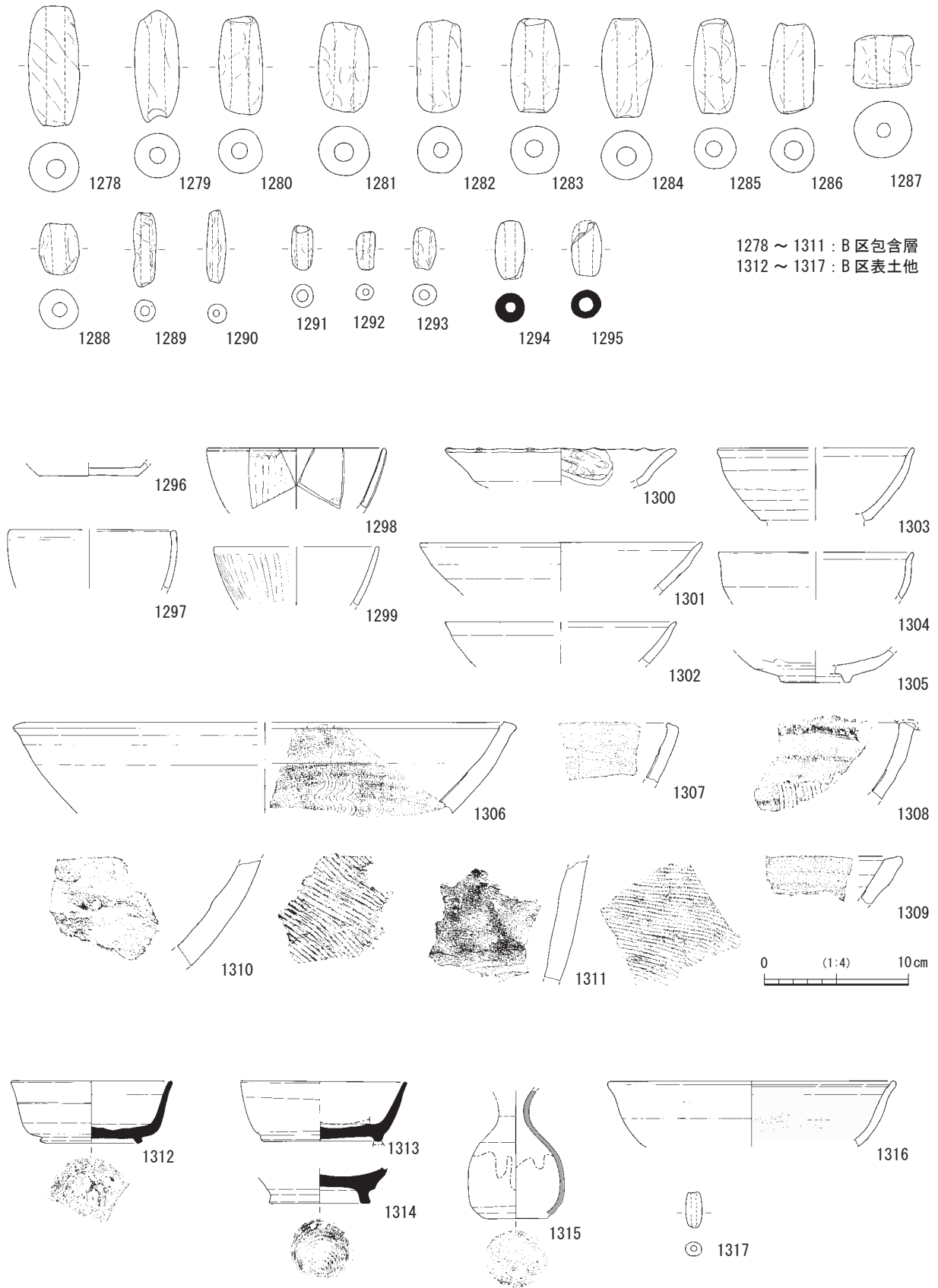
1245 ~ 1253 : B区包含層

0 (1:4) 10 cm

第108図 B区上層包含層出土遺物実測図6 (S=1/4)



第109图 B区上層包含層出土遺物実測図7 (S=1/4)



第110図 B区上層包含層等出土遺物実測図 (S=1/4)

1256～68のうち、1256～60は甕である。1256・57は摩滅が著しい。1258・59は口径20cm前後、1260は口径約18cmを測る。小甕1261は胴部にカキメ調整を施し、1262は煮炊痕を良好に残す。埴1263～67は、口径30～40cmに分布する。口縁端部は、1263～65が外傾するのに対して、1266・67は上方向へ嘴状につまみあげる。甗1268は摩滅が著しい。支脚1269は上面中央がくぼみ、被熱により橙色を呈する。

土師器土錘1270～93は、器形、重さとも多様である。重さで見れば、96.9g(1271)、80g前後(1272・75・78)、50～60g台(1277等)、45g前後(1274・85)、20g弱(1288)、10g前後(1289・90)、5g前後(1291～93)に分布、50～60g台が主体を占める。また、胎土で見れば、1272・73・76・77および扁平な1287に海綿骨針が混ざる。須恵器土錘1294・95は、器面が使用に伴い平滑となる。1294が重さ14.2g、1295が重さ9.9gを量り、前者は金沢末窯跡群と胎土の特徴が類似する。

第110図1296～1311は、中世以降の遺物である。中世前半の遺物は白磁皿1296、珠洲焼すり鉢1306・07が、中世後半の遺物は青磁直口碗1297～1299、青磁稜花皿1300、瀬戸美濃灰釉平埴1301・02、同天目茶埴1303・04、珠洲焼すり鉢1308・09がある。また、1305は17世紀代の肥前灰釉皿である。

1312～1316は、排水溝等から出土した。須恵器有台埴1312は、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産となる。1313は使用に伴う磨耗が目立つ。生焼けの1314は、VI₂期の須恵器有台埴と考えられる。灰釉瓶1315は、全面が被熱し、液状に垂れた釉を含めて変色する。内面赤彩の埴1316は口径20.0cm、土師器土錘1317は残存重量1.9gを量る小型品である。

第8節 包含層出土遺物

第24表 B・C区上層出土土器観察表 14

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

Table with 23 columns: 検出番号, 番号, 区, グリッド, 出土遺構, 種類, 器種, 口径 (cm), 底径 (cm), 器高 (cm), 内面色調, 外面色調, 胎土分類, 焼成分類, 内面調整, 外面調整, 遺存率, 備考, 時期, 実測番号. The table lists various archaeological findings such as '須恵器' (Ware 1), '土師器' (Ware 2), and '土師土器' (Ware 2), providing detailed measurements and observations for each item.

第25表 B・C区上層出土土器観察表 15

※ 流量の() 数値は残存値を示す。

Table with columns: 検出番号, 番号, 区, グリッド, 出土遺構, 種類, 器種, 口径(cm), 底径(cm), 器高(cm), 内面色調, 外面色調, 胎土分類, 焼成分類, 内面調整, 外面調整, 遺存率, 備考, 時期, 実測番号. Rows include items 80 through 95, detailing archaeological findings like pottery and loess.

第 8 節 包含層出土遺物

第 32 表 B・C 区上層出土土器観察表 22

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

Table with columns: 検出番号, 番号, 区, グリッド, 出土遺構, 種類, 器種, 口径 (cm), 底径 (cm), 器高 (cm), 内面色調, 外面色調, 胎土分類, 焼成分類, 内面調整, 外面調整, 遺存率, 備考, 時期, 実測番号. Rows list various archaeological findings from grid B19 to B21, including vessels like 須恵器, 灰土師器, and 緑釉陶器.

第37表 B・C区上層出土木製品観察表1

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	木取り	備考	実測番号
28	13	C区	P-22	SB510(P5027)	柱根	(22.4)	40.7	28.9	スダジイ	半截木		木-154
28	14	C区	P-23	SB510(P5024)	柱根	(46.7)	43.4	20.9	クリ	分割材	木-213と接合	木-212
28	15	C区	P-22	SB510(P5025)	柱根	(26.0)	(30.4)	(39.4)	スダジイ	分割材	木-156と接合	木-155
28	16	C区	P-22	SB510(P5026)	柱根	(48.0)	43.6	37.4	ケヤキ	芯持丸木	木-162と接合	木-161
28	17	C区	P-22	SB510(P5028)	柱根	(37.6)	26.5	18.5	ケヤキ	半截木		木特-18
28	18	C区	P-22	SB510(P5028)	柱根	(41.8)	(28.0)	(12.5)	ケヤキ	分割材		木-157
39	87	B区	M-19	SK5016第3層(-50cm)	挽物白木皿	口径 -	底径 (12.0)	器高 (1.7)	ケヤキ	横木地榫目取		木-012
39	88	B区	M-19	SK5016第3層(-70cm)	齋串	(19.0)	2.0	0.4	スギ	榫目		木-026
39	89	B区	M-19	SK5016第3層(-70cm)	齋串	21.6	2.0	0.5	スギ	榫目		木-027
39	90	B区	M-19	SK5016第3層	角材	21.1	2.3	2.1	スギ	分割角棒		木-182
39	91	B区	M-19	SK5016第3層(-75cm)	挽物白木皿	口径 14.8	底径 10.0	器高 2.3	ケヤキ	横木地榫目取		木-004
39	92	B区	M-19	SK5016第4層底	加工材	67.3	2.0	0.9	スギ	板目		木-183
41	103	C区	P-22	P5033	柱根	(55.1)	19.4	7.1	スギ	板目	穿孔1ヶ所	木-104
41	104	C区	P-22	P5033	柱根	(47.2)	15.8	11.2	サクラ属	ミカン割材		木-105
41	105	C区	N-22	P5068	柱根	(23.1)	8.9	7.2	スダジイ	芯持丸木		木-106
41	106	C区	N-21	P5068	たね木	(12.0)	(1.3)	(1.2)	-	割材	先端部炭化	木-163
41	107	C区	N-23	P5082	柱根	(48.5)	15.2	11.5	クリ	芯持丸木		木-164
43	152	B区	K-20	P5150	杭	(18.5)	3.3	2.2	-	分割材		木-166
43	153	B区	J-21	P5163	柱根	(41.4)	(16.1)	8.1	スギ	分割材		木-071
43	154	B区	J-21	P5163	杭	(66.5)	6.2	5.2	スダジイ	分割材		木-074
43	155	B区	J-21	P5199	柱根	(44.5)	12.6	9.6	ムクノキ	芯持丸木		木-170
43	156	B区	K-21	P5197	柱根	(24.3)	8.8	5.0	サクラ属	芯持丸木		木-167
43	157	B区	M-20	P5228	柱根	(54.7)	10.6	13.0	スダジイ	芯持丸木		木-120
43	158	B区	M-19	SD5061上柱	柱根	(43.3)	11.0	10.0	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木		木-072
51	185	C区	O-21	道路遺構(整地土)	自然木	(274.8)	径16.0	4.5	-	芯去り	枝を折る	木特(4)-1
51	186	C区	N-21	道路遺構(整地土)	板材	(103.1)	36.0	7.0	スギ	板目		木特-02
52	214	C区	O-21	道路遺構(SD5016第2層灰色土~底)	有頭棒	18.4	径1.9	-	スギ	削出丸棒		木-165
55	258	C区	P-21	道路遺構(SD5017第3層底)	挽物白木皿	口径 17.4	底径 14.4	器高 1.5	ケヤキ	横木地榫目取		木-014
55	259	C区	N-21	道路遺構(D5017中央セク第3層砂層)	挽物白木皿	口径 17.0	底径 14.4	器高 1.5	ケヤキ	横木地榫目取		木-036
55	260	C区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	挽物白木皿	口径 16.0	底径 12.6	器高 1.4	ケヤキ	横木地榫目取		木-011
55	261	C区	O-21	道路遺構(SD5017第3層)	加工材	27.9	4.4	1.9	スギ	板目		木-076
55	262	C区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	杭	(29.0)	径4.0	-	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木		木-075
59	321	B区	M-21	道路遺構(SD5017第3層)	挽物白木皿	口径 (17.0)	底径 15.0	器高 1.4	ケヤキ	横木地榫目取		木-035
59	322	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	円形板	18.4	(8.5)	0.7	スギ	榫目		木-073
59	323	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	円形板	15.0	(5.4)	0.8	スギ	榫目		木-005
59	324	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	棒状木製品	(31.3)	1.2	1.1	スギ	削出丸棒		木-067
59	325	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	たね木	(13.4)	1.8	1.5	-	割材		木-069
59	326	B区	M-21	道路遺構(SD5017第3層)	板材	(19.6)	2.7	0.2	スギ	榫目	穿孔2ヶ所	木-070
59	327	B区	M-22	道路遺構(SD5017第3層)	棒状木製品	(51.6)	1.8	1.2	スギ	削出丸棒		木-068
62	373	B区	J-20	大溝第1層	板材	11.9	14.2	1.4	スギ	板目		木-089
64	417	B区	K-20	大溝第2層	挽物白木椀	口径 -	底径 9.0	器高 (2.5)	ケヤキ	横木地榫目取		木-008
64	418	B区	K-20	大溝第2層	挽物白木皿	口径 13.6	底径 10.7	器高 0.7	-	横木地榫目取		木-216
64	419	B区	K-20	大溝第2・3層	挽物白木皿	口径 16.3	底径 10.2	器高 2.6	ケヤキ	横木地榫目取		木-037
64	420	B区	K-20	大溝第2層	円形曲物底板	15.9	7.5	0.6	スギ	榫目	側面2か所に木釘	木-217
64	421	B区	K-20	大溝第2層	箸状木製品	17.1	径0.6	-	スギ	削出丸棒		木-093
64	422	B区	K-20	大溝第2層	横櫛	(2.2)	(3.0)	0.8	イスノキ	削出		木-023
64	423	B区	K-20	大溝第2層	木錘	14.6	4.6	3.5	ケンボナン属	芯持丸木		木-079
64	424	B区	K-20	大溝第2層	板状木製品	38.7	3.2	0.3	スギ	榫目	穿孔2ヶ所	木-083
68	509	B区	K-20	大溝第3層底	挽物白木皿	口径 16.2	底径 11.0	器高 1.7	ケヤキ	横木地榫目取		木-009
68	510	B区	L-20	大溝第3層	円形板	15.1	(8.1)	0.7	スギ	榫目		木-013
68	511	B区	L-20	大溝第3層	円形板	11.3	(7.8)	0.8	スギ	榫目	焼印「木」か	木-006
68	512	B区	K-20	大溝第3層	円形曲物底板	20.0	(19.5)	0.7	ヒノキ科	追従	木釘10ヶ所残る。刀子痕あり	木-091
68	513	B区	L-20	大溝第3層	円形曲物	口径 -	底径 16.0	器高 (4.3)	スギ	榫目	木釘痕5ヶ所。焼印か	木-028
68	514	B区	K-20	大溝第3層	箸状木製品	(15.5)	0.6	0.4	スギ	削出丸棒		木-092
68	515	B区	K-20	大溝第3層	板材	45.2	2.4	0.5	ヒノキ	板目		木-097
68	516	B区	J-20	大溝第3層	横櫛	4.4	(6.0)	1.0	イスノキ	削出		木-024

第8節 包含層出土遺物

第38表 B・C区上層出土木製品観察表2

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	木取り	備考	実測番号
68	517	B区	K-20	大溝第3層	斎串か	(7.9)	1.8	0.5	-	榎目		木-081
68	518	B区	L-20	大溝第3層	角材	13.4	2.5	1.3	スギ	板目	側面に挟り	木-007
68	519	B区	K-20	大溝第3層	板状木製品	16.8	6.2	0.8	ヒノキ科	板目	穿孔2ヶ所。刀子痕顕著	木-084
68	520	B区	K-20	大溝第3層	棒状木製品	(16.4)	0.7	0.7	スギ	削出角棒		木-094
68	521	B区	L-20	大溝第3層	棒状木製品	(32.6)	2.0	1.6	スギ	削出丸棒		木-087
68	522	B区	K-20	大溝第3層	棒状木製品	35.0	1.4	1.4	スギ	削出丸棒		木-088
68	523	B区	L-20	大溝第3層	板材	(27.7)	3.7	1.1	スギ	板目	穿孔1ヶ所	木-086
69	524	B区	K-20	大溝第3層底	板材	(61.0)	6.9	1.8	スギ	板目		木-206
69	525	B区	K-20	大溝第3層底	板材	(54.9)	5.8	1.7	スギ	板目		木-181
69	526	B区	L-20	大溝第3層	杭	(59.1)	5.1	3.0	ツバキ属	芯持丸木		木-096
69	527	B区	K-20	大溝第3層	板材	15.8	(3.1)	0.3	スギ	板目	穿孔12ヶ所	木-080
69	528	B区	L-20	大溝第3層	棒状木製品	(15.0)	1.7	1.6	スギ	分割角棒	先端部炭化	木-085
69	529	B区	K-20	大溝第3層	つけ木	(16.9)	1.6	1.4	ヒノキ	分割材	先端部炭化	木-082
69	530	B区	L-19	大溝北側肩部	杭	(42.4)	5.3	3.3	スダジイ	板目		木-095
69	531	B区	L-19	大溝北側杭列	杭	(40.0)	4.7	3.2	スダジイ	分割材		木-099
82	785	B区	M-18	SD5061第1層	円形曲物底板	(12.1)	(7.7)	0.8	-	榎目	径約14cm	木-175
82	786	B区	L-19	SD5061第1層	杭	(23.2)	径2.8	-	-	分割材		木-185
82	787	B区	M-19	SD5061第3層底	板材	45.0	7.7	1.2	スギ	板目		木-177
82	788	B区	N-19	SD5061底より20cm上	部材	(82.8)	11.0	5.7	スギ	分割材		木特-09
82	789	B区	L-19	SD5061木器群W-4	板材	32.7	12.1	1.4	-	板目		木-184
83	790	B区	L-19	SD5061木器群W-12の下	板材	(34.1)	(7.3)	1.3	スギ	板目		木-187
83	791	B区	L-18	SD5061第2層	棒状木製品	(36.7)	1.7	1.4	スギ	分割角棒		木-186
83	792	B区	L-19	SD5061木器群W-14	杭	(66.1)	5.8	5.2	ヒノキ科	分割材		木-174
83	793	B区	M-19	SD5061	杭	38.6	5.2	5.8	-	分割材		木-176
83	794	B区	L-19	SD5061木器群W-21	杭	(65.2)	5.7	4.1	スギ	分割材		木-178
83	795	B区	L-19	SD5061木器群W-15	杭	(54.3)	6.2	3.4	スギ	分割材		木-179
83	796	B区	M-19	SD5061中央セク第2層	板材	39.0	(18.8)	1.9	コナラ属アカガシ亜属	榎目	穿孔2ヶ所	木-180
87	825	C区	Q-22	SD5001(新)中層腐植土	たも状木製品	192.0	径4.6	-	ヒノキ科	芯持丸木		木特-01
87	826	C区	Q-22	SD5001(新)中層腐植土	杭	(125.1)	8.1	5.1	ヒノキ科	芯持丸木		木特-08
87	827	C区	Q-22	SD5001(新)中層腐植土	編目盛板	(30.4)	(1.7)	(1.5)	スギ	分割材	約1.3cm間隔にV字状刻み23ヶ所。深さ約2mm	木-046
87	828	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-19	部材	(65.3)	14.7	6.5	スギ	板目		木特-10
87	829	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-4	部材	(121.0)	16.4	5.1	スギ	板目		木特-12
87	830	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-20	楕円形曲物底板	(57.8)	(8.6)	1.0	スギ	追榎	皮綴じ	木-016
88	831	C区	Q-22	SD5001(新)底	円形曲物底板	(18.6)	(7.4)	(0.6)	スギ	榎目	木釘痕2ヶ所。刀子痕目立つ	木-107
88	833	C区	Q-22	SD5001(旧)底青灰細砂	木筒	21.0	3.7	0.7	スギ	板目	習書「文書文書文書生書」(2号木筒)	木筒3
88	834	C区	Q-22	SD5001(旧)底青灰細砂	木筒	(10.4)	2.9	0.4	スギ	板目	人物画2体(3号木筒)。上下に穿孔あり	木筒5
88	835	C区	Q-22	大溝第3層	木筒	(9.1)	2.3	0.4	スギ	榎目	付札「<口(免)口黒口口×」(4号木筒)	木筒4
88	836	C区	Q-22	SD5001(旧)木製品群下青灰砂底	斎串	(11.8)	2.3	0.4	スギ	板目		木-025
88	837	C区	Q-22	SD5001(旧)灰色砂～底	棒状木製品	(16.9)	1.0	0.9	スギ	削出丸棒		木-100
88	838	C区	Q-22	SD5001(旧)灰色砂～底	火切り板	(28.7)	2.3	2.1	スギ	板目	火切り臼は炭化	木-101
89	839	C区	-	SD5001(旧)	部材	32.0	6.2	2.7	スギ	榎目		木-062
89	840	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-18	板材	(42.2)	2.7	0.5	スギ	板目		木-102
89	841	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-16	部材	(106.7)	17.6	7.2	スギ	板目		木特-11
101	1041	C区	Q-22	包含層	加工材	15.2	6.9	2.1	-	榎目		木-171
101	1042	C区	Q-22	包含層	板材	31.0	8.8	1.8	-	分割材		木-172
102	1050	C区	N-23	東側排水	柱根	(33.3)	径10.8	-	-	芯持丸木		木-110
88	1350	C区	Q-22	SD5001(旧)底付近青灰細砂	刀形か	15.6	2.5	0.7	-	榎目	スギか。中央付近に径約2mmの穿孔(貫通せず)	R木-001
59	2010	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	付札状木製品	7.8	3.0	0.6	-	榎目	側面を加工。下面切断	R木-002
59	2011	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	板状木製品	8.9	3.9	0.7	-	榎目	四隅に径0.3～0.5cmの円孔	R木-003
64	2012	B区	K-20	大溝第2層底	付札状木製品	7.9	3.0	0.6	-	榎目	側面を加工。下面切断	R木-004

第5章 D-1・2区、A区上層の遺構と遺物

第1節 D-1・2区（遺構：第111・112・114図・第39表、遺物：第113図、第40表）

D-1・2区は、県第1～4次調査区に隣接する上層を対象とした2ヶ所の調査区で、農業用水の調査区をD-1区、農道の調査区をD-2区と呼称した(第2図)。

1 D-1区（遺構：第111・112図・第39表、遺物：第113図、第40表）

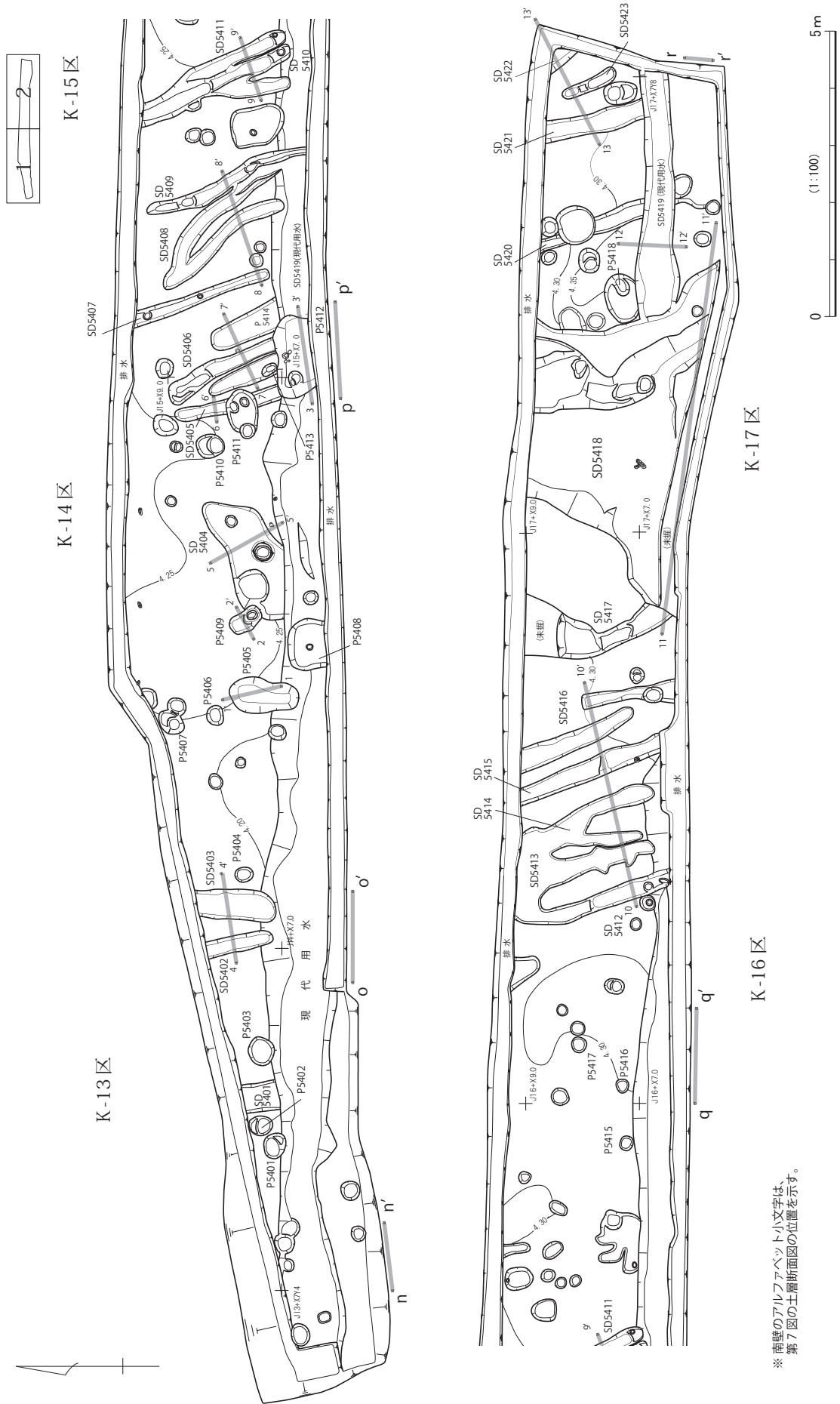
D-1区は、第2・3次調査区と北側で接し、調査杭グリッドでいえばK-13～17区にあたる(第6図)。調査対象面積は約125㎡(幅約2.5m、延長約50m)を測り、遺構検出面の標高は調査区西端が4.10m前後、東端が4.30m前後と、東から西方向に向けて緩やかに標高を減ずる。基本土層層序は、上位層から、現耕作土(厚さ27～34cm)・床土(5～13cm)、遺物包含層(0～15cm)、ベース土となり、東側に向けて、床土、遺物包含層は次第に厚さを減じる。また、遺物包含層は炭粒やベース土粒が混ざる濁濁褐色粘質土、ベース土は粗砂が混ざる淡灰黄色粘質土である。なお、調査では、遺物が出土した遺構に5400番台の遺構番号を付した。

調査の結果、掘立柱建物柱穴を含むピット約70基、溝23条を検出、うちSD5418は第3次調査大溝に流下する溝の一部である他、耕作に伴う小溝は第3次調査区に延びる。遺物は、Ⅲ～Ⅵ期の須恵器、土師器が出土、Ⅲ・Ⅳ期に属する遺物が多い傾向を示す。

ピット 検出した大部分のピットは、深さ10～30cmを測り、遺物包含層と同質の炭粒やベース土粒が混ざる濁暗褐色粘質土を基調とした覆土をもつ。柱根の出土がないため確定できないが、柱穴の可能性をもつピットとして、深さ50cm前後を測るP5403・05・07・09、SD50405北側ピットや、P5418(深さ13cm)、SD5421・23間のピット(同37cm)がある。また、P5412は長径62cm、深さ26cmを測り、最大厚23cmの黒色灰層が充填されていた。

第39表 D-1区上層SD規模等一覧表

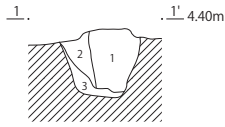
遺構番号	グリッド名	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方位	土層 (第5-3図)	備考
SD5401	K-13	60～	52～54	4	N-6°W	濁暗褐色粘質土 (ベース土粒混)	耕作に伴う小溝
SD5402	K-14	110～	25～30	5	N-13°W	4-4'	〃
SD5403	K-14	135～	45～55	7～10	N-4°E	4-4'	〃
SD5404	K-14	200～	130	2～4	-	5-5'	浅い落ち込み
SD5405	K-15	185～	20～25	3～5	N-12°W	6-6'	耕作に伴う小溝
SD5406	K-15	200～	22～30	6～8	N-22°W	7-7'	〃
P5414	K-15	130～	40～50	6	N-22°W	7-7'	〃
SD5407	K-15	250～	16～26	7～11	N-19°W	8-8'	〃
SD5408	K-15	300～	22～30	6～9	N-40～42°W	8-8'	耕作に伴う小溝。屈曲
SD5409	K-15	300～	22～28	8～10	N-12～30°W	8-8'	〃
SD5410	K-15	285～	26～42	7～10	N-26°W	9-9'	〃。SD5411と重複
SD5411	K-15	285～	22～32	4～10	N-26°W	9-9'	耕作に伴う小溝
SD5412	K-16	270～	26～34	4～8	N-19°W	10-10'	〃
SD5413	K-16	250～	24～50	8	N-17°W	10-10'	〃
SD5414	K-16	250～	26～34	6～11	N-26°W	10-10'	〃
SD5415	K-16	260～	30～36	6～12	N-21°W	10-10'	〃
SD5416	K-16	220～	26～40	7～10	N-21°W	10-10'	〃
SD5417	K-16	260～	30～105	2～17	N-30°W～10°E	11-11'	耕作に伴う小溝。屈曲
SD5418	K-16・17	300～	300～610	10～45	N-約17°W	11-11'	3次調査区大溝につながる
SD5419	K-17	-	50～80	4～20	N-90°W	12-12'	現代用水
SD5420	K-17	200～	20～34	16～20	N-17°W	濁暗褐色粘質土 (ベース土粒混)	耕作に伴う小溝
SD5421	K-17	170～	34～40	12	N-11°W	13-13'	〃
SD5422	K-17	-	-	2	N-17°W	13-13'	〃
SD5423	K-17	100	20～26	8～15	N-約20°W	13-13'	〃



第111図 D-1区上層平面図 (S=1/100)

※ 南壁のアルファベット小文字は、第7図の土層断面図の位置を示す。

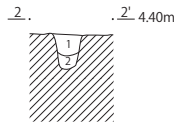
K-14区P5405



1. 濁暗褐色粘質土(炭粒・ベース土ブロックが多く混ざる)
2. ベース土と灰褐色粘質土の混合土
3. 濁褐色粘質土(炭粒が混ざる)

ベース土 淡灰黄色粘質土

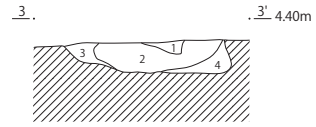
K-14区P5409



1. 濁暗褐色粘質土(炭粒・ベース土ブロックが多く混ざる。柱抜きとり穴)
2. ベース土と灰褐色粘質土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

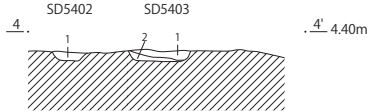
K-14・15区P5412



1. 灰緑色粗砂(現代排水)
2. 黑色灰層
3. 2層とベース土の混合土
4. 濁灰色粘質土(炭粒、ベース土ブロックが混ざる)

ベース土 淡青灰色粘質土

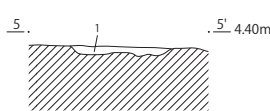
K-14区SD5402・5403



1. 濁暗褐色粘弱粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
2. 1層とベース土の混合土

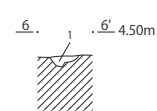
ベース土 淡灰黄色粘質砂

K-14区SD5404



1. 濁暗褐色粘質土

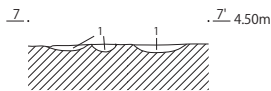
K-14区SD5405



1. 濁暗褐色粘質土とベース土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

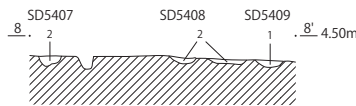
K-15区SD5406



1. 濁暗褐色粘質土とベース土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

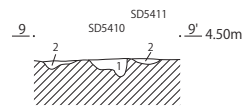
K-15区SD5407~5409



1. 濁暗褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる。)
2. 濁暗褐色粘質土とベース土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

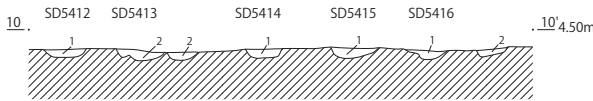
K-15区SD5410・5411



1. 濁暗褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
2. 濁暗褐色粘質土とベース土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

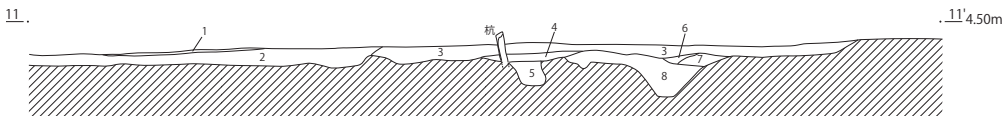
K-15区SD5412~5416



1. 濁暗褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
2. 濁暗褐色粘質土とベース土の混合土

ベース土 淡灰黄色粘質土

K-15区SD5418

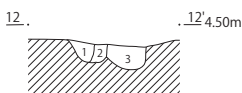


1. 茶色粗砂(現代水路)
2. 茶色粗砂、ベース土、灰褐色粘質土の混合土(現代水路)
3. にぶい褐色粘質土
4. 3層と同色土(ベース土ブロックが混ざる)
5. 3層とベース土の混合土

6. 3層と同質土(淡灰色砂質土が混ざる)
7. 3層と同質土(砂質がかかる)
8. 3層と同質土(炭粒・ベース土が混ざる)

ベース土 淡灰緑色粘質土

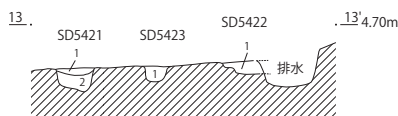
K-17区SD5419



1. 灰粘質土(砂質がかかる)
2. 灰粘質土
3. 濁茶灰色砂と灰粘質土の混合土(鉄分沈着)

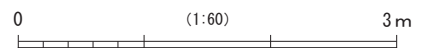
ベース土 淡灰黄色粘質土

K-17区SD5421~5423

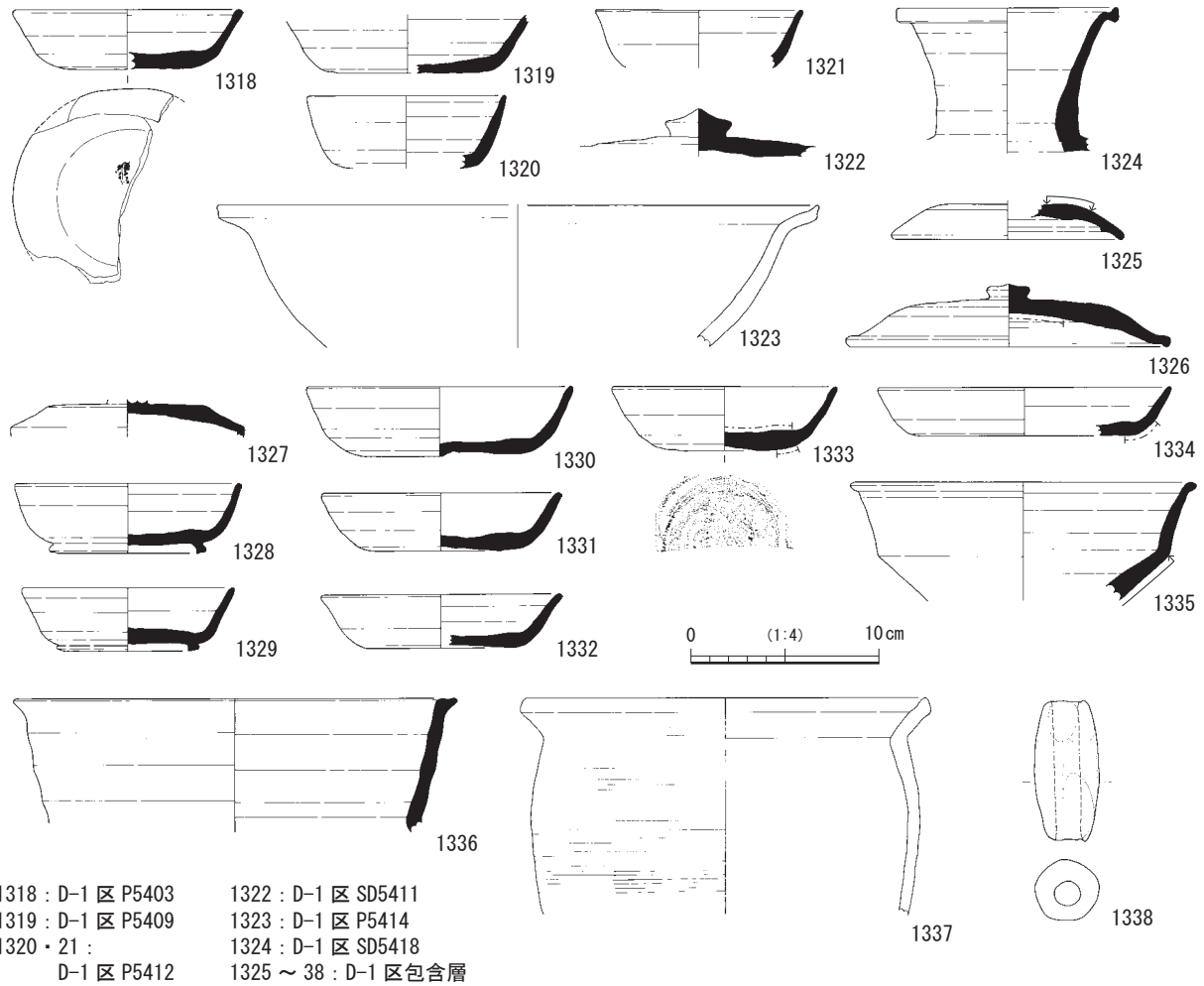


1. 濁暗褐色粘質土(ベース土ブロックが混ざる)
2. ベース土と同質土(1層ブロックが混ざる)

ベース土 淡灰色粘質土



第112図 D-1区上層土層断面図(S=1/60)



第113図 D-1区上層出土遺物実測図 (S=1/4)

第40表 D-1区上層出土土器観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

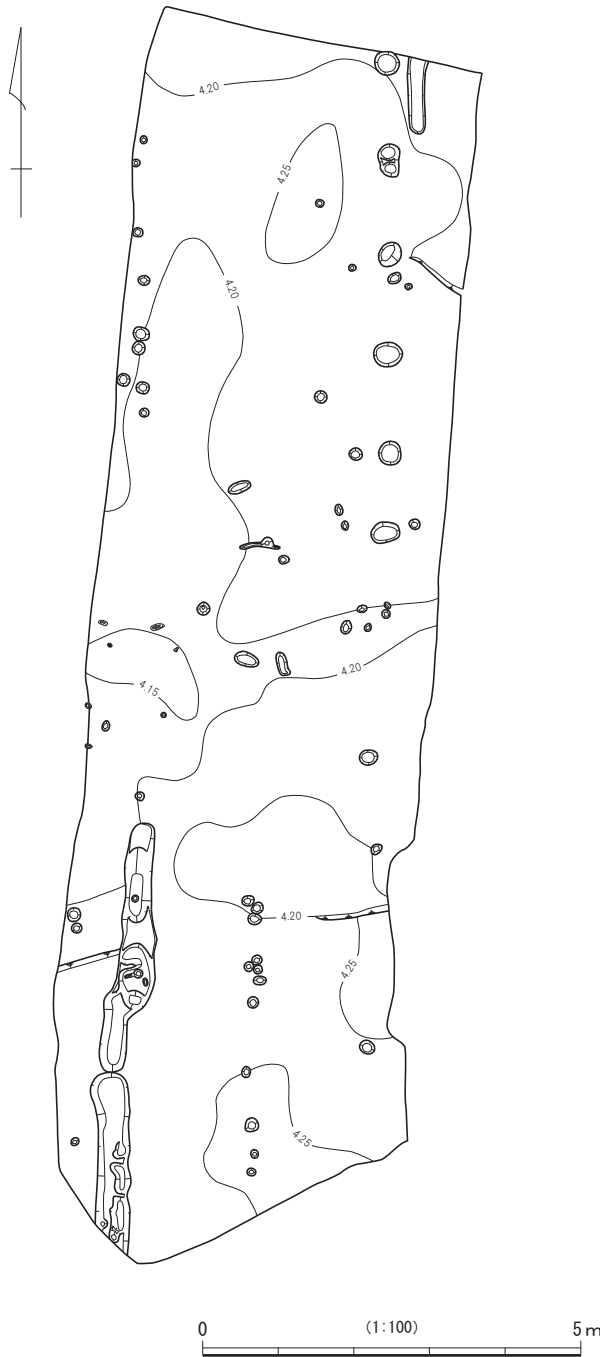
挿図番号	番号	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土分類	焼成分類	内面調整	外面調整	遺存率	備考	時期	実測番号
113	1318	K-13	P5403	須恵器	無台杯	11.8	7.4	3.2	灰白	灰白	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口10/36 底17/36	外底下駄歯状圧痕、還元弱い、外底褐色漆付着	IV(西)	墨098
113	1319	K-14	P5409	須恵器	無台杯	-	9.2	(3.1)	淡灰	淡灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	底5/36		V	D1022
113	1320	K-14・15	P5412	須恵器	有台杯	10.4	-	(3.9)	灰	青灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口1/36 底4/36	外面黒化	IVか	D1024
113	1321	K-14・15	P5412	須恵器	有台杯	10.8	-	(3.0)	褐灰	灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ	口5/36	外面黒化	IVか	D1023
113	1322	K-15	SD5411	須恵器	坏類蓋	-	鈕径3.5	(2.5)	褐灰	明灰	D-b4	還硬	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	鈕36/36	外面厚い自然釉着	IIIか	D1003
113	1323	K-15	P5414(溝)西側	ロクロナデ土師器	埴	約32	-	(7.5)	にぶい黄橙	にぶい橙	b-4SML	良	磨滅不明	磨滅不明	口1/36	磨滅顯著	IVか	D1004
113	1324	K-16	SD5418	須恵器	長頸瓶	11.6	-	(7.6)	灰	灰	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/36	風船技法の切断面良好に残る。内面降灰(正位焼成)	V・VI	D1005
113	1325	K-14・15	包含層	須恵器	坏蓋	12.1	-	(1.8)	淡灰	淡灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	口9/36	外面降灰(重ね焼きI類)	II 2	D1046
113	1326	K-15	包含層	須恵器	坏蓋	16.8	鈕径2.3	3.3	灰	灰	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/36	内底磨耗	V 1	D1039
113	1327	K-15	包含層	須恵器	坏蓋	-	-	(1.9)	青灰	青灰	F-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後回転ケズリ	-	鳥屋窯跡群産か	IV2(西)	D1050
113	1328	K-15	包含層	須恵器	有台杯	11.8	8.3	3.7	青灰	灰	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36 底13/36	外面黒化	IV1(西)	D1044
113	1329	K-15	包含層	須恵器	有台杯	11.2	7.6	3.3	灰	灰	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口1/36 底5/36	内面～外面口縁部黒化(正位無蓋焼成)	IV1(新)	D1042
113	1330	K-15	包含層	須恵器	無台杯	14.0	10.0	3.7	淡灰	淡灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口8/36 底18/36	口縁部外面黒化	IV1(西)	D1041
113	1331	K-15	包含層	須恵器	無台杯	12.5	-	3.1	灰	青灰	D-b4	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口6/36 底22/36	外面黒化	IV1(西)	D1043
113	1332	K-14	包含層	須恵器	無台杯	12.5	7.3	2.8	灰白	灰白	D-b3	還軟	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口3/36 底9/36	生焼けに近い、外底ヘラ記号「/」。磨滅目立つ	IV1(西)	D1047
113	1333	K-15	包含層	須恵器	無台杯	11.8	7.8	3.4	淡黄灰	淡黄灰	D-b2	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後粗ナデ	口8/36 底13/36	外底ヘラ記号「/」。底部磨耗	IV1(新)	D449
113	1334	K-14	包含層・用水路	須恵器	無台盤	15.4	12.2	2.6	灰	灰・暗灰	D-b3	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ切り後ナデ	口2/36 底9/36	外面黒化。外裾磨耗	V 2	D1048
113	1335	K-15	包含層	須恵器	稜塊	17.8	-	(6.2)	灰	褐灰	D-b1	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	口2/36	有蓋。外面黒化	IV・V	D1040
113	1336	K-14	包含層・用水路	須恵器	壺	約23	-	(7.0)	灰	灰	D-b4	還硬	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/36	傾きに不安残す	VIか	D1049
113	1337	K-15	包含層	ロクロナデ土師器	壺	21.2	-	(11.5)	浅黄橙	浅黄橙	b-4SML	良	ロクロナデか	ロクロナデ、カキメ	口4/36	内面磨滅顯著	IVか	D1045
113	1338	K-14	包含層・用水路	土師器	土鏡	長さ7.6	径3.4	孔径1.4	-	浅黄橙	b-4M	良	-	ナデ	-	残存重量59.0g。磨耗目立つ	-	D1051

出土遺物のうち、第113図の須恵器1318～21、ロクロ土師器埴1323を図示した。P5403出土の無台坏1318は口径11.8cm、器高3.2cmを測り、底部外面に褐色を呈した漆が附着する。P5409出土の無台坏1319はV期、P5412出土の有台坏1320・21は口径10.5cm前後を測り、IV期と考えられる。P5414出土のロクロ土師器埴1323は口径約32cmを測り、磨滅が目立つ。

溝 第39表に規模等を記したとおり、大部分が第3次調査区につながる耕作に伴う小溝である。耕作に伴う小溝の規模は上幅16～55cm、深さ2～20cmを測り、覆土は遺物包含層と同質のベース土粒が混ざる濁暗褐

灰色粘質土を基調とする。主軸方位から、N-約5°Wの群(SD5401・03)、N-約12°Wの群(SD5402・05・21)、N-17～22°Wの群(SD5406・07・12等)、N-26°Wの群(SD5410・11・14)、N-約40°Wの群(SD5048)の5群に分けられ、N-17～22°Wの群が半数程度を占める。また、SD5418は、第3次調査区大溝に注ぎ込む溝で、一段深くなる肩部に径約5cmの杭が残る。上幅300～360cm、深さ10～45cmを測り、覆土は、にぶい褐灰色粘質土を基調とする。出土遺物は、SD5411出土の1322、SD5418出土の1324を図示した。大型の須恵器坏類蓋1322は径3.5cmを測る端正な鈕を貼り付ける。須恵器長頸瓶1324は口径11.6cmを測り、嘴状の口縁端部が上方にのびる。1322がⅢ期、1324がⅥ期と考えられる。

遺物包含層出土遺物 1325～1338は遺物包含層から出土した。退化した内面返しをもつ坏蓋1325は口径12.1cmを測る。坏蓋1327は肩部で明瞭に屈曲し、胎土の特徴から鳥屋窯跡群産と考えられる。有台坏1328は口径11.8cm、器高3.7cm、1329は口径11.2cm、器高3.3cmを測る。1330～33は無台坏である。1330は口径14.0cm、器高3.7cmを測り、身が深い印象を受ける。1331・32は口径12.5cm、器高3cm前後を測る。1333は底部が厚く、外面に「J」のヘラ記号が残る。無台盤1334は使用に伴い磨耗する。有蓋の稜埴1335は口径17.8cmを測り、口縁端部は横方向にのびる。甕1336は傾きに不安を残す。ロクロ土師器甕1337は内面が磨滅する。土錘1338は長さ7.6cm、残存重量59.0gの大型品である。1325がⅡ₂期、1328～33がⅣ₁期、1326・27・34・35がⅤ期、1324がⅥ期と、Ⅳ₁期に属する遺物が



第114図 D-2区上層全体図 (S=1/100)

目立つ。

2 D-2区 (遺構: 第114図)

D-2区は、第3・4次調査区の中に位置し、調査杭グリッドでいえばD～F-18・19区にあたる(第6図)。調査対象面積は、農道う回路工事が進まなかった関係から約75㎡(幅約5m×延長17m)となった(第2図)。調査の結果、近代以降の稲を干すためのハズ穴、小溝、小ピットを検出したにとどまる(第114図)。ハズ穴等小ピットの覆土は耕作土と同質のしまりのない灰色砂質土、小溝の覆土は淡灰色細砂・粗砂である。基本土層層序は、上位層から現代の盛土(農道敷設時の置き換え土)、濁暗灰色粘質土(上層遺物包含層)、淡灰色砂質土(上層ベース土)となり、遺物包含層は部分的に薄く遺存した程度であった。検出面の標高は4.18～4.24mを測る。遺物は、少量の須恵器、土師器片が出土した。

第2節 A区上層 (遺構: 第115～117・119図、第41表、遺物: 第118図、第42・43表)

第5次調査A区は、第3章第1・2節で記したとおり、平成6(1994)年度実施の4次調査で古代・中世の生活面の調査を終え、現地表面まで完全に埋め戻された調査区であり、平成11(1999)年度に、分布調査で間層を挟んで存在すると考えられた弥生～古墳時代の生活面を対象に調査が計画された。現地調査着手時に、想定した深さで生活面(結果的に「最下層」となる)を検出し、排土置き場の関係で東側および南側から、順次、重機を用いて間層土砂の搬出を進めた。その中途、第4次調査とほぼ同じ検出面において、未完掘の遺構群の存在を確認したため、急遽、間層の搬出を取りやめ、第4次調査の埋め戻し土のみを除去し、県教委と協議のうえ、改めて調査を実施した。調査の結果、第4次調査とほぼ同一検出面で、弥生～古墳時代の生活面(下層)が存在したこととなる。第4次調査の経緯・未完掘の理由等は判然としないが、島状に残った部分の調査および整理は、現在も調査担当者として非常に大きな後悔の残る調査であり続ける。

以下では、第4次調査の掘り残し部分である、古代以降の遺構を抽出して概要を述べた後、第4次調査遺構全体図の修正版を第119図に示す。なお、弥生～古墳時代の遺構群は、下層として第6章に記す。

調査範囲は、調査杭グリッドでいえばH～J-19～21区にあたり、検出面の標高は4.25～4.35mを測る。古代以降の遺構としてピット約20基、溝5条(第115・116図太線)を確認し、遺物が出土した遺構に対して500番台の遺構番号を付している(第41表)。古代に属するピットは、炭粒やベース土粒が混ざる濁褐灰～暗灰色粘質土を基調とする覆土である。建物柱穴として、深さ30cm以上を測るP519・520・522～525・527・555が建物柱穴となりうる規模をもち、P533に柱根、P518に柱根沈降痕跡が残る。また、柱根が残るP546(茶黄色砂質土)や、P547・553(灰色砂質土)は、中世以降の柱穴の可能性が高い。

溝は、蛇行しながら南西方向に流下するSD506と、SD514等の平行する耕作に伴う小溝4条を検出した。SD506は、第4次調査区で道路遺構を横切り、本次調査C区上層SD5048・50を経て、第4・3次調査区につながる。上幅86～144cm、深さ46～55cmを測り、覆土は上位層から褐灰黄色粘質土、淡灰色粗砂を基調とする。C区上層出土遺物からVI₂期以降に位置付けられる。耕作に伴う小溝4条の主軸方位は、N-11～22°-Wを示す。

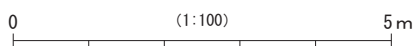
遺物は、ピットから出土した第118図1339～1343の須恵器、1348の柱根を図示した。P518出土の有台坏1339は生焼けに近い。P519出土の有台坏は口径15.0cm、器高3.9cmを測り、台端部に墨痕が残る。P524出土の有台坏1341は口径14.0cm、器高3.9cmを測り、焼きゆがむ。坏蓋1342は内面の墨痕、摩耗から硯に転用されたと考えられる。P555出土の1343は、低脚の高坏である。1340がⅢ期、1341がⅢ～IV₁期、1339・42がVI₂期に位置付けられる。P553出土の1349は径12cmを測るマツ属複維管束亜属を材とする。なお、県教委文化財課立ち合い調査等で出土した、須恵器1344～1347のうち、有台坏1344は外側面に墨書が残る。



第115図 A区上層平面図1 (S=1/100)



※上端のみの遺構は第3次調査掘削遺構

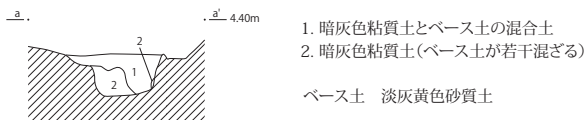


第116図 A区上層平面図2 (S=1/100)

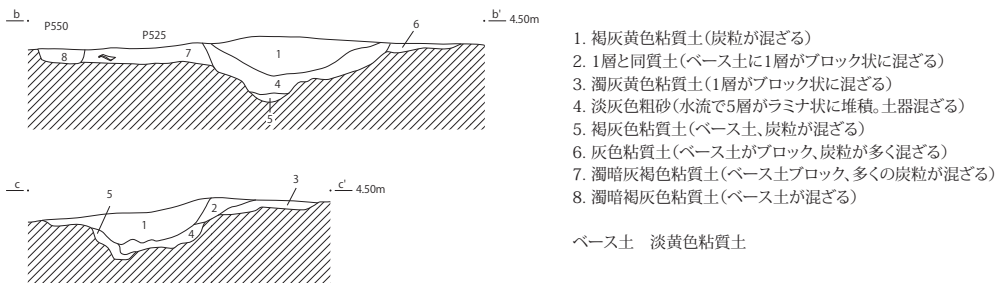
第41表 A区上層遺構規模等一覧表

遺構名	グリッド名	規模等			覆土土層	備考
		検出面の長軸(cm)	深さ(cm)	底面の標高(m)		
P510	I-20	60	11	4.34	濁暗灰褐色粘質土	平面不整形。P519より新
P518	I-20	46	18	4.28	濁暗灰褐色粘質土	平面不整形。柱根痕あり
P519	I-20	66	38	4.02	濁暗灰褐色粘質土	平面略方形。P510より古
P520	I-20	86	31	4.01	濁灰褐色粘質土(ベース土粒混ざる)	平面不整形
P522	J-19	92	55	3.75	第117図a-a'	平面略楕円形
P523	J-19	90	52	3.78	濁暗褐色粘質土(炭粒、ベース土粒混ざる)	平面略楕円形か
P524	J-19	68	36	3.94	濁暗褐色粘質土(炭粒、ベース土粒混ざる)	平面略円形か
P525	J-19	84	36	3.94	濁灰褐色粘質土(炭粒混ざる)	平面不整形楕円形。P549より古
P526	I-19	66	22	4.11	濁褐色粘質土(ベース土粒混ざる)	平面不整形。SD506より新
P527	I-19	68	30	4.03	灰褐色粘質土	平面不整形。耕作に伴う小溝より新
P530	I-19	22	13	4.28	濁褐色粘質土	平面略円形。SD514より新
P533	I-20	25	約30	約4.10	第117図d-d'	平面円形。柱根残存
P545	I-19	46	17	4.27	濁褐色粘質土	平面不整形楕円形。SD514より新
P546	I-19	26	3	4.32	茶黄色砂質土	平面略円形。杭残存。SD514より新
P547	I-20	54	29	4.03	灰色粘質土(しまりない)	平面楕円形。角柱残存。中世以降か
P548	J-19	34	12	4.18	濁暗褐色粘質土(炭粒多く混ざる)	平面略円形。P549より新
P549	J-19	218	12	4.18	濁灰褐色粘質土	平面不整形。浅いくぼみ
P550	J-19	54	10	4.20	第117図b-b'	平面不整形楕円形。P549より新
P553	I-20	20	15	4.25	灰色粘質土(しまりない)	平面円形。柱根(径8cm)残存。中世以降か
P555	I-19	60	56	3.76	濁暗褐色粘質土	平面略円形
SD506	I・J-19	上幅86~144	46~55	3.75~3.84	第117図b-b'、c-c'	B区SD5049・50、3・4次調査区につながる基幹的溝。主軸方位N-10°E。B区上層の出土遺物はVI ₂ 期下限。
SD514	I-19	上幅22~48	5~6	4.28~4.35	濁暗褐色粘質土(炭粒、ベース土粒混ざる)	耕作に伴う小溝群の1条。主軸方位N-11~22°W。P530・545より古

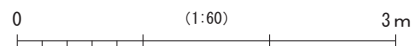
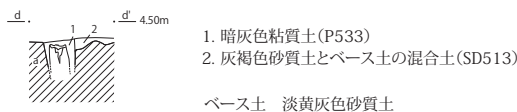
J-19区P522



I・J-19区SD506

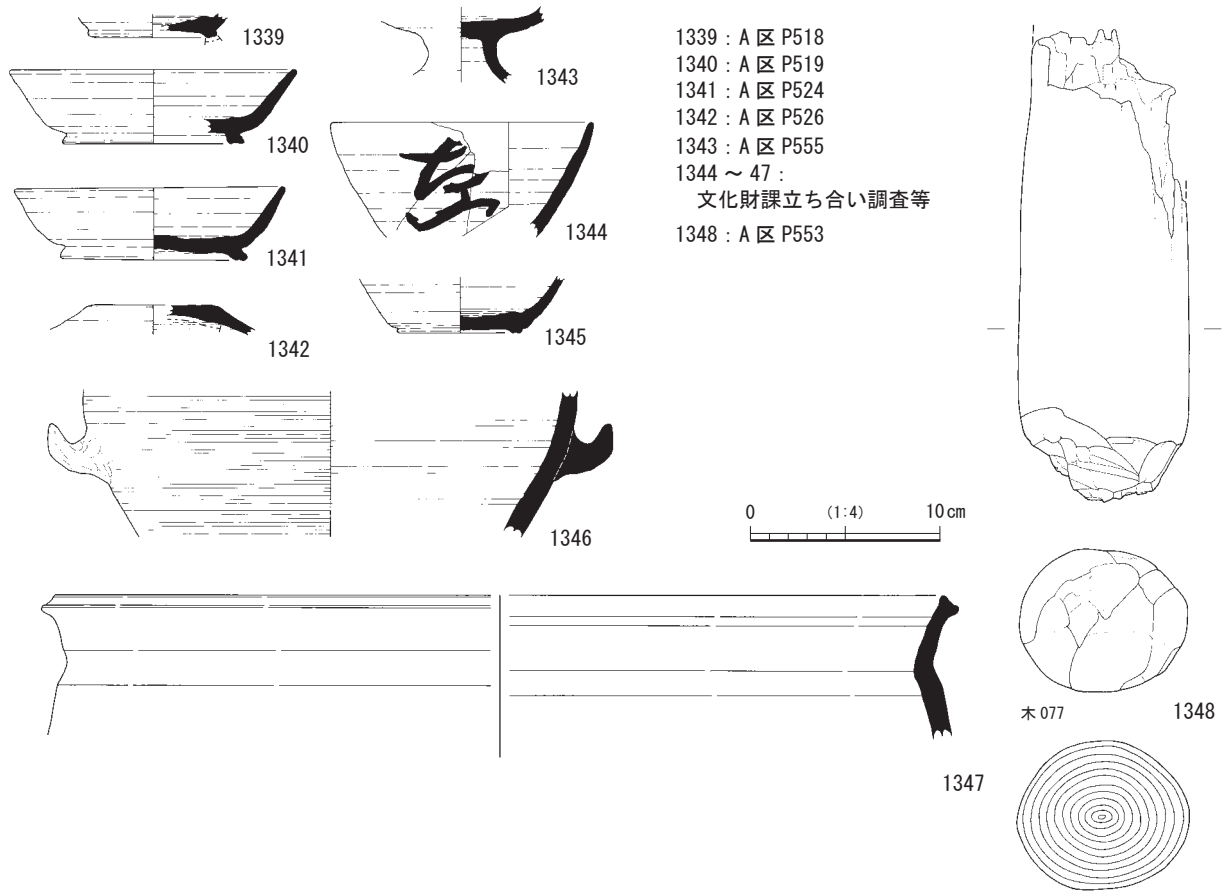


I-20区P533



第117図 A区上層遺構断面図 (S=1/60)

第2節 A区上層



第118図 A区上層等出土遺物実測図 (S=1/4)

第42表 A区上層等出土土器観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成 分類	内面 調整	外面 調整	遺存率	備考	時期	実測番号	
118	1339	A区	I-20	P518	須恵器	有台坏	-	6.8	(1.3)	灰白	灰白	D-b3	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ 切り後ナデ	底9/36	生焼けに近い、台接地面 摩擦	VI ₂	D1031	
118	1340	A区	I-20	P519	須恵器	有台坏	15.0	10.2	3.9	灰白	灰白	D-b4	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ 切り後ナデ	口4/36 底4/36	台部接地面に患痕	III	D1032	
118	1341	A区	H-19	P524	須恵器	有台坏	14.0	9.5	3.9	淡灰	淡灰	D-b3	遠敷	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラ 切り後ナデ	口14/36 底31/36	台部成型時にゆがむ。 一部生焼け	IV ₁ (西)	D1030	
118	1342	A区	H-19	P526	須恵器	坏蓋	-	6.9	1.5	淡灰	淡灰	D-b3	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ 切り後ナデ	底10/36	内面患痕・摩擦(転用痕)	VI ₂	D1033	
118	1343	A区	H-19	P555	須恵器	高坏	-	-	(4.0)	灰	灰	D-b3	遠敷	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	-		II ₃ ~III	D1034	
118	1344	不明	-	不明	須恵器	有台坏	約14	-	(6.0)	灰黄褐	黄灰	C-bか	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ	-	外側墨書「口(左カ)」	Vか	墨061	
118	1345	既調査区		排土中H10文化財課立会い調査周辺	不明	須恵器	有台坏	-	6.3	(3.0)	淡灰	淡灰	D-b3	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラ 切り後ナデ	底25/36	外面黒化	VI ₂	D1035
118	1346	既調査区		排土中H10文化財課立会い調査周辺	不明	須恵器	把手付鉢	-	-	(7.7)	淡灰	淡灰	D-b4	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ	-	胎土練り込み不足で輪状を呈する。磨滅目立つ	IVか	D1036
118	1347	既調査区		排土中H10文化財課立会い調査周辺	不明	須恵器	浅壺	約46	-	(8.5)	灰	灰	D-b3	遠敷	ロクロナデ	ロクロナデ	口2/36	降灰	III-IVか	D1037

第43表 A区上層出土木製品観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	木取り	備考	実測番号
118	1348	A区	I-20下層	P553	柱根	(35.2)	径12.0	-	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木		木-077



第119図 第3次調査区、第5次A区上層合成図 (S = 1/200)

第6章 A～C区下層の遺構と遺物

第1節 調査の概要

A～C区下層の遺構検出面の標高は、A区が4.30～4.50m(上層とほぼ同じ)、B区南東端が4.50m(J-21区、上層検出面より一約20cm)、B区北東端が約4.30m(N-21区、同一約40cm)、B区北西端が約4.00m(M-18区、同一約40cm)、C区北端が約4.30m(Q-21区、同一60cm)をそれぞれ測り、東から西方向に向けて約50cm、南から北方向に向けて約20cmの標高差を示す。また、第7章で整理するが、A区は南方向に向けて、急速にベース面の標高が下がり、A区～B区南東側は標高4.30～4.50mを測る微高地状を呈する。遺物包含層は炭粒が多く混ざる濁黒灰～濁褐灰色粘質土を、ベース土はA区がやや汚れた淡灰黄色砂質土～粘質シルト、B・C区が淡灰黄～黄灰色粘質土を、それぞれ基調とする。

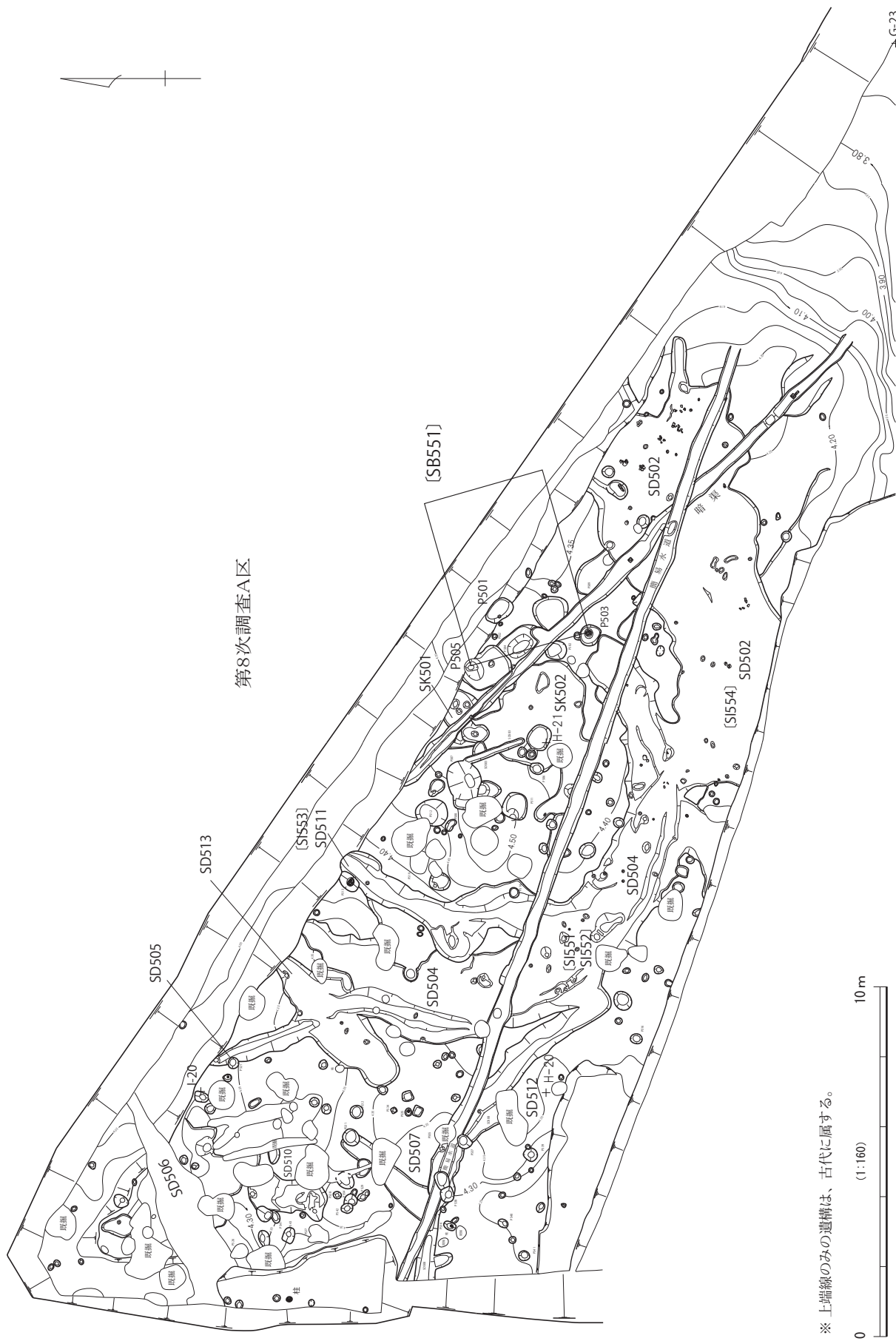
調査の結果、弥生時代中期後半～古墳時代前期前葉に営まれた集落を確認した。第1～4・8次調査の成果を加味すれば、第3次調査区F-15区と第5次調査区B区M-20区を結ぶラインを西限とする微高地上に集落の中心域が存在し、第1・2次調査区では未検出の生活面となる。第5次調査で検出した遺構は、平地建物5棟(A区SI551～554、B区SD5521)、掘立柱建物2棟(A区SB551、C区SB552)、土坑8基、河跡1条(C区SD5501)、溝約30条、柱穴を含むピット多数で、平地建物は弥生時代後期にほぼ同一地点で建て替えをおこなう。なお、A区で復元した平地建物、掘立柱建物は、第5・8次調査区を合成した平面図⁽¹⁰⁾を元に建物プランを想定しており、最終的な建物復元は第8次調査報告に委ねざるを得ない。本報告では、基礎資料を示すとともに、あくまで試案として提示しておきたい。

また、B区でベース土と理解した土層(第7図土層15:淡黄灰色粘質土)から少量の遺物が出土したため、現地調査完了直前に試掘坑を5ヶ所設定し、土層把握に努めたが、明確な生活面を確認できなかった。当時は東側の埋没谷奥部から流出した土砂とともに流れ込んだ遺物と判断したが、その位置付けについても第8次調査成果(第1面:5次上層に該当、第2面:弥生時代後期～古墳時代、第3～6面:縄文～弥生時代後期)を踏まえた検討が必要であることに留意されたい。

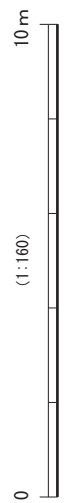
遺物は、縄文時代晩期の土器、弥生土器、土師器、未成品を含む石器・石製品に加え、建物の柱根、平地建物の礎板等の木製品が出土した。特に古墳時代前期前葉の河跡C区SD5001からは、多量の土器、未成品を含む農具、盾、舟形木製品、部材等の木製品が出土している。

第2節 A区下層 (遺構:第120～129図、第44～46表、遺物:第130～135図、第47～49表)

A区下層は、第3章第2節で述べた経緯により、島状に残った約400㎡を対象に調査を実施した(第120～122図)。遺構検出面の標高は、上層遺構面とほぼ同じく、4.30～4.50mを測る。調査の結果、弥生時代後期のうちに数回建て替えを行う平地建物4棟(SI551～554)、掘立柱建物1棟(SB551)、土坑3基、溝6条、柱穴を含むピット約100基を検出した。現地調査時は、複数の柱穴底面から木製品が出土したものの、その掘り方の把握ができないことから、ベース土下に異なる生活面が存在するものと誤認し、別生活面として調査を行っている。これらの柱穴底面出土の木製品は、平地建物主柱の礎板であり、結果として、航空測量図には平地建物の主柱抜き取り穴(覆土はベース土と灰色砂質土の混合土)を表示し、異なる生活面として手書き実測した平地建物の主柱礎板及び想定柱穴(報告段階で新たにP581～596を付与)を、第122・124・125図で合成している。この判断としない主柱穴の掘り方覆土の状況は、第8次調査も同様であり、炭粒の混ざりが多いベース



※ 上端線のみは遺構は、古代に属する。



第120図 A区下層全体図 (S=1/160)

土(やや汚れた淡灰黄色砂質土)が覆土となるようだ。なお、上層遺構に属する可能性のあるピットには、P515～517、P525、P531～536、P543、P547、P552がある。

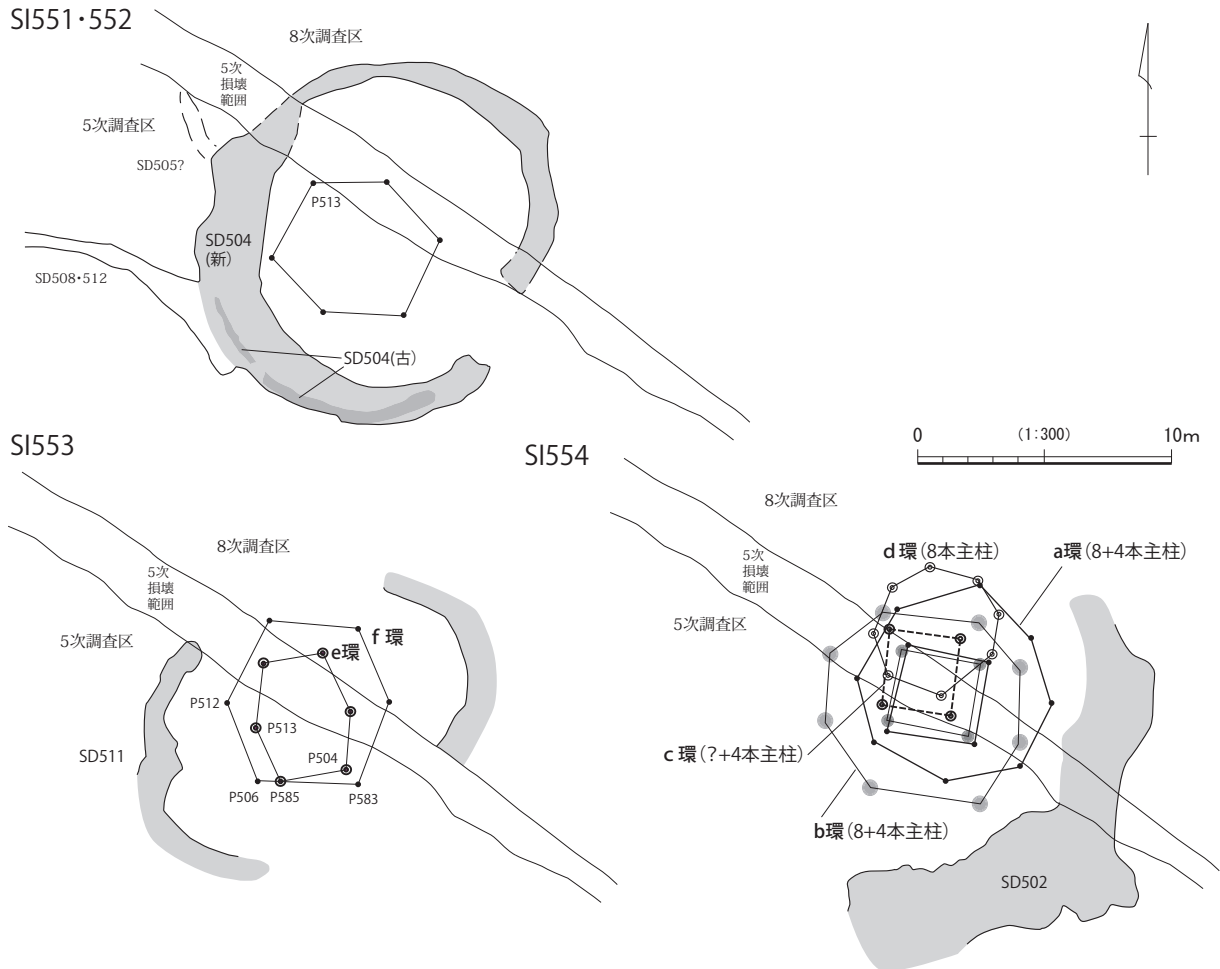
遺物は、第3・4次調査で上層と重複しながら遺物包含層を掘削した関係から、コンテナパッド約2箱の土器、柱根や多数の礎板、管玉等の石製品数点が出土したにとどまる。



第121図 A区下層平面図1 (S=1/100)



第122図 A区下層平面図2 (S = 1/100)



第123図 A区下層平地建物配置案模式図 (S =1/300)

1 平地建物、掘立柱建物（遺構：第123～128図、第44・45表、遺物：第130～135図、第47～49表）

平地建物SI551～554、掘立柱建物SB551は、報告段階に新たに付与した遺構番号である。本報告では、礎板から支柱穴を想定したことから、第123～125図に平地建物の復元プラン、第127・128図に支柱礎板出土状況、第44・45表に建物規模、構成する遺構番号、礎板等を記して、その関係を示している。

平地建物は、弥生時代後期にほとんど同一の敷地を占有し、外周溝(SD502・504・511)の切りあい関係から、SI553(上屋6本支柱、支柱礎板あり。1回建替え)→SI551(上屋6本支柱、支柱礎板なし)→SI552(同)→SI554(上屋8+4本支柱または8本支柱、支柱礎板あり。複数回建替え)と、規模を拡大しながら変遷するものと想定した。各外周溝から少量の弥生土器が出土しており、最も新しいSI554の外周溝 SD502出土土器は弥生時代後期後半を下限とする。また、礎板の出土状況から、その据え付け方は、部材を井桁状に組み、根がらみ(枕木)で支柱を支持するタイプ(a類)、1枚の板材を敷き支柱を支持するタイプ(b類)、1枚の部材中央を挟んで支柱を納めて支柱を支持するタイプ(c類)に分類可能である(第45表)。これらの礎板は法量、形状とも多様であることから、大部分が転用材と考えられ、樹種はスダジイを多用する他、少数だがタブノキ属、カツラの材が認められる。繰り返しとなるが、建物の北半が第8次調査A区に延び、不十分な調査となったことから、現段階での建物復元案であることに留意されたい。

SI551・552（遺構：第123・124・126図、遺物：第130・135図）

H・I-21・22区で検出したSD504を外周溝、P506等の6基(第8次調査A区含む)を上屋主柱穴と考えた平地建物である(第123・124図)。第8次調査区で検出した外周溝に掘り返しが認められることから、2時期を想定、

第44表 A区下層建物規模等一覧表

平地建物

遺構名	図No.	グリッド名	主柱					外周溝					備考 (下線を付した遺構は礎板あり)
			柱配置	柱穴平面形態	A区柱穴径(cm)	礎板の有無	礎板分類	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	上幅(m)	深さ(cm)	
SI551・552	124・126図	H-I-20・21	6本 (P513他)	略円形 略楕円形	30～60	なし	-	不整形	SD504 外縁 約15.0 内縁 約11.8	SD504 外縁 約12.8 内縁 約10.3	1.7～2.2	20～26	SI502(外周溝幅広)よりSI501(同幅狭)が古。SD505・508・512は排水溝の可能性あり。8次A区に延びる。主柱穴面積24.6㎡ 主柱穴間隔3.0～3.2m
SI553	125・126図	H-I-20・21	e環:6本柱	略円形 略楕円形	P504 60～80 P585 70～80 P507 95～115	あり (4/6)	d類	楕円形か	SD511 約13.0	SD511 約10.5	0.8～1.5	9～36	主柱建て替え。8次A区に延びる。 6本柱:P595・504・585・507・594・(8次P2163) 主柱穴面積14.8㎡ 主柱穴間隔2.3～2.6m
			f環:6本柱	略楕円形	P512 100～120	あり (5/6)	b類か						6本柱:P583・506・512・(5次P2113・2081・2158) 主柱穴面積31.8㎡ 主柱穴間隔3.3・3.5・4.0m
SI554	125・126図	H-I-20・21	a環:8本柱+4本柱	8本柱 (8次柱穴 隅丸方形) 4本柱 不整形円形か	8本柱 (60～70) 4本柱 P501 約100	あり (8本柱7/8 4本柱 4/4)	8本柱: a類 4本柱 d類	略円形か	SD502 外側 約18 内側 約13	SD502 外側 約18 内側 約11	3.2～5.1	8～28	主柱3回建て替えか。8次A区に延びる。 8本柱:P502・581・586・592・(8次P2114・2117・2124東側・2120) 主柱穴面積41.8㎡ 主柱穴間隔2.7・3.2m 4本柱:P501東側・587・593・(8次P2122) 主柱穴面積11.0㎡ 主柱穴間隔3.3～3.5m
			b環:8本柱+4本柱	8本柱 略円形 4本柱 不整形円形か	8本柱 約80 4本柱 P588 60～80	あり (8本柱5/8 4本柱 4/4)	8本柱: a類 4本柱 c類						8本柱:P582・584・(4次柱穴)・(不明)・(8次P2124・2116・2118)・(不明) 主柱穴面積47.1㎡ 主柱穴間隔2.6～3.2・3.9・4.3m 4本柱:P501西側・P588・P593・(8次P2122) 主柱穴面積9.3㎡ 主柱穴間隔2.9・3.2m
			c環: ?+4本柱	(8次柱穴 略円形か)	(50～70 か)	あり (3/4)	b類か						4本柱:(不明)・P589・(8次P2164・8次ピット) 主柱穴面積8.7㎡ 主柱穴間隔2.8・3.1m
			d環:8本柱+?	不明	(60～100 か)	あり (5/8)	b～d類						8本柱:P590・596・597・(8次柱穴・不明)・P2117・不明・P2121 主柱穴面積18.3㎡ 主柱穴間隔1.7～2.5m

※ 礎板分類 a類:部材を井桁に組み、根がらみ(枕木)で主柱を支持。b類:幅広の板材で主柱を支持。
c類:幅広の板材中央の抉りに主柱を納めて、主柱を支持。d類:aまたはb類。

掘立柱建物

遺構名	図No.	グリッド名	建物構造	柱配置(間)	床面積(㎡)	桁行長(m)	桁行柱間寸法(m)	梁行長(m)	梁間柱間寸法(m)	主軸方位	柱穴の平面形態	柱穴の規模(cm)	柱根の有無	備考
SB551	124図	H-I-21	側柱	1間×1間か	(14.4)	(4.80)	(4.80)	3.50	(西梁)3.50	N-74° E	不整形	50～64	あり	P503・505, 8次A区に延びる。P503に柱根(1393)遺存

外周溝SD504古段階をSI551、同新段階をSI552とした。復元した6本主柱は、その位置関係からSI551に属する可能性が高く、SD504新段階の主柱配置は判然としない。

主柱穴は、北西-南東方向が若干長い平面六角形に配され、主柱穴間隔が3.0～3.2m、主柱穴に囲まれた範囲が約24.6㎡を測る。主柱穴は、柱根が残存するP513で平面略楕円形を呈し、長径約60cm、短径約30cm、深さ約30cmを測り、柱根はベース土中に沈み込む。SI553・554とは異なり、主柱の沈降防止に礎板を用いない他、炉跡と判断できる焼土等は確認できなかった。外周溝SD504は平面不整形円形を呈し、南東側に開口部が想定できる。前述のとおり2時期に分かれ、新段階の規模は溝外縁で長径約15.0m、短径約12.8m、溝内縁で長径約11.8m、短径約10.3m、上幅1.7～2.2m、深さ20～26cmを、それぞれ測る。また、SD504古段階の掘り方は、南辺で部分的に底付近が残存し、幅の狭い断面逆台形を呈する。残存部で、幅30～50cm、深さ5～12cmを測り、覆土は西側が淡灰色シルトと灰褐色シルトの交互堆積層、南側でベース土粒と多くの炭粒が混ざ

第45表 A区下層平地建物礎板一覧表

※ 礎板分類 a類：部材を井桁に組み、根がらみ(枕木)で主柱を支持。b類：幅広の板材で主柱を支持。c類：幅広の板材中央の抉りに主柱を納めて、主柱を支持。d類：aまたはb類。

建物番号	主柱配置	遺構番号	礎板の標高(m)		礎板分類	段	取上げ番号・群	礎板の組み方	遺物実測番号
			底面	礎板上端					
SI553-e環	6本柱	P595	3.80	4.02	d類	3段目	No.66(G群)	板材1	G群取上No.66(1350、スタジイ板目)
						2段目	No.67~69-71(G群)	板材2・棒材2・接	G群取上No.69(1351、スタジイミカン割材)、G群取上No.69下(1352、スタジイ分割材)、G群取上No.71(1354、スタジイミカン割材)
						最下段	No.72(G群)	板材1	G群取上No.72(1353、スタジイ芯持板材)
		P504	3.98	4.06	d類	2段目	No.29~31(F群)	棒材3・離	F群取上No.29(1356、スタジイ分割材)、F群取上No.30(1355)
						最下段	No.32~34(F群)	棒材4・接	F群取上No.32(1357、スタジイミカン割材)
						2段目	No.36・37(N群)	板材3・離	N群取上No.36(1358)、N群取上No.37(1359、スタジイ分割材)
		P585	3.85	4.01	d類	最下段	No.38~40(N群)	板材2・接	N群取上No.39(1360、スタジイ柱目)、N群取上No.40(1361、スタジイ柱目)
						P594	3.90	4.00	d類
SI553-f環	6本柱	P583	3.88	4.10	d類	2段目	No.26~28(D群)	棒材4・離	—
		P506	3.86	3.99	b類か	最下段	No.27・28(D群)	棒材2・離	—
SI554-a環	8本柱	P502	3.92	4.01	a類	2段目	No.19(E群)	棒材1(枕木)	E群取上No.19(1365)
						最下段	No.20~22(E群)	棒材2・板材1・接	E群取上No.21(1366)
		P581	3.96	4.16	d類	最下段	No.15~18(A群)	棒材4・接	—
		P586	3.88	4.05	d類	最下段	No.46~48(M群)	棒材3・接	M群取上No.47(1367、スタジイ分割材)
		P592	3.90	3.99	d類	最下段	No.64、65(I群)	板材2	—
	4本柱	P501東側	3.88	4.08	d類	2段目	No.78~80(C群)	棒材3・接	C群取上No.78(1369、スタジイ分割材)、C群取上No.79(1368、スタジイ半裁木)、C群取上No.80(1376、スタジイ分割材)
						最下段	No.81・82(C群)(No.77より古)	棒材2・接	C群取上No.81(1370、スタジイ分割材)
		P587	3.86	4.06	d類	2段目	No.41(L群)	棒材1	—
						最下段	No.42~45(L群)	棒2・板2・接	—
						P593	3.85	3.97	d類
SI554-b環	8本柱	P582	3.95	4.10	a類	2段目	No.7・8(B群)	棒材1(枕木か)	—
						最下段	No.9~14(B群)	棒材5・離	—
		P584	3.83	4.01	a類	2段目	No.1(O群)	棒材1(枕木か)	O群取上No.1(1373、タブノキ属分割材)
	4本柱	P501西側	3.71	3.94	c類	最下段	No.77(C群)(No.78~82より新)	くり抜き板材1	—
						最下段	No.49(K群)	くり抜き板材1	K群取上No.49(1377、スタジイ分割材)
		P588	3.68	3.99	c類	最下段	—	くり抜き板材1	北排水溝(1378)
						P593	—	—	c類
SI554-c環	4本柱	P589	3.99	4.05	b類か	(3段目)	No.50・51(J群)	棒材2・離(副木か)	J群取上No.51(1379、スタジイ分割材)
						2段目	No.52(J群)	板材1	—
						最下段	No.53・54(J群)	棒材2・離	J群取上No.54(1380、スタジイ分割材)
SI554-d環	8本柱	P590・591	3.88	4.02	b類か	2段目	No.55(I群)	板材1	I群取上No.55(1387、スタジイ板目)
						最下段	No.56~60(I群)	棒材5・接	I群取上No.57(1386、スタジイ分割材)
	8本柱	P596	3.77	3.92	b類か	4段目	No.75・76(G群)	板材1	G群取上No.76(1391、スタジイ分割材)
						3段目	No.74(G群)	板材1	G群取上No.74(1390、スタジイ分割材)
						2段目	No.73(G群)	板材1	G群取上No.73(1389、スタジイ分割材)
						最下段	No.70(G群)	板材2・離	G群取上No.70(1388、スタジイ分割材)
	4本柱	P597	3.90	4.16	c・d類	—	No.83~87	—	取上No.83(1384)、取上No.84(1385、スタジイ半裁木)、取上No.85(1382、カツラ分割材)、取上No.86(1381、カツラミカン割材)、取上No.87(1383、スタジイ柱目)

る暗灰色粘質土となる(第126図土層10'、11~13・16)。古段階の外周溝内縁と主柱穴の間隔は、2.5~3.3mを測る。なお、SD505、SD508・12は、外周溝に接続する排水溝の可能性をもつ。

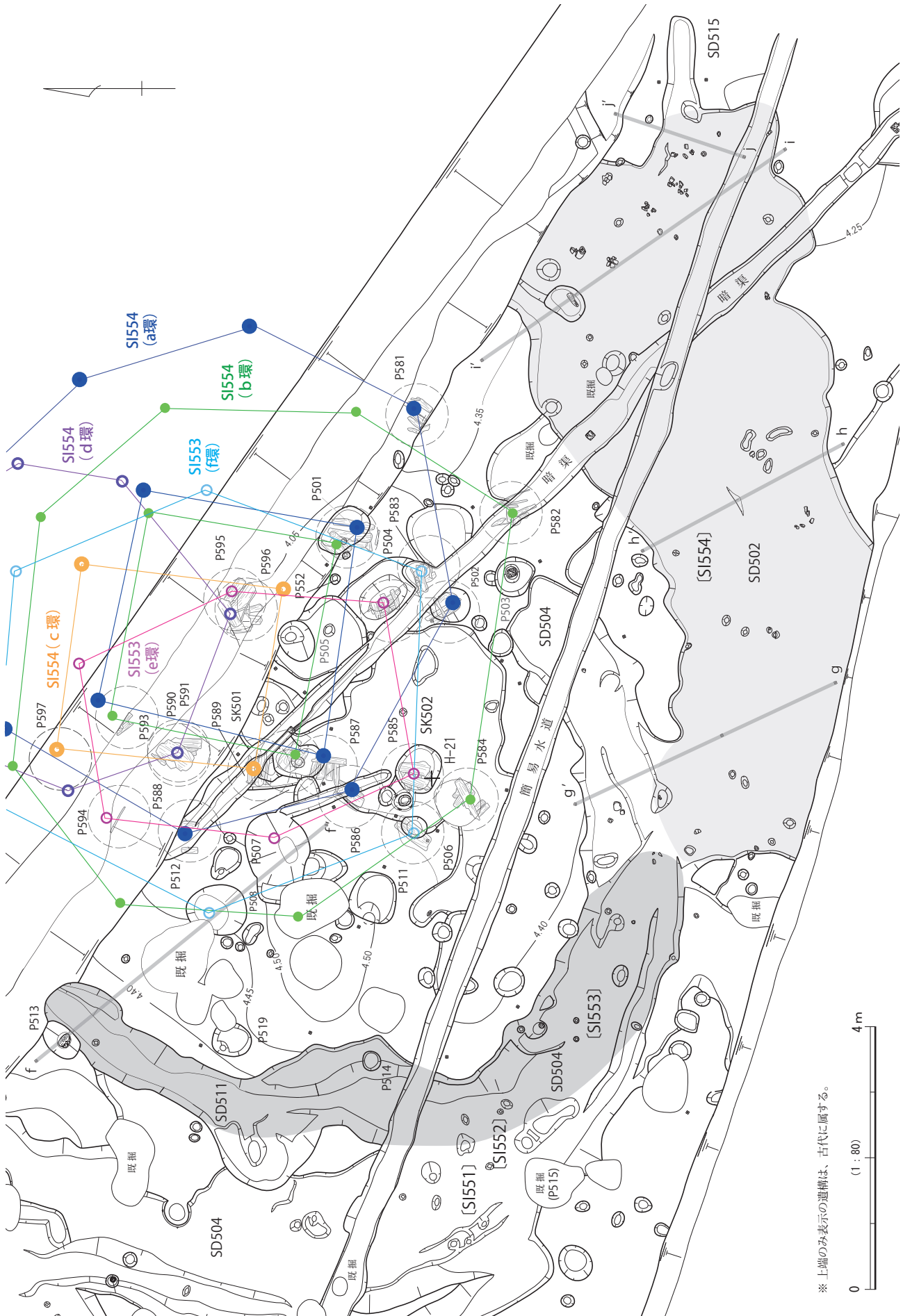
遺物は、SI551(SD504)出土の第130図1349、P513出土の第135図1394を図示した。1349は、弥生時代後期後半の大型器台で口径約42cmを測る。外面に円形浮文を貼り付け、磨滅が著しいため、調整は判然としない。柱根1394は長軸約25cmを測るスギの半裁材である。また、未図化だが、外周溝SD504から後期前半末頃~後期後半の土器片が出土、後期後半の土器が主体となる。

SI553 (遺構：第123・125・126図、遺物：第130・131図)

H・I-20・21区で検出したSD511を外周溝、P504等の6基を主柱穴と考えた平地建物で、外周溝と上屋の主軸方位、位置関係に整然としない部分を残す。上屋主柱穴は平面六角形に配置され、e環、f環の建替えを想



第124図 A区下層S1551・552、SB551平面図 (S=1/80)

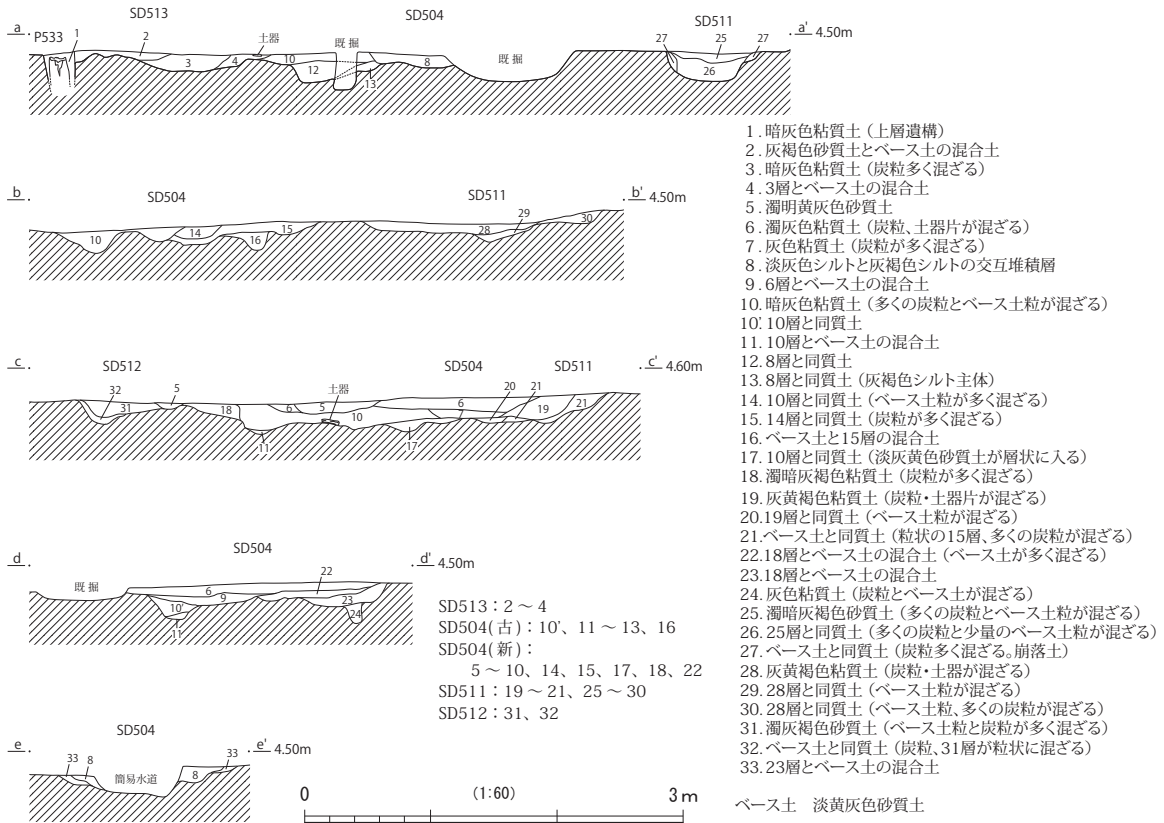


第125図 A区下層SI553・554平面図(S=1/80)

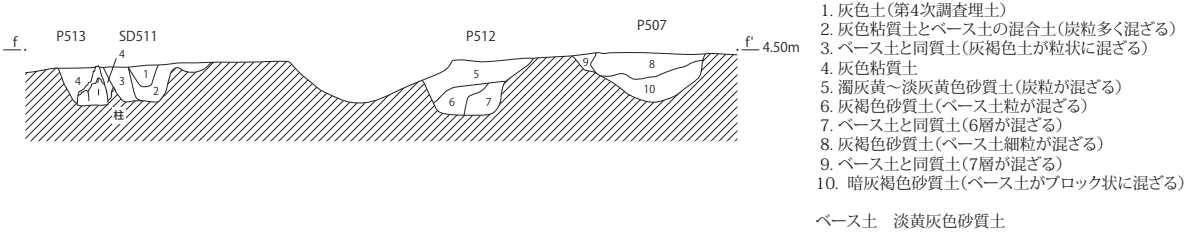
※上端のみ表示の遺構は、古代に属する。

0 4m
(1:80)

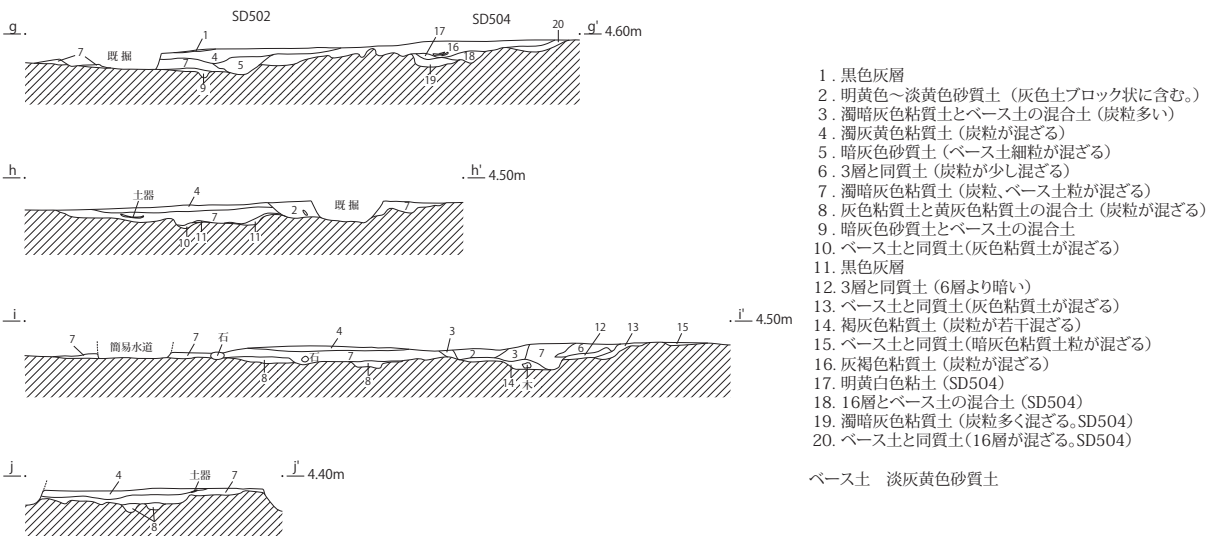
I-20区SD504・511～513



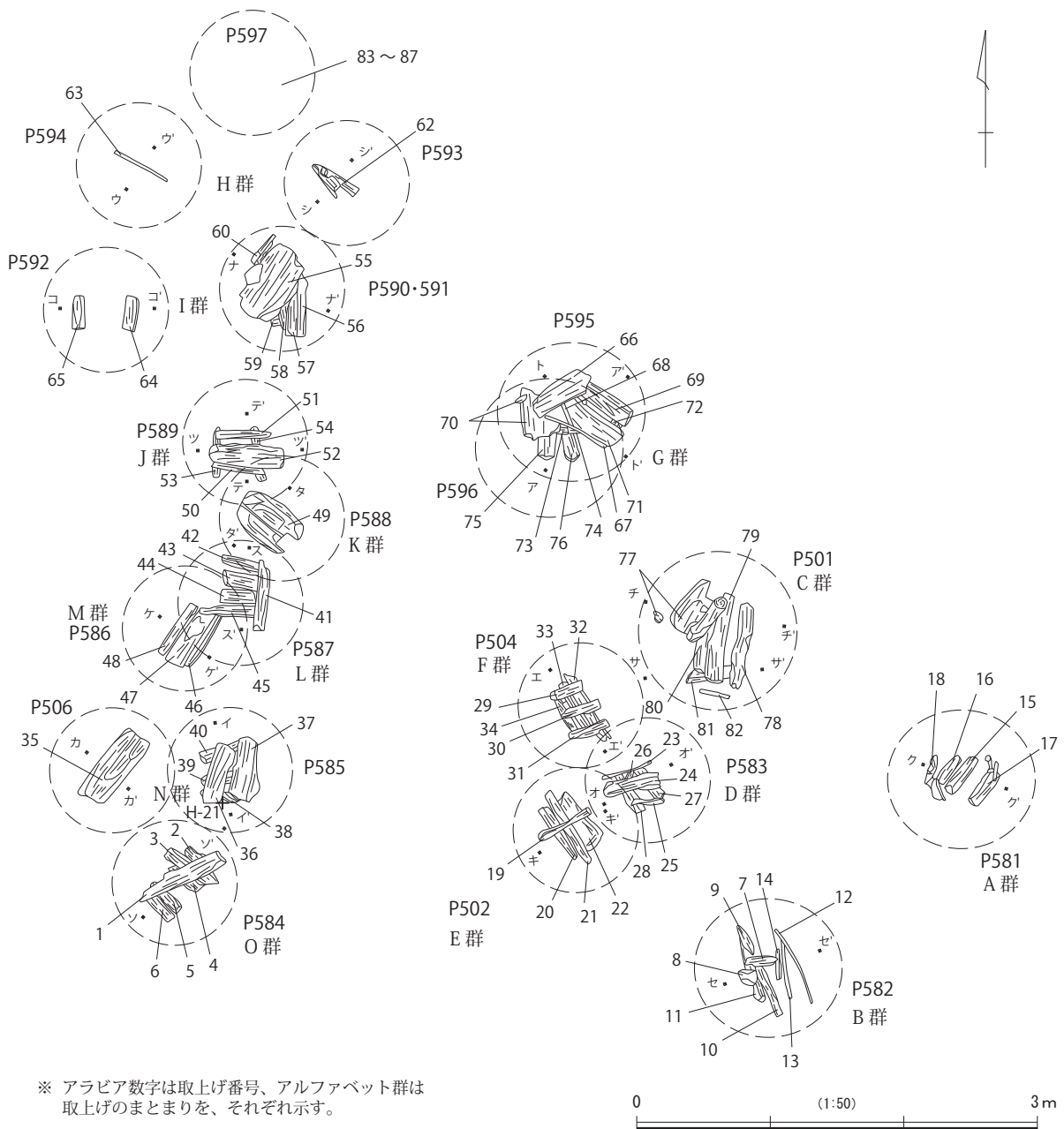
I-20区SD511



H・I-20・21区SD502



第126図 A区下層土層断面図1 (S=1/60)

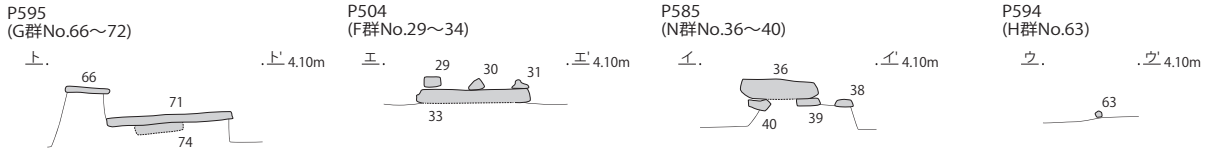


第127図 A区下層平地建物礎板出土状況平面図 (S=1/50)

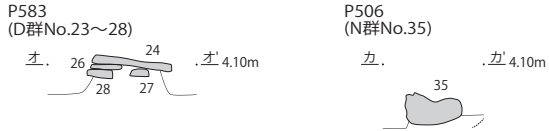
定した(第123・125図。前後関係不明)。また、第5次調査区では、柱根は抜き取られていたものの、P507・512以外の6基の主柱穴に礎板が比較的良好に遺存していた。

e環の主柱穴は、P595・504・585・507・594等を想定した(第44表)。北北西-南南東方向が長い平面六角形に配され、主柱穴間隔が2.3～2.6m、主柱穴に囲まれた範囲は約14.8㎡を測る。主柱穴の平面形態は、略円形または略楕円形を呈し、P504が径60～80cm、深さ約50cm、P507が長径約115cm、短径約95cm、深さ約40cmを測る。P504・585・595等の4主柱穴に遺存した礎板は、部材を井桁状に組む点で共通するものの、材の大きさや本数は多様である。f環の主柱穴は、P583・506・512等を想定した(第44表)。南北方向が若干長い平面六角形に配され、主柱穴間隔が3.3m、3.5m、4.0m、主柱穴に囲まれた範囲は約31.8㎡と、e環より大型の上屋となる。主柱穴は、P512が平面略楕円形を呈し、径100～120cm、深さ約45cmを測る。4基の主柱穴に遺

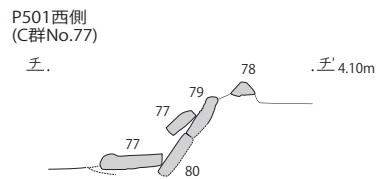
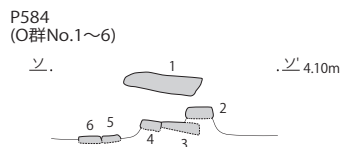
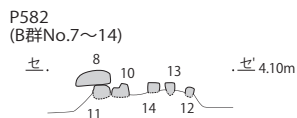
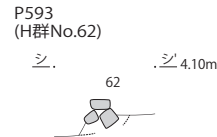
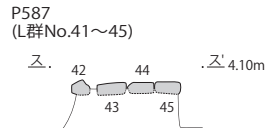
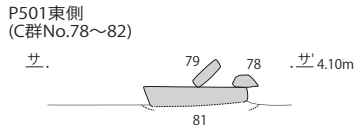
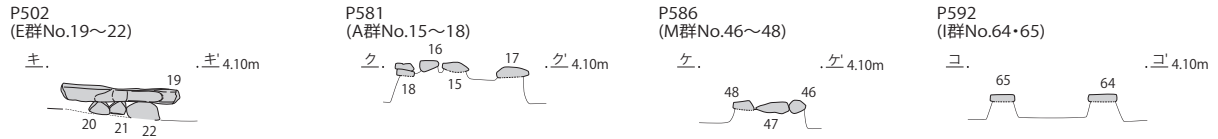
SI553-e環



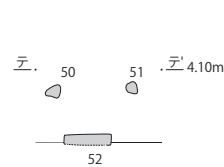
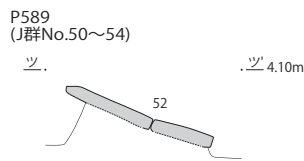
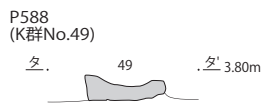
SI553-f環



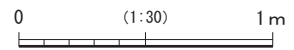
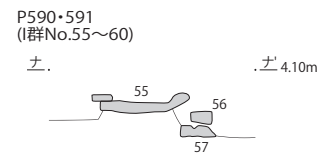
SI554-a環



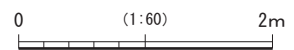
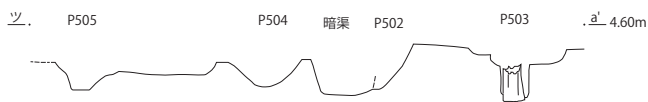
SI554-c環



SI554-d環



SB551



第128図 A区下層平地建物礎板、SB551断面図 (S=1/30・1/60)

存した礎板は、P583が部材を井桁状に組み上げるのに対して、P506は厚さ約15cmを測る1本のタブノキ属の半裁材を用いる。なお、e環・f環に伴う炉跡と判断できる焼土等は確認できなかった。

外周溝SD511は南西辺延長約5.5mが残存、南側でSD502と重複する。平面形態は、第8次調査区の成果から楕円形を呈するものと考えられる。開口部は判然とせず、長径約13.0m、短径約10.5m、上幅0.8～1.5m、深さ9～36cmを測る。覆土は北側が濁暗灰褐色砂質土を、西側が灰黄褐色粘質土を、それぞれ基調とし、いずれも多くの炭粒が混ざる(第126図土層19～21、25～30)。また、外周溝SD511と支柱穴e環・f環の間隔は3.0～3.5m程度を測り、遺構の切りあい関係からSD504(I551・552)より古く位置付けられる(第126図断面c-c'土層18～20)。

遺物は、e環に属するP595礎板1350～54、P504礎板1355～57、P585礎板1358～61、f環に属するP506礎板1362を図示した。樹種同定を実施したe環の材は、すべてスダジイとの結果を得ている。1357は、1本の部材を2つに切断し、柱穴底面に並べて敷き置く。1362は、長さ61.9cm、幅23.5cm、厚さ15.6cmを測り、建築材を転用したと考えられる。なお、外周溝SD511から土器は出土しなかった。

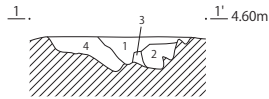
S1554 (遺構：第123・125・126図、遺物：第131～135図)

H-I-20・21区で検出したSD502を外周溝とし、上屋主柱穴を平面正方形に4本と、その外周に平面八角形の支柱穴を配置する大型の上屋(a・b環(・c環))と、上屋主柱穴を平面八角形に配置する小規模な上屋(d環)を想定した。建替えと考えられるa～d環の前後関係は不明であり、d環は外周溝SD502との位置関係から、SD502を外周溝としない別の建物の可能性をもつ(第123・125図)。また、第5次調査区で検出した支柱穴は、柱根は抜き取られるものの、礎板が比較的良好に遺存する。

a環の支柱穴は、中央の4本支柱穴としてP501東側・P587・593等を、外周の8本支柱穴としてP502・581・586・592等を想定した(第44表)が、4本支柱穴が外周中央に位置しない点で検討の余地を残す。中央の4本支柱穴は、ややゆがんだ正方形に配され、支柱穴間隔が3.3～3.5m、支柱穴に囲まれた範囲は約11.0㎡を測る。支柱穴の平面形態は円形を基調とし、P501で径約100cm、深さ約60cmを測る。4支柱穴すべてに遺存した礎板は、部材を井桁状に組む点で共通する。外周の8本支柱は、ややゆがんだ八角形に配され、支柱穴間隔が2.7mまたは3.2m、支柱穴に囲まれた範囲は約41.8㎡を測る。支柱穴の平面形態は、第8次調査区柱穴が隅丸方形を呈する。ほとんどの支柱穴に1段のみ平行して敷き置かれた礎板が遺存し、P502には、礎板上に支柱と組み合わせる枕木(第131図1365)が残る。b環の支柱穴は、中央の4本支柱穴としてP501西側・P588・593等を、外周の8本支柱穴としてP582・584等を想定した(第44表)。中央の4本支柱は、ほぼ正方形に配され、柱穴間隔は東西梁が2.9m、南北梁が3.2m、支柱穴に囲まれた範囲が約9.3㎡と、a環より若干小振りである。支柱穴の規模は、P588が径60～80cm、深さ約70cmを測り、礎板は中央を方形に削り込んだ大型材(第132図1376～78)を用いる点で共通する。外周の8本支柱穴の配置は、ややゆがんだ八角形を呈し、支柱穴間隔は南北梁が3.9m・4.3m、その他の梁が2.6～3.2mを、支柱穴に囲まれた範囲は約47.1㎡を測る。支柱穴の平面形態は略円形を基本にすると考えられ、径約80cmを測る。遺存するP582・584の礎板は井桁状に組まれる。c環は、P589等からなる中央の4本支柱穴を復元したものである。柱穴間隔は東西梁が3.1m、南北梁が2.8m、支柱穴に囲まれた範囲は約8.7㎡を測る。第8次調査支柱穴は平面略円形を呈し、径50～70cmを測る。P589で確認した礎板は、底面に1枚の板材を敷き、両脇に細い材を配することで支柱の傾きを防ぐ効果を期待した可能性をもつ(図版59)。d環は、P590・596・597等で構成される平面不整八角形の配置を想定したものであり、大部分は第8次調査区に位置する。支柱穴間隔は1.7～2.5mと乱れ、支柱穴に囲まれた範囲は約18.3㎡を測る。P590・596に礎板が残り、1枚の大型材で支柱を支持するタイプと考えられる。

幅が広い外周溝SD502は、南東辺延長約10mを検出した。平面形態は、第8次調査区成果から略円形を呈するものと考えられる。開口部は判然とせず、規模は溝外縁で長径約18m、短径約18m、溝内縁で長径約13m、

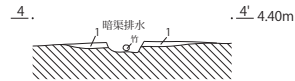
I-21区SK501



1. 灰色粘質土 (炭粒が混ざる)
2. 1層と同質土 (ベース土細粒が混ざる)
3. 1層とベース土の混合土
4. 濁灰色粘質土とベース土の混合土 (炭粒が多く混ざる)

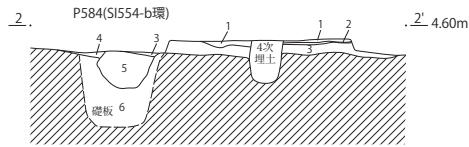
ベース土 淡灰黄色砂質土

H-21・22区SK503



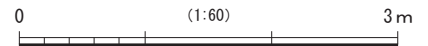
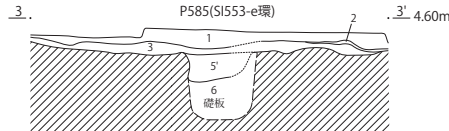
1. 濁灰黄色粘質土 (包含層と同質。炭粒が混ざる)

H・I-20・21区SK502

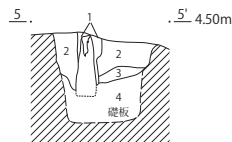


1. 濁灰色砂質土 (ベース土粒、炭粒が多く混ざる)
2. 黒色灰層 (ワラカ)
3. 灰色砂質土 (ベース土、炭粒が多く混ざる)
4. ベース土と同質土 (灰色砂質土粒が若干混ざる)
5. ベース土と同質土 (灰色砂質土粒と多くの炭粒が混ざる)
- 5'. 5層と同質土 (5層より暗い)
6. ベース土と同質土 (炭粒が少量混ざる)

ベース土 淡灰黄色砂質土



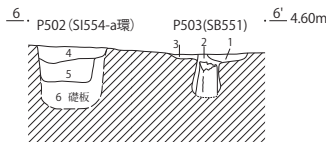
I-21区P501(SI554-b環)



1. 灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)
2. 灰色砂質土とベース土の混合土
3. 濁灰黄色砂質土 (1層が混ざる)
4. ベース土と同質土 (炭粒が少量混ざる)

ベース土 明黄色粘質砂

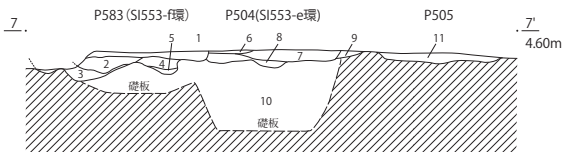
H-22区P502・503



1. ベース土と同質土 (灰色砂質土が混ざる)
2. 濁灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)
3. ベース土と灰色砂質土の混合土
4. 2層と同質土
5. 3層と同質土
6. ベース土と同質土 (炭粒が少量混ざる)

ベース土 明黄色粘質砂

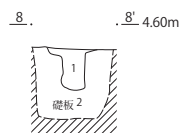
I-21区P504・505



1. 濁灰色砂質土 (炭粒、灰層が混ざる)
2. 淡灰黄色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
3. 淡灰黄色砂質土と灰色砂質土の混合土 (灰が多く混ざる。土器片出土)
4. 2層と同質土 (灰色土粒が多く混ざる)
5. 濁暗灰色砂質土 (炭粒が多く混ざる)
6. 灰色砂質土 (炭粒が多く混ざる)
7. 6層とベース土の混合土
8. 灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)
9. 灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)
10. ベース土と同質土 (炭粒が少量混ざる)
11. 9層と同質土

ベース土 淡灰黄色砂質土

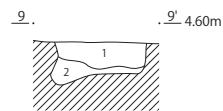
I-20区P506(SI553-f環)



1. ベース土と濁灰色砂質土の混合土
2. ベース土と同質土 (炭粒が少量混ざる)

ベース土 淡黄灰色砂質土

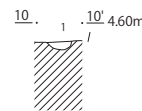
I-20区P511



1. 灰褐色粘質土とベース土の混合土 (固くしまり、炭多く混ざる)
2. ベース土と同質土 (灰褐色砂質土粒が混ざる)

ベース土 淡黄灰色砂質土

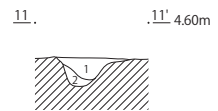
I-20区SD503



1. 濁灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)

ベース土 淡黄灰色砂質土

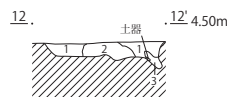
I-20区SD505



1. 濁灰褐色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
2. 1層とベース土の混合土

ベース土 淡黄灰色砂質土

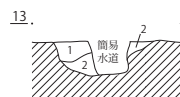
I-19区SD507



1. 濁黄灰色砂質土 (2層が粒状に混ざる。炭粒が目立つ)
2. 濁灰黄色砂質土 (ベース土と1層が粒に混ざる)
3. 灰色粘質土

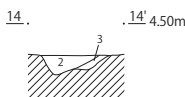
ベース土 淡黄灰色砂質土

I-19区SD508・512

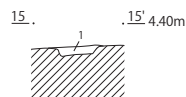


1. 暗灰褐色粘質土
2. ベース土と1層の混合土 (炭粒多く混ざる)
3. 灰色土

ベース土 淡黄灰色砂質土



H-22区SD515



1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒、ベース土粒が混ざる)

ベース土 淡黄灰色粘質土

第129図 A区下層土層断面図2 (S=1/60)

短径約11m、上幅3.2～5.1m、深さ8～28cmを測る。覆土は炭粒が混ざる濁暗灰～灰黄色粘質土を基調とし、部分的に黒色灰層が薄く堆積する(第126図土層1・11)。また、外周溝SD511と、最も近接するb環支柱穴の間隔は1.5～3mを測り、遺構の切りあい関係からSD504(I551・552)より新しく位置付けられる。

遺物は、外周溝SD502出土の1363・64、a環に属する礎板1365～71、b環に属する石器1372、柱根1375、礎板1373・74・76～78、c環に属する礎板1379・80、d環に属する礎板1381～91を図示した。樹種同定を実施した礎板は、1373(タブノキ属)、1381・82(カツラ)以外は、スタジイとなる。弥生時代後期後半の高坏1363は口径30.4cmを測り、口縁部が緩やかに外反する。内外面とも磨滅が著しい。緑色凝灰岩製の管玉1367は長さ1.6cm、径0.8cm、孔径0.2～0.25cm、重さ1.6gである。穿孔中心軸は若干ずれる。a環の礎板1365は、支柱をはめ込むため両側面に抉りを入れる。b環に属するP582出土の1372は凝灰岩製の矢柄研磨器片と考えられる。径0.8cmの溝を穿ち、溝面はきわめて平滑である。P501出土の柱根1375は径約18cmを測るカツラ材である。b環4本支柱の礎板1376～78は、長さ40cm以上、厚さ8cm以上を測り、支柱を支持するために材中央を方形に刳り込む。d環に属するP597の礎板は、比較的しっかりとした材を用いる。P590・591の礎板1387は、枝部分の粗い切断痕を残す。礎板1388は建築部材を転用する。なお、外周溝SD502出土土器は、やや古相の土器が少量混ざるものの、後期前半に属する土器が大部分を占める。

SB551 (遺構：第124・128図、第44表、遺物：第135図、第49表)

H・I-21区で復元した1×1間(14.4㎡)の小規模な掘立柱建物で、第8次調査A区にのびる。建物主軸方位はN-74°Eを示し、柱間寸法は、桁行が約4.8m、梁間(P503・505間)が3.50mを測る。柱穴の平面形態は不整形を呈し、P503が径54～62cm、深さ35cmを、P505が径52～62cm、深さ23cmをそれぞれ測る。柱穴覆土はベース土粒が混ざる濁灰色砂質土を基本とする。P503に柱根が残り、P505に径15cm前後の柱根痕跡が残る他、礎板を用いない。遺物は、P503柱根1393を図示した。1393は長軸15.0cm、短軸5.8cmを測るモクレン属の半裁材である。なお、土器は出土していない。

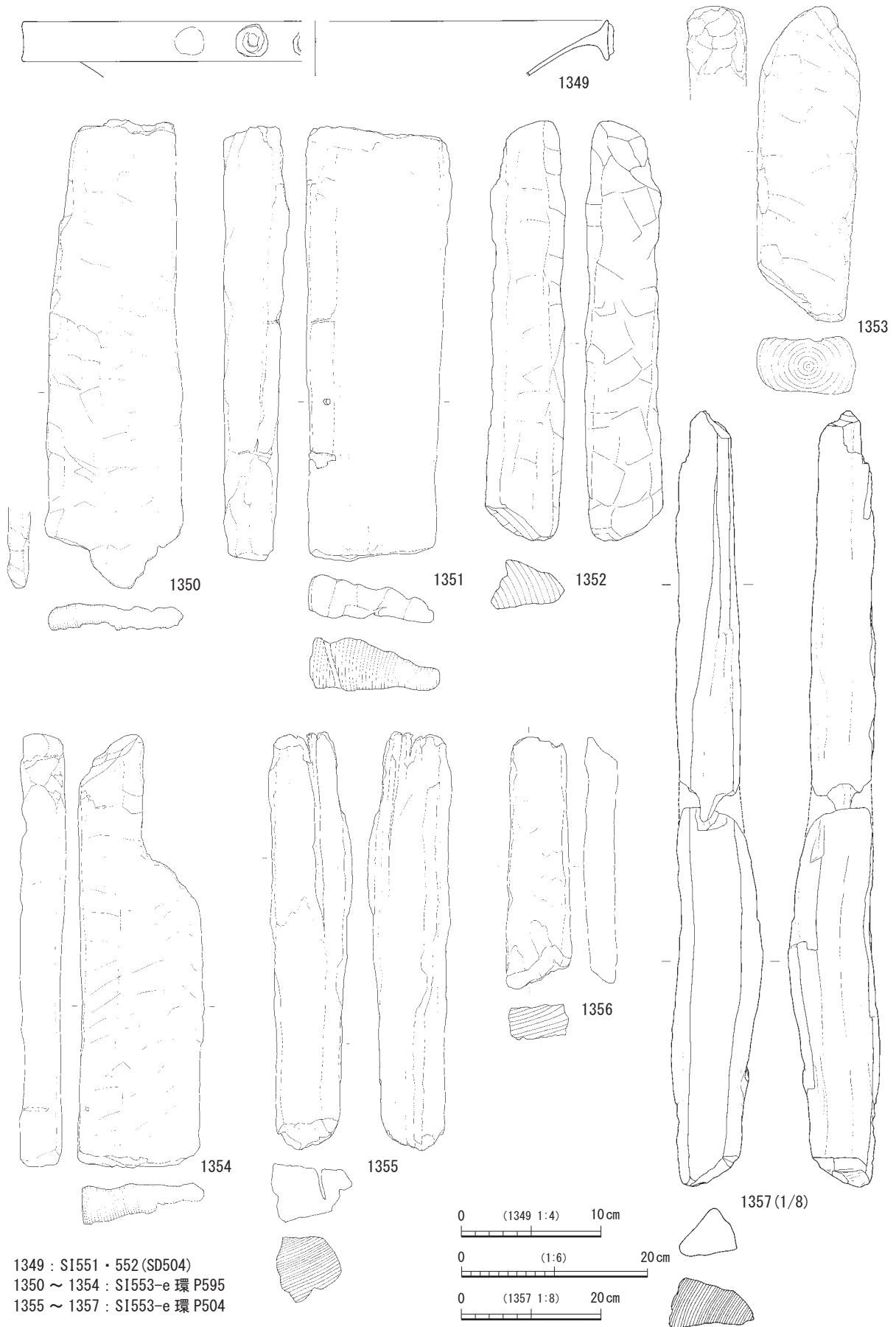
2 土坑、ピット(遺構：第120～122・129図、第46表、遺物：第135図、第49表)

SK501 I-21区で検出土坑で、平面形態は略円形と考えられる。長径112cm、短径60cm以上、深さ20～25cmを測り、底面は起伏をもつ。覆土は、炭粒やベース土粒が混ざる灰色粘質土を基調とする。少量の弥生土器が出土したにとどまる。

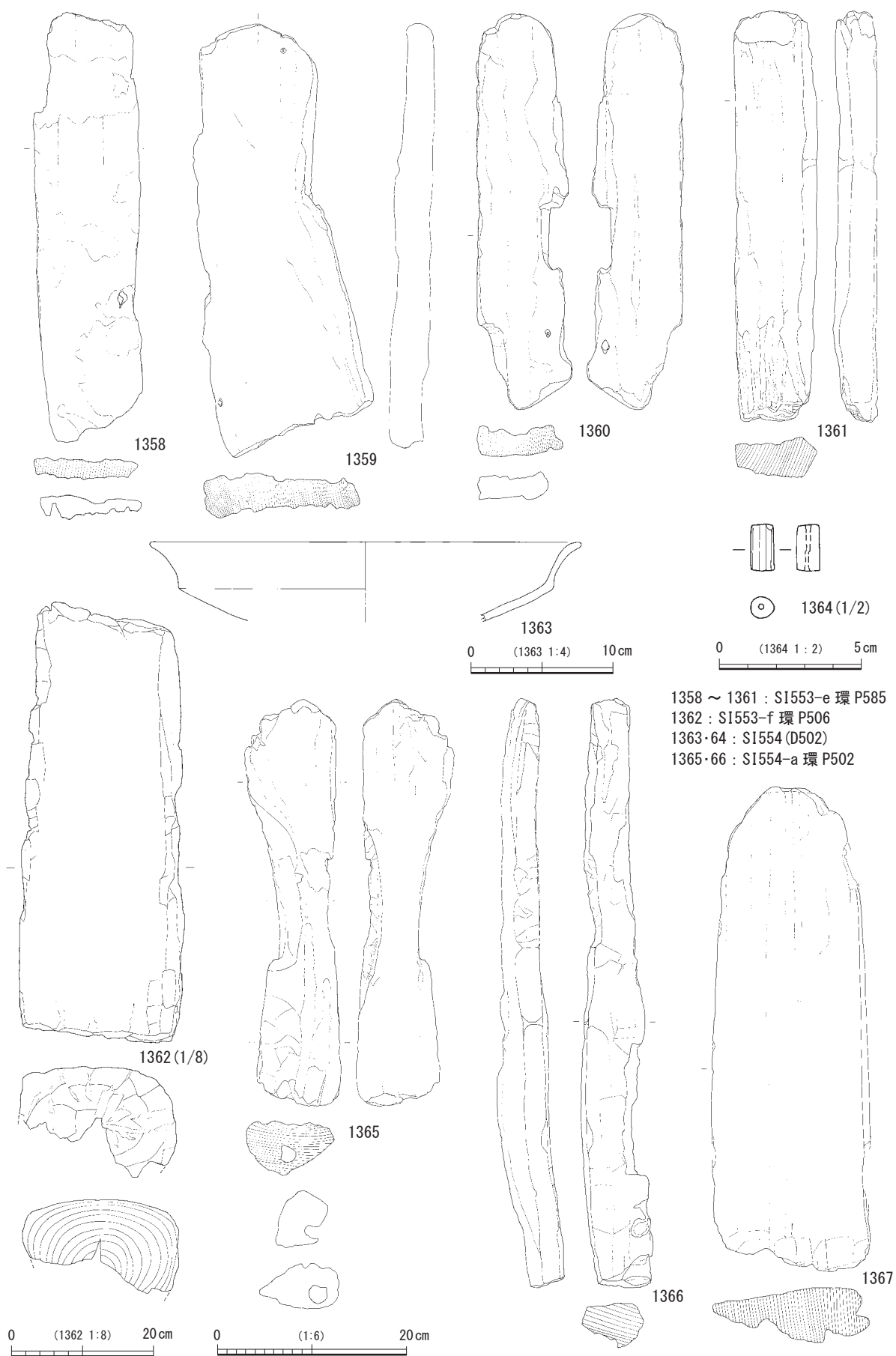
SK502 H・I-20・21区で検出した平面不定形な落ち込みである。長軸320cm、短軸約300cm、深さ15～22cmを

第46表 A区下層 SK・SD 規模等一覧表

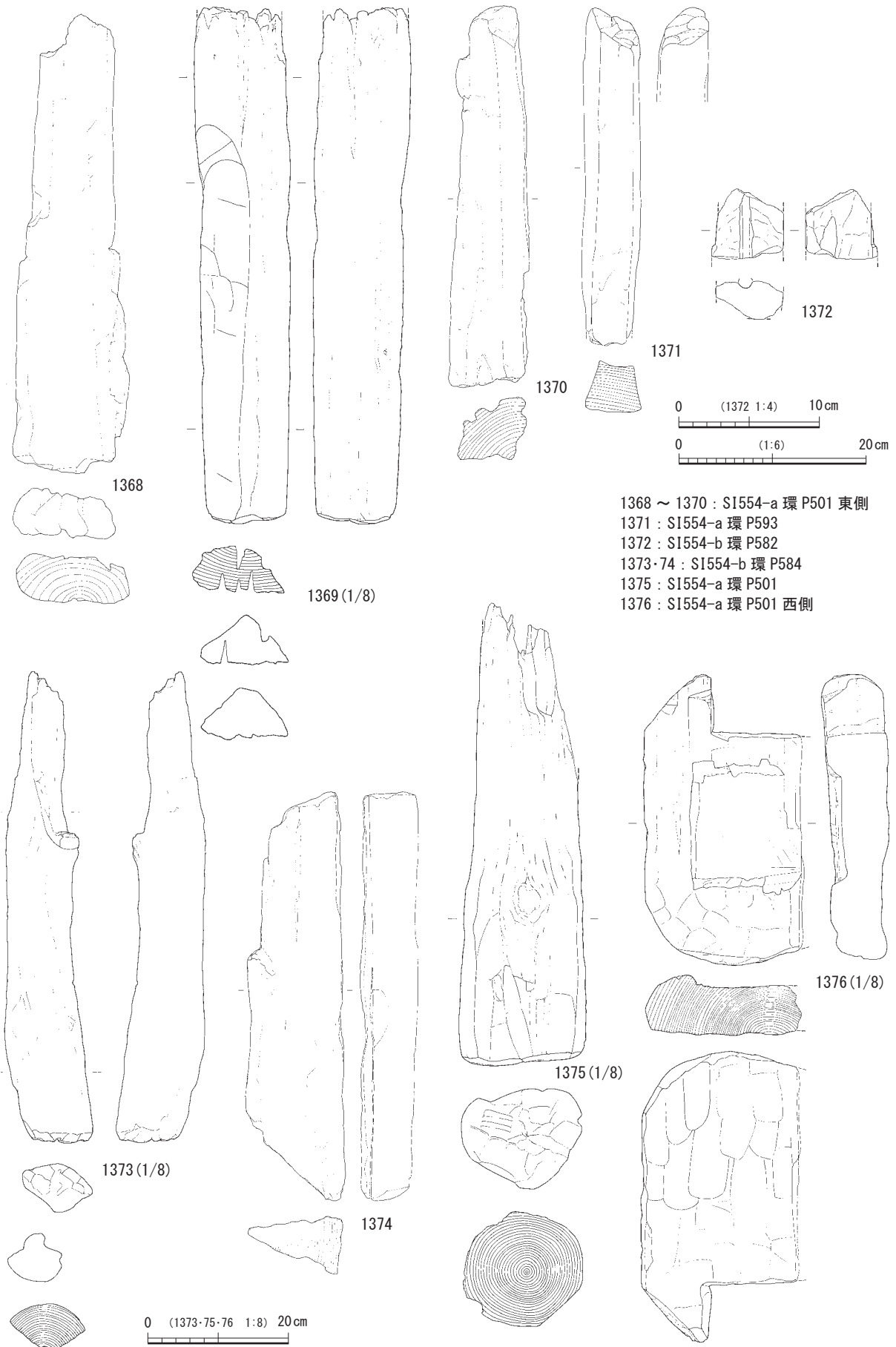
遺構名	グリッド名	平面形	規模(cm)			覆土土層	備考
			長軸	短軸	深さ		
下層SK501	I-21	略円形か	112	60～	20～25	第129図1-1'	底面起伏
下層SK502	H・I-20・21	不整形	320	約300	15～22	第129図2-2'・3-3'	
下層SK503	H-21・22	不整形	170～	120	4	第129図4-4'	報告時に新番号付与
下層SD503	I-20・21	直線	130	20～24	5	第129図10-10'	P507より新
下層SD505	I-20	直線	330～	50～66	22	第129図11-11'	SD504と連続か
下層SD507	I-19	やや屈曲	310～	60～80	10～16	第129図12-12'	SD508より古
下層SD508・512	I-19	屈曲	550～	50～70	5～28	第129図13-13'・14-14'	SD509は欠番。南東端でSD504に接する
下層SD510	I-19	不整形	154	96	13～48	濁灰褐色粘質土	窪み。底面起伏
下層SD512	H・I-20	屈曲	770	64～70	10～28	第126図c-c'、第129図13-13'・14-14'	
下層SD513	I-20	直線	470～	110～170	14～20	第126図a-a'	
下層SD515	I-20	直線	150～	35～60	6	第129図15-15'	底面平坦。報告時に新番号付与。SD502と連続



第130図 A区下層出土遺物実測図1 (S = 1/4・1/6・1/8)



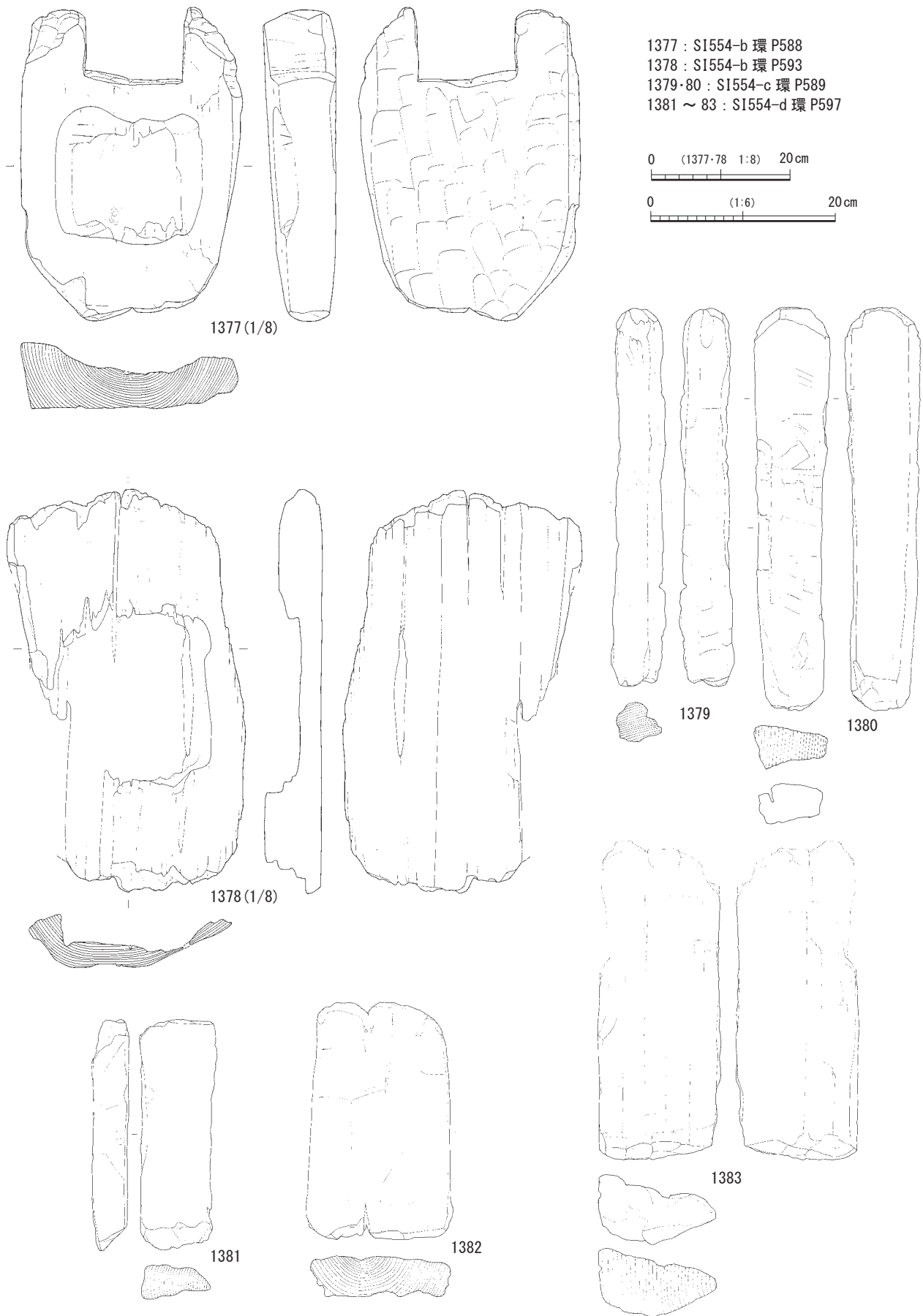
第131図 A区下層出土遺物実測図2 (S=1/2・1/4・1/6・1/8)



- 1368 ~ 1370 : SI554-a 環 P501 東側
- 1371 : SI554-a 環 P593
- 1372 : SI554-b 環 P582
- 1373-74 : SI554-b 環 P584
- 1375 : SI554-a 環 P501
- 1376 : SI554-a 環 P501 西側

第132図 A区下層出土遺物実測図3 (S=1/4・1/6・1/8)

第2節 A区下層

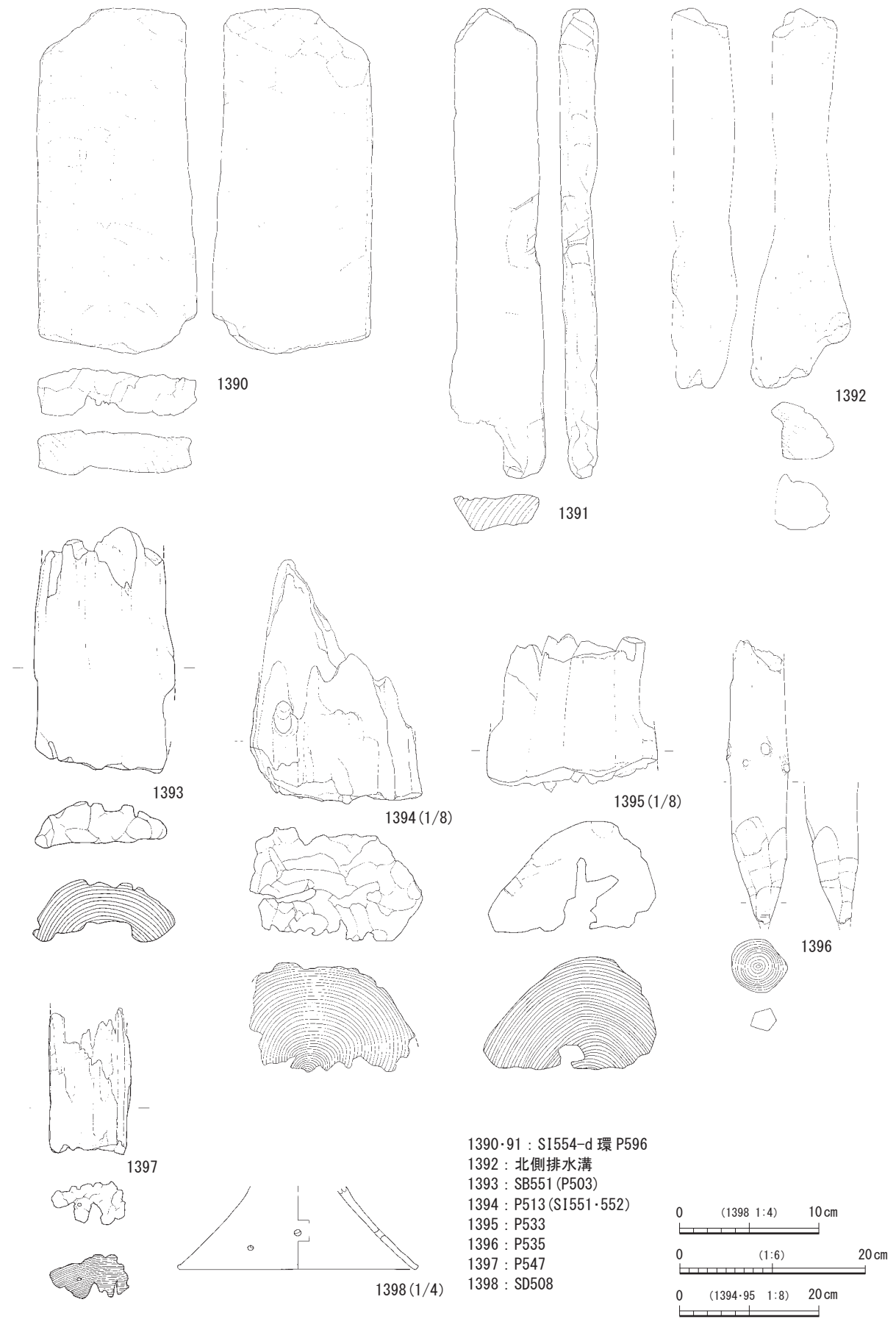


第 133 图 A 区下層出土遺物実測图 4 (S = 1/6・1/8)



1384・85 : S1554-d 環 P597
 1386・87 : S1554-d 環 P590・591
 1388・89 : S1554-d 環 P596

第134図 A区下層出土遺物実測図5 (S = 1/6・1/8)



第135圖 A区下層出土遺物実測図6 (S = 1/4・1/6・1/8)

測り、肩部は緩やかに立ちあがる。覆土は、底面から炭粒が多く混ざる灰色砂質土、薄い黒色灰層を挟んで濁灰色砂質土が堆積する。少量の弥生土器片が出土した。

SK503 H-21・22区で検出した土坑で、上部は削平を受ける。長軸170cm以上、短軸120cm、深さ4cmを測り、濁灰黄色粘質土を覆土とする。出土遺物はない。

ピット P511はI-20区に位置し、平面隅丸方形を呈する。一辺約70cm、深さ34cmを測り、灰褐色粘質土とベース土の混合土を基調とする。出土遺物はない。また、P533から柱根(第135図1395:スギ)、P535から杭(同図1396:マツ属複維管束亜属)、P547から柱根(同図1397:スダジイ)が出土、いずれのピットも上層遺構の可能性を残す。

3 溝 (遺構:第120～122・129図、第46表、遺物:第135図、第47表)

SD503 I-20・21区で検出した直線的な溝で、延長約130cm、幅20～24cm、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

SD505 I-20区で検出した断面逆台形を呈する溝で、SI552外周溝(SD504古段階)に接続する排水溝の可能性をもつ。幅50～66cm、深さ22cmを測り、覆土は多くの炭粒が混ざる濁灰褐色粘質土である。遺物は、弥生時代後期後半の壺片を含む摩耗した土器が少量出土したにとどまる。

SD507 I-19区で検出した浅い溝で、幅50～60cm、深さ5～14cmを測る。覆土は濁灰黄～黄灰色砂質土を基調とする。遺構の切りあい関係からSD508より古く位置付けられる。摩耗した弥生土器片が出土した。

SD508・12 H・I-19・20区で検出した溝で、屈曲しながら西方向に流下する。幅50～70cm、深さ5～28cmを測り、覆土は暗灰褐色粘質土を基調とする。SD508出土遺物のうち、第135図1398を図示した。1398は、古墳時代初頭～前期前半の土師器器台で、脚中位2ヶ所に径3mm・5mmの円孔を不規則に穿つ。SD512出土遺物はない。

SD513 I-20区で検出した浅い溝で、建物に伴う外周溝の可能性をもつ。延長470cm以上、幅110～170cm、深さ14～20cmを測り、覆土は灰褐～暗灰色粘質土を基調とする(第126図断面a-a')。遺物は、摩耗した弥生土器片が出土した。

SD515 I-20区で検出した浅い溝で、西側でSD502とつながる。幅35～60cm、深さ6cmを測り、覆土はSD502と共通する濁暗灰色粘質土である。出土遺物はない。

第47表 A区下層出土土器観察表

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
130	1349	H-20	SI551・552(SD504古段階)	弥生土器	器台	約42	-	(4.0)	橙	橙	a-1 S	並	不明	不明	口13/36	円形浮文あり。磨減顕著	C-276
131	1363	H-21	SI554(SD502取上げNo.8)	弥生土器	高坏	30.4	-	(5.6)	にぶい黄橙	にぶい橙	a-3 M	良	磨耗不明	磨耗不明	口6/36	磨減顕著	C-280
135	1398	I-19	SD508	土師器	器台	-	17.2	(6.0)	淡黄	淡黄	a-3 M	良	磨耗不明	磨耗不明	底5/36	焼成前に2ヶ所に穿孔径3～4mm。磨減顕著	C-259

第48表 A区下層出土石製品観察表

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	グリッド	出土遺構	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	実測番号
131	1364	H-22	SI554(SD502)土層断面g-g'土層7	管玉	緑色凝灰岩	1.65	径0.8	孔径0.2～0.25	1.6	にぶい緑色	石-030
132	1372	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P582(B群木器群取上No.14)	交柄研磨器か	凝灰岩	(4.9)	(5.1)	(2.8)	(58.2)	灰白色。径約8mmの孔	石-034

第49表 A区下層出土木製品観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	グリッド	出土遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種	木取り	備考	実測番号
130	1350	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P595礎板(G群取上No.66)	礎板	50.3	14.9	3.1	スダジイ	榎目	転用材か	木-112
130	1351	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P595礎板(G群取上No.69)	礎板	46.7	15.9	7.1	スダジイ	ミカン割材	〃	木-113
130	1352	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P595礎板(G群取上No.69下)	礎板	33.85	6.4	4.0	スダジイ	分割材	〃	木-117
130	1353	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P595礎板(G群取上No.72)	礎板	33.9	11.1	6.5	スダジイ	芯持板材	〃	木-115
130	1354	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P595礎板(G群取上No.71)	礎板	46.5	13.6	4.9	スダジイ	ミカン割材	〃	木-114
130	1355	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P504礎板(F群取上No.30)	礎板	49.9	9.0	7.4	-	分割材	〃	木-144
130	1356	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P504礎板(F群取上No.29)	礎板	27.1	7.1	3.8	スダジイ	分割材	〃	木-146
130	1357	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P504礎板(F群取上No.32)	礎板	(111.4)	12.0	7.2	スダジイ	ミカン割材	〃	木特-07
131	1358	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P585礎板(N群取上No.36)	礎板	45.4	11.56	2.5	-	榎目	〃	木-145
131	1359	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P585礎板(N群取上No.37)	礎板	45.8	19.2	4.9	スダジイ	榎目	〃	木-141
131	1360	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P585礎板(N群取上No.39)	礎板	41.7	10.2	3.2	スダジイ	榎目	〃	木-143
131	1361	H・I-20・21	SI553-e環柱穴P585礎板(N群取上No.40)	礎板	43.4	8.9	4.5	スダジイ	榎目	〃	木-142
131	1362	H・I-20・21	SI553-f環柱穴P506礎板(N群取上No.35)	礎板	61.9	23.5	15.6	タブノキ属	半裁木	〃	木特-04
131	1365	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P502礎板(E群取上No.19)	礎板	43.0	9.7	5.8	-	分割材	〃	木-147
131	1366	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P502礎板(E群取上No.21)	礎板	62.4	5.3	6.8	-	分割材	〃	木-148
131	1367	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P586礎板(M群取上No.47)	礎板	51.5	16.6	5.8	スダジイ	分割材	〃	木-119
132	1368	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P501東側礎板(C群取上No.78)	礎板	49.1	12.25	5.4	スダジイ	半裁木	〃	木-054
132	1369	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P501東側礎板(C群取上No.79)	礎板	73.5	13.8	7.0	スダジイ	分割材	〃	木特-06
132	1370	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P501東側礎板(C群取上No.81)	礎板	40.75	8.5	6.6	スダジイ	分割材	〃	木-125
132	1371	H・I-20・21	SI554-a環柱穴P593礎板(H群取上No.62)	礎板	36.0	6.3	5.6	スダジイ	分割材	〃	木-057
132	1373	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P584礎板(O群取上No.1)	礎板	67.1	12.7	8.0	タブノキ属	分割材	〃	木特-05
132	1374	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P584礎板(O群取上No.3)	礎板	43.7	10.45	6.0	スダジイ	ミカン割材	〃	木-149
132	1375	I-20下層	SI554-b環柱穴P501柱根	柱根	65.9	18.0	16.2	カツラ	芯持丸木		木特-14
132	1376	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P501西側礎板(C群取上No.77)	礎板	41.4	(22.7)	8.4	スダジイ	分割材	転用材か	木-122
133	1377	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P588礎板(K群取上No.49)	礎板	45.3	32.0	9.5	スダジイ	分割材	〃	木-118
133	1378	H・I-20・21	SI554-b環柱穴P593礎板(北排水溝)	礎板	58.2	30.7	8.3	-	分割材	〃	木-138
133	1379	H・I-20・21	SI554-c環柱穴P589礎板(J群取上No.51)	礎板	40.9	5.7	4.3	スダジイ	分割材	〃	木-121
133	1380	H・I-20・21	SI554-c環柱穴P589礎板(J群取上No.54)	礎板	43.7	8.3	4.75	スダジイ	分割材	〃	木-150
133	1381	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P597礎板(取上No.86)	礎板	24.9	8.3	4.0	カツラ	ミカン割材	〃	木-127
133	1382	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P597礎板(取上No.85)	礎板	25.65	16.0	5.2	カツラ	分割材	〃	木-126
133	1383	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P597礎板(取上No.87)	礎板	(34.7)	14.3	5.9	スダジイ	榎目	〃	木-123
134	1384	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P597礎板(取上No.83)	礎板	60.5	8.0	4.8	-	分割材	〃	木-124
134	1385	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P597礎板(取上No.84)	礎板	61.4	23.5	7.7	スダジイ	半裁木	〃	木特-03
134	1386	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P590・591礎板(I群取上No.57)	礎板	49.1	14.1	5.0	スダジイ	分割材	〃	木-056
134	1387	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P590・591礎板(I群取上No.55)	礎板	57.0	29.5	4.6	スダジイ	板目	〃	木-058
134	1388	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P596礎板(G群取上No.70)	礎板	29.7	12.6	9.2	スダジイ	分割材	〃	木-116
134	1389	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P596礎板(G群取上No.73)	礎板	(41.5)	(13.3)	(4.0)	スダジイ	分割材	〃	木-055
135	1390	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P596礎板(G群取上No.74)	礎板	37.3	17.4	5.25	スダジイ	分割材	〃	木-052
135	1391	H・I-20・21	SI554-d環柱穴P596礎板(G群取上No.76)	礎板	51.6	10.4	4.2	スダジイ	分割材	〃	木-053
135	1392	H・I-20・21	平地建物礎板(北側断面付近)	礎板	40.9	10.4	6.1	-	ミカン割材	〃	木-137
135	1393	I-21	SB551(P503)	柱根	26.4	15.0	5.8	モクレン属	半裁木		木-078
135	1394	I-20	SI551・552(P513)	柱根	35.0	24.8	15.3	スギ	半裁木		木-160
135	1395	H-20	P533	柱根	22.7	25.6	15.9	スギ	半裁木	上層の可能性あり	木-158
135	1396	H-20	P535	杭	30.6	6.7	5.7	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	〃	木-139
135	1397	H-20	P547	柱根	15.8	8.7	4.6	スダジイ	分割材	〃	木-173

第3節 B・C区下層 (第136～178図、第50～64表)

B・C区下層は、約1,600㎡を対象に調査を実施した。調査杭グリッドは上層と同じく、B区がJ-21区、K-19～21区、L・M-18～22区に、C区がN-20～23区、O・P-21～23区、Q・R-21・22区にあたる(第136図)。遺構検出面の標高は、C区北端(O-22杭脇)が4.35m(上層検出面より-60cm)、B区北西端(M-21区)が4.10m(同一-30cm)、B区南西端(M-18区)が4.0m弱(同一-40cm)、南東端(J-21区)が4.50m(同一-20cm)をそれぞれ測り、南北方向が南側から北側に向けて緩やかに標高が下がる(標高差約15cm)のに対して、東西方向は東側から西側に向けて大きく標高が下がる(同40～50cm)。

調査の結果、弥生時代中期後半～古墳時代前期前葉の掘立柱建物1棟(SB552)、土坑6基、溝24条、鞍部2ヶ所(SX5501・02)、柱穴を含むピット多数、古墳時代前期前葉の河跡2条(SD5501、上層SD5506)を検出した。これらの遺構は、B区では東側(21ライン以東)に、C区では南側(Pライン以南)に主に分布し、B区西側および北側は遺構密度が比較的低い。C区東壁の土層観察(第177図断面50-50')から、①SX5501・02→②P5506、SD5508・10等→③(上層ベース土の堆積)→④上層SD5006(河跡)・SK5505→⑤下層SD5501と変遷し、大部分の遺構はP5506等と同時期の弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属する。

また、B区M-21区SD5524脇でベース土と理解した土層(第7図土層15:淡黄灰色粘質土)から弥生時代中期後半の壺(第176図2001)が出土した(第145図P5512)。そのため、B区5ヶ所で試掘坑によりベース土の堆積状況を確認したが、磨耗した土器細片が出土したものの明確な生活面、遺構は存在しなかった。そのため、現地調査時は、C区最下層ベース土(青灰色強粘質土)出土の縄文浅鉢片(第183図2009)と同様に、調査区外東側の埋没谷奥部から流出した土砂とともに流れ込んだ遺物と判断したが、その位置付けは、都合6面の生活面を検出した第8次調査の正報告を待ちたい。遺物は、土器、柱根等の木製品や玉未成品、砥石等の石器・石製品を確認しており、中でもC区SD5501からは多量の土器に加え、比較的多数の木製品(農具、盾、部材等)が出土した。なお、遺構番号は、現地調査時にB・C区を通して「遺構種別+(5501で始まる4桁のアラビア数字)」を、整理時に新たに掘立柱建物番号を、それぞれ付している。

1 掘立柱建物 (遺構: 第147図、遺物: 第148図、第63表)

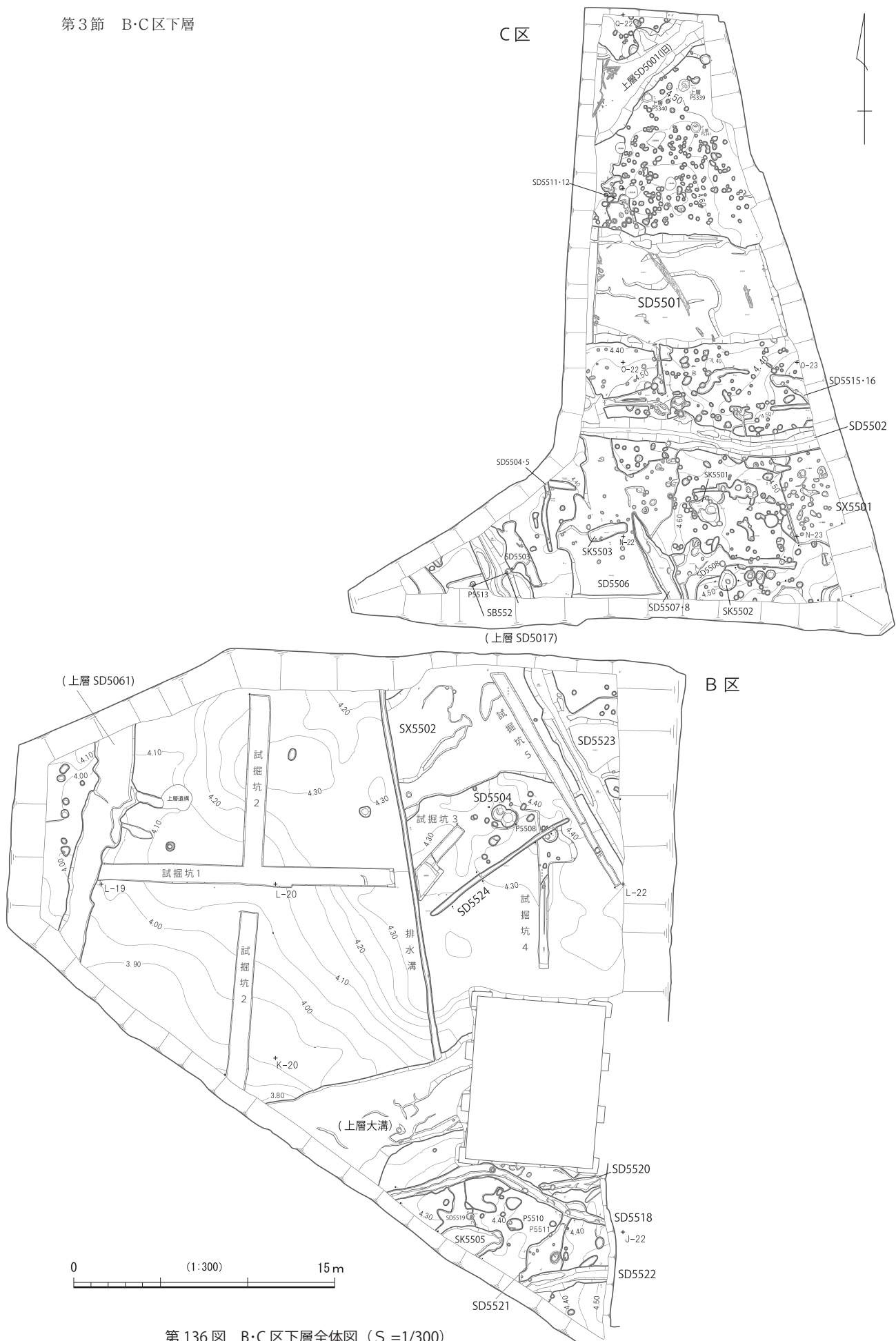
C区SB552 N-21区で復元した1間以上×1間の小規模な掘立柱建物で、南東方向に延びると考えられる。建物主軸方位はN-22°Wを示し、P5512・5513間の柱間寸法2.10mを測る。柱穴の平面形状は略円形を呈し、P5512が径28～34cm、深さ50cmを、P5513が径28～30cm、深さ18cmをそれぞれ測る。A区下層の状況から推すると掘り方埋土を掘り残した可能性が高い。柱穴覆土はベース土粒が混ざる褐～灰褐色粘質土を基本とする。柱根が遺存し、P5512柱根1399が径約23cm、P5513柱根1400が径約26cmを測る。いずれも、かなり太い芯持材で、底面を丁寧に加工する。樹種は、1397がキハダ、1398がスダジイである。土器は出土していない。

2 土坑、ピット (遺構: 第149・150図、第50表、遺物: 第151・176図、第51・63表)

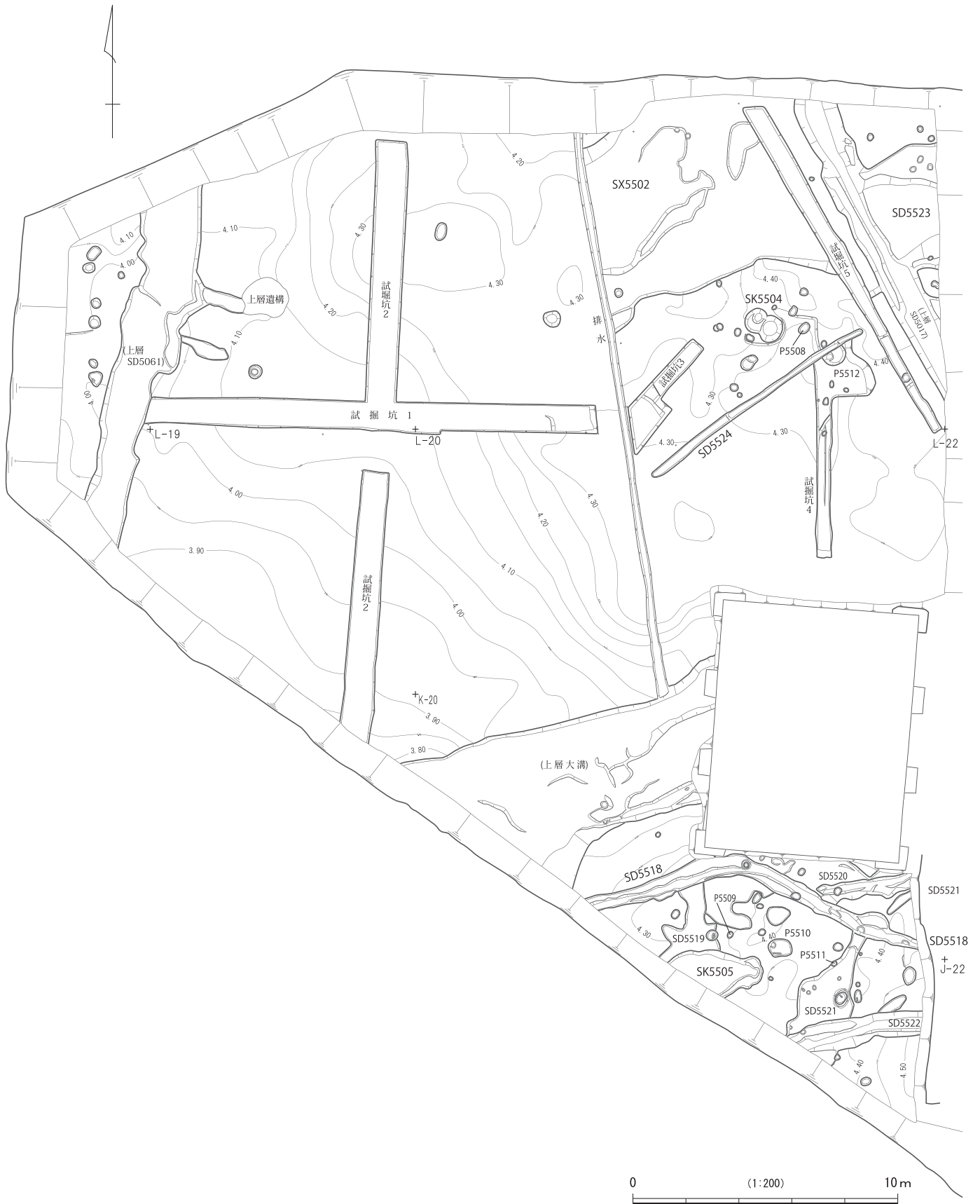
土坑は、B区で2基、C区で4基を検出した(SK5506～09は欠番)。

C区SK5501 O-22区で検出した平面不整形円形を呈する大型土坑で、SK5502と対になる建物柱穴の可能性をもつ。長軸202cm、短軸124cm、深さ22～28cmを測り、中央付近が一段深くなる。覆土は濁灰黄～暗灰色粘質土で、第2層目から多数の土器片が出土した。他遺構との切りあい関係はSD5508より新しく位置付けられる。摩滅した弥生時代中期後半以降の弥生土器片が出土した。

C区SK5502 N-22区で検出した平面不整形円形を呈する土坑で、SK5501と対となる建物柱穴の可能性をもつ。長径118cm、短径100cm、深さ18cmを測り、柱根沈降痕を考えられる中央付近は径16cm、深さ38cmと一段深くなる。



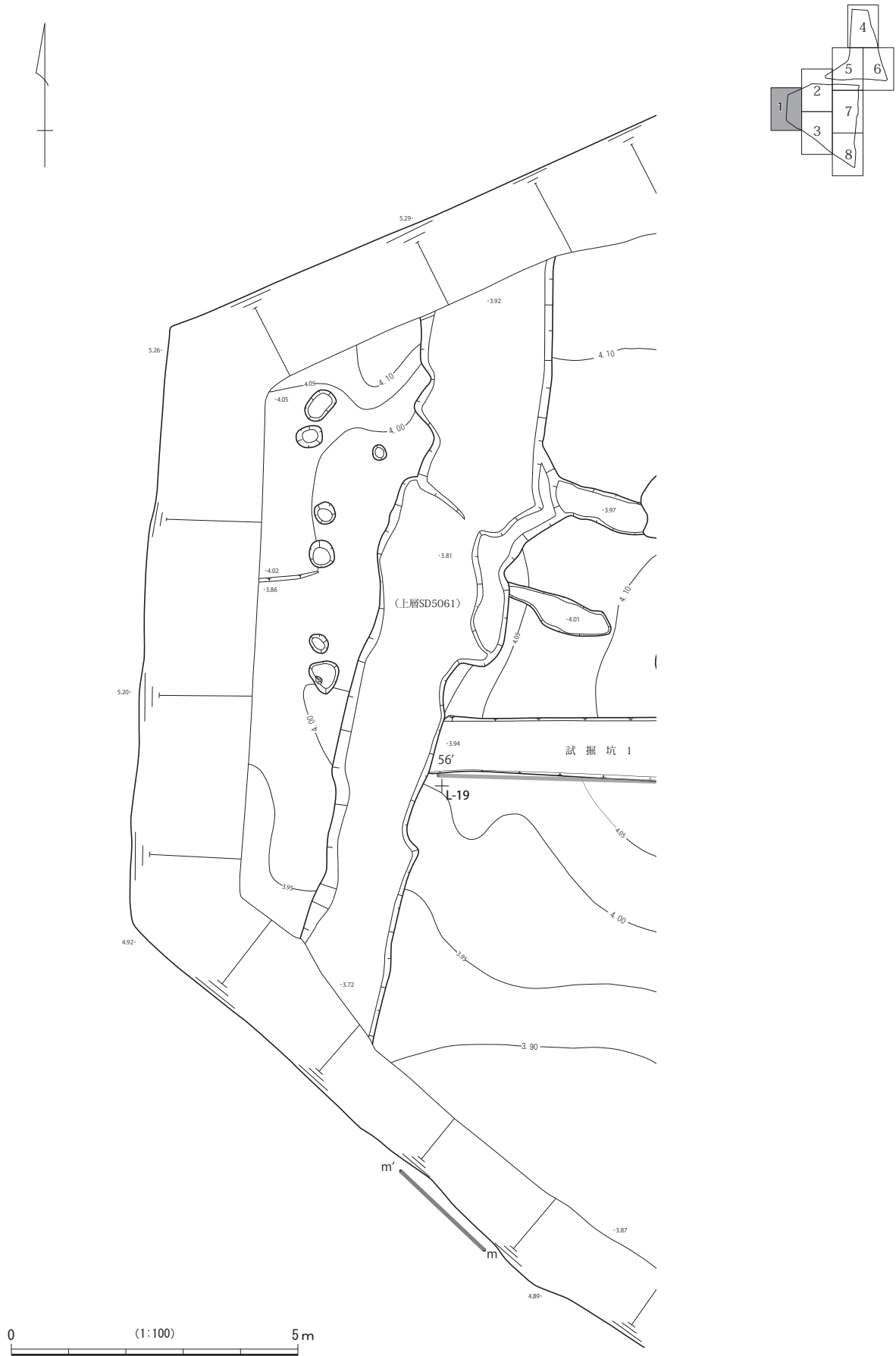
第136図 B・C区下層全体図 (S = 1/300)



第 137 図 B 区下層主要遺構配置図 (S = 1/200)

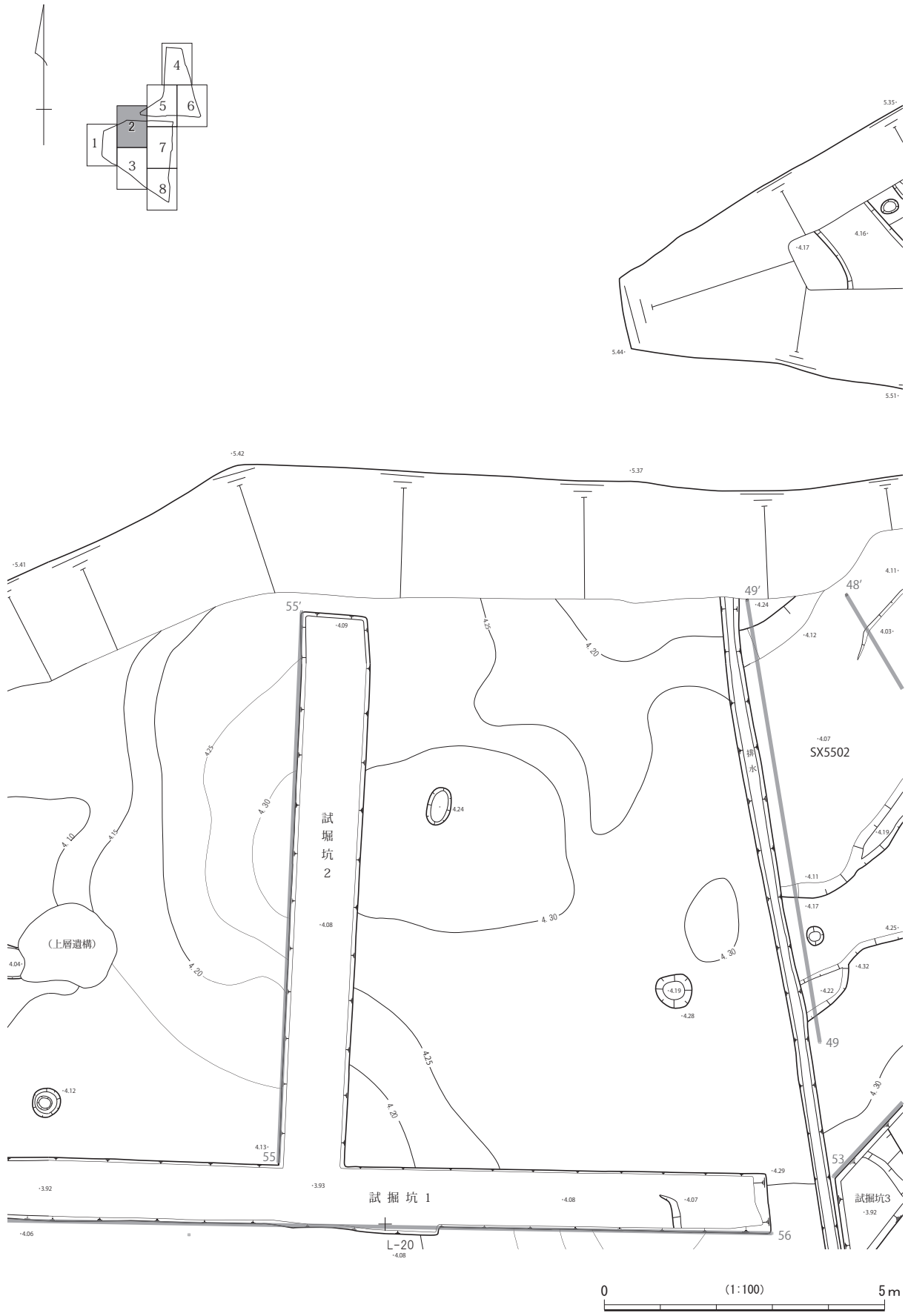


第138図 C区下層主要遺構配置 (S=1/200)



第 139 図 B・C 区下層平面図 1 (S = 1/100)

第3節 B・C区下層



第 140 図 B・C 区下層平面図 2 (S = 1/100)



第 141 図 B・C 区下層平面図 3 (S = 1/100)

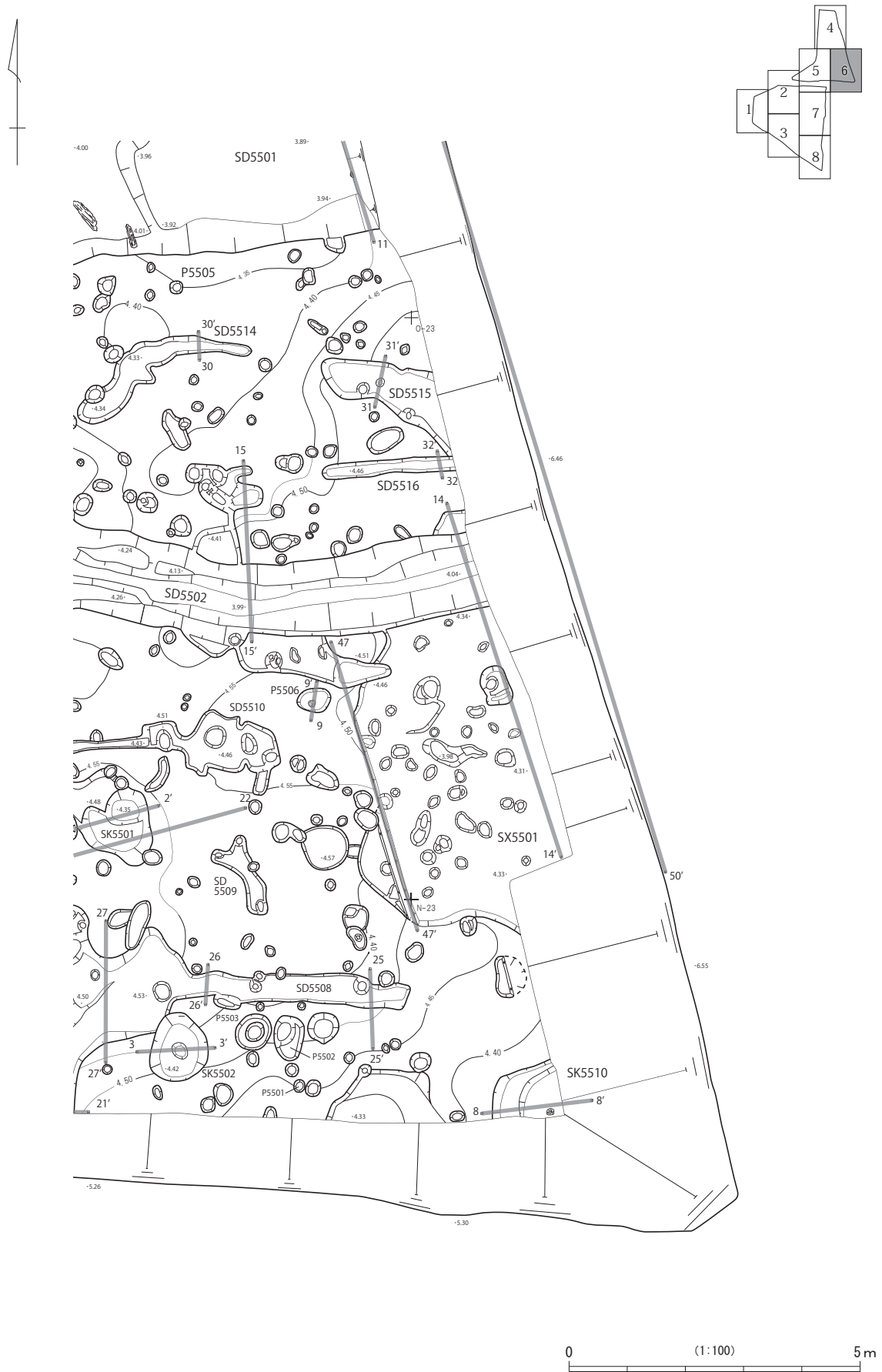
第3節 B・C区下層



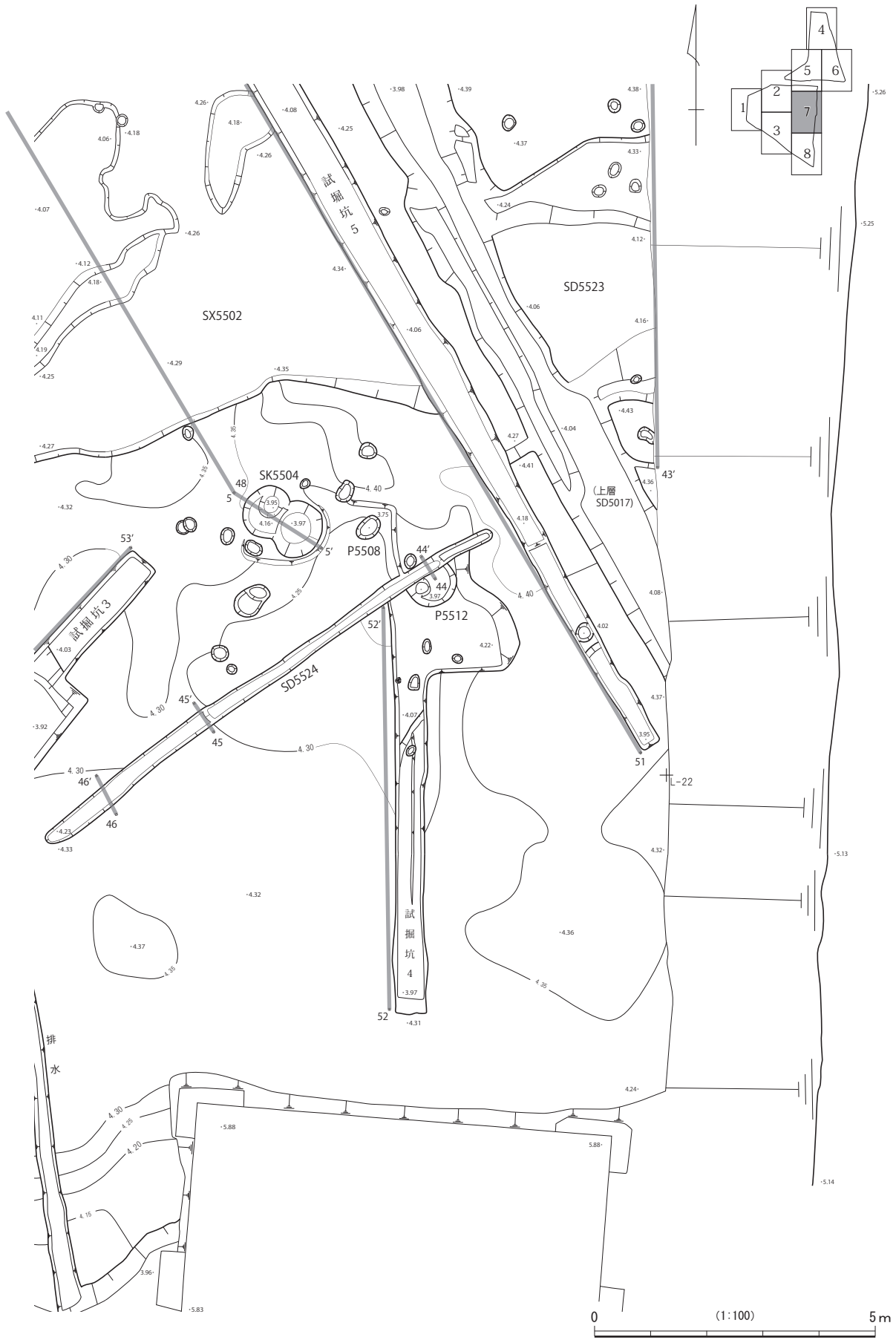
第 142 図 B・C 区下層平面図 4 (S = 1/100)



第 143 図 B・C 区下層平面図 5 (S = 1/100)



第 144 図 B・C 区下層平面図 6 (S = 1/100)

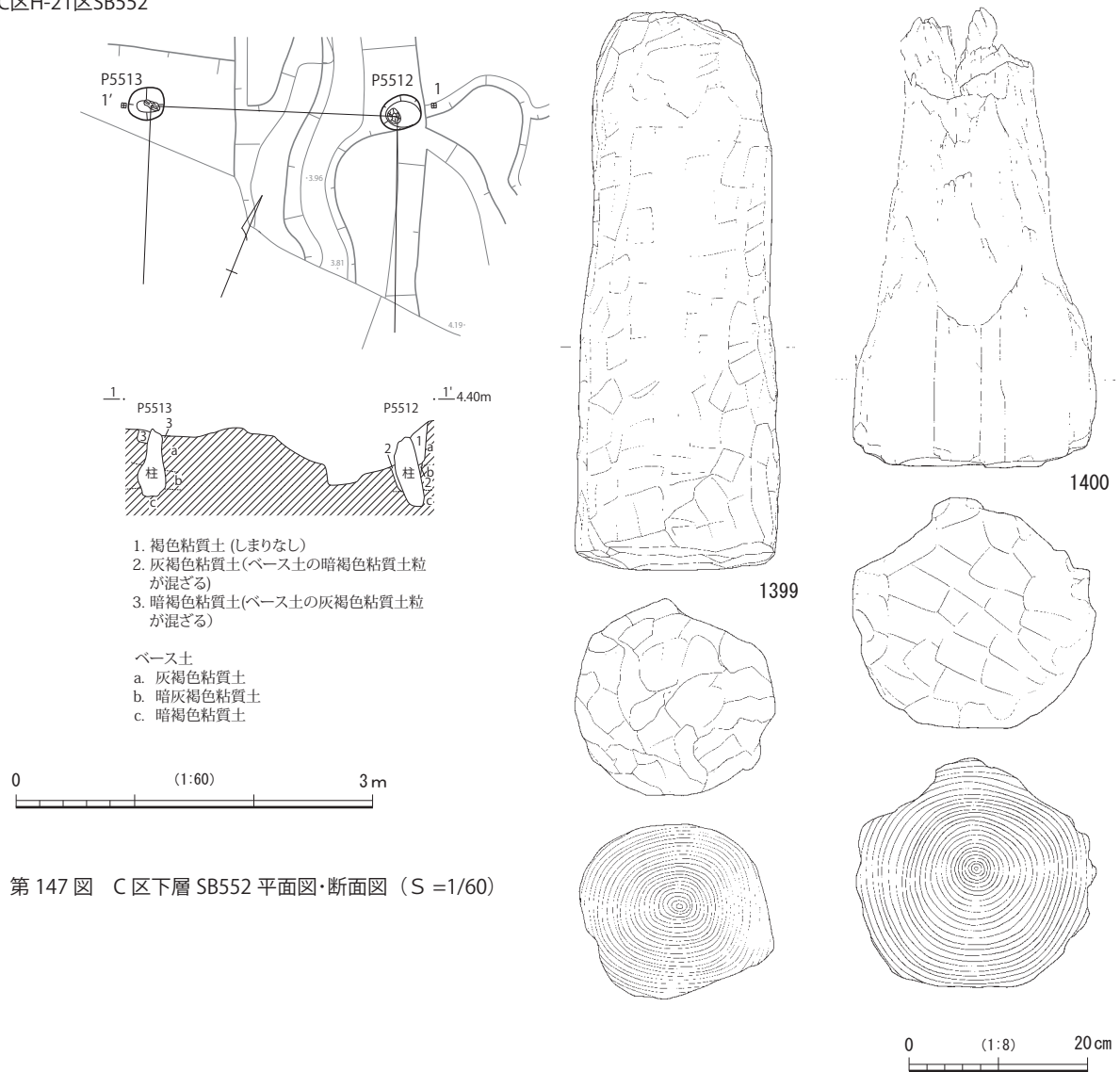


第 145 図 B・C 区下層平面図 7 (S = 1/100)



第 146 図 B・C 区下層平面図 8 (S = 1/100)

C区H-21区SB552



第147図 C区下層 SB552 平面図・断面図 (S=1/60)

第148図 C区下層 SB552 出土遺物実測図 (S=1/8)

覆土は濁暗灰～灰黄色粘質土であり、他遺構との切りあい関係はSD5506より新しく位置付けられる。遺物は、弥生時代後期後半の土器片が出土した。

C区SK5503 N・O-21区で検出し、平面形状は略長方形を呈する。長辺230cm、短辺56～78cm、深さ10～13cmを測り、底面はやや起伏する。覆土は炭粒が多く混ざる濁暗灰～濁灰色粘質土で、遺構との切りあい関係からSD5506より新しい。底面南東隅から弥生時代中期後半以降の土器片が出土した。

B区SK5504 M-21区で検出し、平面不整形円形を呈する2基の土坑が重複する。新しい北西側の土坑が径64～68cm、深さ33cmを、古い南東側の土坑が径92～98cm、深さ35cmを、それぞれ測る。いずれの土坑とも厚い黒色灰層が残ること(図版65)や、北西側の土坑第2層上面の焼土面から、何らかの焼成が行われたと考えられる。遺物は、北西側の土坑第2層出土の第151図1401を図示した。球形の土師器土錘1401は器面が剥離し、残存重量25.6gを量る。他に弥生時代後期の土器片が少量出土した。

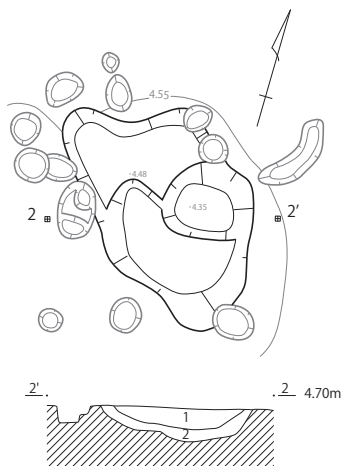
B区SK5505 J・K-21区で検出した平面不整形を呈する大型土坑で、南西側(第8次調査A区)に延びる。長軸220cm以上、短軸190cm、深さ5～20cmを測り、底面はやや起伏をもつ。覆土は暗褐～灰褐色粘質土の水平

第50表 B・C区下層SK・SD・SX規模等一覧表

遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)			断面図	備考
			長軸	短軸	深さ		
C区SK5501	O-22	不整形	202	124	22~28	第149図2-2'	SD5508より新
C区SK5502	N-22	不整楕円形	118	100	16, 38	第149図3-3'	
C区SK5503	N・O-21	略長方形	230	56~78	10~13	第149図4-4'	底面起伏。SD5506より新
B区SK5504	M-21	北側:不整形 南側:略円形	北側: 68 南側: 98	北側: 64 南側: 92	北側: 33 南側: 35	第149図5-5'	2基のビット重複。北側が新
B区SK5505	J・K-21	不整形	220~	190	5~20	第149図 6-6'、7-7'	底面平坦。SD5519より新。SK5506~09欠番
C区SK5510	N-23	不整形円形か	112~	96~	26	第150図8-8'	径13cmの柱根

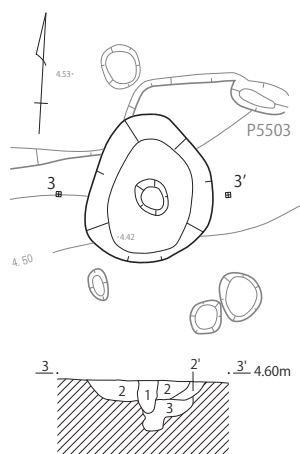
遺構名	グリッド	平面形	規模(cm)			主軸方位	断面図	備考
			長軸	短軸	深さ			
C区SD5501	P-21~23	直線	1030~	540~670	54~88	N-約90° W	第152図11-11'・13-13'	上層SD5506、他の下層遺構より新
C区SD5502	O-21~23	やや屈曲	1350~	110~150	48~74	N-約90° W	第174図14-14'~17-17'	SX5001より新
C区SD5503	N-21	不整形	414	140~	5~10	N-25° W	第174図18-18'	浅い落ち込み
C区SD5504	N・O-21	やや屈曲	390~	20~28	8~12	N-約0°	第174図19-19'	SD5505より古
C区SD5505	O-21	直線	160~	40~44	5	N-82° W	第174図20-20'	SD5504より新
C区SD5506	N-21・22、 O-21	屈曲	1300~	110~550	6~30	N-14° W	第174図21-21'~23-23'	SK5003、SD5507より古
C区SD5507	N・O-22	直線	540~	64~122	7~20	N-26° W	第175図24-24'	SD5506・08より新
C区SD5508	N-22	東側:直線 西側:不整形	680~	東側: 28~54 西側:146 ~350以上	4~16	N-約90° W	第175図25-25'~27-27'	SK5502、SD5507より古。 SD5510と平行
C区SD5509	O-22	屈曲	130	26~66	5	N-約18° W	濁暗灰色粘質土(炭粒混ざる)	浅いくぼみか
C区SD5510	O-22	直線	370	12~100	8~13	N-約85° E	濁暗灰色粘質土(炭粒混ざる)	SD5508と平行
C区SD5511	O-21・22	不整形	210~	130~210	2~9	-	第175図28-28'	浅いくぼみ。SD5501より古
C区SD5512	Q-21	不整形	130	38~50	11~20	-	第175図29-29'	浅いくぼみ
C区SD5513	O-21・22	直線	370~	28~70	10~12	N-約90° W	第174図17-17'	SD5517より新、SD5502より古
C区SD5514	O-22	屈曲	340	16~68	5~7	-	第175図30-30'	
C区SD5515	O-22・23	屈曲	230~	66~94	8~12	N-70° W	第175図31-31'	SD5516より古
C区SD5516	O-22・23	直線	228~	22~38	34	N-85° E	第175図32-32'、 第177図50-50'	SD5515より新
C区SD5517	O-21・22	直線か	310~	30~84	7	N-75° E	第174図17-17'	SD5513より古
C区SD5525	O・N-22	直線	300~	22~68	6~21	N-7° W	第175図33-33'	調査時SD5518を変更
B区SD5518	K-20・21	屈曲	1250~	36~90	14~18	N-65° W・ N-75° E	第175図34-34'~37-37'	SD5519より新、SD5521より古
B区SD5519	K-20・21	屈曲	250~	74~208	2~5	N-約0°	濁暗褐色粘質土(炭粒混ざる)	浅い落ち込み。SK5505、 SD5518より古
B区SD5520	K-21	ほぼ直線	360~	42~84	10~16	N-15° E	第175図38-38'	
B区SD5521	J・K-21	環状	360~	46~214	6~10	N-約24° E	第175図39-39'、40-40'	平地建物外周溝。SD5518・22より古
B区SD5522	J-21	やや屈曲	470~	92~118	26~44	N-90・115° W	第175図41-41'、42-42'	基幹水路。SD5521より新。第6 次下層SD04、第8次A区SD5043 に接続
B区SD5523	M-21	ほぼ直線	250~	330~400	36~40	N-約0°	第175図43-43'	SX5005と連続か
B区SD5524	L・M-21	直線	960	20~36	10~16	N-55° E	第175図44-44'~46-46'	
C区SX5501	O-22・23	不整形	570~	360~	6~24	-	第174図14-14'、 第175図47-47'	調査時、鞍部5501を変更。 SD5502より古。底面小ビット多い
B区SX5502	M・N-20・21	不整形	東西 900~	南北 650~	6~15	-	第177図48-48'・49-49'	調査時、鞍部5502を変更。底面 起伏。SD5523と連続か

C区O-22区SK5501



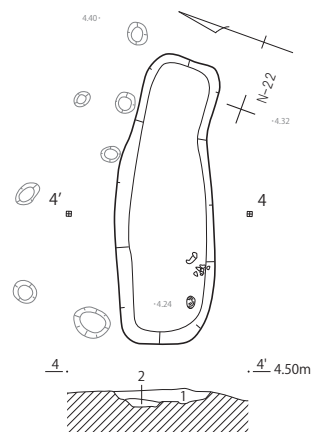
1. 濁灰黄色粘質土 (しまりない)
2. 暗灰色弱粘質土 (しまりなく、土器が多く混ざる)

C区N-22区SK5502



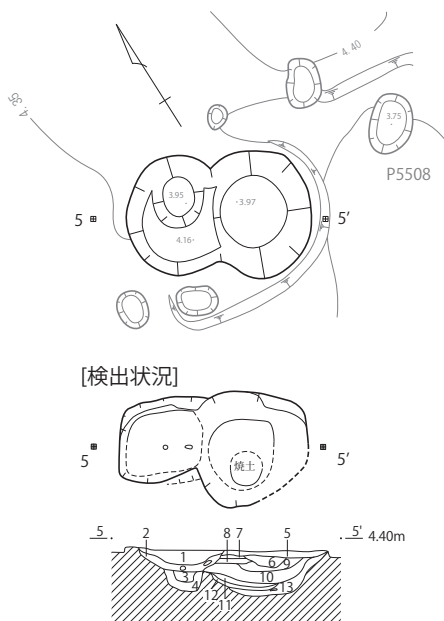
1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
2. にぶい灰色粘質土 (炭粒、土器が若干混ざる)
- 2'. 2層と同質土 (ベース土が混ざる)
3. 灰黄色粘質土

C区O-21区SK5503



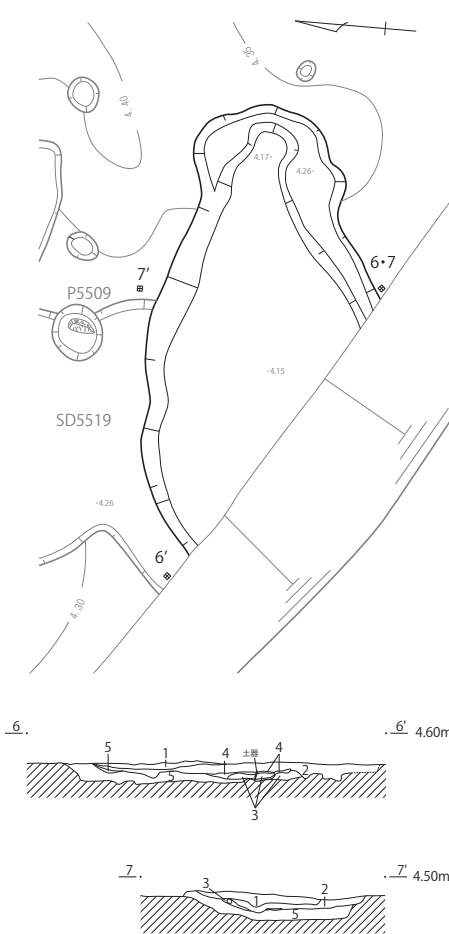
1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
2. 濁灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)

B区M-21区SK5504

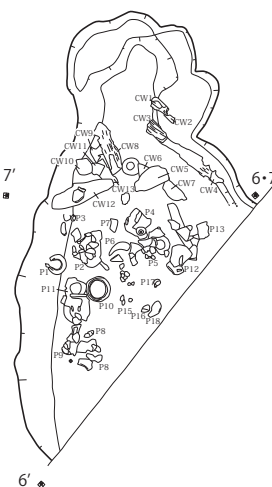


1. 灰黄褐色粘質土 (ベース土に近い)
2. 黒色灰層 (ベース土粒が極く少量混ざる)
3. 1層に2層ブロックが混ざる
4. 2層と同質土
5. 灰黄褐色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
6. 5層と同質土 (5層よりも炭多く混ざる)
7. 黒色炭層
8. 5層と同質土
9. 6層と同質土 (6層よりも炭の混ざり少ない)
10. 5層と同質土 (5層よりも濁る)
11. 黒色灰層 (2層と同質土)
12. 灰褐色粘質土
13. 2層と同質土

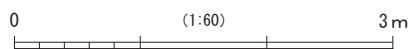
B区J-21区SK5505



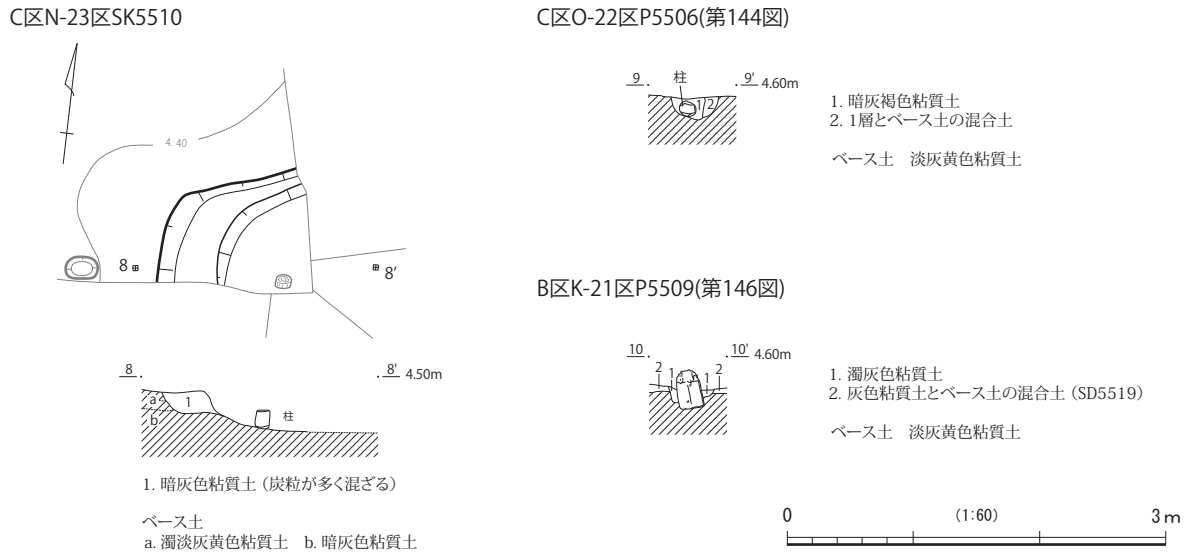
[遺物出土状況]



1. 黄褐色粘質土 (黒褐色粘質土粒混ざる)
2. 1層と灰褐色粘質土の混合土 (薄い炭層が挟まる)
3. 暗褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土 (ベース土粒が混ざる)
4. 暗褐色粘質土 (しまりない)



第149図 B・C区下層SK平面図・土層断面図 (S=1/60)



第150図 B・C区下層SK、ピット平面図・土層断面図 (S=1/60)

堆積を基本とし、第2層には薄い黒色灰層が混ざる。他遺構との切りあい関係は、SD5519より新しく位置付けられる。第3層から弥生時代後期以降の比較的多数の土器や木片が出土し、うち第151図1402～1409を図示した。1402～1405は弥生土器の甕である。後期前半の1402は口径14.5cm、器高24.0cmを測り、口縁帯を浅い刻みと擬凹線で加飾する。後期後半の1403と1404は、胎土が近似することから同一個体の可能性が高い。1403は口径15.8cmを測る。薄手の1405は口径17.9cmを測る。胎土中に赤色酸化粒が多く混ざり、摩滅が著しい。古墳時代前期の土師器甕1406は口径13.0cmを測り、口縁端部が短く外反する。小型の弥生土器壺1407・08は、弥生時代後期後半と考えた。底部肉厚の1407は口径6.6cm、器高10.2cmを測り、口縁端部が直立気味に立ちあがる。1408は口径8.0cm、器高13.7cmを測り、内面に粘土紐の積み上げ痕を残す。器台1409は口径15.1cm、器高11.7cmを測り、口縁端部は外側で面をつくる。

C区SK5510 N-23区で検出した土坑で、調査区外南東側に延びる。長軸112cm以上、深さ26cmを測り、覆土は炭粒が多く混ざる暗灰色粘質土である。底面付近から第151図1410の柱根が出土した。芯持ちの1410は径10.8cmを測り、底面を2方向から加工する。樹種はツバキ属である。他に少量の弥生土器片が出土した。

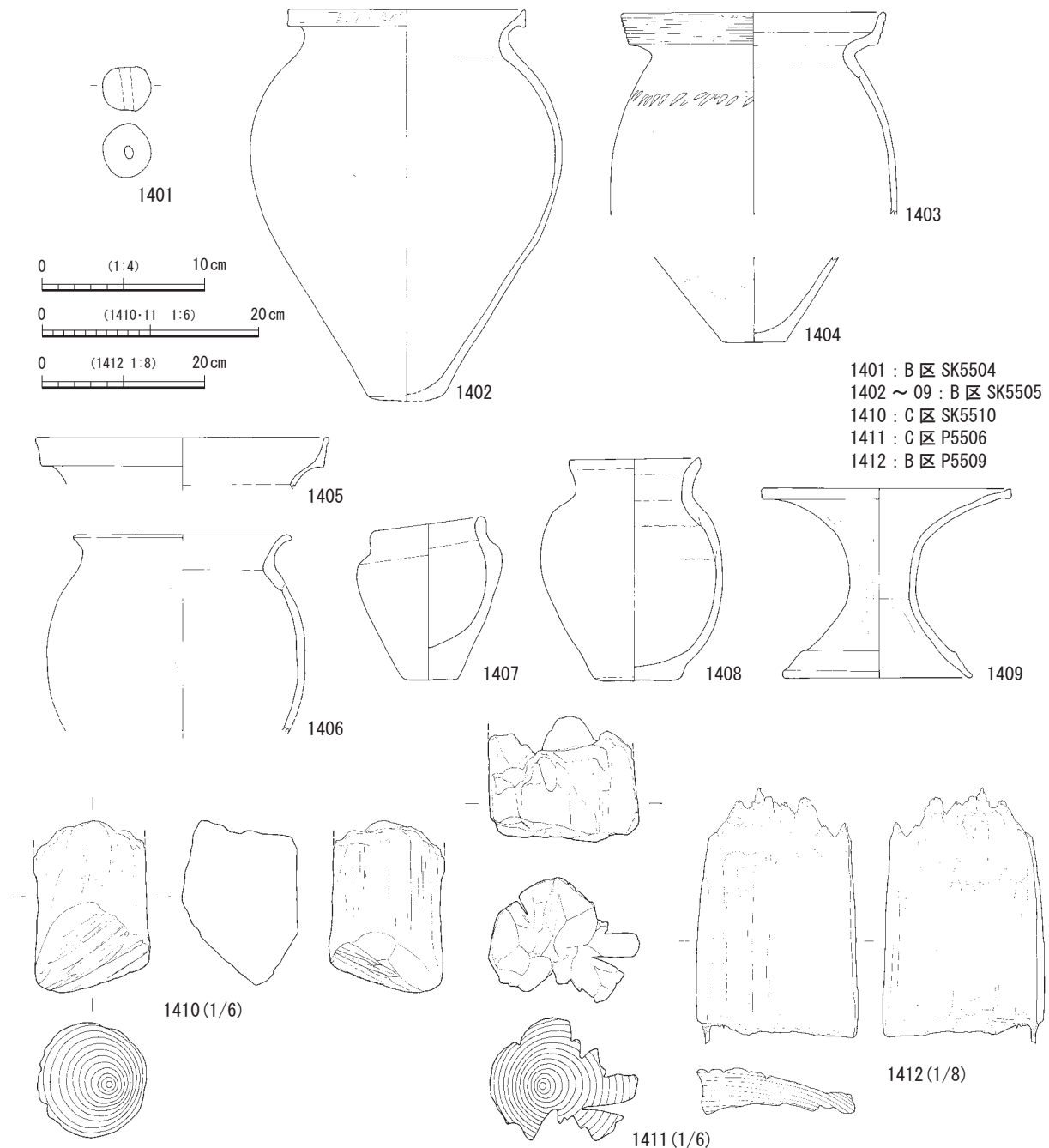
ピット 検出したピットのうち、遺物が出土した10穴に遺構番号を付した。うち、C区P5503・04・06、B区P5509・10は、柱穴と考えられる。N-22区P5503は平面略円形を呈し、中央部が一段深くなる。径58～66cm、深さ35cmを測り、覆土は褐灰色粘質土である。弥生時代の甕細片が出土した。P-22区P5504は平面不整形を呈し、柱根残欠片が出土した。長軸40cm、深さ30cmを測り、覆土は褐灰色粘質土である。O-22区P5506は平面不整形を呈し、長径58cm、短径38cm、深さ18cmを測る。覆土は暗灰褐色粘質土を基調とし、第151図1411の柱根が遺存した。芯持ちの1411は径13.9cmを測り、樹種はツバキ属である。K-21区P5509は平面略円形を呈し、径42～46cm、深さ15cm、覆土は濁灰色粘質土である。SD5521上のピットと対になる可能性をもち、ベース面に沈み込んだ柱根(第151図1412)はスギの板目材を用いる。K-21区P5510は平面不整形を呈し、径66～84cm、深さ14cmを測る。覆土は、ベース土粒が混ざる暗褐灰色粘質土である。底面から礎板の可能性をもつ木片が出土した。P5512は、ベース土と同質の黄灰色粘質土(第178図土層a・b)を覆土とする。比較的多数の摩耗した弥生土器細片がまとまって出土、うち第176図2001の弥生時代中期後半の壺を図化した。2001は口径17.6cmを測り、口縁帯外面を綾杉文、肩部を粘土帯貼り付け後に斜格子文でそれぞれ加飾する。

3 溝 (遺構: 第152・174・175図、第50表、遺物: 第153～173・176図、第51～64表)

B区で7条、C区で18条の溝を検出した。古墳時代前期前葉を下限とする河跡C区SD5501(土層SD5506)以外

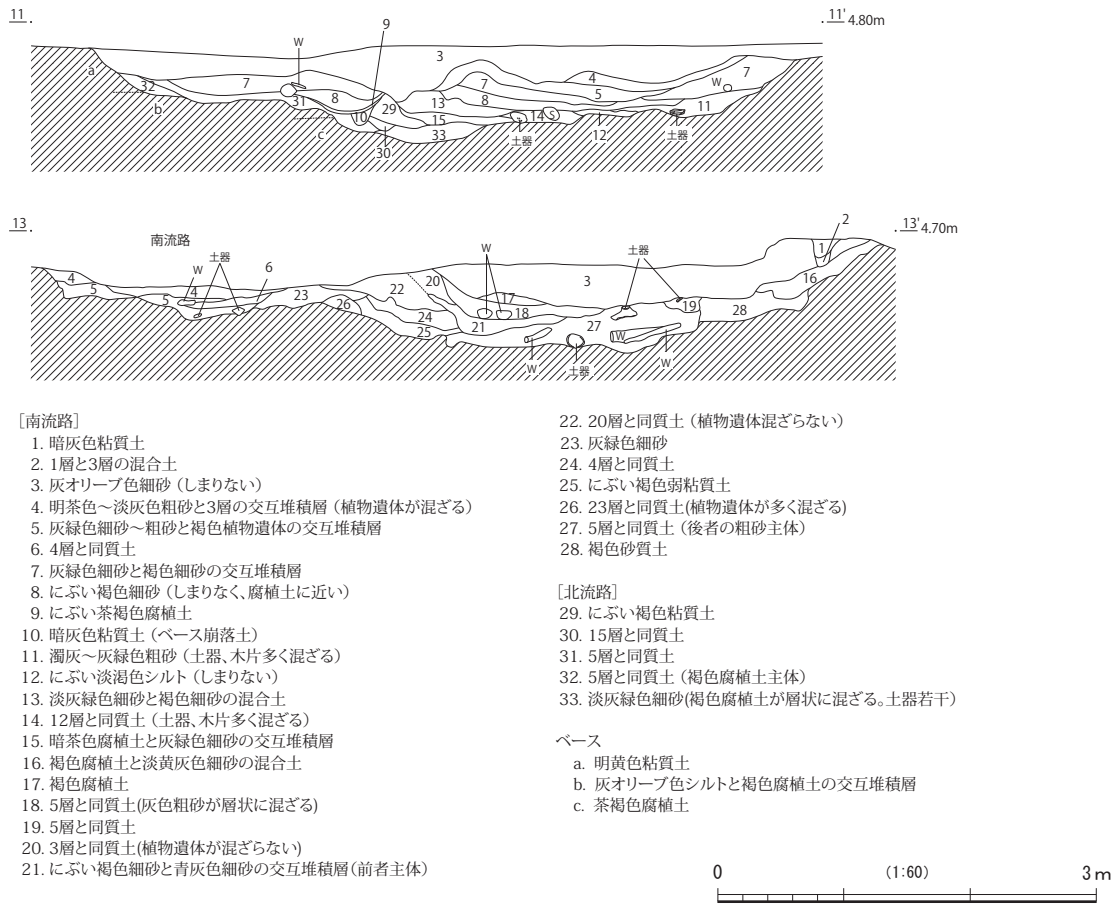
は、おおむね弥生時代後期後半に属すると考えられ、B区SD5522が集落域を東西方向に流れる基幹的な水路、B区SD5521が平地建物外周溝となる。以下では主な溝について述べる。なお、主要地方道高松・津幡線を挟んで位置する第7次調査I区北側調査区の第2面でSD5501につながる河道跡を、第5面で弥生時代中期の建物跡を、それぞれ検出している。

C区SD5501 P-21～23区で検出した古墳時代前期前葉を下限とする河跡で、東方向から西方向に流下する。上幅5.4～6.7m、深さ54～88cmを測り、肩部は比較的しっかりとたちあがる。西側土層断面から大きく新旧2つの流れ(北流路・南流路)に分けて調査を進めたが、中央～東側は新しい流れ(南流路)のみを検出している。覆土は粘質土・シルト・細砂・粗砂が、ラミナ層を挟みながら、流水に伴い複雑に堆積しており、第152図土層3～28が南流路、土層29～33が北流路に属する。また、南肩部に近い底面に径5～8cm程度の杭が



第151図 B区下層SK、ピット出土遺物実測図 (S=1/4・1/6・1/8)

C区P-21～23区SD5501(第142～144図)



第152図 B・C区下層 SD5501 土層断面図 (S=1/60)

4本程度残っており、何らかの施設が存在したと考えられる(写真図版67)。遺構の切り合い関係から、上層SD5506より新しく位置付けられる。

遺物は、主に底近くの細砂・粗砂層から、弥生時代中期後半～古墳時代前期前葉の土器、木製品、未加工の流木、石製品が混在しながら出土した。南・北流路を明確に弁別・取り上げできなかった箇所も存在することから、図示した第153～173図は種別・器種ごとに記す。

第153図1413は縄文時代晩期前半(御経塚式並行)の深鉢片で、細い工具で沈線文を施す。

第153図1414～第157図1573は弥生時代の甕で、うち1414～36が中期後半に位置付けられる。1414は口径23.5cmを測り、口縁端部の刻みは深い印象を受ける。1415は丸棒状の工具で口縁端部に刻みを施す。無文の1416が口縁端部を丸く仕上げるのに対して、1417は口縁端部に平坦面をもつ。1416が口径22.7cmを、1417が口径21.1cmを測る。1418～29は、口縁端部に刻み等の装飾を施す。1418は頸部で明瞭に屈曲し、口縁部内面の刻みは浅い。1419～22は口径19cm前後を測る。1419は口縁端部内面を3列の斜行短線文と刻みで加飾する。1420は外傾する口縁端部に密な刻みを施す。1421・22は口縁端部内面に綾杉文、外面に刻みを加える。1423～27は口径17～18cmを測る。1423は水平に仕上げた口縁端部に、1424は外傾する口縁端部に、それぞれ刻みを施す。1425の刻みは深いものに対して、1426の刻みは浅い印象を受ける。1428～32は口径16cm弱を測る。1428・29が下方から明確な刻みを加えるのに対して、1430は指で押したような浅い刻みとなる。1431・32の口縁端部は外傾する面をもち、1431の内面には綾杉文が残る。山陰系の1434は口径11.1cmを測り、口縁端部外面

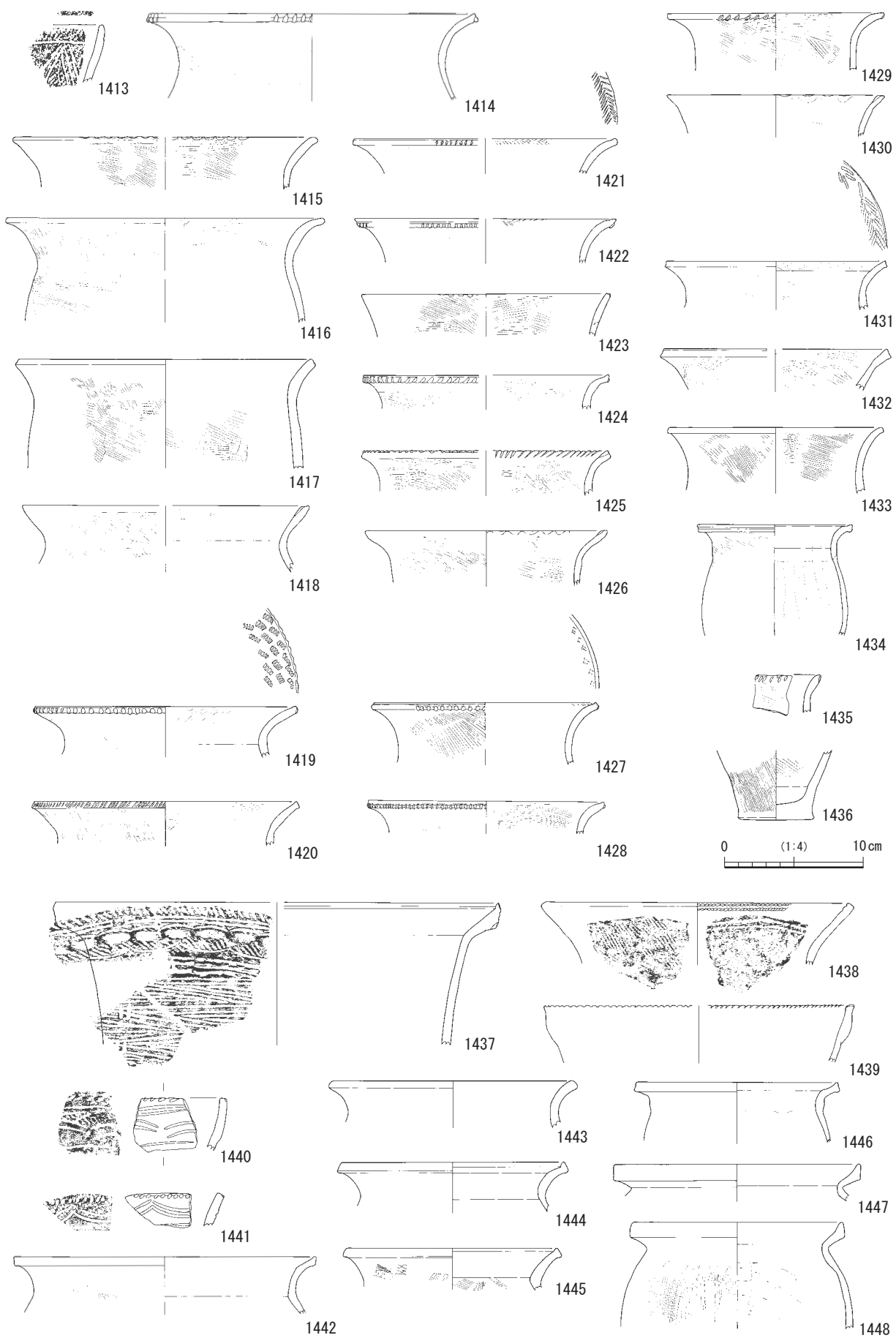
に1条の凹線を施す。1436は底径5.5cmを測る。

第153図1437～41は、後期前半に位置付けられる天王山式の甕で、内面に炭化物が厚く付着する個体が多い。1437は口径約32cmを測り、肥厚した口縁部は上方で先細る。外面に縄文を施した後、口縁部を沈線文と刻み、頸部を交互刺突文、胴部を重菱型文で、それぞれ加飾する。1438は口径22.0cmを測る。外面に縄文が残る他、口縁端部内面に縄文原体を押し付けて、2条の沈線文を施す。1439は肥厚した口縁部に刻みを加え、胎土が他の天王山式土器と共通する。1440・41は外面を刻み、沈線文、連孤文で加飾する。なお、C区出土の天王山式と考えられる甕・壺類は、50片以上を数える。その色調・胎土は、褐灰色を呈して2mm以上の角張った石英等の砂粒が多く混ざる群(1437・38、1637、1982・92)と、黒褐色を呈して海綿骨針と多くの微砂粒が混ざる群(1440・41、1638・39)に分かれ、他の土器との分別は容易である。

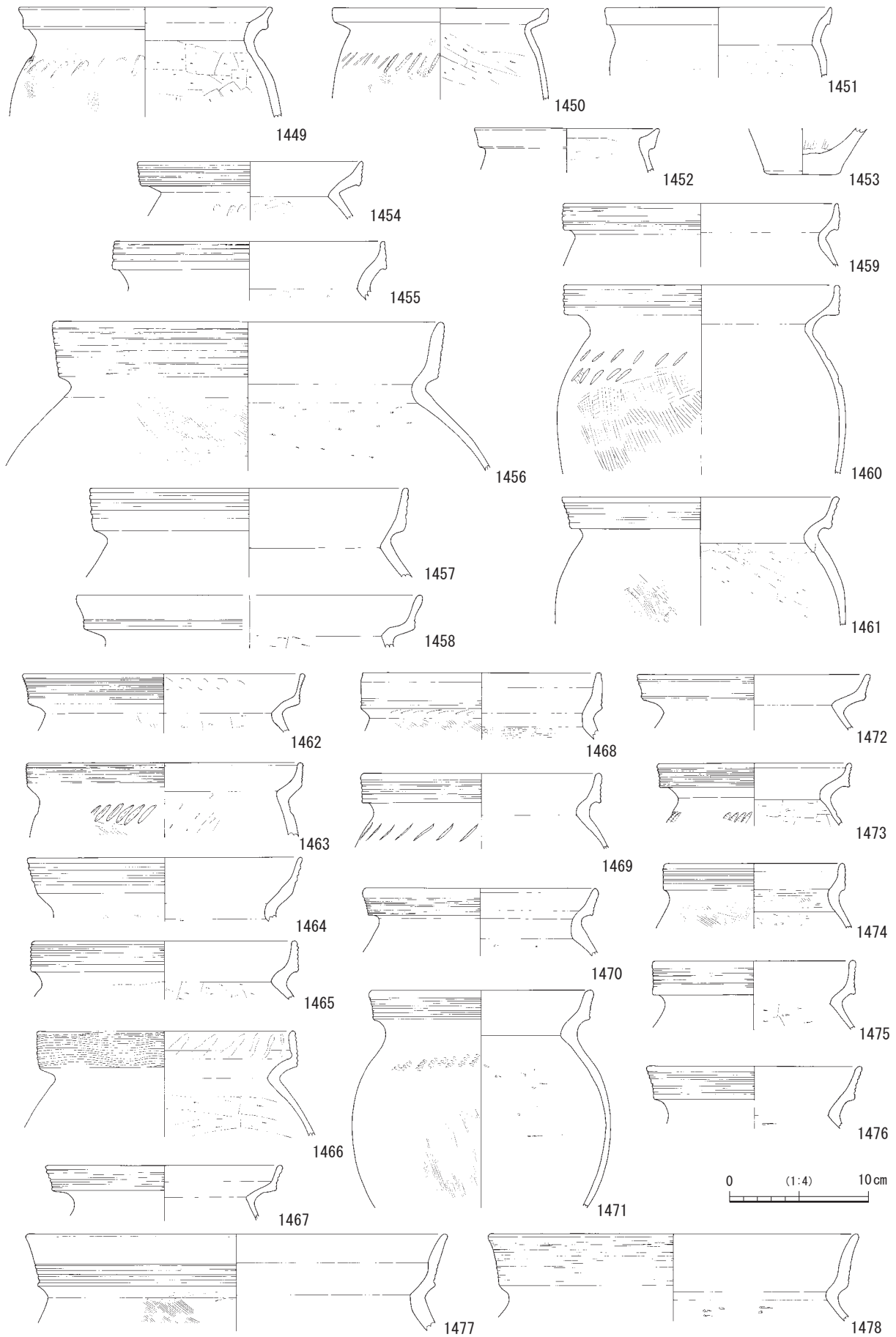
第153図1442～第154図1453は、おおむね後期前半に位置付けられる。1442は口径21.7cmを測り、口縁端部を上方につまみあげる。また、胎土の練りがよくないため、マーブル状の色調を呈する。素縁の1443は摩滅が顕著である。1444～46は、肥厚した口縁端部が外傾して面をもつ。1447～1542は有段口縁の甕で、1447は口径17.6cmを測る。1448～50は胴部外面に刺突文、内面にケズリが残る。1451は球胴形を呈し、口縁端部が直立する。1452は口径13.2cmを測り、口縁部～頸部が肥厚する。

第154図1454～第156図1523は、有段口縁外面に擬凹線を施す甕で、うち1454～76は後期後半に位置付けられる。1454は口径16.0cmを測り、5条1単位の擬凹線を施す。1455は口径19.5cmを測り、口縁部は内傾気味である。1456は口径27.7cmを測る大型の甕で、9条1単位の擬凹線は彫りが深い。1457は口径22.8cmを測り、内面は起伏に乏しい。1458の擬凹線は浅く、かすれ気味である。1459～66は口径19cm弱～20cmを測る。1459の口縁部は先細りながら内傾気味に立ち上がり、擬凹線は浅い印象を受ける。1460・61は、しっかりとした4条1単位の擬凹線を施す。1460は胴部外面に乱れた刺突文を2列加える。1461は、頸部内面下端に粘土紐の積み上げ痕が残る。1462は口縁部内面に指頭圧痕が残る。1463・65は器肉が厚く、口縁部は短く直立する。1464の口縁部は、先細りながら外傾する。1466の口縁部は内傾気味で、内面に指頭圧痕が残る。1467～70は口径17cm前後を測る。1467は頸部で明瞭に屈曲する。1468は頸部外面にハケ原体が触れた痕跡が残る他、擬凹線の彫りは浅い。1469は胴部内面にケズリを加える。1470は、口縁部内面にタール状の炭化物が付着する。1471は口径15.7cmを測り、胴部に比して口縁部が厚い印象を受ける。1472は、口縁部が横方向に大きく張り出す。1473は口径13.8cmを、1474は口径12.5cmを測る。1475は口径15.3cmを測り、頸部～口縁部内面をなだらかに仕上げる。

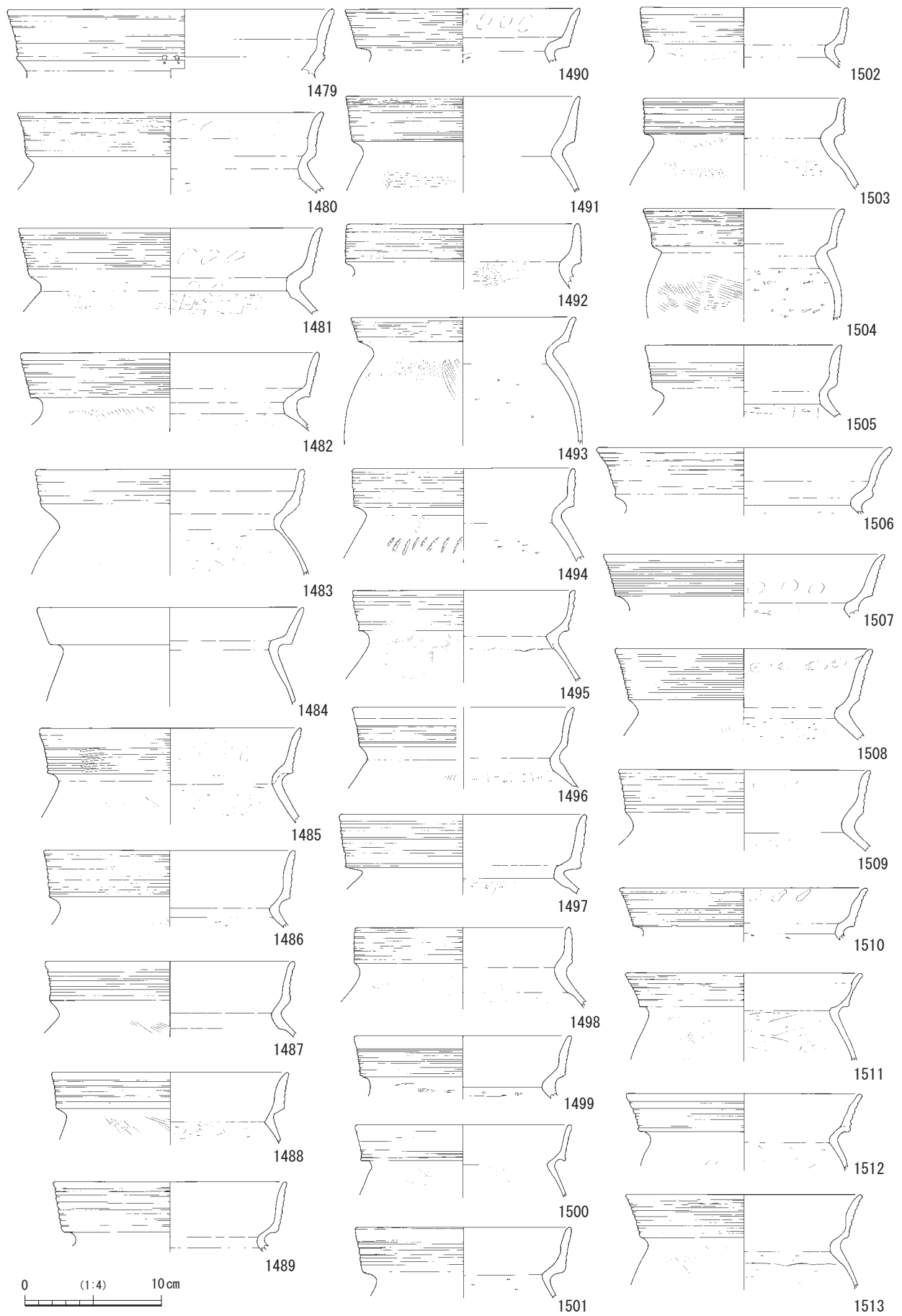
第154図1477～第156図1522の有段口縁をもつ甕は、弥生時代後期末～終末に位置付けられる。1477は口径30.1cmを測る大型の甕で、頸部外面にハケ原体の接触痕が明瞭に残る。1478は口径26.3cmを測り、胎土中に砂粒が多く混ざる。1479は口径23.8cmを測り、口縁部下端2ヶ所に種子の剥離痕が残る。1480～82は口径22cm前後を測り、1480は8条1単位の原体を2周させて擬凹線を施す。1483は、内湾気味の口縁部外面に4条1単位の擬凹線を施す。1484は口縁部内面にかすかに指頭圧痕残り、焼きゆがみが目立つ。1486・87は口径18.0cmを測り、1486は胎土中に砂粒が多く混ざる。1488～92は口径17cm前後を測り、擬凹線は1488が5条1単位、その他は8条以上が1単位となる。1489の器肉は薄い。1490は、口縁部内面に指頭圧痕を明瞭に残す。1491は胎土の練りが不十分で、マーブル状の色調を呈する。古相の1492は肉厚で、胴部内面をハケ調整で仕上げる。1493～1501は口径16cm前後を測る。1493は、胴部外面に1列の刺突文がかすかに残る。1494は、胴部外面の刺突文が乱れる。1495は、頸部内面下端に粘土紐の積み上げ痕を残す。1498の器肉は厚く、口縁部が直立する。1499の口縁部内面には、かすかに指頭圧痕が残る。1500は、口縁部下端を鋭く仕上げる。1502は口径15.1cmを、1503は口径14.5cmを測り、口縁部はともに直立する。1504の胴部は球胴形を呈すると考えられ、擬凹線は乱れる。1506～22は、口縁部の外反度合いが大きい。1506は口径21.4cmを測る。1507は



第153图 C区下層SD5501出土遺物実測图1 (S=1/4)



第154図 C区下層SD5501出土遺物実測図2 (S=1/4)



第 155 図 C 区下層 SD5501 出土遺物実測図 3 (S = 1/4)

擬凹線の彫りが深く、1508とともに胎土中に大粒の礫が混ざる。1509は口径約18cmを測り、6条1単位の原体を用いて擬凹線を施す。1510～13は口径17cm台を測り、器厚は薄い印象を受ける。1510は口縁部内面に指頭圧痕が残る。1512は右下がりの擬凹線を施し、1513の胴部外面のハケ調整は目が粗い。第156図1514～20は口径16cm前後を測る。1514の口縁端部は先細りながら、ゆるやかに外反する。1515は、口縁部下端で明瞭に屈曲する。1516は、外面の摩滅が著しい。1517は5条1単位の原体で擬凹線を施す。1519は口縁部内面の指頭圧痕が目立つ。1520は摩滅が目立つ。薄手の1521は口径15.2cmを測り、擬凹線の彫りは浅い。1522の口縁部外面に施された擬凹線は、ほとんどみえない。1523は古墳時代前期初頭の球胴形の土師器甕で、口径15.7cmを測る。胴部外面のハケは粗い印象を受ける。

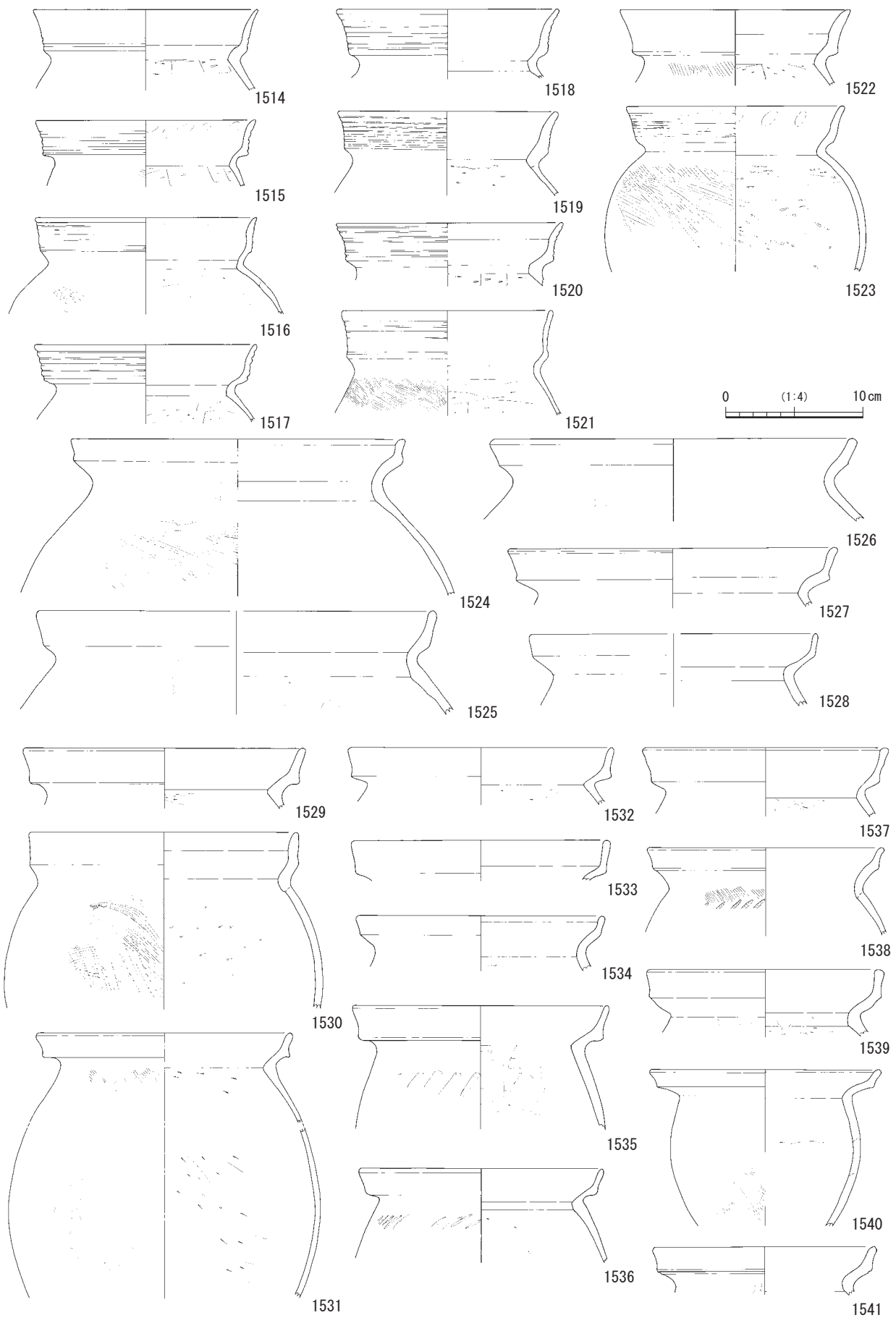
第156図1524～第157図1573は、有段口縁に擬凹線を施さない弥生土器甕であり、1524～1558が後期後半、1559～73が終末に位置付けられる。古相の1524は口径24.0cmを測り、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1525は口径約28cmを測り、器肉は厚い。1526・27は口縁部下端で明瞭に屈曲する。口径は、1526が20.6cm、1527が23.4cmを測る。1528・29は、口径20cm前後を測る。1528は胎土中に赤色酸化粒が多く混ざり、摩滅が顕著である。1530は口径19.3cmを測り、口縁部は直立気味にたちあがる。1531・32は、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1533は口径18.6cmを測り、口縁部は直立する。1535は比較的長めの刺突文を粗い間隔で施すのに対して、1536の刺突文の間隔は狭い。1537は口径17.6cmを測り、胎土中に多くの砂粒が混ざる。1538は口径17.0cmを測り、口縁端部で小さく外反する。1540は口縁部が横方向に大きく張り出し、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1541は、口径16.0cmを測る。第157図1542は、口縁部が若干内湾気味となる。1543は口径15.7cm、1544は口径14.2cmを測る。1545の口縁端部は外傾具合が大きい。1546・47は口縁端部を丸く仕上げる。1548～56は弥生時代後期～終末の甕底部片である。1548の底部外面は、ハケ調整の後にヘラ記号「×」を刻む。1549・50は底部肉厚である。1551～56の底部は縮小が進み、胴部は外傾度合いを増す。1552は外面に黒斑が残る。1555は摩滅が目立つ。1557・58は口縁部が長くのび、胴部外面に乱れた刺突文を施す。1557は口径14.0cmを、1558は口径16.4cmを測る。1559は口径23.0cmを測り、先細る口縁部が直立する。1560は口径20.1cmを測り、口縁部内面に指頭圧痕がかすかに残る。1561～64は先細る口縁部が直立気味であるのに対して、1565～67・69～73は口縁端部で小さく外反する。1568は口径25.0cmを測る大型の甕で、胴部の器肉は薄い。

第157図1574～第159図1615は土師器甕である。有段口縁の甕は、1574～79が古墳時代初頭、1580・81が古墳時代前期前葉に位置付けられる。1574は口径19.8cmを測り、口縁部下端に明瞭な稜をつくりだす。1575は口径16.0cmを測り、胴部は球胴形を呈する。1576は口径15.4cmを測り、外傾する有段口縁は形骸化する。厚手の1577は口径15.6cmを測り、胴部内面に棒状工具で粗いケズリ調整を施す。第158図1578・79は、口縁部が緩やかに屈曲する。胴部内面の調整は、1578がケズリ調整、1579がハケ調整となる。1580・81は、口縁部が有段状を呈する。1580は口径16.4cmを測り、口縁部内面に工具痕を残す。1581は胴部外面に粗いハケ調整を施す。

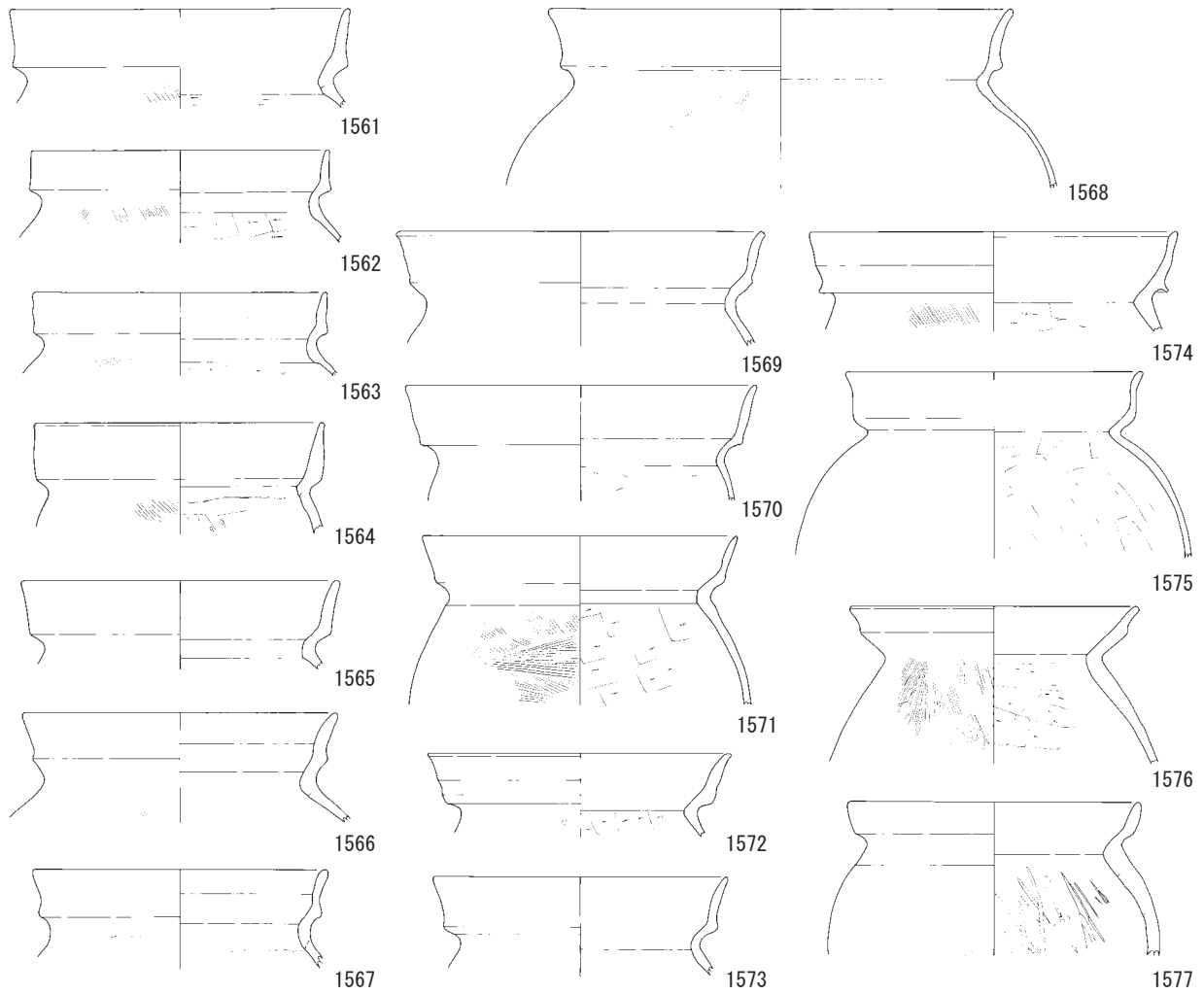
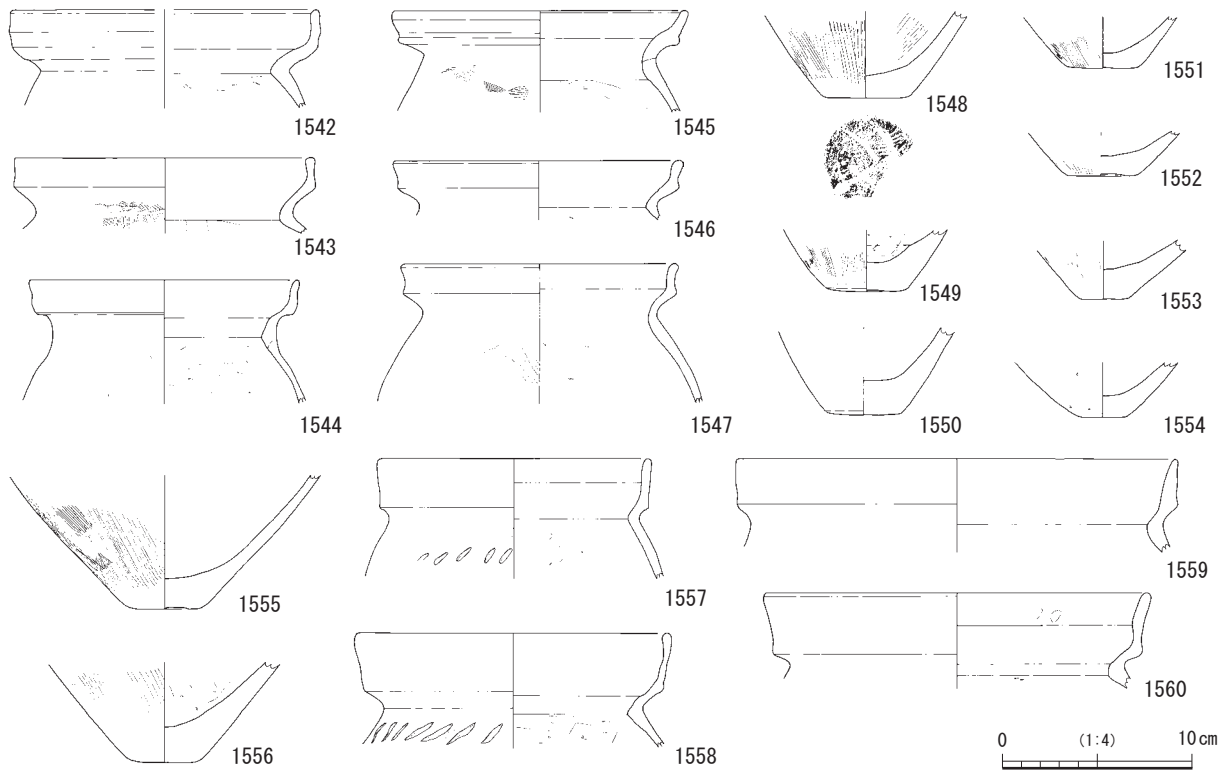
第158図1582～93は胴部外面タタキ成形の甕で、胴部内面をナデまたはハケ調整で仕上げることを基本とする。本書では、本遺跡が北加賀でも北側に位置することから古墳時代初頭に位置付けた。1582・84の胴部内面には粘土紐の接合痕が残る。1582は口径18.4cmを、1583～85は口径約16cmを測る。1586は口縁端部を上方にのぼし、胴部内外面に異なるタタキ原体を用いる。1587・90の胴部内面にはハケ調整が、1588・89にはナデ調整がそれぞれ残る。1591は球胴形を呈する。平底の1592は、底部外面下端にミガキ状の調整痕が残る。1593は、小片のため傾きに不安を残す。

第158図1594～第159図1613は、くの字口縁の甕で、頸部内面に粘土紐の接合痕を残す個体が目立つ。1594～1605・07が古墳時代初頭、1606・08～13が古墳時代前期前葉に位置付けられる。1594は口径20.1cmを測り、口縁部は直線的に長くのびる。1595・97は摩滅が目立つ。1596は口径18.5cmを測り、胴部内外面ともハケ調整で仕上げる。1598は口径16.2cmを測り、口縁部は外傾具合が弱い。1599は口縁部に強いヨコナデ調整を施

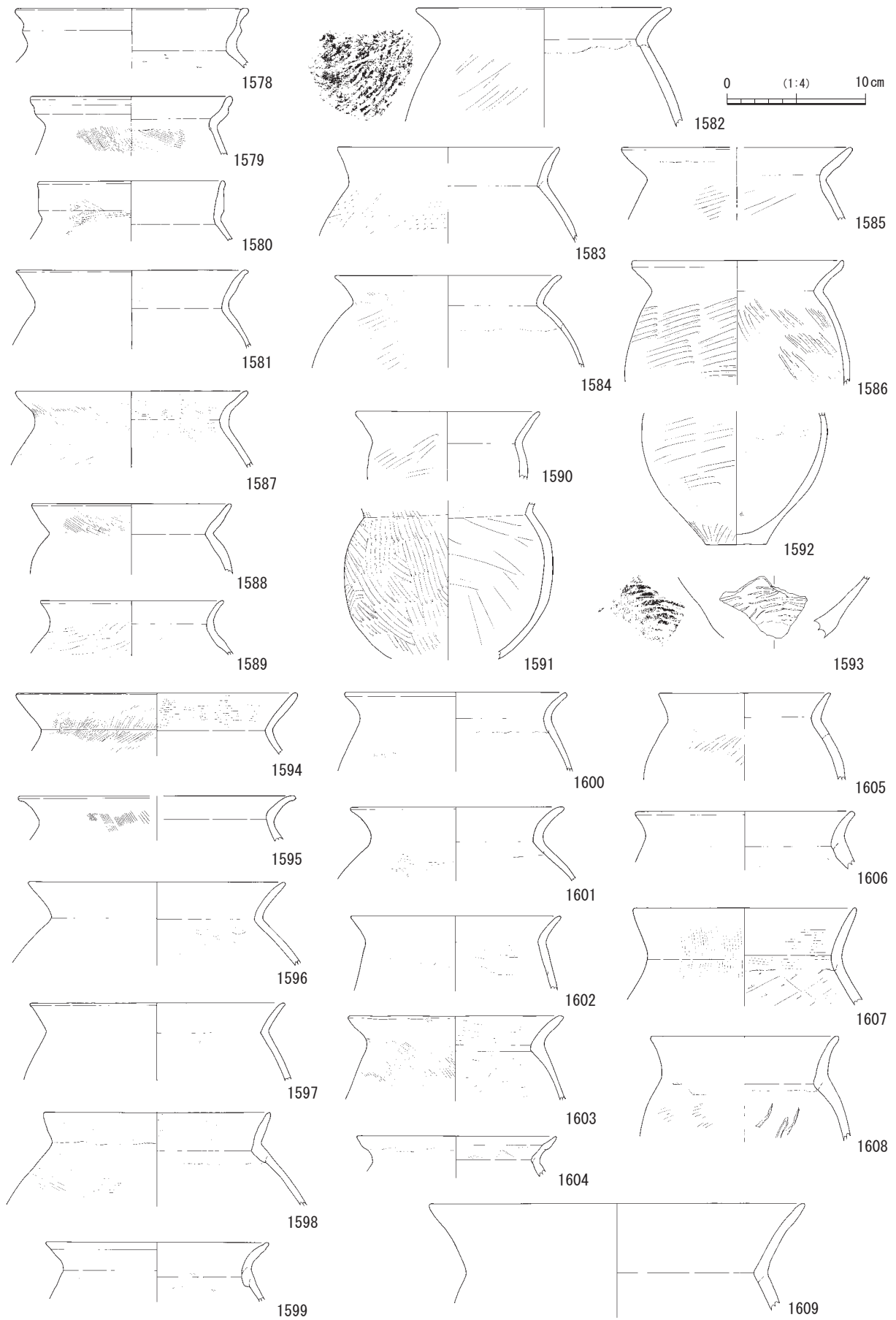
第3節 B・C区下層



第156図 C区下層SD5501出土遺物実測図4 (S=1/4)



第157図 C区下層SD5501出土遺物実測図5 (S=1/4)



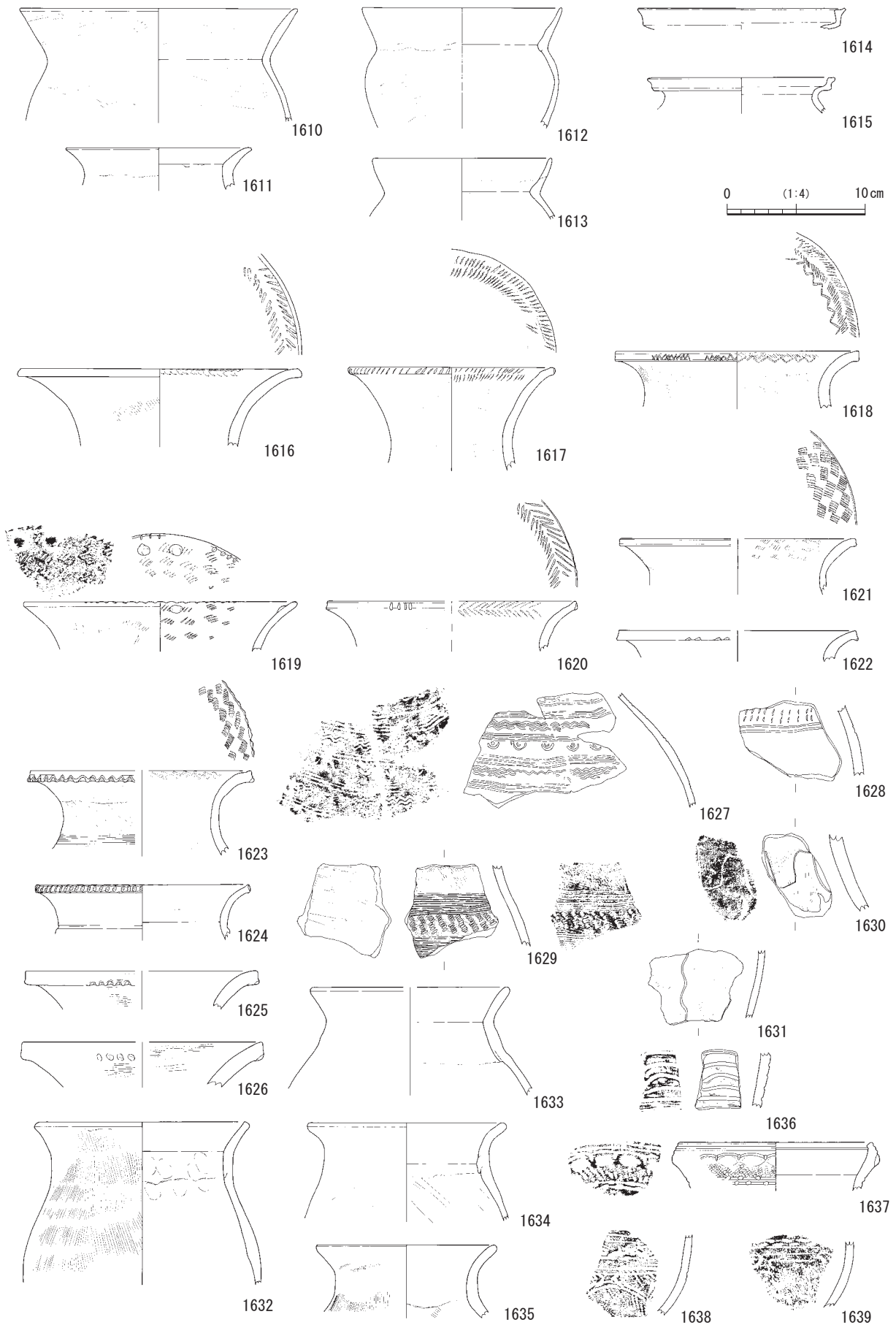
第 158 図 C 区下層 SD5501 出土遺物実測図 6 (S = 1/4)

す。1600・01は胴部内面をナデ調整で仕上げる。1602は口径15.1cmを測り、胴部は寸胴形に近い。1603は口径15.0cmを測り、胴部内面にケズリ調整を加える。1604の口縁部は、粗い仕上げである。1605は口径12.2cmを測り、胴部外面のハケ調整に目の粗い原体を用いる。1606の口縁部は短く外反し、胴部内面のケズリ調整は粗い印象を受ける。1607は口径16.0cmを測り、口縁部は長くのびる。厚手の1608は口径13.5cmを測り、胴部内面に粗いケズリ調整を施す。1609・10は口縁部が長くのびる甕で、1609が口径27.0cm、1610が口径20.0cmを測る。調整は1609がナデまたはヨコナデ調整であるに対して、1610はハケ調整となる。1611は口径13.4cmを測り、短い口縁部が外傾する。1612・13は口径13～14cmを図り、口縁部は内湾気味にのびる。胴部内面の仕上げは、1612がハケ調整、1613がナデ調整である。1614・15は東海系のS字口縁の甕で、口縁端部を平坦に仕上げる。1614が口径15.0cm、1615が口径13.6cmを測る。

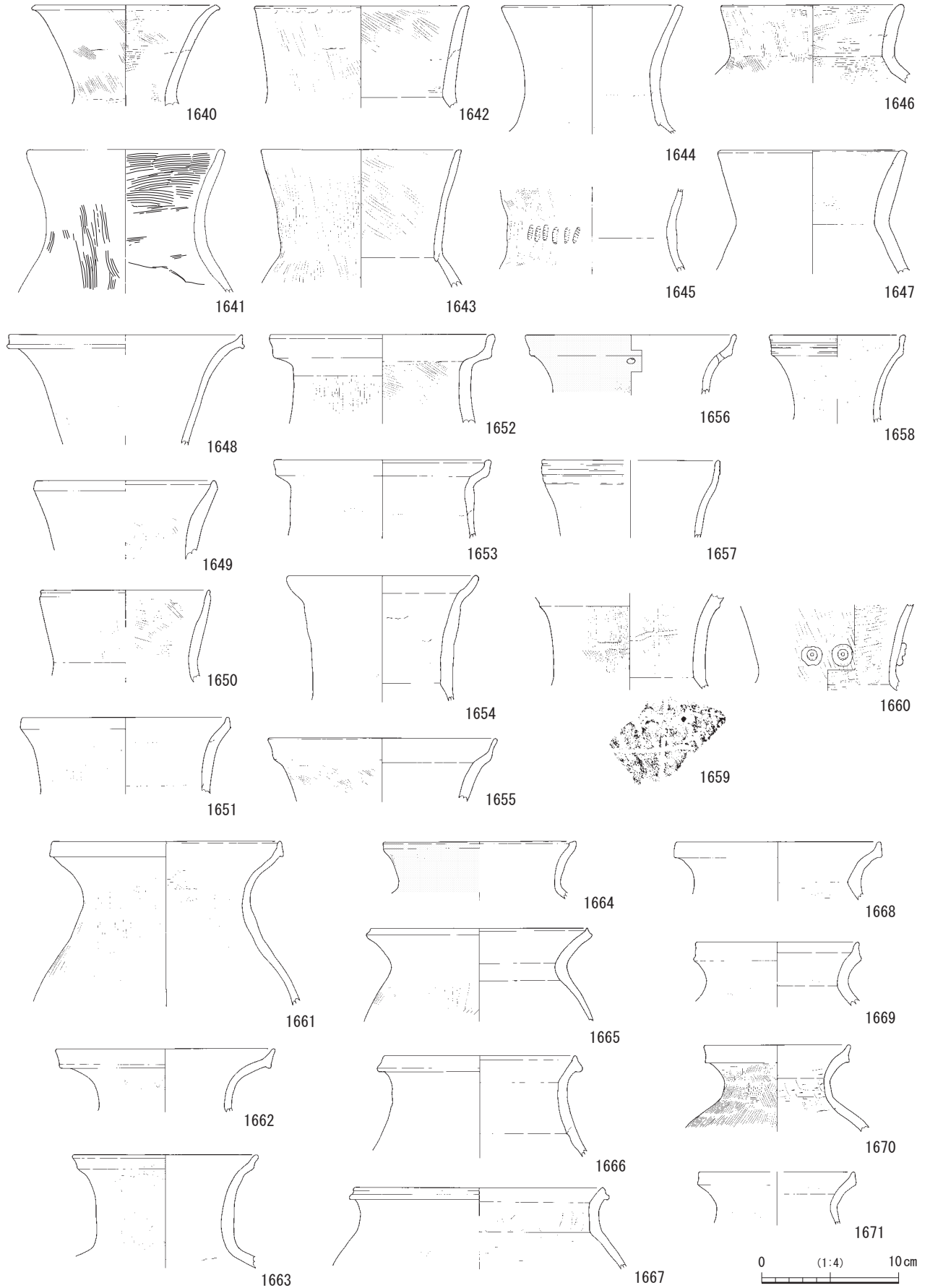
第159図1616～第162図1737は壺で、うち1616～1635は弥生時代中期後半に位置付けられる。1616・17の口縁部は、外反しながら長くのびる。口縁部内面を1616が綾杉文、1617が2列の斜行短線文で加飾される。1618は口径17.6cmを測り、口縁部内面に綾杉文・鋸歯文、外面に鋸歯文をそれぞれ施す。1619は、口縁部内面に1列の刻みと3列の斜行短線文刻みを施した後、円形浮文を貼り付ける。1620は口縁部内面に綾杉文が全周する他、外面の一部に刻みを加える。1621は、口縁部内面に3列の斜行短線文を雑に施す。1622は、外面に煤が付着する。1623は口縁部内面を斜行短線文、外面を刻み、頸部外面を直線文で、それぞれ加飾する。1624は口径15.4cmを測り、頸部外面に1条の沈線文が残る。1625は、口縁部外側下側に粘土紐を貼り付けて肥厚させた後、刻みを加える。1626は黒斑が残る。1627～31は胴部片である。1627は直線文、波状文、扇線文を、1628・29は斜行短線文、直線文を組み合わせて、それぞれ加飾する。1630・31は外面に波状の線刻が残る。1632～35は口縁部が短く外反するナデ肩の壺で、いずれも頸部内面に粘土紐の積み上げ痕を残す。1632～34が口径約14cm、1635が口径12.8cmを測る。

第159図1635～39は、第153図1437～41の甕と同様に弥生時代後期前半に位置付けられる。1635は砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、外面はナデ調整の後に沈線文を施す。1637～39は天王山式の壺片である。1637は口径13.9cmを測り、文様構成、胎土の特徴が1437と共通する。1638は縄文の後に沈線文で、1638は交互刺突文、沈線文で、それぞれ加飾する。ともに明瞭な煮沸痕が残り、胎土は1440・41等と共通しており、黒褐色を呈する色調も近似する。

第160図1640～第161図1675の壺は、弥生時代後期に位置付けられる。後期前半の長頸直口壺1640は、口径13.2cmを測る。1641～45は、後期後半の長頸直口壺である。1641・42は口径14cm前後を測り、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1642は口径15.5cmを測り、口縁端部には整形時の指頭圧痕が残る。1644は摩滅が顕著で、1645は頸部外面に刺突文を加える。短頸直口壺1646・47は口径約13cmを測り、器肉は厚い印象を受ける。1646は、粘質で精良な胎土を用いる。長頸壺1648～50は、後期前半に位置付けられる。1648は口径16.9cmを測り、1649とともに外面に煤が付着する。1650は口径12.2cmを測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげ、外面は沈線状を呈する。1651～60は、後期後半の長頸有段口縁の壺である。1651は口径15.0cmを測り、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1652・53は口縁部が明瞭に屈曲するのに対して、1654は緩やかに屈曲する。1655・56は口径16cm前後を測り、1656は頸部に径4mmの孔を穿つ。1657は口縁部外面に4条1単位の擬凹線を、1658は5条1単位の擬凹線を施す。1659は頸部内面に太いへら状工具で「+」状の記号を記す。両面赤彩の1660は、貼り付けた円形浮文上を、二重の竹管文で加飾する。短頸有段壺1661・62は口径16cm前後を測り、後期前半に位置付けられる。後期後半の有段壺1663の胴部は球胴形を呈する。1664～70は、後期前半の短頸壺と考えられる。1664は口縁端部を平坦に仕上げ、外面を赤彩する。1665・66は、口縁端部を上方につまみ上げる。広口の1667は口径18.2cmを測り、胴部内面にケズリ調整を施す。有段口縁壺1668～71の胴部は、球胴形を呈すると考えられる。1668が口径15.0cm、1669～71が口径11cm前後を測る。1672は、肥厚した口縁部



第 159 图 C 区下層 SD5501 出土遺物実測图 7 (S = 1/4)

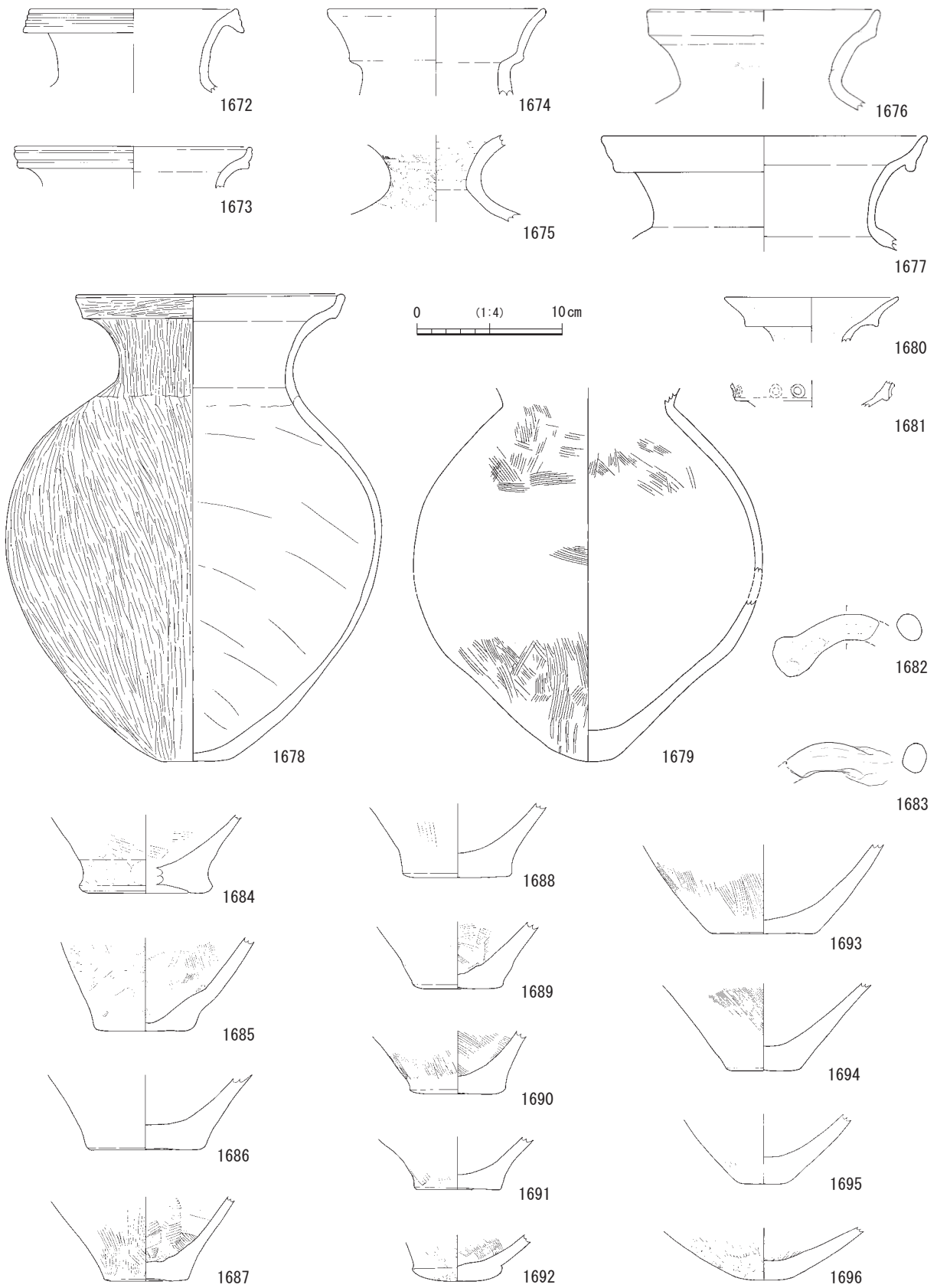


第160図 C区下層SD5501出土遺物実測図8 (S=1/4)

に3条1単位の擬凹線を施す。1673～75は後期後半に位置付けられる。1673は口径16.2cmを測り、口縁部を2条の沈線文で加飾する。二重口縁の1674は口径14.8cmを測り、口縁部が大きく外反する。1675は、丁寧なミガキ調整を施す精品である。弥生時代終末の短頸有段壺1676は口径15.7cmを測り、口縁部内面に指頭圧痕が残る。古墳時代初頭の土師器有段壺1677は口径16.6cmを測り、摩滅が著しい。弥生時代後期後半の広口壺1678は口径18.2cm、器高32.3cmを測り、外面全体にミガキ調整を施す。1679～81は、古墳時代初頭の土師器壺である。1679は、底部外面の整形にタタキを用いる。1680・81は東海系のパレス形の壺で、1680は一对の円形浮文を貼り付ける。1682・83は、弥生時代後期後半の丹後系壺の把手と考えられる。1684～96は壺底部片である。古相を呈する1684は、底部を台状に仕上げる。

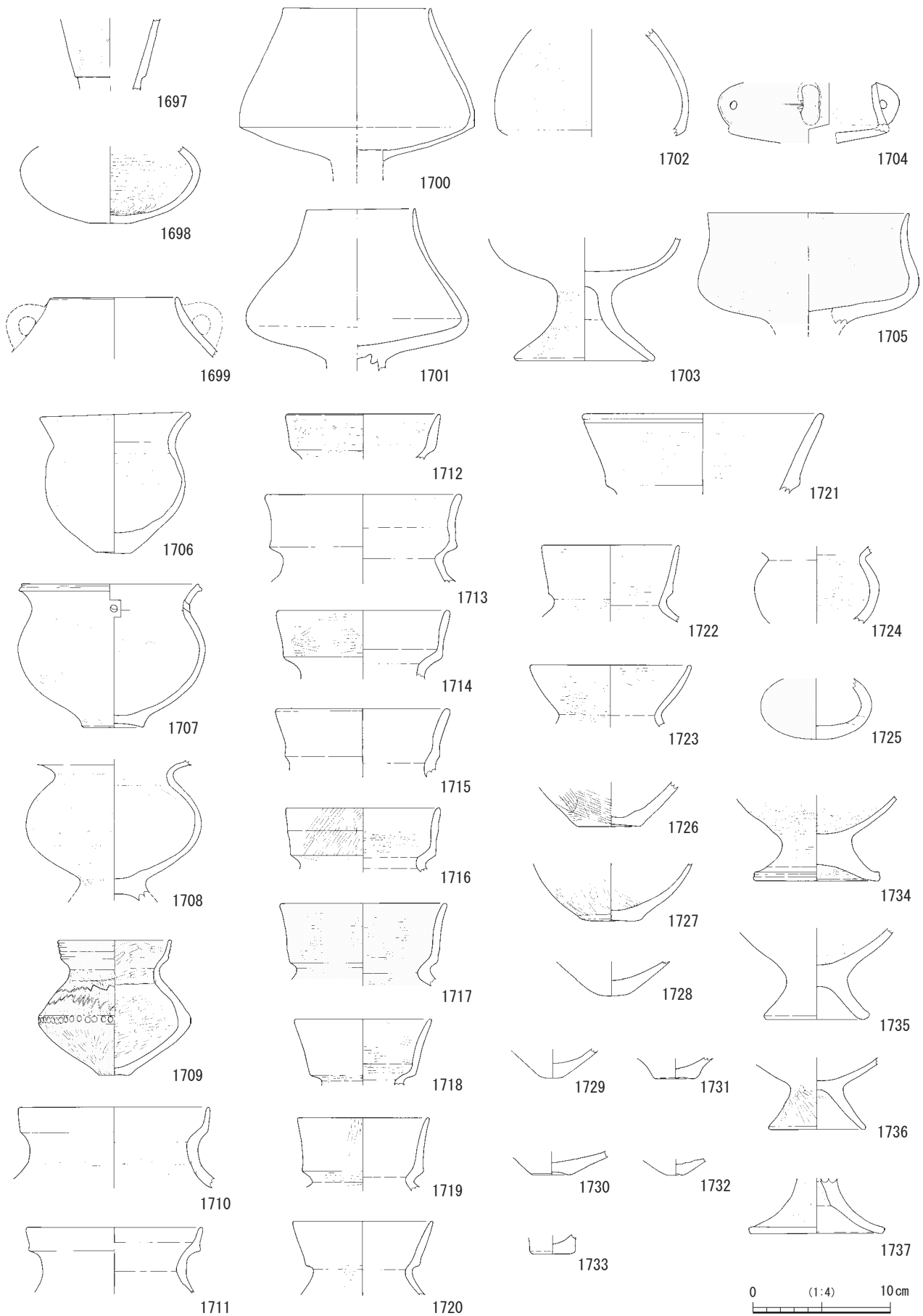
第162図1697～1705は、弥生時代後期後半の壺である。1697・98はフラスコ状の長頸壺で、1697は内面にもミガキ調整を施す。1699～1702は、胴部無花果形を呈する脚付壺である。1699は口径9.0cmを測り、把手が剥離する。1700は口径10.7cm、1701は口径7.9cmを測り、ともに摩滅が著しい。1702は外面に被熱痕が残る。1703～05は無頸壺である。1703の脚は緩やかにひろがる。外面赤彩の1704は、把手数が不明である。両面赤彩の1705は口径14.5cmを測り、口縁部が小さく外反する。1706～1719は弥生時代後期～終末の小型壺類である。広口の1706は口径11.6cm、器高10.3cmを測り、外面に煤が付着する。凹線文系の1707は口径13.0cm、器高10.4cmを測る。口縁端部に1条の沈線が巡り、頸部に穿った孔数は不明である。また、煮炊き痕が良好に残る。1708は有段口縁の台付壺と考えられ、煮炊き痕が残る。後期後半に位置付けられる1709は口径8.2cm、器高9.8cmを測り、赤彩を施す。胴部上半を雑な4条の鋸歯文で、平坦に仕上げた胴部中位を竹管文で、それぞれ加飾する。1710～19は弥生時代終末の有段壺で、1710が口径13.8cmを、1711が口径12.8cmを測る。1712は、丁寧なミガキ調整が残る。1713～19は、口縁部が長くのびる。1717は口径12.0cmを測り、両面を赤彩する。1720～23は古墳時代初頭の小型壺である。1720～22は口縁部が直線的に外傾する。1721が口径17.3cm、1720・21が口径約10cmを測る。東海系の小型壺1723は口径11.5cmを測り、口縁部は内湾気味にたちあがる。小型の土師器壺1725は、外面を赤彩する。1726～37は、弥生時代後期～終末の小型壺類底部と考えたが、1733は手づくね土器の可能性を残す。1734は、丁寧に仕上げられた精品である。

第163図1738～第164図1783は高坏で、うち1774～83は古墳時代に属する。弥生時代後期前半と考えられる1738は、脚裾径20.4cmを測る。外面をミガキ調整の後に、直線文、波状文、鋸歯文、鋭利な工具による刺突文で端正に加飾する。1739～41は弥生時代後期後半に属する。1739は、外面をスタンプ文、三角形の区画文(区画内に斜行文)、同心円文で加飾する。1738と同様に、倒位で煮沸容器に転用するため、内面に炭化物が付着する。1740は、スタンプ文の剥離が目立つ。赤彩の1741は、把手数が不明である。後期前半の1742は口径30.4cmを測り、口縁部で大きく外反する。1743～47は、後期後半に属する。1743は口径31.3cmを測り、煮沸容器に転用した痕跡を良好に残す。1744・45は口径25cm前後を測る。円柱状の脚部1747は、摩滅が顕著である。1748～52は弥生時代終末に位置付けられ、口縁部は大きく外反しながら長くのびる。両面ミガキ調整を基本とし、1748は内外面とも赤彩を施す。1752は口径17.6cmを測り、内外面ともミガキ調整を施す。外面赤彩の脚裾部1753は、倒位で煮炊き容器に転用した痕跡が残る。有段脚1755の胎土は精良である。高坏脚1756～1765は弥生時代後期後半に、1766～73は終末に位置付けられる。1756は、倒位で煮沸容器に転用した痕跡を良好に残す。1757・60・62は、内面に坏部接合に伴うシボリ痕が目立つ。1764は、混和材の少ない粘質な胎土を用いる。1766は、成形段階のハケ調整が浮き出してみえる。1770は摩滅し、穿孔数は不明である。小型高坏1771は脚裾径10.0cmを測り、外面を赤彩する。1773は、ミガキ調整を良好に残す。1774～82は古墳時代初頭、1783は前期前葉の土師器高坏である。1776・77は、円柱状の脚から裾部が大きく外展する。1778・79は小型低脚の高坏で、1779の穿孔数は判然としない。1780は口径9.8cmを測り、低い脚を付す。1781は、脚裾部が大きく外展する。1782は口径約25cmを測る東海系の高坏で、口縁頂部が沈線状にくぼむ。1783は、脚裾径

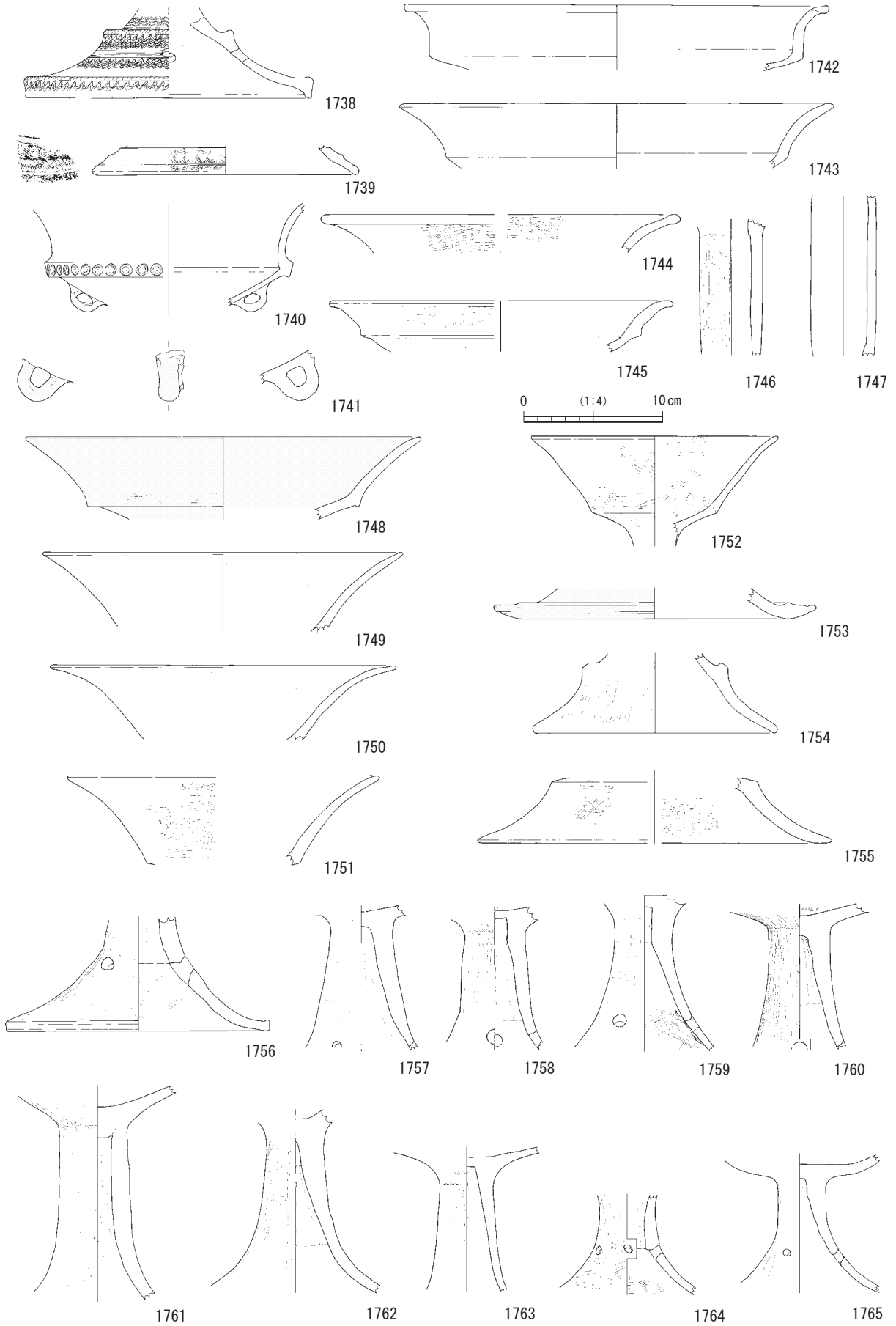


第 161 図 C 区下層 SD5501 出土遺物実測図 9 (S = 1/4)

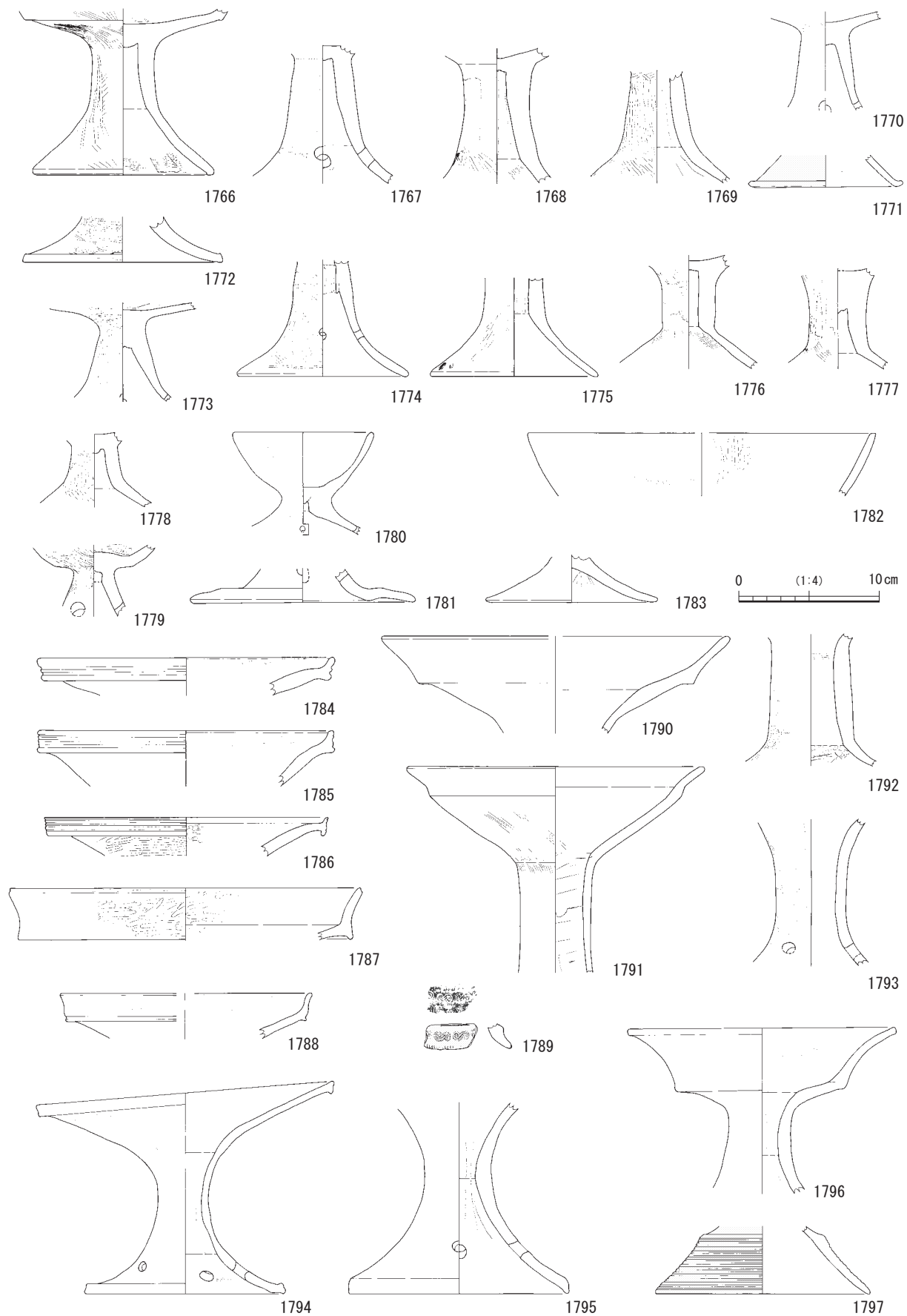
第3節 B・C区下層



第 162 図 C 区下層 SD5501 出土遺物実測図 10 (S = 1/4)



第163図 C区下層SD5501出土遺物実測図11 (S=1/4)



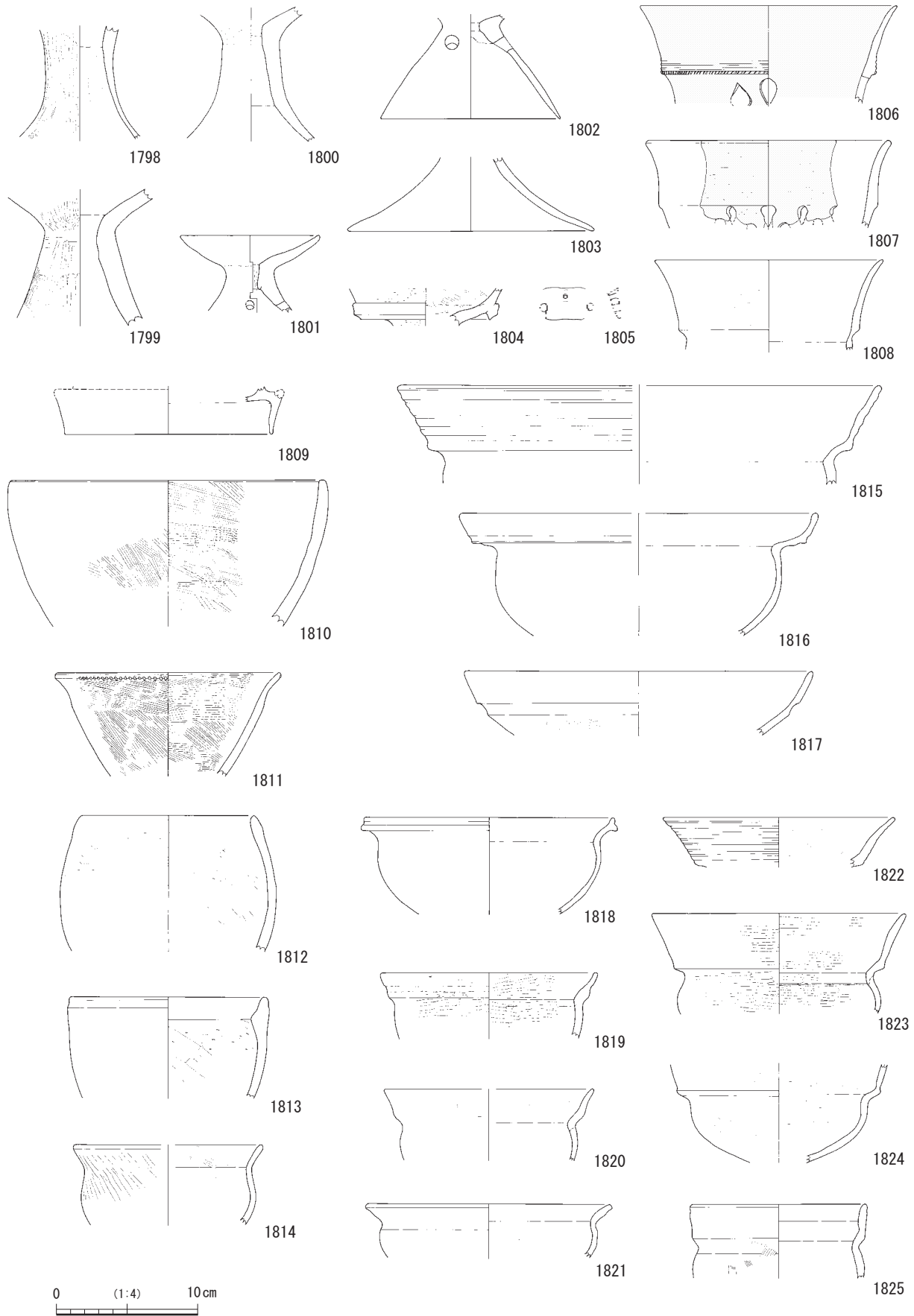
第164図 C区下層 SD5501 出土遺物実測図12 (S=1/4)

12.2cmを測る。

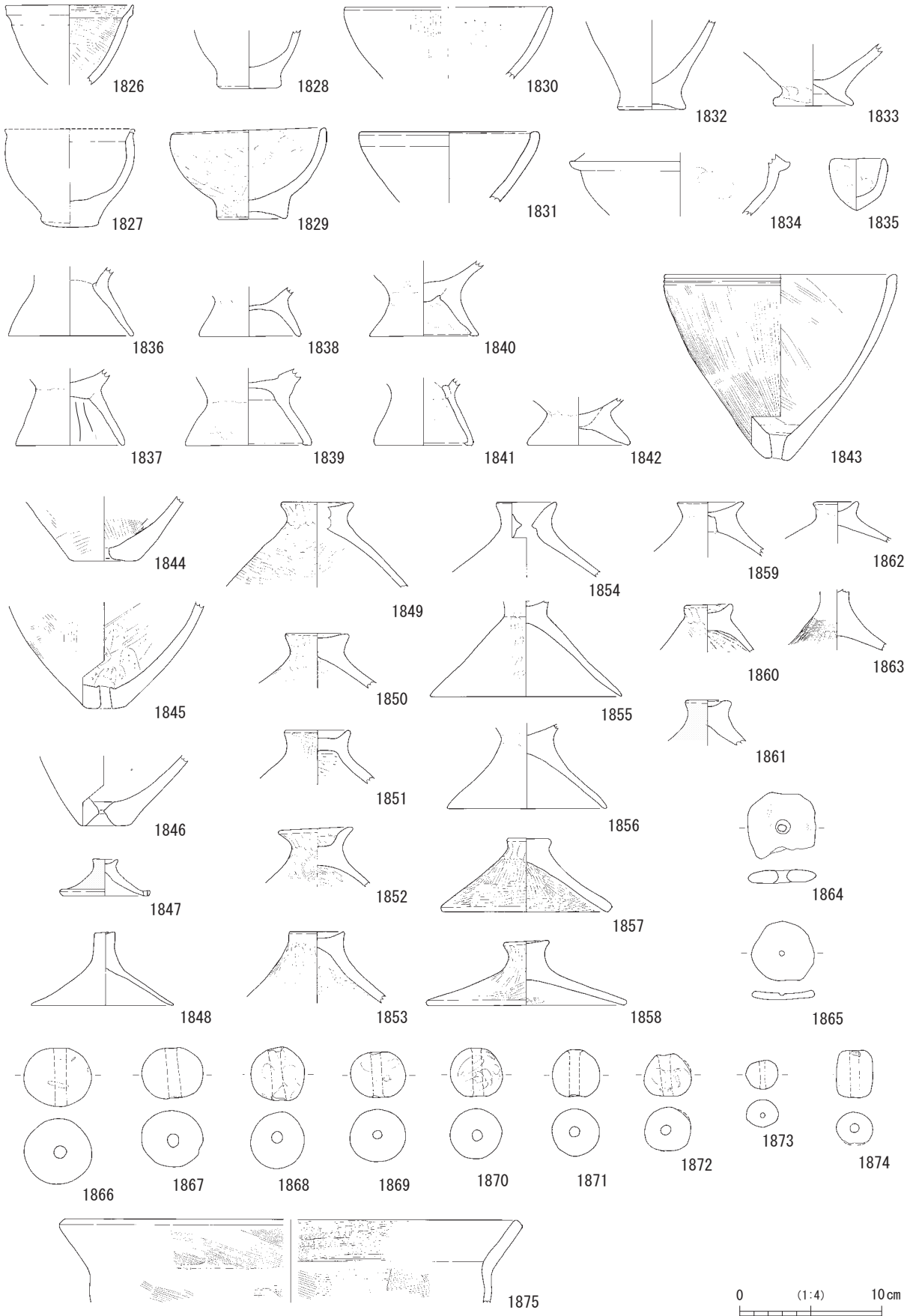
第164図1784～第165図1808は器台で、1784～95・98が弥生時代後期、1796・97・99・1800・1804～08が終末、1801～03が古墳時代に属する。古相の1784・85は受部径21.0cmを測り、口縁端部に擬凹線を施す。1786は口径20.1cmを測り、上下にひきのばした口縁帯に4条の擬凹線を施す。有段の1787・88は、口縁部下端にしつかりとした稜をつくりだす。赤彩の受部片1789は、外面を刻みとS字状渦文のスタンプ文で加飾する。有段の1790・91は口縁部が外傾しながら長くのびる。1790は胎土中に赤色酸化粒が多く混ざり、1791は屈曲が弱い。円柱状の脚部1792は、内面全体に煤が付着し、煮炊きに転用された可能性が高い。1793は、3ヶ所に径約1cmの孔を穿つ。1794は口径21.0cm、器高15.0cmを測り、受部が大きく外反する。1795は脚裾部を下方に引きのばす。1796は口径18.8cmを測り、外面に黒斑が残る。1797は外面を密な擬凹線と赤彩で加飾する。1798とともに、内面の煤付着から煮炊き容器に転用した可能性が高い。厚手の1799は、胎土中に砂粒が多く混ざる。1801は古墳時代初頭、1802・03は古墳時代前期の小型器台である。1801は口径9.8cmを測り、受部中心を丸棒状工具で穿つ。1802は脚が内湾気味にのびるのに対して、1803は大きく外展する。1804～09は裝飾器台で、1806～08の口径は16～18cmに分布する。1804は内面に煤が付着し、1805は径3mmの孔を上下で交互に穿つ。赤彩の1806・07は、無花果様の透かしを穿つ。

第165図1810～第166図1834は鉢類で、1810・11が弥生時代中期後半、1812・13・18が後期前半、1814・15～17・21が後期後半、1819・20・22～24が終末、1825が古墳時代初頭に、それぞれ位置付けられる。1810は口径22.0cmを測り、外面に黒斑が残る。1811は口径15.7cmを測り、外傾する口縁端部に下方から刻みを加える。1812は口径12.0cmを測り、内面をナデ調整で仕上げる。1813の口縁部は内側で肥厚し、外面をミガキ調整、内面をケズリ調整で仕上げる。素縁の1814はハケ調整が残り、扁平な印象を受ける。1815～17は大型の有段鉢である。1815は口径約34cmを測り、摩滅が著しい。1816は口径約25cmを測り、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざる。1817は、沈線状の強いヨコナデで有段を表現する。1818は口径17.5cmを測り、口縁端部に1条の沈線を表現する。煮炊き容器に用いた痕跡が良好に残る。1819が全面にミガキ調整を施すのに対して、1820は口縁部のみにミガキ調整を加える。扁平な1821は口径17.2cmを測り、内面に黒褐色のコゲが付着する。1822は擬凹線施文後にも、丁寧なミガキ調整を加える。1823の口縁部は外反しながら長くのびる。土師器甕1825は口径12.2cmを測り、胴部内面をケズリ調整で仕上げる。第166図1826～31は、弥生時代後期の碗形を呈した小型鉢である。1826は口径9.0cmを測り、内面全面にタール状炭化物が付着する。1827～29は、底部台状を呈する。1827は口縁端部で小さく外反し、胎土の練りはよくない。1829は口径10.5cm、器高6.5cmを測り、ミガキ調整で仕上げる。1830は口径約14cm、1831は口径9.3cmを測る。1832は細身の鉢で、底部有台状に仕上げる。1834は円盤状の器形を呈すると考えられ、鏢状の突帯を貼り付ける。手づくね土器1835は口径3.5cm、器高3.6cmを測る。小型甕脚部片1836～40・42は粗い成形で、被熱に伴う変質・変色が顕著である。類似形態の1841を含めて、古墳時代初頭の製塩土器と考えられる。1843～46は弥生時代後期の有孔鉢(甗)である。1843は口径16.2cm、器高13.1cmを測り、口縁部外面に1条の沈線を施す。内外面に煤が付着する。1844・45は外側から、1846は内外両面から底部を穿孔する。

第166図1847～63は蓋である。外面赤彩の1847は口径6.0cm、器高2.6cmを測り、2孔一対の円孔を2ヶ所に穿つ。つまみが細長い1848が口径9.9cm、器高5.2cmを、厚手の1857が口径11.6cm、器高5.2cmを、扁平な1858が口径11.6cm、器高4.6cmを、それぞれ測る。また、1854・59は内面頂部をくぼませた後、上方から穿孔を行う。1859は孔径約1mmと、きわめて狭い。1864・65は土製円盤である。1864は甕胴部片を転用し、両面から径0.5cmの孔を穿つ。1865は未製品で、内側に深さ約2mmの穿孔痕が残る。重さ10.2gを量る。1866～74は土錘で、1874以外は不整形球形を呈する。重さは、1866が72.9g、1867・68が50g前後、1869～71が35～40g弱、1872・74が20～25g、1873が7.5gに分布する。また、1872の側面に人面様のヘラ描きが認められる(写



第165图 C区下層 SD5501 出土遺物実測图 13 (S=1/4)



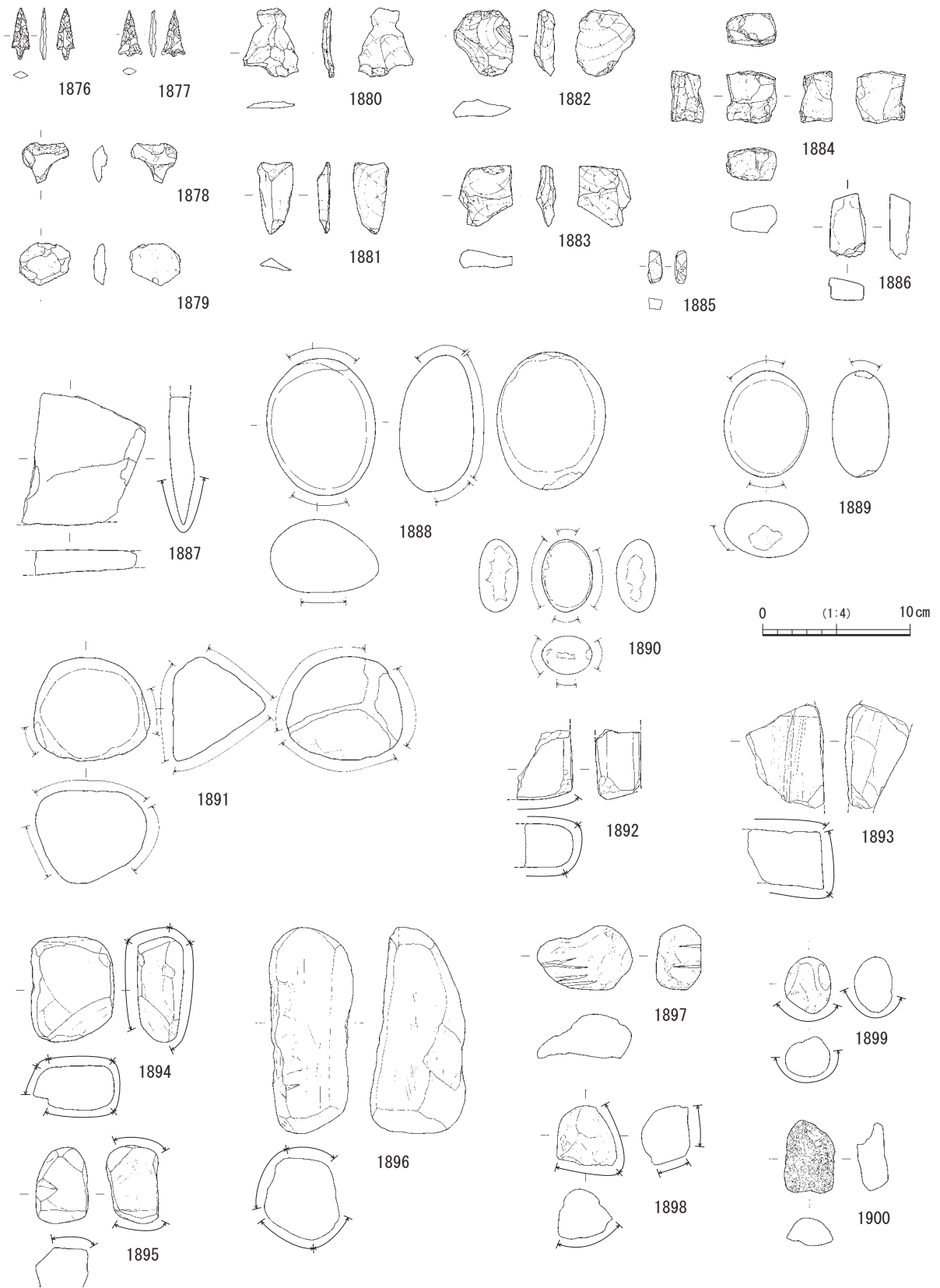
第166図 C区下層SD5501出土遺物実測図14 (S=1/4)

真図版80)。1875は、上層に属する非ロクロ成形の土師器塙で、調査区壁から転落したものと考えられる。

石器・石製品は、第167図1876～1900を図示した。1876・77は有茎細身の石鏃で、1876は黒褐色の玉髓質泥岩を、茎部欠損の1877は安山岩を用いる。剥片1878～83のうち、1878は石鏃未成品の可能性をもつ。石材は、1878・79が鉄石英、1880・81が富来産のガラス質安山岩、1882・83が玉髓質泥岩である。1884・86は硬質で深緑色を呈する緑色凝灰岩製で、石核1884が重さ31.9gを、管玉未成品で粗割り段階の1886が同22.9gを、それぞれ量る。鉄石英製の管玉未成品1885は、角柱体に加工された段階で、重さ2.5gを測る。打製の横刃型石包丁1887は、使用に伴い刃部が平滑となる他、被熱に伴い煤が付着する。石材は安山岩である。1888～91は磨石・敲石類である。平面楕円形を呈する1888～90のうち、石英製の小型品1890は重さ62.9gを量り、加賀地方産出と考えられる。不整四面体の1891は花崗岩を用いる。1892～99は砥石である。安山岩製と考えられる1892は、被熱に伴い煤が付着する。砂岩系の1893・94のうち、刃物痕が残る1893の器面は曲線で構成される。凝灰岩製の1895は粒子が粗く、1896は敲打痕が残る。1897～99は軽石凝灰岩製で、1897には最深5mmの刃物痕が明瞭に残る。海綿1900は一部変色する。

第168図1901～第173図1978は木製品で、1901～1905・07はコナラ属アカガシ亜属を用いた鋏・鋤類である。直柄広鋏の身1901は、刃先端部を欠き、長さ33.1cm以上、刃部復元幅約20.5cm、柄孔隆起を含めた厚さ3.8cm、柄孔径2.4×2.6cm、装着角度58度を測る。頭部は平面逆台形を呈し、上端面を平坦に仕上げる一方、刃部との境に平面三角形を呈する小振りな袂りを加える。柄孔隆起は、身と明瞭な段をもち、側面は直線で構成された粗い加工となる。また、頭部前面の泥除装着のための突帯は、腐朽のため判然としない。直柄平鋏の未成品1902は、頭部平面形が縦長の長方形を呈する。刃部幅15cm以上、厚さ5.0cmを測り、後面に柄孔の位置(径0.9×1.7cm)、柄孔隆起(高さ約2cm)、泥除装着の突帯(長さ4.8cm、高さ1.3cm)までを粗く削りだした作業工程にある。曲柄平鋏1903は、軸部・刃部を欠損し、厚さ1.4cmを測る。刃部は、笠の下のくびれから外湾しながら幅を増す。側面は加工痕を比較的良好に残す。1904は曲柄平鋏を二又鋤に再加工したもので、その右半残存部と考えた。残存長31.2cm、残存幅10.1cm、厚さ1.7cmを測り、軸部と刃部の境は、平面形が明瞭に屈曲する他、後面は段差をもつ。また、本来の曲柄を差し込む斜方向の孔を、長さ約1.5cmにわたり確認できる。1905は組み合わせ鋤の柄と考えられ、幅2.5cmを測る。加工材1906は厚さ1.1cmを測り、平面形は上部が突起状に張り出した隅丸方形を呈する。樹種がスギであることから、鋏・鋤類以外の用途を想定したい。1907は平鋏または平鋤の刃部で、幅11.6cm、厚さ1.0cmを測る。刃先端は、やや左右非対称である。なお、1925も鋏・鋤類身の可能性をもつ。1908～10は、高さ7cm前後の加工材片を集めたものである。木包丁1908は2ヶ所の紐孔(径0.3cm)を浅い溝でつなぐ他、小孔1ヶ所が確認できる。1909は、両側面を半円形に抉る。1910は径0.8～1.0cmの円孔を2ヶ所に穿つ他、径0.1cmの孔が確認できる。樹種は、1908・09がケヤキ、1910がトチノキである。1911は紡錘車と考えられる。径約6.5cm、軸径約0.7cm、厚さ0.9cmを測り、コナラ属アカガシ亜属を用いる。1912～14は、輪切りにした芯持ち材を用いた木錘である。1912は、側面中央付近に浅い溝の他、径1.3～2cm程度の根の侵入による不規則な穴が残る。1913は、両端を粗く仕上げる。1914は両面中央付近に幅約2cmの溝をもち、腐朽が顕著である。樹種は、1912・13がコナラ属アカガシ亜属、1914がクマノミズキ類となる。なお、第172図1969も木錘の可能性をもつ。

第169図1915はスギ材を削りぬいた舟形木製品で、長さ47.1cm以上、幅4.9cm以上、高さ3.2cm以上を測る。舷側が図上部より1/5の箇所まで反り始めることから、図上側を舳先(船首)と考えた。舷側の縁は狭い平坦面をもち、断面形状は内湾しながら舟底に至る。舷側より舟底がやや薄い造作と考えられる。また、外面の一部に加工痕が残る他、艫(船尾)側の舷側に径約0.3cmの孔を1ヶ所穿つ。カヤの枝を用いた網棹1916は、長さ47.7cm以上、径2.2～2.8cmを測る。平坦面をもつ紐かけ部と、内側に網留め孔を穿つ部分を削り出し、1.6～2.5cm間隔で網留め孔(径約0.2～0.3cm)を穿つ。モミ属の材を用いた盾片1917～19は、上部に不規則な紐

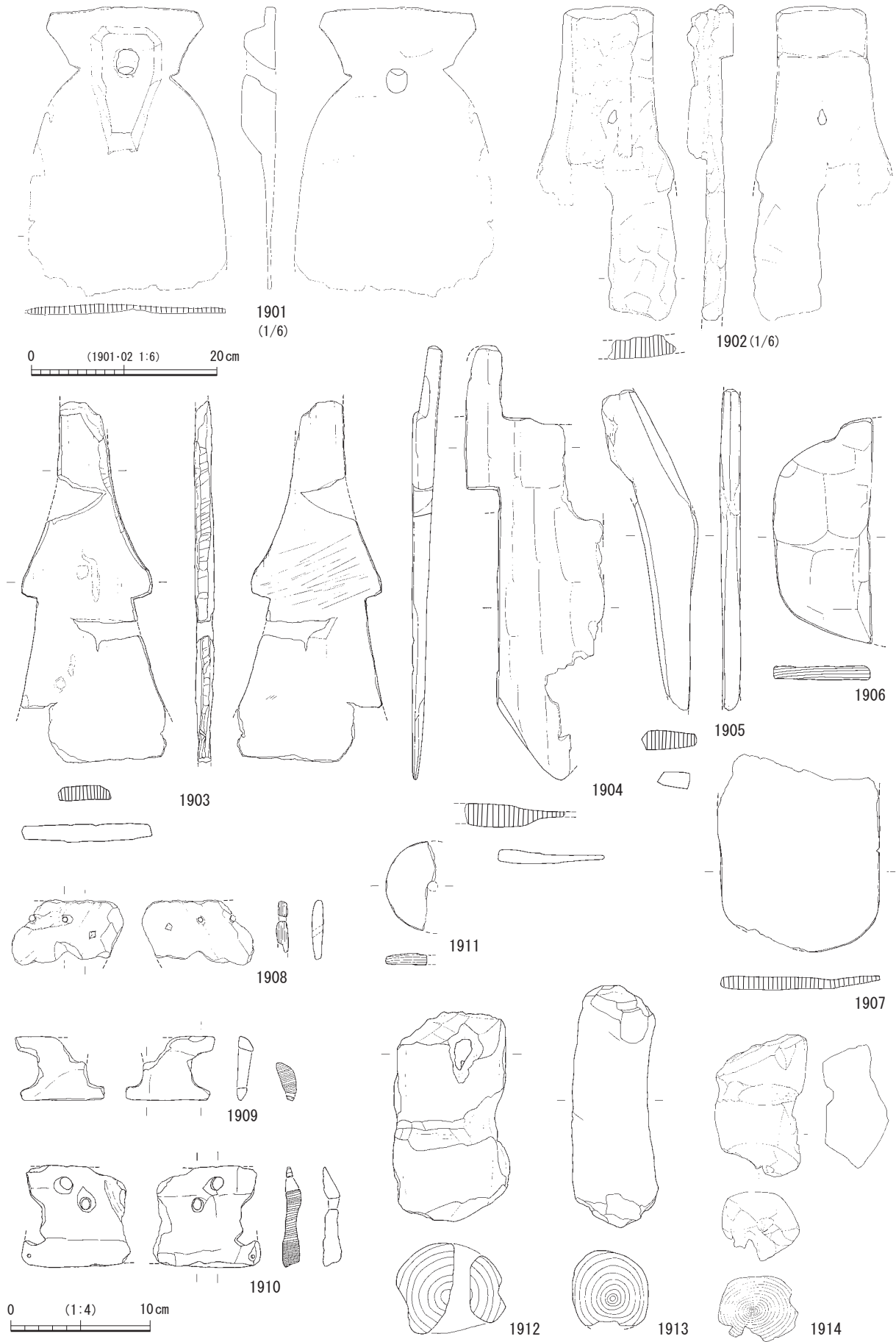


第167図 C区下層SD5501出土遺物実測図15 (S=1/4)

綴孔をもち、その下に等間隔の紐綴孔列を穿つ点で共通することから同一個体と考えられ、1918・19は丸味を帯びた側面が残る。紐綴孔列は、1917が5列(各列間隔2.5cm、各孔間隔0.8～1.0cm)を、1918が5列(同1.6cm、同0.8～1.0cm)を、1919が2列(同1.6cm、同0.8～1.0cm)を、また各紐綴孔は径0.2～0.3cmを、それぞれ測る。腐朽のためか、漆等の塗布は確認できない。小型の蓋1920は平面楕円形を呈し、長径13.5cm、短径12.0cm、高さ3.0cmを測る。樹種はスギであり、小型の桶蓋の可能性をもつ。1921は途中で切断された柄であり、削り出しにより把頭を表現する。残存長8.5cm、径約3cmを測り、樹種はカエデ属である。1922～26は板状の加工材で、樹種は1922・23がスギ、1924がケヤキ、1925・26がコナラ属アカガシ垂属となる。短冊状の1922は、径0.9cmの円孔を2ヶ所に穿つ他、径0.3cmの木釘1ヶ所が填った状態で出土した。1923は厚さ0.3cmを測る薄板で、一端に斜め方向の切断痕が残る。1924が平面略平行四辺形を呈し、3か所に径約0.3cmの孔を穿つ。1925は、鍬・鋤類の未成品を再加工品した可能性をもつ。1926は平面略五角形を呈し、長さ10.1cm、幅6.6cm、厚さ1.2cmを測る。中央右寄りに径0.2×0.7cmの孔1ヶ所を斜め方向に穿つ。

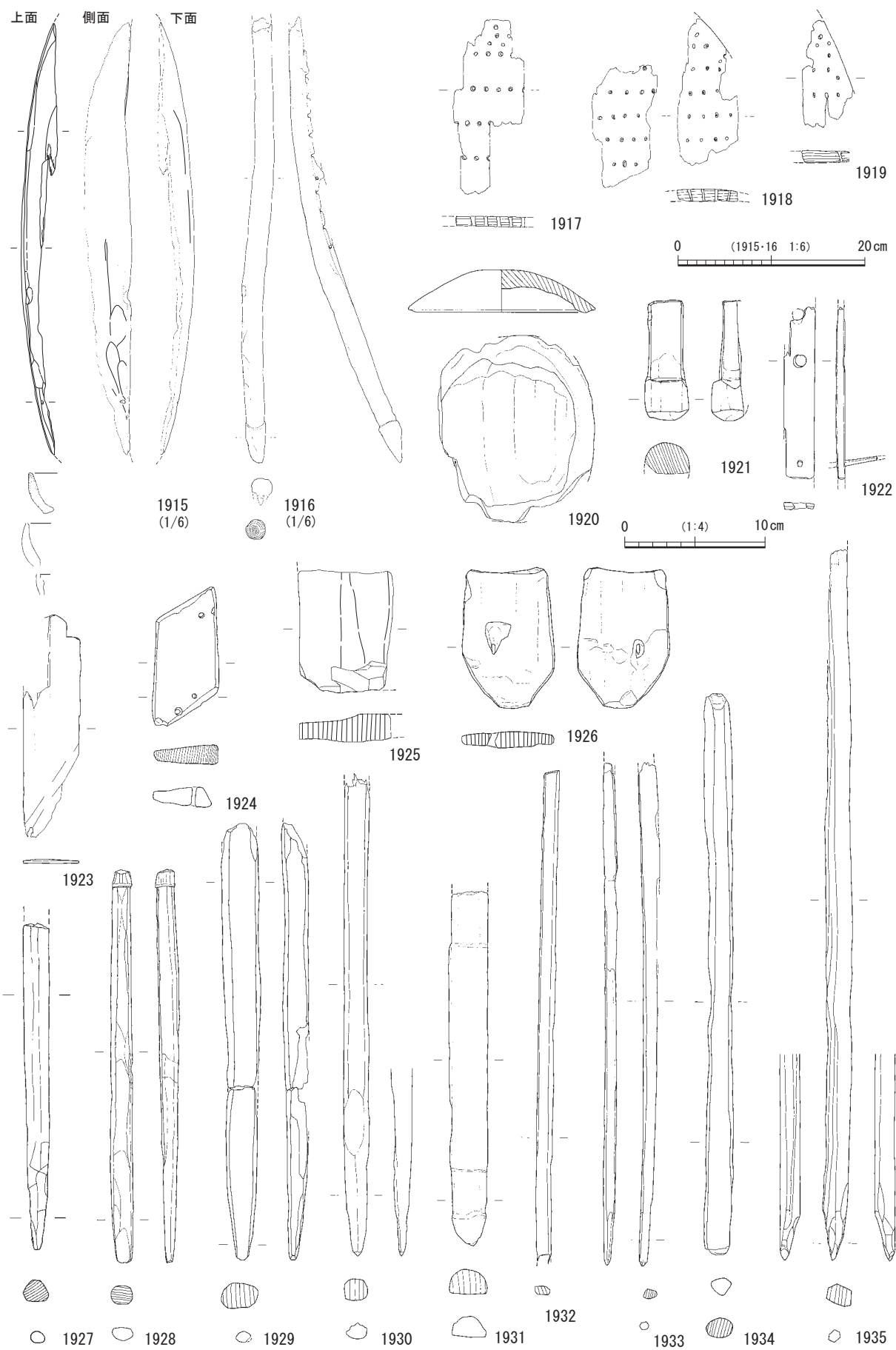
第169図1927～1935は棒状の木製品で、樹種は1929(アサダ)、1934(クリ)以外はスギとなる。1927～30は先端を削って尖らせる。1928は長さ28.5cm、径1.6cmを測り、頭部を丁寧に削ることで有頭状に仕上げる。1931は断面半円形を呈し、先端を丸く仕上げる。側面2ヶ所に長さ約3.5cm、段差約0.2cmの割りこみを施す。1934は断面楕円形を呈し、両端を丸く仕上げる。1935は、先端を粗く削ってで鋭利に尖らす。第170図1936～41は板状の木製品で、樹種は全てスギである。1936は幅4.2cm、厚さ0.3cmを測る薄い板で、一端を尖らす。1937は幅10.2cm、厚さ1.8cmを測り、表面に加工痕を残す。1938・39は幅13cm前後、厚さ2cm強を測り、いずれも5cm程度の孔を穿つ。1940は、幅18.4cm、厚さ1.7cmの板材を矢板に転用したものと考えられる。1941は、一端がゆるやかに先細る。1942・43は断面方形を呈するスギ材で、杭1942は打ち込まれた状態で出土している。1944～47は、断面長方形を呈するコナラ属アカガシ垂属の加工材である。1944は、約6cm間隔で割りこまれた梯子様の段差(高さ0.6cm・1.0cm)が2ヶ所に残る。先端の側面を斜め方向に粗く加工することから、矢板に転用された可能性をもつ。クサビ1945は長さ23.4cm、幅4.0cm、厚さ2.7cmを測り、頭部は使用に伴い丸くなる。1946は長さ28.1cm、厚さ2.1cmを、1947は長さ33.1cm、幅4.8cm、厚さ3.2cmをそれぞれ測る。第171図1948・49はスギの角材である。1948は一端に粗い切断痕が残り、1949は腐朽が目立つ。1950・51・53はミカン割材、1952はスギの削出材である。1950は頭部が被熱に伴い炭化する。1953・54は、一端を斜め方向に加工する。1955～62は長さ35cm以上を測る棒状の木製品で、樹種は1955・56・58～60・62がスギ、1961がイヌガヤとなる。1955は先細る先端部両側面に、互い違いの鋸歯状の切れ込みをいれる。芯持ちの1961は表面に加工痕を残し、小舞の可能性をもつ。1962は長さ87cm以上を測る。第172図1963～68は、残存長さ15～28cmを測る分割材で、樹種は1963がケヤキ、1965がサクラ属、1966・67がツバキ属となる。1963はホゾ状の加工痕が残る。1965は両端に粗い加工痕を残し、調度品等の未成品の可能性をもつ。1967・68は、被熱に伴い一部が炭化する。1969はツバキ属の芯持ち材で、長さ17.7cm、径7.0～7.3cmを測る。側面の一部に浅い溝が残ることから、木錘の可能性をもつ。第173図1970～78は芯持ち材で、うち1971・73～75は杭となる。樹種は1970がカエデ属、1971がニシキギ属、1972・74・77がツバキ属、1973がマツ属複維管束垂属、1975がモチノキ属、1976がモクレン属と、多様な様相を示す。Y字材1970は樹皮が残存し、先端が炭化する。1971も枝を利用してY字材とする。1972は屈曲した枝を利用し、長さ60cm以上を測る。1973は側面に枝の切り落とし痕が残り、1974は頭部を斜め方向に加工する。1975は長さ33.5cm、径8.5cmを測り、先端はつぶれる。1976は、側面に浅い溝状の挟りが残るが、腐朽が目立ち判然としない。1978は径約3.5cmを測り、被熱に伴い一部が炭化する。1976・80は綴皮を丸めたもので、1979が幅8.8cm、1980が幅6.4cmを測る。

C区SD5502 0-21～23区で検出した弥生時代後期後半の溝である(第138・174図)。やや屈曲しながら東西方向

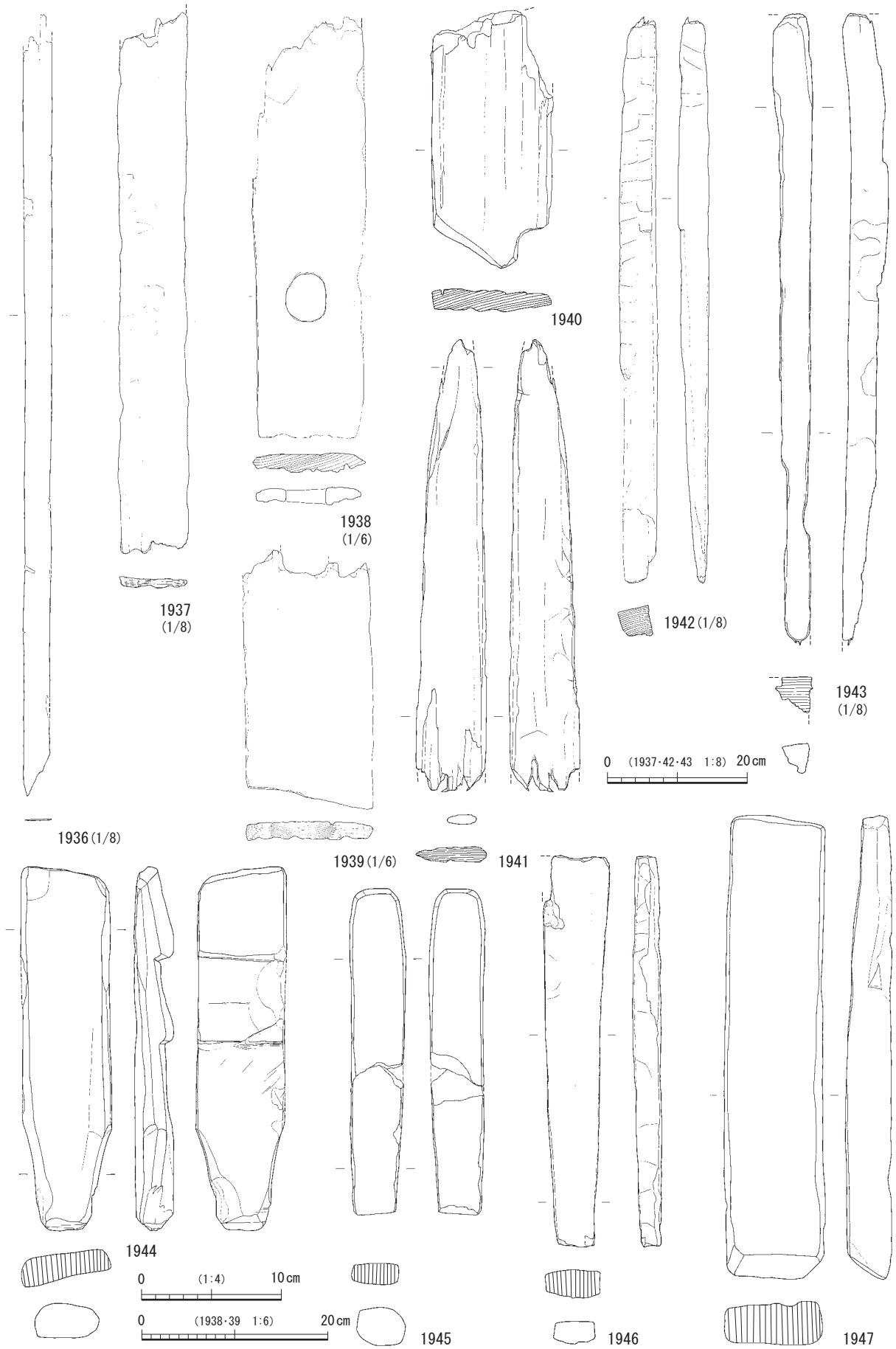


第 168 図 C 区下層 SD5501 出土遺物実測図 16 (S = 1/4・1/6)

第3節 B·C区下層

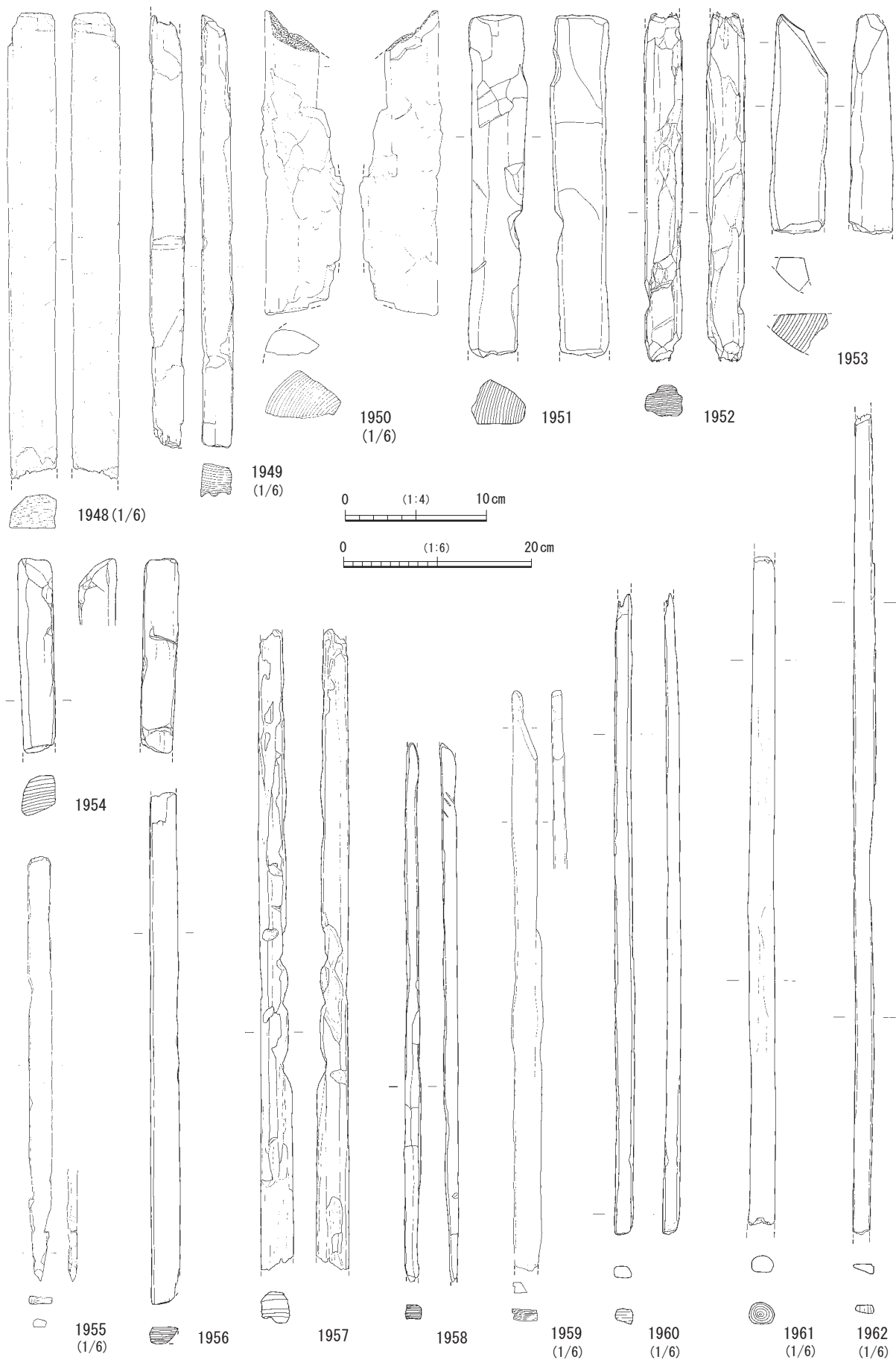


第 169 图 C 区下層 SD5501 出土遺物実測图 17 (S = 1/4·1/6)

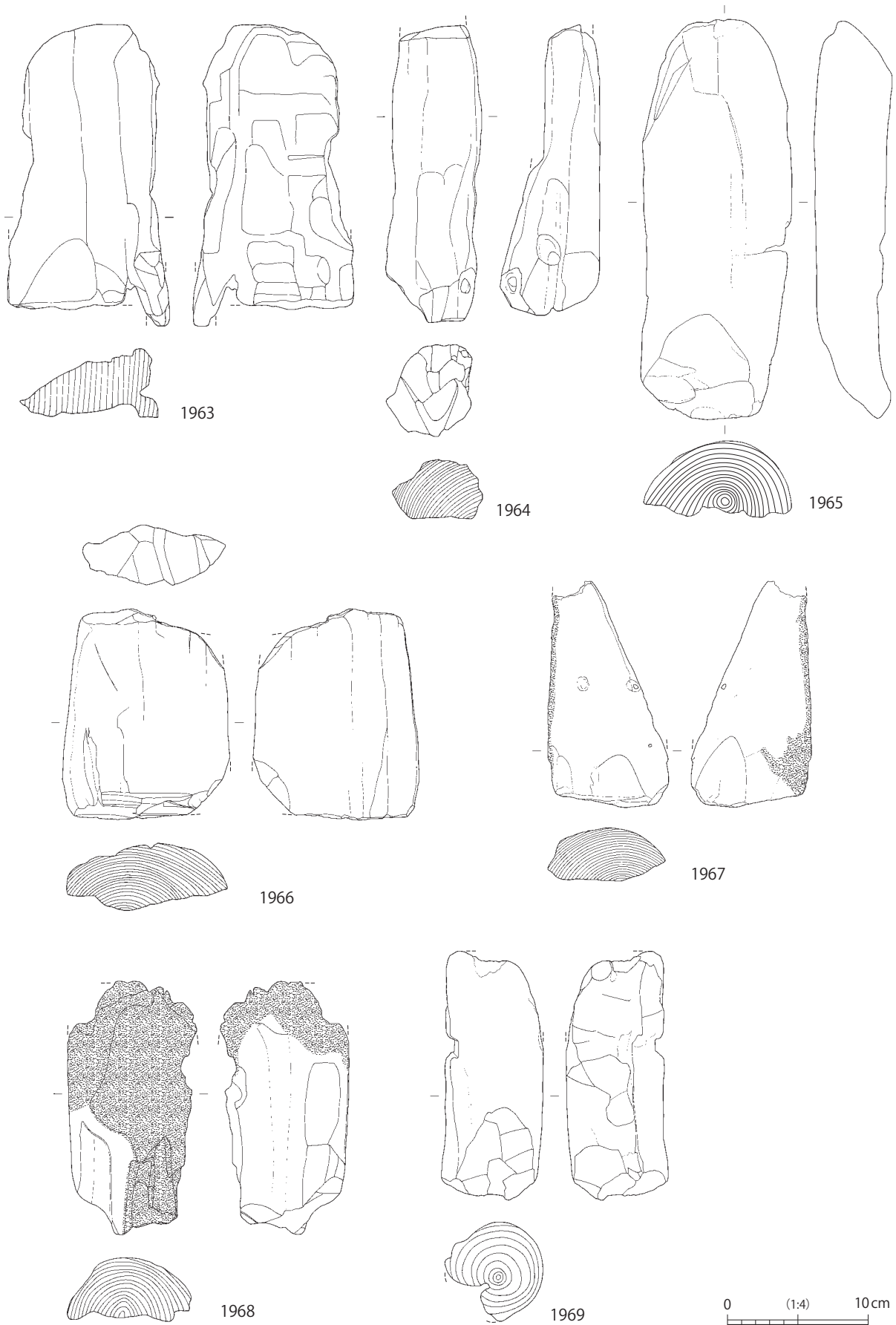


第170図 C区下層SD5501出土遺物実測図18 (S=1/4・1/6・1/8)

第3節 B·C区下層

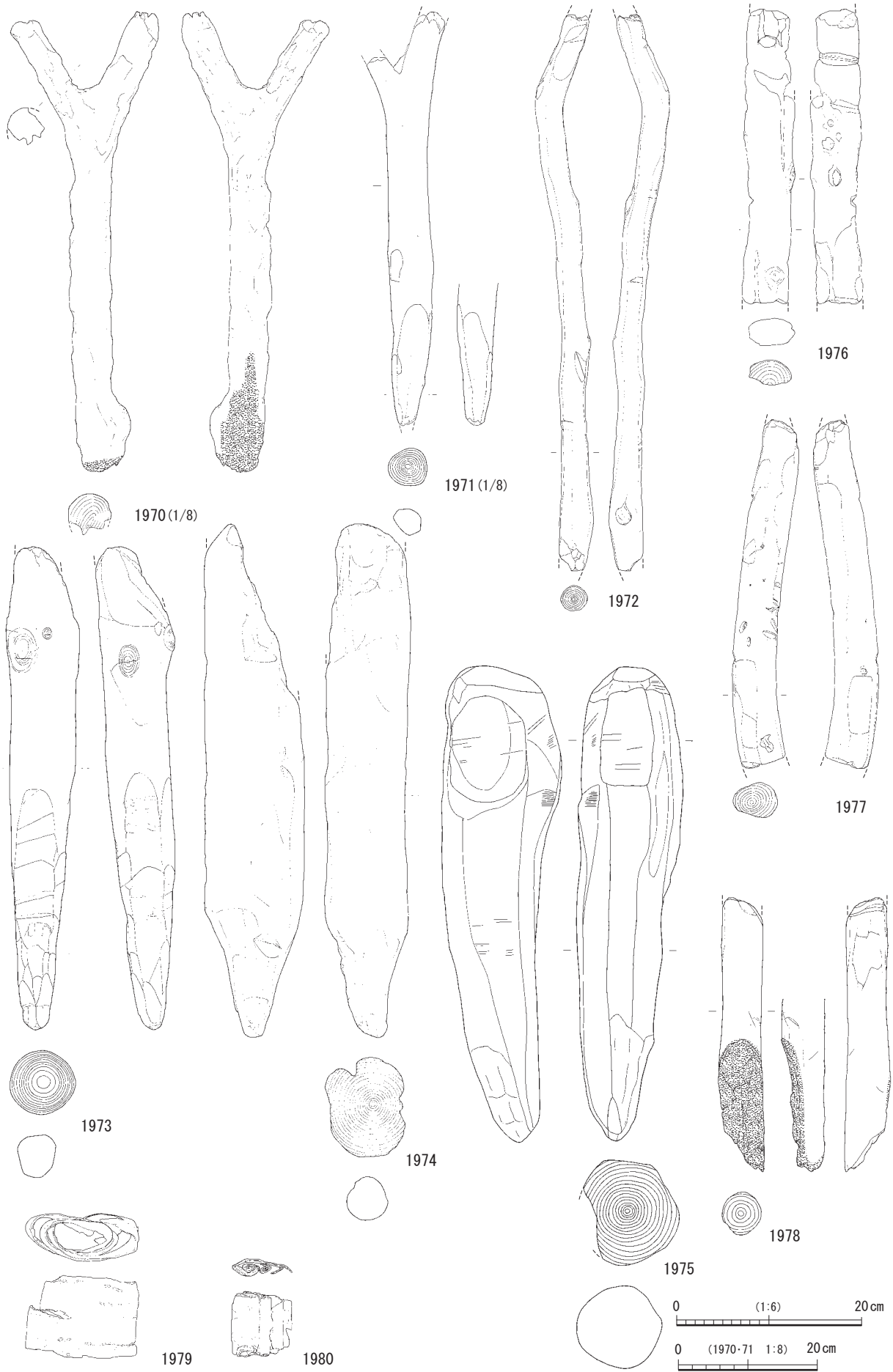


第 171 图 C 区下層 SD5501 出土遺物実測图 19 (S = 1/4·1/6)



第172図 C区下層SD5501出土遺物実測図20 (S=1/4)

第3節 B·C区下層



第 173 图 C 区下層 SD5501 出土遺物実測图 21 (S = 1/6·1/8)

にのびる。断面形状は略逆台形～V字形を呈し、幅110～150cm、深さ48～74cmを測る。覆土は、上位層から、にぶい灰色粘質土、濁暗灰色強粘質土、濁黒灰色強粘質土、灰色粗砂が堆積し、開削直後は水が流れたと考えられる。遺物は、主に第174図土層7から比較的多くの土器が出土しており、第176図1981～90を図示した。弥生時代中期後半の甕1981は口径約18cmを測り、口縁端部下端に刻みを施す。弥生時代後期前半の天王山式甕片1982は口唇部を刻み、外面を連弧文と重菱形文で加飾する。黒褐色の色調や石英を主体とする胎土の砂粒構成は1437、1991と共通する。1983・84は弥生土器甕である。後期後半の1983は口縁部が短く直立し、煮炊き痕を明瞭に残す。底部片1984は内外面ともハケ調整が残る。1985・86は、弥生時代後期後半の壺と考えられる。二重口縁の1985は口径19.4cmを測り、口縁部が大きく外反する。外面赤彩の1986は、小さな底部がボタン状に突出する。蓋1987は外面に黒斑が残る。1988は後期後半の器台脚裾部で、外面を赤彩する。1989は、灰白色を呈した軽石凝灰岩を砥ぎに用いる。磨石1990は灰白色を呈する粗粒砂岩製で、底面以外の面を砥ぎに用いるため平滑となる。他に多くの中期後半～後期後半の土器片が出土した。

C区SD5503 N-21区で検出した平面不整形を呈する浅い落ち込みである。深さ5～10cmを測り、覆土は濁青灰色粘質土である。木片が出土したにとどまる。

C区SD5504・05 N・0-21区で検出した細長い溝で、SD5504が新しい。SD5504が幅20～28cm、深さ8～12cmを、SD5505が幅40～44cm、深さ約5cmを測る。SD5505から少量の弥生土器片が出土した。

C区SD5506 N・0-21・22区で検出した平面不整形な落ち込みで、南南東-北北西方向に主軸をもつ。幅110～550cm、深さ6～30cmを測り、自然堆積した覆土は、第174図土層断面21～23の土層6・7・10(濁灰黄色弱粘質土)、同11(濁灰褐色粘質土)、同14・15(淡灰～暗灰色粘質土)に大別できるが、一様の堆積でない。他遺構との切り合い関係からは、SK5503、SD5507より古く位置付けられる。比較的多く出土した遺物のうち、第176図1991～93を図示した。弥生時代の甕1991は口径19.0cmを測り、口縁端部外面に刻みを施す。1992は口径19.5cmを測り、色調や胎土構成は天王山系の1437、1982と近似する。凝灰岩製の砥石1993は、両面中央に敲打痕が残る。他に弥生時代中期～後期の土器片が出土した。

C区SD5507 N・0-22区で検出した溝で、主軸方位はSD5506と近似する。幅64～122cm、深さ7～20cmを測り、覆土は淡灰・灰～灰褐色を呈する粗砂～弱粘質砂を基調とする(第175図)。他遺構との切り合い関係から、SD5506・08より後出する。遺物は少量の弥生土器片が出土したにとどまる。

C区SD5508 N-22区で検出した浅い溝で、直線的な東側と平面不整形な西側に分かれ、別遺構が重複する可能性が高い。東側が幅28～54cm、西側が長軸146～350cm以上、深さはともに4～16cmを測る。覆土は濁灰褐色粘質土であり、SK5502、SD5507より古く位置付けられる他、東側の主軸方位はSD5510と近似する。出土遺物のうち、第176図1994を図示した。風化面を残す剥片1994は、富来地方の黒色ガラス質安山岩を用いる。他に磨耗した弥生土器小片が出土した。

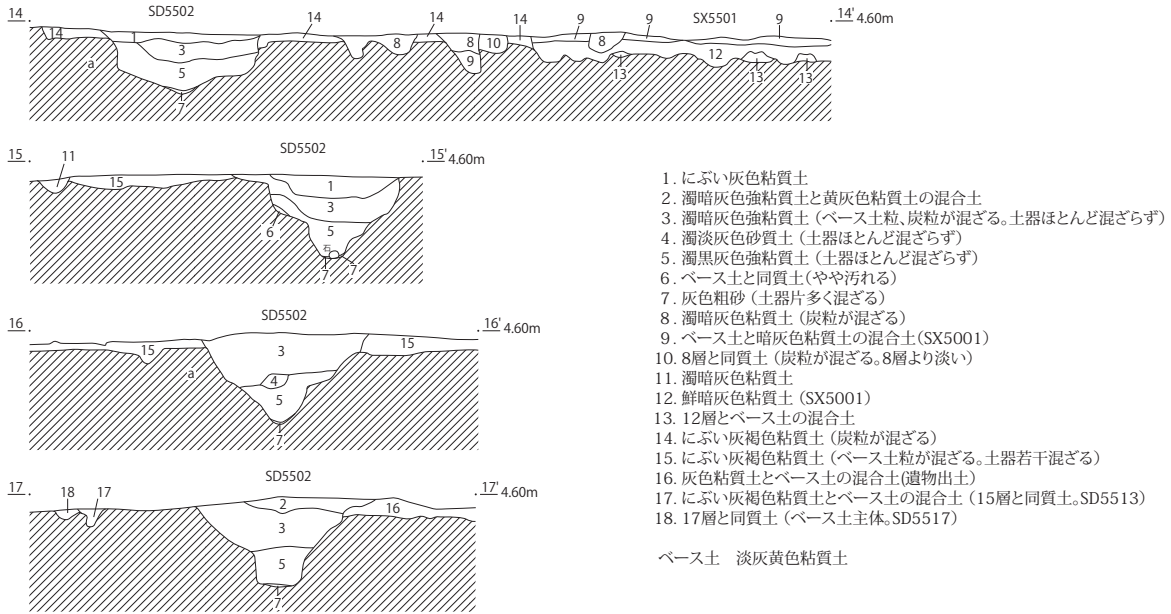
C区SD5510 0-22区で検出した溝で、主軸方位はSD5508東側と近似する。長さ3.7m、幅12～100cm、深さ8～13cmを測り、炭粒が混ざる濁暗灰色粘質土を覆土とする。少量の磨耗した弥生土器が出土した。

C区SD5513・17・25 0-21・22区で検出した溝で、SD5513とSD5525が直交に近い位置関係を示す。SD5513・17はベース土が混ざる灰褐色粘質土、SD5525は淡乳灰色細砂を覆土とする。SD5513は、遺構の切り合い関係からSD5517より新しく、SD5502より古く位置付けられる。遺物は、SD5513から少量の弥生時代後期後半の土器片が出土したにとどまる。

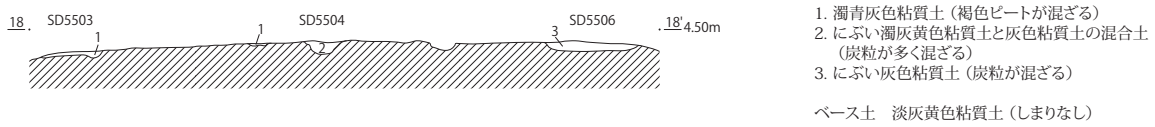
C区SD5516 0-22・23区で検出した直線的な溝である。調査区東壁土層断面(第177図土層断面50-50')から断面形状は逆台形を呈し、幅38cm、深さ34cmを測る。覆土は濁灰色粘質土を基調とし、SD5515より古く位置付けられる。出土遺物はない。

第3節 B・C区下層

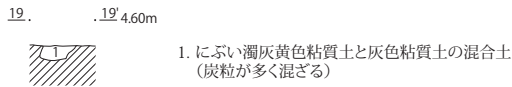
C区O-21~23区SD5502(第143・144図)



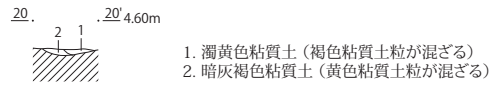
C区N-21区SD5503・04・06(第143図)



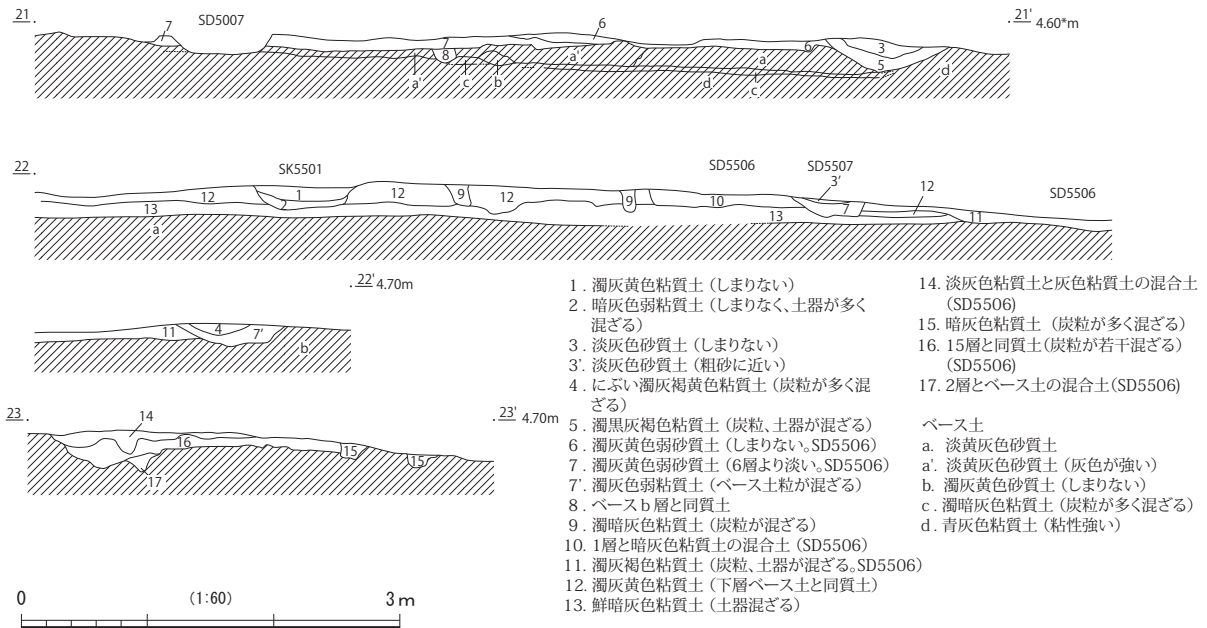
C区N-21区SD5504(第143図)



C区N-21区SD5505(第143図)

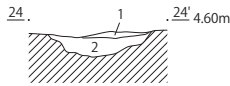


C区O・N-21・22区SD5506(第143・144図)



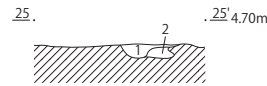
第174図 B・C区下層SD土層断面図1(S=1/60)

C区N・O区SD5507(第143図)

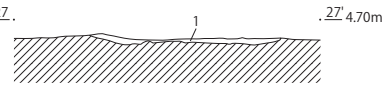
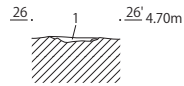


1. にぶい灰褐色粗砂
2. 明灰色弱粘質砂

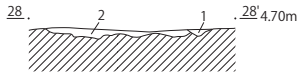
C区N-22区SD5508(第143・144図)



1. 濁灰褐色粘質土 (ベース粒が混ざる)
 2. ベース土と同質土(1層が混ざる)
- ベース土 灰黄色粘質土

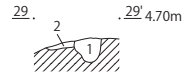


C区O-21・22区SD5511(第142図)



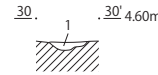
1. 暗灰色粘質土 (ベース土粒、炭粒が混ざる)
 2. にぶい灰色粘質土 (ベース土粒が混ざる)
- ベース土 淡黄灰色粘質土

C区O-21区SD5512(第142図)



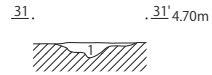
1. 暗灰色粘質土 (ベース土粒、炭粒が混ざる)
 2. 1層とベース土の混合土
- ベース土 淡黄灰色粘質土

C区O-22区SD5514(第144図)



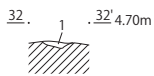
1. 濁灰褐色粘質土とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色砂質土 (やや粘)

C区O-22区SD5515(第145図)



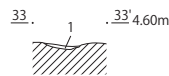
1. 暗灰褐色粘質土 (炭粒混ざる)

C区O-22・23区SD5516(第144図)



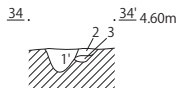
1. 濁灰色粘質土 (ベース土粒が混ざる)
- ベース土 淡黄灰色粘質土

C区O・N-22区SD5525(第143図)

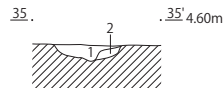


1. 淡乳灰色細砂

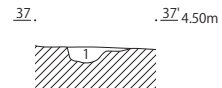
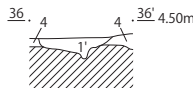
B区K-20・21区SD5518(第140・146図)



1. 濁灰褐色粘質土 (炭粒が混ざる)
- 1'. 1層と同質土 (ベース土粒が混ざる)
2. ベース土と同質土 (1層が混ざる)
3. 暗灰色粘質土



4. 暗灰色粘質土 (ベース土粒が混ざる)
- ベース土 淡灰黄色粘質土

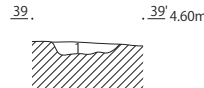


B区K-21区SD5520(第146図)

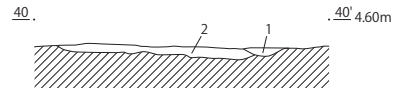


1. にぶい灰褐色粘質土
 2. 1層とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色粘質土

B区J・K-21区SD5521(第146図)

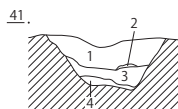


1. 濁灰褐色粘質土 (炭粒が混ざる)
- ベース土 淡灰黄色粘質土

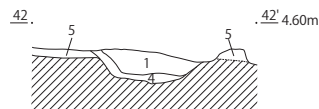


1. 暗灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
2. 灰褐色粘質土

B区J-21区SD5522(第146図)

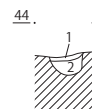


1. 灰褐色粘質土
2. 淡灰色粗砂
3. 1層と同質土
4. 灰色粗砂 (土器混ざる)

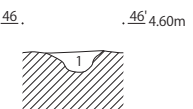
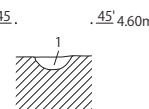


5. 濁灰褐色粘質土とベース土の混合土
- ベース土 淡灰黄色粘質土

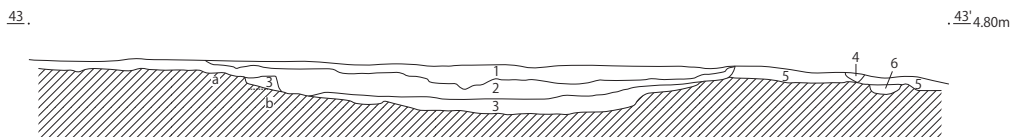
B区L・M-21区SD5524(第145図)



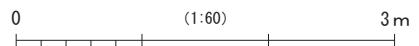
1. 乳灰色粘質土 (粒子粗い)
 2. ベース土と暗灰色粘質土の混合土
- ベース土 淡灰黄色粘質土



B区L・M-21区SD5524(第143・145図)



1. 濁黄灰色粘質土 (2層が粒状に混ざる)
 2. 暗灰色粘質土 (炭粒、土器が混ざる)
 3. 濁灰色粘質土 (褐色砂質土を層状に挟む。土器出土)
 4. 濁黒灰色粘質土 (炭粒が混ざる)
 5. 暗灰色粘質土
 6. 2層と同質土
- ベース土
a. 黄灰色粘質土 b. 青灰色粘質砂



第175図 B・C区下層SD土層断面図2 (S=1/60)

B区SD5518 K-20・21区で検出した溝で、西側で第8次A区SD2049につながる。幅36～90cm、深さ14～18cmを測り、K-21区内で北北西から南西方向に大きく流れを変える。覆土は濁灰褐色粘質土を基調とし、遺構の切り合い関係からSD5519より新しく、SD5521より古く位置付けられる。弥生時代後期後半の土器片が出土した。

B区SD5519 K-20・21区で検出した浅い落ち込みで、深さ2～5cmを測る。遺構の切り合い関係からSK5505、SD5518より古く位置付けられ、出土遺物はない。

B区SD5520 K-21区で検出した直線的な溝である。長さ3.6m以上、幅42～84cm、深さ10～16cmを測り、覆土はベース土が混ざる灰褐色粘質土である。出土遺物のうち、第176図1995を図示した。1995は弥生時代後期後半の高坏脚部で、磨滅が目立つ。他に同時期の甕片等が出土した。

B区SD5521 J・K-21区で検出した浅い溝で、第6次下層SD20・SD105、第8次A区SD2044と一体をなす平地建物外周溝である。幅46～214cm、深さ6～10cmを測り、覆土は濁灰褐～暗灰色粘質土を基本とする。遺構の切り合い関係からSD5518・22より古く位置付けられ、出土遺物はない。

B区SD5522 J-21区で検出した。弥生時代の集落域を、ほぼ南北方向に貫く基幹的水路であり、東側が第6次下層SD04に、西側が第8次A区SD5043に接続する。断面形状は逆台形を呈し、幅92～118cm、深さ26～44cmを測る。覆土は、水流により灰色粗砂が堆積した後、灰褐色粘質土で埋没する。他遺構との切り合い関係から、SD5521より新しく位置付けられる。粗砂層から弥生時代後期後半の甕片が出土した。

B区SD5523 M-21区で検出し、西側はSX5502につながる。幅3.3～4.0m、深さ36～40cmを測り、濁黄灰～灰色粘質土が自然堆積する。未図化だが、弥生時代終末の甕片、ガラス質安山岩製剥片が出土した。

B区SD5524 L・M-21区に単独立地する直線的な溝である。主軸方位N-55°Eを示し、長さ9.6m、幅20～36cm、深さ10～16cmを測る。覆土は乳灰色粘質土を基調とし、弥生時代後期後半の土器が出土した。

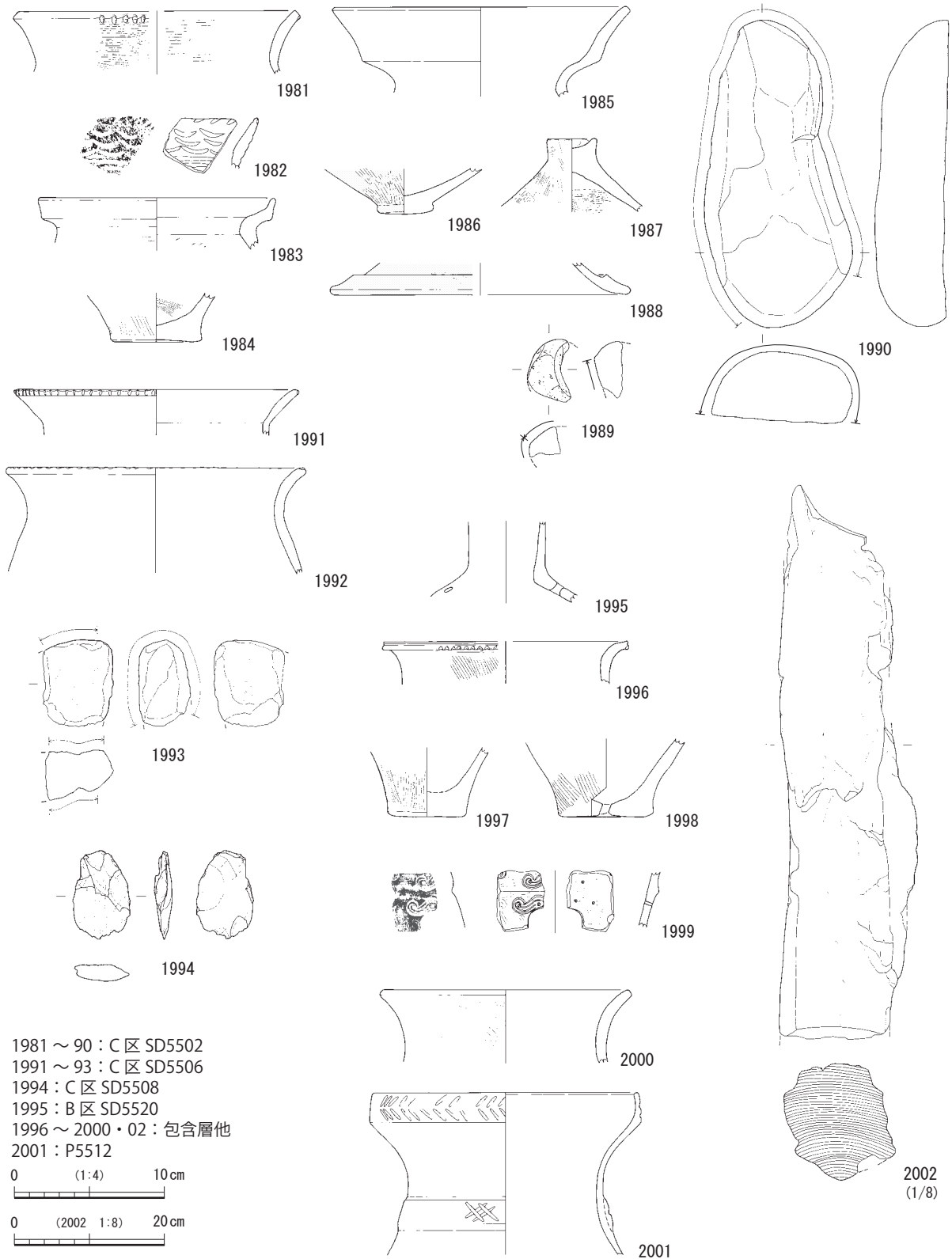
4 その他の遺構等（遺構：第137・138・177・178図）

C区SX5501 O-22・23区で検出した平面不整形を呈する落ち込みで、調査区外東側にのびる。長軸5.7m以上、深さ6～24cmを測り、覆土は鮮暗灰～黒灰褐色強粘質土を基本に、ベース土(淡灰黄色粘質土)が混ざる。底面は細かな起伏をもち、他遺構との切り合い関係からSD5502より古く位置付けられる他、SX5502と同時期の堆積層と考えられる。摩耗した弥生土器片が少量出土したにとどまる。

B区SX5502 M・N-20・21区で検出した平面不整形を呈する落ち込みで、東側はSD5523につながる。東西方向9m以上、南北方向6.5m以上、深さ6～15cmを測り、覆土は濁暗灰～淡灰褐色粘質土を基調とする。底面は比較的平坦で、SX5001と同時期の堆積層と考えられる。未図化だが、弥生時代後期前半の小型鉢片を含む磨耗した土器細片、ガラス質安山岩製の剥片が出土した。

C区東壁土層層序 第5次調査区の基本土層層序は、第3章第3節に記したが、異なる堆積状況を示す部分も存在する。C区については以下で、またA区下層については第6章第1節で補足説明を行う。

C区東壁の土層層序(第177図)は、上位層から順に、①現耕作土・床土(土層1～3)、②上層遺物包含層(同4)、③上層遺構覆土(同5～11)、④下層SD5501覆土(同12～16)、⑤SD5501と連続する河川様堆積土(同17～23、上層SD5006)、⑥上層ベース土(同25明黄色粘質土、無遺物層)、⑦下層遺物包含層(同24・26・27・31・32・35)、⑧下層ベース土I(同37・40・41)、⑨下層ベース土II(淡灰黄色粘質土)に大別できる。生活層としては、弥生時代後期後半～終末(⑧→⑦の2小期)→上層ベース土の堆積(⑥)→古墳時代前期の河跡(⑤→④)→上層遺構の順に変遷する。細部で見れば、土層⑥は、調査区南縁がB区と同様に土層25を挟んで下層遺物包含層(土層27)が現れるのに対して、下層SD5501以北は④・⑤・⑦上面が直接に上層ベース土となる。また、下層ベース土Iとした土層⑦は、黒灰褐色強粘質土を基調とするSX5501・02が属し、調査区東側からの流れ込み遺物と判断した少量の弥生土器細片が混ざる。



第176図 B・C区下層出土遺物実測図 (S = 1/4・1/8)

5 包含層等出土遺物 (第176図、第61表)

出土遺物のうち、第176図1996～2000・02を図示した。1996～98は弥生土器甕である。中期後半の1996は口径16.3cmを測り、口縁端部に下方から刻みを加える。底部片1998は、焼成前に径0.5cmの円孔を穿つ。後期末の装飾器台片1999は、S字状渦文をもつスタンプ文の渦中心に径1～1.5mmの円孔を穿つ。中期後

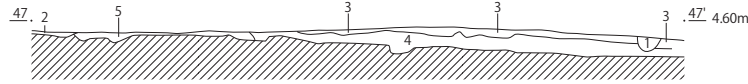
半の甕2000は口径16.3cmを測り、外面に煤が付着する。2002は排水溝(暗灰色粘質土)から出土した柱根である。

6 B区試掘坑1～5 (第137、178図)

B区M-21区SD5524脇のP5512で、ベース土と同質土(第7図土層15:淡黄灰色粘質土)から弥生時代中期後半の壺(第176図2001)が出土したため、第137図のとおり、急遽5ヶ所に試掘坑を設定し、下層ベース土の堆積状況の把握に努めた。

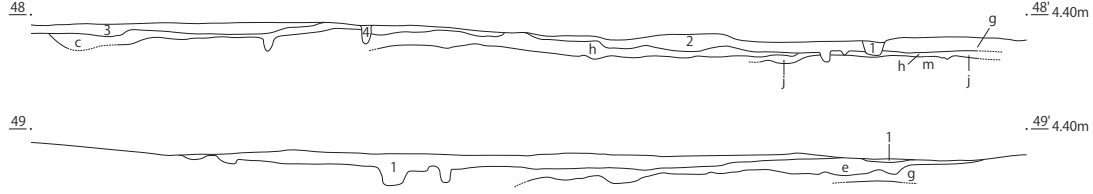
ベース土層は、北側から南側および東側から西側に向けて緩やかに傾斜を示しながら、東側の埋没谷奥部から少しずつ流入・堆積したと考えられる粘質土～強粘質土(粘土)が順次堆積する。土層の基本層序(第178図)は、上位層から順に、a層:濁淡黄灰色粘質土、b層:明黄灰色強粘質土、d層:黒灰色強粘質土、e層:灰色強粘質土、h層・1層:淡灰色粘質土～弱粘質細砂、m層:淡青灰色強粘質土となり、d・m層はA区最下層に連続する土層である。各試掘坑とも、明確に生活面または遺構と判断しうる層位、落ち込みは確認できないものの、試掘坑5のa・d・e層から磨耗した弥生土器細片が、また試掘坑1・2・4のd層から弥生時代中期後半～後期の磨耗した土器細片がそれぞれ少量出土している。これらのことから、現地調査時は、東側の埋没谷奥部に存在する集落域から流出した土砂とともに流れ込んだ遺物と判断したが、都合6面の生活面を検出した第8次調査の正報告を待って、各層の位置付けを再考する必要がある。

C区O-22・23区SX5001(第144図)



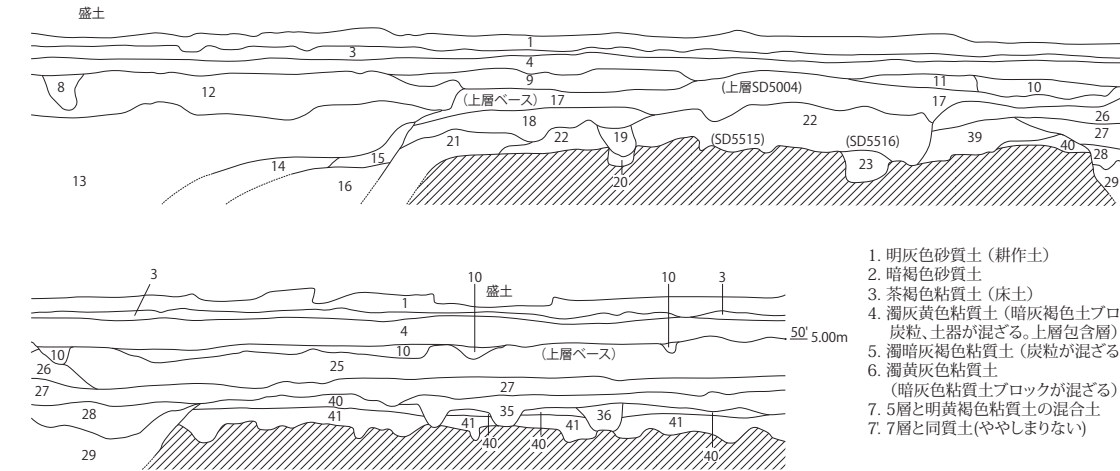
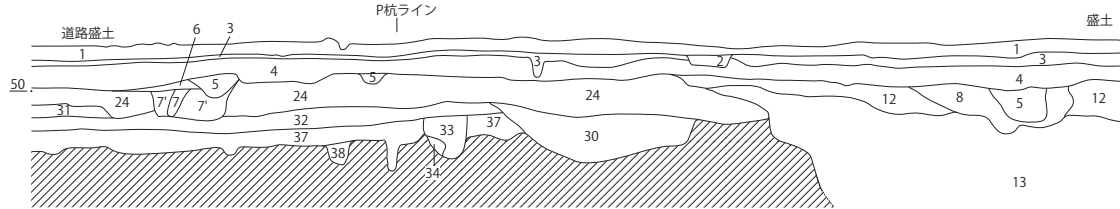
- 1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒が混ざる)
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. ベース土と暗灰色粘質土の混合土
- 4. 黒灰褐色強粘質土とベース土の混合土
- 5. 鮮暗灰色粘質土 (落ち込み)
- ベース土
- 淡灰黄色粘質土

B区M・N-20・21区SX5002(第141・145図)



- 1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒が混ざる)
- 2. 濁淡灰褐色粘質土 (SX5502, 炭粒、土器が混ざる)
- 3. 濁淡黄灰色粘質土 (しまりなく砂っぽい。土器が若干混ざる)
- 4. 1層と淡灰黄色強粘質土(f層)の混合土
- c. 濁黒灰～灰色強粘質土 (炭粒が混ざる)
- e. 灰色強粘質土 (炭粒、少量の遺物混ざる)
- g. にぶい灰褐色強粘質土 (炭粒が混ざる)
- h. 淡灰黄色粘質土～弱粘質細砂
- j. 暗灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
- m. 淡青灰色強粘質土

C区南壁(第142・144図)

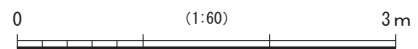


- 1. 明灰色砂質土 (耕作土)
- 2. 暗褐色砂質土
- 3. 茶褐色粘質土 (床土)
- 4. 濁黄灰色粘質土 (暗灰褐色土ブロック、炭粒、土器が混ざる。上層包含層)
- 5. 濁暗灰褐色粘質土 (炭粒が混ざる)
- 6. 濁黄灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロックが混ざる)
- 7. 5層と明黄褐色粘質土の混合土
- 7. 7層と同質土(ややしまりない)

- 8. にぶい灰褐色粘質土 (12層がブロック状に混ざる)
- 9. 灰色粘質土と淡黄灰色粘質土の混合土
- 10. 濁褐色粘質土
- 11. 明黄色粘質土
- 12. 明淡黄色粘質土 (SD5501)
- 13. 淡黄灰色弱粘質土 (炭粒が混ざる。SD5501)
- 14. 灰色粗砂 (炭粒、土器が混ざる。SD5501)
- 15. 13層と同質土 (灰色やや強い。SD5501)
- 16. 淡灰オリーブ色砂質土
- 17. 濁黄灰色弱粘質土 (上層SD5004)
- 18. 濁灰色粘質土と淡灰黄色粘質土の混合土 (上層SD5004)
- 19. 暗灰褐色粘質土 (上層 SD5004)
- 20. 19層とベース土の混合土
- 21. 暗灰褐色粘質土 (炭粒が多く混ざる)
- 22. にぶい灰色粘質土と暗灰褐色粘質土の混合土 (土器が混ざる。SD5516)
- 23. にぶい灰色粘質土と暗灰褐色粘質土の混合土 (22層より暗い。ベース土ブロック混ざる。上層SD5004)
- 24. 淡灰黄色粘質土と灰色粘質土の混合土 (上層ベース・下層包含層)
- 25. 明黄色粘質土
- 26. 11層と同質土 (灰色粘質土がブロック上に混ざる)
- 27. 淡灰色粘質土 (炭粒、土器が混ざる)
- 28. 灰褐色粘質土 (ベース土ブロックが混ざる。SD5502)

- 29. 暗褐色粘質土 (ベース土ブロックが混ざる。SD5502)
- 30. 32層と同質土 (33層ブロック、炭粒が混ざる)
- 31. 淡乳黄灰色粘質土
- 32. 濁暗灰褐色粘質土 (淡黄灰色粘質土ブロック、炭粒が混ざる。下層包含層)
- 33. 黒灰褐色強粘質土 (37層より暗い)
- 34. 33層と淡灰黄色粘質土の混合土
- 35. 灰褐色粘質土 (下層包含層)
- 36. 黒灰褐色粘質土
- 37. 黒灰褐色強粘質土 (下層ベース。土器が若干混ざる)
- 38. 37層と淡灰黄色粘質土の混合土
- 39. 32層と同質土
- 40. にぶい灰褐色粘質土とベース土の混合土 (SX5501)
- 41. 37層と同質土(下層ベース)

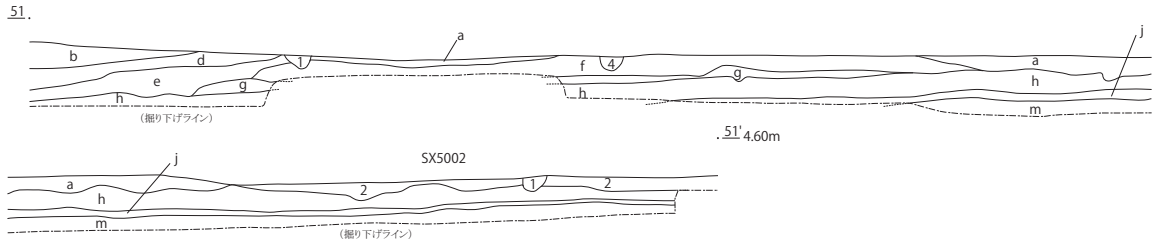
ベース
淡灰黄色粘質土



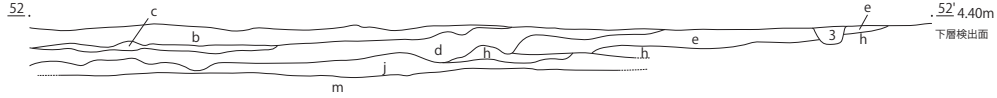
第 177 図 B・C 区下層 SX 等土層断面図 (S = 1/60)

第3節 B・C区下層

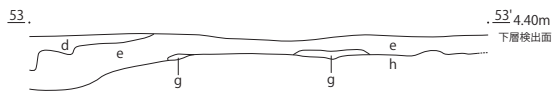
試掘坑5



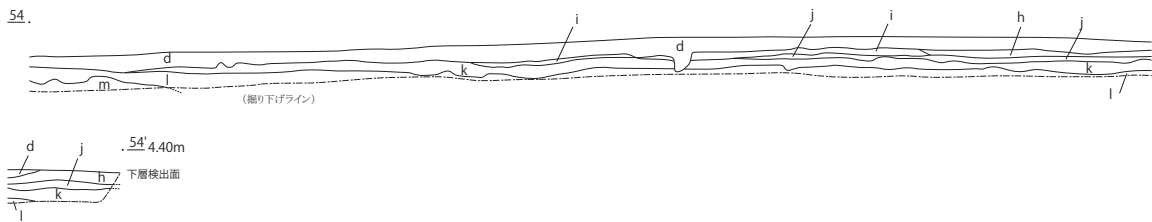
試掘坑4



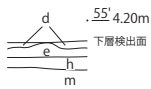
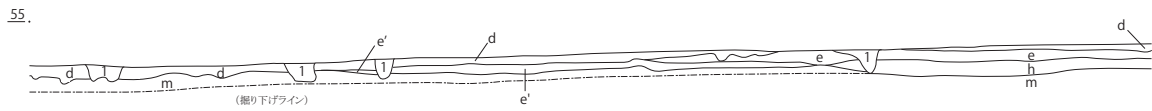
試掘坑3



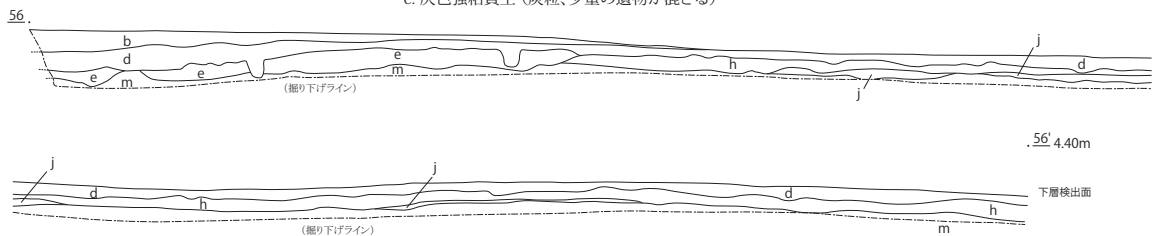
試掘坑2(南側)



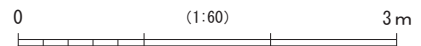
試掘坑2(北側)



試掘坑1



- | | |
|--|--|
| <p>1. 濁暗灰色粘質土 (炭粒が混ざる)</p> <p>2. 濁淡灰褐色粘質土 (炭粒、土器混ざる。SX5502)</p> <p>3. 1層とe層の混合土</p> <p>a. 濁淡黄灰色粘質土 (しまりなく、砂っぽい。下層ベース土。土器片少量混ざる)</p> <p>b. 明黄灰色強粘質土</p> <p>c. 濁黒灰～灰色強粘質土 (炭粒が多く混ざる)</p> <p>d. 黒灰色強粘質土 (少量の遺物が混ざる)</p> <p>e. 灰色強粘質土 (炭粒、少量の遺物が混ざる)</p> | <p>e'. d層と同質土 (褐色を帯びる)</p> <p>f. 淡灰黄色強粘質土</p> <p>g. にぶい灰褐色強粘質土 (炭粒が混ざる)</p> <p>h. 淡灰黄色粘質土～弱粘質細砂</p> <p>i. 濁灰色粘質土</p> <p>j. 暗灰色粘質土 (炭粒が多く混ざる)</p> <p>k. g層と同質土</p> <p>l. 淡灰黄色粘質土～弱粘質細砂</p> <p>m. 淡青灰色強粘質土</p> |
|--|--|



第 178 図 B 区下層ベース下試掘坑土層断面図 (S = 1/60)

第51表 B・C区下層出土土器観察表1

※ 質量の() 数値は残存値を示す。

検出 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
151	1401	B区	M-21	SK5504第2層	土師質	土鉢	長さ 2.8	径 3.0	孔径 0.6	にぶい黄橙	黒	a-3SML	並	-	ナデ	-	残存重量25.6g。器面剥離	C-288
151	1402	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 13・17	弥生土器	壺	14.5	4.8	24.0	にぶい橙	にぶい橙	b-4M	良	ヨコナデ、ケズ リ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口34/36	口縁部浅い刻みの後、擬凹線 (5条)。外面煤付着。底部磨減	C-284
151	1403	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 5・20	弥生土器	壺	15.8	-	(12.4)	橙～にぶい 黄橙	橙～にぶい 黄橙	b-4SML	良	ヨコナデ、ハケ 後ナデ	ヨコナデ、ハケ	底36/36	擬凹線4条。外面黒斑・煤付着	C-291 -1
151	1404	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 5・20	弥生土器	壺	-	4.0	(5.2)	橙～にぶい 黄橙	橙～にぶい 黄橙	b-4SML	良	ハケ後ナデ	ヨコナデ、ハケ	底36/36	擬凹線4～5条。外面黒斑。煤 付着	C-291 -2
151	1405	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 10	弥生土器	壺	17.9	-	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4L	良	(磨減不明)	(磨減不明)	口36/36	赤色酸化粒多い。磨減顕著	C-167
151	1406	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 11	土師器	壺	13.0	-	(12.0)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	(磨減不明)	ヨコナデ、ハケ	口22/36	外面煤付着。内面磨減顕著	C-290
151	1407	B区	J-K-21	SK5505南壁	弥生土器	小型壺	6.6	3.2	10.2	灰黄褐	灰黄褐～黒	a-3SM	並	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	底36/36	外面黒斑。口縁部歪み	C-286
151	1408	B区	J-K-21	SK5505取上げNo. 20	弥生土器	小型壺	8.0	5.4	13.7	黄灰	黄灰～黄橙	a-4SML	不良	(磨減不明)	(磨減不明)	口26/36	内外面磨減顕著	C-283
151	1409	B区	J-K-21	SK5505取上げNo.6	弥生土器	器台	15.1	11.3	11.7	にぶい黄橙	にぶい橙	a-3M	不良	(磨減不明)	(磨減不明)	口36/36	内外面磨減顕著	C-287
153	1413	C区	P-22	SD5501底(砂層)	縄文土器	壺	-	-	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SM	良	ヨコナデ	縄文	小片	御経塚式並行。沈線文で加 飾。外面煤付着	C-428
153	1414	C区	P-21	SD5501	弥生土器	壺	23.5	-	(6.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	刻み1列。外面煤付着	C-297
153	1415	C区	P-22	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	約21	0	(3.8)	褐灰	にぶい橙	a-3SML	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	刻み1列(丸棒状工具)。内外面 磨減顕著	C-451
153	1416	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	22.7	-	(7.5)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	内面ヨコレ・外面煤付着。内面 磨減顕著	C-046
153	1417	C区	P-22	SD5501北流路中 央	弥生土器	壺	21.1	-	(7.8)	にぶい黄橙	灰黄褐	b-3ML	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	内面ヨコレ付着	C-082
153	1418	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	約20	-	(4.8)	黄灰	浅黄	a-3L	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	口3/36	浅い刻み。内面磨減顕著	C-051
153	1419	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	18.7	-	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3M	並	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	斜行短線文3列、刻み1列。外 面煤付着	C-409
153	1420	C区	P-22	SD5501	弥生土器	壺	19.0	-	(3.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ハケ	ハケ	口9/36	刻み1列	C-100
153	1421	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	約19	-	(2.5)	淡黄	にぶい黄橙	b-3M	並	ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ	口2/36	縞杉文。内面磨減	C-410
153	1422	C区	P-21	SD5501北流路西 半	弥生土器	壺	約19	-	(3.1)	浅黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	(磨減不明)	ヨコナデ、ハケ	口3/36	縞杉文か。沈線・刻み1列。外 面煤付着。内面磨減顕著	C-093
153	1423	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	17.9	-	(3.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SM	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	刻み1列	C-456
153	1424	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	約18	-	(2.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	刻み1列。外面煤付着	C-354
153	1425	C区	P-22	SD5501南流路東 半セク	弥生土器	壺	約18	-	(3.2)	にぶい黄橙	黒	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	刻み1列。外面煤付着	C-213
153	1426	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	壺	17.4	-	(4.0)	灰黄	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	外面煤付着	C-120
153	1427	C区	P-22	SD5501南流路東 半セク	弥生土器	壺	17.0	-	(2.3)	灰黄	灰黄	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	刻み1列。外面煤付着	C-212
153	1428	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	15.9	-	(4.5)	褐灰～橙	にぶい橙～ 橙	a-3SML	並	(磨減不明)	ヨコナデ、ハケ	口4/36	斜行短線文1列、刻み1列。内 面磨減顕著	C-437
153	1429	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	15.6	-	(4.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	刻み1列。外面成形雑	C-395
153	1430	C区	P-22	SD5501北流路東 半底(ピート)	弥生土器	壺	15.6	-	(3.0)	浅黄橙	浅黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ハケ	ナデか	口5/36	浅い刻み。外面磨減	C-115
153	1431	C区	P-22	SD5501	弥生土器	壺	15.8	-	(3.5)	灰黄	浅黄	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口5/36	縞杉文。外面煤付着	C-396
153	1432	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	約16	-	(3.0)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-2S	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36		C-086
153	1433	C区	P-22	SD5501北流路中 央(砂ピット)	弥生土器	壺	15.3	-	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	外面煤付着	C-462
153	1434	C区	P-21	SD5501北流路中 央(砂層)	弥生土器	壺	11.1	-	(7.9)	にぶい黄橙	にぶい橙	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ 後ナデ	口7/36	口縁部凹線文1条。内面炭化 物・外面煤付着	C-050
153	1435	C区	P-22	SD5501北流路中 央	弥生土器	壺	-	-	(2.7)	灰白	浅黄橙	b-4SM	並	ヨコナデ、ハケ	ハケ	小片	刻み1列	C-097
153	1436	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	弥生土器	壺	-	5.5	(5.0)	暗灰	浅黄橙～黄 灰	a-2M	並	ナデ、ハケ	ハケ、ナデ	底36/36	外面煤付着	C-047
153	1437	C区	P-21・22	SD5501底(砂層)、 凹み(ピート西)	弥生土器	壺	約32	-	(10.3)	灰黄褐	褐灰	a-3SML	良	ナデ、ヨコナデ	縄文	口7/36	天王山式。1438、1637、1982・ 92と同胎土。口縁部沈線文等、 頸部交互刺突文、胴部重菱型 文で加飾。口縁部内面コゲ・外 面煤付着	C-075
153	1438	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	22.0	-	(4.4)	褐灰	褐灰	a-3SML	並	ナデ	縄文	口2/36	天王山式。1437、1637、1982・ 92と同胎土。口縁部内面に 縄文2条。外面煤付着	C-165
153	1439	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	壺	約22	-	(4.2)	灰黄	にぶい黄橙	a-3M	並	(磨減不明)	ヨコナデ、ナデ	口2/36	刻み1列。口縁部肥厚(天王山 式の影響か)。外面磨減	C-417
153	1440	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	壺	-	-	(3.8)	褐灰	褐灰	a-3SM	並	ナデ	縄文、ナデ	小片	天王山式。刻み、沈線文、連弧 文で加飾。内面炭化物付着。 1441、1638・39と同胎土	C-185
153	1441	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	-	(2.3)	灰黄褐	黒褐	a-3SM	並	ナデ	ナデ	小片	天王山式。刻み、連弧文、沈線 文で加飾。外面煤付着。1440、 1638・39と同胎土	C-013
153	1442	C区	P-22	SD5501	弥生土器	壺	21.7	-	(4.1)	にぶい赤褐	にぶい赤褐	a-3M	並	ヨコナデ、ケズ リか	ヨコナデ、ハケ	口5/36	外面煤付着。内面磨減顕著	C-160
153	1443	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	17.0	-	(3.4)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-4ML	並	ヨコナデ	ヨコナデ	口5/36	外面煤付着。内面磨減	C-414
153	1444	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	16.1	-	(3.6)	橙	黄灰 黒	b-4ML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	口6/36	外面煤付着	C-403

第52表 B・C区下層出土土器観察表2

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

検出 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	選存率	備考	実測 番号
153	1445	C区	P-22	SD5501北流路西 半底(シルト層)	弥生土器	甕	15.0	-	(3.0)	灰黄	灰黄	b-4M	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ 後ヨコナデ	□7/36	外面煤付着	C-406
153	1446	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	14.4	-	(4.3)	にぶい橙	にぶい橙	a-3L	並	ヨコナデ、ハケ か	ヨコナデ、ハケ	□7/36	外面煤付着	C-475
153	1447	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.6	-	(2.6)	灰	灰	a-3SML	並	ヨコナデ	ヨコナデ	□4/36	外面煤付着。内面摩滅	C-434
153	1448	C区	P-22	SD5501(ピート層)	弥生土器	甕	15.0	-	(7.7)	黄灰	灰黄	b-3ML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	胴部刺突文1条。外面煤付着	C-418
154	1449	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層~ピート)	弥生土器	甕	18.0	-	(7.9)	暗灰黄	灰黄	a-3ML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	胴部刺突文1条。内面黒斑。外 面煤付着	C-327
154	1450	C区	P-22	SD5501北流路西 半	弥生土器	甕	15.5	-	(6.6)	灰	暗灰黄	b-3ML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□6/36	胴部刺突文1条。外面煤付着	C-338
154	1451	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	甕	16.2	-	(5.0)	褐灰	褐灰~灰褐	a-3SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	球形筋。外面煤付着	C-459
154	1452	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	13.2	-	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SM	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ナデ	□4/36	口縁部肥厚。外面煤付着	C-096
154	1453	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	5.6	(3.3)	浅黄橙	にぶい黄橙 ~橙	a-3M	良	ハケ	(摩滅不明)	底36/36	外面摩滅	C-252
154	1454	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	16.0	-	(4.2)	灰黄	灰黄	a-4ML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□5/36	擬凹線5条。胴部刺突文1列。 外面煤付着。摩滅目立つ	C-415
154	1455	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	弥生土器	甕	19.5	-	(4.3)	橙	にぶい褐	a-3M	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□21/36	擬凹線4条。外面煤付着	C-006
154	1456	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	弥生土器	甕	27.7	-	(10.7)	浅黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□2/36	擬凹線9条。外面煤付着	C-189
154	1457	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	22.8	-	(6.4)	にぶい橙~ い橙	にぶい橙	a-3SML	並	(摩滅不明)	ヨコナデ	□3/36	擬凹線5条。外面煤付着。摩滅 顕著	C-380
154	1458	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	24.8	-	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□3/36	擬凹線かされる	C-448
154	1459	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	19.7	-	(4.5)	暗灰黄	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線。内面摩滅	C-028
154	1460	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	19.6	-	(13.6)	褐灰~にぶ い橙	橙	a-3SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□20/36	擬凹線4条。胴部外面乱れた刺 突文。外面煤付着	C-138
154	1461	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	甕	19.7	-	(9.3)	にぶい橙	にぶい橙	b-4ML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	粘土器積み上げ痕跡。擬凹 線4条。外面煤付着	C-321
154	1462	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	20.0	-	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線8条。外面煤付着	C-441
154	1463	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	19.6	-	(5.3)	黄灰	黄灰	a-3SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	擬凹線8条。胴部刺突文1列。 外面煤付着	C-388
154	1464	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	甕	19.6	-	(4.0)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	擬凹線4条。外面煤付着	C-461
154	1465	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	18.9	-	(4.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線6条。頭部外面に工具あ たり痕。外面煤付着	C-378
154	1466	C区	P-22	SD5501南流路東 半	弥生土器	甕	18.5	-	(7.6)	橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ナ デ、ケズリ	ヨコナデ	□36/36	擬凹線6条。外面煤付着	C-292
155	1467	C区	P-21	SD5501砂層	弥生土器	甕	16.8	-	(3.9)	にぶい黄	にぶい黄	a-3M	良	ヨコナデ、ナデ か	ヨコナデ	□7/36	擬凹線5条。内面ヨコナデ。外面 煤付着	C-034
155	1468	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.1	-	(4.7)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線。外面煤付着	C-390
155	1469	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	17.0	-	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4M	良	ヨコナデ、ハ ケ、ナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□5/36	擬凹線5条。胴部刺突文1列。 外面煤付着	C-031
155	1470	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	甕	16.6	-	(4.9)	黄灰	黄灰	a-3SM	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	擬凹線6条。内面炭化物。外面 煤付着	C-385
155	1471	C区	P-21-22	SD5501北流路西 セク、青灰色砂 ~ピート	弥生土器	甕	15.7	-	(15.7)	灰黄褐	褐灰~にぶ い黄橙	b-4SM	良	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線5条。肩部刺突文1列。 内面コゲ。外面煤付着	C-067
155	1472	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	甕	16.6	-	(4.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□4/36	擬凹線。外面煤付着	C-493
155	1473	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	13.8	-	(4.5)	灰黄褐	灰黄褐	b-3SML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□15/36	擬凹線7条。胴部刺突文1列。 外面煤付着	C-066
155	1474	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	弥生土器	甕	12.5	-	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SM	並	ヨコナデ、ハ ケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線6条。外面煤付着	C-092
155	1475	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	14.5	-	(4.9)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-4SM	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□2/36	擬凹線6条	C-444
155	1476	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	15.3	-	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズ リか	ヨコナデ	□5/36	擬凹線6条。外面煤付着。内面 摩滅顕著	C-419
155	1477	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	30.1	-	(6.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□2/36	擬凹線4条以上。頭部外面に工 具あたり痕	C-376
155	1478	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	弥生土器	甕	26.3	-	(6.3)	にぶい橙	にぶい褐	a-4ML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ	□6/36	擬凹線10~13条。外面煤付着	C-041
155	1479	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	23.8	-	(5.0)	灰黄	灰黄	a-4SML	良	ヨコナデ	ヨコナデ、刺突 2ヶ所	□2/36	擬凹線4条以上。外面に種子痕 か	C-491
155	1480	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	22.2	-	(5.9)	褐灰	灰黄褐~黒	a-4SML	良	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線8条。外面黒斑	C-262
155	1481	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	22.1	-	(6.4)	にぶい橙	にぶい橙	a-3SML	良	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線8条。外面煤付着	C-377
155	1482	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	21.7	-	(5.7)	にぶい褐	にぶい褐	a-3M	良	ヨコナデ、ハ ケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□4/36	擬凹線9条。外面煤付着	C-132
155	1483	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	19.6	-	(7.7)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ナ デ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□2/36	擬凹線4条。外面煤付着	C-387
155	1484	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	19.4	-	(7.1)	黄灰	灰黄~黄灰	a-4SML	並	(摩滅不明)	ヨコナデ、ケズ リ	□8/36	擬凹線5条か。内面指頭圧痕。 外面摩滅顕著	C-230
155	1485	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	19.1	-	(6.0)	灰黄	灰黄	a-3SM	並	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線5条以上。外面煤付着	C-381
155	1486	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	18.0	-	(5.7)	灰黄褐	灰黄褐	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線6条。外面煤付着	C-157
155	1487	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	甕	18.0	-	(5.6)	にぶい褐	にぶい橙	a-4ML	並	(摩滅不明)	ヨコナデ、ハケ	□3/36	擬凹線5条。内面摩滅顕著	C-370
155	1488	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	甕	17.3	-	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい橙	a-3SML	並	ヨコナデ、ケズ リ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	擬凹線5条。外面煤付着	C-495
155	1489	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.0	-	(5.1)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ナ デ、ケズリ	ヨコナデ	□6/36	擬凹線8条。外面煤付着	C-391
155	1490	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.0	-	(4.0)	褐灰~灰褐	褐灰~灰褐	a-3SM	良	ヨコナデ、指頭 圧痕、ケズリ	ヨコナデ	□3/36	擬凹線8条。内外面煤付着	C-389

第54表 B・C区下層出土土器観察表4

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿出 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
157	1536	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	甕	17.6	-	(6.9)	褐灰	灰黄褐	a-4ML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	胴部刺突文1列。外面煤付着	C-346
157	1537	C区	P-22	SD5501南流路底(シルト・ピート層)	弥生土器	甕	17.6	-	(5.0)	灰黄	灰黄	a-3SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口2/36	内面黒斑。外面煤付着	C-447
157	1538	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.0	-	(6.4)	にぶい黄褐	灰黄褐	b-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口10/36	胴部刺突文1列。外面煤付着	C-238
157	1539	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	16.8	-	(4.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36		C-449
157	1540	C区	P-22	SD5501ピート層、南流路東セク	弥生土器	甕	16.4	-	(11.3)	灰黄褐～黒褐	灰黄褐	b-2	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口19/36	内面全体黒褐色ヨゴレ・外面全体煤付着	C-267
157	1541	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	甕	16.0	-	(3.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	外面煤付着	C-110
157	1542	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	約16	-	(5.1)	暗灰黄	灰黄褐	a-3SM5	並	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	外面煤付着	C-130
157	1543	C区	P-22	SD5501底(ピート層)	弥生土器	甕	15.7	-	(4.0)	灰黄	灰黄	a-4ML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	外面煤付着	C-412
157	1544	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	14.2	-	(6.4)	淡黄	淡橙	a-3M	並	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	摩滅目立つ	C-479
157	1545	C区	P-21・22	SD5501北流路西セク	弥生土器	甕	15.3	-	(5.4)	にぶい黄橙	灰褐	b-4SML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口23/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	C-065
157	1546	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	15.0	-	(3.1)	暗灰黄	黒褐	a-3ML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口4/36	内面ヨゴレ・外面煤付着	C-473
157	1547	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	14.1	-	(7.4)	浅黄橙	浅黄橙	b-4SM	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	外面煤付着	C-357
157	1548	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	4.8	(4.6)	にぶい黄橙	黄褐	a-4M	良	ナデ、ハケ	ハケ	底21/36	外底へラ記号「×」。内外面黒斑	C-150
157	1549	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	4.2	(3.3)	浅黄	にぶい黄橙～黒	a-4M～L	良	指ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	外面黒斑	C-253
157	1550	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	4.2	(4.6)	灰	灰黄褐～黒	a-4L	並	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	外面煤付着。内面摩滅	C-303
157	1551	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	3.7	(2.7)	にぶい黄褐	明赤褐	a-3M	並	ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	内面黒褐色コゲ・外面煤付着	C-128
157	1552	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	3.8	(2.3)	にぶい黄橙・黒	にぶい黄橙・黒	a-4ML	良	ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	底部外面黒斑	C-149
157	1553	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	甕	-	2.7	(3.1)	灰黄褐	黒褐	a-3M	並	ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	内面炭化物・外面煤付着	C-198
157	1554	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	-	2.5	(2.9)	にぶい橙	明黄褐	a-4M	並	ナデ	ケズリ、ナデ	底36/36	外面煤付着	C-251
157	1555	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	甕	-	4.0	(7.1)	黒褐	にぶい黄橙	a-3M	並	ナデ、ケズリ	ハケ、ナデ	底36/36	内面炭化物・外面煤付着	C-343
157	1556	C区	P-21	SD5501北流路西セク	弥生土器	甕	-	3.9	(5.3)	灰褐	にぶい褐	a-4M	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底23/36	外面煤付着	C-071
157	1557	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	14.0	-	(6.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	胴部刺突文1列	C-140
157	1558	C区	P-21	SD5501北流路西半	弥生土器	甕	16.4	-	(6.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	胴部刺突文1列。外面煤付着	C-055
157	1559	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	23.0	-	(4.9)	にぶい赤褐	にぶい褐	a-4SML	並	ヨコナデ	ヨコナデ	口5/36	外面煤付着。磨滅顕著	C-236
157	1560	C区	P-22	SD5501	弥生土器	甕	20.1	-	(5.0)	暗灰黄	灰黄褐	a-4ML	並	ヨコナデ、指頭圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	口6/36		C-408
157	1561	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	甕	18.2	-	(5.3)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	外面煤付着。内外面摩滅	C-191
157	1562	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	16.1	-	(5.0)	にぶい橙	にぶい橙	a-3SM	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36		C-453
157	1563	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	甕	15.8	-	(4.5)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	外面煤付着。内外面摩滅	C-480
157	1564	C区	P-22	SD5501底ピート	弥生土器	甕	15.6	-	(6.0)	にぶい黄	黄灰	a-3ML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	2mm大砂粒目立つ。外面厚く煤付着	C-374
157	1565	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.1	-	(4.8)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	(摩滅不明)	C-454
157	1566	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	16.8	-	(5.9)	浅黄橙～黄橙	灰黄褐	b-4SML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	外面煤付着	C-166
157	1567	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	15.8	-	(5.4)	橙	橙	a-3M	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	摩滅顕著	C-481
157	1568	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	25.0	-	(9.5)	橙	橙	a-3M	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	口縁部～頭部内面炭化物付着	C-229
157	1569	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	甕	19.5	-	(6.2)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	良	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口7/36	外面煤付着	C-169
157	1570	C区	P-21	SD5501	弥生土器	甕	18.9	-	(6.2)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	外面煤付着	C-298
157	1571	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	17.0	-	(9.1)	にぶい橙	にぶい橙	a-3SML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	外面黒斑。磨滅顕著	C-234
157	1572	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	16.4	-	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	外面煤付着。吹きこぼれ痕	C-492
157	1573	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	甕	15.8	-	(5.4)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口8/36	外面煤付着。内面摩滅	C-237
157	1574	C区	P-22	SD5501	土師器	甕	19.8	-	(5.5)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	外面煤付着	C-455
157	1575	C区	P-21	SD5501南流路西半底(砂層)	土師器	甕	16.0	-	(10.0)	にぶい褐	にぶい橙	a-3M	良	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口8/36	外面煤付着	C-040
157	1576	C区	P-21	SD5501北流路西セク	土師器	甕	15.4	-	(8.5)	灰黄、暗灰黄	灰黄	a-3ML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	外面煤付着	C-069
157	1577	C区	P-22	SD5501	土師器	甕	15.6	-	(8.3)	にぶい橙	にぶい橙～灰褐	a-4SML	良	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口9/36	内面棒状工具で粗いケズリ。外面煤付着	C-173
158	1578	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	甕	16.5	-	(4.3)	にぶい橙、黄橙	にぶい橙	a-4ML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	口3/36	外面煤付着・摩滅	C-432
158	1579	C区	P-22	SD5501南流路東半セク	土師器	甕	14.4	-	(4.3)	灰黄	灰黄	b-4ML	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36		C-214
158	1580	C区	P-22	SD5501	土師器	甕	13.1	-	(4.3)	褐灰、灰黄褐	黒	a-3ML	並	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	外面煤付着	C-103

第57表 B・C区下層出土土器観察表7

※ 量数の() 数値は残存値を示す。

挿図 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
161	1672	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	短頸有段壺	14.2	-	(5.7)	浅黄橙	にぶい黄橙	b-3M	並	(摩滅不明)	ヨコナデ、ミガキカ	□20/36	擬凹線3条。内面磨滅顕著	C-242
161	1673	C区	P-21	SD5501凹み(ピート層西)	弥生土器	短頸有段壺	16.2	-	(2.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SM	並	ヨコナデ	ヨコナデ	□5/36	沈線2条。外面煤付着	C-496
161	1674	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	短頸有段壺	14.8	-	(5.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□5/36	内外面磨滅顕著	C-397
161	1675	C区	P-21	SD5501南流路西半底(砂層)	弥生土器	短頸有段壺	-	-	(6.0)	浅黄	浅黄	a-3M	良	ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ	-	精製品	C-044
161	1676	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	短頸有段壺	15.7	-	(6.9)	灰黄褐	灰黄褐	b-3SM	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	□21/36	口縁部に黒斑	C-158
161	1677	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	短頸有段壺	16.6	-	(5.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4M	不良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□8/36	内外面磨滅顕著	C-011
161	1678	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	短頸有段壺	18.2	5.3	32.3	浅黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	ほぼ完形	外面煤付着	C-172
161	1679	C区	P-21-22	SD5501底(砂層)、南流路西半底(砂層)	土師器	短頸有段壺	-	(3.1)	(25.8)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	良	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ、タタキ	底36/36	外面黒斑。底部外面整形にタタキ	C-246
161	1680	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	土師器	二重口縁壺	-	-	(1.8)	浅黄	浅黄	b-3M	並	ヨコナデ	ヨコナデ	-	東海系パレス壺。円形浮文2ヶ所対か	C-184
161	1681	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	土師器	二重口縁壺	11.8	-	(3.1)	にぶい橙	にぶい橙	a-3S	良	ヨコナデ、ハケ	ハケ後ヨコナデ	□6/36	東海系パレス壺	C-426
161	1682	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	把手付壺	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML-a-5S	良	-	ナデ	-	胴部と異なる精良な胎土	C-194
161	1683	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層～ピート)	弥生土器	把手付壺	-	-	-	灰黄	にぶい黄橙	a-4SM-a-5	並	ナデ	ナデ	-	接合面にハケ転写。磨滅目立つ	C-324
161	1684	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	9.2	(5.4)	にぶい橙	橙～黄灰	a-4M	並	ハケ	ハケ、指頭圧痕、ナデ	底15/36	破片化後に被熱。黒色タール状煤付着	C-400
161	1685	C区	P-21	SD5501北流路中央(砂層)	弥生土器	壺	-	6.7	(6.4)	にぶい黄橙	明黄褐	a-4M	並	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ後ミガキカ	底36/36	外底使用で磨耗	C-053
161	1686	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	壺	-	8.0	(5.1)	橙～黄灰	橙	a-4M～L	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	底36/36	内外面磨滅顕著	C-203
161	1687	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	壺	-	5.8	(5.8)	灰～灰黄	淡黄～黒	a-4M	良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	外面黒斑	C-319
161	1688	C区	P-21	SD5501北流路中央(砂層)	弥生土器	壺	-	7.5	(5.1)	灰	橙～褐灰	a-3L	並	ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	外面煤付着	C-049
161	1689	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	6.2	(4.6)	黒褐	にぶい黄橙	b-6	並	ハケ、ナデ、指頭圧痕	ハケ、ナデ	底27/36		C-148
161	1690	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	壺	-	6.5	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙～黒	a-4M	良	ハケ	ハケ、ナデ	底36/36	外面黒斑	C-113
161	1691	C区	P-22	SD5501底	弥生土器	壺	-	6.0	(3.6)	灰	浅黄～灰	a-4M	良	ナデ	ハケ、ナデ、ミガキ	底36/36	底部黒斑	C-249
161	1692	C区	P-21	SD5501	弥生土器	壺	-	6.2	(3.2)	暗灰黄	暗灰黄～オリーブ黒	a-3L	並	ハケ	ミガキ、ハケ	底36/36	外底に黒斑。外面煤付着	C-305
161	1693	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	7.4	(6.1)	暗褐	黄灰	a-3M	並	ナデ	ハケ、ナデ	底24/36	内面コゲ・外面煤付着(煮沸容器転用)	C-032
161	1694	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	5.25	(6.0)	橙～褐灰	橙～暗灰	a-4M	並	ナデ、ケズリ	ハケ、ナデ	底36/36	外面黒斑	C-306
161	1695	C区	P-22	SD5501底	弥生土器	壺	-	3.45	(4.8)	黄灰	灰黄	a-4M	並	ナデ	ハケ後ケズリ、ナデ	底36/36	外面磨滅	C-248
161	1696	C区	P-21	SD5501	弥生土器	壺	-	4.0	(3.6)	灰黄褐	にぶい黄褐・黒	a-3M	良	ナデ、ハケ	ミガキ、ナデ	底36/36	外面黒斑	C-304
162	1697	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	長頸壺	-	-	(5.2)	灰黄	灰黄褐	b-4SM	良	ナデ	ミガキ	-	外面磨滅	C-277
162	1698	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	長頸壺	-	2.6	(5.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4ML	良	ミガキ	(摩滅不明)	底18/36	外面黒斑・磨滅顕著	C-245
162	1699	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	脚付長頸壺	9.0	-	(4.4)	にぶい橙	にぶい橙	b-4ML	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□5/36	赤色酸化粒多い。把手剥離痕1ヶ所	C-333
162	1700	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	脚付長頸壺	10.7	-	(11.2)	橙	橙	a-3L	良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□4/36	内外面磨滅顕著	C-329
162	1701	C区	P-22	SD5501北流路第1層	弥生土器	脚付長頸壺	7.9	-	(11.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□21/36	外面に黒斑。内外面磨滅顕著	C-341
162	1702	C区	P-22	SD5501北流路西半層	弥生土器	無頸壺	-	-	(7.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ナデ	ハケ後ミガキ	-	外面一部被熱・煤付着	C-500
162	1703	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	脚付無頸壺	-	10.2	(9.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4M	良	ナデ	ミガキ	脚36/36	磨滅顕著	C-186
162	1704	C区	P-21・22	SD5501北流路西七ヶ、南流路東半(砂層)、底(砂層)、ピート	弥生土器	脚付無頸壺	-	-	(4.4)	赤	橙～赤	a-3SML-a-5	良	ハケ後ミガキ	ミガキ	□7/36	外面赤彩。把手数不明	C-106
162	1705	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂茶色ピート)	弥生土器	脚付無頸壺	14.5	-	(8.0)	浅黄橙	にぶい黄橙	b-3S	良	ミガキ	ミガキ	□8/36	内外面赤彩。ゆがみあり。外面煤付着	C-001
162	1706	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	小型広口壺	11.6	2.5	10.3	橙	にぶい橙	a-3M	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ、ケズリ、ナデ	完形	口縁端部仕上げ粗い。外面煤付着	C-293
162	1707	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)、北流路西半	弥生土器	小型広口壺	13.0	4.4	10.4	にぶい橙	にぶい黄	a-3M	良	ミガキ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	□18/36	穿孔数不明(径0.5cm)。外面煤付着	C-207
162	1708	C区	P-21	SD5501北流路西七ヶ	弥生土器	小型広口有段壺	-	-	(10.5)	にぶい黄橙	にぶい黄	b-3M	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ後ミガキ、ナデ	-	有段口縁。外面煤付着	C-063
162	1709	C区	P-22	SD5501南流路東半七ヶ	弥生土器	小型有段壺	8.2	2.3	9.8	褐灰～にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S雲母	良	ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	□3/36	内外面赤彩。胴上位に乱れた4列の縦歯文、胴中に竹管文。全体磨滅	C-211
162	1710	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	13.8	-	(5.9)	黄灰～灰黄	灰黄	a-3SM	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ミガキ	□3/36	内面に黒斑。内外面磨滅	C-402
162	1711	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	12.8	-	(4.8)	にぶい黄橙	にぶい橙	b-4M	並	ヨコナデ、ケズリか	ヨコナデ	□8/36	外面磨滅顕著	C-392
162	1712	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型有段壺	11.0	-	(3.3)	灰黄	黄灰	a-4M	並	ミガキ	ミガキ	□4/36		C-104
162	1713	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型有段壺	14.0	-	(6.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	□12/36	外面一部煤付着	C-177
162	1714	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型有段壺	12.4	-	(4.9)	灰黄	灰黄	a-3SM	良	ヨコナデ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	□3/36		C-382
162	1715	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	12.4	-	(5.0)	灰白	灰白	a-3SM	良	ミガキ	ミガキ	□6/36	磨滅目立つ	C-471
162	1716	C区	P-22	SD5502底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	11.0	-	(4.7)	にぶい褐	にぶい褐	a-4ML	良	ミガキ	ミガキ	□4/36		C-450

第58表 B・C区下層出土土器観察表8

※法量の()数値は残存値を示す。

押図番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
162	1717	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	12.0	-	(5.5)	にぶい橙	にぶい橙～橙	a-4SML	良	ミガキ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	口4/36	内外面赤彩	C-042
162	1718	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	9.8	-	(4.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M a-5SM	並	ハケ後ミガキ、ヨコナデ	ミガキ	口6/36	内外面摩滅	C-435
162	1719	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型有段壺	9.5	-	(5.3)	橙	橙	a-4SM a-5S	並	(摩滅不明)	ミガキ	口12/36	内外面摩滅顕著	C-182
162	1720	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型有段壺	10.1	-	(5.4)	橙～にぶい橙	橙～にぶい橙	a-4SML	並	(摩滅不明)	ミガキ	口7/36	内外面摩滅顕著	C-221
162	1721	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型有段壺	17.3	-	(5.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SML	良	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	口3/36		C-442
162	1722	C区	P-21	SD5501ピート層～底	土師器	小型有段壺	9.9	-	(5.5)	橙	橙	a-3SM	良	ミガキ	ミガキ	口6/36	摩滅顕著	C-076
162	1723	C区	P-22	SD5501	土師器	小型壺	11.5	-	(4.5)	橙	橙	a-3SM	良	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	口7/36	外面煤付着。東海系	C-023
162	1724	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺	-	-	(5.6)	浅黄橙	灰黄	a-4M	良	ミガキ	(摩滅不明)	-	外面煤付着・摩滅	C-244
162	1725	C区	P-22	SD5501	土師器	小型壺	-	-	(4.4)	にぶい黄橙	赤褐～にぶい黄橙	a-4SML	良	ナデ	ハケ後ミガキ	底36/36	外面赤彩	C-018
162	1726	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	小型壺	-	4.6	(3.2)	浅黄橙	にぶい黄橙	a-4M	並	ナデ	ハケ	底36/36	外面煤付着	C-163
162	1727	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	小型壺	-	4.5	(4.2)	にぶい黄橙	にぶい橙	a-4ML	良	ミガキ	ミガキ、ナデ	底36/36	内外面摩滅	C-401
162	1728	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	小型壺	-	2.6	(2.4)	橙～にぶい橙	明赤褐	a-3M	並	ナデ	ナデ、ハケ	底36/36	外面煤付着	C-188
162	1729	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型壺	-	1.5	(2.1)	黒	にぶい黄橙	a-3M	並	(付着不明)	ナデ、ハケ	底36/36	内面厚く炭化物付着。外面煤付着	C-178
162	1730	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	小型壺	-	3.2	(1.6)	灰黄褐	浅黄橙	a-2	並	ハケ、ナデ	ナデ	底36/36	外面煤付着	C-199
162	1731	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	小型壺	-	3.1	(1.4)	灰	灰黄～黒	b-3M	不良	ナデ	ナデ	底36/36		C-200
162	1732	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	小型壺	-	1.2	(1.2)	にぶい黄・黒褐	にぶい赤褐・黒褐	b-3M	並	ナデ	ナデ、ハケ	底36/36	内面厚く炭化物付着。外面煤付着	C-171
162	1733	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	小型壺	-	3.3	(1.4)	黄灰	浅黄～黄灰	a-3M	並	ナデ	ナデ	底36/36	外面使用で磨耗。手づくねの可能性あり	C-170
162	1734	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型脚付壺	-	9.2	(6.2)	にぶい褐～黄橙	にぶい褐～黄橙	a-4ML	良	ミガキ、ハケ、ナデ	ミガキ、ヨコナデ	底36/36	脚端部凹線1条	C-272
162	1735	C区	P-21	SD5501北流路西半	弥生土器	小型脚付壺	-	7.6	(6.7)	暗灰黄	灰黄	a-2	良	ミガキ、ナデ	(摩滅不明)	脚36/36	外面摩滅顕著	C-057
162	1736	C区	P-21・22	SD5501北流路西半・南流路東半(砂層)	弥生土器	小型脚付壺	-	6.9	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	良	ナデ	ミガキ	脚22/36	内外面摩滅	C-059
162	1737	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型脚付壺類	-	9.8	(4.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ナデ	ミガキ	底15/36	外面黒斑	C-135
163	1738	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	20.4	(5.8)	黒褐	灰黄褐	a-3M	良	ナデ、ハケ	ヨコナデ、ミガキ	底12/36	外面を直線文・波状文・鋸歯文・鋭利な工具による刺突文で加飾。倒位で内面を煮沸容器に転用・炭化物付着。外面煤付着。後期前半か	C-035
163	1739	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	18.6	(2.1)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3SML	良	ナデ	ヨコナデか	底3/36	外面をスタンプ文・三角形文(内部に斜行文)・同心円文で加飾。倒位で内面を煮沸容器に転用・炭化物付着。磨耗目立つ	C-143
163	1740	C区	P-22	SD5501	弥生土器	高坏	-	-	(7.5)	浅黄橙	浅黄橙	a-3M	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	-	スタンプ文がすかに残る。内外面剥離・磨滅。傾きに不安あり	C-331
163	1741	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(3.6)	浅黄橙	黒	b-3M	並	ミガキ	ミガキ	-	内面黒斑。外面赤彩。把手数不明	C-142
163	1742	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	30.4	-	(4.5)	浅黄	浅黄	a-3S	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口5/36	内外面摩滅顕著	C-268
163	1743	C区	P-22	SD5501北流路西半底(シルト層)	弥生土器	高坏	31.3	-	(4.6)	にぶい橙	にぶい橙	a-4M	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口5/36	底部内面水平コゲ・外面煤付着(煮沸容器転用)	C-416
163	1744	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	弥生土器	高坏	約26	-	(2.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4S a-5S	良	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	口3/36		C-467
163	1745	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	約24	-	(3.7)	浅黄	にぶい黄～黒	a-3S	良	(摩滅不明)	ミガキ	口4/36	外面黒斑。内面摩滅顕著	C-014
163	1746	C区	P-21	SD5501砂層	弥生土器	高坏	-	-	(9.9)	灰黄、暗灰	灰黄	a-4ML	良	ナデ	ミガキ	-		C-039
163	1747	C区	P-22	SD5501	弥生土器	高坏	-	-	(11.6)	浅黄橙	浅黄橙	a-4M	並	ナデ	(摩滅不明)	-	外面摩滅	C-468
163	1748	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	28.2	-	(5.9)	灰黄～橙	浅黄～赤褐	b-4SML	良	ミガキ	ハケ後ミガキ	口1/36	内外面赤彩。内面摩耗	C-147
163	1749	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	25.7	-	(5.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	良	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	口4/36	内面摩滅顕著	C-364
163	1750	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	24.6	-	(5.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	並	ミガキ	ミガキ	口6/36		C-490
163	1751	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	高坏	約22	-	(6.4)	黒～橙	橙～黒	a-4S	良	(摩滅不明)	ミガキ	口3/36	内面摩滅顕著	C-196
163	1752	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	高坏	17.6	-	(7.9)	黄褐	黄褐	a-4M	良	ミガキ	ミガキ	口7/36	外面煤付着。鉄分沈着	C-195
163	1753	C区	P-22	SD5501中央部・底(砂層)	弥生土器	高坏	-	19.2	(2.2)	にぶい黄褐	にぶい黄橙～褐	b-3S	良	ハケ後ヨコナデ	ミガキ	脚4/36	外面赤彩。倒位で内面を煮沸容器に転用・煤付着	C-367
163	1754	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	高坏	-	17.4	(5.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3M	並	(摩滅不明)	ハケ	脚23/36	内面摩滅顕著	C-080
163	1755	C区	P-22	SD5501	弥生土器	高坏	約24	-	(4.7)	灰黄	灰黄	a-2	良	ミガキ	ミガキ	脚4/36	混和材少なく、胎土精良・粘質	C-021
163	1756	C区	P-21	SD5501北流路西セク	弥生土器	高坏	-	18.9	(8.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ハケ、工具ナデ	ミガキ	脚18/36	裾端部沈線1条。穿孔3ヶ所(径1.0cm、乾燥後外側から)。倒位で煮沸容器転用(1738と同じ)。内面炭化物・外面煤付着	C-064
163	1757	C区	P-21	SD5501北流路西セク	弥生土器	高坏	-	-	(10.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ナデ	ミガキ(板状工具)	-	穿孔3ヶ所。シボリ痕良好に残る	C-060
163	1758	C区	P-22	SD5501底	弥生土器	高坏	-	-	(10.3)	にぶい黄	灰黄	a-4M	良	ミガキ、ナデ、ハケ	ミガキ	-	穿孔4ヶ所	C-085
163	1759	C区	P-21	SD5501北流路西セク	弥生土器	高坏	-	-	(11.1)	にぶい褐、灰黄	灰黄	b-4ML	並	ミガキ、ナデ、ハケ	ハケ後ミガキ	-	穿孔3ヶ所(径約1cm)。赤色酸化粒多い	C-062

第59表 B・C区下層出土土器観察表9

															※ 質量の() 数値は残存値を示す。			
挿図 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
163	1760	C区	P-22	SD5501(ピート層)	弥生土器	高坏	-	-	(10.5)	にぶい黄橙 ～褐	にぶい黄橙 ～褐	b-3S	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	-	穿孔数不明	C-427
163	1761	C区	P-22	SD5501	弥生土器	高坏	-	-	(11.0)	橙、にぶい 黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ	-	坏部内面磨減顕著	C-353
163	1762	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(13.2)	灰黄	灰黄	a-3ML	良	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	-	坏部内面磨減。シボリ痕目立っ つ	C-144
163	1763	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(10.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4ML	並	ナデ	ハケ後ミガキ	-	内外面磨減	C-429
163	1764	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(7.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	良	ナデ、ハケ	ミガキ	-	穿孔5ヶ所(孔径0.5cm)	C-421
163	1765	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(10.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	-	穿孔3ヶ所(孔径0.6cm)	C-363
164	1766	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	高坏	-	12.8	(11.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4ML	良	ミガキ、ハケ後 ナデ	ハケ後ミガキ	脚5/36	外面黒斑(横位で焼成)。内外面 磨減	C-254
164	1767	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(9.8)	灰黄	灰黄	a-4S	良	ナデ	ミガキ	-	穿孔4ヶ所(径1.0cm)	C-469
164	1768	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(9.6)	にぶい黄橙	灰黄	a-4ML	並	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	-	外面に黒斑。内外面磨減	C-038
164	1769	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(7.8)	橙	にぶい橙	a-2	良	ナデ、板状工 具ナデ	ミガキ	-	内面磨減	C-485
164	1770	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(7.0)	淡赤橙、に ぶい黄橙	浅黄橙	b-4SML	良	(磨減不明)	ミガキか	-	穿孔数不明。内外面磨減	C-043
164	1771	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	土師器	高坏	-	10.0	(2.3)	暗褐～にぶ い黄橙	褐～赤褐	b-4SM	並	ハケ、ヨコナデ	ミガキ	底6/36	外面赤彩	C-090
164	1772	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	14.2	(3.2)	浅黄	浅黄	a-4S	良	ヨコナデ、ナデ	ハケ後ミガキ	底6/36		C-489
164	1773	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	-	(7.0)	灰黄褐	灰黄褐 褐	a-4ML	良	ミガキ、ナデ	ミガキ	-	丁寧なミガキ。穿孔4ヶ所	C-424
164	1774	C区	P-22	SD5501	土師器	高坏	-	12.2	(8.3)	にぶい黄橙	にぶい橙～ 黄橙	a-4M	良	ナデ	ミガキ	脚4/36	穿孔4ヶ所(孔径0.4cm)。脚部 の一部煤付着	C-088
164	1775	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	土師器	高坏	-	11.9	(7.0)	灰黄	灰黄	a-4M	良	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	-	脚部の一部煤付着	C-187
164	1776	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	土師器	高坏	-	-	(8.0)	にぶい橙	にぶい橙	a-4M	良	ナデ、ハケ	ハケ後ミガキ	-	坏部内面磨減	C-168
164	1777	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	高坏	-	-	(7.1)	灰黄	灰黄	a-4ML	並	ヨコナデ、ナデ	ハケ	-	仕上げ粗い	C-134
164	1778	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	土師器	高坏	-	-	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4	良	ナデ	ミガキ	-	孔数不明	C-466
164	1779	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	高坏	-	-	(5.1)	浅黄	浅黄	a-4M	並	ナデ後ミガキ	ミガキ	-	穿孔3ヶ所か	C-486
164	1780	C区	P-21	SD5501底(砂層)	土師器	高坏	9.8	-	(7.3)	浅黄	浅黄	a-3M	並	ミガキ、ナデ	ミガキ	口18/36	脚部に円孔(数不明)。外面煤 付着	C-302
164	1781	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	高坏	-	16.0	(2.5)	にぶい褐	にぶい赤褐	b-3S	並	ヨコナデ	ヨコナデ	底4/36	穿孔4ヶ所か。鉄分沈着	C-258
164	1782	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	土師器	高坏	約25	-	(4.5)	灰黄～黒	灰黄～黄褐	a-3ML	並	ミガキ	ミガキ	口3/36	口縁端部に沈線状凹部1条。外 面黒斑	C-079
164	1783	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	高坏	-	12.2	(3.3)	にぶい橙	にぶい黄橙	a-4ML	並	ナデ	ミガキ	口5/36		C-487
164	1784	C区	P-22	SD5501	弥生土器	器台	21.0	-	(2.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3M	良	ヨコナデ、ミガ キ	ヨコナデ、ミガ キ	口3/36	擬凹線2条	C-102
164	1785	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	器台	21.0	-	(3.9)	灰黄褐	灰黄褐	b-3M	良	ミガキ	ヨコナデ、ミガ キ	口2/36	擬凹線3条	C-183
164	1786	C区	P-22	SD5501南流路東 半セク	弥生土器	器台	20.1	-	(2.1)	黄灰～灰黄	灰黄	a-3SML	良	ミガキ	ヨコナデ、ミガ キ	口2/36	擬凹線4条。内面磨減顕著	C-215
164	1787	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	器台	24.8	-	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4SM	良	ミガキ	ミガキ	口4/36	外面黒斑	C-257
164	1788	C区	P-22	SD5501	弥生土器	器台	約18	-	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	良	ミガキ	ミガキ	口5/36	外面黒斑	C-101
164	1789	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	器台	-	-	(1.8)	灰黄	灰黄～赤	a-1	並	(磨減不明)	(磨減不明)	-	外面赤彩。S字スタンプ文、刻 み1列	C-109
164	1790	C区	P-22	SD5501	弥生土器	器台	約24	-	(6.9)	にぶい橙	にぶい橙	a-4M	並	(磨減不明)	(磨減不明)	口3/36	0.7～1.3cm大シャモット多く混 ざる	C-180
164	1791	C区	P-22	SD5501北流路西 半底(シルト層)	弥生土器	器台	21.0	-	(14.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	不良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ 後ミガキ	口6/36	内面磨減顕著	C-361
164	1792	C区	P-21	SD5501砂層	弥生土器	器台	-	-	(9.5)	灰黄褐	にぶい黄橙	a-3M	良	ナデ、ハケ	ミガキ	-	内面全体煤付着	C-037
164	1793	C区	P-22	SD5501鞍部(ピート 層)	弥生土器	器台	-	-	(10.5)	にぶい橙	にぶい橙	a-3SM	並	ナデ	ミガキ	-	穿孔3ヶ所(径約1cm)。内面端部 磨減顕著	C-425
164	1794	C区	P-22	SD5501(青灰色砂 層)	弥生土器	器台	21.0	14.3	15.0	浅黄橙	浅黄橙	a-3M	不良	(磨減不明)	ミガキ	口26/36	穿孔5ヶ所(径約1cm)。内面磨減 顕著	C-274
164	1795	C区	P-22	SD5501	弥生土器	器台	-	15.4	(13.5)	にぶい橙	にぶい橙	b-3M	並	ナデか	ミガキ、ヨコナ デか	底20/36	穿孔4ヶ所(径1.0cm)。磨減顕著	C-017
164	1796	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	弥生土器	器台	18.8	-	(11.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3M	並	ハケ後ミガキ、 ナデ	ハケ後ミガキ	口1/36	外面黒斑(横位焼成)。外面 磨耗	C-002
164	1797	C区	P-21・22	SD5501底(砂層)	弥生土器	器台	-	15.2	(4.8)	浅黄～黒	浅黄～黒	a-3M L微	並	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	脚20/36	沈線15条。外面赤彩。脚部 タール状煤付着	C-117
165	1798	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	器台	-	-	(8.0)	灰黄褐	灰黄褐	a-3S	良	ナデ	ハケ後ミガキ	-	破片化後、内面煤付着	C-464
165	1799	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	器台	-	-	(9.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-4ML	並	ナデ	ミガキ	-	混和材非常に多い	C-133
165	1800	C区	P-21	SD5501北流路西 半	弥生土器	器台	-	-	(9.6)	灰黄	灰黄	a-4ML	良	ナデ	ミガキ	-	外面煤付着	C-058
165	1801	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型器台	9.7	-	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ミガ キ	口3/36	丸棒(径0.8cm)。脚部穿孔数不 明	C-273
165	1802	C区	P-21	SD5501南流路西 半底(砂層)	弥生土器	小型器台	-	12.7	(7.4)	にぶい赤褐	にぶい橙	a-4ML	並	ナデ	(磨減不明)	脚11/36	穿孔3ヶ所(径1.1cm)。内外面 磨減	C-091
165	1803	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型器台	-	17.3	(5.2)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	(磨減不明)	ミガキ	底12/36	内面磨減顕著	C-136
165	1804	C区	P-22	SD5501南流路東 半(砂層)	弥生土器	装飾器台	-	-	(2.7)	灰黄褐～に ぶい黄橙	にぶい橙	a-4S	並	ハケ後ミガキ か	ミガキ、ヨコナ デ	-	内面煤付着	C-193
165	1805	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	装飾器台	-	-	(2.2)	灰黄褐	褐灰	b-3SM	並	ヨコナデ	(磨減不明)	-	穿孔3ヶ所(うち1ヶ所は不規則。 径3mm)。煤付着	C-095
165	1806	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	装飾器台	18.0	-	(6.9)	橙	橙	a-3M	並	ミガキ	ミガキ	口4/36	赤彩。沈線2条、刻み1列、透か して加飾	C-255

第60表 B・C区下層出土土器観察表 10

※ 質量の() 数値は残存値を示す。

押戻 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面 色調	外面 色調	胎土 分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測 番号
165	1807	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	裝飾器台	17.0	-	(6.2)	灰褐～赤	灰黄褐～赤褐	a-2	並	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ	□4/36	内外面赤彩	C-228
165	1808	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	裝飾器台	16.0	-	(6.4)	橙	橙	b-3S	並	(摩滅不明)	ハケ後ミガキ	□12/36	内面摩滅	C-269
165	1809	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	裝飾器台	-	-	(3.4)	橙	橙～灰	a-3SM	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	-	磨滅顯著	C-350
165	1810	C区	P-21	SD5501北流路中央(砂層)	弥生土器	鉢	22.0	-	(10.4)	にぶい黄橙	灰黄	a-3ML	並	ハケ、ナデ	ナデ一部ハケ	□3/36	外面黒斑	C-107
165	1811	C区	P-22	SD5501ピート層	弥生土器	鉢	15.7	-	(7.3)	明褐灰	明褐灰	a-3SML	並	ハケ	ハケ、ヨコナデ	□5/36	刻み1列。内面に黒斑	C-351
165	1812	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	鉢	12.0	-	(9.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙 明赤褐	b-4ML	並	ナデ	ナデ、ハケ	□4/36	外面黒斑	C-119
165	1813	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層～ピート)	弥生土器	鉢か	13.7	-	(7.2)	黄灰	にぶい黄橙	a-4ML	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキか	□8/36	外面摩滅	C-325
165	1814	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	鉢	約13	-	(5.6)	浅黄橙	橙	b-3M	並	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□5/36	外面煤付着	C-232
165	1815	C区	P-21	SD5501底(砂層)	弥生土器	有段鉢	約34	-	(7.0)	浅黄橙	浅黄橙	a-3M	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□2/36	擬凹縁5条か。磨滅顯著	C-366
165	1816	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	有段鉢	約25	-	(8.6)	にぶい黄橙	灰黄褐	a-4S	並	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ	□2/36	赤色酸化粒多い。内外面磨滅	C-266
165	1817	C区	P-22	SD5501ピート層、北流路西半	弥生土器	有段鉢	24.6	-	(4.5)	にぶい黄橙	浅黄橙	a-3M	並	(摩滅不明)	ヨコナデ、ハケ	□7/36	外面煤付着。内面磨滅顯著	C-348
165	1818	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	鉢	17.5	-	(6.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	□16/36	沈線1条。正位で煮沸容器に使用(口縁部～外面煤付着)	C-015
165	1819	C区	P-21	SD5501	弥生土器	有段鉢	15.3	-	(4.7)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SML	良	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ	□3/36	口縁部外面にケズリ痕	C-411
165	1820	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	有段鉢	約14	-	(5.0)	浅黄	浅黄	a-3M	並	ミガキ、ケズリ	ミガキ、ヨコナデ、ハケ	□4/36		C-478
165	1821	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	鉢	17.2	-	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい橙	a-4M	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ	□4/36	内面黒褐色炭化物付着。外面磨滅顯著	C-201
165	1822	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	有段鉢	16.3	-	(3.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3S	良	ミガキ	擬凹縁後ミガキ	□2/36	擬凹縁8条。口縁部一部煤付着	C-365
165	1823	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	有段鉢	17.8	-	(7.1)	にぶい橙	にぶい橙	a-4SM	良	ミガキ	ミガキ	□6/36		C-224
165	1824	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	有段鉢	-	-	(7.0)	にぶい橙	にぶい褐	a-3M	良	ミガキ	ミガキ	-		C-470
165	1825	C区	P-22	SD5501北流路東セク	土師器	有段鉢	12.2	-	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ヨコナデ、工具ナデ	ヨコナデ、ハケ	□8/36	外面煤付着	C-405
166	1826	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型鉢(碗形)	9.0	-	(5.6)	黒褐	褐灰	a-3SML	良	ハケ後ミガキ	ヨコナデ、ナデ	□9/36	内面全面にタール状炭化物付着。北沢あり	C-356
166	1827	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型鉢(碗形)	-	3.9	(6.9)	浅黄橙	浅黄橙	a-4ML	不良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	底36/36	胎土マール状。内外面磨滅顯著	C-022
166	1828	C区	P-22	SD5501	弥生土器	小型鉢(碗形)	-	4.4	(4.1)	橙	黄灰～橙	a-2M	並	ナデ	ナデ	底36/36	内外面摩滅	C-175
166	1829	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型鉢(碗形)	10.6	4.6	6.5	褐灰～灰黄褐	褐灰～灰黄褐	a-3S	並	ミガキ	ヨコナデ、ケズリ後ミガキ、ナデ	□27/36	内面一部煤付着	C-162
166	1830	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	弥生土器	小型鉢(碗形)	約14	-	(5.1)	にぶい橙～灰	橙	b-2	並	ヨコナデ、ケズリ	ハケ	□6/36	内外面磨滅顯著	C-499
166	1831	C区	P-21	SD5501北流路西セク	弥生土器	小型鉢(碗形)	9.3	-	(3.7)	灰黄褐	褐灰	b-3M	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	□11/36		C-070
166	1832	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型鉢か	-	4.7	(6.3)	にぶい黄橙～灰	にぶい黄橙	a-4ML	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	底34/36	外面黒斑。内外面磨滅顯著	C-484
166	1833	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	小型鉢	-	5.6	(4.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	被熱に伴い変質・変色	C-270
166	1834	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	鉢か	-	-	(4.3)	にぶい橙	褐～にぶい黄褐	a-4SML	並	ナデ、指頭圧痕	ナデ	-	鑄状。赤色粒混入。台付きか	C-137
166	1835	C区	P-21	SD5501底(砂層)	土師器	手づくね土器	3.5	-	3.6	にぶい橙	にぶい黄橙	a-4SML	並	ナデ	ナデ	□7/36	外面黒斑	C-307
166	1836	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	8.7	(4.8)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	脚36/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)。内外面磨滅顯著	C-123
166	1837	C区	P-21	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	7.6	(5.3)	黒褐	にぶい橙	a-3M	並	ナデ	(摩滅不明)	脚36/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)。内外面磨滅顯著	C-301
166	1838	C区	P-22	SD5501北流路西半シルト底	土師器	小型壺(脚)	-	7.1	-	赤橙	浅黄	a-3M	並	工具ナデ	ナデ	脚36/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)。外面煤付着	C-340
166	1839	C区	P-21	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	8.8	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい褐	a-3M	並	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	脚15/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)	C-089
166	1840	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	7.6	(5.2)	にぶい橙 黒褐	にぶい橙	a-3M	並	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	脚31/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)	C-271
166	1841	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	7.0	(4.6)	にぶい橙	にぶい橙	a-3M	並	ナデ	ナデ	脚9/36		C-465
166	1842	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師器	小型壺(脚)	-	7.2	(3.3)	にぶい褐	浅黄橙	b-3M	並	ナデ	(摩滅不明)	底18/36	被熱に伴い変質・変色(製塩に使用か)。外面磨滅	C-131
166	1843	C区	P-22	SD5501底(砂層)、鞍部ピート層	弥生土器	有孔鉢	16.2	1.7	13.1	灰黄褐	灰黄褐～にぶい黄橙	a-3SM	良	ヨコナデ、ハケ後ナデ	ヨコナデ、ハケ	□24/36	沈線2条。焼成前穿孔(径0.7cm)。内外面煤付着	C-223
166	1844	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	弥生土器	有孔鉢	-	5.0	(4.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	良	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	焼成前穿孔(径0.8cm)。外面薄く煤付着	C-078
166	1845	C区	P-22	SD5501中央部	弥生土器	有孔鉢	-	2.8	(7.5)	灰黄～黄褐	にぶい黄橙	b-4SML	良	ケズリ	ハケ、ナデ	底36/36	焼成前外面から穿孔(径0.8cm)	C-112
166	1846	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	有孔鉢	-	3.6	(4.9)	にぶい黄橙～橙	にぶい黄橙	b-3M	良	ケズリ	ハケ後ミガキか	底36/36	両面から焼成前穿孔(径0.5cm)。外面磨滅	C-250
166	1847	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	6.0	つまみ径1.8	2.6	灰白～灰	にぶい黄橙～赤	b-4SM	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	完形	2孔1対の円孔(径0.3cm)を対面2ヶ所に穿つ。外面赤彩。内面磨滅顯著	C-227
166	1848	C区	P-22	SD5501(ピート層)	弥生土器	壺	9.9	つまみ径1.5	5.2	橙	橙	a-3SM	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	□30/36	赤色酸化粒多い。外面煤付着。磨滅顯著	C-347
166	1849	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	つまみ径5.0	(6.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3ML	良	ミガキ	指ナデ、ミガキ	鉛14/36	内外面磨滅	C-146
166	1850	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	壺	-	つまみ径4.3	(3.8)	にぶい橙	にぶい橙	a-3S	良	指ナデ、ハケ	指ナデ、ハケ	鉛36/36		C-275
166	1851	C区	P-22	SD5501南流路東半セク	弥生土器	壺	-	つまみ径4.4	(3.8)	灰黄	灰黄	a-3SM	良	指ナデ	指ナデ、ミガキ	□18/36		C-216

第61表 B・C区下層出土土器観察表 11

※ 質量の() 数値は残存値を示す。

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土分類	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
166	1852	C区	P-22	SD5501	弥生土器	蓋	-	つまみ径 5.1	(4.4)	灰黄褐	灰黄褐	a-3SML	良	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ、指ナデ	鈕36/36	外面煤付着	C-087
166	1853	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	つまみ径 3.8	(5.0)	黒	明赤褐～にぶい黄橙	a-1	良	ミガキ、ヨコナデ	ミガキ	鈕36/36	鉄分沈着。内面煤付着	C-422
166	1854	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	つまみ径 4.0	(5.3)	にぶい黄	にぶい黄橙・橙	a-4ML	並	ナデ	(摩滅不明)	鈕24/36	穿孔(径0.7cm)。内面煤付着	C-440
166	1855	C区	P-22	SD5501	弥生土器	蓋	13.4	-	(6.8)	橙	橙	a-4S	並	ミガキか	ミガキ	底4/36	内面煤付着	C-020
166	1856	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	11.0	-	(5.9)	にぶい褐	にぶい橙	a-3L	良	ナデ	ミガキ	口13/36	内外面摩滅	C-398
166	1857	C区	P-22	SD5501南流路東半セク	弥生土器	蓋	11.6	つまみ径 3.1	5.2	にぶい橙	にぶい橙	b-2	良	ハケ後ミガキ	ミガキ	完形		C-217
166	1858	C区	P-21	SD5501	弥生土器	蓋	13.9	つまみ径 3.0	4.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	並	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	口3/36		C-121
166	1859	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	つまみ径 約4.5	(3.7)	浅黄	浅黄	a-3M	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	鈕36/36	中心に径1mmの孔穿つ。磨滅顕著	C-225
166	1860	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	つまみ径 3.2	(3.4)	にぶい橙	にぶい橙	a-3SM	並	ハケ(工具痕)	指ナデ、ハケ	鈕36/36	内外面摩滅	C-256
166	1861	C区	P-22	SD5501	弥生土器	蓋	-	つまみ径 2.9	(3.2)	灰白	灰白～赤	a-4SM	並	ミガキ	ミガキ、指ナデ	鈕36/36	外面赤彩。内面摩滅	C-399
166	1862	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	つまみ径 3.0	(2.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3M	並	(摩滅不明)	ナデ、ミガキ	鈕5/36	内面摩滅	C-299
166	1863	C区	P-22	SD5501底(砂層)	弥生土器	蓋	-	-	(4.2)	灰	灰黄	a-4M	並	ナデ	ハケ、ナデ	-	内面煤付着か	C-423
166	1864	C区	P-22	SD5501北流路西半底(シルト層)	土師質	土製円蓋	長さ 4.7	幅 4.8	厚さ 0.9	-	浅黄橙	b-3SM	並	ナデ	ハケ	-	焼成後に穿孔1ヶ所(径0.5cm)。残存重量19.4g。摩耗	C-118
166	1865	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師質	土製円蓋(未製品)	長さ 4.2	幅 4.5	厚さ 0.5	-	にぶい橙	b-4SML	並	ナデか	(摩滅不明)	-	焼成後に中途まで穿孔か(径0.3cm、深さ0.2cm)。重量10.2g。内外面磨滅	C-339
166	1866	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	土師質	土鍾	長さ 4.2	径 4.3～4.6	孔径 0.8	-	灰黄～黒	a-3SML	並	-	ナデ	-	黒斑あり。重量72.9g	C-336
166	1867	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師質	土鍾	長さ 3.7	径 4.0～4.3	孔径 0.8	-	にぶい黄橙	a-4SML	並	-	ナデ	-	残存重量53.0g。外面黒斑。剥離	C-141
166	1868	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師質	土鍾	長さ 3.7	径 3.8～4.0	孔径 0.7	-	灰黄～黒	b-3SML	良	-	ナデ	完形	重量47.7g。外面黒斑	C-243
166	1869	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師質	土鍾	長さ 3.2	径 3.4～3.7	孔径 0.6	-	灰黄	b-4SM	並	-	ナデ	-	重量39.9g	C-122
166	1870	C区	P-22	SD5501底(砂層)	土師質	土鍾	長さ 3.4	径 3.6～3.7	孔径 0.6	-	灰黄～黒	b-4SM	良	-	ナデ	完形	重量37.3g。外面黒斑	C-010
166	1871	C区	P-22	SD5501	土師質	土鍾	長さ 3.3	径 3.3	孔径 0.7	-	灰黄褐	a-3SML	並	-	ナデ	完形	重量34.6g。外面黒斑	C-019
166	1872	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	土師質	土鍾	長さ 3.0	径 3.1～3.3	孔径 0.7	-	灰黄～黒	a-3SM	並	-	ナデ	-	線刻・人面様。残存重量24.5g。外面黒斑。剥離	C-192
166	1873	C区	P-21	SD5501底(砂層)	土師質	土鍾	長さ 2.0	径 2.0～2.3	孔径 0.3	-	にぶい黄橙～橙	a-3SML	並	-	ナデ	完形	不整形。重量約7.5g。磨滅	C-309
166	1874	C区	P-21	SD5501北流路西半	土師質	土鍾	長さ 3.3	径 2.6	孔径 0.6	-	にぶい黄橙	b-4SM	並	-	ナデ	-	残存重量20.8g。磨滅	C-072
166	1875	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	非ロクロ土師器	鍋	約32	-	(5.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-4ML	良	ハケ	ヨコナデ、ハケ	口4/36	上層遺物。壁面から転落か	C-335
176	1981	C区	O-23	SD5502底砂・東1～西3	弥生土器	壺	約18	-	(4.2)	にぶい橙	浅黄橙	a-4SML	並	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口2/36	刻み1列。摩滅目立つ	C-420
176	1982	C区	O-22	SD5502暗灰色粘質土	弥生土器	壺	-	-	(3.4)	黒褐	黒褐	b-3SM	並	ナデ	ナデ	口2/36	天王山式。刻み、連弧文、重菱形文で加飾。内面炭化物付着。1437・38、1637、1992と同胎土	C-314
176	1983	C区	O-23	SD5502底砂・東1～西3	弥生土器	壺	15.5	-	(3.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3SML	並	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口6/36	内面炭化物・外面煤付着	C-310
176	1984	C区	O-23	SD5502底砂・東1～西3	弥生土器	壺	-	6.0	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄褐～黒	a-4M	並	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	底36/36	外面煤付着	C-311
176	1985	C区	O-21	SD5502	弥生土器	壺	19.4	-	(6.0)	にぶい黄橙	灰黄褐	a-4ML	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口7/36	摩滅顕著	C-312
176	1986	C区	O-21	SD5502	弥生土器	壺	-	3.7	(3.0)	灰黄褐	にぶい橙	a-4SML	良	ナデ	ミガキ	底36/36	外面赤彩(底部含む)。外面摩滅	C-313
176	1987	C区	O-22	SD5502東半	弥生土器	蓋	-	つまみ径 3.1	(4.9)	明赤灰	明赤灰	a-3SM	良	ハケ	ナデ、ハケ	つまみ 36/36	外面黒斑。内面磨滅	C-279
176	1988	C区	O-22	SD5502東半	弥生土器	器台	-	約19	(2.1)	にぶい黄橙	赤	a-4SM	良	ハケ	ミガキ	底4/36以下	外面赤彩。内外面磨滅顕著	C-488
176	1991	C区	N-21	SD5506	弥生土器	壺	19.0	-	(3.0)	にぶい黄橙	浅黄橙	b-3L	並	ヨコナデ	ヨコナデ	口6/36	刻み1列。外面煤付着。内面摩滅顕著	C-308
176	1992	C区	O-21	SD5506	弥生土器	壺	19.5	-	(7.0)	にぶい黄橙～黒褐	黒褐	b-3SML	良	ナデ	ナデ	口5/36	2mm以上の角張った石英等の砂粒非常に多い(1437・38、1637、1982と同胎土)	C-315
176	1995	B区	K-21	SD5520	弥生土器	高坏	-	-	(5.3)	橙	橙	a-2	並	(摩滅不明)	(摩滅不明)	-	穿孔2ヶ所(径0.5cm)。内外面摩滅顕著	C-289
176	1996	C区	N-23	包含層	弥生土器	壺	約16	-	(2.8)	灰黄褐	灰黄褐	a-3SML	並	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	口3/36	沈線後刻み1列。外面煤付着。内面摩滅	C-375
176	1997	C区	N-23	包含層	弥生土器	壺	-	5.1	(4.7)	にぶい黄橙・灰	にぶい黄橙	a-3M～L	良	ナデ	ハケ、ナデ	底36/36	内面摩滅。外面煤付着	C-358
176	1998	C区	-	不明	弥生土器	鉢(穿孔)	-	6.2	(5.2)	浅黄橙	浅黄橙	a-4M	並	ナデか	ハケ、ナデ	底27/36	乾燥後に内側から穿孔(径0.5cm)	C-360
176	1999	C区	-	排土	弥生土器	裝飾器台	-	-	(3.7)	灰	にぶい黄橙～灰	a-4SM	良	ミガキ	ミガキ	-	スタンプ文渦中心を穿孔(1～1.5mm)	C-359
176	2000	B区	M-21	SD5523ベース土	弥生土器	壺	16.3	-	(4.9)	にぶい橙	褐灰	b-4SML	並	ヨコナデ	ハケ	口19/36	外面煤付着	C-285
176	2001	C区	L-21	ベース土(P5512)	弥生土器	壺	17.6	-	(10.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	a-3SML	良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口7/36	綾杉文、突帯貼付斜格子文。内外面摩滅顕著	C-362

第62表 B・C区下層出土石器・石製品観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図 番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
167	1876	C区	P-22	SD5501底(砂層)	石鏃	玉髓質泥岩	3.5	1.2	0.5	1.3	黒褐色。越後産か	石-004
167	1877	C区	P-22	SD5501竪穴下 ベース土	石鏃	安山岩	3.1	(1.55)	0.5	(1.1)	表面風化。灰白色。茎部欠損	石-029
167	1878	C区	P-22	SD5501底(砂層)	剥片	鉄石英	2.7	3.1	1.0	6.1	にぶい赤色。石鏃未成品か	石-022
167	1879	C区	P-22	SD5501底(砂層)	剥片	鉄石英	2.8	3.4	0.8	8.3	にぶい赤色	石-028
167	1880	C区	P-22	SD5501	剥片	ガラス質安山岩	4.6	3.7	0.5	7.8	黒色。石匙状	石-003
167	1881	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	剥片	ガラス質安山岩	4.8	2.4	6.5	7.5	黒色。1面風化	石-018
167	1882	C区	P-22	SD5501(凹部ピート層)	剥片	玉髓質泥岩	4.4	4.1	1.4	22.1	半透明～黄褐色	石-007
167	1883	C区	P-22	SD5501底(砂層)	剥片	玉髓質泥岩	4.1	3.6	1.3	17.9	半透明～黄褐色	石-015
167	1884	C区	P-22	SD5501底(砂層)	石核	緑色凝灰岩	3.5	3.2	2.2	31.9	にぶい深緑色・硬質。節理あり	石-016
167	1885	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	管玉未製品(角柱体)	鉄石英	2.2	1.0	0.8	2.5	にぶい赤色	石-011
167	1886	C区	P-22	SD5501底(砂層)	管玉未成品(粗割り)	緑色凝灰岩	4.2	2.4	1.5	22.9	にぶい深緑色・硬質。正面平滑。弥生中期	石-009
167	1887	C区	P-22	SD5501南流路底(シルト、ピート)	石包丁	安山岩	幅 (7.1)	高 (8.3)	1.7	(171.7)	打製横刃型。使用で刃面平滑。被熱煤付着。石材能登産	石-001
167	1888	C区	P-22	SD5501底(砂層)	敲石	花崗岩か	9.3	7.3	5.0	483.8	浅黄色。上下端に敲打・磨滅痕、背面に磨滅痕	石-012
167	1889	C区	P-22	SD5501底(砂層)	磨石	花崗岩か	7.2	5.7	3.8	219.7	浅黄～灰白色。全面平滑、上下端に磨滅痕	石-013
167	1890	C区	P-22	SD5501南流路底(シルト、ピート)	磨石	石英	4.9	3.4	2.6	62.9	灰白色。側縁部に磨滅痕。一部煤付着	石-020
167	1891	C区	P-22	SD5501底(砂層)	磨石	花崗岩か	7.0	7.8	6.3	389.7	灰色。器面平滑	石-027
167	1892	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	砥石	安山岩か	(4.7)	(3.8)	3.1	(77.4)	灰色。3面を砥ぎに使用。被熱で煤付着	石-010
167	1893	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	砥石	砂岩	(7.0)	(5.2)	4.3	(155.1)	灰白色。3面を刃物砥ぎに使用	石-005
167	1894	C区	P-22	SD5501底(砂層)	砥石	砂岩	7.1	5.6	3.1	207.7	灰色。器面平滑	石-026
167	1895	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	砥石	凝灰岩	5.2	3.5	3.5	82.7	灰白色。上下面摩耗痕	石-008
167	1896	C区	P-22	SD5501底	砥石か	粗粒凝灰岩	14.0	5.7	6.4	633.5	灰白色。左側縁・上下面の敲打痕	石-002
167	1897	C区	P-22	SD5501	砥石	軽石凝灰岩	4.3	6.5	3.0	13.1	灰白色。最深5mmの刃物研ぎ痕残る。	石-006
167	1898	C区	P-22	SD5501底(砂層)	砥石	軽石凝灰岩	4.0	4.0	3.4	7.9	灰白色。正面以外を砥ぎに使用	石-017
167	1899	C区	P-22	SD5501底(砂層)	砥石	軽石凝灰岩	3.8	3.0	2.7	5.2	灰白色。多面的な研ぎ痕	石-021
167	1900	C区	P-22	SD5501底(砂層)	不明	海綿か	4.4	3.4	2.1	10.6	灰白色。スポンジ状の気泡。加工痕なし。一部変色	石-025
176	1989	C区	O-22	SD5502西-1セク	砥石	軽石凝灰岩	(4.2)	(2.9)	(1.9)	(2.8)	灰白色。2面を砥ぎ面に使用	石-023
176	1990	C区	O-22	SD5502西-3セク	磨石	細粒砂岩	20.1	9.4	4.8	1092.0	灰白色。底面以外平滑	石-024
176	1993	C区	O-22	SD5506	砥石か	凝灰岩	5.7	4.5	3.3	115.2	灰白色。表・背面に敲打痕	石-014
176	1994	C区	N-23	SD5508	剥片	ガラス質安山岩	5.9	3.8	1.1	22.9	黒色。1面風化	石-019

第63表 B・C区下層出土木製品観察表1

※ 法量の() 数値は残存値を示す。

挿入 番号	番号	地区	グリッド	出土遺構	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	木取り	備 考	実測 番号
148	1399	C区	N-21	SB552(P5512)	柱根	63.5	23.1	22.4	キハダ	芯持丸木		木特-17
148	1400	C区	N-21	SB552(P5513)	柱根	51.6	26.6	25.8	スダジイ	芯持丸木		木特-19
151	1410	C区	N-21	SK5510セク内	柱根	(15.8)	10.8	10.7	ツバキ属	芯持丸木		木-109
151	1411	C区	O-22	P5506	柱根	(11.5)	13.9	10.6	ツバキ属	芯持丸木		木-111
151	1412	B区	K-21	P5509	柱根	(31.6)	19.9	5.7	スギ	板目	底面に粗い切断痕	木-108
168	1901	C区	P-22	SD5501南流路東半底(砂層)	直柄平鋸	(33.1)	20.5	3.8	コナラ属アカガシ亜属	柱目	広鋸。柄孔2.4×2.6cm。装着角度58°。柄孔隆起側面は直線的な加工。泥除装着の突帯は不明	木-033
168	1902	C区	P-22	SD5501南流路東半	直柄平鋸(未成品)	(33.8)	(14.5)	5.0	コナラ属アカガシ亜属	柱目	広鋸。刃部幅15cm以上。柄孔、柄孔隆起、泥除装着装置を粗ケズリ	木-034
168	1903	C区	P-22	SD5501	曲柄平鋸	(25.9)	(10.3)	1.4	コナラ属アカガシ亜属	柱目	側面に加工痕。軸頭・刃部欠損	木-211
168	1904	C区	P-22	SD5501北流路西半(砂層)	曲柄平鋸	31.2	(10.1)	1.7	コナラ属アカガシ亜属	柱目	曲柄装着孔長さ約1.5cm。平鋸を再加工し、二又鋸に再加工か	木-032
168	1905	C区	P-22	SD5501(青灰色砂層)	鋤柄	(23.0)	2.5	(6.9)	コナラ属アカガシ亜属	柱目	組合わせ	木-210
168	1906	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	(7.2)	16.1	1.1	スギ	板目	未製品か	木-045
168	1907	C区	P-22	SD5501底	平鋸または平鋸	(13.0)	11.6	1.0	コナラ属アカガシ亜属	柱目	刃部。左右や非対称	木-020
168	1908	C区	P-22	SD5501	木包丁	(4.4)	(7.2)	0.9	ケヤキ	柱目	紐孔2ヶ所(径0.3cm)。方形孔1ヶ所(約0.1cm)	木-215
168	1909	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	6.4	4.6	1.7	ケヤキ	分割材	両側の半円形の孔(径約3cm)	木-041
168	1910	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	加工材	(7.8)	7.3	1.4	トチノキ	分割材	円孔3ヶ所(径0.8～1cm。約0.1cm)	木-043
168	1911	C区	P-22	SD5501	紡錘車	(6.3)	(3.6)	0.9	コナラ属アカガシ亜属	柱目	径約6.5cm、軸径約0.7cm	木-040
168	1912	C区	P-21	SD5501(青灰色砂層～ピート)	木錘	15.0	8.4	7.5	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	中央に細い溝(深さ0.3cm)、一端に根による孔(1.3～2.0cm)	木-050
168	1913	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	木錘	17.4	6.0	(5.4)	コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	両端の加工粗い	木-018
168	1914	C区	P-22	SD5501南流路東セク	木錘か	15.3	10.0	7.4	クマノミズキ類	芯持丸木	両面中央に細い溝(幅約2cm、深さ約1cm。全周しない)。腐朽顕著	木-202
169	1915	C区	P-22	SD5501南流路	舟形木製品	(47.1)	(4.9)	(3.2)	スギ	分割材	割貫。円孔1ヶ所(径約0.3mm)	木-015
169	1916	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	網杵	(47.7)	2.8	2.2	カヤ	芯持丸木	網留孔10ヶ所残存(径約2～3mm、1.6～2.5cm間隔)。紐かけ先端内側に平坦面	木-017
169	1917	C区	P-21	SD5501北流路西セク	盾	(12.5)	(7.3)	(0.9)	モミ属	板目	紐綴孔径0.2～0.3mm。孔列4列(上下2.5cm間隔)、孔間0.8～1.0cm間隔	木-022a
169	1918	C区	P-21	SD5501北流路西セク	盾	(12.5)	(7.3)	(0.9)	モミ属	板目	紐綴孔径0.2～0.3mm。孔列5列(上下1.6cm間隔)、孔間0.8～1.0cm間隔	木-022b
169	1919	C区	P-21	SD5501北流路西セク	盾	(12.5)	(7.3)	(0.9)	モミ属	板目	紐綴孔径0.2～0.3mm。孔列2列(上下1.6cm間隔)、孔間0.8～1.0cm間隔	木-022c
169	1920	C区	P-21	SD5501(褐色ピート～底)	蓋	長径13.5	短径12.0	器高3.0	スギ	柱目	平面楕円形。桶蓋か。腐朽目立つ	木-049
169	1921	C区	P-21	SD5501北流路西半(凹部砂層)	加工品(柄)	8.5	3.1	(2.3)	カエデ属	削出	柄中途で切断	木-029
169	1922	C区	P-22	SD5501	加工材	(12.2)	(2.2)	0.6	スギ	板目	板材。ややずれて円孔2ヶ所(径0.9cm)。木釘1ヶ所残存(径0.3cm)	木-031
169	1923	C区	P-21	SD5501	加工材	(15.8)	4.1	0.3	スギ	板目	板材。斜め方向の切断痕	木-047
169	1924	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	加工材	9.9	4.7	1.4	ケヤキ	柱目	板材。穿孔3ヶ所(径0.3cm)	木-048
169	1925	C区	P-22	SD5501底	加工材	8.8	(6.7)	2.0	コナラ属アカガシ亜属	柱目	板材。鋸類未成品を再加工か	木-021
169	1926	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	加工材	10.1	6.6	1.2	コナラ属アカガシ亜属	柱目	板材。斜めに孔1ヶ所(径0.2×0.7cm)	木-153
169	1927	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(17.5)	1.4	1.2	スギ	削出丸棒	一端を尖らす	木-044
169	1928	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	28.5	1.6	1.5	スギ	削出丸棒	有頭。一端を尖らす	木-038
169	1929	C区	P-21	SD5501北流路西セク	棒状木製品	(31.2)	2.7	1.9	アサダ	削出丸棒		木-152
169	1930	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(34.4)	1.8	1.5	スギ	削出丸棒	先端を鋭利に尖らす	木-129
169	1931	C区	P-22	SD5501凹み(ピート)	棒状木製品	(25.3)	2.8	1.8	スギ	削出棒	断面半円形。裏面平坦。長さ約3.5cm。段差約0.2cmの割りこみ2ヶ所	木-061
169	1932	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(35.4)	1.2	0.6	スギ	柱目	角材	木-208
169	1933	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(35.9)	1.5	0.8	スギ	分割材	角材。一端を鋭利に尖らす	木-128
169	1934	C区	P-21	SD5501南流路西半底(砂層)	棒状木製品	40.0	2.1	1.6	クリ	削出丸棒	両端丸く仕上げる	木-064
169	1935	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(50.7)	1.9	1.5	スギ	分割材	角材。一端を鋭利に尖らす。腐朽目立つ	木-195

第64表 B・C区下層出土木製品観察表2

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿入 番号	番号	地区	グリッド	出土遺構	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	木取り	備 考	実測 番号
170	1936	C区	P-22	SD5501底	板状木製品	(111.7)	4.2	0.3	スギ	板目	一端を尖らす	木-136
170	1937	C区	P-22	SD5501底(砂層)	板状木製品	(77.5)	10.2	1.8	スギ	板目		木特-13
170	1938	C区	P-21	SD5501北流路西半凹部	板状木製品	(45.2)	12.3	2.2	スギ	板目	略円形孔(5.1×4.2cm)	木-130
170	1939	C区	P-22	SD5501北流路東セク	板状木製品	(28.2)	13.8	2.1	スギ	板目	一端に切断痕。中央に隅丸方形孔	木-098
170	1940	C区	P-22	SD5501南流路西半底(砂層)	板状木製品(矢板)	18.4	8.7	1.7	スギ	板目	矢板に転用	木-066
170	1941	C区	P-21	SD5501底(ピート層)	板状木製品	(32.4)	5.0	1.2	スギ	板目	一端先細る	木-190
170	1942	C区	P-22	SD5501南流路杭(北側)	杭	81.1	5.6	4.5	スギ	分割材	角材。先端1側面を尖らせ、杭に転用	木特-15
170	1943	C区	P-22	SD5501底(砂層)	加工材	(67.9)	(4.2)	(4.0)	スギ	ミカン割材	角材か	木-065
170	1944	C区	P-22	SD5501凹み(ピート)	加工材	26.1	6.5	2.5	コナラ属アカガシ亜属	柱目	梯子様の起伏2ヶ所(約6cm間隔で段差0.6~1cm)。一端の側面を加工して矢板に転用か	木-063
170	1945	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材(クサビ)	23.4	4.0	2.7	コナラ属アカガシ亜属	柱目	断面長方形。先端先細る	木-151
170	1946	C区	P-22	SD5501中央凸部	加工材	28.1	4.8	2.1	コナラ属アカガシ亜属	柱目	全面加工。断面長方形	木-209
170	1947	C区	P-22	SD5501底	加工材	33.1	7.2	3.2	コナラ属アカガシ亜属	柱目	全面加工。断面長方形。一端を斜め方向に切断	木-132
171	1948	C区	P-22	SD5501北流路東セク	棒状木製品	(49.6)	5.2	3.6	スギ	分割材	角材。一端に粗い切断痕	木-197
171	1949	C区	P-22	SD5501(粗砂層)	棒状木製品	(45.9)	3.3	3.7	スギ	分割材	角材。木やせあり(幅1.3cm、深さ0.3cm)	木-194
171	1950	C区	P-21	SD5501	加工材	(32.5)	8.8	5.0	—	ミカン割材	先端部加工痕・炭化。裏面に加工痕	木-051
171	1951	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	(24.2)	4.2	3.6	—	ミカン割材		木-189
171	1952	C区	P-21	SD5501底(砂層)	加工材	(24.8)	2.8	2.7	スギ	削出棒	腐朽目立つ	木-203
171	1953	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	15.4	4.0	(2.7)	—	ミカン割材	一端を1方向から加工	木-201
171	1954	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	(13.8)	2.7	2.9	—	分割材	一端を斜めに切断	木-207
171	1955	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	棒状木製品	43.2	2.6	1.1	スギ	板目	板材。先細る先端両側面に各1ヶ所の鋸歯状の加工	木-039
171	1956	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(36.3)	2.1	1.3	スギ	分割材	角材	木-196
171	1957	C区	P-21	SD5501	棒状木製品	(46.2)	2.3	2.3	—	分割材	腐朽目立つ	木-188
171	1958	C区	P-22	SD5501	棒状木製品	(38.2)	1.2	1.1	スギ	分割材	角材	木-193
171	1959	C区	P-21	SD5501	棒状木製品	(61.7)	3.4	1.3	スギ	板目	角材。一端を斜めに切断。腐朽顕著	木-199
171	1960	C区	P-22	SD5501底(砂層)	棒状木製品	(68.2)	2.2	1.7	スギ	板目	角材	木-103
171	1961	C区	P-21	北流路SD5501西セク	棒状木製品	(71.0)	2.9	2.3	イヌガヤ	芯持丸木	小舞か。表面若干加工	木-001
171	1962	C区	P-22	SD5501底	棒状木製品	(87.1)	2.3	1.3	スギ	柱目		木-003
172	1963	C区	P-21	SD5501南流路西セク	加工材	(21.4)	11.5	4.8	ケヤキ	ミカン割材	ホゾ状の加工あり	木-204
172	1964	C区	P-21	SD5501(青灰色砂~ピート層)	加工材	(20.7)	6.5	7.0	—	ミカン割材	一端は粗い切断	木-192
172	1965	C区	P-2	SD5501中央凸部	加工材	28.5	10.8	5.4	サクラ属	半裁材	両端加工痕あり。未成品か	木-134
172	1966	C区	P-21	SD5501北流路西半凹部	加工材	15.0	11.9	4.4	ツバキ属	半裁材		木-191
172	1967	C区	P-2	SD5501中央凸部	加工材	(16.1)	8.6	3.8	ツバキ属	分割材	2ヶ所に円孔(1つは貫通、径3~4mm)。右側面コゲ、下端加工	木-131
172	1968	C区	P-21	SD5501北流路西半凹部	加工材	(18.0)	(9.2)	(4.5)	—	半裁材	樹皮残る。炭化	木-198
172	1969	C区	P-22	SD5501南流路東半(砂層)	加工材	17.7	7.3	7.0	ツバキ属	芯持丸木	長さ約2cm、深さ0.7cmの抉り1ヶ所。木鏝の可能性あり	木-019
173	1970	C区	P-22	SD5501中央凸部	棒状木製品	66.3	23.3	7.7	カエデ属	芯持丸木	Y字材。樹皮残存。先端炭化	木特-16
173	1971	C区	P-21	SD5501南流路西半底(砂層)	棒状木製品(杭)	(59.5)	9.5	5.7	ニシキギ属	芯持丸木	Y字材。先端尖らす	木-059
173	1972	C区	P-21	SD5501北流路西セク	棒状木製品	(60.1)	3.5	3.6	ツバキ属	芯持丸木	屈曲。表面未加工	木-200
173	1973	C区	P-21	SD5501底(砂層)	杭	(39.2)	5.9	6.0	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	枝切り落とし痕あり	木-135
173	1974	C区	P-22	SD5501底(砂層)	杭	(41.6)	7.0	8.1	ツバキ属	芯持丸木		木-133
173	1975	C区	P-22	SD5501南流路杭(南側)	杭	33.5	8.5	8.5	モチノキ属	芯持丸木	頭部つぶれる	木-159
173	1976	C区	P-21	SD5501(青灰色砂~ピート層)	加工材	(31.8)	5.7	5.6	モクレン属	芯持丸木	側~裏面に抉り痕か(幅0.7~1.4cm、深さ0.8cm)。腐朽目立つ	木-042
173	1977	C区	P-21	SD5501北流路西セク	加工材	(37.7)	4.8	3.9	ツバキ属	芯持丸木	一端を斜め方向に切断	木-214
173	1978	C区	P-22	SD5501底(砂層)	杭か	(21.9)	3.8	3.5	—	芯持丸木	先端尖らす・炭化	木-205
173	1979	C区	P-21	SD5501南流路西半底(砂層)	綴皮	12.2 ×5.0	幅8.8	0.1	—	—	三重に丸まる	木-060
173	1980	C区	P-22	SD5501	綴皮	6.4 ×1.8	幅6.4	0.1	—	—		木-030
176	2002	C区	N-23	排水溝(暗灰色粘質土)	柱根	73.8	17.0	15.6	—	ミカン割材		木-090

第7章 A区最下層の遺構と遺物

第1節 調査の概要

A区最下層は、対象面積1,500㎡を測り、調査杭グリッドでいえばF-19～25区、G-19～24区、H-19～22区、I-19～21区、J-19・20にあたる(第179図)。A区の上層遺構は第3・4次調査で、また下層遺構は本次調査(第5章)で、それぞれ調査を実施している。最下層の遺構検出面の標高は、調査区南東隅(F-25区)が約4.10m、南西隅(F-19区)が約3.90m、北西隅(J-19区)が約3.40mをそれぞれ測り、東から西方向に向けて約20cm、南から北方向に向けて約50cmの標高差をもつ。検出した遺構覆土は、強い水流により順次堆積した淡灰色または黄褐～褐色を呈する砂～シルト・粘質土や褐色腐植土を、ベース土は灰褐～黒褐色強粘質土を、それぞれ基調とする。また、ベース土の一部をなす青灰色強粘質土(第181図f層)から縄文時代後期末の浅鉢(第183図2009)が単独出土した。現地調査時は、この遺物が帰属する生活層としての基盤面が確認できないことから、東側の埋没谷奥部から土砂とともに流入・堆積した遺物と判断している。

調査の結果、溝2条(最下層SD501・502)、鞍部1ヶ所を検出した。最下層SD501と最下層SD502・鞍部は、後述するとおり時期差をもち、前者はA区下層に属する遺構と考えられる。遺物は、最下層SD501から弥生時代後期後半の土器、木製品が出土した。

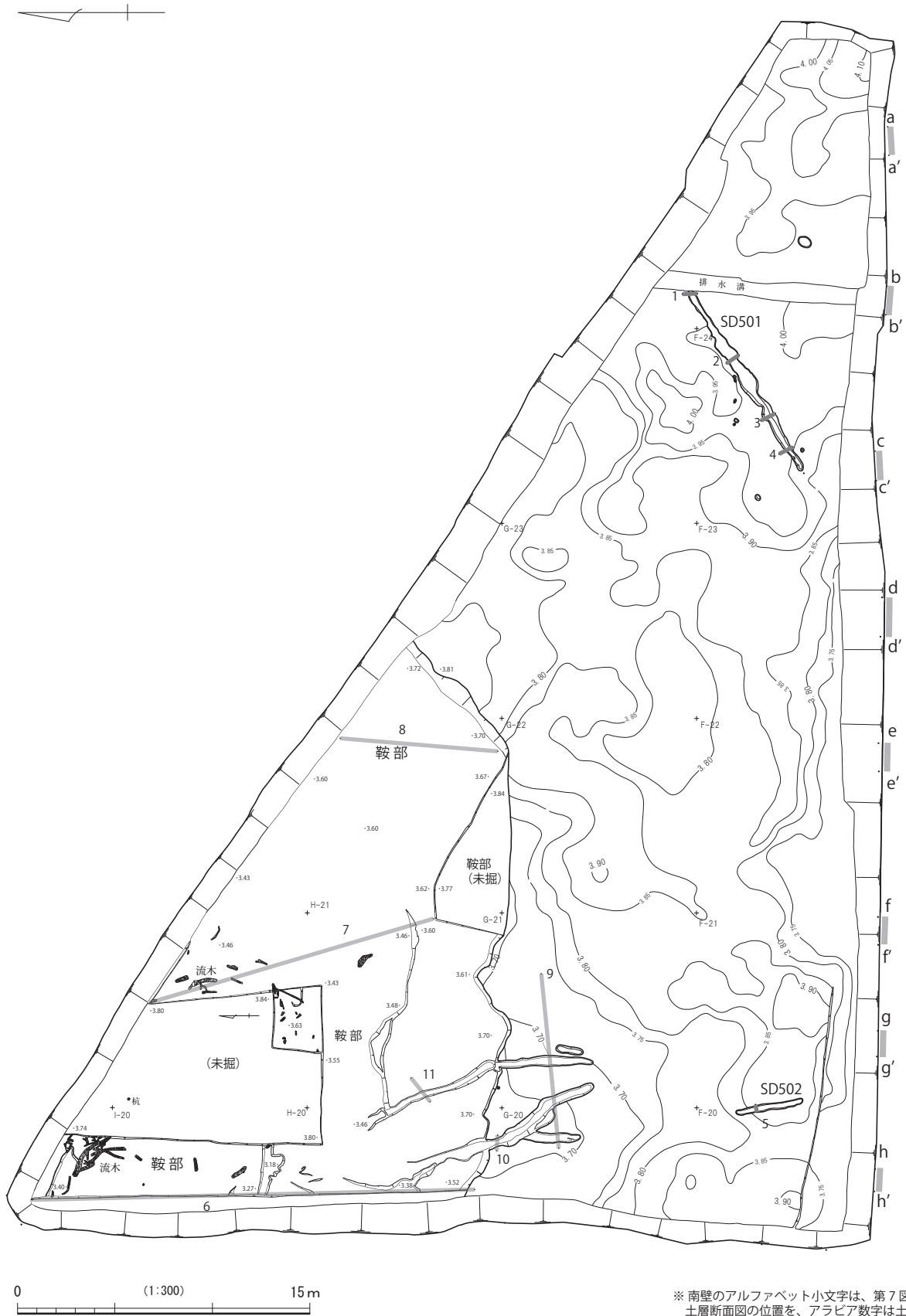
次に、A区西壁土層断面図を元に、土層堆積状況を模式的に示し、第3・4・8次調査との関係を若干整理しておきたい(第181図)。A区の基本土層層序は、上位層から、a層(淡黄灰～灰褐色粘質土・粘質シルト)、b層(黄橙～黄褐色粘質土)、c層(暗褐色粘質土)、d層(自然木を押し流しながら短期間に水成堆積した鞍部覆土)、e層(黒褐色強粘質土)、f層(青灰色強粘質土)となり、B・C区の状況からb層が下層包含層の続きと考えられる。土層断面の標高からは、c層をベース面にa・b層が堆積する谷地形(H杭ライン以南)と、e層をベース面にd層が堆積する谷地形(F～I杭ライン)が確認でき、いずれの土層からも少量の土器片が出土している。検出した遺構でいえば、最下層SD501は大きく標高を減じるa層を、最下層SD502・鞍部はe層を、それぞれベース面にすると判断している。

また、第3次調査では、上層遺構と同じ検出面(a層上面が検出面)で、弥生時代後期の遺構(SK24、SK26、SD119、SD181・120・163等)と多くの遺物を確認している。このうち、第3次SD181・120・163は、第8次SD2028、第4次SD4022につながる1条の基幹的溝(延長110m以上)である。第3次SD120は、A区西壁でa層をベース面とするものの、A区H-21区で位置的に重複する下層SD502検出時には掘削痕跡を確認できなかった。このことから、弥生時代後期～古墳時代の生活面は、a層をベース面とする時期(第3次SD120)と、c層をベース面とする時期(第5次下層)に分けられ、a層が層厚を大きく減じるA区下層調査北側周辺や第3次調査区で、ほぼ同じ標高で検出可能であったと考えられる。

また、北接する第8次調査A区的生活面は、新しい生活面から順に、第1面(古代以降)、第2面(弥生時代後期～古墳時代)、第3面(弥生時代後期頃、流路等検出)、第4面(弥生時代中期頃、流路等検出、紫色粘土がベース土)、第5面(弥生時代中期頃、黒色粘土がベース土)、第6面(弥生時代中期以前、青灰色層、縄文土器片、石器出土)、第6面下層(縄文時代の遺構、遺物)となる⁽¹⁾。本次調査の第181図e層上面が第8次調査第5面に、同図f層が第8次調査第6面に対応するものと考えられる。

第2節 遺構と遺物 (遺構：第179・180・182図、遺物：第183図、第64・65表)

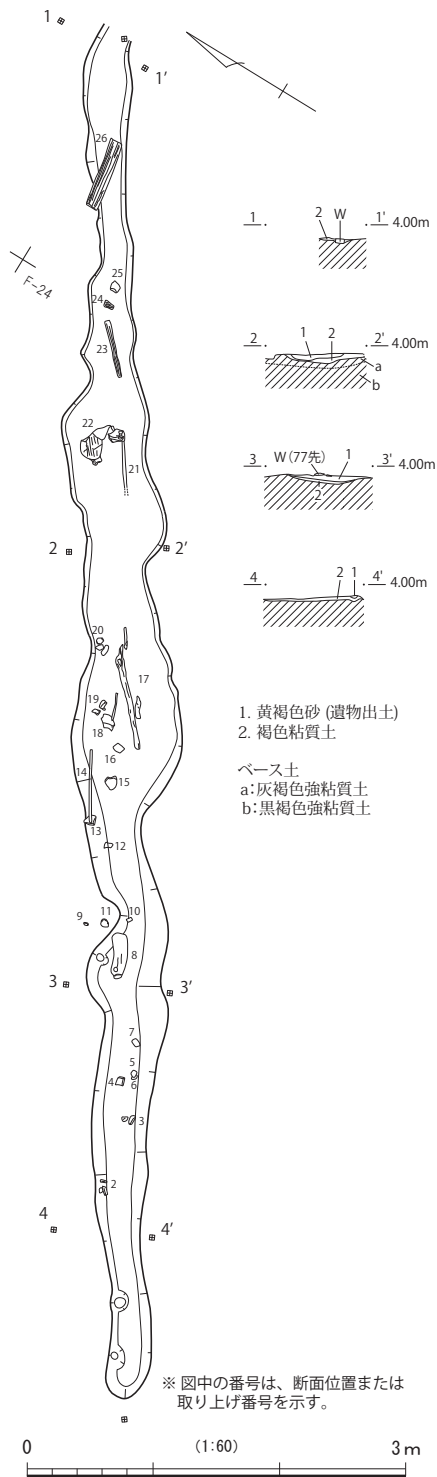
SD501 F-23・24区で検出した直線的な溝で、前述のとおり下層遺構に属し、溝底面のみを検出している。主軸方位はN-約122°Wを示し、延長10.9m以上、幅22～70cm、深さ2～7cmを測る。覆土は、下層から褐色



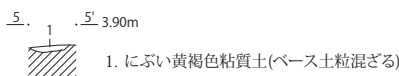
※ 南壁のアルファベット小文字は、第7図土層断面図の位置を、アラビア数字は土層断面図の位置を、それぞれ示す。

第179図 A区最下層平面図 (S =1/300)

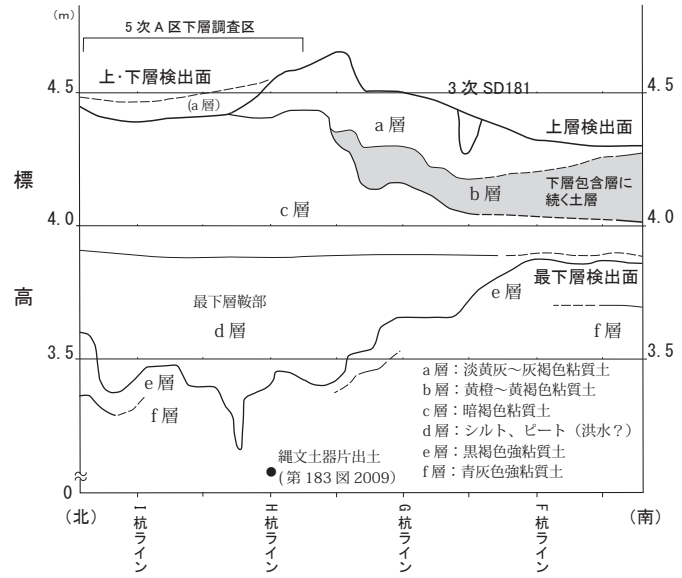
F-23区最下層SD501



F-19区最下層SD502



第180図 A区最下層遺構平面図・断面図 (S=1/60)

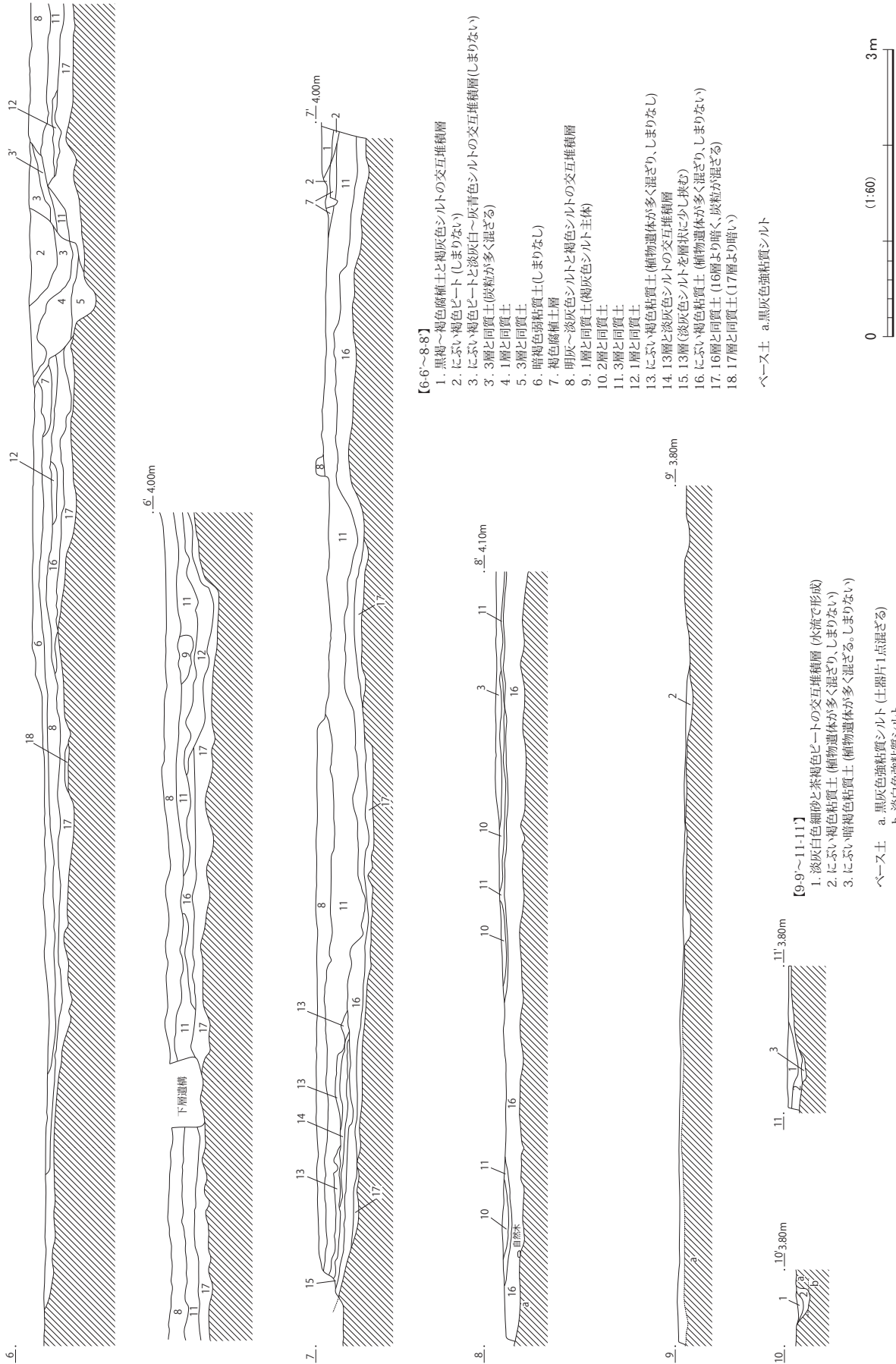


第181図 A区西壁土層断面模式図

粘質土、黄褐色砂となり、第7図土層断面d-d'のとおり、水成堆積層と考えられる。出土した遺物のうち、第183図2003～08を図示、弥生時代後期後半に位置付けられる。甕2003は口径18.8cmを測り、口縁端部を肥厚気味に仕上げる。甕2004、長頸壺2005は、胎土中に赤色酸化粒が多く混ざり、摩滅が著しい。直柄平鋏身2004は長さ36.9cm、復元刃部幅約18.6cm、柄孔隆起を含めた厚さ3.4cm、柄孔径3.9×3.3cm、装着角度55度を測る。頭部上端面は丸く仕上げられ、柄孔付近両側面が略方形に突出する可能性が高い。柄孔隆起は、身と明瞭な段をもって端正に仕上げられ、平面形態は上が丸く、下が尖った舟形を呈する。また、頭部前面頂部を突帯状に厚くし、柄孔両側の方形孔(約2×1cm)とともに、泥除を装着する。樹種はコナラ属アカガシ亜属を用いる。板材2007は長さ46cm以上、幅3.9cmを測る。板材2008は長さ62.8cm以上を測り、両面とも良好に加工痕を残す。樹種はスギである。

SD502 F-19・20区で検出した浅い溝である。主軸方位はN-約10°Wを示し、延長3.50m、幅28～40cm、深さ2～4cmを測る。覆土は、鞍部覆土と共通する黄褐色粘質土である。出土遺物はない。

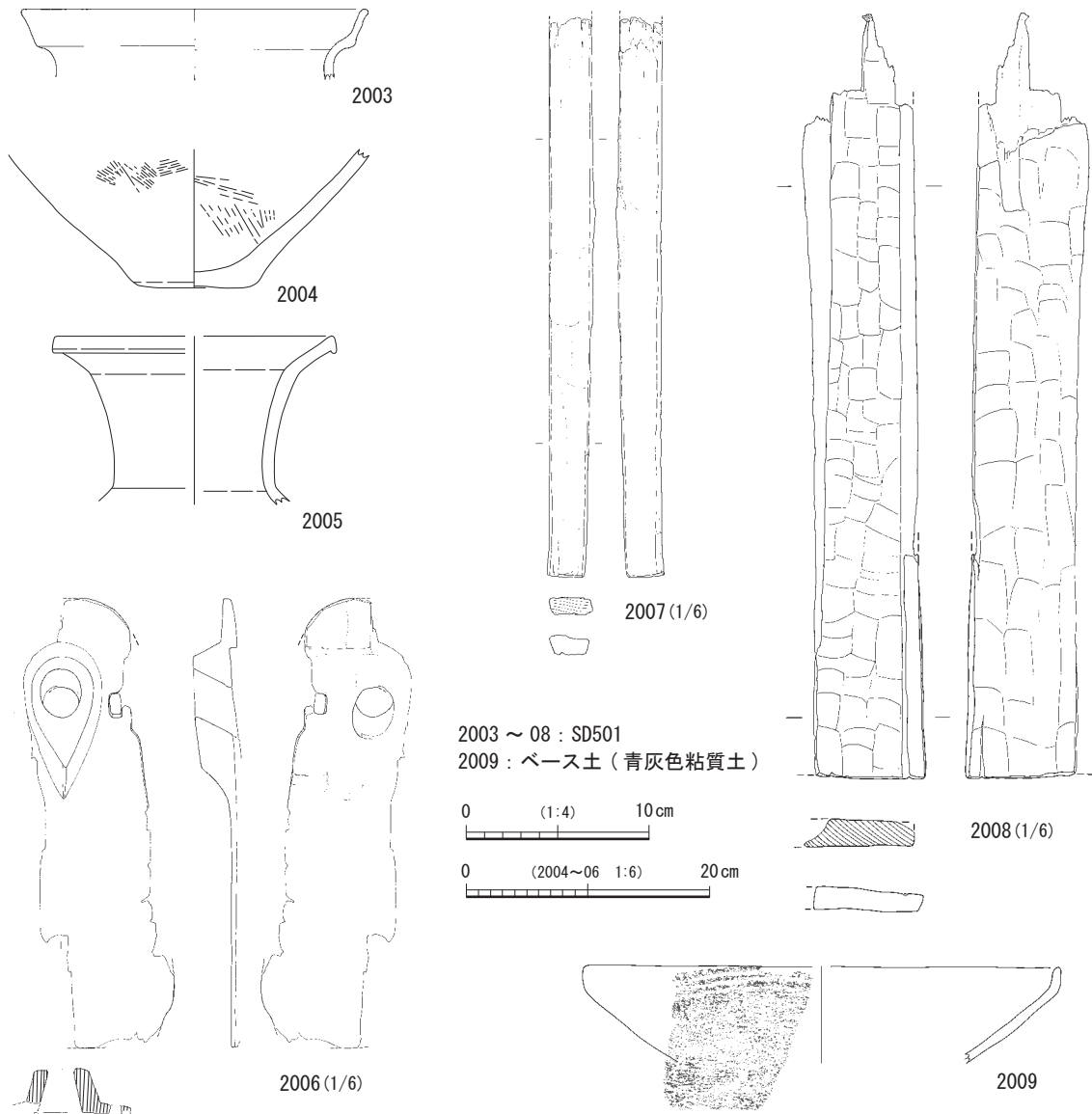
鞍部 H-19～22区、I-19～21区、J-19・20で検出した浅い谷状地形で、東から西方向に主軸をもつ他、南側から数条の流れ込み痕が認められる。南北方向約22m以上、東西方向約23.5m、深さ15～50cmを測り、調査区北西隅(J-19区)で北側肩部を確認している。覆土は、かなり強い勢いで流入・水平堆積したシルト、PEAT、しまりのない粘質土



第182図 A区最下層鞍部土層断面図 (S=1/60)

を基調とし、ラミナ状を呈する堆積層も存在する。また、植物遺体が混ざる土層が多い他、西側覆土には流れ込んだ多くの自然木や枝等が残っていた。出土遺物はない。

ベース土出土遺物 G-21杭脇の青灰色強粘質シルト(標高約3.0m)から、2009の縄文土器後期末(八日市新保式並行)の磨滅した浅鉢が出土した。口径約26cmを測り、波状口縁外面に3条の浅い沈線文を施す。



第183図 A区最下層出土遺物実測図 (S=1/4・1/6)

第65表 A区最下層出土土器観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

押図番号	番号	グリッド	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面色調	外面色調	胎土	焼成	内面調整	外面調整	遺存率	備考	実測番号
183	2003	F-23	最下層SD501取り上げNo.⑩	弥生土器	壺	18.8	-	(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄	a-3M	良	ハケ後ナデ	ヨコナデ	口5/36	外面煤付着	C-281
183	2004	F-23	最下層SD501取り上げNo.①・⑤他	弥生土器	壺	-	4.6	7.4	灰黄褐	褐灰	b-4SM	良	ハケ後ナデ	ハケ、ナデ	底27/36	内面コゲ、外面煤付着	R2C-01
183	2005	F-23	最下層SD501取り上げNo.③・④他	弥生土器	長頸壺	15.0	-	(9.2)	にぶい橙	にぶい橙	b-4M	良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口2/36	摩滅顕著	R2C-02
183	2009	G-21	ベース土(青灰色粘質シルト、-70cm)	縄文土器	浅鉢	約26	-	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	b-3M	良	(摩滅不明)	(摩滅不明)	口2/36	波状口縁。沈線2条。内外面摩耗顕著。八日市新保式平行	C-278

第66表 A区最下層出土木製品観察表

※ 法量の()数値は残存値を示す。

挿図番号	番号	グリッド	出土遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	樹種同定	木取り	備考	実測番号
183	2006	F-23	最下層SD501取上げNo.8	直柄平鍬	36.9	(12.3)	3.4	コナラ属 アカガシ 亜属	柱目	柄孔径3.9×3.3cm、装着角度55度、泥除装着方形孔(約2×1cm)。柄孔隆起は平面舟形。頭部前面頂部が突帯状に厚い(泥除装着)	木-002
183	2007	F-24	最下層SD501取上げNo.23	板材	(46.0)	3.9	1.6	スギ	板目		木-168
183	2008	F-24	最下層SD501取上げNo.26	板材	(62.8)	(9.1)	2.3	スギ	追柱		木-169

第8章 総括

第1節 最下層・下層の変遷について

第5次調査では、第6・7章で報告したとおり、A～C区で「下層」と呼称した弥生時代中期後半～古墳時代前期前葉の遺物を伴出する生活面を、また、A区で「最下層」と呼称した強い水流で形成された腐食層や流木が混ざる堆積層(最下層鞍部)をそれぞれ確認した他、A・B区において「ベース土」と認識した粘質土から少量の縄文時代後期末・晩期前半、弥生時代中期の遺物が出土している。本遺跡については、古代北陸道能登支路の確認や重要文化財「加賀郡勝示札」、過所様木簡、豊富な墨書土器の出土等、古代の遺跡として注目される。さらに、本事業や主要地方道高松・津幡線(河北縦断道路)に係る一連の発掘調査では、その下層から縄文時代中期後半～古墳時代後期に至る集落域、生産域を検出している。生産域の確認例は、例えば、縄文時代後期の流路内に設置された円形杭列(第10次調査H区第6面)、同晩期頃の貯蔵穴(同第4面)、弥生時代前期～中期後半を主体とする河道・水場遺構(河北縦断道路調査G区第3面)、弥生時代中期頃の水田(第8次調査A区第4・5面等)等があり、さらに古代・中世の耕作域(水田、畠地)が加わる。これらは、発掘調査範囲という制約をもつものの、河北潟東岸の旧舟橋川が低丘陵(標高約50m)を浸食・形成した谷平野(東西約600m、幅約150m)および隣接低丘陵、東側の潟(内水面)を舞台とした、小集団の長期間にわたる集落形成・生業の具体的様相や変遷、また埋没谷という自然環境との関わり的一端を知ることができ、「もう一つの加茂遺跡」として重要な資料を提供するものと考えられる。

さて、本次調査A～C区下層は、各時代における建物の分布域(第184図)にみるとおり、低地の微高地上に展開した建物域の西限にあたる。また、隣接地では第6～11次の調査が実施されている(第185図)。現地調査時は、複雑さを増す層位の把握・理解に悩まされたが、これらの層位は、第7次調査北調査区においては第1面(古代)～第5面(弥生時代中期)として、本次調査A・B区の間第8次調査A区においては第1面(古代)～第6面(縄文時代)として、それぞれ生活面を整理・調査が行われている。そのため、以下では、本次調査の基本層位の整理、また下層遺構の変遷試案について、現時点での理解を提示するにとどめ、その補正および位置付けは隣接調査区の正報告に委ねたいと考える。

ベース土・最下層 A区下層ベース土の土層層序は、第181図で示したとおり、下位層から縄文時代後期末の浅鉢(第183図2009)が単独出土した青灰色強粘質土(f層)、灰褐～黒褐色強粘質土(e層)、褐色シルト・腐植土(d層、最下層鞍部覆土)、暗褐色粘質土(c層)、黄橙～黄褐色粘質土(b層)、淡黄灰～灰褐色粘質土(a層)が順次堆積しており、e層が最下層の基盤面、c層上面が下層遺構検出面、a層上面が上層遺構検出面となる。この土層層序は、埋没谷中央寄りのB区試掘坑1～5では、下位層から第181図f・e・b・a層(第178図m・d・b・a層)が確認でき、f・e層間に淡灰色粘質土～弱粘質細砂(第178図l・h層)、灰色強粘質土(同図e層)が堆積する。また、B区試掘坑1～5の第181図e・a層および灰色強粘質土(第178図e層)からは、第184図で示した建物域から土

砂とともに流出・堆積した弥生土器細片が少量出土した。最下層遺構としたA区鞍部は、南北方向約22m以上、最深部約0.5mを測る浅い谷状地形であり、流木や枝等が混ざる前述d層が一時期に堆積する。出土遺物はなく、層位の関係から縄文時代後期末(f層)と弥生時代中期後半(c層)の間の堆積層に位置付けられる。

下層 第5次調査で検出した遺構は、第5章で報告した平地建物5棟(A区SI551～554、B区SD5521)、掘立柱建物2棟(A区SB551、C区SB552)、土坑8基、河跡1条(C区SD5501)等に加え、C区上層SD5006やA区最下層SD501が属する。これらは、第67表のとおり4つの小期に整理可能で、①弥生時代後期前半：B区SX5501・02等、②同後期後半～古墳時代初頭：A区最下層SD501、A区SI551～554、B区SD5522、C区SD5502・08・10等、③古墳時代前期前葉：C区上層SD5006、SK5505、④同：C区SD5501と変遷する。下層出土の遺物は、縄文時代晩期前半(第153図1413)、弥生時代中期後半～古墳時代前期の時期幅をもち、A・B区で集落域を形成する弥生時



第184図 古墳時代以前の建物域の分布概略図 (S = 1/2,500)

第67表 A～C区最下層・下層変遷概略表

		縄文時代		弥生時代 中期後半	弥生時代 後期前半	弥生時代 後期後半	弥生時代 終末	古墳時代 初頭	古墳時代 前期前葉	古墳時代 前期中葉～	古代
第5次調査最下層・下層		ベース土									上層
		181図 f層	181図 e層								上層
A区		後期末 (183図 2009)		最下層 鞍部、 SD502		下層SI551～ 554、SB551? 最下層SD501	?				
B区				下層 P5512 試掘坑1～5 (176図 土器細片 2001)	下層SD5523、 SX5001・02	下層SD5518・ SD5520～22	?		下層SK5505		
C区			晩期前半 (153図 1413)			[2小期あり] 下層SK5502、SD5502・08・10、 SB552?		(上層ベース 土堆積)	上層SD5506 → 下層SD5501		
隣接調査区	第6次I区の対応面			下層第2面(一部)	下層第2面		下層第1面				上層
	第7次I区北調査区 の対応面			第5面	第4面	第3面	第2面(河道跡)	?			第1面
	第8次A区 の対応面	第6面 下層	第6面	第5面	第4面	第3面	第2面				第1面

代後期以外の遺物は、第184図で示した埋没谷東側の集落域からもたされたと考えられる。なお、C区では、②・③の間に上層のベース土となる明黄色粘質土の堆積が確認できる。

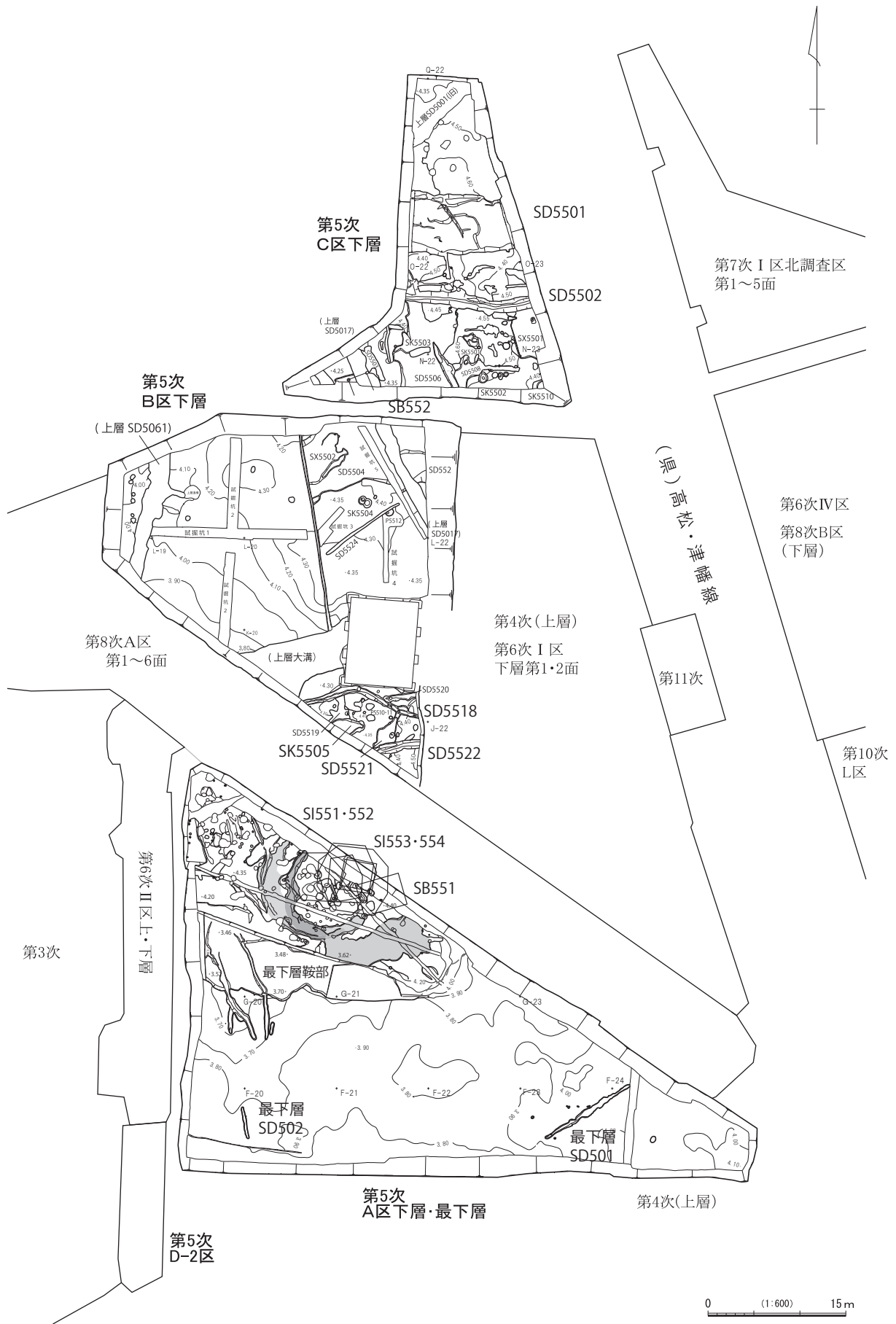
A区で検出した平地建物SI551～554は、微高地の制約のため、ほぼ同一の敷地を占有する他、SI552以外は主柱の沈降防止に礎板を多用することが特徴としてあげられる。4条の外周溝の規模は溝外縁で、SD502が径約18mを、SD504(古)・SD504(新)長径約15.0m、短径約12.8mを、SD511が長径約13.0m、短径約10.5mをそれぞれ測り、SD511、SD504(古)、SD504(新)、SD502の順に掘られる。平地建物は、①SI553(外周溝SD511、上屋6本主柱(主柱内面積14.8㎡・31.8㎡)、主柱礎板あり。上屋1回建替え)、②SI551(外周溝SD504(古)、上屋6本主柱(同24.6㎡)、主柱礎板なし)、③SI552(外周溝SD504(新)、上屋6本主柱(同24.6㎡)、主柱礎板なし)、④SI554(外周溝SD502、上屋8+4本主柱(同42㎡・47㎡)または8本主柱(同18㎡)、主柱礎板あり。複数回建替え)という変遷試案を提示したが、主柱と外周溝の位置関係に課題も残り、最終的な建物復元は第6・8次調査報告に委ねざるを得ない。また、断面略逆台形～V字形を呈するC区SD5502(幅1.1～1.5m)や、B区SD5522(同1.0～1.3m)は、集落域・生産域を西方向に流れる基幹的な水路に位置付けられる。

古墳時代前期を下限とするC区SD5501は上幅5.4～6.7m、深さ54～88cmを測る河跡で、東側で第7次調査I区(北調査区)第2面河跡につながる。第5次調査では、多量の遺物が出土しており、弥生時代後期前半の天王山式土器(第153図1437～41、第159図1637～39)、古墳時代初頭の製塩土器(第166図1836～42)の他、紡錘車(同図1864・65)、土錘(同図1866～74)、鍬・鋤類(第168図)、木錘(同図)、網杵(第169図1916)、舟形木製品(同図1915)、盾(同図1917～19)が生業や祭祀を考えるうえで重要な資料となる。

第2節 第5次調査上層遺物について (第186～202図、第68～75表)

1 須恵器胎土分類からみた様相について

第5～11次調査の出土品整理では、実測遺物の胎土観察を、例言にある胎土分類表に従って統一的に実施した。本項は、須恵器の胎土分類からみえる第5次調査区の盛衰、須恵器の流通等を概観したい。



第 185 図 第 5 次調査最下層・下層主要遺構配置図 (S = 1/600)

県内では、主要須恵器窯跡群(南加賀窯跡群、能美窯跡群、金沢末窯跡群、高松・押水窯跡群、羽咋窯跡群、鳥屋窯跡群)ごとで異なる胎土特徴に着目し、1990年代に消費遺跡出土の須恵器胎土を肉眼で観察し、その産地(窯跡群)を推定することで、消費地における須恵器流通様相の復元がおこなわれた。その後、小松市北部の丘陵地帯で八里向山J窯跡(I₂期)、立明寺窯跡(II₂期～II₃期、瓦陶兼業窯)、河田山1号窯跡(II₃期)が、また河北潟東岸の丘陵地帯で多田ツルガタン窯跡(I₁期、II₁期)、加茂窯跡群(I期、2基)、金沢観法寺窯跡群(観法寺須恵器窯(I₁期)、観法寺ジンヤマ窯跡(II期、瓦陶兼業窯))⁽¹²⁾といった7世紀代の新たな窯跡の確認が相次いでいる(第186図)。これら7世紀代の窯跡は、南加賀窯跡群、羽咋窯跡群、鳥屋窯跡群以外の地域で1～数基程度の須恵器窯が散発的に短期間操業する⁽¹³⁾。そのため、本書胎土分類は、当時、既発見であった金沢観法寺窯跡群をI類に分類する一方、多田ツルガタン窯跡、加茂窯跡群はX類内に包括している点に留意されたい。



第186図 旧河北潟東岸の窯跡分布図

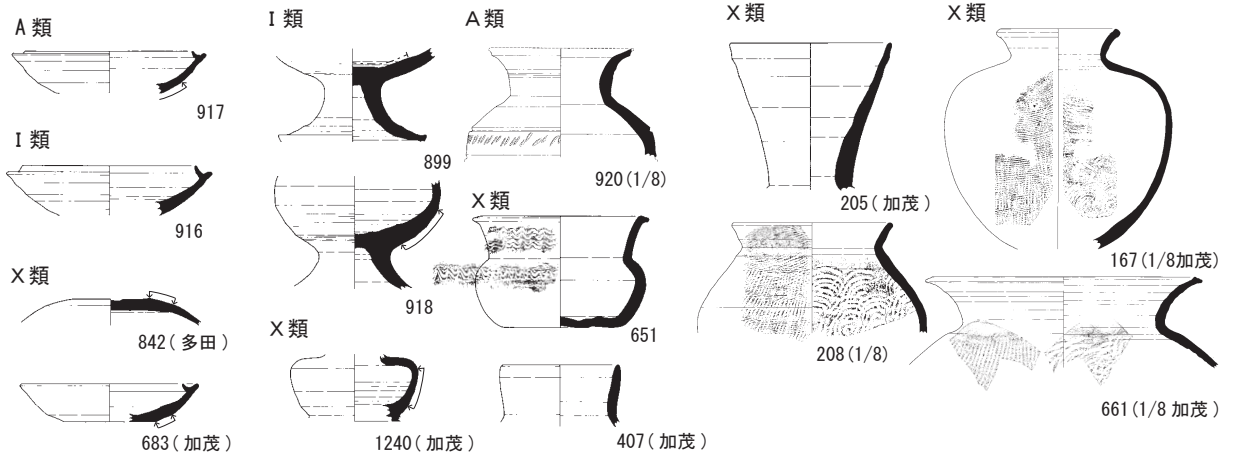
さて、第5次調査区で実測した須恵器のうち、時期特定が可能な食膳具731点、貯蔵具167点について、胎土分類・時期を整理した(第68・69表)。第5次調査区では、I₁期～VI₃期まで約300年間にわたる須恵器が出土しており、内訳は食膳具の時期別の比率でI・II期が1.2% (9点)、III期～VI₂期が98.3% (718点)、VI₃期が0.5% (4点)となる。これらから、第5次調査区で須恵器を多量に使用・廃棄するような活発な活動は、III期(8世紀前葉)～VI₂期(10世紀初頭)と考えられ、第1～4次調査区の様相と概ね共通する。

I期(6世紀末～7世紀中頃)は、食膳具5点、貯蔵具9点の須恵器を図化している(第187図)。内訳は、A類(南加賀窯跡群)が2点、I類(金沢観法寺窯跡群)が3点、X類9点(加茂窯跡群6点、多田ツルガタン窯跡(古段階)1点、不明2点)となる。II₂・II₃期(7世紀末～8世紀初頭)は、食膳具4点、貯蔵具8点を数え、内訳はA/B類(南加賀窯跡群または能美窯跡群)が3点、D-b類(高松・押水窯跡群)が5点、F類(鳥屋窯跡群)が3点、X類(不明)1点となる。新たに高松・押水窯跡群、鳥屋窯跡群が加わるが、多産地の寄せ集めの様相を基本的に継続するものと考えられる。なお、D-b類に類似した胎土で、格子文あて具を用いる大甕(第67図504、報告書I-0904と同一個体か)は、同時期に位置付けられる可能性を残す。

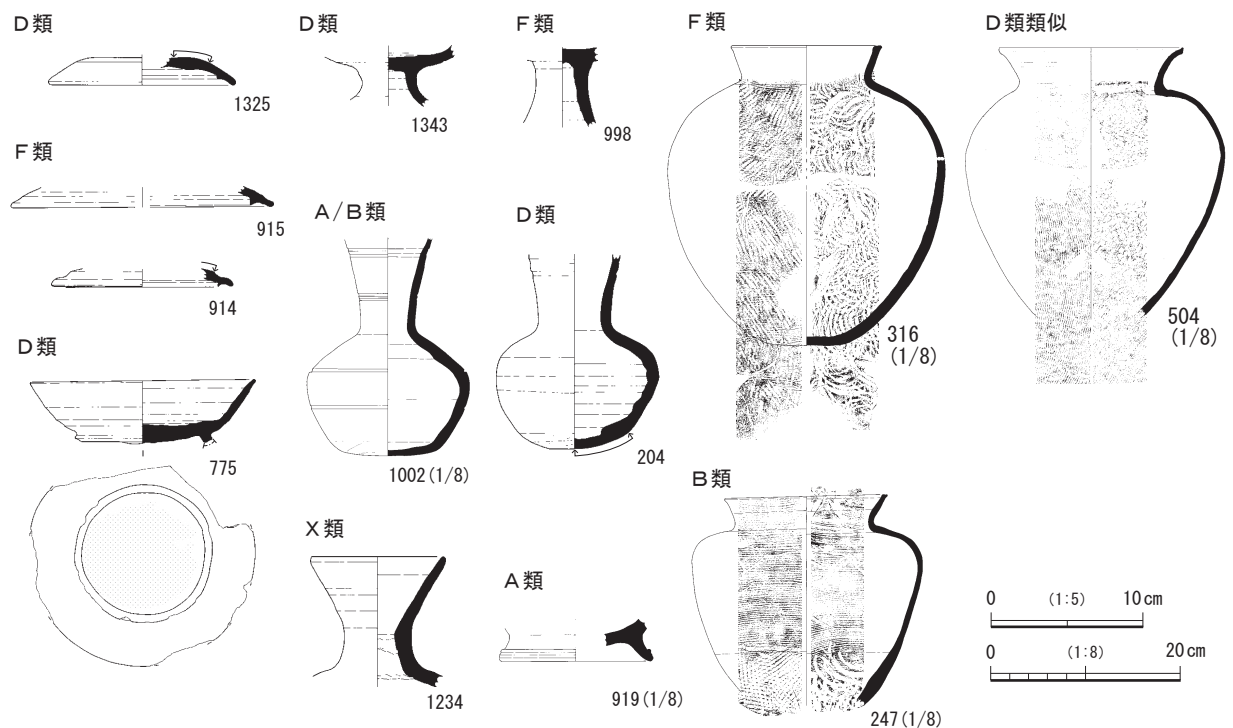
III期～VI₂期は、食膳具でD-b類が86～97%と圧倒的な比率を占めており、III期以降は高松・押水窯跡群から主体的に供給される状況に転ずる。貯蔵具は、D-b類比率が80%と総体的に低い値を示しており、例えば第56図269の甕が富山県小矢部周辺に産地が想定できる⁽¹⁴⁾ように、内容物を入れた容器としての移動の場合を含めて、食膳具の流通とは異なる、より広域流通の要素をもつことが想定できる。また、胎土分類D-a類(D類のうち海綿骨針を含む一群)は、食膳具でみればIV₁期に出現し、VI₂期まで全体の5%以下という一定の比率で確認できる一群である。一方、貯蔵具では、D-a類の胎土は壺1点(第186図120)にとどまる。定見はないものの、D-a類とD-b類は食膳具器形が近似することから、高松・押水窯跡群の8世紀中頃の操業規模拡大に伴い、海綿骨針が混ざる新たな陶土採掘地を得た可能性を考えたい。なお、高松・押水窯跡群南側に位置する若緑イナバ山窯跡焼成須恵器は、微量の海綿骨針が混ざる個体が少量存在するとの報告がある⁽¹⁵⁾。

加茂遺跡の集落景観が大きく変動するVI₃期(10世紀前葉)には、食膳具実測点数は4点と急減し、内訳は

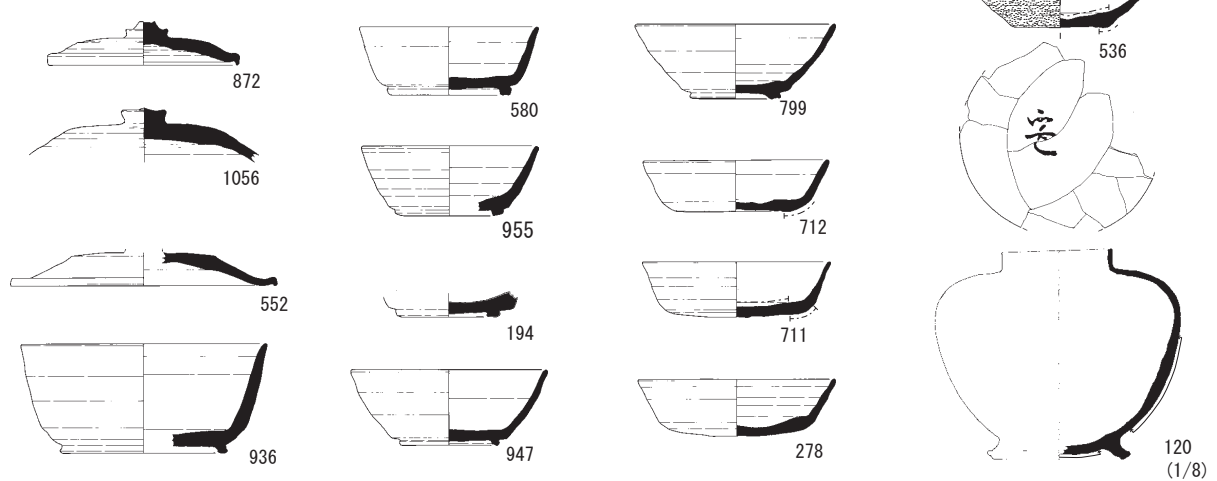
7世紀前後～中頃



7世紀後葉～8世紀初頭

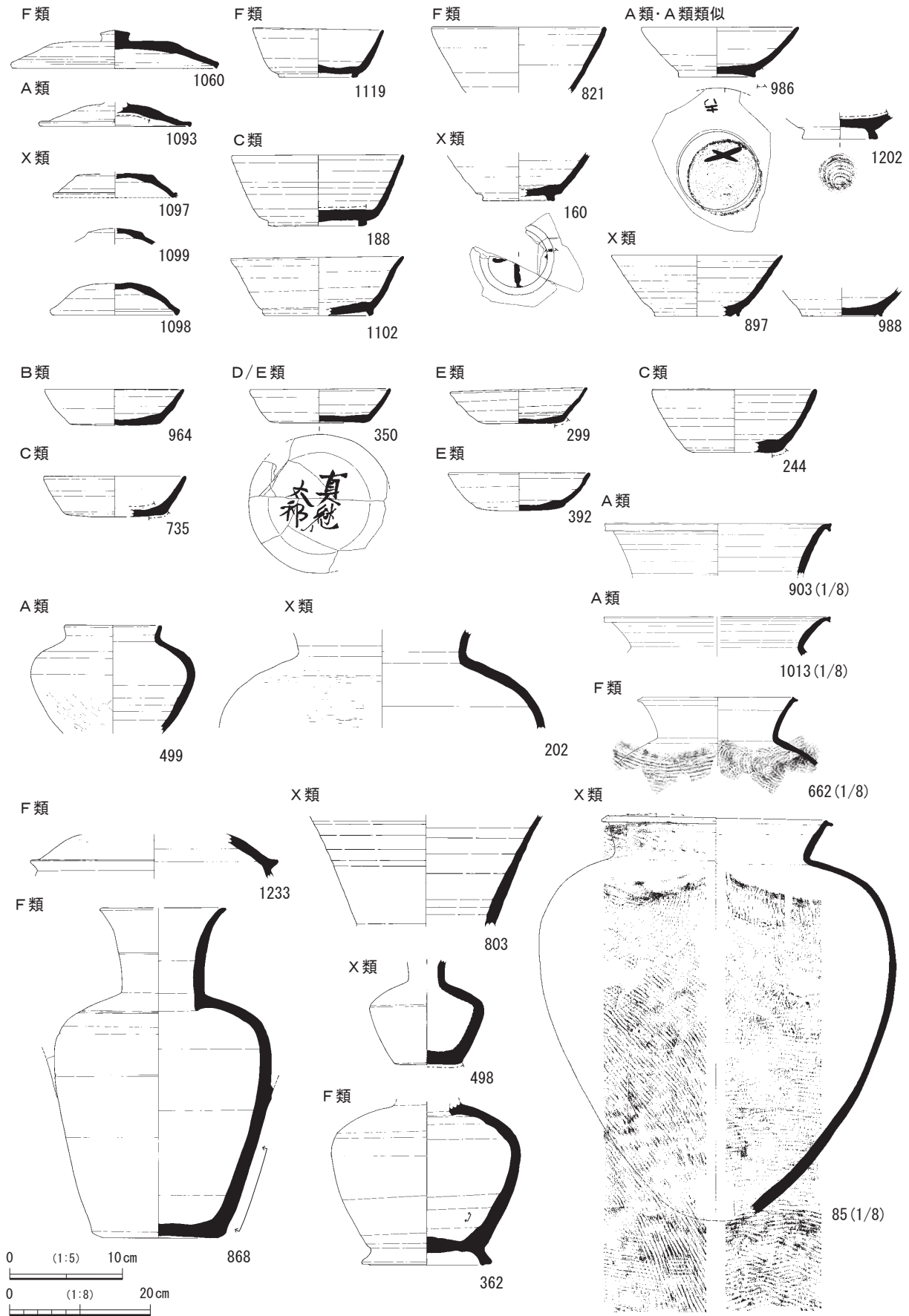


8世紀前葉以降のDa 類胎土



第 187 図 胎土分類からみた第 5 次調査出土須恵器の様相 1 (S = 1/5・1/8)

9世紀前葉以降のD類以外の胎土



第188図 胎土分類からみた第5次調査出土須恵器の様相2 (S=1/5・1/8)

第68表 第5次調査上層出土須恵器の胎土・時期別一覧表1

		I	II ₁	II ₂	II ₃	III	IV ₁	IV ₂	V ₁	V ₂	VI ₁	VI ₂	VI ₃
胎土分類 D-b類	点数		0	1	1	35	70	150	28	55	133	190	1
	比率(%)		-	33%	100%	92%	86%	91%	97%	87%	93%	95%	25%
胎土分類 その他	点数	5	0	2	0	3	11	14	1	8	10	10	3
	比率(%)	100%	-	67%	0%	8%	14%	9%	3%	13%	7%	5%	75%
胎土分類 D-b類	坏H												
	坏蓋			1		8	6	24	3	16	24	20	
	有台坏				1	8	26	37	8	9	30	42	
	無台坏					16	38	88	17	22	73	81	
	有台盤・無台盤									8	6	3	
	有台埴・無台埴											7	1
	有台皿・無台皿											37	
	高坏他					3		1					
	小計	0	0	1	1	35	70	150	28	55	133	190	1
胎土分類 D-a類	坏H												
	坏蓋						2				1		
	有台坏							2			1	2	
	無台坏						2	1		3	1	2	
	有台盤・無台盤										1		
	有台埴・無台埴												
	有台皿・無台皿												
	高坏他										1		
	小計	0	0	0	0	0	4	3	0	3	5	4	0
胎土分類 その他	坏H	5											
		A-1(917)、 I-2(899、 916)、X-2 (683、842)											
	坏蓋			2		1		3			3	2	
				F-2(914、 915)		F-1(1054)		F-3(870、 1078、1327)			A-1(1093)、 F-1(1060)、 X-1(1097)	X-2(1098、 1099)	
	有台坏						6	3	1	2	1	1	
							C-1(564)、 D/F-2(562、 571)、F-1 (691)、X-2 (693、935)	C-1(879)、 F-2(187、 1312)	F-1(1119)	C-1(188、 1102)	F-1(821)	X-1(160)	
	無台坏					1	1	5		3		2	
						B-1(195)	F-1(229)	A-1(637)、 D/F-2(606、 628)、F-2 (724、961)		B-1(964)、 C-2(244、 735)		E-2(299、 392)	
	有台盤・無台盤										1		
											D/E-1(350)		
	有台埴・無台埴												3
												A類似-1 (986)、X-2 (897、988)	
有台皿・無台皿											1		
											A類似-1 (1202)		
高坏他					1								
					F-1(998)								
小計	5	0	2	0	3	7	11	1	5	5	6	3	

※ 「C-1(965)」は「胎土分類C類1点(図番号965)」を示す。

第69表 第5次調査上層出土須恵器の胎土・時期別一覧表2

須恵器胎土分類

		I期	II期	III・IV期	V・VI期	胎土分類	推定産地
胎土分類 D-b類	点数	0	3	53	70	A類	南加賀窯跡群、能美窯跡群(北群)
	比率(%)	0%	38%	79%	84%		
胎土分類 その他	点数	9	5	14	13	B類	A類産地ないし能美窯跡群)
	比率(%)	100%	62%	21%	16%		
胎土分類 D-b類	甕類、横瓶		2	18	10	C類	金沢末窯跡群
	壺類			15	14	D-a類	高松・押水窯跡群か
	瓶類			10	39	D-b類	高松・押水窯跡群
	鉢類、小型他		1	10	7	E類	羽咋窯跡群
	小計	0	3	53	70	F類	鳥屋窯跡群
胎土分類 D-a類	甕類、横瓶					G類	非在産地
	壺類			1	1	H類	不明
	瓶類					I類	観法寺窯跡群か
	鉢類、小型他					X類	不明
	小計	0	0	1	1		
胎土分類 その他	甕類、横瓶	2	1	5	4		
		X-2(208,661)	F-1(316)	C-2(503,1253)、D/E-1(781)、F-1(250)、X-1(85)	A-2(903,1013)、F-1(662)、X-1(269)		
	壺類	2	2	5	1		
		A-1(920)、X-1(167)	A-1(919)、B-1(247)	A-1(29)、E-1(1214)、F-3(654,655,1217)	X-1(202)		
	瓶類	1	1	1	4		
		X-1(205)	A/B-1(1002)	F-1(750)	F-3(362,868,1233)、X-1(803)		
鉢類、小型他	4	1	2	3			
	I-1(918)、X-3(407,651,1240)	X-1(1234)	F-1(901)、X-1(179)	A-2(366,499)、X-1(498)			
小計	9	5	13	12			

※「C-1(965)」は「胎土分類C類1点(図番号965)」を示す。

D-b類1点(第35図25)、A類類似1点(第99図986)、X類2点(第96図897、第99図988)となる。第2項で述べるとおり、高松・押水窯跡群の生産は、現在VI₂期まで確認されており、主要消費地である金沢平野で食膳具の土師器への置換が進むVI₃期の窯跡は未発見である。ただし、後述する金沢市畝田C遺跡SE05上層出土のVI₃期(戸津48号窯期)に位置付けられる須恵器無台塼(第192図)の胎土特性が、高松・押水窯跡群の特性を示すとの報告がある⁽¹⁶⁾。現時点では、未発見であるが、高松・押水窯跡群が分布する、かほく市北部の若緑～余地周辺の丘陵地帯において、従来と異なる生産基盤、器種組成をもって、能美市大口窯跡や能登地域各地に点在する窯跡(倉垣コマクラベ窯跡、末坂ハセタンA1号窯跡、宮犬窯跡等)と同質の単独立地に近い小規模生産が、VI₃期に散発的におこなわれた可能性を想定しておきたい。D-b類の胎土特性を示す有台塼(第35図25)は、このような窯跡で焼成されたものであろう。また、A類類似の有台塼986は、VI₃期の能美窯跡群大口周辺と推定され、X類は能登地域の須恵器の可能性が高い。いずれにしても、加茂遺跡第5次調査区出土須恵器は、集落景観が大きく変動するVI₃期に、その出土量が急減するとともに、複数の産地から寄せ集めに近い様相を呈することとなる。

2.VI期・VII期の土器様相について

目的 津幡北バイパス建設に伴う第1～4・6次調査成果(報告書I第5章総括)⁽¹⁷⁾では、集落展開はII₃期とIII期の境、VI₂期とVI₃期の境に、それぞれ大きな画期をもつとされ、第1項で述べた実測須恵器点数の推移からも首肯できる評価である。この総括では、VI₃期にSB28を主屋とした建物群を想定する他、道路遺構

の「新側溝の上面を覆うVI₃期以降」の「盛土層」や、VI₃期以降に大溝が埋没するとの指摘等、VI₃期が重要な位置を占める。さらに、第5次調査C区SD5001(新)や、河北縦断道路調査B2区北東部建物群(SBI01等)⁽¹⁸⁾等のように、VI₃期以降に加茂遺跡北東部を中心に新たな集落展開が確認できる。これらから、VI₃期以降の集落と道路遺構、大溝の様相整理が、古代加茂遺跡を評価するうえで、大きな課題のひとつといえる。

以下では、第5次調査区出土土器は一括資料が少なく、器形からみた個体抽出という限界があるものの、VI₃期に主眼を置きながらVI期を中心とした県内の須恵器、ロクロ土師器(以下、土師器と呼称⁽¹⁹⁾)食膳具を概観・比較することで、第5次調査区の土器様相の整理を行うとともに、前述の課題解決に向けた一助としたい。

須恵器の様相 第5次調査区のVI期の食膳具は、圧倒的に須恵器が多い。県内のVI期の須恵器生産は、南加賀窯跡群、高松・押水窯跡群、鳥屋窯跡群が継続的な操業をおこなう他、後述する志賀町倉垣コマクラベ窯跡のように、能登地域各地を中心として1～数基程度の短期間・小規模の操業が確認できる。

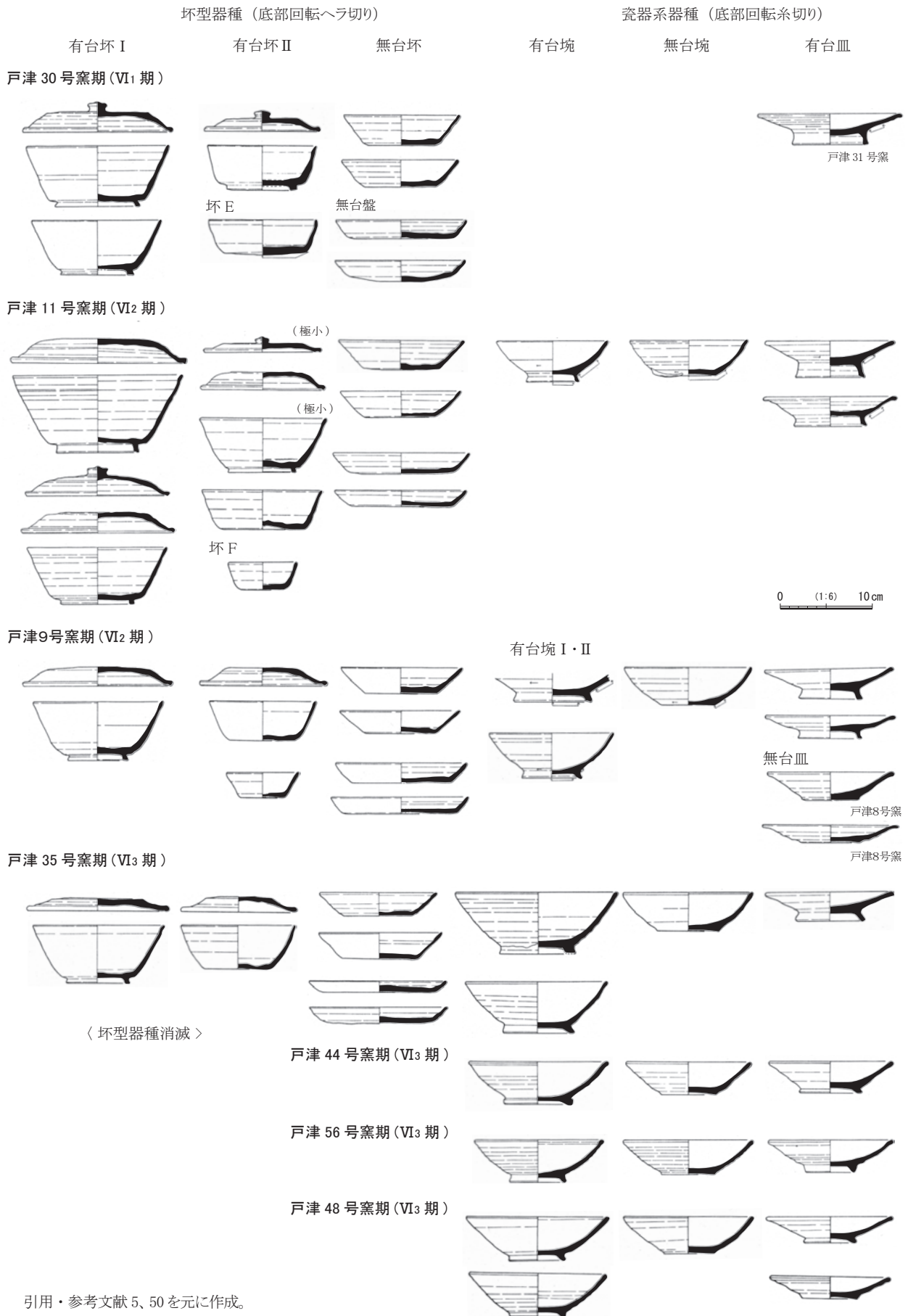
まず、検討の軸として、調査・研究の進んだ県内最大の南加賀窯跡群におけるVI期の須恵器食膳具の変遷を概観する。本窯跡群は、小松市東部の丘陵地帯を中心に分布し、VI期に第2の盛期を迎える窯跡群であり、その変遷・歴史的位置付けは望月精司氏の一連の研究⁽²⁰⁾に詳しい。V期は従来の「坏型器種」(坏、盤)が宮都の黒色土器(および金属器)の器形を模倣する段階であるのに対して、VI期は坏型器種主体の食膳具組成に、新たな「瓷器系器種」(埴、皿)の導入・定着が進み、最終的には瓷器系器種に統一される段階、またVII期は須恵器生産が終焉した段階とされる。氏は、坏型器種を主体としつつも少量の瓷器系器種が出揃う戸津11号窯期と、坏型器種が消滅して瓷器系器種に統一される戸津44号窯期に画期を求める(第189図)。底部切り離しに関していえば、南加賀窯跡群は、VI期を通じて坏型器種が回転ヘラ切り、瓷器系器種が回転糸切りと、明確な作り分けを貫く点に特徴をもつ。

VI₁期は、戸津30号窯期を基準とする。食膳具は、主体の坏型器種で底径の縮小化(体部の外傾化)や、有台坏2法量のうち小法量で新たな身(坏E)の出現、また、少量の瓷器系有台皿の出現を指標の一つとする。

VI₂期は、戸津11号窯期→戸津9号窯期と変遷する。前半ともいえる戸津11号窯期の食膳具は、埴形を指向する坏型器種が生産量の主体を維持し、少量の有台埴、無台埴、有台皿が、以降の定型的な器種として出揃う段階とされる。瓷器系器種では、有台皿が量的に多い。坏型器種は、有台坏の蓋は数点を除いて無鈕に転換し、蓋の口縁端部は嘴状に短く突出する。また、有台坏小法量の身は、坏Eがほとんどを占める。瓷器系器種は、外面底部～体部下端に丁寧な回転ケズリ調整を施す精製品が多い。有台の埴・皿の台部は背が高く、八の字状にしっかり外展する。

VI₂期後半ともいえる広義の戸津9号窯期(細型式は同10号窯期→同9号窯期→同8号窯期)は、坏型器種が生産量の主体を維持する中で、量比は低いものの有台埴、無台埴、有台皿が、食膳具組成として確実に定着する段階とされる。坏型器種の器形は、埴形志向が強まり、口径、底径(台径)の縮小化と体部の外傾化が一層進行する。また、戸津10号窯期以降、器肉が薄くなり「ペラペラで軽い」個体が主体を占める。坏型器種では、有台坏が口径14cm前後と小型化し、蓋は口縁端部を丸く簡略に仕上げるようになる。坏Eは減少傾向に向かうようだ。瓷器系器種では、有台埴に大法量が出現し、VI₃期の戸津56号窯期まで大小2法量を生産する。有台皿は、台径の縮小、台部高の低下が進むとともに、外面体部下端の回転ケズリ調整を省略する。また、無台皿も組成の一部を構成する。

VI₃期は、戸津35号窯期→同44号窯期→同56号窯期→同48号窯期と変遷し、戸津48号窯期で須恵器生産は終焉を迎える。VI₃期前半ともいえる戸津35号窯期が、VI₂期の食膳具組成を維持する最後の段階であり、後半ともいえる戸津44号期以降は食膳具として瓷器系器種の埴・皿のみを生産する。戸津35号窯期は、有台坏の身が外展する断面方形の台部を維持する一方、蓋は口縁端部の屈曲を一層簡略化させ、口縁端部を沈線状に表現する個体も出現する。また、坏Eは急減し、無台盤は扁平化が著しい。瓷器系器種では、量比を増す



0 (1:6) 10 cm

引用・参考文献 5、50 を元に作成。

第 189 図 南加賀窯跡群須恵器坏・碗類の変遷図 (S = 1/6)

碗類体部の湾曲が弱まり、底部外面の回転ケズリ調整はほぼ省略される。戸津44号期以降は、先述のとおり瓷器系器種のみを生産する。有台碗は、台径の縮小(7 cm台主体から6 cm台主体)と、体部の外傾化が次第に進み、やや扁平な器形を呈する。また、台部は高さを減じ、つくりも粗雑な個体が増える。無台碗、有台皿も同様な変化を示し、無台碗の底径でみれば6 cm台主体から5 cm台主体に縮小する。有台皿は、台部高が低下するとともに身が深い器形を呈するようになる。戸津56号窯跡出土の有台皿には、台部が断面略三角形を呈する個体も存在する。

次に、高松・押水窯跡群を概観する。本窯跡群は、加茂遺跡の北側7～11km北側に位置する、最も近い須恵器生産地で、第1項に述べたとおり、加茂遺跡にⅢ期～Ⅵ₂期まで主体的に須恵器を供給する。発掘調査が行われた若緑ヤキノ窯跡、箕打ミヤノ窯跡、若緑イナバ山2号窯跡を軸に、窯跡表採資料や消費地資料で補足した食膳具の変遷を第190図に示した⁽²¹⁾。

Ⅵ₁期は良好な窯跡一括資料に恵まれず、Ⅴ₂期～Ⅵ₁期に操業し、Ⅵ₁期に主体をもつ若緑ヤキノ1号窯内、箕打ミヤノ窯内が指標となる。また、消費地では、千木ヤシキダ遺跡SK42(Ⅴ₂期～Ⅵ₁期)、戸水C遺跡26号溝(Ⅵ₁期)が指標とされる。主な消費地である金沢平野では、高松・押水窯跡群産の須恵器が多く供給される一方、需要が増加する瓷器系食膳具は金沢末窯跡群を中心に生産した土師器が担う。須恵器食膳具の器種組成は、碗形指向を強める坏型器種に限られ、現時点で瓷器系器種は確認できない。Ⅴ期に比して、底部は円盤状を呈し始める点、底径の縮小と体部の内湾化・外傾化が進む点が、指標の一つとなる。特に底部の縮小は、南加賀窯跡群より顕著であり、結果として体部が長くのびる器形を呈する。また、坏型器種は、全て回転ヘラ切りで切り離す。

Ⅵ₂期は、前半の戸津11号窯期並行として若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次窯体最終操業、若緑ホウダン8号窯灰原の資料を、また、後半の戸津9号窯期並行(広義。一部Ⅵ₃期戸津35号窯期を含む可能性あり)として表採資料であるが若緑ムカイノ窯跡窯内、若緑カラツノ2号窯灰原の資料を、それぞれ想定する。若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次窯体最終操業は、坏型器種(有台坏、無台坏、無台盤)を主体に、坏E(灰原出土)、瓷器系有台皿が少量加わる組成をもち、有台皿を含めて、回転ヘラ切りで底部を切り離す。有台坏の蓋は、無鈕化を達成するものの、器形や口縁端部の仕上げはⅥ₁期と同様に比較的丁寧な印象を受ける。有台坏身の器形の特徴には、台部を内寄りに貼り付けること、内面の底部と体部の境に圏線状の強いナデを施す円盤状の仕上げに対応して、外面体部下端が一度くぼむこと、口縁端部内側が肥厚気味の個体が目立つこと等があげられる。無台坏も同様に、円盤状の底部から体部が大きく外傾し、口縁端部を内側に肥厚させる個体が目立つ。有台皿は、南加賀窯跡群に比して、背が低く、断面方形を呈する台部がしっかりと外展する。若緑ホウダン8号窯灰原は、有台坏が2法量確認できる。有台坏蓋の扁平化、無台坏底部の縮小および体部の内湾化が進むことや、有台皿の定量生産等から、若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次窯体最終操業に後続する資料に位置付けられる。なお、若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次窯体最終操業の先行資料として、若緑イナバ山窯跡SH01(有台坏蓋の一部が無鈕)→同第Ⅲ次窯体床面埋込(有台坏蓋は無鈕、2法量)が存在する。

Ⅵ₂期後半といえる若緑ムカイノ窯跡窯内、若緑カラツノ2号窯灰原からの採取資料は、坏型器種に加え、定量の無台碗(底部回転ヘラ切り)が確実に組成に加わる。ただし、回転系切りによる切り離しは、有台碗・皿で確認できるものの、無台碗は全て回転ヘラ切りを用いる。無台碗は、体部外面下端のケズリ調整を省略し、口径が14cmを超える有台皿は深身器形を呈する。南加賀窯跡群のⅥ₂期の食膳具と比較した場合、広義の戸津9号窯期の中でも新しい要素が多く、戸津8号窯期並行頃に位置付けられよう。また、高松・押水窯跡群は瓷器系器種・技術の導入・定着で消極的な印象を受け、土師器食膳具への置換がスムーズな金沢～中能登地域の消費地動向を反映したものと考えられる。

高松・押水窯跡群でⅥ₃期に属する須恵器窯跡は、現在、未確認であるが、前述のとおり、金沢市畝田C遺

若緑ヤキノ1号窯窯内(V₂~VI₁期)

有台坏 I・II



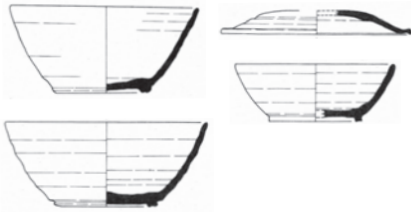
無台坏



無台盤



金沢市戸水C遺跡 26号溝(VI₁期)

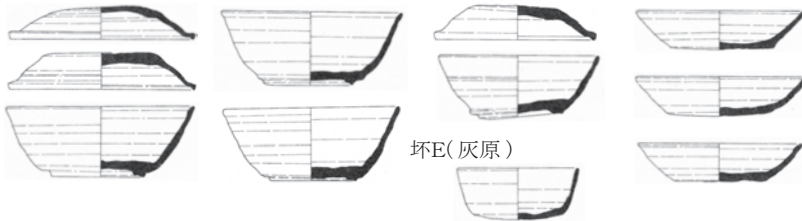


若緑ミズカメ窯灰原

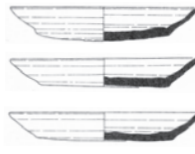
0 (1:6) 10cm

引用・参考文献
8、9、35、39より作成。

若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次床面埋込(VI₂期)

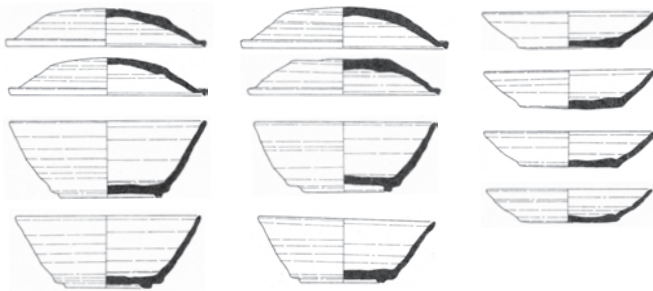


坏E(灰原)

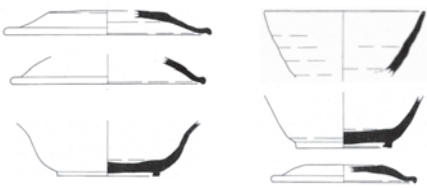


有台皿

若緑イナバ山2号窯第Ⅲ次床面最終(VI₂期)



若緑ホウダン8号窯跡灰原(VI₂期)



無台坏



無台盤



若緑ムネヤマ窯跡窯内(VI₂期)

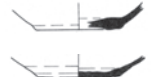


無台碗

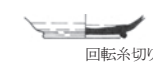


回転糸切り

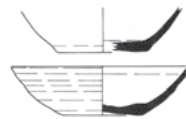
若緑カラツノ2号窯跡灰原(VI₂期)



有台碗か



回転糸切り



第190図 高松・押水窯跡群須恵器坏・碗類の変遷図 (S=1/6)

跡SE05上層出土の須恵器無台碗(第192図)の胎土特性が、高松・押水窯跡群の特性を示すと報告される。この無台碗は、南加賀窯跡群の無台碗と異なる器形をもち、共伴した土師器無台碗や、後述する末坂ハセタンA1号窯跡の須恵器無台碗、武部ショウブダ遺跡5号土坑土師器等と共通した、体部が大きく外傾しながら直線的に長くのびる特徴をもつ。高松・押水窯跡群が分布する、かほく市北部の若緑～余地周辺の丘陵地帯において、VI₂期までとは異なる生産基盤のもと、異なる系譜をもつ須恵器生産が、おそらく戸津48号窯期に短期間、散発的におこなわれた可能性を示唆する資料として注目したい。

次に、加茂遺跡第5次調査で継続的に少量の須恵器が出土する鳥屋窯跡群の様相を概観する。鳥屋窯跡群は、中能登町西部の眉丈山山系の丘陵一帯に分布する中能登地域の中核的須恵器生産地であるが、調査例が少なく、その変遷も判然としない。そのため、VI₃期に位置付けられる中能登町末坂ハセタンA1号窯跡に加えて、羽咋郡北部諸窯跡の一つである志賀町倉垣コマクラベ窯跡、また、消費地資料として中能登町武部ショウブダ遺跡を概観する(第191図)。

まず、倉垣コマクラベ窯跡資料は、旧志賀町史編纂に伴う灰原の試掘調査で得られたもので、正確な窯基数等は不明である⁽²²⁾。食膳具は、「ペラペラ」と表現できる程度まで器肉は薄く、器形は大きく「a群」と「b群」に整理・復元可能である(第191図)。a群は、V期以降の坏型器種主体の組成をもち、坏型器種として有台坏2法量(無鈕蓋)、無台坏1法量が、瓷器系器種として有台碗1法量、大型無台碗1法量、有台・無台皿各1法量が確認できる。有台器種は、断面方形を呈する台部を外展気味に貼り付ける点で共通する。無台坏は、底部から体部になだらかに移行する碗形に近い器形と、広い底部をもつ扁平な器形が存在するようだ。また、回転糸切りの切り離しは、有台坏の蓋、有台碗の一部、無台碗、有台皿の一部、無台皿で確認でき、無台坏以外の広範な器種に採用する点で、南加賀窯跡群や高松・押水窯跡群と異なる様相を呈する。b群は、瓷器系器種のみ組成を復元し、有台碗2法量、無台碗1法量が属する。いずれも回転糸切りの切り離しを採用する。有台碗は、極めて小振りな断面三角形の台部(台部高0.1～0.2cm)を、底部外縁に貼り付ける点に大きな特徴をもつ。無台碗は、体部下半のケズリ調整を省略する点、体部が大きく外傾しながら長くのびる器形を呈する点で、後述する末坂ハセタンA1号窯灰原に近い様相を呈する。この2群の様相差は、明らかな系譜差を示しており、b群が後出的である。a群は戸津35号窯期に、b群が戸津48号窯期に比定が可能であろう。なお、同窯跡試掘調査では約3,000点の須恵器片とともに、少量の内黒土師器、土師器が出土することから、須恵器、土師器の一体的生産が指摘されている。

武部ショウブダ遺跡資料は、大部分の須恵器が鳥屋窯跡群産と考えられ、食膳具組成から9G1号土坑から4・5号土坑への変遷が想定されている⁽²³⁾。9G1号土坑の食膳具は、回転ヘラ切りで切り離された有台坏2法量、無台坏1法量に加え、瓷器系の皿片が1点確認できる。後続する4・5号土坑は、掘立柱建物内に設置された棚等の施設一括資料と考えられており、両土坑間で接合した破片も存在する。4・5号土坑の須恵器食膳具の組成は、9G1号土坑と同様に坏型器種を主体とし、一部瓷器系器種が加わる。無鈕蓋(一部、回転糸切り)とセットとなる有台坏2法量は、底部と体部の境で明瞭に屈曲し、体部は直線的に外傾する。また、台部は断面方形を基本とし、4号土坑の一部に断面三角形形状を呈する個体も存在する。無台坏は、比較的広い底部から体部が内湾気味に大きく外傾するため、扁平な器形を呈する。5号土坑出土の無台碗は、胎土の特性から南加賀窯跡群産と考えられる。このように4・5号土坑出土須恵器の様相は、戸津35号窯期に並行する部分が多いと考えられる。また、能登国府を要する中能登地域では、須恵器から土師器に食膳具へスムーズな置換が進む影響か、鳥屋窯跡群は高松・押水窯跡群以上に須恵器への瓷器系器種・技術の導入・定着で消極的な印象を受ける。

末坂ハセタンA1号窯灰原⁽²⁴⁾の食膳具は、VI₂期の系譜をひく武部ショウブダ遺跡資料とは異なる系譜の器種組成をもつ。瓷器系の有台碗3法量、無台碗1法量、無台皿1法量が確認できる一方、坏型器種は欠落

倉垣コマクラベ窯跡灰原

(a群)

有台坏 I・II

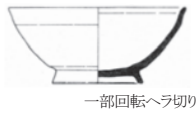
蓋2法量 (回転糸切り)



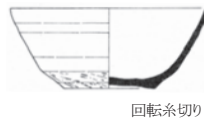
無台坏



有台碗



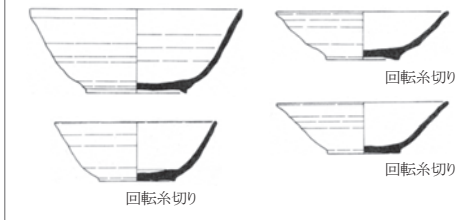
無台碗



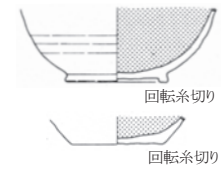
皿



(b群)



内黒土師器



土師器



武部ショウブダ遺跡9G1号土坑

有台坏



無台坏



皿



※ 底部切り離しは、記載以外回転ヘラ切り。

0 (1:6) 10cm

武部ショウブダ遺跡4号土坑

有台坏 I・II



無台坏



武部ショウブダ遺跡5号土坑

有台坏



無台坏

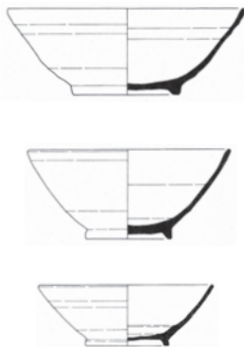


無台碗



末坂ハセタン A1号窯跡灰原 ※全て回転糸切り

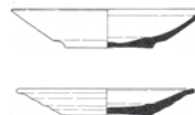
有台碗 I・II



無台碗



無台皿

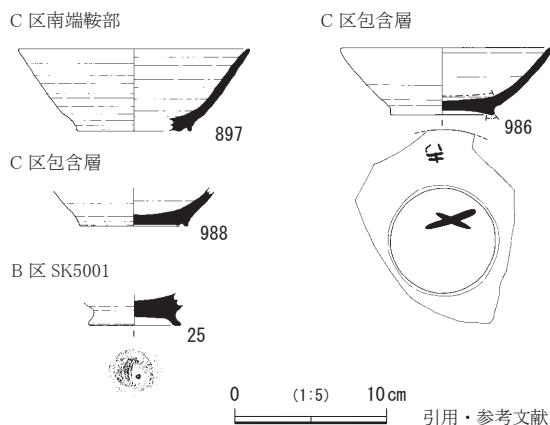


土師器碗

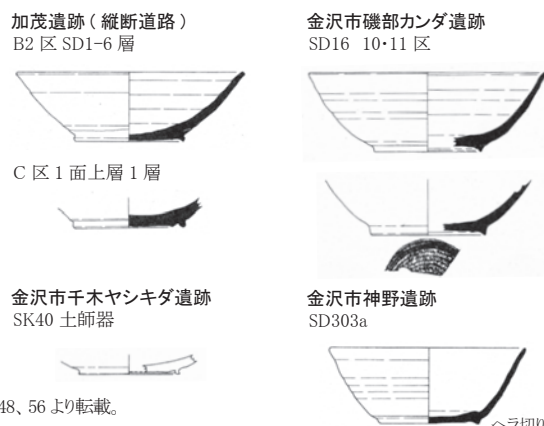


引用・参考文献 2、14、45 より転載。

第 191 図 中能登地域のVI₃期坏・碗類集成図 (S =1/6)

加茂遺跡第5次調査出土のVI₃期有台碗

類似の台部をもつ有台碗



第192図 加茂遺跡他出土有台碗集成図 (S=1/5)

する。いずれも器肉は薄く、生焼け品が多い。有台碗は口径約18cm、15cm前後、約13cmを測り、やや崩れた断面方形の台部が外展する。無台碗は口径14cm台、器高3cm後半台を測り、畝田C遺跡SE05上層出土の須恵器無台碗(口径13cm台、器高4cm前後)より、若干大振りである。体部は、直線的に外傾しながら長くのびる。また、底部が緑釉陶器と類似した台状を呈する個体も存在する。無台皿は口径13～14cm強を測り、底部が台状を呈する個体も確認できる。同窯の食膳具組成は、倉垣コマクラベ窯跡b群と共通した要素が多く、おおむね戸津48号窯期並行に位置付けられよう。

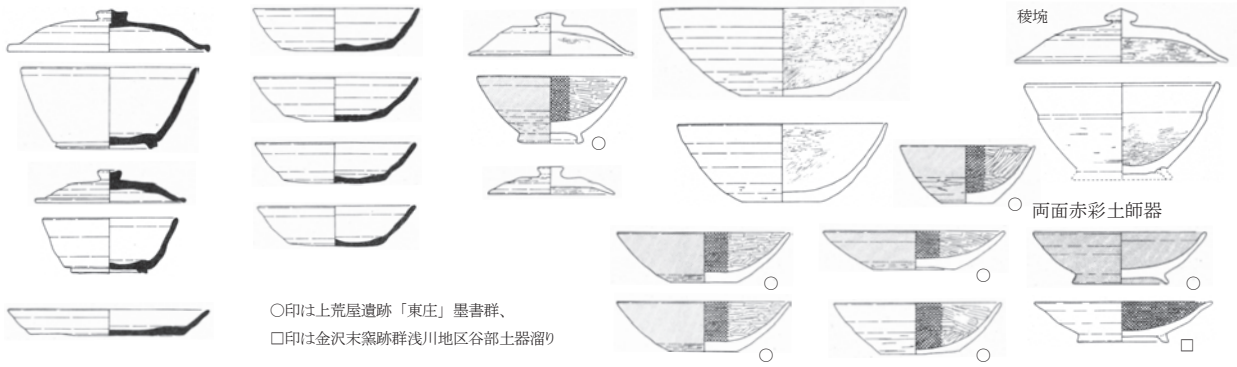
これらから、VI₃期の河北潟以北の須恵器生産を整理すれば、既存の窯跡群は、食膳具の土師器へのスムーズな置換と関連し、瓷器系器種の導入に対して全般に消極的といえる。一方、VI₃期(末頃か)には、末坂ハセタンA1号窯灰原、倉垣コマクラベ窯跡b群のように、全く異なる系譜をもつ窯跡が、各所で短期間操業する状況が想定できる。

第5次調査区出土須恵器では、第1項で記したVI₃期に属する胎土特性X類の有台碗2点(897(C区南端鞍部)、988(C区包含層))は、いずれも底部外縁に極めて小振りなそうめん状の台部が貼り付ける点で共通する(第192図)。類似の有台碗は、加茂遺跡では県河北縦断道路調査区B2区第1面SD1第6層土器群、同C区第1面上層第1層で、周辺遺跡では金沢市磯部カンダ遺跡SD16等に確認できる(神野遺跡のみ底部へら切り離し)。これらは、倉垣コマクラベ窯跡b群の有台碗と共通した特徴を示し、また、土師器では金沢市千木ヤシキダ遺跡SK40出土碗(第192図)に近似形態が存在、VI₃期(10世紀前葉)の中でも戸津48号窯期に並行する部分が多いと考えられる。なお、C区南端鞍部は、道路遺構廃絶後の堆積層であり、道路遺構の下限時期を示す資料の一つとなる。

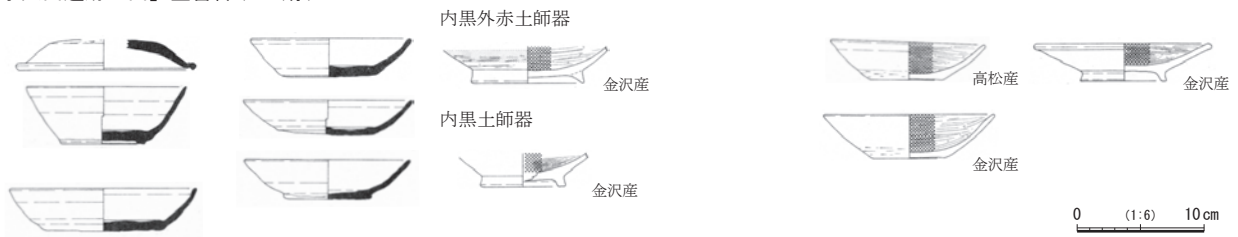
土師器の様相 加茂遺跡第5次調査区のV・VI期の食膳具は、須恵器を主体とし、土師器(両面赤彩土師器、内黒外赤土師器、内黒土師器、土師器(以下、便宜的に無彩色の土師器と呼称))は実測遺物数で64点と、極めて客体的な存在である。前述の須恵器生産終焉後の各遺構を位置付けるため、一括資料の乏しい第5次調査出土土師器ではあるが、その様相を整理する。V期(9世紀前葉～中葉)以降、北加賀地域に属する加茂遺跡に土師器を供給した主な生産地は、金沢末窯跡群を含む金沢市東部の丘陵地帯と、高松・押水窯跡群の東側約2kmの台地上に位置する、かほく市長柄遺跡が知られており、その変遷、歴史的な位置付けは出越茂和氏の一連の研究⁽²⁵⁾に詳しい。以下では、出越氏の研究の中でも、VI期～VII₁期の河北潟東岸～金沢臨海部に立地する消費遺跡資料に焦点を当てて概観する(第193・194図)。

V期に出現する北加賀地域の新たな土師器は、有蓋や須恵器と共通する器種を含むことや、外面を赤彩、内面を黒色処理すること、また、底部外面～体下部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施すこと等の特徴から、出現当初の模倣モデルとして瓷器系の焼物ではなく、複数の金属器系モデルが想定されている。VI期になる

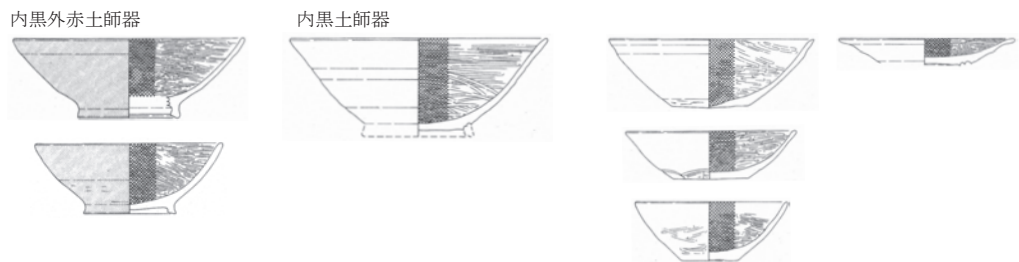
千木ヤシキダ遺跡 SK42 等 (V₂ ~ VI₁ 期)



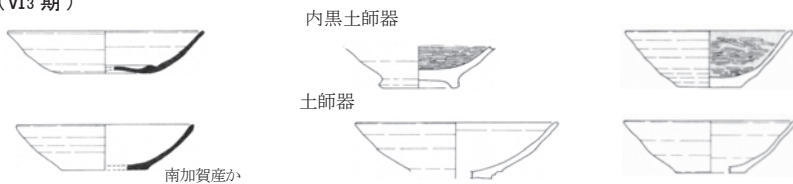
戸水大西遺跡「西」墨書群 (VI₁ 期)



上荒屋遺跡「可」墨書群 (VI₂ 期)



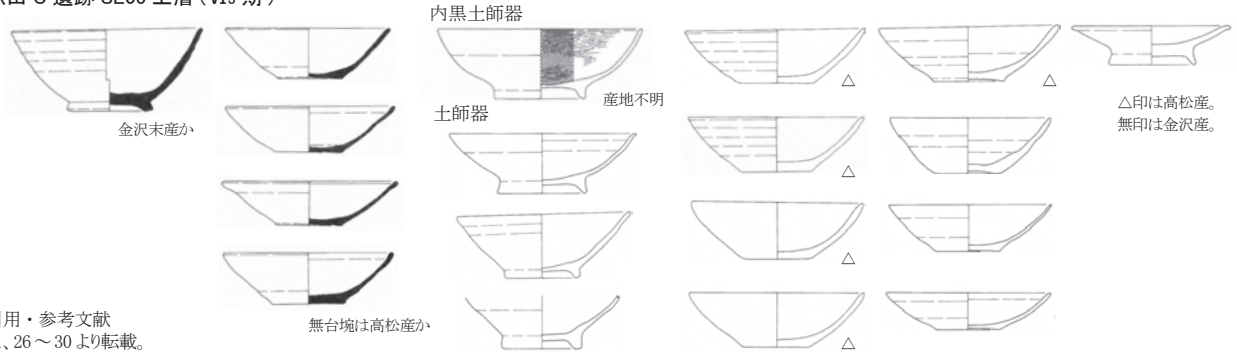
千木ヤシキダ遺跡 SB14 (VI₃ 期)



千木ヤシキダ遺跡 SK40 (VI₃ 期)



畝田 C 遺跡 SE05 上層 (VI₃ 期)



引用・参考文献
21、26～30より転載。

第193図 加茂遺跡周辺の消費遺跡出土坏・碗類実測図1 (S=1/6)

と、食膳具組成が再編されるとともに、総じて器肉を薄くつくるようになる。金属器系の有蓋有台碗等が衰退する一方、瓷器系の無蓋有台碗が登場し、V₂期からみられる量産型の無台碗、有台皿に加わる。これらは、VII₁期に向けて、外面の赤彩や回転ケズリ調整、内面のミガキ調整や黒色処理を省略する無調整・無彩色の土師器に次第に置換され、無彩色・無調整の土師器がその量比を増していく推移を示す。

V₂～VI₁期の量産型の土師器を主体とする食膳具として、上荒屋遺跡「東庄」5期墨書群(V₂期)、金沢末窯跡群浅川地区谷部土器溜り(V₂期)、千木ヤシキダ遺跡SK42(V₂～VI₁期)を例示した(第193図)。器種組成は、有蓋有台碗2法量、無台碗3法量(口径16～20cm台、13cm台主体、10cm前後)に、少量の有台皿、高坏、鉢、稜碗が加わる。内面に丁寧なミガキ調整の後に黒色処理を施すこと、底部外面～体下部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施すことを基本とし、外面を赤彩する個体が多い。また、上荒屋遺跡、金沢末窯跡群で両面赤彩の有台碗、無台盤が出土する他、金沢末窯跡群産とされる千木ヤシキダ遺跡SK42は内面に丁寧なミガキ調整を施すのみで、赤彩や黒色処理を欠く。なお、出越氏によれば、出現期の長柄遺跡SK13bの食膳具は、内面ミガキ調整のみで黒色処理を施さない。

VI₁期は、金沢市戸水大西遺跡「西」墨書群を指標とする。産地は、大部分が金沢末窯跡群産で、高松産は無台碗のうち1点と報告される。器種組成は、無蓋の有台碗2法量(内黒外赤)、無台碗1法量(内黒主体、一部内黒外赤)、有台皿1法量(内黒)が確認でき、外面の回転ケズリ調整は継続する。無台碗は口径12cm前後、器高3cm強を測り、金沢産が高松産に比して器高が低く、扁平な器形を呈する特徴を示すようだ。

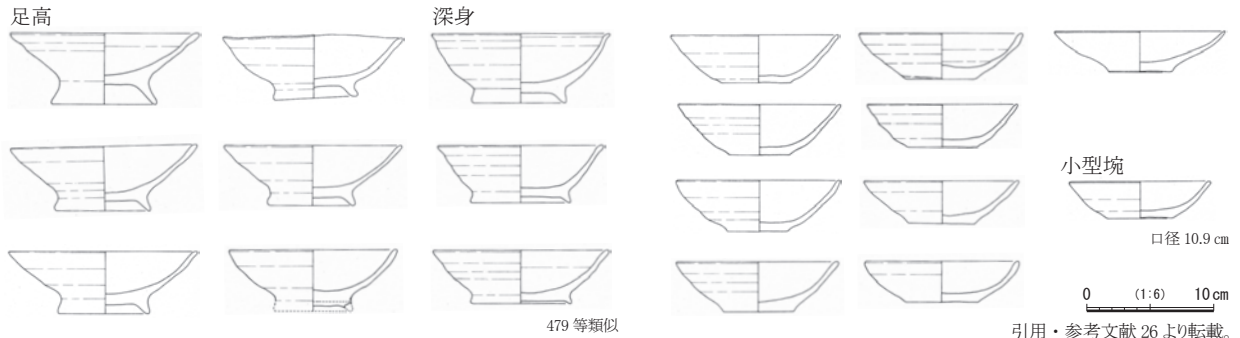
VI₂期は金沢市上荒屋遺跡「可」墨書群を指標とする。器種組成は、有台碗2法量(内黒外赤主体、口径18～20cm台、約15cm台)、無台碗2法量(内黒、口径16cm台、12～14cm台)、有台皿1法量(内黒、口径14cm)があり、無台碗には体部が直線的に長くのびる深身の器形(口径12cm、器高4.7cm)も見受けられる。有台碗は、体部内湾気味の内黒外赤の個体を主体とし、体部が直線的に長くのびる内黒の個体も存在する。無台碗は、外面に赤彩を施す個体はなく、体下部を手持ちケズリ調整、または未調整にとどめる簡略化が進行する。有台皿は、口径14cm台を維持する。

VI₃期は、内黒外赤土師器が基本的に欠落し、内黒土師器も比率を減じる一方、無彩色・無ミガキ調整の土師器が定量以上に増加する。また、VI₂期までと異なる模倣モデルをもつ有台碗の出現や、外面のケズリ調整を簡略化、あるいは省略した無調整の土師器が増加すること等、VII期につながる大きな変化が認められる。指標として、千木ヤシキダ遺跡SB14、同SK40、畝田C遺跡SE05上層の各資料を示した。畝田C遺跡SE05上層の須恵器・土師器は、深身で体部が大きく外傾する無台碗が主体となる点から、後出的である。千木ヤシキダ遺跡SB14は、土師器は内黒と無彩色の土師器が併存、扁平な須恵器無台碗が伴出する。器種は、有台碗1法量(口径約16cm)、無台碗1法量(口径13cm強、器高4cm台)が確認できる。深身の無台碗は、体部外面下半のケズリ調整を省略し、底径が前小期の6cm前後から5cm前後に縮小することから、体部は外傾しながら長くのびる器形を呈する。千木ヤシキダ遺跡SK40出土の土師器は、有台碗2法量(口径約16cm、13cm台)、無台碗1法量(口径14cm強、器高4cm弱、底径5cm台)があり、内黒と無彩色の土師器が併存する。実測点数では、有台碗が内黒の個体1点に対して無彩色(一部に内面ミガキ調整)の個体5点、無台碗が各2点と、確実に後者が増加する。断面略方形の台部を外展気味に張り付ける他、前述の加茂遺跡出土須恵器有台碗(第192図897)と近似した極めて小振りな台部を張り付けた個体も存在する。無台碗は扁平な器形を呈し、内面に暗文状または粗いミガキ調整を加える一方、体部外面下半のケズリ調整は省略する。

畝田C遺跡SE05上層は、有台碗(2法量か。口径16cm強、14cm前後)、無台碗1法量、有台皿1法量があり、実測点数で7:21:1を数える。有台碗は、体部が内湾する産地不明の1点のみが内黒土師器で、大部分を金沢産の無彩色の土師器が占める。無彩色の有台碗は、口径14cm前後、器高5cm弱を測り、体部が直線的に外傾する器形と、内湾気味に立ちあがる器形が存在する。無彩色・無調整の無台碗は、高松産が口径13～

14cm弱、器高4cm強を、金沢産が口径13cm弱、器高4cm前後をそれぞれ測り、後者が総じて薄手で小振りとなる。また、金沢産の無台碗には、器高3cm弱を測る扁平な器形が少数確認できる。有台皿は口径12.4cm、器高3.0cmを測り、VI₂期より口径の縮小と台部の粗雑化が進む。VI₃期の比較資料として、第195図に中能登地域の武部ショウブダ遺跡4・5号土坑を示した。同資料は、前述のとおり扁平な須恵器無台杯の共伴から、末坂ハセタンA1号窯灰原より古相を呈し、5号土坑に軟質の緑釉碗、K90号窯式並行の灰釉段皿が共伴する。また、5号土坑は、内黒比率が4号土坑より低く、口径12cm台に縮小した深身の有台皿が定量存在する点か

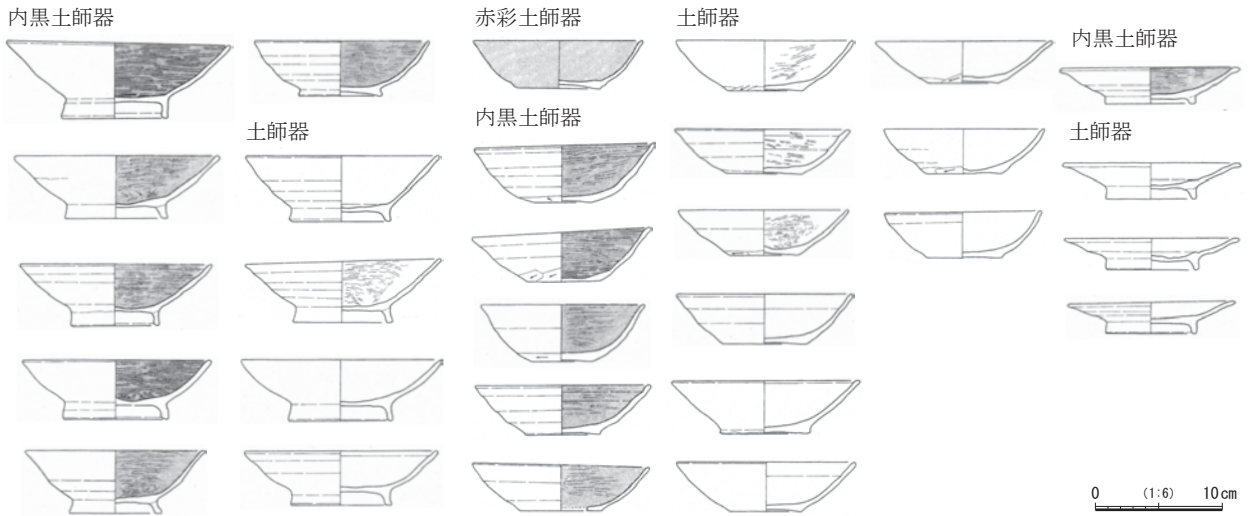
千木ヤシキダ遺跡 SX09(VII₁期)



第194図 加茂遺跡周辺の消費遺跡出土・碗類実測図2 (S=1/6)

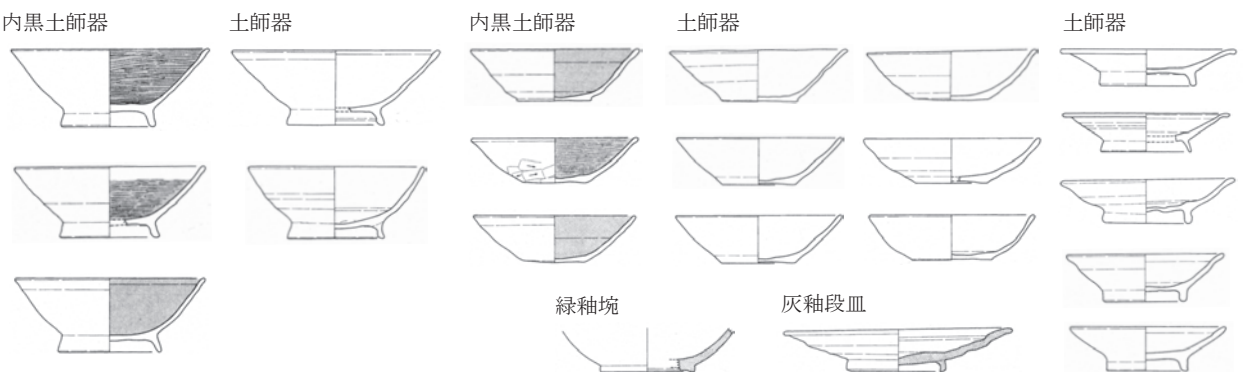
引用・参考文献26より転載。

武部ショウブダ遺跡4号土坑 (VI₃期)



引用・参考文献2より転載。

武部ショウブダ遺跡5号土坑 (VI₃期)



第195図 中能登地域のVI₃期土師器等碗・皿類実測図 (S=1/6)

ら、4号土坑より後出的とされる。これらと北加賀地域とは単純な比較は難しいが、共通点として有台碗・無台碗とも体部内湾気味の異なる系譜をもつ深身器形が少量確認できることがあり、一方、異なる点として有台碗・無台碗の体部が直線的に外傾する個体が目立つことや、無台碗体部外面下半に手持ちケズリ調整を施す個体が客体的に存在することがあげられる。

VII₁期は、祭祀遺構のため器種組成に偏りをもつ可能性を残すが、千木ヤシキダSX09を指標とする(第194図)。器種組成はVI期までの有台皿を欠落し、有台碗1法量(口径13～14cm台、器高4～5cm前後、底径5cm前後)、無台碗2法量(口径13cm前後、器高4cm前後が主体、口径12cm強、器高3.5cm前後が客体)、小型無台碗1法量(口径10.9cm、器高2.9cm)が確認できる。有台碗と無台碗の比率は約3:7を示す。有台碗は、全て無彩色・未調整で、報告書で7タイプに分類されるとおり、いくつかの模倣モデルが併存する。大きくは、VI期からの器形、台高1cmを超える足高の器形、緑釉陶器を模したような底部外縁に断面三角形の台部を外展させる深身の器形に分かれる。無台碗は、報告では4タイプに分類され、全て無彩色・無調整で、底部が台状を呈する。口径は、縮小化が始まり、口径12cm台を測る一群があらわれる。

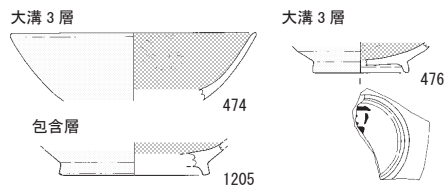
さて、上記の北加賀を中心とした消費遺跡出土土師器を参考に、加茂遺跡第5次調査区出土土師器を位置付けると、第196・197図のとおり整理できる。土師器64点の内訳は、内黒外赤土師器6点、内黒土師器47点、無彩色の土師器11点であり、内黒土師器が主体を占める。

VI₁期～VI₂期は、有台碗11点(内黒外赤3点、内黒7点、無彩色1点)、無台碗20点(内黒外赤2点、内黒16点、無彩色2点)、有台皿12点(内黒外赤1点、内黒9点、無彩色2点)、無台皿1点(内黒)を数える。有台碗は、口径約16cmを測る474～476、815等と、口径約12cmを測る7・476・994の大小2法量の他、中能登地域で目立つ541に分かれる。前2者は器肉が比較的厚く、7の器形は上荒屋遺跡「可」墨書群(VI₂期)の内黒外赤土師器有台碗に類例をもつ。口径20cm弱を測る541は、体部外面にケズリ調整を施し、無台碗399～401等とともにVI₂期でも新しく位置付けられる。無台碗は、器形・法量から4つのグループに分かれる。身が深く、底部器肉が比較的厚いグループとして、口径15cm前後を測る218・303・484・823等と、口径12cm台を測る150・486～488・807があり、後者は上荒屋遺跡「可」墨書群に類例をもつ。底部が円盤形を呈する平高台の164(内黒外赤)、1208(内黒)は、緑釉陶器の影響を受けた器形と考えられ、宗教的要素が強い宝達志水町宿向山遺跡南側調査区出土土器群(VI₁期～VI₂期)等で確認できる。内黒無台碗117・304・399～401・485の一群は、口径15cm台～16cmを測り、外面下半に回転ケズリ調整を施す。体部が直線的に外傾する器形は、有台碗541と共通し、上荒屋遺跡「可」墨書群や、回転ケズリ調整を省略した個体となるがVI₃期の武部ショウブダ遺跡に類列がある。有台碗541とともに、VI₂期でも新しく位置付けられよう。有台皿は、口径14cm前後を測る402(内黒外赤)、263・306・489等(内黒)が、口径13cm台の491・494等(内黒)、246・493(無彩色)より古相を呈する。また、492の体部外面下端の屈曲具合は、並行期の須恵器有台皿にもみられる。無台皿は、V期からの器形を保つ403(内黒、口径14.5cm)と、平高台の358・995(無彩色、底径5cm台)の2タイプが存在する。

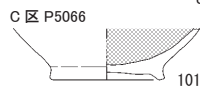
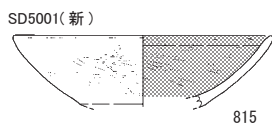
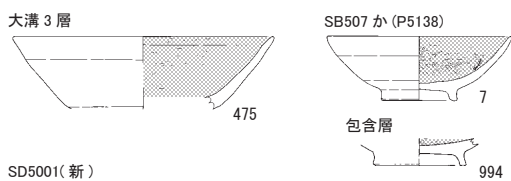
VI₃期は、有台碗11点(内黒8点、無彩色3点)、無台碗6点(内黒5点、無彩色1点)、有台皿3点(内黒1点、無彩色2点)を数え、有台碗、無台碗ともVI₂期までとは異なる系譜を想定させる器形が目立つ。有台碗は、541の系譜をひく302、体部が内湾する477・478、深身で厚い底部外縁に断面三角形の台部を付す245・479～482、VI₂期の系譜をひく802・1207(無彩色)の4つのグループに大別できる。302の台部は細身で、やや内屈気味にひしゃげる。477・478は口径15cm台を測り、武部ショウブダ遺跡4号土坑の内黒有台碗(第195図左から2列目最上)に近い印象を受ける。245・479～482は口径13cm前後を測り、胎土中に海綿骨針が混ざる。深身の器形は、VII₁期の千木ヤシキダ遺跡SX09の無彩色土師器につながる系譜を想定でき、全点内黒処理を行う点等を評価、現時点ではVI₃期後半～末頃に顕在化する新しい模倣モデルの導入例と位置付ける。今後、類例の増加を待って再検討したい。802・1207は体部が大きく外傾し、断面三角形の台部を付す。前述のとおり畝

VI1・2期

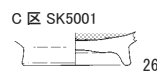
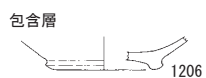
内黒外赤土師器



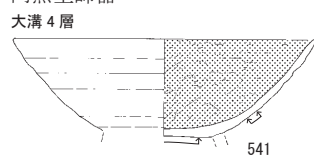
内黒土師器



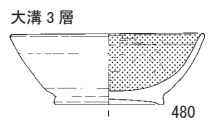
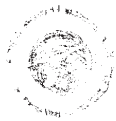
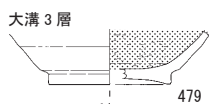
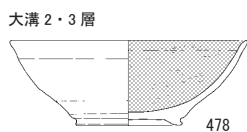
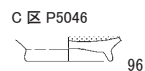
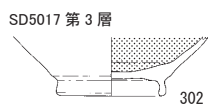
土師器



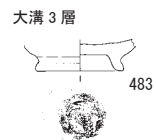
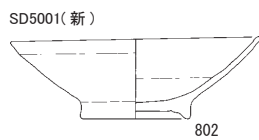
内黒土師器



VI3期

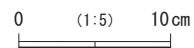
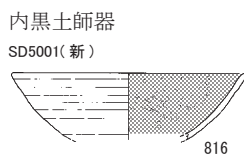


土師器



VII1期

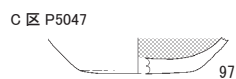
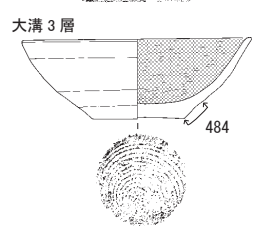
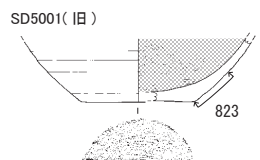
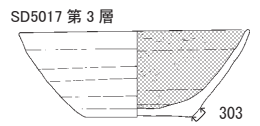
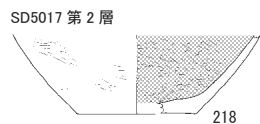
VII2期



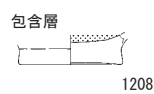
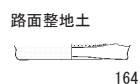
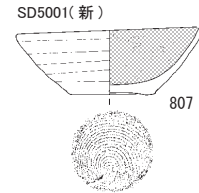
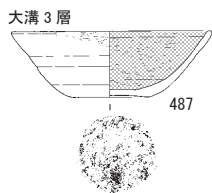
第196図 第5次調査出土土師器・皿類集成図1 (S=1/5)

VI₁:2 期

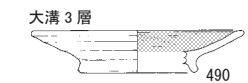
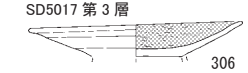
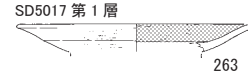
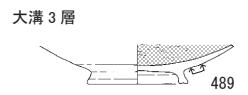
内黒土師器



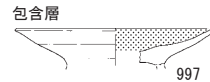
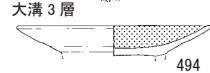
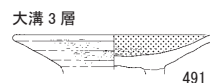
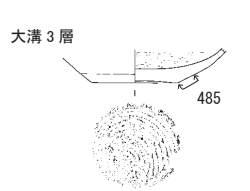
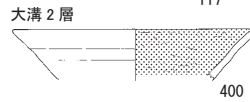
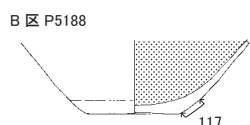
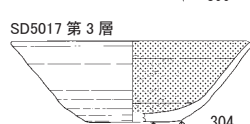
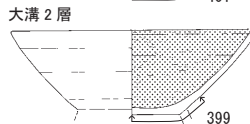
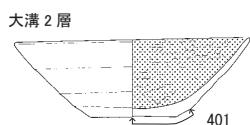
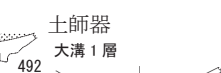
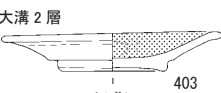
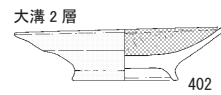
内黒外赤土師器



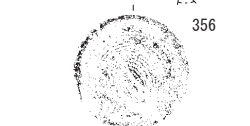
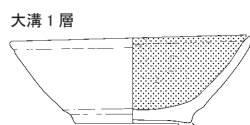
内黒土師器



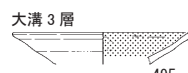
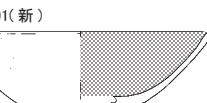
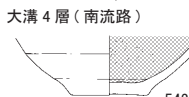
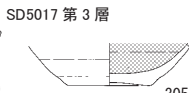
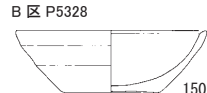
内黒外赤土師器



VI₃ 期



土師器



VI₁ 期



第197図 第5次調査出土土師器・血類集成図2 (S=1/5)

田C遺跡SE05や千木ヤシキダ遺跡SX09に類似器形が存在する。

無台碗は底部台状を呈し、外面底部と体部の境の仕上げ具合に有台碗477～482と共通する要素がみいだせる。器形・法量から356・357、305・542・180、817の3グループに分かれる。やや厚手の356は口径16cmを、扁平な817は口径17.0cmをそれぞれ測る。356・357は、有台碗479～482、無台碗305、817と同様に胎土中に海綿骨針が混ざる。有台皿は口径が13cm台に縮小し、台部の器形は崩れた印象を受ける。

VII₂期に位置付けられるSD5001(新)出土の有台碗816は、口径15.2cmを測り、ロクロひだが目立つ。

以上、第5次調査出土須恵器・土師器の検討から、SB507柱穴の可能性をもつB区P5138がVI₂期に属し、大溝北側流路・南側流路、道路遺構西側溝(SD5017)は、ともにVI₃期まで機能を維持したと考えられる。

3.第5次調査出土の墨書土器等の特徴的な遺物について

加茂遺跡の特徴の一つには、墨書土器を中心とした豊富な遺物があげられる。以下では、図化した遺物のうち、木簡、墨書土器、転用硯等の特徴的な遺物を整理する(第198～202図、第70～75表)。

木簡 SD5001(旧)から習書木簡(2号木簡、第88図833)、人物画(3号木簡、同図834)の2点、大溝第3層から付札木簡(4号木簡、同図835)が出土、ともにVI₃期を下限とする。このうち、3号木簡834は、上下に神像と思われる人物画2体を描き、上方の人物画は帽子様のものを被り、下方の人物は格子模様の袈裟を表現する。2つの円孔から「守り札」として、柱、壁等に木釘等で打ち付けて使用したと想定する。なお、道路遺構(SD5017第3層)、大溝第2層から、付札状木製品各1点(第59図2010、第64図2012)が出土している。ともに頭部側面に切れ込みを入れ、下端に刃物による切断痕を残す。

墨書土器 IV₁期～VI₃期に属する155点(他に漆書1点)を図化(第70・71表)、未図化の小片を含めれば200点近くの墨書土器が出土している。出土した遺構別で見れば、遺物包含層が30.1%、大溝が27.0%、SD5061が17.9%、道路遺構が12.2%と、大溝、SD5061からの出土が目立つ(第73表上段)。

墨書を記した土器の種類・器種別では、多い順に須恵器無台坏91点、同有台坏の身38点、同有台坏の蓋11点等となる。各期を通じて須恵器無台坏が主体的に選択されており、V期に須恵器有台坏蓋、無台盤が、VI期に須恵器碗・皿、ロクロ土師器有台碗が客体的に加わる推移がみとれる。また、体部外側面への墨書は、V期以降に確認でき、VI期に増加傾向を示す。これらから、第5次調査区の墨書土器は、IV₁期に須恵器無台坏を主体に出現(7点)、IV₂期～V期に増加(23～30点)し、さらに須恵器碗・皿の客体的使用が加わるVI₁期およびVI₂期に倍増(45点)するものの、VI₃期に急減(2点)に転ずる推移を示す(第73表中段)。

文字内容については、便宜的に施設名的文字、人名的文字、吉祥句的文字、記号的文字、その他の文字、文字不明の6つに区分した(第198～201図、第72表)。点数から見れば、吉祥句的文字72点、人名的文字34点、施設名的文字8点、記号的文字5点、その他7点となる。吉祥句的文字が全体の半数近くを占める一方、管理的機能を示すとされる記号的文字が相対的に少ない傾向を指摘でき、本遺跡の性格を考える一助となる。また、「真継」、「茂」が各期を通じて出土する一方、V期前後から吉祥句的文字の増加や、各区分内でも文字内容の変化が認められ、第3節で後述する第5次調査区の土地利用・性格の転換を反映した様相を示す。

施設名的文字に分類した文字(第198図)は、IV₁期の「大里」、V期の「大寺」、VI期の「宅」、「曹」、「室」、「西家」、「□(東カ)」があり、VI₁期に文字種が増加する。SD5061出土の「大里」は、大きな集落の意であろうか。SK5016出土の「大寺」は、調査区周辺での小規模な寺堂の存在を示すものであり、隣接する能瀬南遺跡出土「□□(部カ)寺」墨書(II₃期～III期)や、津幡町教委第5次調査北大溝出土「鴨寺」「馬部寺」墨書(V・VI期)との関連で注目できる。大溝出土の「曹」の文字は、河北縦断道路調査区B2区SD1-6(北大溝)出土のロクロ土師器無台碗(河北縦断報告書第213図896)、町第9次調査区(報告書I第53図22、II第52図59)でも確認でき、本遺跡に末端官衙に属する曹司が存在した可能性が高い。

第70表 第5次調査上層出土墨書土器、転用碗一覽表 1

○墨書・漆書土器 156点

挿入 番号	番号	出土遺構	種類・器種	記入 部位	文字等	時期
74	600	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「大里」	IV1(新)
38	70	SK5016第3層	須・無台坏	外底	「大寺」	V1
105	1153	包含層	須・無台坏	外底	「□(宅カ)」	V2
70	536	大溝第1・4層	須・無台坏	外底	「宅」	VI2
64	432	大溝第3層	須・有台坏	外側	「書」	VI1
65	448	大溝第3層	須・無台坏	外側	「室」	VI1
65	451	大溝第2・3層	須・無台坏	外側	「西家」	VI1
104	1128	包含層	須・有台坏	外底	「□(東カ)」	VI1
74	593	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「真継」	IV1(古)
73	561	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「真継」	IV1(新)
35	33	SK5006第3層	須・有台坏	外底	□(継カ)」	IV2(古)
73	582	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「□(真カ)」	IV2(古)
74	625	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「真継」	IV2(新)
74	620	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「真継」	IV2
86	810	SD5001(新)底	須・無台坏	外底	「真継」	IV2
35	49	SK5009-10	須・無台坏	外底	「真継」	IV2か
96	878	南端鞍部	須・有台坏	外底	「□(真カ)□」	IV2か
105	1148	包含層	須・有台坏か	外底	「真継」	IV2か
95	858	SD5075	須・有台坏	外底	「□□(真継カ)」	V1か
38	65	SK5016第3層	須・有台坏	外底	「真継」「□」	V2
53	231	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「真継」	V2
42	130	P5194	須・坏蓋	外	「真」	Vか
75	646	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「□(真カ)」	Vか
61	350	大溝第1層	須・無台坏	外底	「真継」「大和」	VI1
61	342	大溝第1層	須・無台坏	外底	□(継カ)」	VI1
75	644	SD5061第1層	須・無台坏	外底	□(継カ)」	VI1
103	1089	包含層	須・坏蓋	内側	「真□(継カ)」	VI1
105	1168	包含層	須・無台坏	外底	「真□(継カ)」	VI1
106	1188	包含層	須・無台坏	外底	「□(真カ)継」	-
96	882	南端鞍部	須・有台坏	外底	「□(万カ)麻呂」	IV2(古)
53	223	SD5017第3層	須・有台坏	外底	「□(真カ)人」	IV2(古)
74	608	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「真人」	IV2(古)
74	619	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「真人」	IV2
74	621	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「臣主」	IV2(新)
74	626	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「臣主」	IV2(新)
105	1149	包含層	須・無台坏	外底	「□(臣カ)主」	V1
75	640	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「□(主カ)」	V2
56	273	SD5017第3層	須・有台坏	外側	「□(主カ)。転用碗」	VI2
105	1170	包含層	須・無台坏	外底	「□(主カ)」	VI2
105	1184	包含層	須・無台坏	外底	「□(主カ)」	VI2
61	350	大溝第1層	須・無台坏	外底	「大和」「真継」	VI1
103	1059	包含層	須・坏蓋	外天	「□(公カ)」	V1
73	567	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「人」	IV1(古)
77	690	SD5061第1・2層	須・有台坏	外底	「人」	IV1(古)
77	692	SD5061第1・2層	須・有台坏	外底	「人」「人」。別筆。	IV2(古)か
73	579	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「茂」	IV1(新)
51	190	SD5016、南端鞍部	須・有台坏	外底	「□(茂カ)」	IV2(古)
104	1126	包含層	須・有台坏	外底	「茂」	VI1
105	1165	包含層	須・無台坏	外底	「茂」	VI1
105	1166	包含層	須・無台坏	外底	「□(茂カ)」	VI1
105	1167	包含層	須・無台坏	外底	「茂」	VI1
103	1072	包含層	須・坏蓋	外	「茂」	VI2
103	1073	包含層	須・坏蓋	外	「茂」	VI2
54	241	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
54	242	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
57	290	SD5017第2・3層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
65	457	大溝第3層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
86	800	SD5001(新)上層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
99	978	包含層	須・無台坏	外底	「茂」	VI2
105	1171	包含層	須・無台坏	外側	「茂」	VI2
105	1177	包含層	須・無台坏	外底	「茂」	VI1
106	1189	包含層	須・無台坏	外側	「茂」	VI1
106	1186	包含層	須・無台坏	外底	「茂」	VI1か
73	578	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「凡」「□(大カ)」。別筆	IV2(古)
64	437	大溝第1~3層	須・有台坏	外側	「凡」。則天文字	VI1
104	1108	包含層	須・有台坏	外底	「凡」。則天文字	VI1
65	452	大溝第3層	須・無台坏	外側	「凡」。則天文字	VI1
65	453	大溝第3層	須・無台坏	外側	「凡」。則天文字	VI1
65	455	大溝第3層	須・無台坏	外側	「凡」。則天文字	VI1
65	470	大溝第3層	須・無台坏	外	「凡」則天文字。書き直し	VI2
64	440	大溝第2・3層	須・無台坏	外底	「千」	V1
62	374	大溝第2層	須・坏蓋	外天	「□(千カ)」	V2
65	443	大溝第3層	須・無台坏	外側	「千」	V2
95	863	SD5093	無台坏	外底	「千」	V2
98	949	包含層	須・有台坏	外底	「千」	VI1
98	950	包含層	須・有台坏	外底	「千」	VI1
56	281	SD5017第2・3層	須・無台坏	外底	「千」	VI1
62	389	大溝第1・2層	須・無台坏	外底	「千」	VI1
65	454	大溝第3層	須・無台坏	外底	「千」	VI1
86	812	SD5001(新)底	須・無台坏	外側	「□(千カ)」	VI1
61	348	大溝第1層	無台坏	外底	「千」	VI1
65	462	大溝第3層	無台坏	外底	「千」	VI1
104	1125	包含層	須・有台坏	外底	「千」	VI1か
57	300	SD5017第3層	小坏	外底	「千」	VI1か
103	1070	包含層	須・坏蓋	外	「□(千カ)」	VI2
103	1074	包含層	須・坏蓋	外	「□」「十」「□」	VI2
23	9	SBS08(SK5010)他	須・有台坏	外底	「千」	VI2
51	193	SD5016、南端鞍部	須・有台坏	外底	「千」	VI2
56	282	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「千」	VI2
56	285	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「千」	VI2
64	435	大溝第3層	須・有台坏	外底	「千」	VI2
63	396	大溝第1・2層	須・無台坏	外底	「千」	VI2
65	459	大溝第3層、6次SD01	須・無台坏	外底	「千」	VI2
98	958	包含層	須・有台坏	外底	「千」	VI2
104	1132	包含層	須・有台坏	外底	「千」	VI2
105	1158	包含層	須・無台坏	外底	「正□(月カ)」	V2
65	444	大溝第2・3層	須・無台坏	外底	「正月」	VI1
65	445	大溝第2・3層	須・無台坏	外側	「正月」	VI1
62	376	大溝第1・2層	須・坏蓋	外	「正月」	VI2
64	428	大溝第3層	須・坏蓋	外	「正月」	VI2
64	438	大溝第3層	須・有台坏	外側	「正月」	VI2
65	460	大溝第3層	須・無台坏	外側	□月	VI2
61	346	大溝第1層	須・無台坏	外底	「正月」	VI2
65	456	6次大落ち込み	須・無台坏	外底	「正月」	VI2
61	351	大溝第1層	須・有台坏	外側	「正」	VI2
63	397	大溝第1・2層	須・有台坏	外底	「正月」	VI2
65	465	大溝第3層	須・有台坏	外底	「正月」。転用碗	VI2
65	468	大溝第3層	須・無台坏	外側	「正月」。内面墨痕	VI2
65	442	大溝第1~3層	須・無台坏	外底	「卒」	V2
65	447	大溝第3層	須・無台坏	外側	「卒」「□」	VI1
53	216	SD5017第2層他	須・無台坏	外底	「卒」	VI2
53	236	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「□(山カ)卒」	VI1
73	578	SD5061第1層	須・有台坏	外底	「□(大カ)」「凡」	IV2(古)
99	986	包含層	須・有台坏	外側・側	「□(吉カ)」「×」	VI3
73	558	SD5061第1層	須・坏蓋	外肩	「□(三カ)」	V2
99	966	包含層	須・無台坏	内面	「/」	VI1
103	1074	包含層	須・坏蓋	外	「十」「千」「□」	VI2
99	986	包含層	有台坏	外側・側	「×」、「□(吉カ)」	VI3
65	461	大溝第3層	無台坏	外底	「卍」	V2
51	198	SD5016、南端鞍部	須・無台坏	外底	漆書。「上」	IV2(新)
78	731	SD5061第2層	須・無台坏	外底	「山口(替カ)」	IV2(新)
118	1344	不明	須・有台坏	外側	「□(左カ)」	Vか
106	1209	包含層	有台坏	外底	「□(漆カ)」	VI1
98	956	包含層	須・有台坏	外底	「酒□」	VI1か
104	1127	包含層	須・有台坏	外底	「□(田カ)」	VI1か
57	297	SD5017第3層	須・無台坏	外側	「□(志または去カ)」	VI2
78	729	SD5061第2層	須・無台坏	外底	「□」	IV2(新)
75	637	SD5061第1層	須・無台坏	外底	「□」	IV2
78	734	SD5061第2層	須・無台坏	外底	「□」	IV2か
53	230	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「□」	V2
56	279	SD5017第3層	須・無台坏	外底	「□」	V2
105	1159	包含層	須・無台坏	外底	「□」	Vか
96	894	南端鞍部、包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI1
105	1163	包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI1
105	1164	包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI1
105	1169	包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI1
70	538	大溝第3・4層	須・無台坏	外側	「□」	VI2
105	1180	包含層	須・無台坏	外側	「□」	VI2
106	1185	包含層	須・無台坏	外底	「□」	VI2
106	1190	包含層	須・無台坏	外側	「□」	-
102	1045	排水溝	須・無台坏	外底	2ヶ所。判読できず	VI2
64	439	大溝第3層	須・有台坏か	外側	判読できず	-
77	691	SD5061第2層	須・有台坏	外底	判読できず	IV1(新)
78	733	SD5061第2層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2
74	624	SD5061第1層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2(新)
78	732	SD5061第2層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2(新)
86	797	SD5001(新)最上層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2(新)

第2節 第5次調査上層遺物について

第71表 第5次調査上層出土墨書土器、転用硯一覽表2

挿図番号	番号	出土遺構	種類・器種	記入部位	文字等	時期
96	891	南端鞍部	須・無台坏	外底	判読できず	IV2(新)
75	638	SD5061第1層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2か
104	1135	包含層	須・無台坏	外底	判読できず	IV2か
35	53	SK5012	須・無台坏	外底	判読できず	V2
57	287	SD5017第3層	須・無台坏	外側	判読できず	VI1
91	848	SD5006	須・有台坏	外底	判読できず	VI1
95	866	SD5100	須・無台坏	外底	判読できず	VI1
98	957	包含層	須・有台坏	外底	判読できず	VI1
106	1194	包含層	無台盤	外底	判読できず	VI1
66	476	大溝第3層	内黒外赤有台碗	外底	判読できず	VI1
42	126	P5160	須・無台坏	外底	判読できず	VI2
61	335	大溝第1層	須・有台坏	外底	判読できず	VI2
70	534	大溝第1・3・4層	須・有台坏	外	判読できず	VI2

挿図番号	番号	出土遺構	種類・器種	記入部位	文字等	時期
73	577	SD5061第1層	須・有台坏	外底	外底全面墨付着	IV1(新)
77	684	SD5061第2層	須・坏蓋	内	内面平滑・墨痕	IV1(新)
77	697	SD5061第1・2層	須・有台坏	外底	外底墨痕	IV2(古)
103	1079	包含層	須・坏蓋	内	内面墨痕	IV2(古)
73	549	SD5061第1層	須・坏蓋	内	内面平滑・墨痕	IV2
95	867	SK5001	須・坏蓋	内	内面墨付着	IV2
35	45	SK5008	須・無台坏	内	内面墨痕か	V2
103	1087	包含層	須・坏蓋	内	内底摩擦・墨痕	V2
104	1121	包含層	須・有台坏	外底	外底墨痕	V
35	43	SK5008	須・坏蓋	内	内面摩擦・墨痕	VI1
42	123	P5140、SK5007他	須・坏蓋	内	内面平滑・墨付着	VI1
62	384	大溝第2層	須・無台坏	外底	外底墨痕	VI1
73	553	SD5061第1層他	須・坏蓋	内	内面平滑・墨付着	VI1
103	1063	包含層	須・坏蓋	内	内底墨痕	VI1
103	1096	包含層	須・坏蓋	内	内面墨痕・磨耗	VI1
48	160	路面整地土	須・有台坏	外底	外底墨付着	VI2
56	273	SD5017第3層	須・有台坏	外底	外底墨痕・外側墨書	VI2
57	301	SD5017第3層	須・有台皿	外底	外底墨痕	VI2
62	375	大溝第2層	須・坏蓋	内	内面墨痕・平滑	VI2
63	398	大溝第2層	須・無台皿	内	内面墨痕	VI2
65	465	大溝第3層	須・有台皿	内	内面墨痕・平滑。外側墨書「正月」	VI2
65	468	大溝第3層	須・無台皿	内	内面墨痕・平滑。外側墨書「正月」	VI2
98	933	包含層	須・坏蓋	内	内面平滑・墨痕	VI2
99	990	包含層	須・無台皿	内	内面墨痕	VI2
99	992	包含層	須・無台皿	内	内面墨痕・平滑	VI2
118	1342	A区P526	須・坏蓋	内	内面墨痕・磨耗	VI2

○転用硯 35点

挿図番号	番号	出土遺構	種類・器種	記入部位	文字等	時期
81	775	SD5061第3層	須・有台坏	外底	外底墨痕	III3
98	925	包含層	須・坏蓋	内	内面平滑・墨痕	III
118	1340	P519	須・有台坏	外底	台部接地面墨痕	III
77	687	SD5061第2層	須・有台坏	外底	外底全面墨痕	IIIか
42	135	P5205	須・坏蓋	内	内面摩擦	III・IV1か
73	564	SD5061第1層	須・有台坏	内	内底等平滑	IV1(古)
77	689	SD5061第1・2層	須・有台坏	外底	外底墨痕	IV1(古)
73	548	SD5061第1層	須・坏蓋	内	内面墨付着	IV1(新)
73	575	SD5061第1層	須・有台坏	外底	外底墨痕	IV1(新)

第72表 第5次調査上層出土墨書土器文字内容別一覽表

文字区分	文字内容	実測点数	III期	IV1期	IV2期	V期	VI1期	VI2期	VI3期	不明等
施設名的文字 7種 8点	大里	1		1						
	大寺	1				1				
	宅、□(宅カ)	2				1	1			
	曹	1					1			
	室	1					1			
	西家	1					1			
	□(東カ)	1					1			
人名的文字 7種 34点	真継、真□(継カ)、 真、□(真カ)、 □(真カ)継、 □□(真継カ)、 □(真カ)、□(継カ)	21		2	8	5	5			1
	□(万カ)麻呂	1			1					
	真人、□(真カ)人	3			3					
	臣主、□(臣カ)主	4			2	2				
	□(主カ)	3						3		
	大祁	1					1			
	□(公カ)	1					1			
吉祥句的文字 10種 72点	人	3		2	1					
	茂、□(茂カ)	18		1	1		4	8		2
	凡	1			1					
	尙	6					5	1		
	千、□(千カ)	25					4	10	11	
	正月、正□(月カ)、 正、□月	13					1	2	10	
	卒	3					1	1	1	
	□(山カ)卒	1						1		
	□(大カ)	1			1					
	□(吉カ)	1							1	
記号的文字 4種 5点	□(三カ)	1					1			
	/	1						1		
	十、×	2						1	1	
	卅	1					1			
その他 7種 7点	上[漆書]	1			1					
	山口(替カ)	1			1					
	□(左カ)	1				1				
	□(漆カ)	1					1			
	酒□	1						1		
□□(田カ)	1						1			
□(志または去カ)	1							1		
不明		34	0	1	10	4	10	7	0	2
計		158	0	7	30	23	47	44	2	5

※ 350、578、986、1074は、複数の文字あり。

第73表 第5次調査上層出土墨書土器、転用硯出土状況一覧表

○遺構別出土状況

遺構区分	墨書土器点数					転用硯点数				
	計 (%)	有台坏・蓋	有台坏・身	無台坏	盤・皿他	計 (%)	有台坏・蓋	有台坏・身	無台坏	盤・皿他
掘立、土坑、ピット	8 (5.1%)	1	3	4		4 (11.4%)	3		1	
古代道路遺構	路面整地土	0 (0%)				1 (2.9%)		1		
	S D 5016(東側溝)	3 (1.9%)		2	1	0 (0%)				
	S D 5017(西側溝)	16 (10.3%)		2	13	1	2 (5.7%)		1	1
大溝	第1・2層	11 (7.1%)	2	1	4	4	3 (8.6%)	1		1
	第3層	31 (19.9%)	1	6	18	6	2 (5.7%)			2
S D 5061	28 (17.9%)	1	8	19		11 (31.4%)	4	7		
S D 5001(新)	4 (2.6%)			4		0 (0%)				
溝その他	8 (5.1%)		4	3	1	1 (2.9%)	1			
包含層	47 (30.1%)	6	12	26 ※	3	11 (31.4%)	7	2		2
計	156 (100%)	11 (7.0%)	38 (24.4%)	92 (59.0%)	15 (9.6%)	35 (100%)	16 (45.7%)	11 (31.4%)	2 (5.7%)	6 (17.2%)

※印は漆書1点を含む。

○墨書土器・時期別出土点数

		計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2・3期	不明等
須恵器	有台坏・蓋	11				4	1	6	
	有台坏・身	38		5	8	3	12	9	1
	無台坏	92		2	20 ※	15	26	25	4
	小坏	1						1	
	無台盤	6				2	4		
	有台皿	4					1	3	
	無台皿	2						2	
	有台碗	1						1	
土師器	有台碗	1					1		
計		156 (0%)	7 (4.5%)	28 (18.0%)	24 (15.3%)	45 (28.8%)	47 (30.2%)	5 (3.2%)	

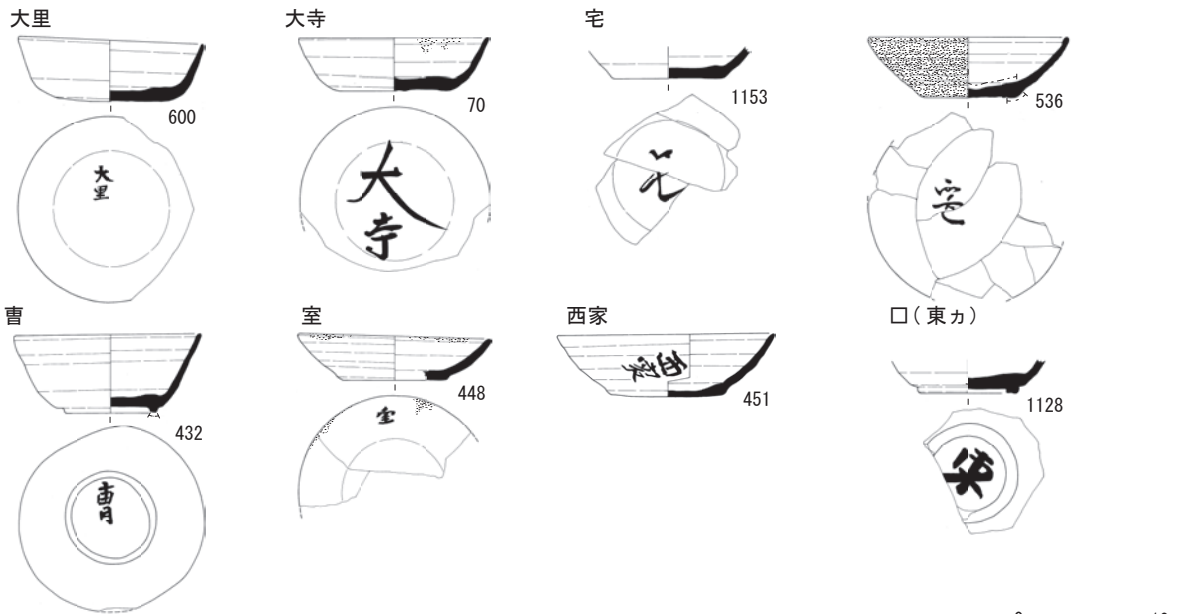
※印は漆書1点を含む。

○転用硯・時期別出土点数

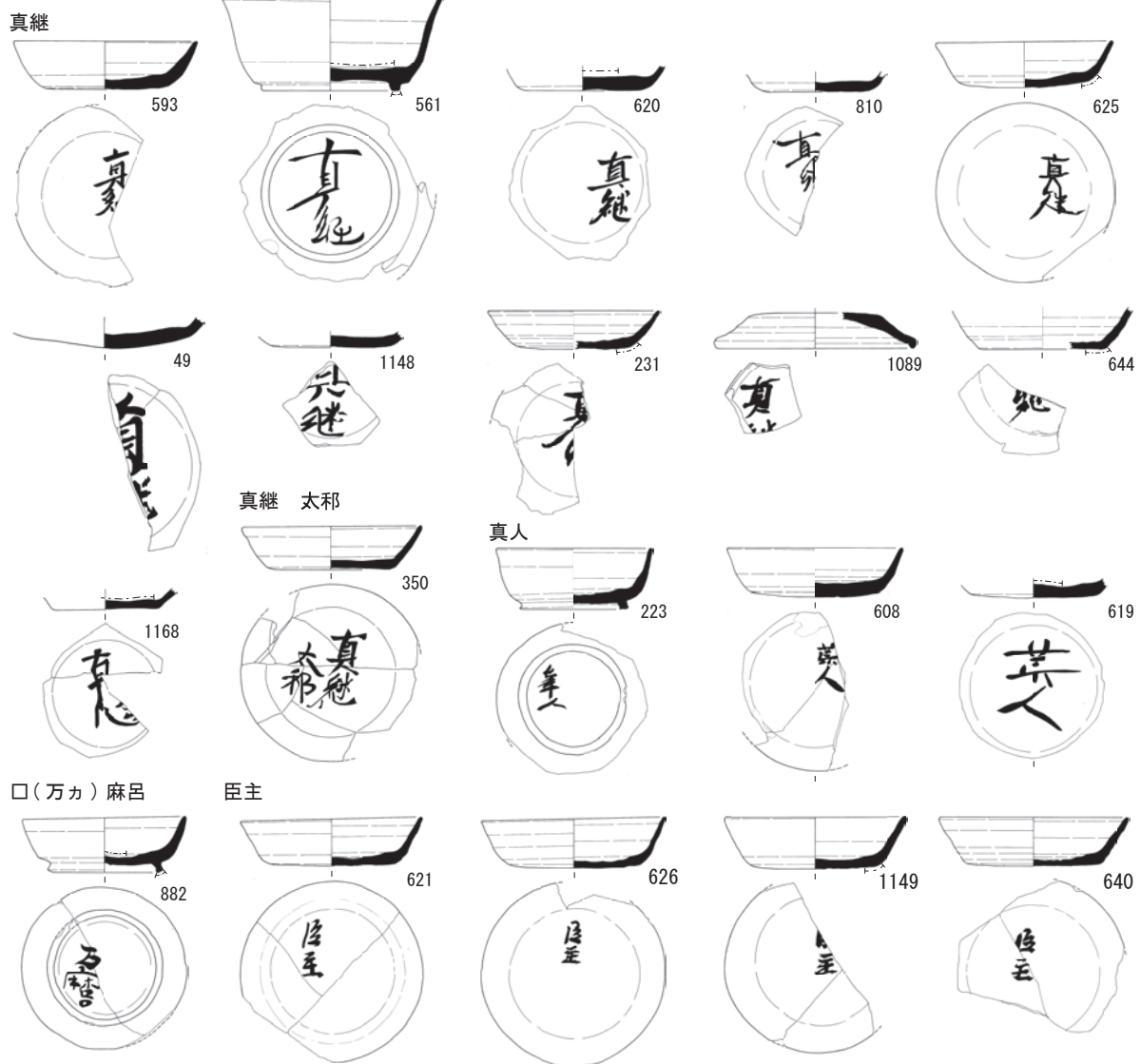
		計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2・3期	不明等
須恵器	有台坏・蓋	16	1	3	3	1	5	3	
	有台坏・身	11	3	4	1	1		2	
	無台坏	2				1	1		
	小坏	0							
	無台盤	0							
	有台皿	2						2	
	無台皿	4						4	
	有台碗	0							
計		35 (11.4%)	7 (20.0%)	4 (11.4%)	3 (8.6%)	6 (17.1%)	11 (31.5%)	0 (0%)	

人名的文字に分類した文字(第198・199図)は、「真継」21点が圧倒的に多く、他に「□(万カ)麻呂」1点、「真人」3点、「臣主」4点、「□(主カ)」3点、「太利」1点、「□(公カ)」1点が確認できる。「真継」は、長岡京左京第203次調査出土木簡例⁽²⁶⁾から人名に分類した。Ⅳ1期～Ⅵ1期まで県調査区において定量的に長期間出土する状況から、集団を象徴する「識別的文字」⁽²⁷⁾を基本に、ある種の吉祥句的文字まで昇華した可能性を考慮すべきと考えられる。「□(万カ)麻呂」と類する「麻呂」を付す墨書は、これまでの調査で「百万呂」「碧万呂」

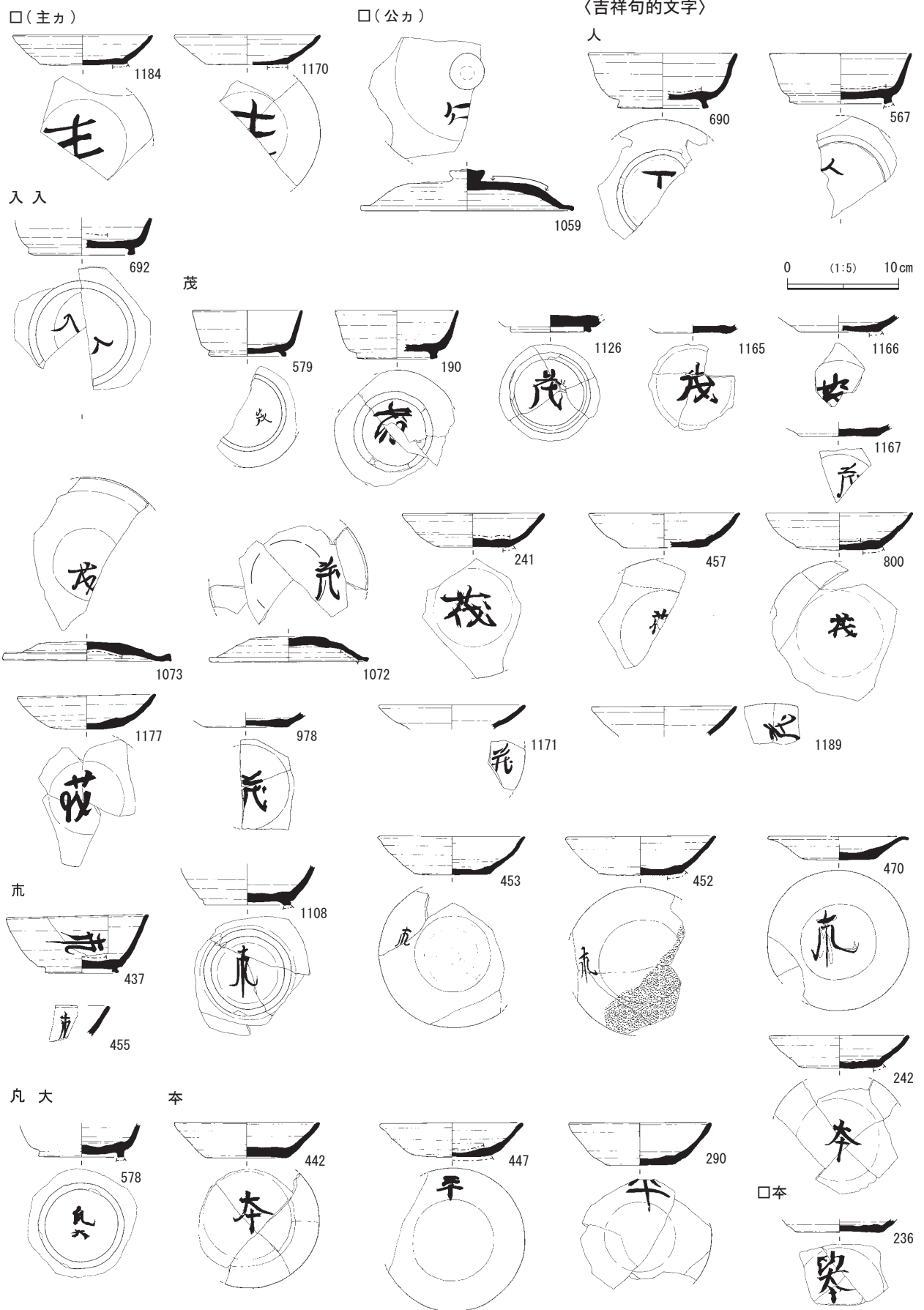
〈施設名の文字〉



〈人名の文字〉

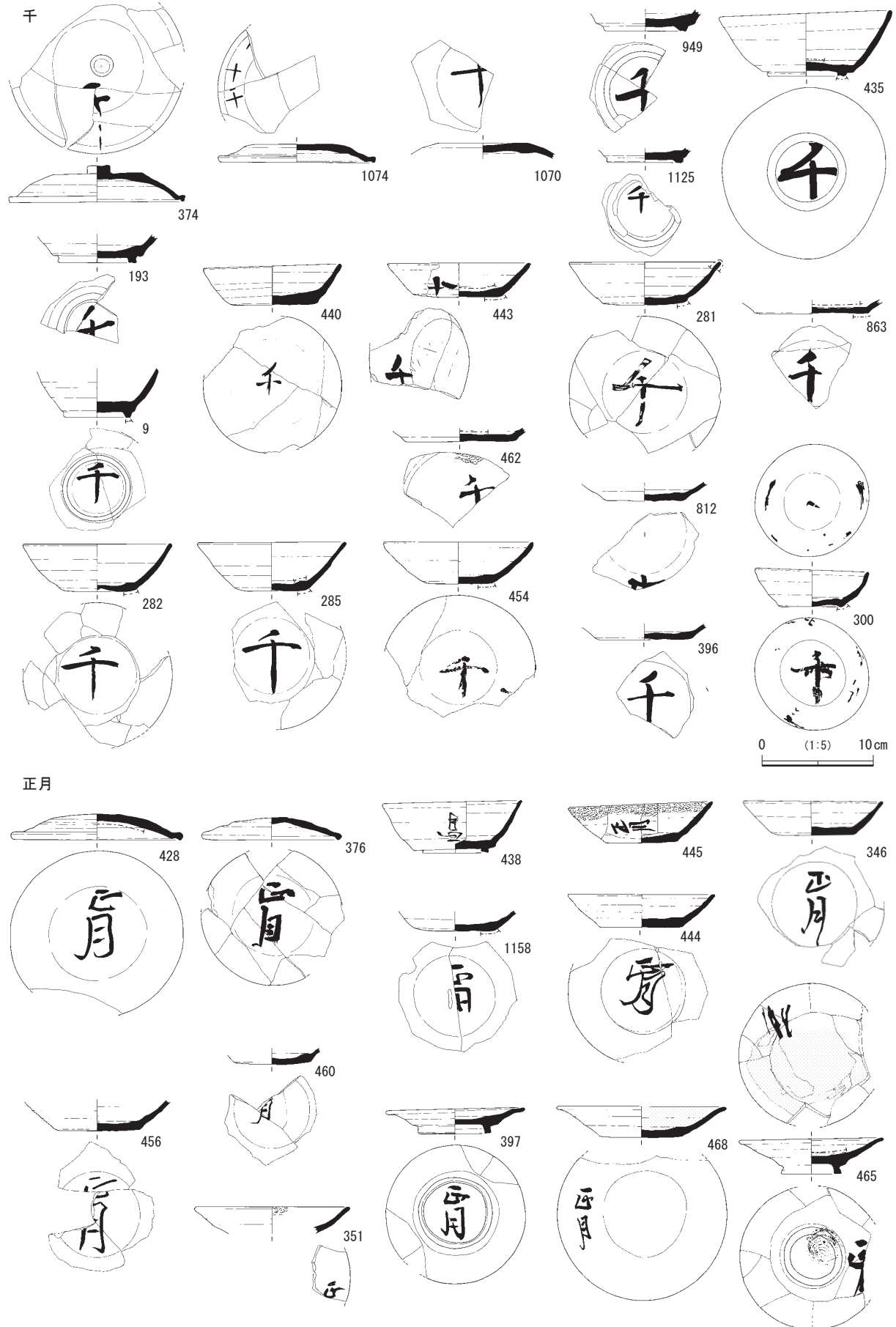


第198図 第5次調査出土の主な墨書土器集成図1 (S=1/5)



第199図 第5次調査出土の主な墨書土器集成図2 (S=1/5)

〈吉祥句の文字〉



第200図 第5次調査出土の主な墨書土器集成図3 (S=1/5)

「世人麻呂」「女麻呂」等が出土している。「真人」はIV₂期に、「臣主」はVI₂期に、それぞれ限定的に出土する。VI₁期の「太利」は、「加賀郡勝示札」や1号木簡にみえる氏族名「丈部」を想起させる字体を呈する。「□(公カ)」と判読した1059は、692と同様に「人」「人」の可能性を残す他、不明に区分した第201図637も「公」とも読める。

吉祥句の文字に分類した文字(第199・200図)は、「人」、「茂」、「凡」、「尢」、「千」、「正月」、「本」等がある。文字内容では、「茂」が18点、「千」が25点、「正月」が13点と目立つ存在である。時期別にみれば、IV期が6点、V期が7点、VI₁期が23点、VI₂期が33点、VI₃期が3点と推移し、VI₁期・VI₂期に集中する傾向を示す。「茂」は、IV₁期～VI₂期までの長期間、定量的に県・町調査区各所で確認できる文字であり、「真継」に近い位置付けが可能であろう。字体は、かなり崩した字体を基本とし、1072・1167のように縦長に書く場合も存在する。他の吉祥句では、「人」、「凡」がIV期に、「尢」、「千」、「正月」、「本」がV～VI₂期と、出土する時期が比較的限定される。また、第438図300の須恵器小坏底部外面に記された「千」は、文字周辺および内面に規則的に点状の墨書を配し、それらを組み合わせると一つの意味を持たせ、何らかの祭祀に用いたと考えられる。類似例は、第65図454や、「+」と組み合わせる第103図1074が確認できる。また、第199図692の「入」「入」は「人」を反転した字体と解釈し、第200図438の「正月」は逆さ文字に書くことで意味を持たせたと考える。記号的文字に分類した文字(第201図)は、「□(三カ)」1点、「ノ」1点、「+」2点、「卍」1点があり、V期以降に確認できる。その他に分類した文字は、漆書の「上」、「山口(替カ)」、「□(左カ)」等がある。「□(左カ)」は、「庄」に近い字体を呈する。

転用硯 第5次調査では、石製・陶製の硯は出土しないものの、磨耗や墨付着等から須恵器を転用した硯を35点確認した。遺構別で見れば、SD5061が11点(31.4%)と目立つ一方、道路遺構が3点(8.6%)、大溝が5点(14.3%)と、出土遺物量に比して相対的に少ない印象を受ける(第73表)。器種別では、坏蓋16点(倒位で内面を硯面)、有台坏11点(倒位で台部内を硯面)を主に選択しており、他に内面を硯面とする無台坏(45・384)や、内面または外面(倒位で台部内を硯面)とする有台皿2点(301・465)、内面を硯面とする無台皿4点(398・468・992・992)が確認できる。時期的推移をみれば、II₃期の有台坏775を最古に、有台坏蓋・身の転用が始まり、IV₁期以降も継続、V期に無台坏が、VI₂期に有台皿、無台皿が定量加わる推移が復元できる。

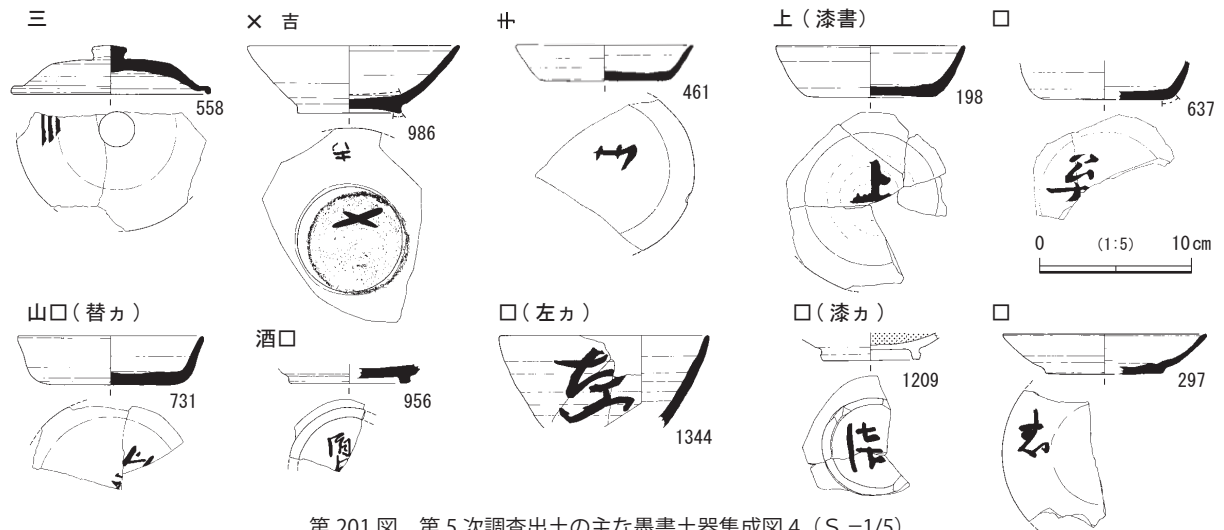
使用痕をもつ土器等 土器の使用痕跡には、出土状況、磨耗具合、割れの状況、付着物等があり、生産段階に意図した使用(素材・器形)とは異なる使用(転用)を経た土器も少なからず存在する⁽²⁸⁾。第5次調査出土遺物については、個々に観察した使用痕跡を第4章の図版、観察表に記載しており、うち転用硯は上記のとおりである。以下では、個別事例とはなるが転用硯以外の異なる使用例を示す。

須恵器坏類は、漆容器、灯明皿、煮沸容器への転用が確認できる。漆の付着から小分け容器に転用したと考えられる個体は、無台坏275・639・1111・1318、有台坏331・1111があげられ、IV₁期～VI₂期に散発的に確認できる。口縁部のタール状付着物から灯明容器に転用した個体は、無台坏70・71・237・238・293・446・642・730、有台坏114・192、ロクロ土師器皿746があり、IV₂(新)期以降に確認できる。煮沸容器への転用は、器面の変色・軟質化や水平な煤・黒褐色系のヨゴレ付着等の被熱痕から判断できる。確認した個体は、無台坏に限られ、280・286・288・296・394・445・448・640があげられる。また、須恵器長頸瓶では、祭祀等の目的で底部を穿孔した658や、煮沸容器に転用した177が確認できる。なお、道路遺構の路面整地土から出土した須恵器貯蔵具を中心とした土器片は、破片間の接合が多く、道路基盤を安定させる目的で、道路改良材として意図的に破碎したものと理解できる。

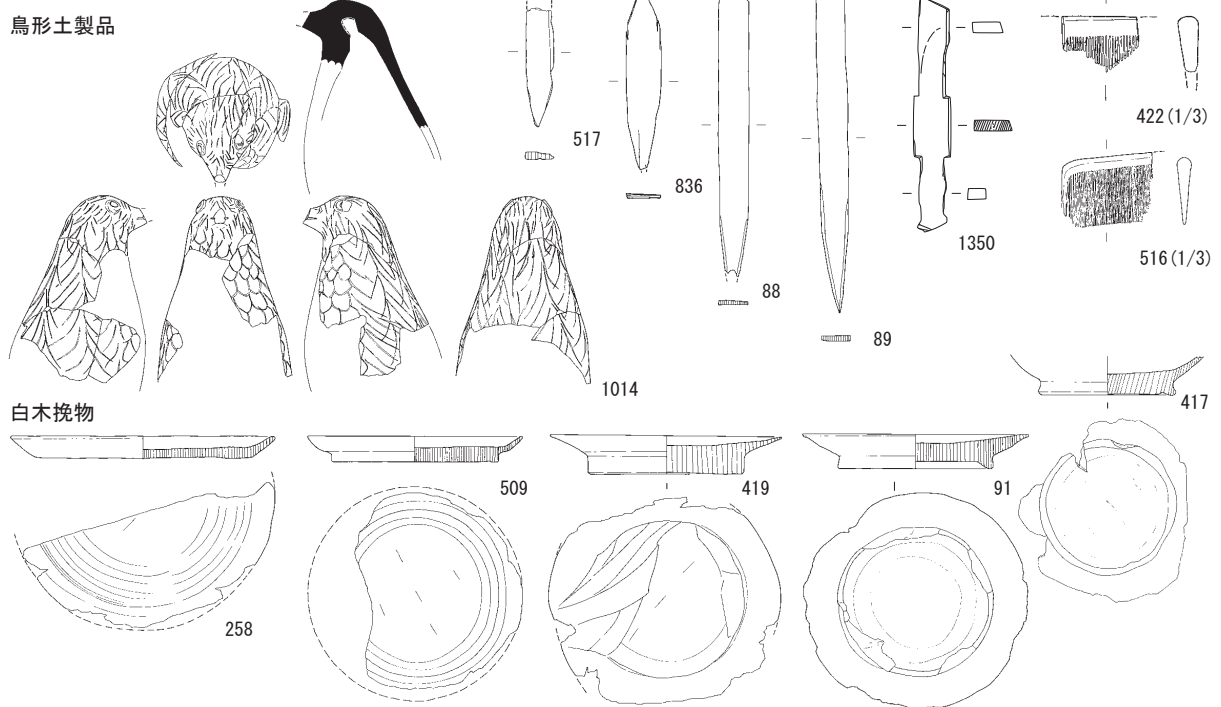
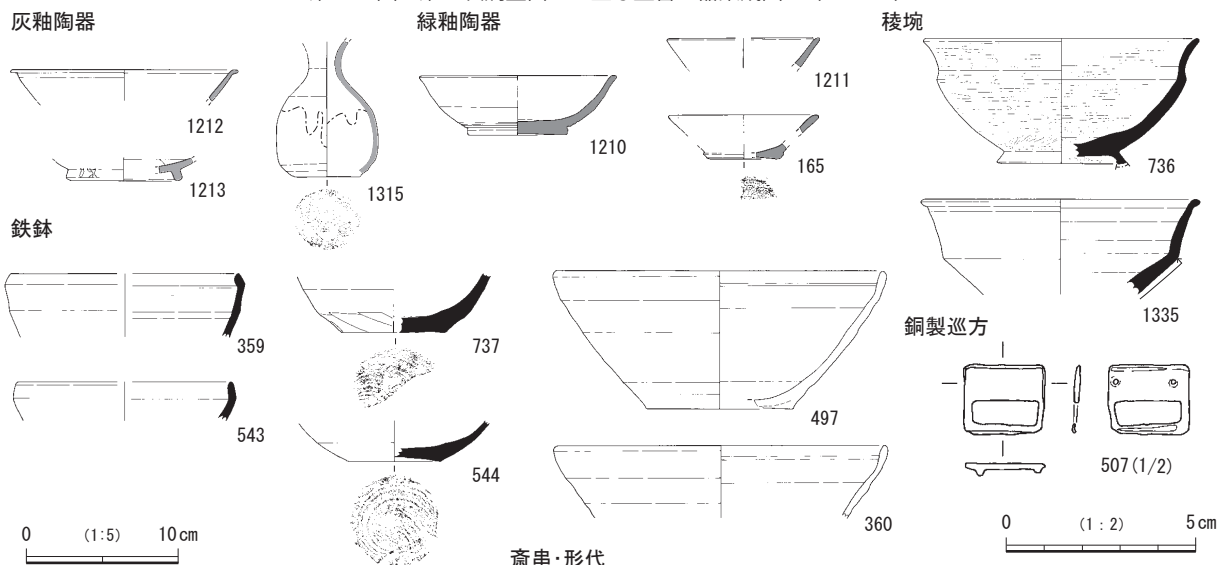
施釉陶器、仏器、帯金具等 施釉陶器は、灰釉陶器3点、緑釉陶器3点を図化し、道路遺構出土の165以外は遺物包含層等から出土した(第202図、第74表)。灰釉陶器は、有台皿1213がK-14段階に位置付けられる他、表面採取品である被熱した瓶1315を大原2号窯式並行としたが、近代以降の可能性も残す。同時期の官衛的色彩をもつ他遺跡に比して、量的に少ない点が本遺跡の特徴ともいえる。

仏器は、稜塊2点、鉄鉢5点を図化した(第202図、第74表)。稜塊2点(736・1355)は、IV・V期に位置付け

第2節 第5次調査上層遺物について
 〈記号的文字〉



第201図 第5次調査出土の主な墨書土器集成図4 (S=1/5)



第202図 第5次調査出土の特徴的な遺物集成図 (S=1/2・1/3・1/5)

第74表 第5次調査上層出土施釉陶器等一覧表

○施釉陶器

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	実測番号
106	1213	B区	K-21	包含層	灰釉陶器	有台皿	D505
106	1212	B区	M-20	包含層	灰釉陶器	有台埴	D619
110	1315	B区	M-20	表土	灰釉陶器	瓶	D604
106	1210	B区	L-18	包含層	緑釉陶器	有台埴	D1053
106	1211	B区	M-20	包含層	緑釉陶器	埴	D608
48	165	C区	N-21	路面整地土	緑釉陶器	埴か	D776

○仏器

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	実測番号
61	359	B区	J-20	大溝南肩部第1層	須恵器	鉄鉢	D105
70	543	B区	K-20	大溝第4層	須恵器	鉄鉢	D131
70	544	B区	J-K-20	大溝肩部第1、4層	須恵器	鉄鉢	D103
78	737	B区	L-18	SD5061第2層	須恵器	鉄鉢	D267
100	1010	C区	O-23	包含層	須恵器	鉢か	D982
78	736	B区	L-M-18	SD5061第1・2層、包含層	須恵器	埴埴	D284
113	1335	D-1区	K-15	包含層	須恵器	埴埴	D1040
66	497	B区	K-20	大溝第2・3層	ロクロ土師器	鉄鉢	D069
61	360	B区	J-21	大溝第1層	ロクロ土師器	鉄鉢	D198

○製埴土器等

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	器種	実測番号
100	1014	C区	N-22、O-23	包含層	須恵器	鳥形土器	墨102
80	773	B区	M-19	SD5061第2層底	製埴土器	-	D361
80	774	B区	M-19	SD5061	製埴土器	-	D339

○金属製品等

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	器種	実測番号
68	507	B区	K-20	大溝第3層	銅製巡方	金-001
101	1038	C区	N-22	包含層	銅銭	金-002
41	102	C区	P-22	P5056	埴型滓	金-003

○斎串等

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	備考	実測番号
39	88	B区	M-19	SK5016第3層	斎串	スギ	木-026
39	89	B区	M-19	SK5016第3層	斎串	スギ	木-027
88	836	C区	Q-22	SD5001(旧)木製品群下・底細砂	斎串	スギ	木-025
68	517	B区	K-20	大溝第3層	斎串か	スギか	木-081
88	1350	C区	Q-22	SD5001(旧)底・細砂	刀形木製品か	スギか	R木-001

○木簡

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	備考	実測番号
88	833	C区	Q-22	SD5001(旧)底・細砂	木簡	習書「文書文書文書生書」(2号木簡)。スギ	木簡3
88	834	C区	Q-22	SD5001(旧)底・細砂	木簡	人物画2体(3号木簡)。上下に穿孔あり。スギ	木簡5
88	835	C区	Q-22	大溝第3層	木簡	付札「<口(免)口黒口口×」(4号木簡)。スギ	木簡4

○挽物等

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	備考	実測番号
55	258	C区	P-21	道路遺構(SD5017第3層底)	白木盤	口径17.4cm。ケヤキ	木-014
55	259	C区	N-21	道路遺構(D5017第3層砂層)	白木盤	口径17.0cm。ケヤキ	木-036
55	260	C区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	白木盤	口径16.0cm。ケヤキ	木-011
59	321	B区	M-21	道路遺構(SD5017第3層)	白木盤	口径約17cm。ケヤキ	木-035
39	91	B区	M-19	SK5016第3層	白木皿	口径14.8cm。ケヤキ	木-004
64	418	B区	K-20	大溝第2層	白木皿	口径13.6cm	木-216
64	419	B区	K-20	大溝第2・3層	白木皿	口径16.3cm。ケヤキ	木-037
68	509	B区	K-20	大溝第3層底	白木皿	口径16.2cm。ケヤキ	木-009
64	417	B区	K-20	大溝第2層	白木椀	底径9.0cm。ケヤキ	木-008
64	421	B区	K-20	大溝第2層	箸状木製品	スギ	木-093
68	514	B区	K-20	大溝第3層	箸状木製品	スギ	木-092

○曲物容器

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	備考	実測番号
59	322	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	円形板	口径18.4cm。スギ	木-073
59	323	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	円形板	口径15.0cm。スギ	木-005
64	420	B区	K-20	大溝第2層	円形曲物底版	口径15.9cm。スギ	木-217
68	510	B区	L-20	大溝第3層	円形板	口径15.1cm。スギ	木-013
68	511	B区	L-20	大溝第3層	円形板	口径11.3cm。スギ	木-006
68	512	B区	K-20	大溝第3層	円形曲物底版	口径20.0cm。ヒノキ科	木-091
68	513	B区	L-20	大溝第3層	円形曲物	底径16.0cm。スギ	木-028
82	785	B区	M-18	SD5061第1層	円形曲物底版	口径約12.1cm	木-175
88	831	C区	Q-22	SD5001(新)底	円形曲物底版	口径約18.6cm。スギ	木-107
87	830	C区	Q-22	SD5001(旧)木器群W-20	楕円形曲物底版	長径約57.8cm。スギ	木-016

○その他木製品

挿入番号	番号	区	グリッド	出土遺構	種類	備考	実測番号
59	2010	B区	N-21	道路遺構(SD5017第3層)	付札状木製品	下面で切断	R木-002
64	2012	B区	K-20	大溝第2層底	付札状木製品	下面で切断	R木-004
64	422	B区	K-20	大溝第2層	横櫛	イスノキ	木-023
68	516	B区	J-20	大溝第3層	横櫛	イスノキ	木-024
64	423	B区	K-20	大溝第2層	木錘	ケンボナン属	木-079
87	825	C区	Q-22	SD5001(新)中層腐植土	たも状木製品	ヒノキ科	木特-01
87	827	C区	Q-22	SD5001(新)中層腐植土	編目目盛板	スギ	木-046

られ、高松・押水窯跡群産の胎土特性を示す。うち、736は器面に丁寧なミガキ調整を施す。鉄鉢は、須恵器製4点、ロクロ土師器製1点(360・497は同一個体と推定)が出土、小片での個体が目立つ。737がSD5061から、359・497(・360)・543・544が大溝から出土した。銅製巡方表金具507は、VI₃期の大溝第3層の底付近から、ひしゃげた状態で出土、使用後に廃棄したものと考えられる。鳥形土製品1014は、中空で、羽毛を線刻で丁

寧に表現する。同一個体と考えられる胴部片が、県バイパス第1次調査(報告書I包含層等実測図10-3189)、河北縦断道路調査区E区遺物包含層等から出土している(河北縦断道路報告書第138図504)。時期特定は難しいが、V期前後となるか。

木製祭祀具は、斎串、刀形木製品が出土した。斎串は、SK5016から2点(88・89)、SD5001(旧)から1点(836)の他、大溝第3層出土の517も可能性をもつ。SK5016出土の斎串は、白木挽物皿87・91と組み合わせた井戸廃絶後(V期)の小規模な祭祀と考える。SD5001(旧)出土の刀形木製品1350は完形で、底付近の同一砂層から斎串と共伴した。大溝出土の横櫛

422・423は、イヌノキを材とし、同一個体の可能性が高い。

木製食器 加茂遺跡の一連の調査では、挽物食器、曲物容器も目立つ存在である。第5次調査では、白木の盤4点、皿4点、碗1点が出土、分析した個体はすべてヒノキを横木取りする。盤は、体部が大きく外傾する器形を呈し、V期以降に位置付けられる。口径は、道路遺構SD5017第3層出土の4点(258～260、321)

第75表 第5次調査上層出土遺物の主な接合関係一覧表

挿図番号	番号	種類	器種	区	グリッド	出土遺構	実測番号
23	9	須恵器	有台坏	B区	J-21、K-20	SB508(SK5010)、大溝第1層	墨116
23	10	須恵器	無台坏	B区	J-21		D494
23	11	ロクロ土師器	小壺	B区	J・K-21		D423
38	85	須恵器	甕	B区	L-18・19、M-19	SK5016第1～3層、SD5061第1層等	D334
41	94	須恵器	長頸瓶	C区	N-21～23、O-22、P-22・23	P5035・5122、包含層	D937
41	99	須恵器	甕	C区	L-23、M-22・23、N-21～23	P5061・63・64・66、包含層	D916
42	109	須恵器	短頸壺	B区	L-20・21、M-19～21、N-20	P5085・5210、包含層	D660
42	118	須恵器	短頸壺	B区	L-19・20、M-20・21、N-19・21、O-20、P-22・23	SA502(P5121)、SD5017(西側溝)最下層、SD5096、包含層	D683
42	120	須恵器	短頸壺	B区	L-21、M-19～21、N-20・21	SA502(P5121)、SD5017(西側溝)、包含層	D654
42	123	須恵器	坏蓋	B区	K・M-20、L-19	P5140、SK5007、包含層	D431
42	124	須恵器	双耳瓶	B区	J-20・21、K-21	P5157・60、大溝第1層、包含層	D515
42	134	須恵器	無台坏	B区	J・K-21	P5203、SK5014、包含層	D452
43	142	須恵器	甕	B区	L-19～21、M-19・20、N-20	P5240、SD5059、包含層	D623
43	145	須恵器	有台坏	B区	M-19	P5295、SD5061第1層	D321
48	171	須恵器	広口壺	C区	N・O-21～23	道路遺構路面整地土、SD5016(東側溝)、SK5001、南端鞍部、包含層	D871
48	172	須恵器	広口壺	B・C区	L-20、M-19～21、N-21	道路遺構路面整地土、SD5017(西側溝)第1・3層、大溝第1層、包含層	D037
53	219	須恵器	甕	C区	N・O-21	SD5017(西側溝)第2層、SD5018・19	D753
54	250	須恵器	狭口甕	C区	N・O-21、N-22・23	SD5017(西側溝)第2層、第3層底、SD5018底、南端鞍部、包含層	D814
56	265	須恵器	双耳瓶	B区	L・M-19～21、N-20・21	SD5017(西側溝)、P5281、包含層	D462
56	266	須恵器	甕	B区	K-20、N-21	SD5017(西側溝)第1層、大溝北セク第3層	D064
58	316	須恵器	甕	B・C区	M-21、Q-22	SD5017(西側溝)第1・3層、SD5001(新)底、包含層	D060
58	317	須恵器	甕	B区	K-20、L-18・19・21、M-19～21、N-21	SD5017(西側溝)第3層、SD5059、包含層	D578
58	318	須恵器	甕	B・C区	K-19・20、L・M・N-21、M-18、M・N-20	SD5017(西側溝)第1・3層、大溝第3・4層、SD5018、包含層	D062
61	364	須恵器	双耳瓶	B・C区	K-20、L-19・20・21、M-20・21、N-19・21	大溝北肩部第1層、SD5016(東側溝)第2層、SK5021、包含層	D092
63	409	須恵器	甕	B区	J・K-20・21、L-19、M-20	大溝第1・2層、SD5047、P5191、包含層	D076
67	504	須恵器	甕	B区、6次I区	K-20、L-19・21、M-20・21、N-21	大溝第2・3層甕集中、SD5017(西側溝)第3層、包含層、6次SD01	D063
67	505	須恵器	甕	B・C区	J・K-20・21、O-21	大溝第1層、第2・3層甕集中、道路遺構路面整地土、包含層	D139
70	545	須恵器	広口壺	B区	J-20・21、K-19・20・21、L-19・20	大溝第1・2・4層、P5155、P5171、包含層	D132
76	661	須恵器	甕	B区	K～M-19、M-20、L～N-21、N-22	SD5061第1層、大溝第3・4層、P5088、包含層	D582
76	662	須恵器	甕	B区	K-19・20、L・M-19	SD5061第1層、大溝第1層、包含層	D077
78	749	須恵器	長頸瓶	B区・D-1区上層	K-16・18、L-18・19	SD5061第1・2層、包含層、D-1区SD5418	D301
79	754	須恵器	短頸壺	B区	K-19、L-18・19・21	SD5061第1・2層、大溝第3層、包含層	D391
81	782	須恵器	甕	B・C区	L～N-18・19、M-21、O-20・21	SD5061第1～3層、SD5017(西側溝)褐色土、道路遺構路面整地土、包含層	D048

が16～17cmを、大溝第2層出土の418が13.6cmを、それぞれ測る。皿は、SK5016から2点(87・91)、大溝から2点(419・509)が出土、口径は15cm前後～16cm強に分布する。台部の仕上げ状況から、平高台のタイプ(419)と有台のタイプ(91)に分かれる。大溝第2層出土の壺(417)は、平高台を呈する。また、円形曲物が道路遺構、大溝等から9点が出土、口径は11cm強(511)、14～16cm台(323・420・510・785)、18cm台(322・831)、20cm(512)に分布する。箸は、大溝から2点(421・514)が出土した。

土錘 加茂遺跡の一連の調査では、漁労に適した河北潟に面することから、土錘の出土も目立つ。第5次調査では、時期特定が難しい遺物包含層を中心に大小様々な重さの摩滅した土錘46点が出土、うち1294・1295は陶製となる。残存重量でいえば、10g未満が8点(最軽量の1317が1.9g)、10～20gが4点、30g弱が2点、40～50g未満が5点、50～60g未満が7点、62～67gが10点、71～73gが5点、80g前後が3点、100g弱が2点(681・1271)に分布する。

土器埋納等 柱穴抜き取り後の土器埋納は、SB503柱穴P5276に須恵器無台坏(第23図2)が、P5118にロクロ土師器有台坏(第42図117)が、P5264に倒位の須恵器無台坏(同図141)が、P5328にロクロ土師器有台皿、無台坏(第43図149・150)が確認できる。遺物包含層出土の銅銭(第101図1038)は3枚が固着しており、本来は埋納されていたと考えられる。時期は不明である。

また、須恵器貯蔵具を中心に複数の遺構間の接合が目立ち、遺構間の主な接合関係を第75表に示した。須恵器広口壺172、双耳瓶364、甕266・318・364・504・505P5061・63・64・66は、道路遺構と大溝の間での破片接合であり、両遺構の密接な関係を示すものといえる。なお、大溝第3層出土の内面格子文あて具を残す大甕504の同一個体と考えられる破片が、第4次調査道路遺構付近から出土する(県報告書I第134図0904)。

第3節 第5次調査上層遺構の変遷について (第203・204図、第76表)

加茂遺跡は、古代に限っても旧舟橋川両岸の東西約500m、南北約400mの広大な範囲に広がる。そして、集落域(末端官衙施設を含む)、耕作地、工房等生産施設、さらに小規模な寺院や古代北陸道能登支路、南北大溝、空閑地等の多様な要素をもつ遺構群が、盛衰しながら約400年間にわたり展開する。これらの変遷と画期については、津幡北バイパスに係る県第1～4次調査報告書、津幡北バイパス北側を主体とした津幡町教育委員会の第1～21次範囲確認調査報告書、また河北縦断道路に係る県調査報告書で、それぞれ提示されている⁽²⁹⁾。これらの変遷案は、大枠で共通するが、当然のことながら、それぞれの調査地点の遺構分布や性格付け、出土遺物の内容等の差異から、細部の評価に異同をもつ。以下では、隣接調査地を含む津幡北バイパスに係る第6～11次調査の報告が未完であることから、第5次調査の上層遺構(古代面)を7小期に分けた変遷試案と若干の見解を示すにとどめたい。第5次調査区は、V・VI期(9世紀前葉～10世紀前葉末頃)に盛期をもち、転換点として、定量の遺物が出土し始めるⅡ₃期(8世紀初頭)、集落構造が大きく変わるV₁期(9世紀前葉)、集落活動が終焉を迎えるVI₃期末頃(10世紀前葉末頃)に設定可能である。

5次0小期 I～Ⅱ₂期(6世紀末～7世紀末)を想定する。集落活動に伴う遺構は未検出で、第1節で述べたように少量の遺物のみが出土する。調査北東側100～200mに位置する河北縦断道路に係る調査(第1図)では、丘陵斜面に7世紀初頭～中頃に操業した須恵器窯跡2基(加茂1・2号窯)、丘陵裾に基幹溝(SD1-8)、工房と推される堅穴建物(SI1)、掘立柱建物建物(SB1～3)、焼成須恵器の廃棄土坑(SK1)等を含む施設群を検出、在地の有力首長層が渡来系工人を招聘して、短期間、須恵器を生産したと考えられている。第5次調査区出土遺物は、旧舟橋川北側の活動域から2次的に移動してきたものといえる。また、出土遺物に加茂1・2号窯焼成品以外の須恵器を含むことから、旧舟橋川北側には「工人集落」だけでなく、その母体となる集落が営まれた可能性が高い。続く、Ⅱ₃期(8世紀初頭)は、古代北陸道能登支路が敷設されたとの見解

第76表 第5次調査上層主要遺構推移表

区分	遺構名	II _{2・3}	III	IV ₁	IV ₂ (古)	IV ₂ (新)	V ₁	V ₂	VI ₁	VI ₂	VI ₃	VII ₁	VII ₂ ~
古代 道路 遺構	路面		■	■						路面改修	流出		
	東側溝 (SD5016)		■	■			縮小か			縮小か	埋没		
	西側溝 (SD5017)		■	■								埋没	
基幹 水路	B区SD5061		?				埋立						
	B区大溝 南側流路									■	機能/埋没		
	B区大溝 北側流路				?	?					機能/埋没		
河道	C区SD5001 (旧)								■			■	埋没
	C区SD5001 (新)												埋没
建物	C区SI501				■								
	B区SB501										■		
	B区SB502										■		
	B区SB503							■					
	B区SB504							■					
	B区SB505								■				
	B区SB506									■			
	B区SB507								■				
	B区SB508									■			
	B区SB509								■				
	C区SB510									■			
	B区SB511									■			
	井戸	B区SK(SE)5016					■	■	埋没				
溝他	C区南端鞍部											■	
	B区SD5023				■	■							
	B区SD5027										■		
	B区SD5048・50									■	■		
耕作他	B区耕作溝 (大溝北側)											■	■
	B区耕作溝 (大溝南側)											■	■

もあるが、第5次調査では敷設年代を直接示す資料は得られていない。また、津幡北バイパスに係る第2・3次調査区大溝(古)から転用硯を含むII₃期(8世紀初頭)の土器が多出することから、大溝(古)は遅くともII₃期に機能していたと考えられる。大溝(古)に接続するSD5061も文書事務を反映する転用硯(第81図775)の出土から機能していた可能性を残す。なお、大溝(古)は、III期前後に完全に埋没した痕跡をもち、今後の課題のひとつといえる。

5次1小期 IV₁期~IV₂(新)期(8世紀中頃~9世紀初頭)は、道路遺構、竪穴建物(SI5001)、大溝の一部を構成する基幹水路SD5061が属し、調査区は掘立柱建物等が分布しない空閑地の様相を呈する。道路遺構(旧)は、側溝心々距離で810cmの規模と推定でき、出土遺物はIV₂期を上限とする。道路遺構西側のSD5023は、直交する位置関係から当小期の区画溝であった可能性が高い。また、道路遺構に近接するカマド付竪穴建物SI5001(平面積約10.7㎡)は、道路遺構と主軸方位がほぼ一致することから、管理や旧舟橋川の渡河に係る小施設と考えたい。竪穴廃絶後の堆積層出土遺物(第32図)から、8世紀後葉以前に機能したと考えられる。

基幹水路SD5061は、南側で第8次調査A区第I面SD2007を経て、第1~3次調査区大溝に流下する。規模は上幅で2.3~2.8mを測り、西岸の一部で杭・板を用いた護岸が確認できる。SD5061出土の当小期に属する遺物は、墨書土器「大里」、「真継」、「□(万カ)麻呂」、「真人」、「臣主」、「人」、「茂」、「凡」、「山口(替カ)」、漆書土器「上」や転用硯や漆小分け容器があり、IV₂期に仏事等に伴う稜塊、鉄鉢、須恵器を転用した灯明皿

が加わる。これらは、SD5061西側の建物域で使用された可能性が高い。なお、第203図のとおり大溝北側流路の位置に、その原型となる水路の存在が指摘されており⁽³⁰⁾、南側掘立柱建物群の北限ラインがほぼ揃うことから首肯できる。

5次2小期 V₁期～V₂期(9世紀前葉～中頃)を想定する。主な遺構は、道路遺構(第203図は古段階を表現)、大溝北側流路、掘立柱建物SB503・504、井戸SK5016の他、SK5009が属する。基幹水路の付け替えや建物の展開、井戸といった新たな土地利用が始まる転換期といえ、墨書土器の施設名的文字、吉祥句的文字の内容にも変化がみられる。道路遺構については、9世紀前後に東側溝を掘り直して幅員を縮小したとする見解と、次小期に幅員を縮小したとする見解⁽³¹⁾があり、前者の見解では、道路遺構の改修を契機とする旧舟橋川南岸全体の土地利用の再編期と評価する。道路遺構西側の基幹水路SD5061は強粘質土で埋め立てられ、道路遺構西側溝(SD5017)に接続する新たな水路(大溝北側流路)に付け替えられる。大溝北側流路は、道路遺構西側溝(SD5017)を起点とし、第6次I区SD01および第8次A区第I面SD2057につながり、VI₃期まで道路側溝の排水溝を兼ねた基幹水路として維持される。大溝北側流路の開削当初の規模は判然としないものの、後述する南側流路との位置関係から、SD5061調査検出時の上幅(2.3～2.8m)より狭いと考えられる。

第5次調査区の新たな土地利用として、V₁期にSK5016、V₂期にSB503・504が確認できる。SK5016は、短期間の使用後に板組を抜き取った井戸である。V₁期以降、陥没坑として開口状態にあり、「大寺」(V₁期)、「真継」(V₂期)の墨書が出土する他、木製皿や斎串を用いた小規模な祭祀を執り行う。「大寺」墨書は、調査区以外の周辺地に寺堂の存在を示すものであり、隣接する能瀬南遺跡出土の「□□(部カ)寺」墨書(II₃期～III期)や、津幡町教委第5次調査北大溝出土の「鴨寺」「馬部寺」墨書(V・VI期)との関連で注目できる。小規模な掘立柱建物2棟は、SK5016東側に北側柱筋をそろえて建てられる。建物主軸方位はN-15°Wを示し、SB504(3×2間、平面積17.9m²)が主屋、SB503(1×1間、同9.4m²)が副屋の関係となろうか。SB503柱穴P5276は、柱抜き取り後に須恵器無台坏(第23図2)を埋納する。

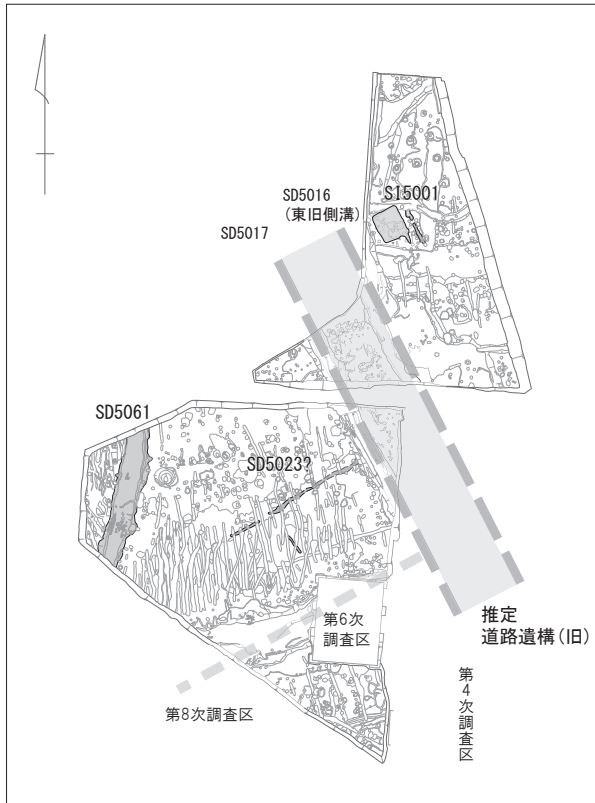
当小期に属する墨書土器は、SD5061第1層(埋め立て土)から前小期から継続する文字「□(真カ)」、「臣主」に加えて、新たに大溝出土の施設名的文字「宅」、吉祥句的文字「千」、「本」や、遺物包含層出土の「正月」が確認でき、新たな土地利用に対応した様相を呈する。なお、「加賀郡勝示札」の施行年は嘉祥2年(849)であり、当小期の末頃に古代北陸道能登支路(道路遺構)に近接して「勝示路頭」される。

5次3小期 第5次調査区は、VI₁期(9世紀後葉)に遺物出土量が急増し、盛期を迎える。前小期からの道路遺構(第203図は古段階を表現)、大溝北側流路は維持され、掘立柱建物はSB505・507・509・510・511の5棟(主軸方位N-12～15°W)に建て替えられる。SK5003～06・13・14も本小期に属する。建物は、側柱構造のSB505が1×1間(平面積8.3m²)、SB507が1×1間(同11.1m²)、SB509が2×1間(同14.0m²)と、小規模な「屋」が点在する景観を呈する。C区で検出した総柱構造のSB510は、3×2間以上、平面積37.3m²以上を測り、一連の調査で最大規模の高床倉庫となる。

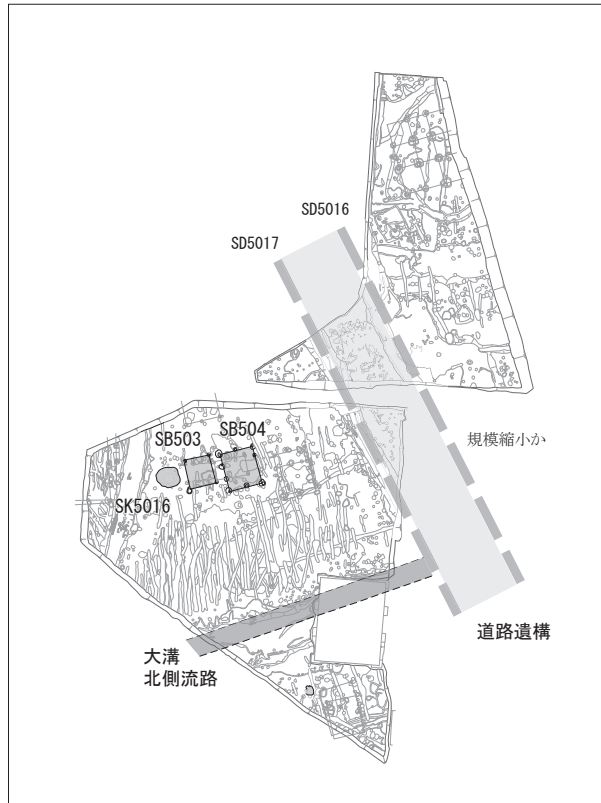
当小期に属する墨書土器は、大溝北側流路出土の施設名的文字「曹」、「室」、「西家」、「□(東カ)」、人名的文字「真継」、「太和」、吉祥句的文字「市」、「千」、「正月」、「本」や、道路遺構SD5017(西側溝)、SD5001(新)出土の「千」、遺物包含層出土の吉祥句的文字「茂」がある。点数は前小期より倍増し、人名的文字が2種に減少する一方、施設名的文字、吉祥句的文字とも多彩となる。

5次4小期 VI₂期(9世紀末～10世紀初頭)を想定し、第5次調査区は盛期を維持する最終期となる。主な遺構は、道路遺構(新)、大溝北側・南側流路、掘立柱建物SB506・508、SD5001(旧)の他、SK5008等が属し、遺物の出土量は引き続き多い。道路遺構(新)は、VI₂期の終り頃に、枝や多くの須恵器食膳具・貯蔵具片を混ぜ込んだ砂質土・砂等を突き固めて大規模な路盤改修をおこなう。この改修後の道路幅員は、両側溝の路面立ち上がり間距離で515～525cm、側溝心々距離で680～740cmを測る。ただし、東側溝(SD5016)出土遺物が

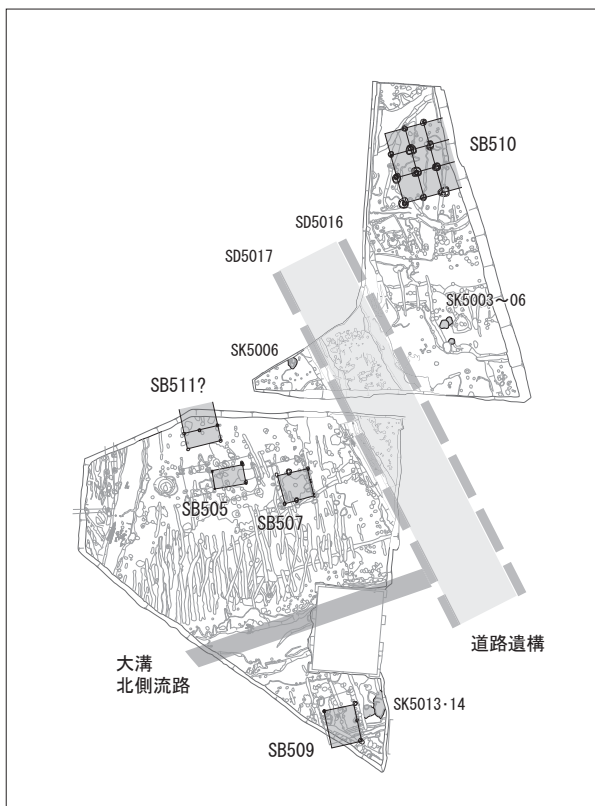
1 小期 (IV₁期~IV₂(新)期)



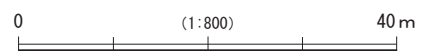
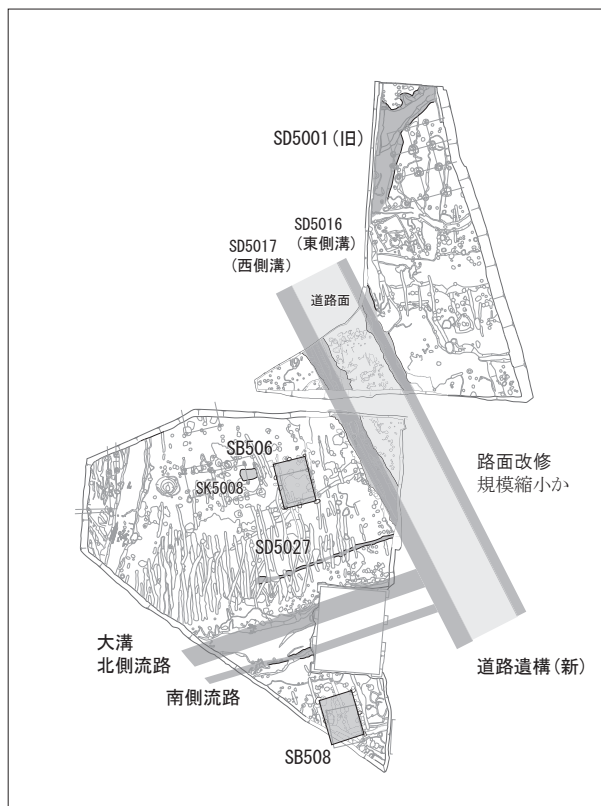
2 小期 (V₁期~V₂期)



3 小期 (VI₁期)



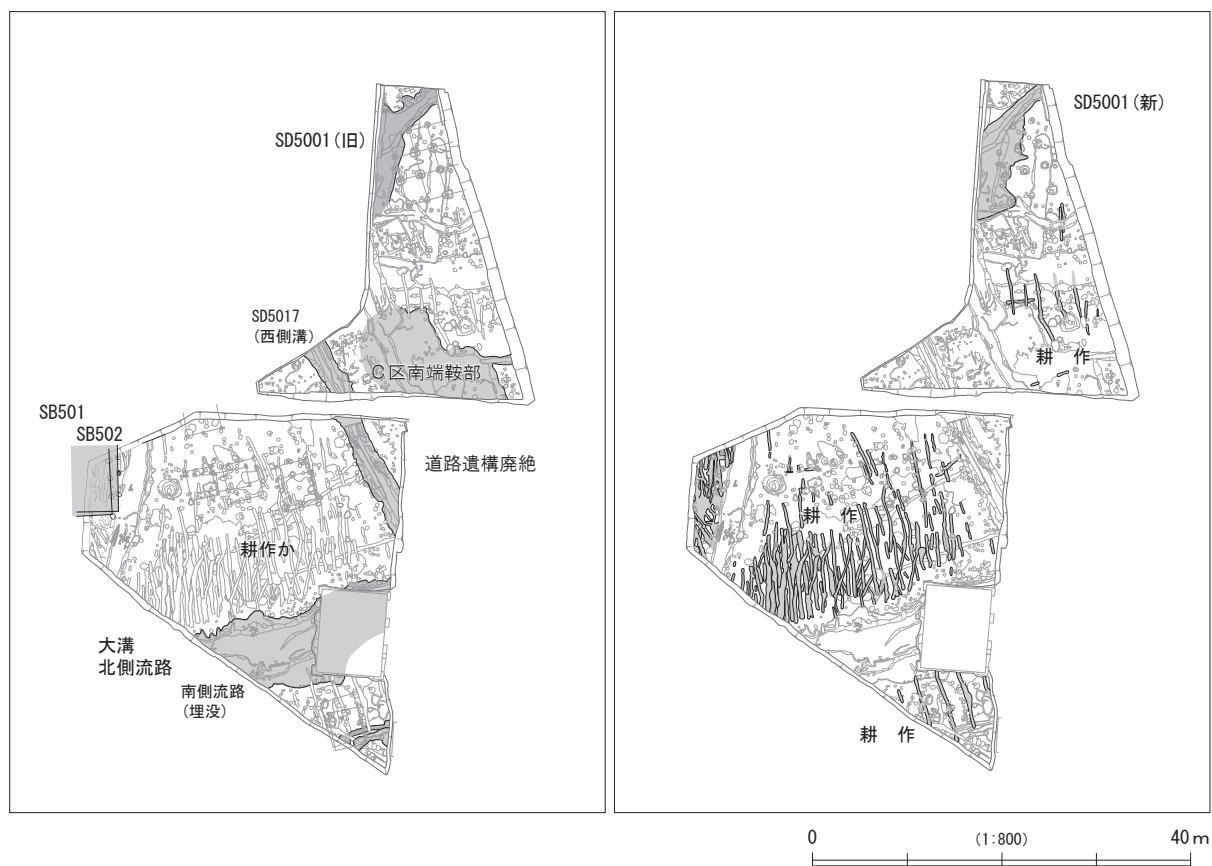
4 小期 (VI₂期)



第203図 第5次調査B・C区上層の変遷案1 (S=1/800)

5 小期 (VI₃ 期)

6 小期 (VII 期)



第204図 第5次調査B・C区上層の変遷案2 (S=1/800)

本小期を下限とすることから、官道としての道路遺構の管理は放棄され、東側溝は当小期のうちに、埋没に向かうようだ。道路遺構の路盤改修にあわせた大溝兩岸の造作として、大溝北側流路に並行する大溝南側流路やSD5027があり、次小期初め頃までの短期間存在したと考えられる。直線的で深い大溝南側流路が水路、浅いSD5027が土地区画を示す溝を、それぞれ意図したと考えられるが、第5次調査区の所見では大溝南側流路に流水痕跡を確認していない。この南側流路の開削、存続期の最終判断は、隣接する第6・8次調査の正報告まで保留したい。掘立柱建物は、大溝兩岸に比較的小規模な建物各1棟が散発的に分布する。建物規模は、SB506が3×2間(面積17.6㎡)、SB508が2×2間(同19.0㎡)で、建物主軸方位はN-14～17°Wを示す。また、調査区北端では、SD5001(古)が旧舟橋川の一流路として複雑な流路変遷を示しながら流れ始めたと考える。

当小期に属する出土遺物は、内容・数量とも最も多い。墨書土器は、主に大溝、道路遺構西側溝(SD5017)から出土する。判読できる文字は、施設名的文字「□(宅カ)」1点、人名的文字「□(主カ)」3点、記号的文字「×」1点、その他の文字「□(志または去カ)」1点と限定的であるのに対して、吉祥句的文字は「茂」8点、「尢」1点、「千」11点、「正月」10点、「本」1点と、多彩で点数も多い。施釉陶器や鉄鉢497、横櫛422・516、白木挽物食器も本小期に属すると考えられる。

5次5小期 VI₃期(10世紀前葉)を想定する。主な遺構は、道路遺構西側溝(SD5017)、大溝北側流路、SD5001(旧)、C区南端鞍部、掘立柱建物SB501・502が属する。遺物出土量は急減し、SD5001(旧)底の習書木簡(2号木簡)、人物画(3号木簡)、斎串、刀形木製品や、大溝第3層の付札木簡(4号木簡)、銅製巡方、また遺物包含層の「□(吉カ)」「×」と記された墨書土器1点(第99図986)等が確認できる。

道路遺構は、官道としての路面の維持・管理がほぼ放棄され、主に西側溝(SD5017)に向けて路面盛土が流出し始める。東側溝(SD5016)は埋没しており、最終的に路面とともにC区南端鞍部(濁黒褐色粘質土)で覆われる。

調査区北端のSD5001(古)は流路を変えながら存続するものの、南端鞍部の堆積とともに、南側から少しずつ埋没が始まるようだ。大溝北側流路は、道路遺構西側溝(SD5017)、第4次調査SX4003(大オチコミ)とつながる一つの水路として、土砂の流入・堆積と氾濫、水路肩部の補修を繰り返しながら、一定の機能を維持する。

調査区北西隅で検出したSB501・502は、桁行3間以上の、しっかりとした柱掘り方をもつ建物であり、建物主軸方位はN-1～3°Wと、確実に北を指向する。また、大溝と道路遺構西側溝(SD5017)に画された範囲には、幾重にも重複した耕作に伴う小溝群が濃密に分布する。大溝と西側溝(SD5017)と全く重複しない位置関係から、SB501・502廃絶後に、耕作地(主軸方位が北に近い小溝群か)としての利用が始まった可能性を指摘しておく。

5次6小期 VII₁期以降(10世紀中葉以降)を想定し、集落域は河北縦断道路調査区周辺に移動する。第5次調査区は遺物がほとんど出土せず、耕作地(畠地)に利用される。当小期の水路として維持された道路遺構西側溝(SD5017)と大溝北側流路は完全に埋没し、大溝北側の敷地に加えて南側の敷地も短期間耕作地に転換する。前述のとおり、道路遺構西側溝(SD5017)と大溝北側流路と耕作地が、ほぼ重複しない状況から、前小期に近接した時期での転換を想定したい。耕作地の単位は判然とせず、耕作に伴う小溝群の主軸方位は真北ではなく、地形の等高線に沿って西寄りに偏向するようだ。また、調査区北端では、VII₂期(10世紀後葉～11世紀前葉)を含む時期に旧舟橋川の一流路と考えられるSD5001(新)が流れる。なお、中世以降は明確な遺構は確認できず、13世紀以降を主体とする少量の陶磁器(第110図1297～1331)が出土したにとどまる。当小期の集落域は、県津幡北バイパス第1～3次調査区、県河北縦断道路調査区で検出されている。第5次調査区は、集落縁辺部の空閑地であった可能性が高い。

第4節 古代加茂遺跡の評価に向けて

古代の加茂遺跡を特徴付ける事項の一つとして、墨書土器を中心とした豊富な出土遺物がある。本遺跡の調査は、県教育委員会の津幡北バイパス(BP)や河北縦断道路に係る調査に加えて、津幡町教育委員会の保存を目的とした第1～21次調査が行われ、うち県教委が津幡北BP報告書I(第1～4次、第6次調査の一部含む)、本書(第5次調査)、河北縦断道路報告書の3冊を、また町教委刊行分が2冊の報告書を刊行している。これらの比較・検討は出土遺物に依存せざるをえないものの、その全体像を把握しにくい状況にある。以下は、既刊行5冊に掲載された、本遺跡を理解するうえで必要な墨書土器等の文字関連遺物、宗教関連遺物等を抽出・集成を目的とし、その傾向等について若干の検討を加える。

集成にあたり、本遺跡が旧舟橋川を挟んで、北側の加茂廃寺や北大溝が展開する「北大溝地区」と、南側の本書に記した大溝(以下、南大溝)が流れる「南大溝地区」に分かれ、その性格の差異が既に指摘されることから、両地区での比較とした。第77～80表は、この地区区分を準用した集成であり、「南大溝地区」には県BP第1～5次調査、町教委第1・2・15・18次調査が、「北大溝地区」にはそれ以外の調査区および能瀬南遺跡が属する。また、第81～91表は、本書を除く4冊掲載の抽出遺物の一覧であり、県BP第6次調査の一部を含む。県BP第5次調査遺物については、第2節第3項を参照されたい。なお、両地区の検討・比較は、既往調査が目的・面積等に大きな格差をもち、未刊報告書(県BP第6～11次調査)からも、単純な数的対比は慎むべきとの立場にたつ。今後の調査の進展で変動する中間的な傾向把握であることに留意されたい。

墨書土器(第70・71・77～79・81～86表)

墨書土器は、北大溝地区219点、南大溝地区511点の計730点を数え、文字種類は未確定な文字を含めて108種となる。点数が多い順で見れば、吉祥句の文字28種315点、人名的文字(男性)18種119点、地名的文字5種39点となり、吉祥句の文字が目立つ一方、施設名的文字、人名的文字(女性)、記号的文字は相対的に少ない。また、両地区で共有する文字は25種450点を数えるものの、両地区とも同程度多出する文字は意外と少

なく、「千」100点に限られる(第77表)。大部分の共有文字は、現時点では、いずれかの地区に偏在する傾向が強く、両地区の一体性と細部の性格差を示す内容といえる。北大溝地区のみに出土または卓越する文字には施設名的文字「冑」「中家」「東」「中」、宗教施設的文字(「鴨寺」等)、人名的文字「否万呂」「否」、吉祥句的文字「内」「平」等が、また、南大溝地区のみに出土または卓越する文字として地名的文字「英太」、施設名的文字「西家」「南」、人名的文字(男性)「真継」「福主」「臣主」「砦万呂」「砦」、吉祥句的文字「凡」「本」「茂」「正月」「胤」等があげられる(第77表)。

時期的な推移(第78・79表)で見れば、Ⅱ₃期の「五百足」(県BP第2次213)、「+」(同第3次2180)を初現に、Ⅲ期から両地区とも増加、Ⅴ期前後の文字種の変動を経て、Ⅴ期～Ⅵ₂期に両地区合計150点を超えるように盛期を迎えた後に、Ⅵ₃期～Ⅶ₁期に急減する。Ⅵ₃期～Ⅶ₁期の出土は、北大溝地区の河北縦断道路調査区に偏在し、Ⅵ₃期が「賀茂」「千」「正」「内」「平」を、Ⅶ₁期が「子浦」「冑」をそれぞれ確認している。

また、施設名的文字は、北大溝地区の「口(御カ)」「冑」「中家」「家」「東」、南大溝地区の「宅」「冑」「口家」「中家」「西家」「室」「南」がⅤ期以降確認できる。人名的文字(男性)は、足、人、麻呂・万呂、主を付した文字が定量出土する他、Ⅳ₁期～Ⅵ₁期に南大溝地区で多出する「真継」(北大溝地区は能瀬南遺跡1点、南大溝地区78点)は他の人名以上に集団の象徴的な意味をもつ文字と考えられる。

漆書土器(第80・84・85表)

北大溝地区で2点、南大溝地区で36点を確認、南大溝地区に偏在する傾向を示す(第80表)。文字・記号の内容は、「上」2点、「/または一」12点、「×または+」14点、不読10点と、簡略な文字・記号である。Ⅱ₃期(県BP第2次1361)を最古に、Ⅳ₂期までに大部分が属する。

円面硯・転用硯(第80・86・87表)

円面硯は、北大溝地区で2点、南大溝地区で6点が出土している(第86・87表)。須恵器有台坏蓋・身を主体とする食器転用の硯は、北大溝地区で24点、南大溝地区で125点が出土、両地区とも活発な文書作成作業を示唆する内容を示す。時期的には、南大溝地区がⅡ₃期の6点(県BP第2次)を最古とするのに対して、北大溝地区はⅢ期を最古とする。以降、Ⅵ₂期まで両地区とも定量の出土を継続する(第80表)。なお、環状鈕の稜坑蓋(県BP第3次2176)、須恵器甕胴部片(同第2次2002)を用いる例も確認できる他、墨容器に用いた瓶(県BP第3次2513)が出土している。

宗教関連遺物(第74・88・89表)

稜坑、鉄鉢、浄瓶・多口瓶、瓦片、瓦塔片等の他、灯明痕が付着した土器を抽出しており、稜坑、瓶類以外は加茂廃寺が立地する北大溝地区に偏在する。稜坑は、南大溝地区12点のうち10点が、県BP第2・3次調査区に集中し、後述する灯明転用土器の出土を含めて、何らかの宗教関連施設が存在した可能性を示唆する。他に県BP第5次調査区で2点、県縦断調査区で1点が出土している。鉄鉢は、北大溝地区で35点、南大溝地区で16点を数え、特に町第5次調査区に19点が集中、加茂廃寺からの一括廃棄を想起させる内容といえる。また、能瀬南遺跡からも1点の鉄鉢出土が報告されている。町第5次調査区からは、瓦片47点中39点、瓦塔片7点全点が集中して出土する。

宗教・祭祀で灯明皿に転用した痕跡をもつ土器は、北大溝地区で61点、南大溝地区で29点を確認した。器種は、須恵器無台坏を主体とし、Ⅴ期以降は少量の須恵器無台盤・有台坑・有台皿や、内黒を含む土師器無台坑・有台皿が加わる。南大溝地区はⅡ₃期事例(県第2次調査1601)を最古に、第3・5・6次調査区を中心におおむねⅤ期～Ⅵ₂期に出土するのに対して、北大溝地区はⅣ₁期～Ⅵ₃期の長期間継続出土する。この出土傾向の差異は、宗教関連施設や祭祀場所の移動を反映した可能性をもつ。

漆関連遺物(第80・90表)

漆書土器以外の漆付着土器は、北大溝地区で15点、南大溝地区で34点が出土、北大溝地区のⅡ₃期事例(県

第77表 加茂遺跡墨書土器地域別出土傾向一覧表

○文字内容別集計表

	地域区分	計	地名的文字	施設名的文字	宗教施設 的 文字	施設名的 文字 (方位)	人名的文字 (男性)	人名的文字 (女性)	吉祥句の 文字	記号的文字	その他文字	不明
種類数 (種) 108	両地区 で出土	25	1	3	1	2	2	1	9	3	3	-
	北大溝 地区のみ	29	2	2	6	1	5	2	5	2	4	-
	南大溝 地区のみ	54	2	3	2	0	11	1	14	4	17	-
点数 (点)	両地区 で出土	450	35	13	3	14	85	2	273	14	11	-
	北大溝地区	82	2	2	17	2	8	3	7	3	6	32
	南大溝 地区	198	2	4	2	0	26	1	35	4	21	103
	計	730	39	19	22	16	119	6	315	21	38	135

○地域区分別傾向

※()内は(北大溝地区)+(南大溝地区)の点数を示す。

区 分	地名的 文字	施設名 的 文字	宗教施設 的 文字	施設名 的 文字 (方位)	人名的文字 (男性)	人名的文字 (女性)	吉祥句の 文字	記号的 文字	その他文字
北・南大溝地区とも同程度 出土する主な文字			□寺(2+1)			衣女(1+1)	千(57+43) 勝(1+1)	○(1+1) ／(1+1)	山(4+3) 方見(1+1) □田(1+1)
北大溝地区のみ出土する 主な文字	子浦(1)	□(御カ) 厨(1) 家(1)	馬部寺(1) 鴨寺(6) 鴨神□(1) 鴨(4)、賀茂(3) 理教(2)	中(2)	否万呂・否(4) 古田人(1) 黒人(1)	□刀自(1)	富(1) 生(3) 松(1)	Ⅱ(2)	諸工(1) 木(3)
北大溝地区が卓越する 主な文字		曹(3+1) 中家(3+1)		東(7+2)			千万(4+1) 内(21+1) 平(17+2)		
南大溝地区のみ出土する 主な文字	大里(1)	宅(2) 西家(1) 室(1)	大寺(1)		女麻呂(1)、世人麻呂(1) 田人(1)、真人(3) 福主(7)、臣主(5) 五百足(2)、丈和(1)		万(1)、凡(12) 本(6)、井(2) 益□(1)、水(1) 永(1)、新(1)、人(3)	三(1) 卅(1)	山替(3)、山三(1) 小寅(1)、大毛(1) 大口(2)、酒□(1) 七(2)、乙(1)
南大溝地区が卓越する 主な文字	英太 (2+33)	□家 (1+4)		南(1+4)	真継(1(能瀬南)+78) 砦万呂・砦(1+5)、		茂(1+50) 正月(3+53) 疍(1+13) 大(1+4)	+・× (1+7)	

縦断868)を最古に、継続的に確認できる。また、漆を貯蔵する小型壺・瓶類3点(県BP第3次2313・3819、町第9次45)や、刷毛1点(県縦断W21)が出土、小規模な作業が想定できる。

施釉陶器、木製食器、製塩土器(第74・90表)

施釉陶器は、北大溝地区で4点、南大溝地区で15点が出土、内訳は緑釉陶器が5点(うち1点はカマドか)、灰釉陶器が14点を数える。VI期まで長期存続した周辺遺跡と比して、現段階では比較的少ない印象を受け、本遺跡の性格を反映する可能性をもつ。

木製食器は、南北両大溝、道路遺構側溝から比較的多くが出土しており、古代に属する盤10点(うち黒色漆器1点)、椀5点(同2点)、皿8点、箸状木製品6点、円形曲物32点を抽出した。薄手の漆器盤1点(県縦断W03)、白木9点(県BP4次W228・229、同5次258～260・321、県縦断W14・37・38)とも、須恵器盤と共通する器形を呈し、樹種はケヤキ8点、スギ2点となる。ケヤキを主体とする椀は、漆器椀2点(県BP第3次W212、同第4次W230)、白木椀3点(県BP第4次W225(トチノキ)・226、同第5次417)が出土、それぞれ細部で異なる器形を呈する。盤に比して、器形が定型化していない点に特徴をもち、各地からの寄せ集めに近い状況を復

第 78 表 加茂遺跡墨書土器集計表 1

※1個体に複数の墨書があるため、77表と合計点数は一致しない。

地域区分			点数計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅶ3・Ⅷ1期	不明	
北大溝地区（県河北縦断道路調査区、町3～14・16・17・19・21次調査区、能瀬南「口寺」、「真継」各1点）			219	4	10	26	46	34	75	17	7	
南大溝地区（県BP1～5次、町1・2・15・18・20次調査）			511	16	30	65	129	120	108	2	41	
合計			730	20	40	91	175	154	183	19	48	
区分	文字内容	点数計	地区区分	点数小計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅶ3・Ⅷ1期	不明
地名的文字	英太、英口、英、口太、口口(英太か) など	35	北大溝地区	2		1		1				
			南大溝地区	33	2	4	3	12	5			7
	子浦	1	北大溝地区	1							1	
			南大溝地区	0								
	大里	1	北大溝地区	0								
			南大溝地区	1		1						
	口口(三國カ)	1	北大溝地区	1			1					
			南大溝地区	0								
	口(郷カ)	1	北大溝地区	0								
			南大溝地区	1				1				
施設名的文字	口(御カ)厨	1	北大溝地区	1		1						
			南大溝地区	0								
	曹	4	北大溝地区	3						2	1	
			南大溝地区	1				1				
	宅、口(宅カ)	2	北大溝地区	0								
			南大溝地区	2				1		1		
	家	1	北大溝地区	1							1	
			南大溝地区	0								
	中家、口口(中家カ)	4	北大溝地区	3							3	
			南大溝地区	1			1					
口家、口(家カ)	5	北大溝地区	1							1		
		南大溝地区	4			1	1	1			1	
西家	1	北大溝地区	0									
		南大溝地区	1					1				
室	1	北大溝地区	0									
		南大溝地区	1					1				
宗教施設名的文字	馬部寺	1	北大溝地区	1					1			
			南大溝地区	0								
	大寺	1	北大溝地区	0				1				
			南大溝地区	1								
	鴨寺	6	北大溝地区	6				6				
			南大溝地区	0								
	鴨神口	1	北大溝地区	1		1						
			南大溝地区	0								
	鴨、口(鴨カ)	4	北大溝地区	4				3				1
			南大溝地区	0								
賀茂	3	北大溝地区	3								3	
		南大溝地区	0									
口寺(能瀬南)、口口(寺カ)	3	北大溝地区	2		1		1					
		南大溝地区	1				1					
鴨鴨鶏英口(習書)	1	北大溝地区	0									
		南大溝地区	1			1						
理教、理口	2	北大溝地区	2			2						
		南大溝地区	0									
施設名的文字(方位)	東、口(東カ)	9	北大溝地区	7					2	5		
			南大溝地区	2		1		1				
	南、口(南カ)	5	北大溝地区	1				1				
			南大溝地区	4					2	1		1
	上	0	北大溝地区	0								
			南大溝地区	0								
中	2	北大溝地区	2			1				1		
		南大溝地区	0									

区分	文字内容	点数計	地区区分	点数小計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅶ3・Ⅷ1期	不明	
人名的文字(男性的)	真継、真口(継カ、真口、真、口(真カ)継など)	79	北大溝地区	1								1	
			南大溝地区	78			3	15	41	15		4	
	磐万呂、磐、口(磐カ)万呂、口(磐カ)	6	北大溝地区	1				1					
			南大溝地区	5				2	2			1	
	否万呂、否1点(Ⅵ1期)	4	北大溝地区	4	1			2			1		
			南大溝地区	0									
	女麻呂	1	北大溝地区	0									
			南大溝地区	1				1					
	世人麻呂	1	北大溝地区	0									
			南大溝地区	1						1			
	口(万カ)麻呂	1	北大溝地区	0									
			南大溝地区	1				1					
	田人	1	北大溝地区	0									
			南大溝地区	1				1					
	吉田人	1	北大溝地区	1					1				
			南大溝地区	0									
	真人	3	北大溝地区	0									
			南大溝地区	3					3				
	黒人	1	北大溝地区	1	1								
			南大溝地区	0									
口(里カ)人	1	北大溝地区	1	1									
		南大溝地区	0										
口人	1	北大溝地区	1						1				
		南大溝地区	0										
福主、福口(主カ)、福口	7	北大溝地区	0										
		南大溝地区	7			2	1	3	1				
臣主、口(臣カ)主	5	北大溝地区	0										
		南大溝地区	5				2	3					
口(主カ)	3	北大溝地区	0										
		南大溝地区	3								3		
五百足	2	北大溝地区	0										
		南大溝地区	2	1	1								
太郎	1	北大溝地区	0										
		南大溝地区	1								1		
口(公カ)	1	北大溝地区	0							1			
		南大溝地区	1										
人名的文字(女性的)	口刀自	1	北大溝地区	1				1					
			南大溝地区	0									
	衣女、口(衣カ)	2	北大溝地区	1							1		
			南大溝地区	1								1	
	口女、口口(女カ)	2	北大溝地区	2				1	1				
			南大溝地区	0									
秋口	1	北大溝地区	0										
		南大溝地区	1				1						
吉祥句的文字	千、口(千カ)	100	北大溝地区	57			1	7	16	13	17	1	2
			南大溝地区	43			1	2	13	13	14		
	千万、千口(万カ)、口万	5	北大溝地区	4					3	1			
			南大溝地区	1							1		
	万	1	北大溝地区	0									
			南大溝地区	1							1		
	五口(万カ)、五口	2	北大溝地区	0									
			南大溝地区	2	2								
	茂、口(茂カ)	51	北大溝地区	1							1		
			南大溝地区	50			2	1	5	17	21		4
	正月、正口(月カ)、正口、口(正カ)、口(正カ)月、月、正(1点) など	58	北大溝地区	3							1	1	1
			南大溝地区	53	1	1			5	16	27		3
	凡、口(凡カ)	12	北大溝地区	0									
		南大溝地区	12			2	3	2				5	
荒、口(荒カ)	14	北大溝地区	1							1			
		南大溝地区	13				1			6	5	1	

第4節 古代加茂遺跡の評価に向けて

第79表 加茂遺跡墨書土器集計表2

※1個体に複数の墨書があるため、77表と合計点数は一致しない。

地域区分			点数計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅵ3・Ⅶ1期	不明
吉祥的 文字	本、口(本カ)	北大溝地区	0								
		南大溝地区	6		1		1	3	1		
	口(山カ)本(Ⅵ1期)、大本(Ⅵ2期)	北大溝地区	0								
		南大溝地区	2					1	1		
	大、口(大カ)	北大溝地区	1				1				
		南大溝地区	4		1	1	1	1			
	内、口(内カ)	北大溝地区	21					2	17	2	
		南大溝地区	1						1		
	平、口(平カ)	北大溝地区	17				1	2	9	5	
		南大溝地区	2						2		
	勝、口(勝カ)	北大溝地区	1						1		
		南大溝地区	1								1
	富	北大溝地区	1						1		
		南大溝地区	0								
	生	北大溝地区	3						3		
		南大溝地区	0								
	井	北大溝地区	0								1
		南大溝地区	2						1		
	益口	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1				1				
	松	北大溝地区	1								1
		南大溝地区	0								
	水	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
	永	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
新	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1					1				
人	北大溝地区	0									
	南大溝地区	3		2	1						
口(福カ)	北大溝地区	0							1		
	南大溝地区	1						1			
口(徳カ)	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1			1						
口(成カ)	北大溝地区	1				1					
	南大溝地区	0									
口(吉カ)	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1								1	
口(鬼カ)	北大溝地区	1							1		
	南大溝地区	0									
○	北大溝地区	2			1			1			
	南大溝地区	2	1					1			
一、ノ	北大溝地区	1							1		
	南大溝地区	1						1			
Ⅱ、口(Ⅱカ)	北大溝地区	2				1		1			
	南大溝地区	0									
口(≡カ)	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1				1					
十、口(十カ)、 ×、口(×カ)	北大溝地区	1			1						
	南大溝地区	7	1	1		1	1	2	1		
キ	北大溝地区	1			1						
	南大溝地区	0									
卍	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1				1					
*	北大溝地区	0					1				
	南大溝地区	1	1								
卍	北大溝地区	0									
	南大溝地区	1					1				
その他	山替、山口(替カ)	北大溝地区	0								
		南大溝地区	3			1		2			

地域区分			点数計	Ⅱ3・Ⅲ期	Ⅳ1期	Ⅳ2期	V期	Ⅵ1期	Ⅵ2期	Ⅵ3・Ⅶ1期	不明
山三	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
山、口(山カ)	北大溝地区	北大溝地区	4			1		3			
		南大溝地区	3			1	1		1		
方見	北大溝地区	北大溝地区	1		1						
		南大溝地区	1	1							
小寅	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1					1			
諸工	北大溝地区	北大溝地区	1				1				
		南大溝地区	0								
大毛	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1	1							
大口	北大溝地区	北大溝地区	0					2			
		南大溝地区	2								
口田	北大溝地区	北大溝地区	1				1				
		南大溝地区	1					1			
二口	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
酒口	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1					1			
七	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	2		1	1					
木	北大溝地区	北大溝地区	3	1		1	1				
		南大溝地区	0								
乙	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1							1	
口口(田原カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1			1					
口口(九カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1		1						
口(巻カ)	北大溝地区	北大溝地区	1					1			
		南大溝地区	0								
口(覆カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1					1			
口(象カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
口(茨カ)	北大溝地区	北大溝地区	1						1		
		南大溝地区	0								
口(荒カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1		1						
口(左または 庄カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1				1				
口(漆カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1					1			
口(志または 去カ)	北大溝地区	北大溝地区	0								
		南大溝地区	1						1		
不明	北大溝地区	北大溝地区	32		3	4	6	4	10	3	2
		南大溝地区	103	5	5	18	25	19	20		11

第80表 加茂遺跡漆書土器、転用硯等集計表

元できる。白木皿は、個別製作された薄手の優品2点(県BP第4次W227(トチノキ)、同第5次418)、鉢に近い厚手の大型品1点(同第3次W192(スギ))、瓷器系土製有台皿と共通する器形5点(同第5次91ケヤキ・419・509、町第9次74・75(全てケヤキ))に大別できる。箸状木製品(県BP第3次4点、第5次2点)は、かなり少なく、限定的な凶化であった可能性を残す。樹種同定を実施した個体は全てスギを用いる。また、製塩土器片は、県第5次調査の2点を加えて、棒状尖底タイプ7点、平底タイプ5点が出土している。

銚帯、木簡、祭祀具(第74・90・91表)

銚帯は、北大溝地区で2点(石製巡方、銅製鉈尾各1点)が、南大溝地区で4点(銅製丸靱1点、銅製巡方3点)の計6

点が出土している。また、木簡は、南北大溝、道路遺構を中心に10点を確認、すでに各報告書で詳細な検討が行われている。祭祀具は29点を数え、内訳は中空の陶製土馬1点(県縦断414)、人面墨書土器1点(町1次63)、斎串19点、形代8点(人形3点、鏃形1点、剣形2点、刀形2点)と多彩である。なお、現時点では、道路遺構本体から出土していない。

生産具・その他(第74・91表)

潟での漁労に伴う浮子、たも状木製品、土錘(中世含む)や、鑿、刀子、鍬先、砥石、紡輪、弓等が出土、土錘以外を第91表に集計した。また、土製支脚が目立つ他、倉庫の管理に用いる鉄製鍵1点(町第9次調査)、両面黒色蓋1点(県BP第2次)、ミガキを加えた土師器無台盤2点(町第9次)が出土、中でも鉄製鍵は北大溝地区を考えるうえで重要な遺物となる。なお、今回の集計から除外したが鉄滓、フイゴ羽口等の小鍛冶関連の遺物が定量出土している。

〔註〕

- (1) 引用・参考文献37による。
- (2) 本報告で記した古代の土器年代は、田嶋明人氏の土器編年に基づく(引用・参考文献24)。暦年代は、第5表左表によるが、右表のとおり暦年代の比定に関して県内の研究者間で差異をもつ。そのため、本書では、主に田嶋氏の土器編年による表記とし、必要に応じて暦年代を用いることとした。ただし、本遺跡への主要な須恵器供給元である高松・押水窯跡群における終末期(VI₂期～VI₃期)の器種様相が不明瞭である。第8章第2節で詳述するが、本報告でVI₂期に位置付けた須恵器には、VI₂期の組成を維持する最後の段階である南加賀窯跡群戸津35号窯期(VI₃期前半)の様相を一部含む可能性を考えている。また、土師器の表記について、ロクロで成形と推される土師器を「ロクロ土師器」、古墳時代より続く非ロクロ成形の土師器を「土師器」として区別している。
- (3) 引用・参考文献46による。
- (4) 引用・参考文献31、32による。
- (5) 引用・参考文献31、32、37、46による。
- (6) 引用・参考文献31、32、37、46による。
- (7) 引用・参考文献31、32による。
- (8) 引用・参考文献37による。
- (9) 引用・参考文献55による。

○漆書土器

地域区分		点数計	II ₃ -III期	IV ₁ 期	IV ₂ 期	V期	VI ₁ 期	VI ₂ 期	VI ₃ -VII ₁ 期	不明		
北大溝地区		2	0	1	0	0	0	0	0	1		
南大溝地区		36	7	10	9	1	1	1	0	7		
区分	文字内容	点数計	地域区分	点数小計	II ₃ -III期	IV ₁ 期	IV ₂ 期	V期	VI ₁ 期	VI ₂ 期	VI ₃ -VII ₁ 期	不明
施設・方位	上	2	北大溝地区	0								
			南大溝地区	2		1	1					
記号的	一、ノ	12	北大溝地区	0								
			南大溝地区	12	1	5	2		1			3
記号的	十、口(×カ)、 ×、口(×カ)	14	北大溝地区	0								
			南大溝地区	14	4	2	4			1		3
不読	判読できず	10	北大溝地区	2		1						1
			南大溝地区	8	2	2	2	1				1

○転用硯等

区分	点数計	地域区分	点数小計	II ₃ -III期	IV ₁ 期	IV ₂ 期	V期	VI ₁ 期	VI ₂ 期	VI ₃ -VII ₁ 期	不明
硯転用(甕胴部片1点含む)	150	北大溝地区	24	2	3	5	2	4	8		
		南大溝地区	126	31	14	15	15	20	29		2
灯明容器転用	90	北大溝地区	61		4	14	7	11	11	12	2
		南大溝地区	29	3		1	10	2	11		2
漆付着土器(平瓶1点、小壺2点含む)	49	北大溝地区	15	2	2	3	1	1	4	1	1
		南大溝地区	34	1	7	6	5	4	3		8

第4節 古代加茂遺跡の評価に向けて

第81表 加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 1

県・津幡北バイパス第1~4次調査区 墨書土器342点

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BP I-遺 構1	0003	不読	2次(92) F-14	SB07(P303)	須・無台環	外・底	V1	D017
県BP I-遺 構2	0032	「東」	2次(92) F-12	SB38(P278)	須・坏蓋	外・側	IV2か	08K-墨 92-2
県BP I-遺 構3	0041	「万」	3次(93) F-15	SB46(P14)	須・坏蓋	外・側	VI1	95-B175
県BP I-遺 構4	0079	「正月」	3次(93) G-16	SB6164(P87)	須・無台環	外・底	VI2	墨14
県BP I-遺 構5	0112	「正月」	3次(93) F-17	SB65(P125)	須・無台環	外・底	VI1	95-B158
県BP I-遺 構6	0155	「正口(月か)」	3次(93) F-20	SB72(P185)他	須・有台皿	外・底	VI2	95-B161
県BP I-遺 構7	0184-2	「井」	4次(94)	SB76	須・無台環	外・底	VI2	-
県BP I-遺 構8	0204	不読	2次(92) I-J-13	2号井戸	須・無台環	外・底	VIか	D016
県BP I-遺 構9	0216	「千」	2次(92) I-J-13	2号井戸	須・有台環	外・底	VI1	95-B081
県BP I-遺 構10	0238	「正月」	3次(93) F-15他	32号土坑	須・無台環	外・底	VI1	95-B153
県BP I-遺 構11	0267	「口(茂か)」	1次(91) F-8	P27	須・無台環	外・底	VI1	95-B056
県BP I-遺 構12	0278	「口」	1次(91) F-9	P91	須・無台環	外・底	VI1か	95-B039
県BP I-遺 構13	0340	「英太」	2次(92) G-11	土坑22	須・無台環か	外・底	不明	95-B121
県BP I-遺 構14	0342	「口家」	2次(92)	土坑23	須・坏蓋	外・側	VI1か	08K-墨 92-3
県BP I-遺 構15	0381	「千」	2次(92) G-12	P262	須・無台環	外・底	IV2(古)	08K-墨 92-1
県BP I-遺 構16	0388	「真継」	2次(92) G-13	P296	須・坏蓋	外・側	VI1か	08K-墨 92-6
県BP I-遺 構17	0407	「正月」	3次(93) G-18	27号土坑	須・無台環	外・底	VI2	墨11
県BP I-遺 構18	0408	「正月」	3次(93) G-18	27号土坑	須・無台環	外・底	VI1	墨15
県BP I-遺 構19	0409	「正月」。倒位	3次(93) G-18	27号土坑	須・無台環	外・側	VI1	95-B155
県BP I-遺 構20	0410	「水」	3次(93) G-18	27号土坑	須・有台環	内・底	VI2	95-B168
県BP I-遺 構21	0435	「口」	3次(93) G-16	P76土坑か	須・有台環	外・底	VI2	墨13
県BP I-遺 構22	0436	「口」	3次(93) G-16	P75	須・有台環	外・側	VI2	96- Bu098
県BP I-遺 構23	0447	「真継」	3次(93) G-15	P018	須・無台環	外・底	VI1	96- Bu002
県BP I-遺 構24	0486	「口(茂か)」	3次(93) F-19	P198	須・無台環	外・底	VI1か	95-B190
県BP I-遺 構25	0535	「口(正か)。横位	4次(94) J-22	P29	須・有台皿	外・側	VI2	D-347
県BP I-遺 構26	0565	「口(英か)」	1次(91) F-6-7	溝11、大溝	須・坏蓋	内・側	IV1	95-B047
県BP I-遺 構27	0568	「口(九か)」	1次(91) F-6	溝11	須・有台環	外・底	IV1	05K-B03
県BP I-遺 構28	0569	「口(英太か)」	1次(91) F-6	溝11、大溝	須・有台環	外・底	VI1	95-B033
県BP I-遺 構29	0588	「口」	1次(91) E-8	溝16	須・有台環	外・底	IV2(古)	95-B029
県BP I-遺 構30	0596	不読	1次(91) D-6	溝17	須・坏蓋	内・側	IVか	95-B050
県BP I-遺 構31	0618	「茂」	1次(91) F-6他	溝25、大溝	須・無台環	外・底	VI1	95-B007
県BP I-遺 構32	0679	「口」	3次(93) J-18	127号溝	須・無台環	外・底	V2(新)	墨12
県BP I-遺 構33	0680	「英太」	3次(93) J-18	127号溝	須・無台環	外・底	VI1	96- Bu023
県BP I-遺 構34	0681	「茂」	3次(93) 17/	127号溝	須・無台環	外・底	VI1か	95-B167
県BP I-遺 構35	0684	「正月」	3次(93) 17/	127号溝	須・無台環	外・底	VI2	95-B154
県BP I-遺 構36	0694	「真継」	3次(93) J-18	127号溝	須・有台環	外・底	VI1か	96- Bu090
県BP I-遺 構37	0737	「正月」	4次(94) K-23	SD24	須・無台環	外・底	VI1	D-339
県BP I-遺 構38	0743	「永」	4次(94) M-23	SD26	須・無台環	外・底	VI2	D-093
県BP I-遺 構39	0746	「口」	4次(94) H-24	道路西側溝(旧)	須・無台環	外・底	V1	D-071
県BP I-遺 構40	0766	「正月」	4次(94) K-23	道路西側溝	須・無台環	外・底	V2	D-095
県BP I-遺 構41	0770	「口」。穿孔か	4次(94) H-24	道路西側溝(新)	須・無台環	外・底	VI2	D-094
県BP I-遺 構42	0771	「口」	4次(94) J-23	道路西側溝	須・無台環	外・底	VI2	D-349
県BP I-遺 構43	0787	「口」	4次(94) H-24	道路西側溝	須・無台環	外・底	VI2	D-096
県BP I-遺 構44	0789	「口」	4次(94) J-23	道路西側溝	須・無台環	外・側	VI2	D-357
県BP I-遺 構45	0791	「二口」	4次(94) H-24	道路西側溝	須・無台環	外・底	VI2	D-072
県BP I-遺 構46	0807	「口」	4次(94) L-22	道路西側溝	須・坏蓋	外・側	VI1	D-350
県BP I-遺 構47	0812	「口」	4次(94) I-23	道路西側溝	須・有台環	外・底	V1	D-302
県BP I-遺 構48	0874	「正月」	4次(94) I-24	道路東側溝	須・無台環	外・底	VI2	D-306
県BP I-遺 構49	0886	「茂」	4次(94) L-22	道路	須・無台環	外・底	VI1	D-345
県BP I-遺 構50	0887	「南」	4次(94) M-22	道路	須・無台環	外・底	不明	D-356
県BP I-遺 構51	0888	「口」	4次(94) L-23	道路	須・無台環	外・底	VI2	D-361
県BP I-遺 構52	1004	外・底に墨痕	1/2次 9/	大溝	須・無台環	外・底	IV1	08K-D- 729
県BP I-遺 構53	1018	「口」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台環	外・底	IV2(新)	95-B070
県BP I-遺 構54	1019	「千」	1次(91) G-9他	大溝	須・無台環	外・底	V2	95-B001
県BP I-遺 構55	1021	「英」	1次(91) H-10	大溝	須・無台環	外・底	不明	95-B048
県BP I-遺 構56	1022	「口(茂か)」	1次(91) H-10	大溝	須・無台環	外・底	IV1	95-B077
県BP I-遺 構57	1023	「口(岩か)」	1次(91) G-10	大溝	須・無台環	外・側	IV2か	95-B079
県BP I-遺 構58	1079	「口(英か)口」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	不明	95-B002
県BP I-遺 構59	1080	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	IV1	95-B003
県BP I-遺 構60	1081	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	IV1	95-B005
県BP I-遺 構61	1082	「茂」	1次(91) F-7	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B006
県BP I-遺 構62	1083	「大」	1次(91) F-G-7	大溝	須・無台環	外・側	IV1	95-B012
県BP I-遺 構63	1084	「七」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台環	外・側	IV1	95-B013
県BP I-遺 構64	1085	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	IV1	95-B016
県BP I-遺 構65	1086	「茂」	1次(91) F-G-7-8	大溝	須・無台環	外・側	V2	95-B015
県BP I-遺 構66	1087	「英太」	1次(91) F-6-7	大溝	須・無台環	外・側	V1	95-B023
県BP I-遺 構67	1088	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	V2	95-B024
県BP I-遺 構68	1089	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B036
県BP I-遺 構69	1090	「口(英か)」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	Vか	95-B044
県BP I-遺 構70	1091	「口(英か)口」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	V1	95-B045
県BP I-遺 構71	1092	「英」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台環	外・側	Vか	95-B046
県BP I-遺 構72	1093	「口(太か)」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	不明	95-B049
県BP I-遺 構73	1094	「口(茂か)」	1次(91) F-G-7	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B052
県BP I-遺 構74	1095	「口」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B064
県BP I-遺 構75	1096	「口」	1次(91) F-7	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B068
県BP I-遺 構76	1097	「口」	1次(91) F-6-7	大溝	須・無台環	外・側	VI1か	95-B071
県BP I-遺 構77	1098	「口(茂か)」	1次(91) G-10	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B059
県BP I-遺 構78	1152	「英太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	V1か	95-B042
県BP I-遺 構79	1153	「英太」	1次(91) F-7	大溝	須・無台環	外・側	V	05K-B01
県BP I-遺 構80	1154	「口(家か)」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	不明	95-B009
県BP I-遺 構81	1155	「茂」	1次(91) G-7	大溝	須・無台環	外・側	VI2	95-B010
県BP I-遺 構82	1156	「南」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B018
県BP I-遺 構83	1157	「南」	1次(91) G-7	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B031
県BP I-遺 構84	1158	「小寅」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台環	外・側	VI1	95-B020
県BP I-遺 構85	1159	「英」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	V2	95-B038
県BP I-遺 構86	1160	「口太」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	不明	95-B043
県BP I-遺 構87	1161	「口」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	Vか	95-B069
県BP I-遺 構88	1162	「口(山か)」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環	外・側	IV2か	95-B076
県BP I-遺 構89	1163	「茂」	1次(91) F-6	大溝	須・無台環か	外・側	不明	95-B060
県BP I-遺 構90	1164	「茂」	1次(91) G-8	大溝	須・血か	外・側	VI2か	95-B053
県BP I-遺 構91	1165	「口」	1次(91) F-6	大溝	須・坏類	外・側	不明	95-B065
県BP I-遺 構92	1166	「口」	1次(91) G-H-10	大溝	須・坏類	外・側	不明	95-B066
県BP I-遺 構93	1167	「井」	1次(91) H-10	大溝	須・坏類	外・側	不明	95-B072
県BP I-遺 構94	1221	「英太」	1次(91) F-7	大溝	須・坏蓋	内・側	VI1	95-B027
県BP I-遺 構95	1222	外面「英太」、内面「口(英太か)」	1次(91) F-6	大溝	須・坏蓋	外・側/内・側	VI1	95-B034
県BP I-遺 構96	1223	「鴨鴨英口」。習書	1次(91) H-10他	大溝	須・坏蓋	外・側	IV2か	95-B035
県BP I-遺 構97	1224	「口(英太か)」	1次(91) G-H-10	大溝	須・坏蓋	内・側	IV2	95-B040
県BP I-遺 構98	1225	「口」	1次(91) F-6	大溝	須・坏蓋	内・側	不明	95-B075
県BP I-遺 構99	1226	「口」	1次(91) F-6	大溝	須・坏蓋	外・側	V1	95-B062
県BP I-遺 構100	1227	「英口(太か)」	1次(91) F-6	大溝	須・坏蓋	内・側	IV2(古)	95-B041
県BP I-遺 構101	1228	「口(月か)」	1次(91) F-6-7	大溝	須・坏蓋	外・側	IV1か	95-B074
県BP I-遺 構102	1230	「口(太か)」	1次(91) F-6	大溝	須・坏蓋	内・側	不明	95-B051
県BP I-遺 構103	1251	不読	1次(91) F-6	大溝	須・有台環	外・底	IV2(古)	96- Bu067
県BP I-遺 構104	1252	不読。2文字か	1次(91) H-10	大溝	須・有台環	外・底	IV1か	05K-B02
県BP I-遺 構105	1289	「卒」	1次(91) G-H-10	大溝	須・有台環	外・底	IV1	95-B014
県BP I-遺 構106	1290	「本」	1次(91) F-6-7	大溝	須・有台環	外・底	VI2	95-B021
県BP I-遺 構107	1291	「茂」	1次(91) F-6-7	大溝	須・有台環	外・底	V2	95-B030
県BP I-遺 構108	1292	「口家」	1次(91) G-7	大溝	須・有台環	外・底	IV2か	95-B025
県BP I-遺 構109	1293	不読	1次(91) F-6	大溝	須・有台環	外・底	V2	95-B032
県BP I-遺 構110	1294	「英口(凡)」	1次(91) G-9	大溝	須・有台環	外・底	IV2(古)	95-B037
県BP I-遺 構111	1295	「福口(主か)」	1次(91) F-6	大溝	須・有台環	外・底	V2	95-B028
県BP I-遺 構112	1296	「口(凡か)」	1次(91) G-H-10	大溝	須・有台環	外・底	Vか	95-B061

第 82 表 加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 2

県・津幡北バイパス第1~4次調査区

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BPⅠ-大 溝11	1397	「干」	1次(91) G-7	大溝	須・有台环	外・底	IV1か	95-B008
県BPⅠ-大 溝11	1398	「茂」倒位	1次(91) G-H-10	大溝	須・有台环	体外・側	VI2	95-B055
県BPⅠ-大 溝21	1620	「方見」	2次(92) H-14/	大溝	須・無台环	外・底	Ⅲ	95-B090
県BPⅠ-大 溝21	1621	「口」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	Ⅱ3~Ⅲ	06K-墨 92-16
県BPⅠ-大 溝21	1622	「口(象カ)」	2次(92) 14/	大溝	須・無台环	体外・側	VI2	95-B112
県BPⅠ-大 溝21	1623	「五百足」	2次(92) 12/、13/	大溝	須・無台环	外・底	Ⅲ~IV1	95-B109
県BPⅠ-大 溝22	1624	「大口」	2次(92) H-12/、 12/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B118
県BPⅠ-大 溝22	1625	「口口」	2次(92) 13/、14/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B130
県BPⅠ-大 溝22	1626	「凡」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B114
県BPⅠ-大 溝22	1627	「凡」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B122
県BPⅠ-大 溝22	1628	「口(福カ)」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	95-B120
県BPⅠ-大 溝22	1629	「真口(継カ)」	2次(92) 12/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B131
県BPⅠ-大 溝22	1630	「山替」	2次(92) H-12/、 13/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	95-B095
県BPⅠ-大 溝23	1682	漆書「ノ」 墨書「十」	2次(92) H-13	大溝	須・無台环	外・底	IV1	96- Bu053
県BPⅠ-大 溝24	1684	「山三」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	VI2	95-B092
県BPⅠ-大 溝24	1685	「口(茂カ)」	2次(92) H-11/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	D631
県BPⅠ-大 溝24	1686	不読。3文字	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	IV2か	D014
県BPⅠ-大 溝24	1687	「口口(寺カ)」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	V2か	06K-墨 92-4
県BPⅠ-大 溝24	1688	「英口」	2次(92) H-12/ 12/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B125
県BPⅠ-大 溝24	1689	「干」	2次(92) 13/	大溝	須・無台环	外・底	VI2	95-B080
県BPⅠ-大 溝24	1690	「真継」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B115
県BPⅠ-大 溝24	1691	「卍」	2次(92) 12/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B087
県BPⅠ-大 溝24	1692	「女麻呂」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	IV2(新) カ	06K-墨 92-9
県BPⅠ-大 溝24	1693	「山替」	2次(92) 12/、13/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	95-B096
県BPⅠ-大 溝24	1694	「碧方呂」	2次(92) 12/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	95-B085
県BPⅠ-大 溝24	1695	「口」	2次(92) 14/	大溝	須・坏類	外・底	不明	95-B134
県BPⅠ-大 溝24	1696	「口(茂カ)」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B132
県BPⅠ-大 溝24	1697	「干」	2次(92) H-11/	大溝	須・無台环	外・底	V2	D621
県BPⅠ-大 溝26	1733	「口」	2次(92) H-13	大溝	須・無台环	外・底	Ⅲ	06K-墨 92-15
県BPⅠ-大 溝26	1734	「英太」	2次(92) 11/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B082
県BPⅠ-大 溝26	1735	「凡」	2次(92) 11/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B089
県BPⅠ-大 溝26	1736	「茂」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	VI2	95-B093
県BPⅠ-大 溝26	1737	「口」	2次(92) G-11/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	95-B104
県BPⅠ-大 溝26	1738	「口太」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B102
県BPⅠ-大 溝26	1739	「凡」	2次(92) 13/	大溝	須・無台环	外・底	IV1	95-B110
県BPⅠ-大 溝26	1740	「茂」	2次(92) H-11/	大溝	須・無台环	外・底	不明	95-B124
県BPⅠ-大 溝26	1741	「干」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台环	外・底	VI2	95-B108
県BPⅠ-大 溝26	1742	「口(茂カ)」	2次(92) H-1-13	大溝	須・無台环	外・底	VI2	95-B119
県BPⅠ-大 溝28	1781	「七」	2次(92) 13/	大溝	須・坏蓋	外・側	IV2(古)	95-B084
県BPⅠ-大 溝28	1782	「口(月カ)」	2次(92) 11/	大溝	須・坏蓋	外・側	Ⅲカ	06K-墨 92-13
県BPⅠ-大 溝28	1796	内外面文字多数。 習書	2次(92) H-13/	大溝	須・坏蓋	外・側	IV1	95-B091
県BPⅠ-大 溝29	1815	「茂」	2次(92) G-11	大溝	須・坏蓋	外・側	VI2	95-B123
県BPⅠ-大 溝31	1852	「口(箸カ)」	2次(92) H-12/、 13/	大溝	須・有台环	外・底	IV2か	95-B100
県BPⅠ-大 溝31	1853	「口(英カ)」	2次(92) 12/、13/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲカ	06K-墨 92-12
県BPⅠ-大 溝31	1854	「大毛」、「*」	2次(92) 11/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲ	95-B083
県BPⅠ-大 溝31	1855	「口(凡カ)」	2次(92) H-13/、 14/	大溝	須・有台环	外・底	IV2(古)	95-B101
県BPⅠ-大 溝31	1856	「口(凡カ)」	2次(92) H-12/	大溝	須・有台环	外・底	IV1	95-B135
県BPⅠ-大 溝31	1857	「五百足」	2次(92) 12/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅱ3~Ⅲ	95-B106
県BPⅠ-大 溝31	1858	「福主」	2次(92) 14/	大溝	須・有台环	外・底	IV2(古)	95-B128
県BPⅠ-大 溝31	1859	「口口」	2次(92) H-12/	大溝	須・有台环	外・底	IV2(古)	95-B129
県BPⅠ-大 溝31	1860	「口口」	2次(92) 11/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲカ	06K-墨 92-5
県BPⅠ-大 溝34	1914	不読。「口口口」	2次(92) 14/	大溝	須・有台环	外・底	V1	D018
県BPⅠ-大 溝34	1915	「口(勝カ)」	2次(92) H-12/	大溝	須・有台环	外・底	不明	06K-墨 92-7
県BPⅠ-大 溝34	1916	「口(凡カ)」	2次(92) 12/	大溝	須・有台环	外・底	不明	06K-墨 92-10
県BPⅠ-大 溝34	1917	「口(箸カ)方呂」	2次(92) H-13/	大溝	須・有台环	外・底	不明	95-B086
県BPⅠ-大 溝34	1918	「英太」	2次(92) 11/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲ	95-B088
県BPⅠ-大 溝34	1919	「干」	2次(92) 14/	大溝	須・有台环	外・底	V2	95-B113
県BPⅠ-大 溝34	1920	「干」	2次(92) 13/	大溝	内黒・有台环	外・底	VI2	06K-墨 92-14

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BPⅠ-大 溝34	1921	「口」	2次(92) 13/	大溝	内黒・有台环	外・底	VI2	95-B116
県BPⅠ-大 溝35	1950	「口」	2次(92) 11/	大溝	須・有台环	外・底	IV2(新)	95-B136
県BPⅠ-大 溝35	1951	「干」	2次(92) 14/	大溝	須・有台环	外・底	Vか	95-B022
県BPⅠ-大 溝35	1952	「口口」	2次(92)	大溝(古)	須・有台环	外・底	Ⅲカ	D013
県BPⅠ-大 溝35	1953	「口(郷カ)」	2次(92) G-11	大溝	須・有台环	外・底	Vか	95-B094
県BPⅠ-大 溝35	1954	「五口(万カ)」	2次(92) 13	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲ	95-B107
県BPⅠ-大 溝35	1955	「五口」	2次(92) 12/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅲ	95-B105
県BPⅠ-大 溝47	2125	「卍」。横位	3次(93) 15/	大溝	須・無台环	体外・側	VI2	墨1
県BPⅠ-大 溝47	2126	「茂」。横位	3次(93) 16/	大溝	須・無台环	体外・側	VI2	95-B166
県BPⅠ-大 溝47	2127	外・底「真継」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B139
県BPⅠ-大 溝47	2128	「真口」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu008
県BPⅠ-大 溝47	2129	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B140
県BPⅠ-大 溝47	2130	「真口」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu017
県BPⅠ-大 溝47	2131	「口継」	3次(93) 16/	大溝	須・坏類	外・底	不明	96- Bu024
県BPⅠ-大 溝47	2132	「口継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	96- Bu003
県BPⅠ-大 溝47	2133	「真継」	3次(93) 16/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B146
県BPⅠ-大 溝47	2134	「真口(継カ)」	3次(93) J-17他	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu005
県BPⅠ-大 溝47	2135	不読	3次(93) 15/	大溝	須・無台环	外・底	Vか	墨9
県BPⅠ-大 溝47	2136	不読	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B169
県BPⅠ-大 溝47	2137	「啓」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B193
県BPⅠ-大 溝47	2138	不読。「口口口」	3次(93) 15/	大溝	須・無台环	外・底	Vか	95-B189
県BPⅠ-大 溝47	2139	「口(山カ)」	3次(93) 15/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B186
県BPⅠ-大 溝47	2140	「口」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	Ⅲ	95-B179
県BPⅠ-大 溝47	2141	「福主」	3次(93) 16/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B174
県BPⅠ-大 溝47	2142	「福口」	3次(93) 15/、16/	大溝	須・無台环	外・底	VI1	95-B172
県BPⅠ-大 溝49	2171	「真口」	3次(93) 18/	大溝	須・坏蓋	内・側	VI1	95-B200
県BPⅠ-大 溝49	2172	「口(真カ)」	3次(93) 18/	大溝	須・坏蓋	内・側	VI1	96- Bu088
県BPⅠ-大 溝49	2178	「口」	3次(93) 15/	大溝	須・坏蓋	外・側	Ⅲ	95-B183
県BPⅠ-大 溝49	2179	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・有台环	外・底	IV2(古)	96- Bu089
県BPⅠ-大 溝49	2180	「十」	3次(93) 15/、16/	大溝	須・有台环	外・底	Ⅱ3	墨5
県BPⅠ-大 溝53	2218	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B145
県BPⅠ-大 溝53	2219	「口継」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	不明	96- Bu018
県BPⅠ-大 溝53	2220	「真継」「大口」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B150
県BPⅠ-大 溝53	2221	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	95-B151
県BPⅠ-大 溝53	2222	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	IV2(新)	96- Bu010
県BPⅠ-大 溝53	2223	「真口」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	96- Bu030
県BPⅠ-大 溝53	2224	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu001
県BPⅠ-大 溝53	2225	「真継」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V2	96- Bu004
県BPⅠ-大 溝53	2226	「口継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	96- Bu028
県BPⅠ-大 溝53	2227	「真」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu012
県BPⅠ-大 溝53	2228	「口(臣カ)主」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	95-B192
県BPⅠ-大 溝53	2229	「干」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V2か	95-B197
県BPⅠ-大 溝53	2230	「千」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B187
県BPⅠ-大 溝53	2231	「口(干カ)」	3次(93) 15/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B199
県BPⅠ-大 溝53	2232	「口」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B177
県BPⅠ-大 溝53	2233	「口口」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	IV2(新)	墨6
県BPⅠ-大 溝53	2234	「益口」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B191
県BPⅠ-大 溝53	2235	「口」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	墨4
県BPⅠ-大 溝55	2275	「口(荒カ)口」	3次(93) 18/	大溝	須・坏蓋	外・側	IV1	墨7
県BPⅠ-大 溝55	2289	「真継」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・有台环	外・底	IV2か	96- Bu087
県BPⅠ-大 溝55	2325	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V2	95-B141
県BPⅠ-大 溝58	2326	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1か	96- Bu015
県BPⅠ-大 溝58	2327	「真口(継カ)」	3次(93) 17/、18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	96- Bu009
県BPⅠ-大 溝58	2328	継	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V1	墨2
県BPⅠ-大 溝58	2329	「口継」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	IV1	96- Bu011
県BPⅠ-大 溝58	2330	「真継」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	IV2(新)	96- Bu022
県BPⅠ-大 溝58	2331	「口(継カ)」	3次(93) 17/	大溝	須・無台环	外・底	V2	96- Bu086
県BPⅠ-大 溝58	2332	「真継」	3次(93) 18/	大溝	須・無台环	外・底	V1	95-B137

第 83 表 加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表 3

県・津幡北バイパス第1~4次調査区

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号	報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BPⅠ-大 清58	2333	「真経」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V1	96- Bu016	県BPⅠ-包 など1	2801	「十」	1次(91) E-9	包含層	須無台坏	外-底	V2カ	95-B011
県BPⅠ-大 清58	2334	「口経」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	VI1カ	96- Bu034	県BPⅠ-包 など1	2802	「凡」	1次(91) E-10	包含層	須無台坏	外-底	Vカ	95-B019
県BPⅠ-大 清58	2335	「真経」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	V2	96- Bu019	県BPⅠ-包 など1	2803	「茂」	1次(91) F-8	包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B057
県BPⅠ-大 清58	2336	「真経」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V2	95-B142	県BPⅠ-包 など1	2804	「口」	1次(91) E-10	包含層	須無台坏	外-底	V	95-B067
県BPⅠ-大 清58	2337	「口(真カ)経」	3次(93) 17/、18/	大溝	須無台坏	外-底	VI1	96- Bu031	県BPⅠ-包 など1	2805	「口(十カ)」	1次(91) H-10	包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B073
県BPⅠ-大 清58	2338	「口経」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V1	96- Bu006	県BPⅠ-包 など1	2806	不読	1次(91) H-10	包含層	須無台坏	外-底	Vカ	95-B058
県BPⅠ-大 清58	2339	「真経」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	IV2(新)	95-B148	県BPⅠ-包 など1	2807	「英太」	1次(91) I-5	包含層	須無台坏	外-底	V2	95-B026
県BPⅠ-大 清59	2340	「真経」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V1カ	95-B138	県BPⅠ-包 など5	3012	「秋口」	1次(91) D-10	包含層	須有台坏	外-底	IV2(古) カ	95-B017
県BPⅠ-大 清58	2341	「真経」	3次(93) 17/、18/	大溝	須無台坏	外-底	V1	95-B149	県BPⅠ-包 など5	3013	「口」	1次(91) H-9	包含層	須有台坏	外-底	IV2(古) カ	95-B063
県BPⅠ-大 清58	2342	「真経」	3次(93) 15/、18/	大溝	須無台坏	外-底	V1	95-B147	県BPⅠ-包 など5	3014	「茂」	1次(91) H-9	包含層	須有台坏	外-底	V2	95-B054
県BPⅠ-大 清58	2343	「真経」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V1	95-B143	県BPⅠ-包 など5	3015	「茂」	1次(91) F-7	包含層	須有台坏	外-底	VI1	95-B004
県BPⅠ-大 清58	2344	「口(経カ)」	3次(93) 18/	大溝	須坏類	外-底	不明	96- Bu021	県BPⅠ-包 など13	3301	「大」	2次(92) I-14	包含層	須無台坏	外-底	VI1	06K-墨 92-11
県BPⅠ-大 清58	2345	「口」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	V2	96- Bu035	県BPⅠ-包 など13	3302	「大」	2次(92) G-12	包含層	須無台坏	外-底	V1	95-B099
県BPⅠ-大 清58	2346	「口」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V2	96- Bu007	県BPⅠ-包 など13	3303	「正月」	2次(92) F-13	包含層	須無台坏	外-底	不明	95-B098
県BPⅠ-大 清59	2347	「口口」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	V1	墨10	県BPⅠ-包 など13	3304	「口(正カ)月」	2次(92) G-14	包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B103
県BPⅠ-大 清59	2348	「福主」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	IV1	95-B171	県BPⅠ-包 など13	3305	「口(凡カ)」	2次(92) F-13	包含層	須無台坏	外-底	不明	95-B127
県BPⅠ-大 清59	2349	「口」	3次(93) 18/	大溝	須無台盤	外-底	V2	95-B188	県BPⅠ-包 など13	3306	「真」	2次(92) E-12	包含層	須無台坏	外-底	V2	95-B126
県BPⅠ-大 清60	2383	「千万」	3次(93) 18/	大溝	須坏蓋	内-側	VI1カ	墨8	県BPⅠ-包 など13	3307	「英太」	2次(92) F-14	包含層	須無台坏	外-底	V2	95-B117
県BPⅠ-大 清60	2384	「福主」	3次(93) 15/	大溝	須坏蓋	内-側	IV1カ	95-B170	県BPⅠ-包 など13	3308	不読	2次(92) I-13	包含層	須無台坏	外-底	V1	06K-墨 92-8
県BPⅠ-大 清60	2385	「新」	3次(93) 17/	大溝	須坏蓋	内-側	VI1カ	95-B178	県BPⅠ-包 など15	3361	「市」	2次(92) F-13	包含層	須坏蓋	内-側	IV2カ	95-B111
県BPⅠ-大 清60	2412	「口(茂カ)」	3次(93) 16/	大溝	須有台坏	外-底	VI2	95-B181	県BPⅠ-包 など15	3362	「乙」	2次(92) J-11	包含層	須坏蓋	外-側	不明	95-B133
県BPⅠ-大 清63	2434	「口(真カ)」	3次(93) 18/	大溝	須無台盤	外-底	V2	96- Bu032	県BPⅠ-包 など17	3456	「口(経カ)」	2次(92) F-11	包含層	須有台坏	外-底	IV2(古)	06K-墨 92-17
県BPⅠ-大 清63	2435	「口経」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	V1	96- Bu029	県BPⅠ-包 など24	3601	「正月」	3次(93) G-16	上層包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B157
県BPⅠ-大 清63	2436	「真口」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	IV2(新)	96- Bu026	県BPⅠ-包 など24	3602	「正月」	3次(93) F-19	上層包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B159
県BPⅠ-大 清63	2437	「真経」	3次(93) J-17	大溝、上包含層	須無台坏	外-底	V1	95-B144	県BPⅠ-包 など24	3603	「口(正カ)月」	3次(93) H-17	上層包含層	須無台坏	外-底	不明	96- Bu050
県BPⅠ-大 清63	2438	「口」	3次(93) 17/	大溝	須無台坏	外-底	不明	96- Bu020	県BPⅠ-包 など24	3604	「正」	3次(93) F-17	上層包含層	須無台坏	外-底	VI2	96- Bu076
県BPⅠ-大 清63	2439	「口(真カ)」	3次(93) 18/	大溝	須無台盤	外-底	IV2	96- Bu014	県BPⅠ-包 など24	3605	「月」	3次(93) F-17	上層包含層	須無台坏	外-底	V2カ	96- Bu075
県BPⅠ-大 清63	2440	「市」横位	3次(93) 16/	大溝	須坏類	体外-側	VIカ	95-B165	県BPⅠ-包 など24	3606	「平」	3次(93) H-16	包含層	須無台皿	外-底	VI2カ	95-B176
県BPⅠ-大 清63	2441	「茂」横位	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	体外-側	VI1	95-B182	県BPⅠ-包 など24	3607	「月」	3次(93) G-18	上包含層	須無台坏	外-底	VI1	95-B162
県BPⅠ-大 清64	2442	「正月」	3次(93) 16/、J- 15	大溝、上包含層	須無台坏	外-底	VI2	95-B160	県BPⅠ-包 など24	3608	「市」横位	3次(93) H-16	包含層	須無台坏	体外-側	VI2	95-B180
県BPⅠ-大 清64	2443	「正月」	3次(93) 18/	大溝	須無台坏	外-底	VI2	00y-D015	県BPⅠ-包 など24	3609	不読。2文字カ	3次(93) H-16	包含層	須無台坏	外-底	VI1	96- Bu027
県BPⅠ-大 清64	2444	「口(徳カ)」	3次(93) 15/	大溝	須無台坏	外-底	IV2(新)	墨3	県BPⅠ-包 など25	3657	「正月」	3次(93) J-19	上包含層	須坏蓋	外-側	VI2	95-B164
県BPⅠ-大 清65	2480	「真経」	3次(93) 16/	大溝	須坏蓋	内-側	VI1	96- Bu091	県BPⅠ-包 など25	3658	「正月」	3次(93) G-16	包含層	須無台皿	外-側	VI2	95-B152
県BPⅠ-大 清65	2487	「福」	3次(93) 17/	大溝	須有台坏	外-底	V1	95-B173	県BPⅠ-包 など25	3659	「口(正カ)」	3次(93) E-15-16	上包含層	須坏蓋カ	外面	不明	95-B196
県BPⅠ-大 清65	2488	「口」	3次(93) 17/	大溝	須有台坏	外-底	IV1	95-B198	県BPⅠ-包 など25	3660	「真経」	3次(93) I-20	上層包含層	須坏蓋	外-側	VI1カ	96- Bu013
県BPⅠ-大 清65	2489	「口(田尻カ)」	3次(93) 17/	大溝	須有台坏	外-底	IV2カ	95-B185	県BPⅠ-包 など25	3661	「田人」	3次(93) F-13	包含層	須坏蓋	外-側	IV2(古)	95-B184
県BPⅠ-大 清68	2535	「世人麻呂」	3次(93) 17/、18/	大溝	須無台盤	外-底	VI1	08.1	県BPⅠ-包 など25	3662	「口」	3次(93) I-17	上包含層	須坏蓋	外-側	VI2	95-B156
県BPⅠ-大 清69	2601	「市」横位	4次(94) L-22	SX43	須有台坏	体外-側	VI2	D-313	県BPⅠ-包 など27	3710	「口(正カ)」	3次(93) J-17	上包含層	須無台坏	体外-側	VI2	95-B195
県BPⅠ-大 清69	2602	「口」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI2	D-355	県BPⅠ-包 など27	3711	「正口」	3次(93) G-18	上包含層	須有台坏	外-底	VI2	95-B163
県BPⅠ-大 清69	2603	「茂」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI2	D-308	県BPⅠ-包 など27	3712	「口(正カ)」	3次(93) H-16	包含層	須有台皿	体外-側	VI2	95-B194
県BPⅠ-大 清69	2613	「真口(経カ)」	4次(94) L-22-23	SX43	須無台坏	外-底	V2	D-309	県BPⅠ-包 など27	3713	「口。倒位」	3次(93) G-18	上層包含層	須有台坏	体外-側	VI1	96- Bu058
県BPⅠ-大 清69	2614	「口(真カ)」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	V2	D-440	県BPⅠ-包 など34	3901	「口(本カ)」	4次(94) M-23	包含層	須無台坏	体外-側	VI1	D-092
県BPⅠ-大 清69	2615	「口」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI1	D-443	県BPⅠ-包 など34	3902	「口」	4次(94) K-22	W-E7e'	須無台坏	体外-側	VI2	D-128
県BPⅠ-大 清69	2616	「茂」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI1	D-352	県BPⅠ-包 など34	3903	「本」	4次(94) L-22	大7t' 西側溝	須無台坏	外-底	VI1	D-303
県BPⅠ-大 清69	2617	「口」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI1	D-337	県BPⅠ-包 など34	3904	「口家」横位	4次(94) K-23	包含層	須無台坏	体外-側	Vカ	D-346
県BPⅠ-大 清69	2618	「中家」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	V1	D-316	県BPⅠ-包 など34	3905	「市」	4次(94) M-23	7t' 南	須無台坏	体外-側	VI2	D-338
県BPⅠ-大 清69	2619	「口」	4次(94) L-22	SX43	須坏類	内-側	VI	D-311	県BPⅠ-包 など34	3906	「正月」	4次(94) L-22	大7t' 西側溝	須無台坏	外-底	V2	D-304
県BPⅠ-大 清70	2620	「口」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	V2	D-315	県BPⅠ-包 など34	3907	「正月」	4次(94) I-23	包含層	須無台坏	外-底	VI1	D-341
県BPⅠ-大 清70	2621	「正月」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI2	D-307	県BPⅠ-包 など34	3908	「口(南カ)」	4次(94)	包含層	須無台坏	外-底	VI2	D-262
県BPⅠ-大 清70	2622	「正月」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI2	D-314	県BPⅠ-包 など34	3909	「千」	4次(94) L-23	大7t'	須無台坏	外-底	V2	D-335
県BPⅠ-大 清70	2623	「正月」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI2	D-089	県BPⅠ-包 など34	3910	「平」	4次(94) M-22	包含層	須無台坏	外-底	VI2	D-348
県BPⅠ-大 清70	2624	「正月」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	VI1カ	D-360	県BPⅠ-包 など35	3936	「千」	4次(94) J-22他	包含層	須無台坏	外-底	VI1	D-342
県BPⅠ-大 清70	2625	「口月」	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	外-底	V2	D-310	県BPⅠ-包 など35	3937	「口」	4次(94) L-23	包含層	須無台皿	外-底	VI2	D-351
県BPⅠ-大 清70	2626	「正月」横位	4次(94) L-22	SX43	須無台坏	体外-側	VI1カ	D-312	県BPⅠ-包 など35	3949	「口(山カ)」。倒位	4次(94) K-22	P30北隣P付近	須有台坏	体外-側	VI2	D-090
県BPⅠ-大 清71	2655	「千」	4次(94) L-22	SX43	須坏蓋	内-側	IV2	D-317	県BPⅠ-包 など35	3950	「大平」	4次(94) M-23	包含層	須有台皿	外-底	VI2	D-091
県BPⅠ-大 清74	2690	「口(正カ)」	4次(94) L-23	SX43	須無台坏	体外-側	VI1	D-318	県BPⅠ-包 など35	3951	「正月」	4次(94) L-22	大7t'	須有台坏	外-底	VI1	D-336
県BPⅠ-大 清74	2691	「市」	4次(94) K-23	SX43	須無台坏	外-底	VI1	D-301	県BPⅠ-包 など35	3952	「口(内カ)」。倒位	4次(94) K-L-23	大7t'	須有台坏	体外-側	VI2カ	D-344

第84表 加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覧表4

県・津幡北バイパス第1~4次調査区漆書土器35点

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BP I-遺構13	0316	「口(十カ)」	2次(92) I-J-12	土坑10	須・坏蓋	内・側	VI2	96-Bu045
県BP I-遺構17	0374	「口(一カ)」	2次(92) J-13	P227	須・無台坪	外・底	IV1カ	96-Bu059
県BP I-遺構29	0660	「十」	2次(92)	89号溝	須・坏蓋	内・側	IV1	96-Bu070
県BP I-遺構8	1011	「十」	1次(91) G-H-10	大溝	須・無台坪	体外・側	III	95-B078
県BP I-遺構9	1251	不読	1次(91) F-6	大溝	須・有台坪	外・底	IV2(古)	96-Bu067
県BP I-遺構10	1288	不読	1次(91) H-10-11	大溝	須・有台坪	外・底	IV1	96-Bu077
県BP I-遺構11	1618	「口(十カ)」	2次(92) H-12他	大溝	須・無台坪	外・底	IIIカ	96-Bu068
県BP I-遺構12	1619	「上」	2次(92) H-13	大溝	須・無台坪	外・底	IV1	96-Bu033
県BP I-遺構13	1680	「一」	2次(92) H-12/13/	大溝	須・無台坪	外・底	IV1	96-Bu042
県BP I-遺構14	1681	「一」	2次(92) H-13/	大溝	須・無台坪	外・底	IV1	96-Bu085
県BP I-遺構15	1682	「ノ」	2次(92) H-13	大溝	須・無台坪	外・底	IV1	96-Bu053
県BP I-遺構16	1743	「一」	2次(92) 11/	大溝	須・無台坪	外・底	不明	96-Bu046
県BP I-遺構17	1744	「十」	2次(92) H-12/	大溝	須・無台坪	外・底	不明	96-Bu082
県BP I-遺構18	1745	不読	2次(92) H-13/	大溝	須・無台坪	外・底	III	96-Bu069
県BP I-遺構19	1797	「十」	2次(92) I-13他	溝57	須・坏蓋	内・側	IV2カ	96-Bu055
県BP I-遺構20	1798	「一」	2次(92) 14/	大溝	須・坏蓋	鉤・頂	IIIカ	96-Bu025
県BP I-遺構21	1828	「十」	2次(92) 12/	大溝	須・有台坪	外・底	III	96-Bu037
県BP I-遺構22	1861	「十」	2次(92) H-12-13	大溝	須・有台坪	外・底	II 3	96-Bu036
県BP I-遺構23	1862	「十」	2次(92) H-12-13	大溝	須・有台坪	外・底	IV2(古)	96-Bu079
県BP I-遺構24	1863	「十」	2次(92) H-12/	大溝	須・有台坪	外・底	IV1カ	96-Bu051
県BP I-遺構25	1864	「一」	2次(92) H-11/	大溝	須・有台坪	外・底	不明	96-Bu054
県BP I-遺構26	1909	「口」	2次(92) F-G-11	大溝	須・有台坪	外・底	IIIカ	96-Bu041
県BP I-遺構27	1910	「口」	2次(92) H-12-13	大溝	須・有台坪	外・底	IV1	96-Bu074
県BP I-遺構28	1912	漆書。「一」	2次(92) 11/、12/	大溝	須・有台坪	外・底	IV2(古)	96-Bu047
県BP I-包など3	2923	「一」	1次(91) H-10	落ち込み4	須・坏蓋	鉤・頂	IV	96-Bu071
県BP I-包など5	3016	「十」	1次(91) G-10	包含層	須・有台坪	外・底	IV2(古)カ	96-Bu038
県BP I-包など13	3309	「一」、外・底不読	2次(92) F-12	包含層	須・無台坪	内・側/外・底	IV2(古)	96-Bu056
県BP I-包など13	3310	「十」	2次(92)	溝55	須・無台坪	外・底	不明	96-Bu049
県BP I-包など13	3311	「一」	2次(92) H-13	包含層	須・無台坪	外・底	IV1	96-Bu052
県BP I-包など13	3312	不読	2次(92) J-13	溝59	須・無台坪	外・底	不明	96-Bu057
県BP I-包など15	3363	「一」	2次(92) D-11	包含層	須・坏蓋	内・側	VI1	96-Bu061
県BP I-包など17	3457	「口(十カ)」	2次(92) I-12	包含層	須・有台坪	外・底	IVカ	96-Bu063
県BP I-包など17	3458	「口(十カ)」	2次(92) J-12	包含層	須・有台坪	外・底	IV2(古)	96-Bu078
県BP I-包など17	3460	漆書カ。不読	2次(92) F-13	包含層	須・有台坪	体外・側	IV2(古)	96-Bu040
県BP I-包など27	3714	不読	3次(93) J-16	包含層	須・有台坪	外・底	V 1	96-Bu099

県・津幡北バイパス第6次調査区(報告書I掲載分)墨書土器11点

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県BP I-291	068	「口」	6次1区	排土	須・無台坪	体外・側	VI1カ	墨書48
県BP I-291	069	「井」	6次1区	排土	須・無台坪	外・底	VI1	墨書23
県BP I-291	072	「口」	6次1区	SD26	須・有台坪	外・底	VI2	墨書27
県BP I-292	075	「口」	6次1区	排水溝	須・無台坪	外・底	V 2	D202
県BP I-292	084	「口(正カ)」横位	6次1区	SK01	須・無台坪	体外・側	VI1	墨書29
県BP I-292	085	「口(正カ)」横位	6次1区	SK01	須・無台坪	体外・側	VI1	墨書55
県BP I-292	086	「口(正カ)」横位	6次1区	SK01	須・無台坪	体外・側	VI1	墨書49
県BP I-292	087	「口」「口」。2ヶ所	6次1区	SK01	須・無台坪	体外・側	VI2	墨書54
県BP I-292	088	「口」	6次1区	SK01	須・有台坪	体外・側	VI2カ	墨書52
県BP I-292	089	「口」「口」。2ヶ所	6次1区	SK01	須・無台坪	体外・側	VI2	墨書51
県BP I-293	112	「千」	6次1区	SK01	須・坏蓋	外・側	VI2	墨書50

県・河北縦断道路調査区 墨書土器75点、漆書土器2点

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県縦断121	354	不読	E2区 2面	SB116(P119)	須・坏蓋	内・側	IV1	墨3
県縦断121	355	不読	E2区 2面	SB116(P119)	須・有台坪	外・底	VI2	墨2
県縦断128	360	「茂」	B1区 -	排土	須・無台坪	外・底	VI1	墨40
県縦断130	392	「口(中家カ)」	C1区 1-2面 閉層	下層包含層	須・無台坪	外・底	VI2	墨1
県縦断130	396	不読	C区 2面	P221	須・無台坪	外・底	VI2	墨2
県縦断138	490	不読	E区 1面	SD26	須・有台坪	外・底	VI1	D103
県縦断138	499	「口万」	E区 1面	P78	須・無台坪	外・底	VI1	墨1
県縦断140	523	「木」	G区 2面	SD03	須・無台坪	外・底	Vカ	墨1

県・河北縦断道路調査区

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
県縦断140	524	不読	G区 1面	SD07	須・無台坪	外・底	V2カ	D031
県縦断141	541	不読	H区 -	表土除去	須・有台坪	外・底	Vカ	D169
県縦断142	564	「千」	H区 1面	包含層	須・無台坪	外・底	VI2	D163
県縦断142	565	「千」	H区 2面	包含層	須・無台坪	外・底	VI1	D167
県縦断142	566	「千」未墨	H区 1面	包含層	須・無台坪	外・底	V 2	D176
県縦断142	567	「千」	H区 2面	包含層	須・有台坪	外・底	VI1	D171
県縦断142	568	「千」	H区 2面	包含層	須・有台坪	外・底	VI1	墨2
県縦断142	569	「口(十カ)」	H区 1面	水田	須・無台坪	外・底	VI2	D166
県縦断142	570	「千」	H区 1面	水田	須・無台坪	外・底	VI2	D174
県縦断142	571	「東」	H区 1面	包含層	須・坏蓋	外・側	VI2	墨1
県縦断142	572	「繕工」	H区 2面	包含層	須・無台坪	外・底	V	D170
県縦断142	573	「口人」	H区 2面	包含層	須・無台坪	外・底	Vカ	D172
県縦断142	574	「口田」	H区 2面	包含層	須・無台坪	外・底	V	D168
県縦断142	575	不読	H区 2面	包含層	須・有台坪	体外・側	VI2	D173
県縦断146	606	「口」	I区	崩落壁	須・有台坪	外・底	IV2(新)	D175
県縦断209	817	「口(御カ厨)」	B2区 1面	SD1-2-1-5	須・坏蓋	外・底	IV1	墨03
県縦断210	830	「理」	B2区 1面	SD1-6	須・坏蓋	外・側	IV2(古)	墨45
県縦断210	831	「口(巻カ)」	B2区 1面	SD1-6	須・坏蓋	外・側	VI1	墨32
県縦断210	838	「口(里カ人)」	B2区 1面	SD1-6	須・坏蓋	内・側	IIIカ	墨29
県縦断210	840	「千」	B2区 1面	SD1-6	須・有台坪	外・底	VI	墨30
県縦断210	842	不読	B2区 1面	SD1-6	須・有台坪	外・底	IVカ	墨31
県縦断211	848	「大」	B2区 1面	SD1-6	須・無台坪	外・底	V 2	墨02
県縦断211	857	「東」	B2区 1面	SD1-6土器群1	須・無台坪	外・底	VI1	墨21
県縦断211	858	「口」	B2区 1面	SD1-6土器群1	須・無台坪	外・底	VI1	墨22
県縦断211	859	「口(家カ)」	B2区 1面	SD1-6	須・無台坪	外・底	VI2	墨04
県縦断211	860	「千万」	B2区 1面	SD1-6	須・無台坪	外・底	V	墨06
県縦断211	862	「口口」	B2区 1面	SD1-6	須・無台坪	外・底	VI1	墨23
県縦断211	863	不読	B2区 1面	SD1-6	須・無台坪	外・底	-	墨46
県縦断213	896	「書」横位	B2区 1面	SD1-6	土・無台坪	体外・側	VI1	墨25
県縦断213	898	不読。横位	B2区 1面	SD1-6	土・無台坪	体外・側	VI1	D033
県縦断214	899	「子浦」倒位	B2区 1面	SD1-6	土・無台坪	体外・側	VI1	墨05
県縦断216	943	「松」	B2区 1面	SD1-7	須・坏蓋	外・側	VIカ	墨37
県縦断216	947	「腕神口」	B2区 1面	SD1-6-1-7	須・有台坪	外・底	IV1	墨01
県縦断216	956	「口」	B2区 1面	SD1-7	須・有台坪	外・底	IV1	墨41
県縦断216	959	「中」	B2区 1面	SD1-7	須・有台坪	外・底	IV2(古)	墨16
県縦断216	961	「千」	B2区 1面	SD1-7土器群16	須・有台坪	外・底	VI1	墨15
県縦断216	962	「口(平カ)」	B2区 1面	SD1-7土器群8	須・有台坪	外・底	V 2	墨47
県縦断217	966	不読	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	IV	墨44
県縦断217	976	「否万呂」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	III	墨18
県縦断217	982	「方見」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	IV1	墨14
県縦断217	983	不読	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	IV2(古)	墨35
県縦断217	984	「口口(三國カ)」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	IV2(古)	墨34
県縦断217	985	「千口(万カ)」	B2区 1面	SD1-7土器群7・14下層	須・無台坪	外・底	Vカ	墨27
県縦断218	991	「千」	B2区 1面	SD1-7土器群5	須・無台坪	外・底	V 2	墨28
県縦断218	992	「千」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	V 2	墨26
県縦断218	993	「千」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	V 2	墨50
県縦断218	994	「千」	B2区 1面	SD1-6-7	須・無台坪	外・底	VI1	墨48
県縦断218	995	「千」	B2区 1面	SD1-7土器群17	須・無台坪	外・底	VI1	墨49
県縦断218	996	「東」	B2区 1面	SD1-6-7	須・無台坪	外・底	VI2	墨33
県縦断218	997	「平」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	VI2	墨08
県縦断218	998	「平」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	VI2	墨20
県縦断218	999	「平」	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	外・底	VI2	墨12
県縦断218	1005	「平」	B2区 1面	SD1-7土器群18等	須・台付鉢	体外・側	D087	墨11
県縦断224	1054	「賀茂」横位	B2区 1面	SD1-7	土・有台坪	体外・側	VI3	墨13
県縦断225	1059	「賀茂」横位	B2区 1面	SD1-7	土・無台坪	体外・側	VI3	墨11
県縦断225	1060	「賀茂」横位	B2区 1面	SD1-7	土・無台坪	体外・側	VI3	墨17
県縦断225	1073	「口」横位	B2区 1面	SD1-7	須・無台坪	体外・側	VI3	墨36
県縦断226	1083	外・側面「正」横位、外・底「口」	B2区 1面	SD1-7土器群20	内・底土・有台坪	体外・側/外・底	VI3	墨09

第85表 加茂遺跡出土墨書・漆書土器一覽表5

県・河北縦断道路調査区

Table with 9 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 文字内容, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 器種, 記入部位, 時期, 実測番号. Rows include items like 県縦断226, 1085, 「口」, B2区, 1面, SD1-7, etc.

津幡町教委第1～21次確認調査 墨書土器144点

※町Iは2009刊、町IIは2012刊の報告書を示す。

Table with 9 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 文字内容, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 器種, 記入部位, 時期, 実測番号. Rows include items like 町I-12, 15, 「茂」, 町1次, SD11, etc.

津幡町教委第1～21次確認調査 墨書土器144点

※町Iは2009刊、町IIは2012刊の報告書を示す。

Table with 9 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 文字内容, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 器種, 記入部位, 時期, 実測番号. Rows include items like 町II-47, 3, 「干」, 町5次, 北大溝, etc.

第86表 加茂遺跡出土墨書土器、転用硯等一覧表

津幡町教委第1～21次確認調査

※町Iは2009刊、町IIは2012刊の報告書を示す。

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
町II-50	10	「内」横位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-50	11	「内」倒位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-50	13	「内」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台皿	体外・底	VI2	-
町II-50	14	「内」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台皿	体外・底	VI2	-
町II-50	15	「内」倒位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台皿	体外・側	VI2	-
町II-50	17	「内」倒位	町9次	NR01(北大溝)	内黒・無台坏	体外・側	VI3	-
町II-50	18	「内」倒位	町9次	NR01(北大溝)	内黒・有台坏	体外・側	VI2	-
町II-50	20	「内」倒位	町9次	NR01(北大溝)	内黒・有台坏	体外・側	VI3	-
町II-51	21	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・坏蓋	外・底	VI2	-
町II-51	23	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台坏	体外・底	IV2(古)	-
町II-51	24	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台坏	体外・底	V1か	-
町II-51	25	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	IV2(古)	-
町II-51	26	「千」横位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-51	27	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	V2	-
町II-51	28	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	VI2	-
町II-51	30	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	VI2	-
町II-51	31	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台壁	体外・底	V2	-
町II-51	32	「千」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台壁	体外・底	V1	-
町II-51	34	「平」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	VI1	-
町II-51	38	「平」	町9次	NR01(北大溝)	内黒・有台坏	体外・底	VI2	-
町II-51	39	「平」	町9次	NR01(北大溝)	内黒・有台皿	体外・底	VI3	-
町II-51	41	「中家」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	45	「口」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台坏	体外・底	IV2(古)	-
町II-52	46	「口」	町9次	NR01(北大溝)	須・有台坏	体外・底	V1	-
町II-52	49	「十」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	IV2(新)	-
町II-52	50	「生」倒位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	51	「生」倒位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	52	「生」倒位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	56	「中」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	57	「口(天カ)」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・底	VI2	-
町II-52	58	「口」	町9次	NR01(北大溝)	須・無台壁	体外・底	V2	-
町II-52	59	「曹」横位	町9次	NR01(北大溝)	須・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	62	「口」	町9次	NR01(北大溝)	土・無台坏	体外・底	VI2	-
町II-52	63	「口」横位	町9次	NR01(北大溝)	土・無台坏	体外・側	VI2	-
町II-52	64	「口」横位	町9次	NR01(北大溝)	土・無台皿	体外・側	VI2	-
町I-69	9	「口」	町12次	SB03 P15	須・無台坏	体外・底	VI2	-
町I-72	13	判読できず	町14次	表土	須・鉢	体外・側	VI2か	-
町I-73	43	「口(二カ)」	町14次	SD10	須・有台坏	体外・底	V	-
町I-73	46	「山」	町14次	SD10	須・無台坏	体外・底	VI1	-
町I-73	47	「山」	町14次	SD10	須・無台坏	体外・底	VI1	-
町II-35	7	「千」	町15次	包含層	須・無台坏	体外・底	V2	-

[参考]能瀬南遺跡

報告書 図版番号	報告 番号	文字内容	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	器種	記入 部位	時期	実測 番号
町II-04	3	「口寺」	能瀬南	-	須・無台坏	体外・底	IV1	-
町II-04	4	「千」	能瀬南	-	須・無台坏	体外・底	IV2(新)	-
町II-04	-	「真経」	能瀬南	-	-	-	-	-

県・津幡北バイパス第1～4次調査区 硯6点、転用硯87点

報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号
硯I-遺構40	0860	須・円面硯	4次('94)	J-23	道路西側溝	-	有堤有溝 D-035
硯I-包など19	3525	須・円面硯	2次('92)	J-13・14	包含層	-	脚部に透かし D029
硯I-包など19	3526	須・円面硯	2次('92)	I-13	包含層	-	墨の可能性を残す D357
硯I-包など29	3769	須・円面硯	3次('93)	F-16・17	上層包含層	-	脚部縁刻 733
硯I-包など29	3770	須・円面硯	3次('93)	F-18	上層包含層	-	750
硯I-包など36	3988	須・円面硯	4次('94)	I-22	包含層	-	D-007
硯I-遺構1	0004	須・坏蓋	2次('92)	F-14	SB07(P309)	IV2(新)	内面に墨痕 06K-D-703
硯I-遺構1	0005	須・坏蓋	2次('92)	F-14	SB07(P305)	IV2(新)	06K-D-760
硯I-遺構3	0065	須・坏蓋	3次('93)	H-15	SB54(P142東P)	IV2	内面に墨痕。転用硯か 649
硯I-遺構3	0085	須・有台皿	3次('93)	G-15	SB62(P152)	VI2	内面、外底に墨痕 552
硯I-遺構4	0119	須・坏蓋	3次('93)	G-16	SB65(P77)	VI1	内面に墨痕 625
硯I-遺構4	0125	須・有台坏	3次('93)	F-17	SB65(P126)	Vか	外底に墨痕・摩耗 770
硯I-遺構5	0137	須・坏蓋	3次('93)	I-21	SB70(P219)	VI2か	内面に墨痕 523
硯I-遺構8	0213	須・有台坏	2次('92)	I-J-13	2号井戸	VI1	内面に墨痕 05K-D37
硯I-遺構9	0228	須・坏蓋	2次('92)	I-J-13	2号井戸	IV1か	内面に墨痕 06K-D-705
硯I-遺構19	0394	須・坏蓋	2次('92)	G-14	PG-14-11	IV2(古)	D591
硯I-遺構19	0420	須・坏蓋	3次('93)	I-17	29号土坑	VI1	内面に墨痕 485
硯I-遺構20	0429	須・無台皿	3次('93)	G-16	P75土坑か	VI2	内面に墨痕 587
硯I-遺構20	0432	須・坏蓋	3次('93)	G-16	P75土坑か	VI2	内外面に墨痕 494
硯I-遺構21	0458	須・無台坏	3次('93)	F-16	P060	VI1	内面に墨痕 731
硯I-遺構21	0461	須・坏蓋	3次('93)	H-16	P081	VI2か	内面に墨痕 597
硯I-遺構21	0475	須・坏蓋	3次('93)	G-17	P132	III	内面に墨痕 666
硯I-遺構22	0487	須・坏蓋	3次('93)	I-20	P200	III	内面に墨痕 714
硯I-遺構22	0493	須・無台坏	3次('93)		P207	VI1	内・外面に墨痕 507
硯I-遺構22	0494	須・無台坏	3次('93)		P210	VI1か	内面に墨痕か 502
硯I-遺構22	0505	須・坏蓋	3次('93)		P227	不明	内面に墨痕か。転用硯か 511
硯I-遺構27	0638	須・坏蓋	1次('91)	F-G-9	溝30	IV1	内面に墨痕 00B-D9
硯I-大溝7	1226	須・坏蓋	1次('91)	F-6	大溝	V1	内面に墨痕 95-B062
硯I-大溝7	1231	須・坏蓋	1次('91)	F-6	大溝	III	内面に墨痕 00B-D4
硯I-大溝9	1297	須・有台坏	1次('91)	F-6	大溝	IV1	外底に墨痕 00B-D2
硯I-大溝11	1399	須・有台坏	1次('91)	G-8	大溝	Vか	外底に墨痕 00B-D8
硯I-大溝23	1655	須・無台坏	2次('92)	I2/	大溝	IIIか	内底に墨痕 D257
硯I-大溝23	1673	須・無台坏	2次('92)	I3/	大溝	II3～III	墨痕 D020
硯I-大溝27	1778	須・坏蓋	2次('92)	I2/、I4/	大溝	IV1	05K-D39
硯I-大溝27	1779	須・坏蓋	2次('92)	H-11/、H-12/、H-12/、I2/	大溝	IV2(古)	内面に墨痕 06K-D-701
硯I-大溝27	1780	須・坏蓋	2次('92)	H-13/他	大溝	III	内面に墨痕 D022
硯I-大溝28	1799	須・坏蓋	2次('92)	H-13/	大溝	IV1	内面に墨痕 05K-D38
硯I-大溝30	1836	須・有台坏	2次('92)	I4/	大溝	III	D063
硯I-大溝30	1842	須・有台坏	2次('92)	I2/	大溝	II3	外底に墨痕 05K-D36
硯I-大溝32	1867	須・有台坏	2次('92)	I3/	大溝	II3	外底に墨痕 D042
硯I-大溝32	1868	須・有台坏	2次('92)	H-12/、I3/	大溝	III	外底に墨痕 D046
硯I-大溝32	1869	須・有台坏	2次('92)	H-12/	大溝	III	外底に墨痕 06K-D-710
硯I-大溝32	1870	須・有台坏	2次('92)	H-13/	大溝	IIIか	外底に墨痕 06K-D-707
硯I-大溝32	1882	須・有台坏	2次('92)	I2/	大溝	IIIか	外底に墨痕 06K-D-709
硯I-大溝32	1884	須・有台坏	2次('92)	I1/、I2/	大溝	III	外底に墨痕 D170
硯I-大溝32	1886	須・有台坏	2次('92)	I3/	大溝	III	外底に墨痕 06K-D-711
硯I-大溝33	1897	須・有台坏	2次('92)	H-12/	大溝	VI2	外底に墨痕 D457
硯I-大溝33	1906	須・有台坏	2次('92)	I3/	大溝	III	外底に墨痕 D528
硯I-大溝33	1908	須・有台坏	2次('92)	I1～I3/	大溝	II3	外底に墨痕 D044
硯I-大溝35	1941	須・有台坏	2次('92)	H-13/	大溝	III	D240
硯I-大溝35	1956	須・有台坏	2次('92)	H-13/	大溝	IIIか	外底に墨痕 06K-D-704
硯I-大溝35	1957	須・有台坏	2次('92)	I4/	大溝	VI2	外底に墨痕 06K-D-706
硯I-大溝36	1970	須・有台坏	2次('92)	G-11	大溝	III	外底に墨痕 D172
硯I-大溝39	2002	須・蓋	2次('92)	I3/	大溝	不明	内部内面に墨痕 D510
硯I-大溝48	2146	須・無台坏	3次('93)	I5/	大溝	V2	内面・外底に墨痕 130

第87表 加茂遺跡出土転用硯等一覧表

県・津幡北バイパス第1～4次調査区								
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号	
県I-大溝 48	2163	須・無台坏	3次(93)	15/	大溝	V2	内面に墨痕	7
県I-大溝 49	2176	須・稜塊蓋か	3次(93)	15/	大溝	Vか	内面に墨痕	1
県I-大溝 49	2182	須・有台坏	3次(93)	15/	大溝	V1	外底に墨痕	132
県I-大溝 49	2184	須・有台坏	3次(93)	15/	大溝	II3	内底に墨痕か、転用硯 か	8
県I-大溝 49	2186	須・有台坏	3次(93)	16/	大溝	III	墨痕	84
県I-大溝 49	2187	須・有台坏	3次(93)	16/	大溝	IV1か	外底に墨痕	108
県I-大溝 55	2278	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	III	内面に墨痕	59
県I-大溝 55	2279	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	III	内面に墨痕	70
県I-大溝 55	2280	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	IV1	内外面に墨痕	119
県I-大溝 55	2287	須・坏蓋	3次(93)	I-17-18 他	溝141,大溝	VI2か	内底に墨痕	419
県I-大溝 55	2295	須・有台坏	3次(93)	18/	大溝	V1か	内底に墨痕・摩耗	221
県I-大溝 59	2352	須・無台坏	3次(93)	18/	大溝	VI2	外底に墨痕	231
県I-大溝 60	2386	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	VI1	内外面に墨痕	56
県I-大溝 60	2388	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	VI1	内面に墨痕	60
県I-大溝 60	2390	須・坏蓋	3次(93)	18/	大溝	IV2	内面に墨痕	259
県I-大溝 60	2391	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	VI1か	内面に墨痕	79
県I-大溝 65	2481	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	III	内面に墨痕	71
県I-大溝 65	2485	須・坏蓋	3次(93)	17/	大溝	VI2	内面に墨痕か、転用硯 か	101
県I-大溝 65	2491	須・有台皿	3次(93)	18/	大溝	VI2	内面に墨痕	233
県I-大溝 70	2635	須・無台坏	4次(94)	L-22	SX43	VI2	内底に墨痕	D-048
県I-包な ど3	2922	須・坏蓋	1次(91)	I-10	竪溝24	III	内面に墨痕	00B-D10
県I-包な ど3	2924	須・坏蓋	1次(91)	F-10	包含層	IV2	内面に墨痕	00B-D3 D8
県I-包な ど5	3018	須・有台坏	1次(91)	E-7	包含層	IV2(古)	外底に墨痕	00B-D7
県I-包な ど13	3316	須・無台坏	2次(92)	G-13	包含層	IV2(新)	内面に墨痕	06K-D- 708
県I-包な ど15	3368	須・坏蓋	2次(92)	E-13	包含層	VI1	内面に墨痕	D047
県I-包な ど16	3388	須・坏蓋	2次(92)	F-13	包含層	VI1	内面に墨痕	D048
県I-包な ど24	3618	須・無台盤	3次(93)	G-15	上包含層	V2	内面に墨痕、転用硯か	912
県I-包な ど24	3625	須・無台坏	3次(93)	G-17	上包含層	VI2	内面に墨痕、転用硯か	736
県I-包な ど25	3658	須・無台皿	3次(93)	G-16	包含層	VI2	内面に墨痕	95-B152
県I-包な ど26	3663	須・坏蓋	3次(93)	H-15	上包含層	VI2	内面に墨痕	856
県I-包な ど26	3669	須・坏蓋	3次(93)		溝219	III	内面に墨痕	483
県I-包な ど26	3676	須・坏蓋	3次(93)	J-18	上包含層	V2	内面に墨痕	352
県I-包な ど26	3684	須・坏蓋	3次(93)	I-17	上包含層	VI1	内面に墨痕	727
県I-包な ど26	3686	須・無台皿か	3次(93)	I-17	上包含層	VI2	内面に墨痕	728
県I-包な ど27	3715	須・有台塊	3次(93)	I-17	上層包含層	VI2	内底に墨痕	815
県I-包な ど27	3734	須・有台坏	3次(93)	I-19	上層包含層	Vか	外底に墨痕	111
県I-包な ど35	3954	須・有台塊	4次(94)	L-24	排水溝	VI2	外底に墨痕、転用硯か	2D-097
県I-大溝 66	2513	須・長頸瓶	3次(93)	16/	大溝	VI	墨容器、内外面墨付着	344

県・津幡北バイパス第6次調査区(報告書I掲載分) 転用硯9点							
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号
県BP I- 289	004	須・無台盤	6次I区	SD01(大溝)	VI1	内面に墨付着	墨書21
県BP I- 289	005	須・無台坏	6次I区	SD01(大溝)	VI1	内面に墨付着	墨書47
県BP I- 289	022	須・坏蓋	6次I区	SD01(大溝)	VI2	内面に墨痕	D221
県BP I- 289	026	須・無台坏	6次I区	SD01(大溝)	VI1	外底に墨痕	墨書18
県BP I- 291	051	須・坏蓋	6次I区	SD02(大溝南)	VI2	内外面に墨痕	D211
県BP I- 291	070	須・無台坏	6次I区	検出面	VI1	外底に墨痕、転用硯か	墨書26
県BP I- 291	071	須・無台坏	6次I区	排土	VI1	外底に墨痕	墨書25
県BP I- 292	091	須・無台皿	6次I区	SK01	VI2	内面全体に墨痕	D264
県BP I- 294	133	須・壺	6次I区	SK01	VI2	抜面の可能性	D310

県・河北縦断道路調査区 硯1点、転用硯11点								
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号	
県縦断135	461	須・内面硯	D区		包含層	-	透孔5カ所か	D062
県縦断141	563	須・無台皿	H区	I面	水田	VI2	内面に墨痕	D164
県縦断142	571	須・無台坏	H区		包含層	VI2	内面に墨痕	墨1
県縦断146	607	須・有台坏	I区		調査区	IV2	外底平滑	D115
県縦断210	829	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-6	IV1	内面に墨痕	D018
県縦断210	831	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-6	VI1	内面使用	墨32
県縦断211	861	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-6	IV1	外底面に墨痕、転用硯 か	D034
県縦断215	940	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-6～8他	IV2	内面に墨痕	D218
県縦断216	942	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-5～7	III	内面に墨痕	D040
県縦断216	945	須・坏蓋	B2区	I面	SD1-7	III	内底が平滑、転用硯 か	D566
県縦断216	953	須・有台坏	B2区	I面	SD1-7	V	外底面に墨痕	D092
県縦断217	974	須・無台坏	B2区	I面	SD1-7	IV1	体外側に墨痕、転用硯 か	D093

津幡町教委第1～21次確認調査 硯1点、転用硯18点 ※町Iは2009刊、町IIは2012刊の報告書を示す。								
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号	
町I-34	4	須・内面硯	町6次	耕土	-	有堤有溝	-	
町I-12	4	須・有台坏	町1次	SD03	V2	内外面に墨痕、転用硯 か	-	
町I-12	24	須・無台坏	町1次	SD10	VI1	内面に朱墨、墨小分け 容器か	-	
町I-13	34	須・坏蓋	町1次	SD10	IV2(古)	内面に墨・摩耗	-	
町I-13	35	須・坏蓋	町1次	SD10	IV2(古)	内面に墨・摩耗	-	
町II-09	5	須・無台坏	町2次	SD04	VI1	転用硯か	-	
町I-21	3	須・坏蓋	町3次	SD06	VI1か	内面に墨痕・摩耗	-	
町I-27	10	須・有台皿	町5次		建物周辺	VI2	内面に墨痕	-
町I-28	30	須・坏蓋	町5次	NR01(北大溝)	IV2	内面に墨痕	-	
町I-28	31	須・無台盤	町5次	NR01(北大溝)	V1	内面に墨痕	-	
町I-31	82	須・坏蓋	町5次	NR01(北大溝)最 下層	IV2	内面に墨痕	-	
町I-31	84	須・坏蓋	町5次	NR01(北大溝)	VI2	内面に墨痕	-	
町I-31	91	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	VI2	内面に墨痕	-	
町II-49	47	須・無台坏	町5次	北大溝	IV2(古)	内面に墨痕	-	
町I-53	19	須・坏蓋	町9次	NR01(北大溝)	VI2	内面に墨痕	-	
町I-53	23	須・坏蓋	町9次	NR01(北大溝)	VI2	内面に墨埋り	-	
町I-53	28	須・有台坏	町9次	NR01(北大溝)	VI2	外底に墨痕、転用硯か	-	
町I-69	26	須・坏蓋	町12次	SD13	VI1	内面全体に墨痕	-	
町I-73	36	須・坏蓋	町14次	SD10	VI1	内面に墨付着	-	

第88表 加茂遺跡出土仏教関連遺物一覧表 1

○稜塊11点(県BP1～4次調査10点、県河北縦断道路調査1点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 16 rows of data for various investigations.

○鉄鉢46点(県BP1～4次調査8点、同6次調査1点、県河北縦断道路調査11点、町1～21次調査26点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 55 rows of data for various investigations.

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 2 rows of data.

○浄瓶、多口瓶他

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 17 rows of data.

○灯明転用88点(県BP1～4次調査23点、同6次調査5点、県河北縦断道路調査9点、町1～21次調査51点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次・グリッド・面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 75 rows of data.

第4節 古代加茂遺跡の評価に向けて

第89表 加茂遺跡出土仏教関連遺物一覧表 2

○灯明転用

報告書 図版番号	報告 番号	器 種	調査年次、 グリッド、面等	遺 構 名	時期	備 考	実測 番号
町Ⅱ-47	7	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅳ2(古)	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-50	8	須・無台坏	町9次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-69	9	須・無台坏	町12次	SB03 P15	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅱ-13	9	須・無台坏	町4次	SD1	Ⅳ2(古)	内面に煤付着	-
町Ⅱ-47	12	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-28	13	須・無台坏	町5次	SD09	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-28	14	須・無台坏	町5次	SD09	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-28	15	須・無台坏	町5次	SD09	Ⅴ1	内面に煤付着	-
町Ⅰ-52	15	土・無台坏	町9次	NR01(北大溝)	Ⅴ3	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-21	16	須・無台坏	町3次	SD24	Ⅴ1	外面に油煙痕	-
町Ⅱ-47	20	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-51	21	須・坏蓋	町9次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-12	23	須・有台皿	町1次	SD05	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-47	23	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-47	24	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-51	25	須・無台坏	町9次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(古)	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-12	26	須・無台坏	町1次	SD05	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅱ-51	27	須・無台坏	町9次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-51	28	須・無台坏	町9次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	38	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(新)	内面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	38	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(新)	内面に油煙痕	-
町Ⅱ-48	39	須・無台坏	町5次	北大溝	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	41	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ1(古)	全面油煙痕	-
町Ⅱ-48	41	須・有台坏	町5次	北大溝	Ⅴ1	内面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	42	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(新)	内外面に薄い油煙痕	-
町Ⅰ-29	43	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内面口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	44	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(古)か	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	45	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	48	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2(新)	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	49	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	50	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	51	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2か	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	52	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	53	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	54	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	全面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	55	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内面に3ヶ所に油煙痕	-
町Ⅰ-29	56	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	57	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内外面4ヶ所に油煙痕	-
町Ⅰ-29	58	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-29	61	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-29	62	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内面に煤付着	-
町Ⅰ-29	63	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内面全体に油煙痕	-
町Ⅰ-29	64	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内外面4ヶ所に油煙痕	-
町Ⅰ-29	65	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内外面3ヶ所に油煙痕	-
町Ⅰ-29	66	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	内外に厚い油煙痕	-
町Ⅰ-30	70	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	全面に油煙痕	-
町Ⅰ-30	75	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ2	内外面に油煙痕	-
町Ⅰ-31	80	須・坏蓋	町5次	NR01(北大溝)	Ⅳ2	口縁部に油煙痕	-
町Ⅰ-31	89	須・無台坏	町5次	NR01(北大溝)	Ⅴ1	口縁部に油煙痕	-
町Ⅱ-04	1	須・無台坏	能瀬南	-	Ⅳ1	内面に油煙痕	-
町Ⅱ-04	2	須・無台坏	能瀬南	-	Ⅳ2(古)	内面に油煙痕	-

○瓦47点(県BP1~4次調査2点、県河北縦断道路調査3点、町1~21次調査42点)

報告書 図版番号	報告 番号	器 種	調査年次、 グリッド、面等	遺 構 名	時期	備 考	実測 番号
県BP1-土 鏝等3	E117	軒丸瓦	2次(92)	H-11	包含層	-	D041
県BP1-土 鏝等3	E118	平瓦	1次(91)	D-6	溝17	-	I433
県縦断129	376	須・丸瓦	B2	廃土	-	-	D354
県縦断239	1289	須・軒平瓦	B2	1面	SD1-2	-	D123
県縦断239	1290	須・丸瓦	B2	1面	SD1-2	-	D315

○瓦

報告書 図版番号	報告 番号	器 種	調査年次、 グリッド、面等	遺 構 名	時期	備 考	実測 番号
町Ⅰ-27	1	須・軒丸瓦	町5次	建物周辺	-	連珠文。葺手状唐草文	-
町Ⅰ-27	2	須・軒平瓦	町5次	建物周辺	-	連珠文。葺手状唐草文	-
町Ⅰ-27	3	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	三角縁	-
町Ⅰ-38	3	須・平瓦	町7次	SD01	-	-	-
町Ⅰ-27	4	須・鴟尾	町5次	建物周辺	-	頭部か	-
町Ⅰ-27	5	須・鴟尾	町5次	建物周辺	-	尾部	-
町Ⅰ-22	6	須・平瓦	町4次	包含層	-	-	-
町Ⅱ-15	6	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅰ-22	7	須・軒丸瓦	町4次	西側排水溝	-	連珠文。葺手状唐草文	-
町Ⅱ-15	7	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	隅瓦、S33採取	-
町Ⅱ-15	8	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	9	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	10	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	11	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	12	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	13	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	14	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	15	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	16	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-16	17	須・平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	19	須・軒平瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	20	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	21	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	22	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	23	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	24	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-17	25	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-18	26	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-18	27	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-18	28	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-18	29	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-18	30	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	31	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	32	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	33	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	34	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	35	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	36	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-19	37	須・丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-20	38	須・軒丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-20	39	須・軒丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-
町Ⅱ-20	41	須・軒丸瓦	町5次	建物周辺	-	-	-

○瓦塔7点(町1~21次調査7点)

報告書 図版番号	報告 番号	器 種	調査年次、 グリッド、面等	遺 構 名	時期	備 考	実測 番号
町Ⅱ-15	1	須・瓦塔	町5次	建物周辺	-	屋蓋部小片	-
町Ⅱ-15	2	須・瓦塔	町5次	建物周辺	-	屋蓋部小片。S33採取	-
町Ⅱ-15	3	須・瓦塔	町5次	建物周辺	-	軸部初層か。S33採取	-
町Ⅱ-15	4	須・瓦塔	町5次	建物周辺	-	軸部。S33採取	-
町Ⅰ-34	5	須・瓦塔	町6次	包含層	-	第5次17と同一個体か	-
町Ⅱ-15	5	須・瓦塔	町5次	建物周辺	-	軸部	-
町Ⅰ-28	24	土・瓦塔	町5次	建物周辺	-	屋蓋部小片	-

第90表 加茂遺跡出土漆関連遺物、木製食器等一覧表

○漆付着土器等45点 (県BP1~4次調査29点、同6次調査3点、県河北縦断道路調査10点、町1~21次調査3点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次、グリッド、面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 45 rows of data regarding lacquer-coated earthenware and other items.

○施釉陶器13点 (県BP1~4次調査9点、県河北縦断道路調査3点、町1~21次調査1点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次、グリッド、面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 13 rows of data regarding glazed pottery.

○木製食器(盤6点、皿6点、椀4点、箸状木製品8点、円形曲物26点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次、グリッド、面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 26 rows of data regarding wooden eating utensils and bowls.

○製塩土器10点(棒状尖底5点、平底5点)

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次、グリッド、面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 10 rows of data regarding salt-making earthenware.

○鈔幣、和同開珎他

Table with 8 columns: 報告書図版番号, 報告番号, 器種, 調査年次、グリッド、面等, 遺構名, 時期, 備考, 実測番号. Contains 4 rows of data regarding coins and other metal objects.

第91表 加茂遺跡出土木簡、祭祀遺物等一覧表

○木簡							○土製支脚等												
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	備考	実測 番号	報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	備考	実測 番号						
県BP I - 木29	W252	文書木簡	4次(94) J-23	道路西側溝(新)	1号木簡。スギ	43~48	県BP I - 鉄滓等	E119	土師質支脚	1次(91) E-5	溝20		イ447						
県BP I - 296	W25	過所椽木簡	6次 I 区	SD01(大溝)	6号木簡。スギ	木簡01	県BP I - 鉄滓等	E120	土師質支脚	1次(91) G-10	包含層		ホ327						
県BP I - 297	W27	加賀郡榜示札	6次 I 区	SD01(大溝)	5号木簡。ヒノキ	木簡03	県BP I - 鉄滓等	E121	土師質支脚	1次(91) H-1-10	包含層		ホ328						
県縦断241	W06	召喚木簡	B2区 1面	SD1-5底面	スギ	木40	県BP I - 鉄滓等	E122	土師質支脚	3次(93) E-16	32号土坑		768						
町 II - 66	1	木簡	町9次	NR01(北大溝)	「口口卍」	-	県BP I - 鉄滓等	E123	土師質支脚	3次(93) I-17	包含層		847						
町 II - 66	2	木簡	町9次	NR01(北大溝)	「閏十月使便県」	-	県BP I - 鉄滓等	E124	土師質支脚	3次(93) I-17	包含層		849						
町 II - 66	3	木簡	町9次	NR01(北大溝)	習書木簡「口(道か) 道口(道か)」	-	県BP I - 鉄滓等	E125	土師質支脚	4次(94) K-24	SD18		D193						
							県BP I - 鉄滓等	E126	土師質支脚	4次(94) M-22	道路東側溝		D280						
							県BP I - 鉄滓等	E127	土師質支脚	4次(94) M-22	道路東側溝		D281						
							県BP I - 石1	S03	石製支脚か	1次(91) G-8	大溝S-1	被熱	石-3						
							県縦断145	601	土師質支脚	H-1面 1面	水田		D147						
							県縦断239	1304	土師質支脚	B2-1面 1面	SD1-7		D121						
							県縦断240	1327	土師質支脚	B2-2面 2	SD1-8		D180						
							県縦断240	1328	土師質支脚	B2	SD-8		D490						
							県縦断240	1329	土師質支脚	B2-2面 2面	SD1土器溜り セ下		D182						
							町 I - 38	12	土師質支脚	町13次	SD01		-						
							町 II - 37	21	土師質支脚	町16次	包含層		-						
							町 I - 55	64	土師質支脚	町9次	NR01(北大溝)		-						
○木製祭祀具(斎串15点、形代7点)							○砥石、紡輪 ※砥石は中世を含む可能性あり												
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	時期	備考	実測 番号	報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	備考	実測 番号					
県BP I - 木24	W196	斎串	3次(93) E-17	32号土坑	-	スギ	木-109	県BP I - 石1	S10	砥石	3次(93) I-19	P203		石-12					
県BP I - 木24	W197	斎串	3次(93) E-17	32号土坑	-	スギ	木-110	県BP I - 石1	S06	砥石	3次(93) 15ライン	大溝1層③		石-1					
県BP I - 木28	W240	斎串	4次(94) L-22	大オチコミ	VI2・3か	スギ	2	県BP I - 石1	S07	粒石	3次(93) 17,18ライン	大溝(古)		金・石-3					
県BP I - 木28	W241	斎串	4次(94) J-23	大オチコミ	VI2・3か	スギ	3	県BP I - 石1	S08	砥石	3次(93) H-21	181号溝		金・石-4					
県縦断241	W05	斎串	B2区 1面	SD1-5木組み	-	スギ	木24	県BP I - 石1	S09	砥石	3次(93) K-15	上層包含層		石-9					
県縦断242	W08	斎串	B2区 1面	SD1-6	-	スギ	木30	県BP I - 石2	S12	砥石	3次(93) H-17	上層包含層		石-13					
県縦断242	W09	斎串	B2区 1面	SD1-6	-	スギ	木23	県BP I - 石2	S11	砥石	3次(93)	2号井戸		石-14					
県縦断243	W16	斎串	B2区 1面	SD1-7	-	スギ	木15	県BP I - 石2	S13	砥石	2次(92) G-11	包含層		1					
町 I - 56	65	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S14	砥石	2次(92) H-12	大溝上面		2					
町 I - 56	66	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S15	砥石	2次(92)	大溝(古)		3					
町 I - 56	67	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S16	砥石	2次(92) 11/②	大溝(古)		5					
町 I - 56	68	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S17	砥石	2次(92) 12/③	大溝		4					
町 I - 56	69	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S18	砥石	2次(92) I-13	溝66		6					
町 I - 56	70	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S19	砥石	2次(92) F-14	PF14-8		8					
町 I - 56	71	斎串	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	-	-	県BP I - 石2	S20	砥石	2次(92) J-11	包含層		9					
県BP I - 295	W08	形代(人形)か	6次 I 区	SD01(大溝)	VI2・3か	スギ	木26	県BP I - 石2	S21	砥石	2次(92) H-11	包含層		10					
県BP I - 296	W26	形代(人形)	6次 I 区	SD01(大溝)	VI2・3か	墨で顔を描く。ヒノキ	木簡02	県BP I - 石2	S23	砥石	4次(94) L-23	包含層		30					
県縦断243	W17	形代(鏡形)	B2区 1面	SD1-7	-	スギ	木16	県BP I - 石2	S24	砥石	4次(94) J-22	包含層		34					
県縦断243	W18	形代(剣形)	B2区 1面	SD1-7	-	スギ	木26	県BP I - 石3	S25	砥石	4次(94) K-22	P40		32					
県縦断246	W40	形代(剣形)か	B2区 2面	SD1-8	-	スギ	木4	県BP I - 石3	S28	砥石	4次(94) J-23	包含層		35					
県縦断246	W41	形代(刀形)	B2区 2面	SD1-8	-	スギ	木14	県縦断281	S7	砥石	B2区 1面	SD1-7	10c前・中葉	石10					
町 I - 56	72	形代(人形)	町9次	NR01(北大溝)	VI2・3か	目・口・髪を線刻で表現	-	県縦断281	S8	砥石	B2区 2面	SD1-8	7c前半	石03					
○工具、特徴的な土器・木製品							県縦断281							S9	砥石	B2区	SD1土器溜り	7c前半	石07
報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	備考	実測 番号	報告書 図版番号	報告 番号	器種	調査年次、 グリッド、面等	遺構名	備考	実測 番号						
県縦断279	M19	刀子	B2区 1面	SD1-7	8c後~9c	金01	県縦断281	S10	砥石	B2区 2面	SD1-8	10c前・中葉	石02						
県縦断279	M21	刀子	B2区 2面	SD1-8	7c前半	木37	県縦断282	S14	砥石	C2区 1面上層	1層	8c後葉~9c	石12						
県縦断279	M22	鑿	B2区 1面	SD1-5下SD	10c前・中葉	木39	県縦断282	S15	砥石	C2区 1面上層	SX07-a	8c後葉~9c	石02						
町 I - 56	76	鉄製鍵か	町9次	NR01(北大溝)	柄は一部炭化	-	県縦断282	S16	砥石	C2区 1面上層	1層灰シルト	8c後葉~9c	石10						
町 I - 56	77	鉄製線先	町9次	NR01(北大溝)	ほぼ完形	-	県縦断284	S29	砥石	E区 2面	包含層	10c前・中葉	石02						
県縦断242	W10	浮子	B2区 1面	SD1-6	スギ	木35	県縦断284	S30	砥石	G区 1面	SX08	8c後葉~9c	石04						
県縦断242	W11	浮子	B2区 1面	SD1-6	スギ	木22	県縦断281	S4	紡輪	B2区 1面	SD1-6	10c前・中葉	石01						
県縦断243	W19	弓	B2区 1面	SD1-7	イヌガヤ	木5	県縦断281	S5	紡輪	B2区 1面	SD1-6	8c後葉~9c	石04						
県縦断249	W49	弓	B2区 1面	SD1トレンチ	イヌガヤ	木29	県縦断281	S6	紡輪	B2区 1面	SD1土器溜り	10c前・中葉	石08						
県縦断249	W49	弓	B2区 1面	SD1トレンチ	イヌガヤ	木29													
県 I - 遺構11	O288	両黒 土壘	2次(92) J-11	土坑 6		06K-D-758													
県 I - 遺構44	O904	須 壘	4次(94) L-23	道路	体内格子当具(瓦あて具)	D275													
県 I - 包など10	3189	須 鳥形土製品	1次(91) H-9	包含層	外面に線刻	05K-D22													
県縦断138	504	須 鳥形土製品	E区	-	表土除去	外面に線刻													
町 I - 55	60	土 無台盤	町9次	NR01(北大溝)	内面ヘラミガキ	-													
町 I - 55	61	土 無台盤	町9次	NR01(北大溝)	内外面ヘラミガキ	-													
町 II - 39	16	須 把手か	町17次	包含層	中空	-													
県BP I - 木29	W251	扇か	4次(94) L-22	道路西側溝(古)	スギ	28													
県縦断249	W51	扉板	B2区 1面	SD17セ	スギ	特2													

- (10) 引用・参考文献 46 による。
- (11) 引用・参考文献 17 による。
- (12) 引用・参考文献 4、6、8、13、52、55、56 による。
- (13) 例えば、金沢観法寺窯跡群は7世紀から8世紀初頭頃まで継続的に操業し、金沢末窯跡群に移行したと予想される一方、多田ツルガタン遺跡、加茂1・2号窯は単独操業に近いなど、7世紀の須恵器生産の様相は一様でない。この状況は、白鳳期の瓦生産と一種類似する。また、これまでの肉眼観察による胎土分類については、7世紀代に海綿骨針の混ざりを指標に羽咋窯跡群産と考えた資料の一部を河北潟東岸の窯跡に修正する必要がある。
- (14) 柿田祐司氏のご教示による。
- (15) 引用・参考文献 5 による。
- (16) 引用・参考文献 21 による。
- (17) 引用・参考文献 46 による。
- (18) 引用・参考文献 56 による。
- (19) 第7章までは、註(2) に記したとおり、土師器を「ロクロ土師器」、「土師器」に区別、別表記としている。第8章第2節以降は「ロクロ土師器」が大部分を占める時代を扱うことから、「ロクロ土師器」を「土師器」と表現する。
- (20) 引用・参考文献 7、41、49～51 による。また、本稿では、南加賀窯跡群において須恵器生産が終焉する戸津 48号窯期までをⅥ₃期とする。
- (21) 引用・参考文献 5、9、10、35、38、43、53 による。
- (22) 引用・参考文献 14、36、41 による。
- (23) 引用・参考文献 2 による。
- (24) 引用・参考文献 45 による。
- (25) 引用・参考文献 28～30、42～44 による。
- (26) 引用・参考文献 3 による。
- (27) 引用・参考文献 54 による。
- (28) 引用・参考文献 11 による。
- (29) 引用・参考文献 31、32、46、56 による。
- (30) 引用・参考文献 31 による。
- (31) 引用・参考文献 32、46 による。

〔引用・参考文献〕

- 石川考古学研究会 1999『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農耕具』
- 岩瀬由美 2002『鹿島町武部ショウブダ遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 上村和直、百瀬正恒他 1997『長岡京左京出土木簡一』(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 大西 顕 2002『第7章 観法寺須恵器窯跡』『宇ノ気市 指江遺跡・指江B遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 折戸靖幸・酒井英男 2012『かほく市若緑イナバ山窯跡』かほく市教育委員会
- 柿田祐司他 2005『金沢市観法寺墳墓群・観法寺ジンヤマ横穴・観法寺ジンヤマ窯跡・観法寺ヤッタ遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 樫田 誠・望月精司 1985『戸津 第4・5次発掘調査概要報告書』小松市教育委員会
- 川畑謙二 2010『小松市内遺跡発掘調査報告書 6』小松市教育委員会
- 川畑 誠 1987『高松・押水窯跡群について』『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 川畑 誠 1990『高町・押水窯跡群について』『石川考古学研究会々誌 第33号』石川考古学研究会
- 川畑 誠 2019『北陸における官衙・集落と大甕』『第22回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』(独行法)国立文化財機構奈良文化財研究所
- 楠 正勝他 1999『磯部カンダ遺跡』金沢市埋蔵文化財センター
- 熊谷葉月 2020『観法寺ジンヤマ窯跡』『石川県埋蔵文化財情報 第42号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 小嶋芳孝他 1988『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2001『加茂遺跡(第6次)』『石川県埋蔵文化財情報 第6号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2002『加茂遺跡(第7次)』『石川県埋蔵文化財情報 第8号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2003『加茂遺跡(第8次)』『石川県埋蔵文化財情報 第10号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2004『加茂遺跡(第9次)』『石川県埋蔵文化財情報 第12号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2005『加茂遺跡(第10次)』『石川県埋蔵文化財情報 第14号』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2006『加茂遺跡』『石川県埋蔵文化財情報 第15号』
- 庄田知充 2004 石川県金沢市畝田B遺跡・畝田C遺跡 畝田大徳川遺跡木製品追補』金沢市埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1992『雑感-古代の土器と中世の土師器-』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 北陸古代手工業生産史研究会 1989『北陸の古代手工業生産』
- 田嶋明人 2013『平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷』『加賀 横江荘遺跡Ⅱ』白山市・白山市教育委員会
- 田嶋明人 2012『南大溝域の掘立柱建物』『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1～21調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会

26. 出越茂和・楠 正勝 1987『金沢市千木ヤシキダ遺跡』金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合
27. 出越茂和 1989 『金沢市末窯跡群』金沢市教育委員会
28. 出越茂和 1991『金沢市千木ヤシキダ遺跡・Ⅱ』金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合
29. 出越茂和・小西正志 1993『東大寺領横江荘推定地 上荒屋遺跡(二)』金沢市教育委員会・上荒屋西部土地区画整理組合
30. 出越茂和 2000『戸水遺跡群Ⅱ 戸水大西遺跡Ⅰ』金沢市教育委員会
31. 戸谷邦隆・中嶋徹郎 2009『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1～14調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会
32. 戸谷邦隆・吉岡康暢・田嶋明人 2012『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1～21調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会
33. 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所
34. 新潟考古学会 2019『新潟県の考古学Ⅲ』
35. 西野秀和 1985『高松町若緑ヤキノ窯跡』高松町教育委員会
36. 浜岡賢太郎 1974『歴史時代』『志賀町史』資料編第一巻 志賀町役場
37. 平川 南 2001『発見! 古代のお触れ書き 石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札』(財)石川県埋蔵文化財センター・大修館書店
38. 平田天秋 1976『高松町箕打・みやの古窯』石川県教育委員会・みやの古窯跡発掘調査委員会
39. 平田天秋 1986『金沢市戸水C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
40. 藤井秀明 2005『津幡町北中条遺跡(G区)』津幡町・津幡町教育委員会、津幡町北中条地区土地区画整理組合、(株)太陽測地社
41. 北陸古代土器研究会 1992『北陸古代土器研究会 第2号』
42. 北陸古代土器研究会 1997『北陸古代土器研究会 第6号』
43. 北陸古代土器研究会 1997『シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』資料集
44. 北陸古代土器研究会 1997『北陸古代土器研究会 第7号』
45. 干場道治・木立雅朗 1995『末坂ハセタン A・B 遺跡』鳥屋町教育委員会
46. 本田秀生・浜崎悟司・山川史子 2009『津幡町加茂遺跡Ⅰ 一般国道8号改築(津幡北バイパス)にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
47. 宮下栄仁 1987『奈良時代～平安時代』『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
48. 宮本哲郎・新出敬子 2001『金沢市 神野遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会
49. 望月精司 1991『戸津古窯跡群Ⅰ』小松市教育委員会
50. 望月精司 1992『戸津古窯跡群Ⅱ』小松市教育委員会
51. 望月精司 1993『戸津古窯跡群Ⅲ』小松市教育委員会
52. 望月精司 2004『八里向山遺跡群』小松市教育委員会
53. 吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁[古代編]』(株)六一書房
54. 吉岡康暢 2012『総括 加茂遺跡をめぐる問題』『加茂・加茂廃寺遺跡 詳細分布調査(第1～21調査区)発掘調査報告書』津幡町教育委員会
55. 和田龍介 2016『かほく市指江ジュウサンザカ遺跡 多田ツルガタン遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
56. 和田龍介・岩瀬由美・林大智 2018『津幡町加茂遺跡・加茂窯跡群』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター



B・C区完掘状況（垂直）



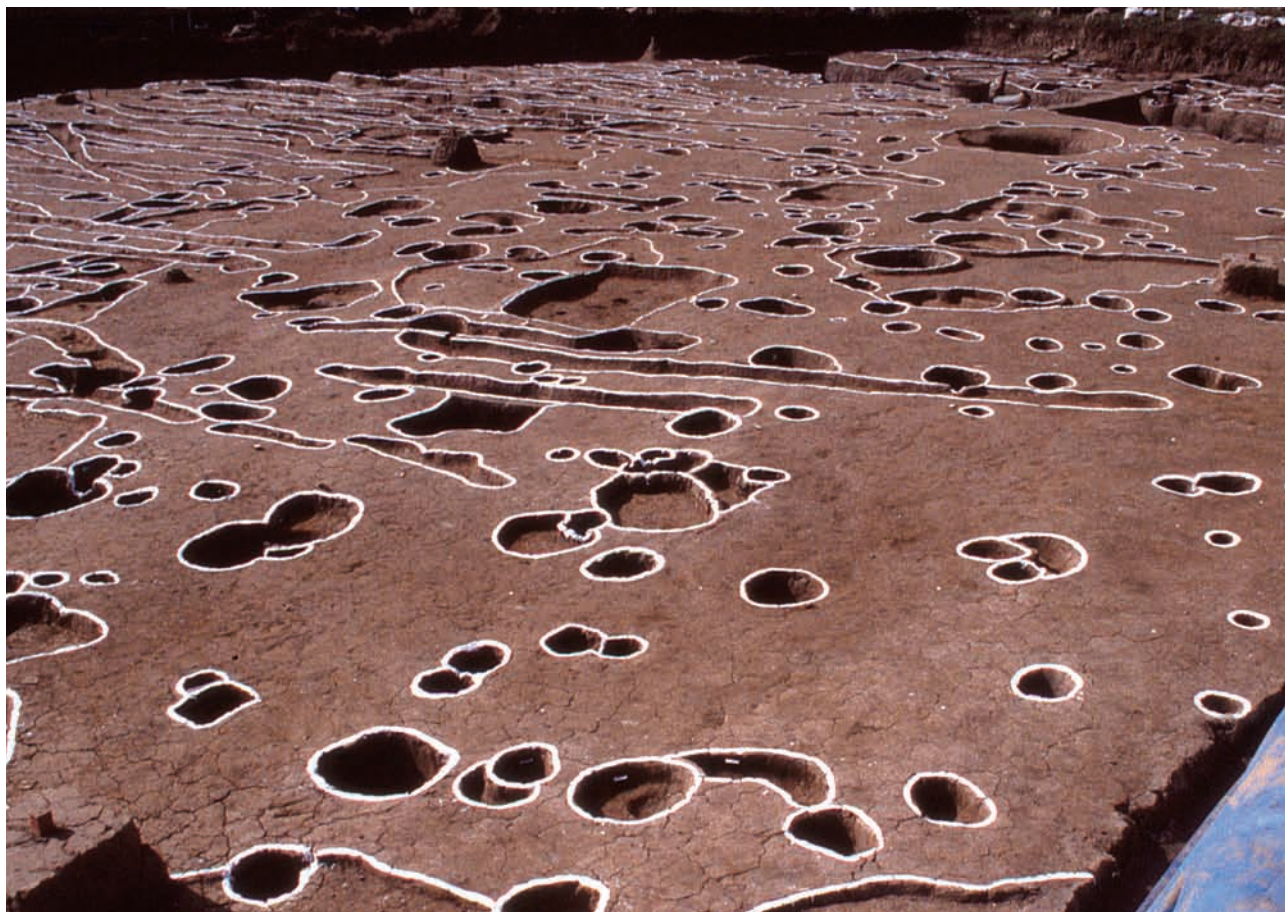
B・C区完掘状況（南から）



B区完掘状況（垂直）



C区完掘状況（垂直）



B区 SB503 ~ 505 周辺完掘状況 (北東から)



B区 SB501・502 完掘状況 (北から)



B区 SB503 周辺完掘状況 (北東から)



B区 SB503 完掘状況 (北から)



B区 SB503P5276 須恵器埋納状況 (北から)



B区 SB504・505 周辺完掘状況 (北東から)



B区 SB509・510 完掘状況 (南東から)



C区 SB511 完掘状況 (西から)



C区 SB511P5005 土層断面 (北から)



C区 SB511P5024 土層断面 (南から)



C区 SB511 完掘状況 (東から)



C区 SB511P5025 完掘状況 (東から)



C区 SB511P5026 完掘状況 (南から)



C区 SB511P5028 土層断面 (南から)



C区 SB511P5027 完掘状況 (南から)



C 区 SI5001 床面検出状況 (南東から)



C 区 SI5001 検出状況 (南東から)



C 区 SI5001 床面下掘り下げ作業 (南西から)



C 区 SI5001 完掘状況 (南から)



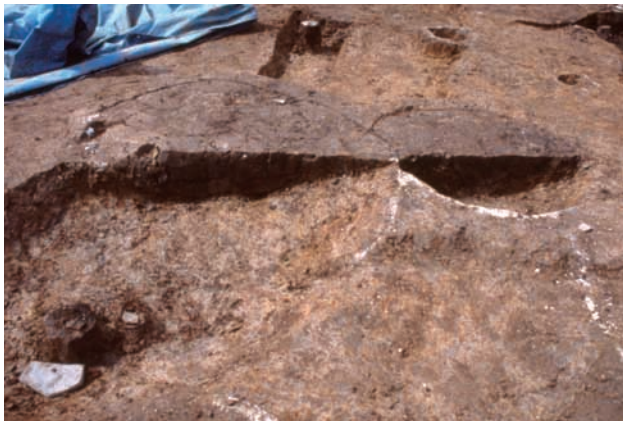
C 区 SI5001 カマド土層断面 (南西から)



C区 SK5001 完掘状況 (南から)



C区 SK5001 土層断面 (西から)



C区 SK5002・03 土層断面 (南東から)



C区 SK5006 完掘状況 (東から)



C区 SK5006 遺物出土状況 (東から)



B区 SK5008 完掘状況 (北から)



B区 SK5008 周辺検出状況 (北東から)



B区 SK5008 土層断面 (北から)



B 区 SK5009 ~ 11 完掘状況 (北東から)



B 区 SK5010・5011 掘り下げ状況 (南から)



B 区 SK5012 ~ 14 完掘状況 (東から)



B 区 SK5015 完掘状況 (北から)



B 区 SK5016 完掘状況 (北から)



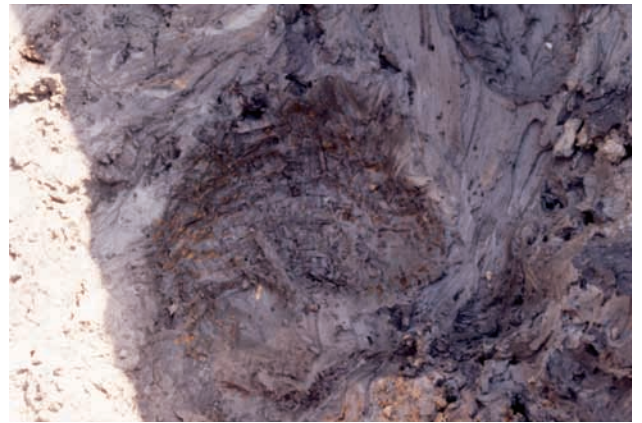
B区 SK5016 検出状況 (北から)



B区 SK5016 土層断面「大寺」墨書土器出土状況 (南西から)



B区 SK5016 第3層斎串出土状況 (東から)



B区 SK5016 籠出土状況 (北から)



B区 SK5016 須恵器甕出土状況 (北東から)



B区 SK5016 底面遺物出土状況 (北西から)



B区 SK5017 ~ 5019 完掘状況 (東から)



B区 SK5020 周辺完掘状況 (北から)



B・C区道路遺構完掘状況(北西から)



B区道路遺構完掘状況(北西から)



B区道路遺構西側溝(SD5017)完掘状況(南東から)



B区道路遺構検出状況(南西から)



B区道路遺構路面掘り下げ作業(北西から)



B区道路遺構西側溝(SD5017)土層断面(h-h'、北西から)



B区道路遺構西側溝(SD5017)土層断面(f-f'、南東から)



C 区道路遺構完掘状況 (南西から)



C 区道路遺構路面完掘状況 (南東から)



C区道路遺構東側溝(SD5016)完掘状況(南東から)



C区道路遺構西側溝(SD5017)完掘状況(南東から)



C区道路遺構東側溝 (SD5016) 検出状況 (北西から)



C区道路遺構西側溝 (SD5016) 完掘状況 (北西から)



C区道路遺構盛土土層断面 (e-e'、北西から)



C区道路遺構東側溝 (SD5016) 土層断面 (a-a'、南東から)



C区道路遺構西側溝 (SD5017) 土層断面 (b-b'、北西から)



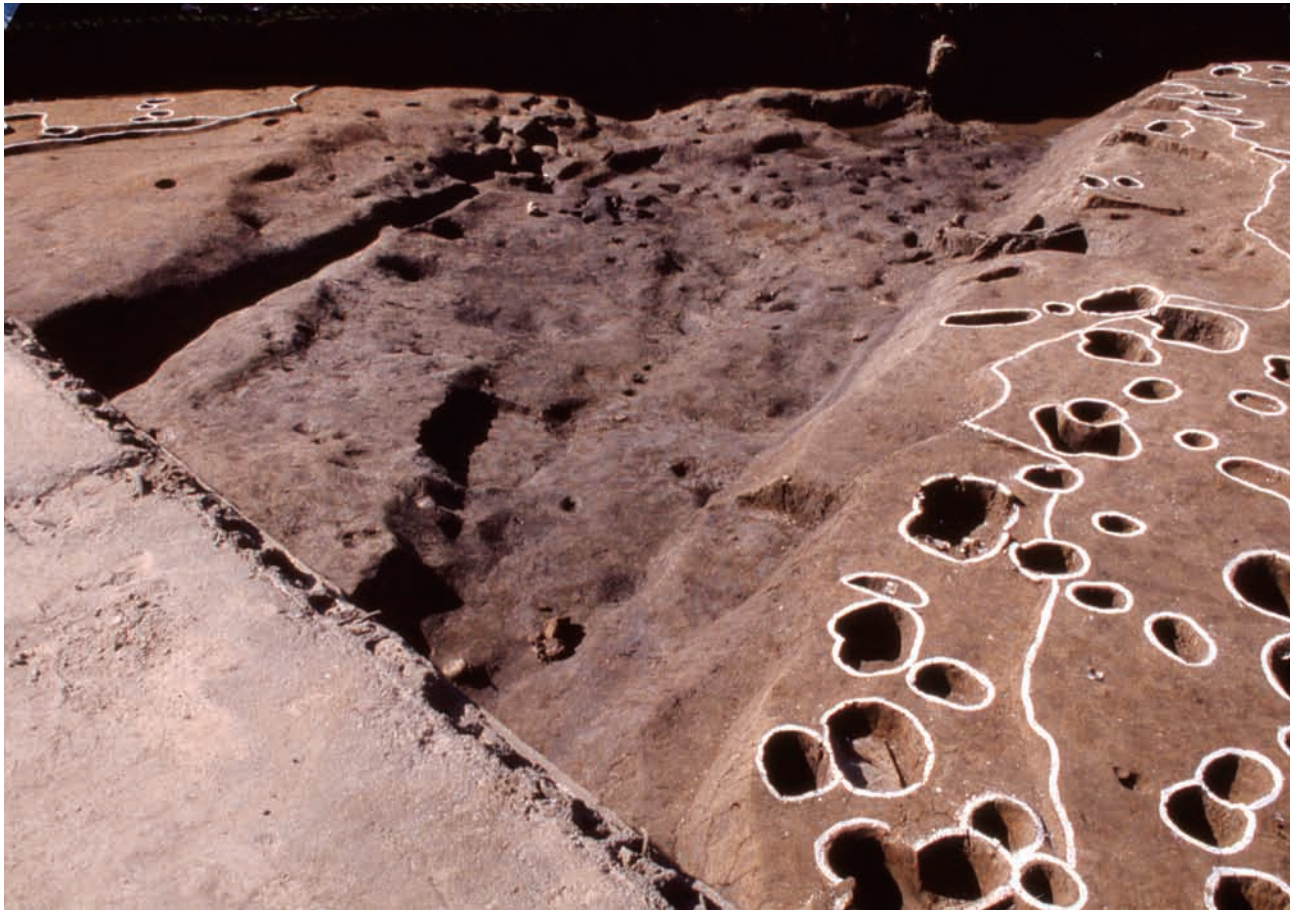
C区道路遺構西側溝 (SD5017) 土層断面 (北東壁、北西から)



C区道路遺構路面盛土掘り下げ作業 (南東から)



C区道路遺構木材出土状況 (北から)



B区大溝完掘状況(北東から)



B区大溝南側流路周辺完掘状況(南西から)



B 区大溝検出状況 (北東から)



B 区大溝土層断面 (b-b' 北半、南西から)



B 区大溝北肩部杭列完掘状況 (南西から)



B 区大溝北側流路掘り下げ作業 (北東から)



B 区大溝北側流路甕出土状況 (西から)



B 区大溝北側流路巡方出土状況 (No.507、西から)



B 区大溝北側流路曲物出土状況 (No.513、東から)



B 区大溝北側流路墨書土器出土状況 (北西から)



B 区 SD5061 完掘状況 (北から)



B 区 SD5061 検出状況 (北東から)



B 区 SD5061 土層断面 (c-c'、南から)



B 区 SD5061 土層断面 (b-b'、南から)



B 区 SD5061 木製品出土状況 (南から)



C区 SD5001(新) 完掘状況(南西から)



C区 SD5001(旧) 完掘状況(南西から)



P・Q-21・22 区 SD5001(新) 完掘状況 (北東から)



Q-21・22 区 SD5001(新) 北側完掘状況 (東から)



Q-22 区 SD5001(新) 土層断面 (a-a'、北西から)



SD5001(旧) 土層断面 (c-c'、南西から)



SD5001(旧) 完掘状況 (北東から)



SD5001(旧) 3号木簡 (834) 出土状況



SD5001(旧) 2号木簡 (833) 出土状況



SD5001(旧) 刀形 (1350) 出土状況



B 区小溝群完掘状況 (西から)



B 区 SD5064 ~ 67 完掘状況 (北西から)



B 区 SD5087 ~ 90 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5097 ~ 5109 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5090 ~ 5103 周辺完掘状況 (南から)



B 区 SD5111 ~ 15 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5055・56 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5035 ~ 37 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5025 ~ 36 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5058・59 周辺完掘状況 (北東から)



B 区 SD5019・20 周辺完掘状況 (北から)



B 区 SD5023 完掘状況 (北東から)



B 区 SD5027 完掘状況 (北東から)



C 区 SD5004 完掘状況 (東から)



C 区 SD5006 掘削状況 (東から)



C 区 SD5006 掘削状況 (西から)



C 区 SD5006 遺物出土状況 (東から)



C 区 SD5006 検出状況 (東から)



C区SD5008～12完掘状況(東から)



C区SD5008～12完掘状況(東から)



C区SD5010～12完掘状況(南から)



C区SD5018土層断面(西から)



C区南端鞍部完掘状況(東から)



C区南端鞍部完掘状況(南東から)



C区南端鞍部検出作業(南から)



N20区完掘状況(西から)



2



20



33



66



5



7



21



34



67



9



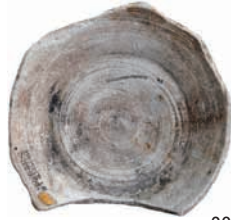
35



70



11



22



36



71



12



37



72



13



27



44



46



73



14



28



49



74



15



30



54



76



19



31



63



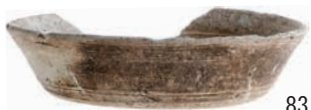
81



64



82



83



84



85



94



108



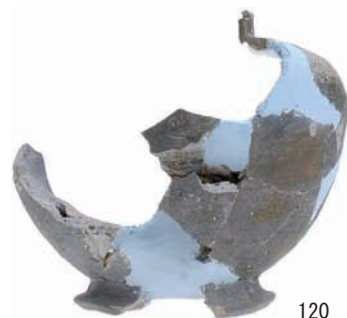
117



116



103



120



123



88



89



90



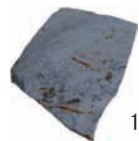
101



102



104



130



131



132



145



149



150



151



91



92



105



107



153



155



158



172



186



159



161



178



187



160



163



188



165



166



190



167



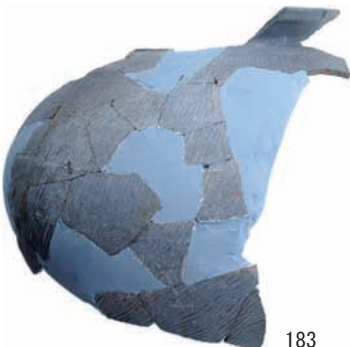
181



191



175



183



192



168



193



169



177



184



198



199



203



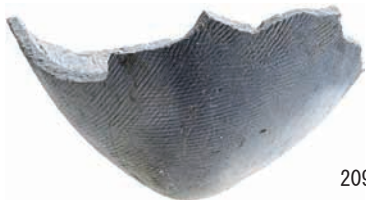
204



206



208



209



212



216



219



222



223



227



227



230



232



231



242



242



248



247



250



258



259



260



238



240



246



248



214



261



265



279



285



298



266



280



288



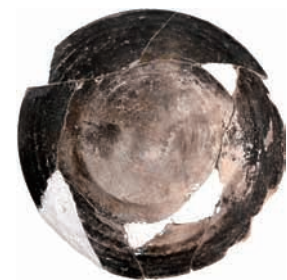
301



267



270



290



302



271



291



303



272



282



292



304



273



283



294



306



277



283



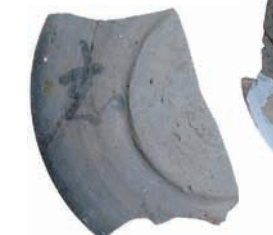
296



281



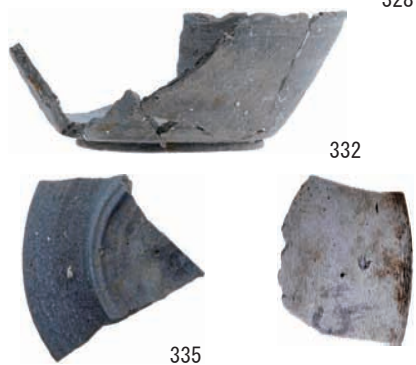
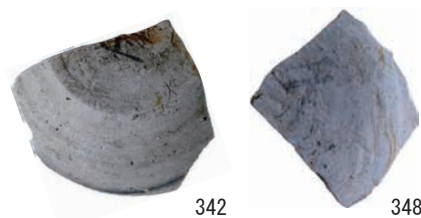
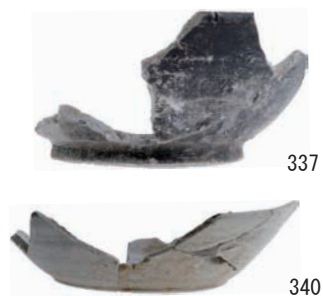
284



297



307





356



358



361



362



364



366



373



374



376



377



389



391



392



394



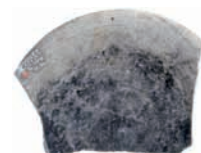
395



397



398



401



402



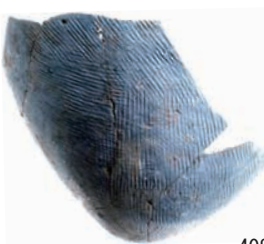
403



405



406



408



410



415



417



419



420



421



422



423



424



2012



425



428





431



441



450



459



432



442



451



433



445



452



461



434



446



453



462



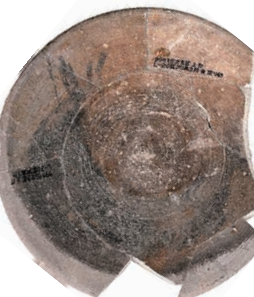
435



447



454



463



455



464



438



449



456



439



450



457



465



440



451



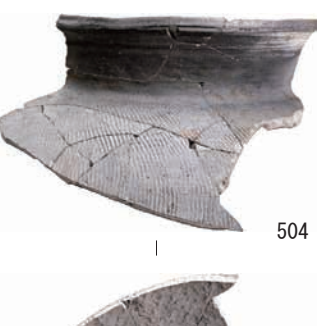
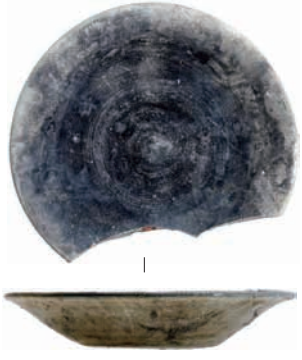
458



466



467



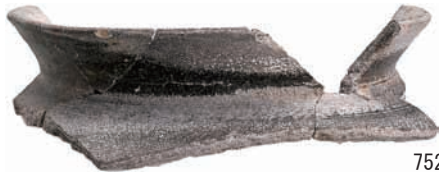








749



752



794

795

796



754



756



799



802



762



776



800



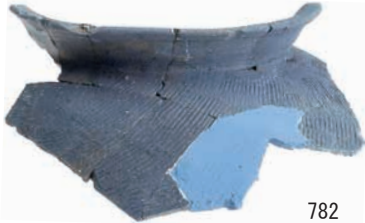
777



804



764



782



805



817



771



772



786



789

788



793



807



822



775



808



824



813



809



832





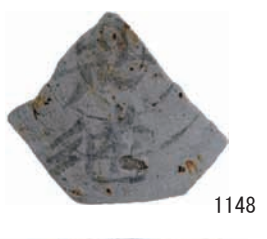




1112



1128



1148



1164



1113



1131



1153



1165



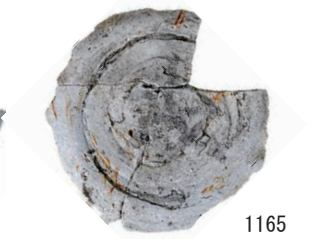
1117



1132



1156



1165



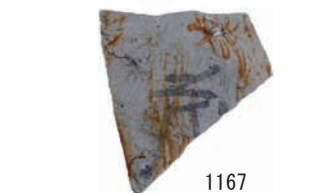
1119



1135



1157



1167



1121



1136



1158



1169



1126



1140



1160



1170



1127



1143



1161



1171



1129



1149



1162



1171



1129



1149



1162



1175



1129



1149



1163



1177



1129



1149



1163



1177



1182



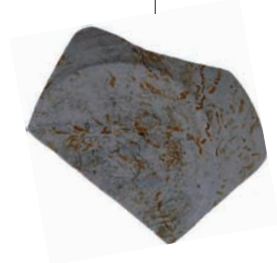
1198



1184



1201



1202



1220



1232



1186



1221



1236



1188



1209



1237



1210



1224



1238



1189



1217



1225



1239



1193



1219



1227



1229



1242



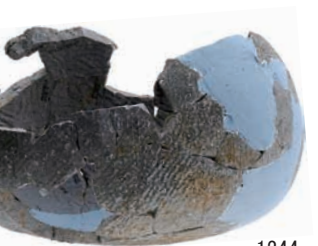
1194



1218



1228



1244



1195



1222



1246



1252



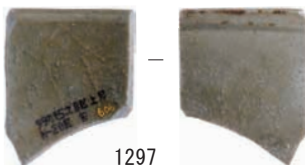
1311



1255



1262



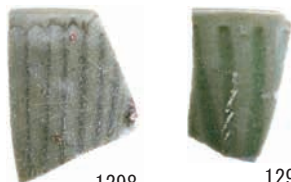
1297



1313



1265



1298

1299



1318



1269



1278



1284



1300



1315



1272



1280



1285



1317



1315



1273



1281



1287



1305



1275



1283



1288



1307



1277



1283



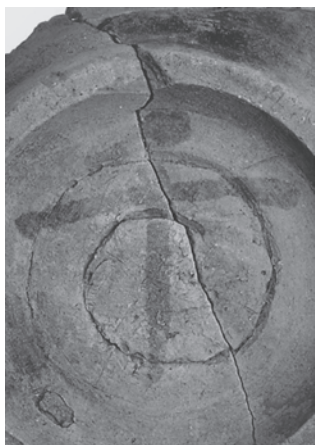
1294



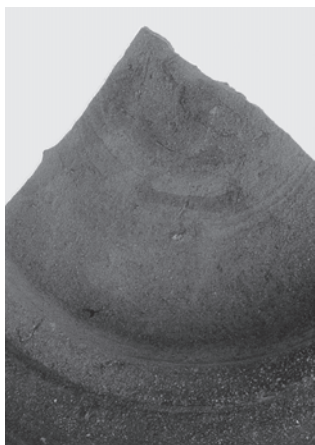
1308



1350



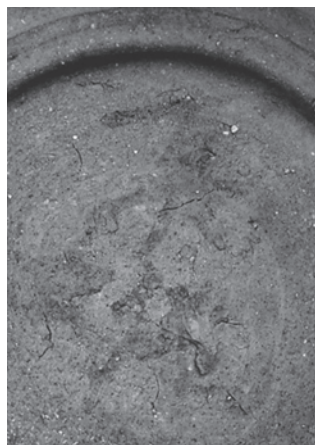
9 「千」



33 □(継カ)



49 「真継」



65 「真継」□



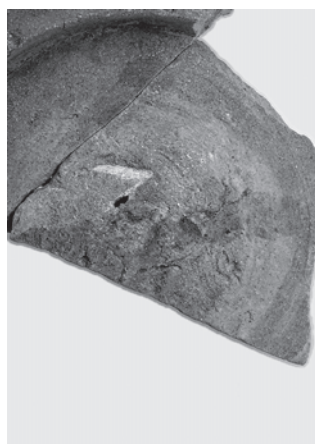
70 「大寺」



130 「真」



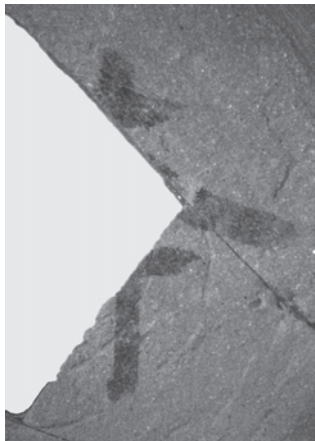
190 □(茂カ)



193 「千」



198 漆書「上」



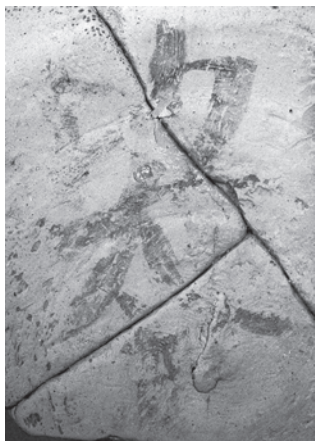
216 「本」



223 □(真カ)人



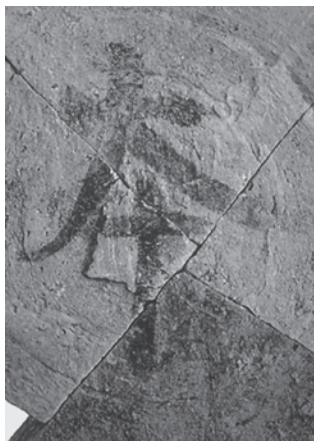
231 「真継」



236 □(山カ)本



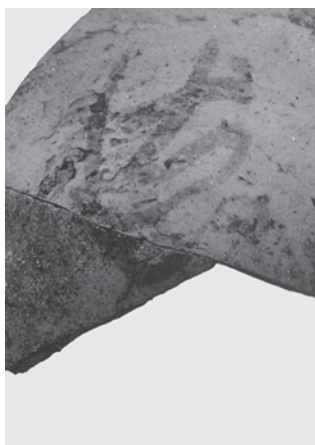
241 「茂」



242 「本」



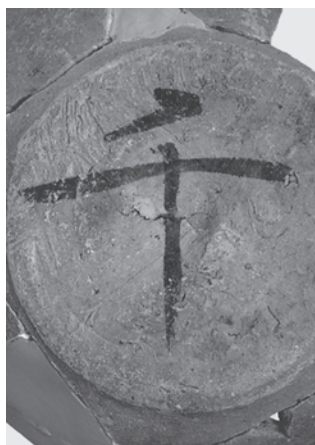
273 □(主カ)



279 「□」



281 「千」



282 「千」



285 「千」



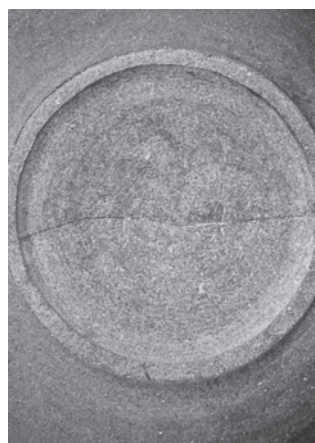
290 「本」



297 「□」



300 「千」



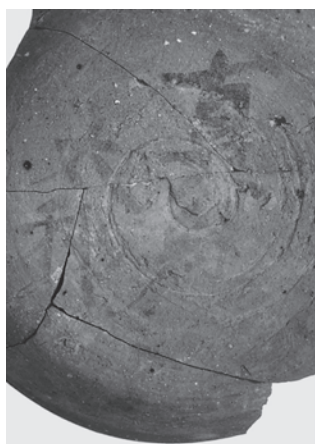
301 転用碗



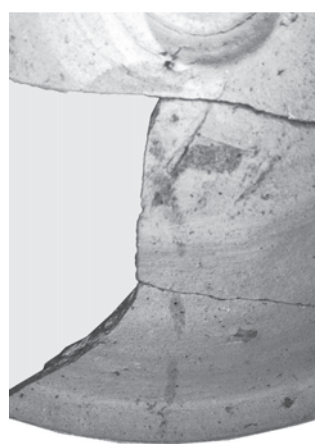
346 「正月」



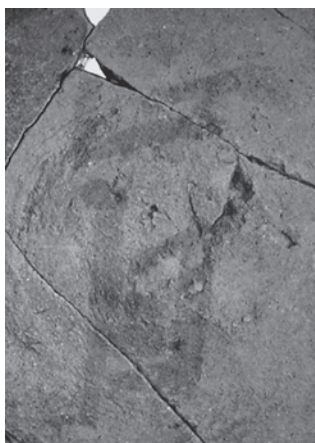
348 「千」



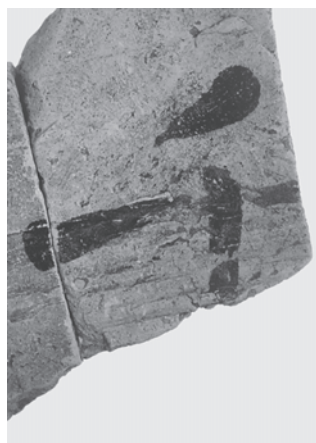
350 「真継」「太邇」



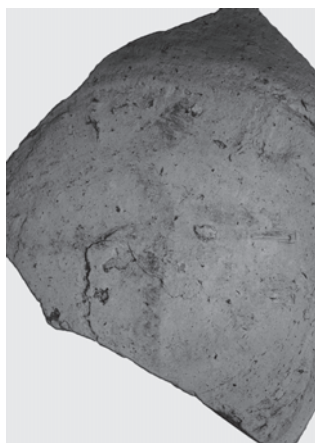
374 「□(千カ)」



376 「正月」



389 「千」



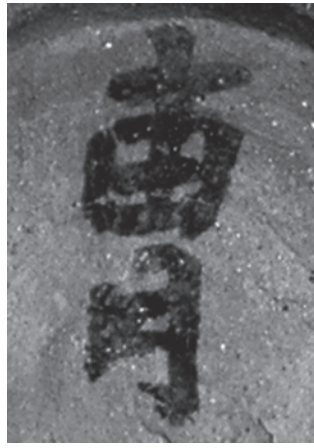
396 「千」



397 「正月」



428 「正月」



432 「曹」



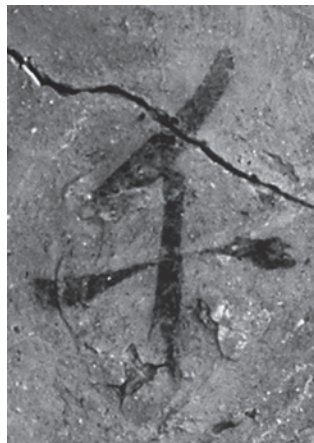
435 「千」



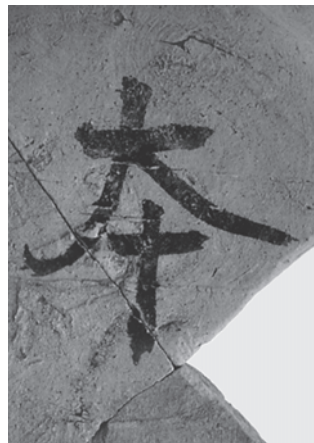
437 「尢」



438 「正月」



440 「千」



442 「本」



444 「正月」



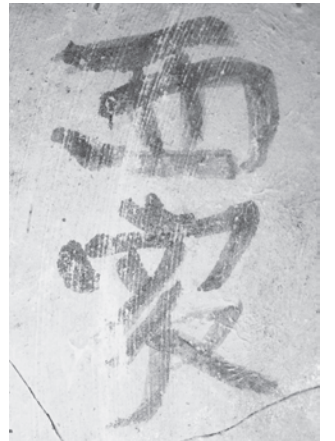
445 「正月」



447 「本」



448 「室」



451 「西家」



452 「尢」



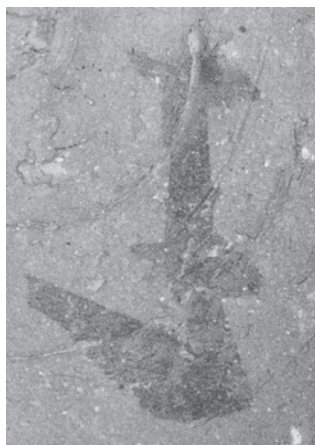
453 「尢」



454 「千」



456 「正月」



461 「卅」



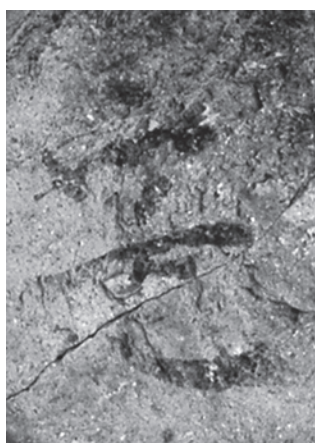
465 「正月」



468 「正月」



470 「卅」



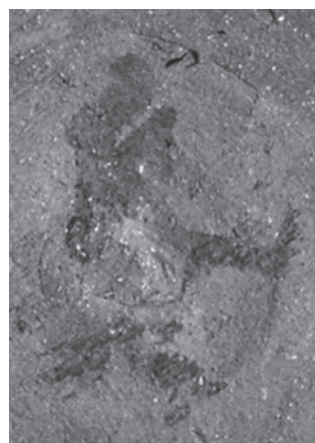
536 「宅」



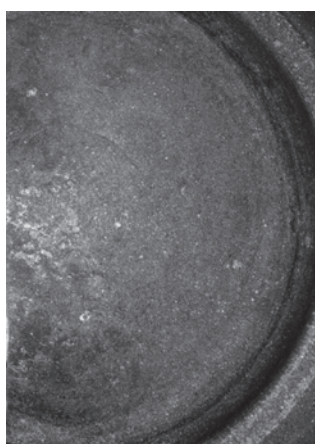
561 「真継」



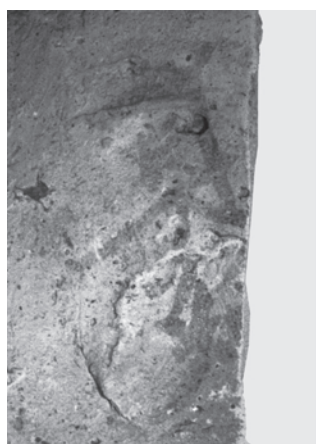
567 「人」



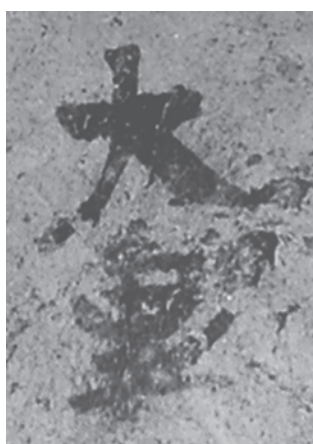
578 「丸口(大カ)」



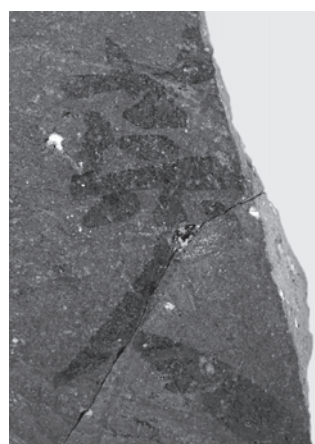
579 「茂」



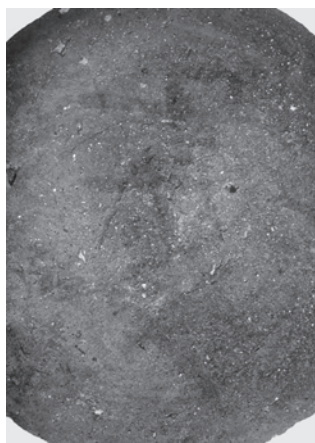
593 「真継」



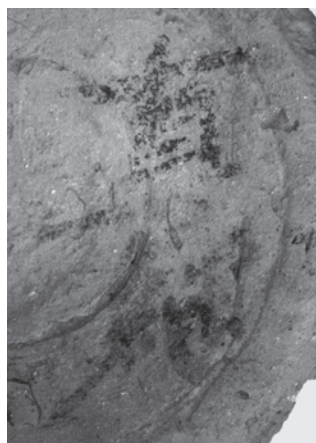
600 「大里」



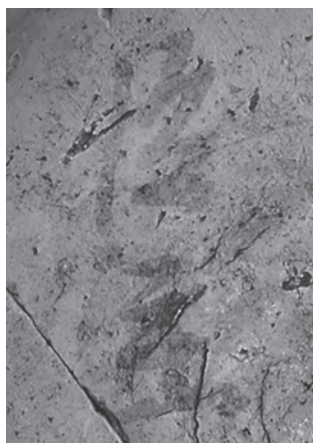
608 「真人」



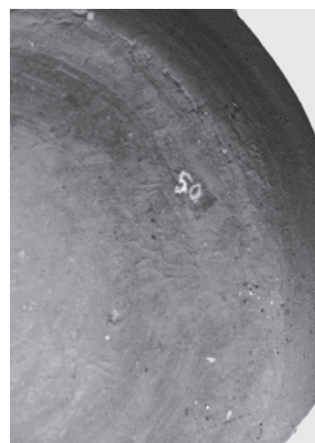
619 「真人」



620 「真継」



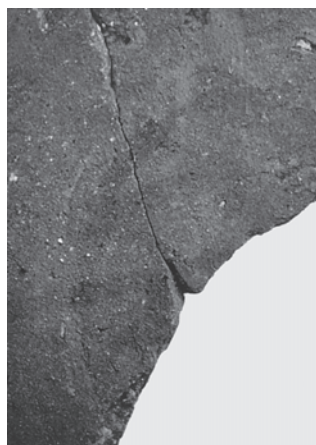
621 「臣主」



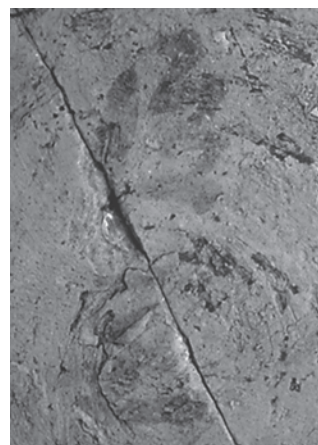
625 「真継」



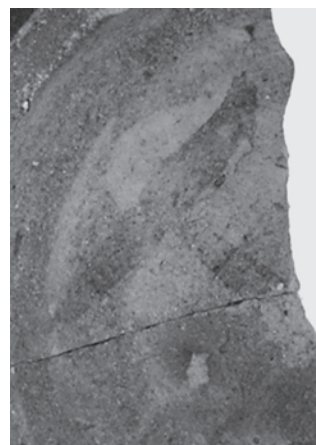
626 「臣主」



637 「□□」



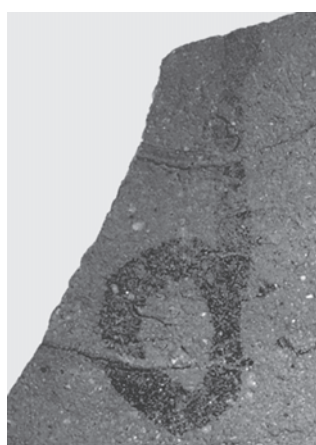
640 「臣主」



690 「人」



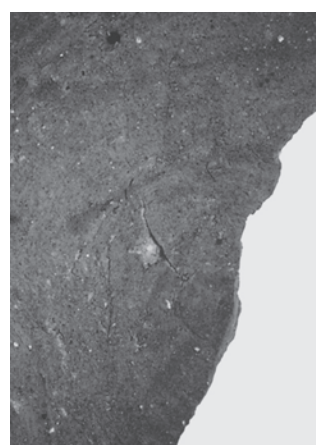
692 「人」「人」



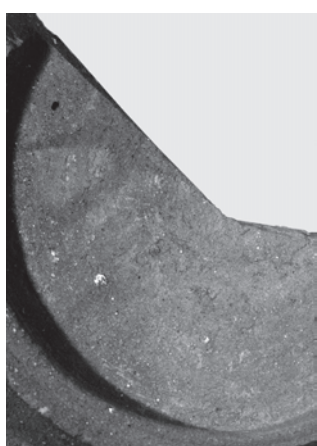
733 □



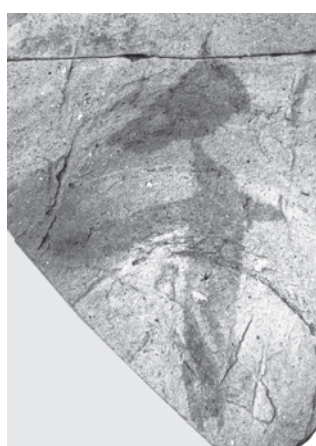
800 「茂」



810 「真継」



858 「□□(真継カ)」



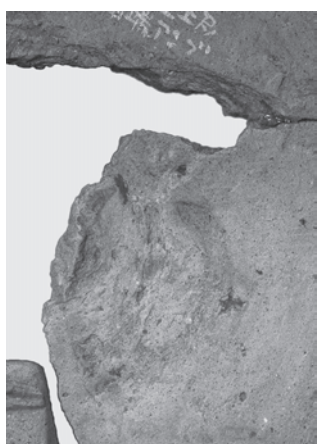
863 「千」



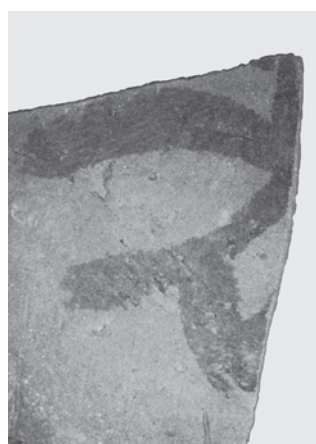
878 「□(真継カ)□」



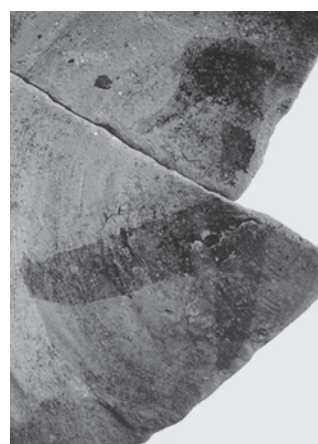
882 「□(万カ)麻呂」



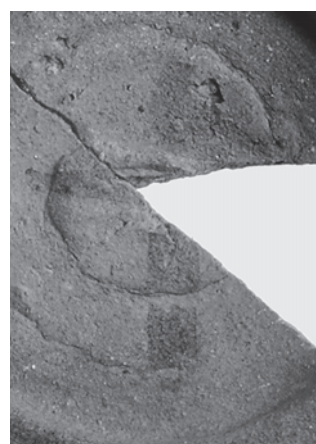
891 □



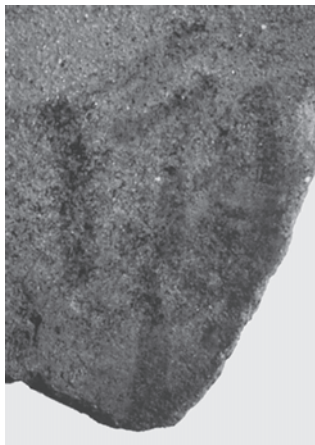
894 「□(衣カ)」



949 「千」



950 「千」



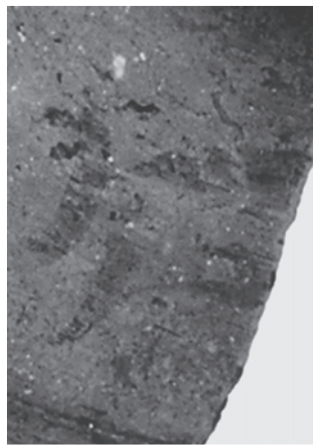
956 「酒口」



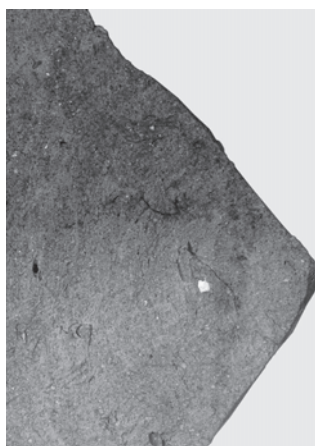
978 「茂」



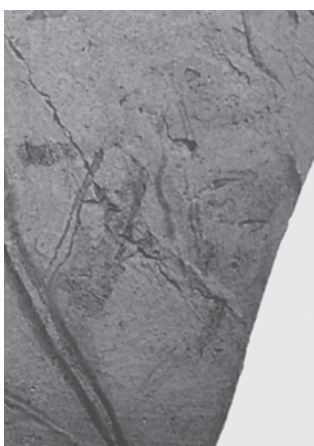
986 「口(吉カ)」



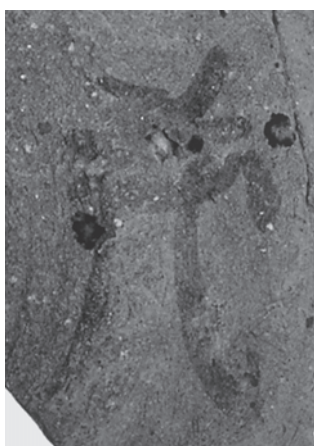
1059 「口(公カ)」



1070 「口(千カ)」



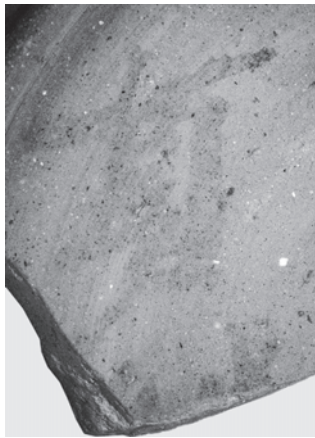
1072 「茂」



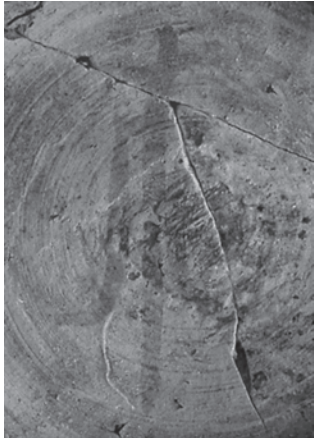
1073 「茂」



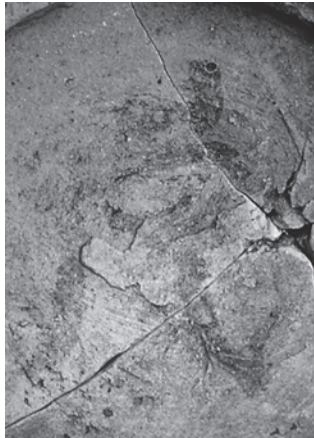
1074 「千」「十」「口」



1089 「真口(継カ)」



1108 「朮」



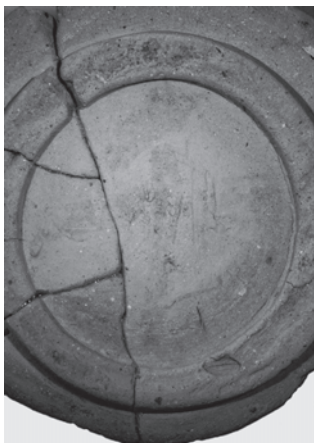
1126 「茂」



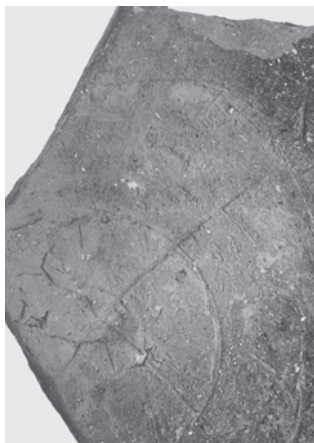
1127 「口口(田カ)」



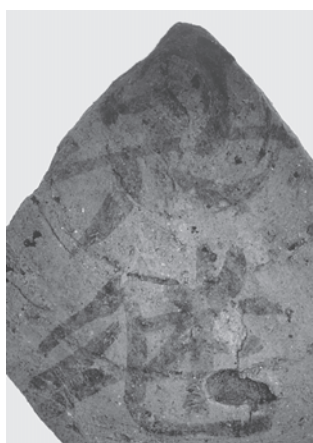
1128 「口(東カ)」



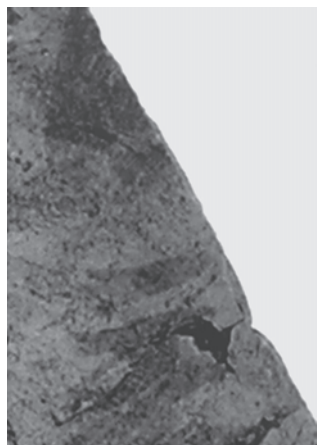
1132 「千」



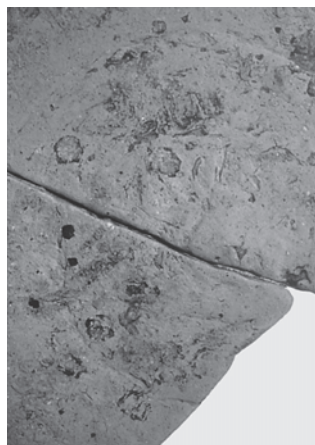
1135 □



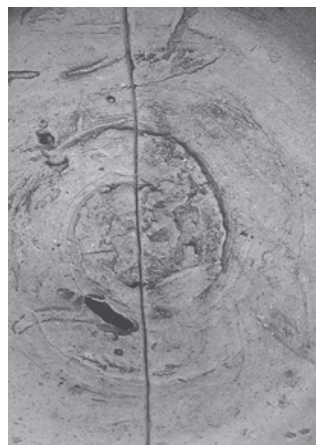
1148 「真継」



1149 「□(臣カ)主」



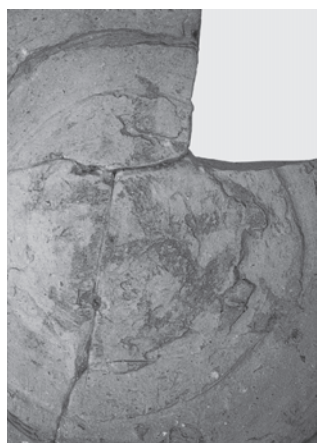
1153 「□(宅カ)」



1158 「正□(月カ)」



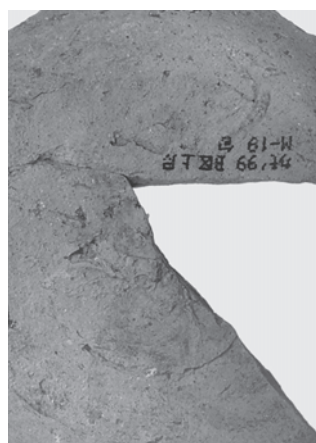
1163 「□」



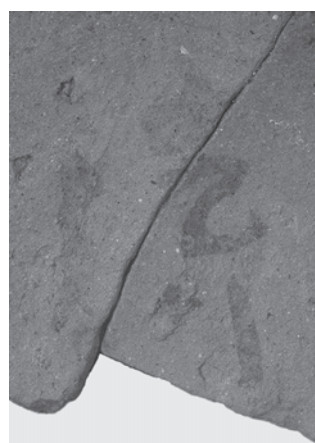
1165 「茂」



1167 「茂」



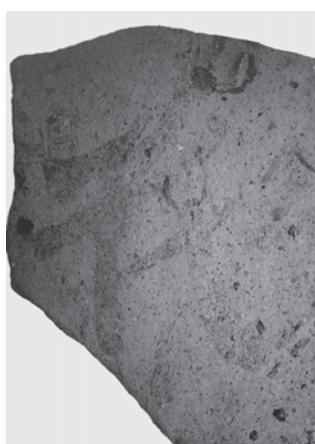
1168 「真(継カ)」



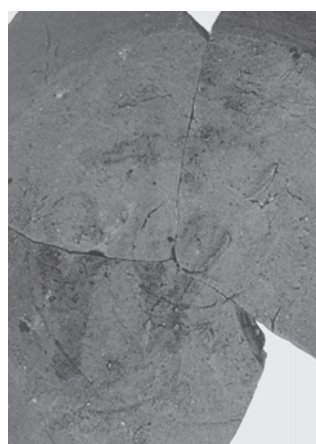
1169 「□」



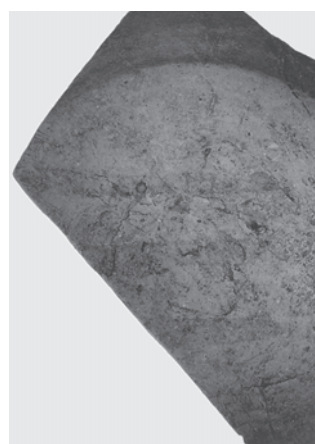
1170 「□(主カ)」



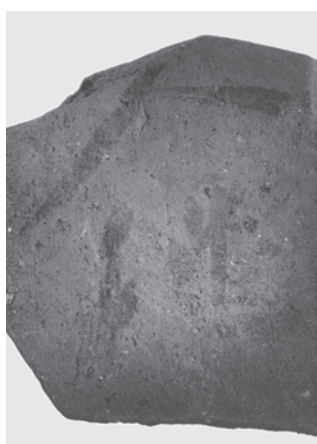
1171 「茂」



1177 「茂」



1184 「□(主カ)」



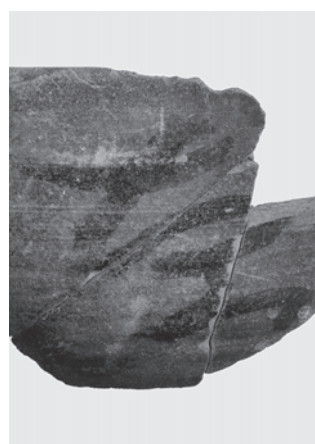
1188 「□(真カ)継」



1194 □



1209 □



1344 「□(左カ)」



遺構完掘状況 (西から)



K13 区 P5401 ~ 03 周辺完掘状況 (西から)



K14 区 SD5402・03 周辺完掘状況 (東から)



K14 区 P5404 周辺完掘状況 (北東から)



K14 区 P5405 ~ 07 周辺完掘状況 (東から)



K14・15 区 SD5405 ~ 11 周辺完掘状況 (西から)



D-1区 K15区 P5412 土層断面 (北から)



D-1区 L16区 SD5413 ~ 16 完掘状況 (西から)



D-1区 L・K17区 SD5418 ~ 22 完掘状況 (西から)



D-2区遺構完掘状況 (南から)



D-1区・A区出土遺物



完掘状況（南東から）



完掘状況（北西から）



完掘状況 (西から)



I-119区完掘状況 (南西から)



I-119区完掘状況 (北東から)



H-120・21区完掘状況 (北西から)



上層 SD506 完掘状況 (南西から)



上層 SD506 土層断面 (b-b'、南西から)



上層 P522 土層断面 (南東から)



I-119区遺構検出作業風景 (北西から)



SI551 ~ 553(SD504・511) 完掘状況 (西から)



SI553・554 完掘状況 (北東から)



SI551～554 検出状況(南西から)



SI551～553 完掘状況(南東から)



SI551～553(SD504・551) 完掘状況(南西から)



SI551・552(P513) 土層断面(北東から)



SI551～553(SD504・511)、SD513 完掘状況(北東から)



SI553(SD511) 完掘状況(北東から)



SI553(SD511) 完掘状況(北東から)



SI553(SD511) 土層断面(a-a'、北から)



SI554(SD502) 完掘状況 (南西から)



SI554(SD502) 完掘状況 (北東から)



SI554(SD502) 遺物出土状況 (北東から)



SI554(SD502) 管玉出土状況 (土層断面 g-g' 土層 7、南から)



SI553・554 礎板出土状況 (北東から)



SI553・554 礎板出土状況 (P584 ~ 594、南から)



SI551・552(SD504)、SI554(SD502) 完掘状況 (南から)



SI553-e 環 (P507) 土層断面 (北東から)



SI553-e 環 P585 礎板出土状況 (東から)



SI553-f 環 P506 礎板出土状況 (東から)



SI554-a 環 (P501) 柱根出土状況 (北東から)



SI554-a 環 P501 礎板出土状況 (南西から)



SI554-a 環 P502 礎板出土状況 (南西から)



SI554-a 環 P502 礎板出土状況 (南西から)



SI554-a 環 P504 礎板出土状況 (南西から)



完掘状況 (I・J-19・20 区、北東から)



SI554-a 環 P586・587 礎板出土状況 (東から)



SI554-b 環 P582 礎板出土状況 (北から)



SI554-b 環 P588 礎板出土状況 (北東から)



SI554-b 環 P584 礎板出土状況 (南東から)



SI554-c・d 環 P595・596 礎板出土状況 (東から)



SI554-c 環 P589 礎板出土状況 (東から)



SI554-d 環 P590・591 礎板出土状況 (南から)



SK501 土層断面 (北東から)



SK502 完掘状況 (西から)



SK502 完掘状況 (北東から)



SK502 土層断面 (西から)



P511 土層断面 (9-9、南から)



P547 柱根出土状況 (南から)



SD505・513 周辺完掘状況 (北西から)



SD505・513 検出状況 (北東から)



SD504 完掘状況 (北東から)



SD508・512 完掘状況 (西から)



SD508・512 完掘状況 (東から)



SD508 土層断面 (13-13'、東から)



SD515 完掘状況 (東から)



遺構掘削作業風景 (東から)



1349



1363



1364



1350



1351



1352



1353



1354



1355



1356



1357



1358



1359



1360



1361



1362



1365



1366



1367



1368



1369



1371



1374



1375



1372



1376



1377



1378



1380



1381



1382



1383



1385



1386



1387



1388



1389



1390



1391



1392



1393



1394



1395



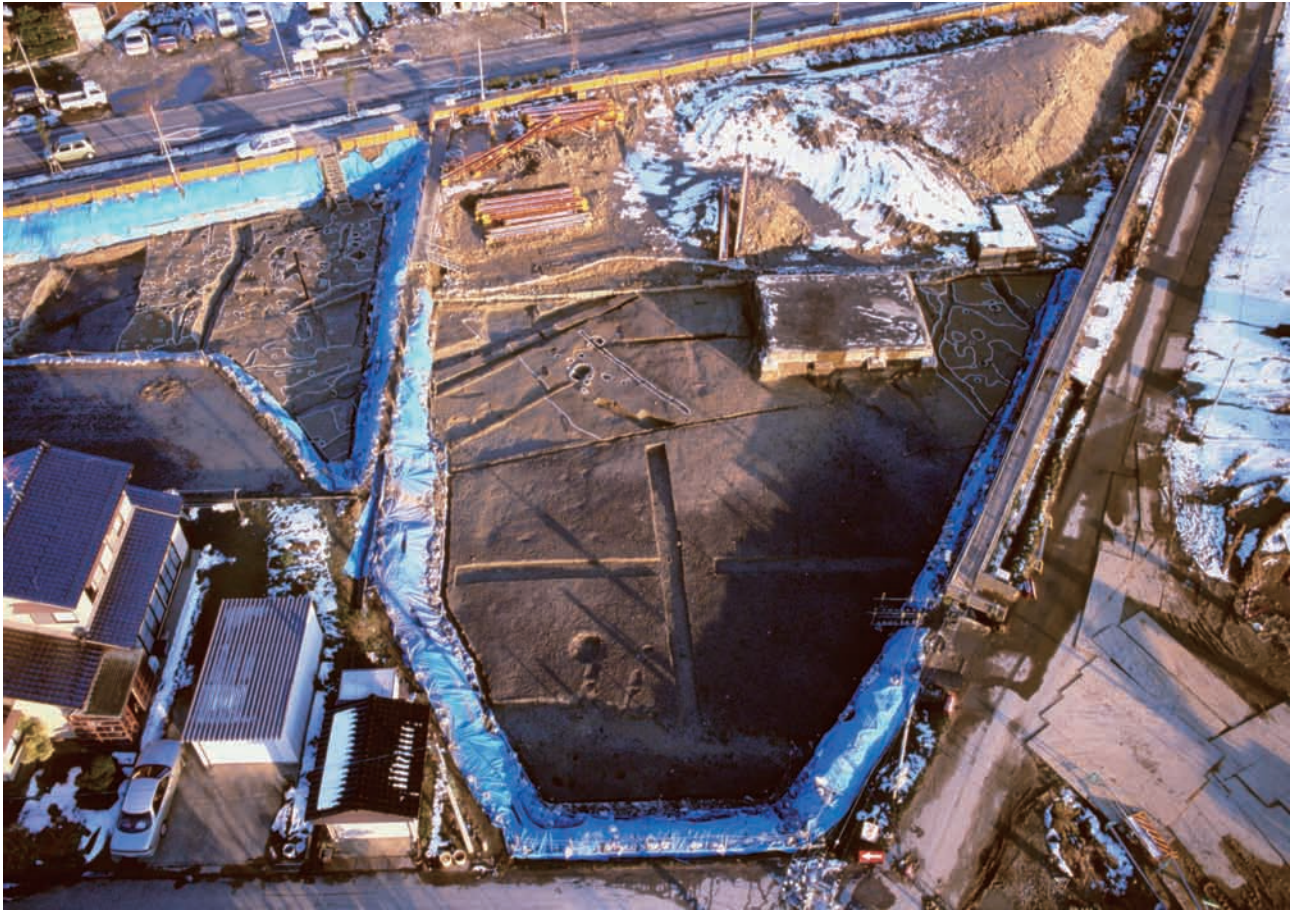
1396



1397



1398



B区完掘状況(垂直)



C区完掘状況(垂直)



C区完掘状況(北から)



C区 SD5501 遺物出土状況(南東から)



C区 SB552(P5512・13) 完掘状況 (南東から)



C区 SB552(P5512) 土層断面 (1-1'、西から)



C区 SB552(P5513) 土層断面 (1-1'、西から)



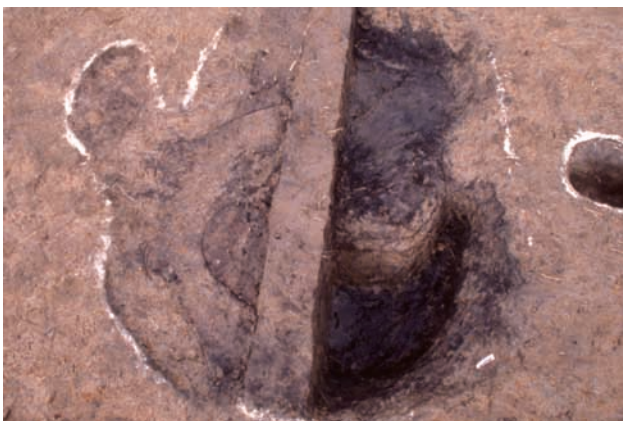
C区 SK5502 土層断面 (3-3'、南から)



C区 SK5503 土層断面 (4-4'、西から)



B区 SK5504 完掘状況 (北東から)



B区 SK5504 焼土検出状況 (南東から)



B区 SK5504 土層断面 (5-5'、北東から)



B区 SK5505 完掘状況 (東から)



B区 SK5505 遺物出土状況 (東から)



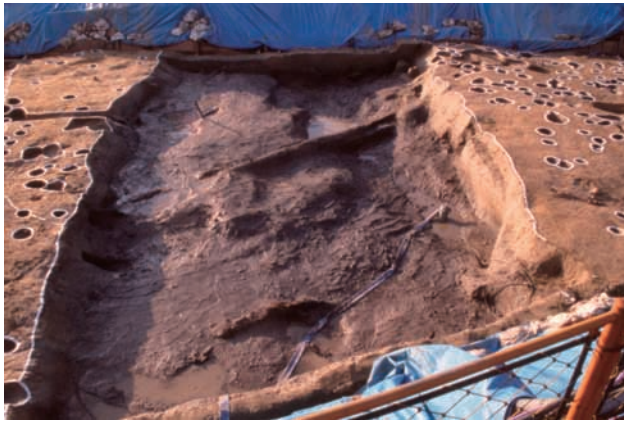
B区 SK5505 土層断面 (7-7'、東から)



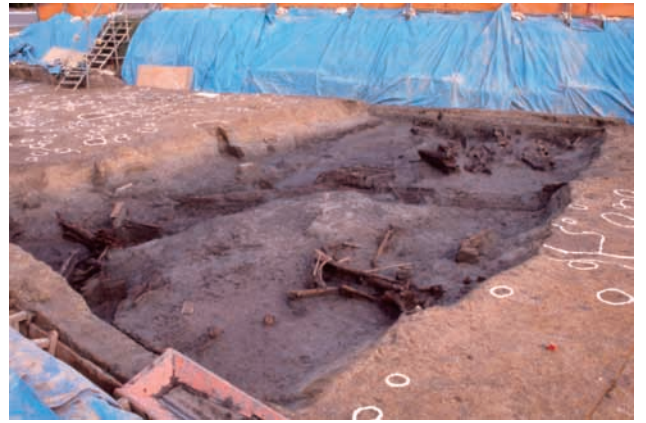
C区 SK5510 完掘状況 (北から)



C区 SD5501・02 完掘状況 (南東から)



C区 SD5501 完掘状況 (東から)



C区 SD5501 完掘状況 (南西から)



C区 SD5501 完掘状況 (北西から)



C区 SD5501 北流路西側遺物出土状況 (西から)



C区 P-21・22区 SD5501 北流路西側セクション (東から)



C区 SD5501 土層断面 (11-11'、西から)



C区 SD5501 南流路東側遺物出土状況 (南から)



C区 SD5501 南流路杭列出土状況 (東から)



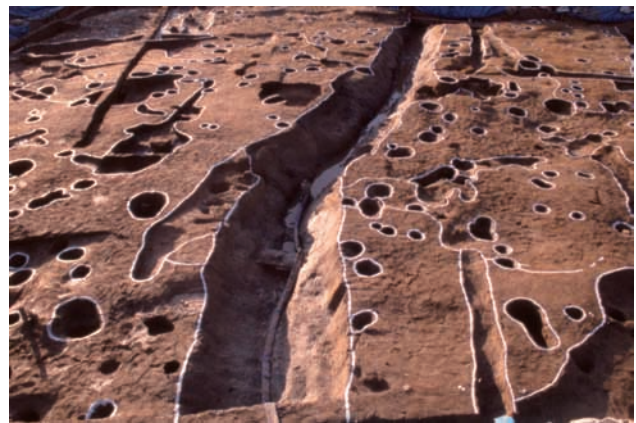
C区 SD5501 南流路鍬 (1901) 出土状況 (西から)



C区 SD5501 掘削作業 (南流路西側、北から)



C区 SD5502・06 周辺完掘状況 (西から)



C区 SD5502 完掘状況 (東から)



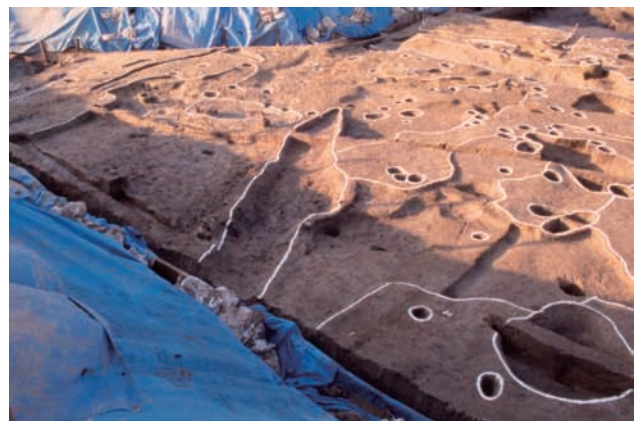
C区 SD5502 土層断面 (14-14'、西から)



C区 SD5502 土層断面 (16-16'、西から)



C区 SD5504・05 周辺完掘状況 (北から)



C区 SD5506・07 周辺完掘状況 (南東から)



C区 SD5515・16・22 完掘状況 (東から)



B区 SD5518・19・22 完掘状況 (西から)



B区 SD5518・19・22 完掘状況 (東から)



B区 SD5518・21・22 完掘状況 (北西から)



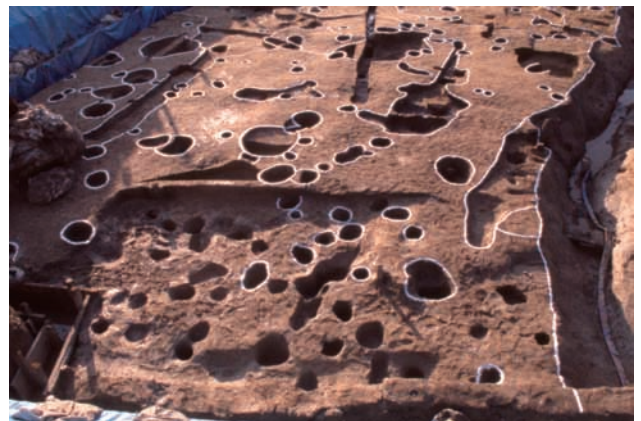
B区 SD5522 完掘状況 (西から)



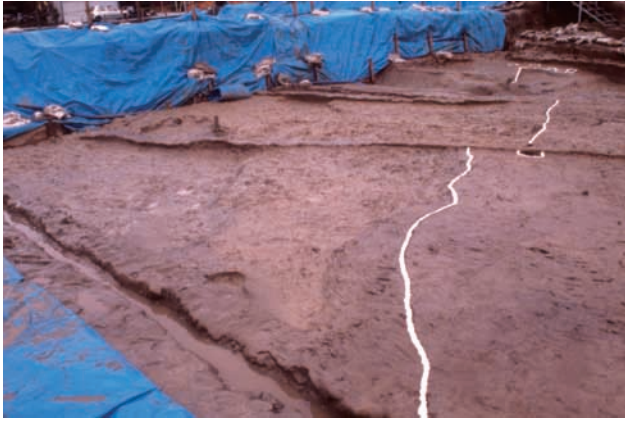
B区 SD5524 完掘状況 (南西から)



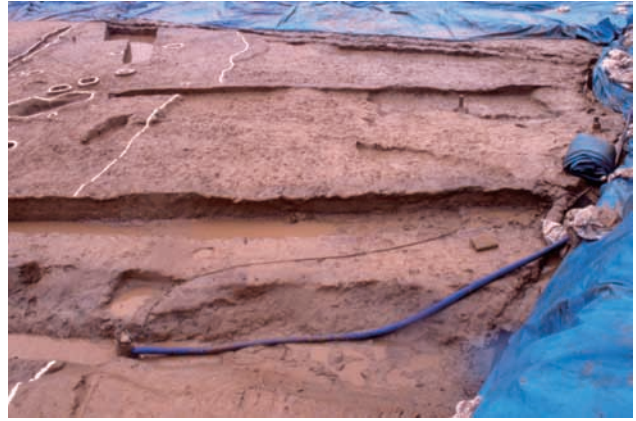
B区 SD5523 周辺完掘状況 (南から)



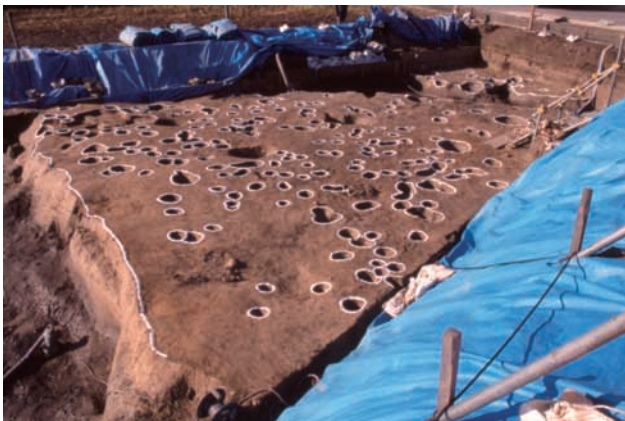
C区 SX5501 完掘状況 (東から)



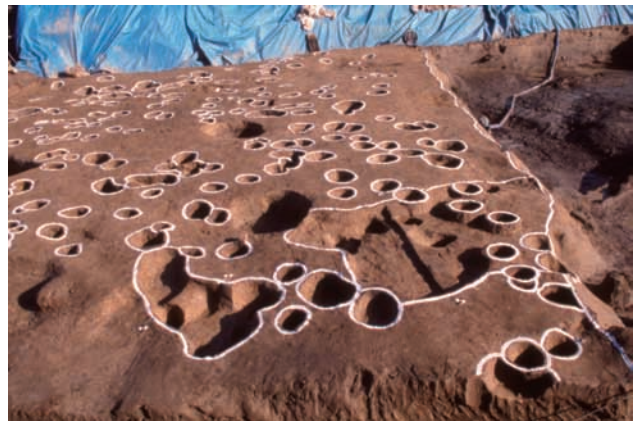
B区 SX5502 完掘状況 (南西から)



B区 SX5502 完掘状況 (東から)



C区 P・Q21・22区ピット群完掘状況 (南東から)



C区 P・Q21・22区ピット群完掘状況南半 (西から)



C区 O21・22区完掘状況 (東から)



C区東壁土層断面 (N杭ライン、西から)



B区試掘坑1・2掘削作業 (南から)



B区試掘坑4南半土層断面 (52-52'、東から)





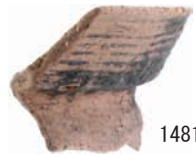
1450



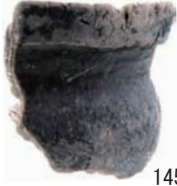
1461



1472



1481



1451



1462



1473



1482



1452



1463



1474



1483



1453



1464



1475



1484



1454



1465



1476



1485



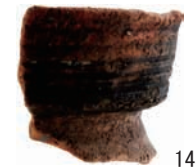
1455



1466



1477



1486



1456



1468



1478



1487



1457



1469



1479



1488



1459



1471



1480



1489



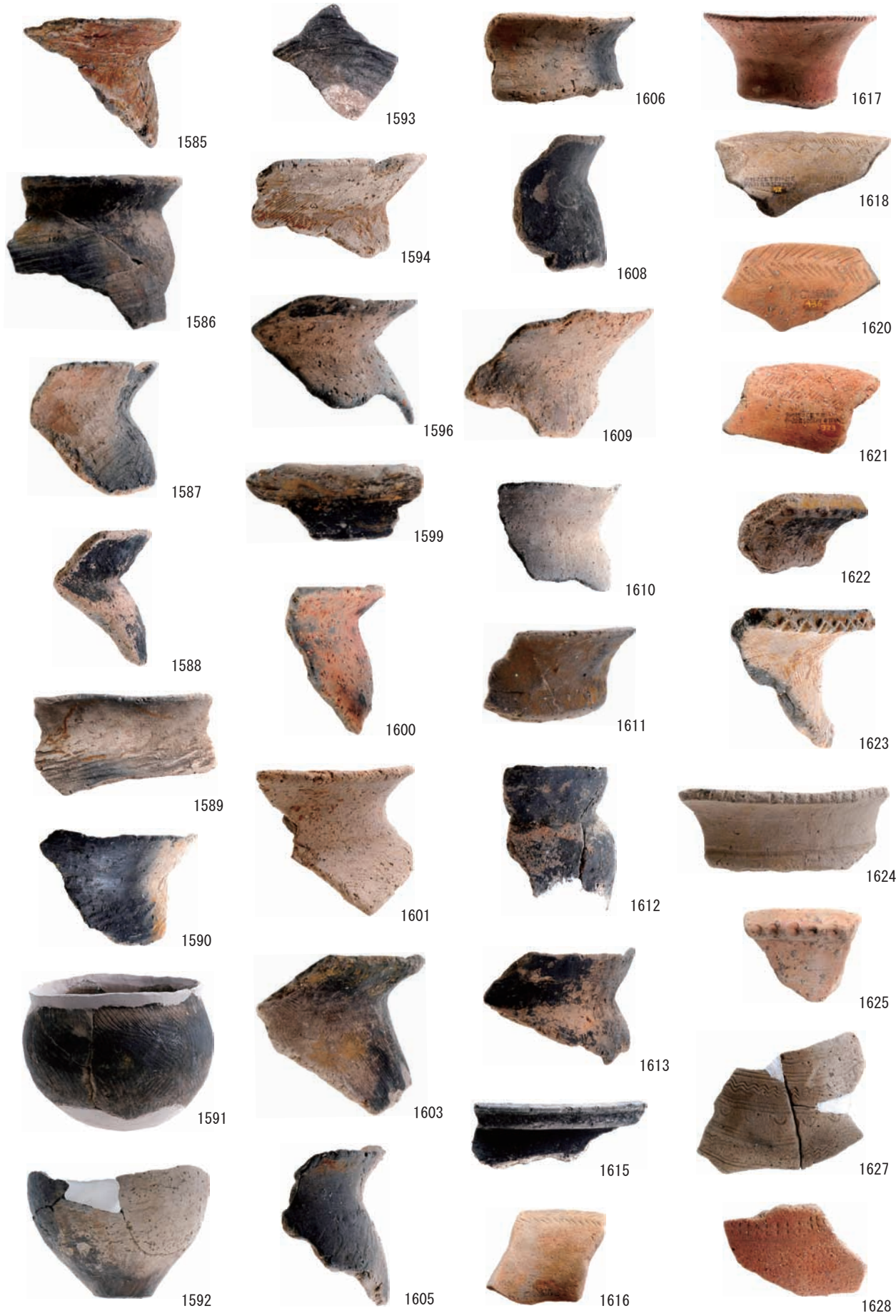
1460



1490











1678



1679



1680



1681



1682



1683



1684



1686



1687



1688



1689



1690



1691



1692



1693



1695



1697



1698



1700



1701



1702



1703



1704



1705



1706



1707



1708



1709



1710



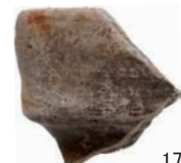
1711



1712



1713



1714



1716



1717



1718



1719



1720



1721

















完掘状況(西から)



完掘状況(西から)



完掘状況(東から)



SD501 完掘状況(北東から)



SD501 土層断面(3-3'、北東から)



SD501 平鋸 (取り上げNo.8(2004)) 出土状況 (北西から)



SD501 遺物出土状況 (No.12 ~ 20、北西から)



SD501 遺物出土状況 (No.26(2006)、北から)



SD502 完掘状況 (南から)



鞍部完掘状況 (南東から)



鞍部完掘状況(東から)



鞍部南側肩部完掘状況(北西から)



鞍部西側完掘状況(東から)



鞍部南肩部完掘状況(西から)



鞍部東側肩部完掘状況(北西から)



鞍部完掘状況(東から)



鞍部自然木出土状況(北から)



鞍部土層断面(7-7、南西から)



鞍部南側土層断面(10-10'、北西から)



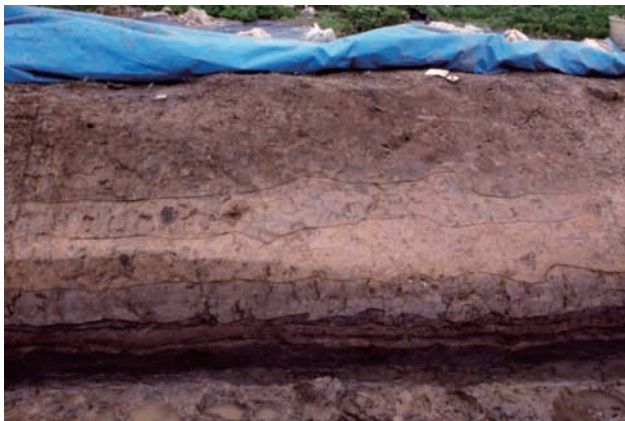
表土除去作業風景(東から)



遺構検出作業風景(西から)



第2回航測作業風景(西から)



南壁土層断面(c-c'、北から)



南壁土層断面(e-e'、北から)



ベース土縄文土器出土状況(G-21区杭付近、西から)



A区最下層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つばたまち かもいせき II							
書名	津幡町 加茂遺跡II							
副書名	一般国道8号 津幡北バイパスに係る埋蔵文化財発掘調査報告書2							
シリーズ名								
シリーズ番号	2							
編著者名	川畑 誠、和田龍介							
編集機関	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2021年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かもいせき 加茂遺跡	いしかわけんかほくぐんつばたまち 石川県河北郡津幡町 ふなばし かもちない 舟橋・加茂地内	17361	1303000	36度 68分 58秒	136度 72分 62秒	19990421 ～ 20000119	5,500㎡	記録保存 調査 (道路建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
加茂遺跡	集落跡	弥生・古墳	掘立柱建物、平地建物、溝、川跡	弥生土器、土師器、木製品、石器、剥片				
	集落跡	奈良・平安	道路(古代北陸道能登支路)、大溝、掘立柱建物、井戸、土坑、溝	須恵器、土師器、緑灰釉陶器、製塩土器、土錘、木簡、斎申、木製品、石製品、銅製巡方		墨書土器多数 木簡3点		
	散布地	室町		陶磁器、土師器皿、木製品、砥石、銅銭		第1～3次調査で集落を確認。		
要約	<p>一般国道8号津幡北バイパスに係る11次にわたる調査のうち、本書は第5次調査の成果を報告するもの。</p> <p>加茂遺跡は、河北潟に注ぐ舟橋川が形成した三角州性低地～丘陵裾に立地する縄文時代～中世の複合遺跡である。奈良・平安時代は、延長約180mの2条の大溝により河北潟と古代北陸道能登支路がつながり、水陸交通の要衝に営まれた末端官衙、寺院、倉庫を含む拠点集落となる。「英太」「鴨」「賀茂」等の墨書土器や、第6次調査出土の「加賀郡勝示札」等の豊富な文字資料から、地方行政や交通の実態を知るうえで重要な遺跡といえる。</p> <p>第5次調査では、上層(奈良・平安時代)で第1～4次調査につながる道路遺構、大溝に加えて、古段階の大溝流路、井戸(「大寺」墨書、斎申出土)や道路遺構廃絶後の河跡を検出した。また、下層・最下層(弥生時代中期後半～古墳時代前期)では、掘立柱建物、平地建物、溝等を確認した。総括では、第5次調査の各層遺構の変遷を示した他、これまで刊行された本遺跡の文字資料等について基礎資料の集成と課題を提示している。</p>							

津幡町 加茂遺跡II

発行日 令和3(2021)年3月22日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

(公財)石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477

E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷